マジで俺を巻き込むな！！

超電動

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マジで俺を巻き込むな！！

【Ｎコード】
Ｎ４３７３Ｏ

【作者名】
超電動

【あらすじ】
平凡な高校二年の主人公、コウのクラスに、とんでもない転校生が二人もやってきた！
ひょんなことから二人の正体を知ったコウは、今までの平穏な生活はどこへやら、二人のチート全開の非日常に巻き込まれてしまう。
「誰かこいつら止めてくれ……」そんなコウの嘆きもつゆしらず、次々と降りかかる「とばっちり」型災難。
ショッピングカートで殴られる、ヤクザに殺されかける、異世界に飛ばされるなど、多種多様な災難を取り揃えております。

そんな、ゆるいのかアクティブなのか良く分からない、コメディー＆amp;ＳＦ風味のミステリアスな巨大オムニバス小説。
作者のヘタな挿し絵付き。
１話ごとの読了時間の目安付き。
第５話「Ｌｏｓｔ－３１１－」連載中！※現在、同時進行で第１話の再構成も行っております※

登場人物紹介（主要キャラクター編）

登場人物紹介《メインキャラクター編》
◆作品が進むにつれて随時更新予定◆
最終更新日時《２０１１／５／１７》

これだけ書いておいてなんですが、
一度にたくさんの登場人物が現れるわけでもないので、
読み進めていけば、問題なく覚えられると思います。

特に重要な登場人物
（高頻度で出てくるキャラクター、作品上重要な役割を持つキャラクター）
には、☆マークをつけています。
☆の数だけ重要なキャラクターです。
さらっと読みたい方は☆を参考にどうぞ。

名前【足立光秀（あだちみつひで）】［主人公］☆☆☆
通称（コウ）

十六歳の高校二年生。
実家から千キロ離れた地で一人暮らしをしている。
辛辣な悪口や皮肉をよく述べるが、その割にはチキンでさみしがり。
仲間を気遣う優しい一面もあるが、あまり表には出さない。
極度のめんどくさがりで、自ら動くことはまずなく、
巻き込まれてから行動することが多い。

友人はそこそこ多いらしい。
子供嫌い。

名前【足立美羽（あだち　みわ）】［主人公の妹］☆
通称一《美羽》

小学一年生の主人公の妹。
どこか天然なところがあり、麗香（後述）をお母さんと勘違いしたり、
ご褒美のジュースをもらいそびれたり、
バンソウコウとセロテープを間違えたりといった有様。
欲しいおもちゃをねだったり、外出が好きだったりと、
それ意外はごく普通の子供。

名前【足立？？】［主人公の母］
通称一《お袋》

主人公の家から千キロ離れた実家に住む。
若干の親バカ。
キャリーバックに美羽のおもちゃを寸分の隙間なく詰める、謎の技術の持ち主。
その技術を主人公は、【３Ｄテトリス】と表現している。

名前【Ｓ０－ｖ１．７ｆ】［ＳＹＳＴＥＭ］☆☆☆
活動名〔嵩文零雨（たかふみ　れう）〕
通称一《零雨》

ステージ1から25までを管理するプログラム。
本来は姿なき存在だが、
ある理由で主人公達が住むステージ25に人の姿をして現れることになる。
自分が世界を管理するプログラムであることを隠して行動している。
正体を知るのは主人公のみ。
理解力に乏しく、直接的な表現をしないと理解できない。
例（ダチョ●倶楽部の「押すなよ、絶対に押すなよ」を文字通り受け取ってしまう）
そのため、会話について行けず首を傾げていることが多い。
感情は持たず、会話も苦手なようで、必要以上に喋ろうとはしない。
話すときは途切れ途切れ話す。
ただし、非常時は処理能力が上がるため、饒舌になる。

名前【S0－v3．0a】［SYSTEM］☆☆☆
活動名｛神子上麗香（みこがみれいか）｝
通称―《麗香》

ステージ25から30までを管理するプログラム。
最終的にはステージ42までを管理する予定。
嵩文零雨と同様、本来は姿なき存在。
嵩文とは別の理由でステージ25に人の姿をして現れる。
彼女もまた、自分が管理プログラムであることを隠している。
正体を知るのは主人公だけ。
嵩文の上司的存在で、嵩文一人では対応できないミスをカバーすることもある。
理解力は人並みで、遠回しな表現も理解する。
例（ダチョ●倶楽部の「押すなよ、絶対に押すなよ」の真意が理解できる）

感情を持ち、雑談などもよくする。
ときたま感情が暴走して一時的に制御不能になるが、
そのあとすぐに落ち込んで反省する。
社交的な性格であり、人を呼ぶときは【くん】や【ちゃん】をつけて呼ぶ。
また、正体を知らない同級生のチカ（後述）から【不思議ちゃん】と言われている。

名前【ＵＳＥＲ（ユーザー）】［最高管理者］☆☆☆
通称一《ＵＳＥＲ》

主人公達の住む世界、嵩文や神子上の頂点に立つ謎の存在。

名前【牧田宗一（まきたそういち）】［クラスメイト］☆☆☆
通称（ジョー）

主人公の友人。
性格は明るく、主人公からよくキツイ冗談を言われるが、特に気にしていない様子。
たまに冗談を言う。

名前【木下千賀（きのしたちか）】［クラスメイト］☆☆☆
通称（チカ）

主人公の友人。メガネをかけている。主人公いわく、【性格ブス】。
性格は少し荒く、悪口を言われると、言った本人を自らの手で処刑しようとする。

天然な髪質に悩んでおり、
ストレートな髪を夢見ていろいろ試行錯誤しているらしい。
根は優しく、
金欠の主人公になけなしの小遣いから資金援助を申し出たこともある。
興奮すると行き過ぎた行動をとることもあり。

名前【木下匠（きのしたたくみ）】［チカの兄／ＯＢ］☆☆
通称―《匠先輩》

アニメオタクのチカの兄。
大学に通いながらアルバイトをしている。
中学生の家庭教師の経験あり。
同じ趣味を持つ仲間とバンドを組んでいる。
陽気な性格で、後輩の面倒見もいい。

名前【？？？？】［クラス担任（男）］
通称―《担任》

主人公のクラス担任。
黒板に板書するとき、必要以上に濃く乱暴に書くため、消すのが大変らしい。
おおらかな性格で、冗談も言う。
担任の笑い方は主人公いわく【下品】。

名前【玉城？？】［女性教員］
通称―《玉城先生》

見た目五十代のベテラン教師。
詳細な年齢は女性のため聞きだすことはまず無理だろう。
夏場の職員室の冷房がキツすぎるらしく、
ダークグリーンのカーディガンを羽織り、
落ち着いたブラウンの縁のメガネをかけている。
主人公によると、玉城先生の印象を一言で言うと、
「近所のご近所付き合いのいい、品のあるおばさん」らしい。
また、面倒見のいい先生としても認識されている。

名前【Ｊａｍｉｅ（ジェイミー）】［属性不明］☆
通称Ｊａｍｉｅ（ジェイミー）

主人公のコンピュータに入り込んだ何か。
Ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ?などと、英語での会話を持ちかけてくる。
ただし、ジェイミーの話しかけに対してどんな返答をしても、
ジェイミーは返答に対しては一切反応を示さない。会話はほぼ一方通行。
唯一、返答に対する反応を示すのは、
《Ｐｒｅｓｓ　Ｅｎｔｅｒ　ｋｅｙ　ｔｏ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ》
“続けるには、ＥＮＴＥＲキーを押してください”
のジェイミーからの命令を指示通りに行った場合のみ。
麗香はジェイミーについて何か知っているようだが……

名前【ＥＬＶＥＳ（エルベス）】［ＳＹＳＴＥＭ］☆☆☆
活動名～《不明》～
通称《エルベス》

エリア３１１を統括するプログラム。
ＥＬＶＥＳがエリア３１１を統括していること以外は現時点では何の情報もなく、
主人公との面識は今のところない。
完全に謎に包まれた存在。

名前【？？？？】［一般人（女）］☆☆☆
通称（リン）

エリア３１１の惑星管理番号２８５７５１９に住む少女。
背中に翼が生えており、魔法なども操る。
家族はリン以外土砂崩れに巻き込まれて他界、
現在はナクルという街で花屋を新規開業して生計を立てている。
主人公曰く、かなりの美人らしい。

登場人物紹介（サブキャラクター編）

登場人物紹介《サブキャラクター編》
◆作品が進むにつれて随時更新予定◆
最終更新日時《２０１１／５／１７》

その場限りの登場だったり、作中でＳＹＳＴＥＭに存在を消去されたりと、
一時的な役柄を与えられたキャラクターの一部がここに掲載されています。

必要以上にこのページが膨らむのも問題なので、バッサリ省略してます。
なので、「早く本編読むんじゃ～！」という方は、次話へどうぞ。

名前【チンピラ】［チンピラ］
通称（チンピラ）

港区に本拠地をおく、喧嘩好きのひったくり集団。

名前【東播会（とうばんかい）】［指定暴力団］
通称―《東播会・ナントカ会・なんちゃら会》

港区に本拠地をおく指定暴力団。

名前【久方龍男（ひさかたたつお）】［指定暴力団組長］
通称　オッサン・ジジイ

東播会のトップの人。

名前【？？？？】［工場長］
通称―《工場長》

スーパーボールを製造している工場の長。
夏になると、工場で作ったスーパーボールの直販をするが、
近所の人もあまり知られていない様子。

名前【なし】［不正プログラム］
通称―《青年》

自律思考型不正プログラム。ＳＹＳＴＥＭ曰く、悪質なバグ。
若い青年の姿となって主人公の前に姿を現した。
常に口角を上げて笑っている。
シミュレート空間を不正な方法で新たに生成する能力を持つが、
完全なシミュレート空間を構築することはできず、
時間軸、シミュレート境界線の処理に歪みが生じてしまう。

第０話　プロローグ　井の中の蛙（前書き）

世の中、あまりによく出来すぎていると思いませんか？
生命が誕生するのに必要な環境が、【偶然】にも揃った地球。
【偶然】そこに生命が芽生え、
【偶然】その生命が進化し、
【偶然】私達が生まれた。

もし、その【偶然】が、誰かの手で意図的に操作された【必然】だったら……

この作品はそんな発想から生まれました。
（どーでもいい話ですよねー……）

プロローグ
おおよその読了時間（目安）：約２分
（５００文字／分、５００文字以下切り上げ）

第0話　プロローグ　井の中の蛙

井の中の蛙、大海を知らず。

今の科学はミクロからマクロまで、
幅広いものを研究し、そこから様々なものを見つけだしてきた。
原子を構成する素粒子から、ただっ広い宇宙まで。

俺には一つの疑問がある。
俺達は地球に住んでいる。
所詮、科学といえどもこの地球の表面から見える世界しか見えていない。

この地球の中心の詳しい様子は誰も知らない。
この宇宙の果ての先はどうなっているのか、これも誰も知らない。

なぜ？

それは見えないから。
感じられないから。

つまり俺が言いたいのは、
俺達は井の中の蛙そのものだということだ。

それでいて、
「人類は世界の１％しか理解できていない」
などと謙虚に大口を叩くという、トリッキーな技を披露する輩もいる。

トリッキーかどうかは別にして、
果たして、井の中の蛙が、世界の１％も知ることができるだろうか？

宇宙探査にしても、
ボイジャーだパイオニアだハッブル望遠鏡だと、
偉大な功績を残した、あるいは残しているものの、
それで宇宙の１％が見えただろうか？

今から３０年以上前に金の円盤を持たされ、
地球とさよならしたボイジャー１号ですら、
ようやく太陽系の外側に足を踏み出し始めたぐらいだ。

俺は人間のやってきたことや偉業を全否定するつもりで言っている
わけではないが、
ちょっと威張りすぎじゃねえかと思っている。

まあ、１％がどうこう、そんなのはどうだっていい問いだ。

問題なのは、俺の前に世界の全てを知るといっても過言ではない奴
らが、
ひょっこり現れたということだ。

第１話－１　二人の転校生　季節はずれの転校生（前書き）

第１話二人の転校生

読了時間の目安：約５９分～
（５００文字／分、５００文字以下切り上げ）
※読書速度は個人差がありますので、あくまで目安です。

【お読みになる前に】

現在第１話はわずかながらではありますが、文章、シナリオ両面のクオリティーアップを狙った再構成作業を進めております。
それに伴い、第１話の内容（シナリオ）は大きく加筆修正が行われ、現在掲載中のこの第１話は、新しい第１話に置き換える予定です。
置き換えは新しい第１話が完成した時点で一斉に行われます。
この第１話は、新しい第１話が完成すると上書きされますので、予めご了承ください。
　改稿が終わり次第、読了目安時間も修正いたします。

再構成進捗状況：現在１話－８を作成中（２０１１／９／５）

しおり機能がありますので、ご活用ください。
ボタンはＰＣ版は左上、モバイル版は下部にあります。

＞ｉ１５８２０―１３３５＜
→注意画像が出ている場合、挿絵表示がＯＮになっています。
【挿絵表示】と表示されている場合は、挿絵表示はＯＦＦです。

第1話－1　二人の転校生　季節はずれの転校生

それは突然だった。

言い忘れていたが、俺はトンチ高校の異名を持つ良条高校2年の足立光秀（あだちみつひで）。
通称コウ。
完璧なまでのハト派と勝手に自負している。
よろしくな。

現在の状況を簡単に説明すると、
俺は今高校の教室の中。
昼休みである。
といったぐらいか。
俺が通うのはどこにでもあるような平凡な高校だ。
特に自慢できるような偏差値の高校ではないが、世間的に評判が悪い不良高校というわけでもない。
代わり映えのない授業。
いつも通りの喧騒に満ちた校内。

ちらりと辺りを見回せば、そこらでキャッキャと騒いでいる者、上靴の悲鳴を響かせながら廊下を走り回る者が見える。
対照的に、読書にいそしむ者、携帯をいじっている者も結構いる。
このように休み時間の使い方は人それぞれで、
周囲の目を引くような奇行に走る人間は俺が認知する限りにおいてはいない。

俺か？
俺は机に伏して窓の外の景色をぼんやりと眺めながら、ただただ早

く学校終わってくれと念じている。

「おい、コウ、もう入部届は出した？」

「あぁ～、人がせっかくいい感じでたそがれてたのに、お前は本当に邪魔するのが得意だな」

俺の背中を突いて話しかけてきたのは、
俺の親友の牧田、あだ名はジョー。
なんでも、牧場のジョーらしい。
牧という漢字しか合ってないのに、かわいそうなあだ名を付けられたもんだ。

「ひでえな、お前に話しかけただけでそこまで非難されるとは……で、出したのか？」

「ああ、出したよ」

「何で出すとき俺を誘わなかったんだよ！！」

「お前、昨日学校休んでただろ？しょうがねぇよ」

「そうか……」

俺の高校では全員が部活に入ることを強制されている。
ここだけが俺の通う高校のおかしなところである。
部活推奨としておけば済むものを、なぜわざわざ強制にするのかについては、

一応学校側の公式見解としては“それが、この学校の伝統だ”という説明が出ている。
そこまで伝統にこだわる必要が果たしてあるのかと俺はその説明に胡散臭さを感じずにはいられない。

で話は元に戻して、俺は昨日入部届を出して、承認されたから、ちゃんとした部員だ。
何の部活かって？

帰宅部。

一般に部活しない奴を帰宅部などと呼ぶが、こちらでは学校公認の部活だ。
定期テスト前は部活禁止で、帰宅部は帰宅できないという深刻、いや、命に関わる欠陥があるため、
帰宅部部員はみな退部し、在校部という部活に入部する。
こちらの部活の活動内容は、
「帰宅しないこと」。

部活が禁止されると、在校部は帰宅しなければならない。

帰宅部と在校部を入退部することで、結果、学校に残る必要がない。

トンチ高校の異名はここからだ。

前に、部活禁止になるごとに入退部するのがダルいと、
テスト前に帰宅部を退部しなかった勇者がいたが、
数日後、そいつは無計画にも初日の昼飯と僅かばかりの現金（一説によると１５０円）しか用意してなかった為に、
空腹から眠れず、風呂にも入れず、

挙げ句の果てには干からびて倒れる始末。

救急車に乗せられ、２時間ほど病院たらい回しドライブを楽しんだ後、病院で治療を受けたそうだ。

救急車……もっと輸送を速くしないと急患が死ぬぞ。マジ。

まあ、そいつは一命は取り留めたらしいが、
それからはそんなエクストリームな挑戦をするやつはいなくなった。
というか、学校としては生徒がそんな事件まで起こしておいても、
この部活強制システムを廃止にするつもりはさらさらなく、
この事件に関してはあくまでも退部届を出さなかった本人の責任とするということらしい。

まあ、そりゃＰＴＡからの反発もあったが、
そんな反発も時間とともに風化して沈静化してしまい、
今じゃこのシステムに異を唱えるのは一部のプロ意識を持った奥様方と俺ぐらいなものだ。
大半の生徒はこのシステムに大人しく従っている。
生徒の心の中では生徒会の口から廃止案が出るのを待っている、といった状態だ。
別に強制だろうが任意だろうが俺（私）にとっては関係ねえ、と言う人も結構いたりするので、
今後この帰宅部と在校部のめんどくさいシステムに関しては変わることはないだろう。

で、話を戻すと、一学期の期末テストが終わったから、俺は帰宅部入部と、
そういうわけだ。

「それとさ、明日、クラスに転校生がくるらしいぜ」
ジョーがニヤついている。
ほう、転校生か…
この時期にこの高校に転校生とは珍しい。

第1話－2　二人の転校生　一人目の転校生（前書き）

初っ端から核弾頭級のヘタクソな挿絵が入ります。
挿絵表示をオフにして、シャットアウトすることをおすすめ……します。

第1話－2　二人の転校生　一人目の転校生

翌日。
俺が夏のクソ元気な日差しと気温の猛攻撃に悶えながら学校に向かい、
俺の座席（オアシス）を求めて教室に入ると、騒々しかった。
いや、騒がしいのはいつものことなんだが、今日はなんか雰囲気が違う。
皆のテンションがうわずっている。
つうかさ、俺の隣、なんか席一つ多くね？

「よう、コウ！お前、転校生見た？」
ジョーは鼻息荒く興奮気味にイスに腰をおろした俺に話しかけてきた。
そういや、昨日転校生がどうのこうのと言ってたな。
ま、このクラスに人間が一人増えたぐらいで、
俺の生活に影響を与えることはないだろうが。
これは俺の経験則に基づく信頼できるシミュレート結果だ。

「あのさ、昨日俺が言ってた転校生、さっき見ちゃったんだ」

「ああ、そう。がっかりもんだっただろ？
かわいい女子かと期待したら、残念なタイプの男子だったとか」

何が残念かはあえて言うまい。

「ちげーよ！それどころか大当たり！
超かわいい女子だぜ！白髪の！」

「お前のかわいいは当てになんないんだよ！
平安時代のオカメさん顔が美しいとか言い出すお前の感性ではな！
時代遅れだ。１３００年ぐらい」

「お前、今全国のオカメさん顔フェチを敵に回したぞ！
ていうか、俺はオカメさん顔フェチでも何でもないし、
第一いつそんなことを俺が言った！？」

ジョーが怒った。
こいつをおちょくるのは楽しい。

「俺はちゃんと現代にフィットした感性もってるからな！」

それは置いといて、転校生が気になる。
白い髪の転校生……まさか、杖ついて歩く高齢者じゃあるまいな？
若い女子がわざわざ老人風情よろしく髪を白に染めあげるとは思えない。
もしかしてあれか？
第二次世界大戦中に学生だった人が、未だ受け取っていない卒業証書を求め、
足りない単位を補うためにこの学校に転校してきたとか。
前にそんなニュースをテレビで見たことがある。
……だが、今ジョーは超かわいい女子と語った。
と、いうことは――

「……ジョー、お前のストライクゾーンは広いんだな」

「な、何をいきなり」

「お前が齢（よわい）７０越えの超熟女が好きだと、俺は今初めて知った」

「はあ？　何をどうしたらそういう発想になる！？」

「白髪（しらが）の転校生なんだろ？

まさか流行に敏感なイマドキのモダンな女子高生が自ら髪を白に染めて老けてる感を出すとは思えない。

そういうのが流行ってるとも聞いたことがない。

ということは、今回の転校生は第二次世界大戦中に卒業証書を貰いそびれた学生が単位を取りに来た、という最も有力で確信に近い仮説を立てることができる。

もしその仮説が正しい（True）ならば、戦後６０年以上経っている現在、当時学生だった彼らは既に７０歳を超えている。

つまり、お前のが見たのは超かわいい年齢７０越えのおばあちゃんってことになる」

「……お前の想像力には感服するよ、その、暴論を一瞬で組み立てる能力には。

だけど、違うんだな～

そのまさかで俺たちと同じ年の白い髪の転校生なんだ」

「ハハハッ、そうなのか？　自ら白髪スタイルにするとは、とんだ物好きだな」

「まあ、楽しみにしてなって」

ヤバかった。

担任に連れてこられ、やってきた女子は、確かに美人だった。

年はジョーの偵察情報通り、俺らと同じぐらい。

やや小柄ですらりと長い髪、アイドル顔負けの美貌だった。

目はウサギのような透き通る赤で、髪は雪のように白い。
担任の長い話を要約すると、なぜこんな姿に生まれてきたのかの原因は不明だそうだ。

一時限目の授業が、不幸にも担任の授業だったため、自己紹介タイムになった。
周りのやつが自己紹介していくのを、俺は転校生をぼんやりと見ながら聞いていた。
中には自己紹介で
「趣味はクラシックを聞きながら小説を読むこと」
などとねつ造しているやつもいた。
確かにそいつは読書好きなのだが、そいつの専攻は小説じゃなく、ベッドの下のイヤラシイ本だったりするのだが。
まあ、これくらい冗談としておこう。

次は俺の番か…
俺は頭の中で必死に完成させたテンプレを披露した。
「俺の名前は足立光秀。コウって呼ばれてる。
特に言うことはないが、穏健派ということでよろしく」
こんなもんでいいだろう。
最後、若干蛇足がついたのはご愛嬌ということで。

「最後に、転校生本人に自己紹介してもらおうかな」
担任がその少女を教壇の前まで連れてきた。

ところが、しゃべろうとしない。
ずっと遠くを見ているような目をしている。

>i15913—1335<

「はは、ちょっと緊張してるのかな？」
担任は笑って、乱暴に黒板に少女の名前をでかでかと書いた。
乱暴に書くのは担任のデフォルトだ。
字が汚く、筆圧も強いから、黒板を消すのに苦労する。

「嵩文　零雨」

担任はそう書いた。
「この子の名前は《タカフミ　レウ》。
仲良くしてやれよ！」

嵩文零雨…俺が珍名に認定してやろう。
認定理由？
零雨なんてフツーいねぇし、俺が親なら、もっとマシな名前にする。
それが理由だ。
異論は受け付けない。

もし、
近くに名前に竜獣と書いてドラゴンと読むやつとか、
羽星と書いてパスタと読むやつがいたら教えてくれ。
俺の気が乗れば独断で審査・珍名認定してやる。
一応言っておく。審査・認定は無料で行ってやるつもりだ。

で、まさかとは思うが、昨日までなかった机が俺の隣にあるのは…
担任は零雨の手を引き、その席に座らせた。
下の名前で呼ぶのはなぜって？
嵩文よりも零雨の方が覚えやすいと思ってさ。

「そういう訳だから、コウ、仲良くしてやってくれ」

「はあ……」

これが、俺とそいつの初めての出会いだった。

第1話－3　二人の転校生　動かない人形

一時限目も終わり、休み時間になった。
零雨というこの少女は、休み時間になっても俺の隣の席に座ったまま、
少し下にうつむいて、担任に連れられて座ったときと変わらない姿勢、まさに「微動」だにもしなかった。

二時限目の授業が始まったが、
零雨はまったく静止していた。
彼女の机の上に何もないのは、転校があまりに急で教科書をまだ持っていないからしい。
その次の休み時間も、機能停止したアンドロイドの如く。
クラスの男子や女子から声を掛けられても、一切動じなかった。
気味が悪い。

「えっと、嵩文零雨、だったっけ？
俺、牧田っていうんだ。よろしくな。」
ジョーが近づいて話しかけるも、轟沈。
反応は一切示さなかった。

そうしてやってきた昼休み。
俺たちが弁当を食っているときも、人形は動こうとしない。
腹は減らないのか？
それとも、弁当がないのか？
「…おい、弁当持ってるか？」
零雨の無反応に、俺のなけなしの勇気は儚く散った。
「何かあったら俺に言えよ。
厄介事以外は少しぐらいなら手助けしてやるよ。」

そう言って、零雨から離れた。

昼休みも終わり、とうとう午後の授業が始まった。
彼女は朝からかれこれ5時間以上静止したままだ。
嵩文零雨とは一体何者なんだ?
一体どんな過去があってああなったんだ?

少なくとも彼女が赤ん坊だったときは、俺らと変わらなかったはずだ。
赤ん坊…きっと生まれたときから美人素質全開だったんだろうなぁ。
ミステリアスな少女、嵩文零雨。
俺はそいつにちょっとした好奇心を抱いた。

第1話－4　二人の転校生　QRコードと転校生と俺

学校の授業も終わり、担任が教室に来るまで俺とジョーは雑談していた。
「なあコウ、
地球って、完全な球体じゃねえんだな。」

「まさかお前、初めて知ったのか？
そんな小学生でも知ってそうなことを。」

「いいじゃねぇか、今知ったって。
ところで、何で球体じゃないんだ？」

「ああ、答えは簡単だ。
俺が粘土こねて地球を造ったからさ。多少の誤差は出るに決まってる。
太陽だって、俺が電球セットしたから光ってるんだぜ？」

「んなわけねーだろ！
じゃあお前は何歳なんだよ！？」

「１５０億歳ぐらいかな。
世界はすべて俺が造った。」

「…冗談も程々にしろ。」

担任の長い長い明日の連絡も終わり、今日に限ってのだるい掃除当番の仕事も終え、
今日の昼休みに入部届を出した（もちろん帰宅部）ジョーと家路に

ついた。
「あ、だりい、忘れ物した。」
途中、忘れ物をしてきたことに気づいた俺は、ジョーと別れ、学校に引き返すことにした。
「じゃあな！」

まったく、家でゴロ寝する時間が減るじゃないか。
俺の家は学校から約１，０００ｋｍもの距離がある。
飛行機で高校までマッハ０．８（９００ｋｍ／ｈ）で通学という、シュールな生活でも良かったが、親の勝手な配慮、と言ったら怒られるが、まあそんなんで高二にして厚かましくも、賃貸マンションで、一人暮らし。

電気・ガス・水道のライフラインはもちろんのこと、
テレビ（家具付き賃貸につき）
エアコン（家具付き賃貸につき）
洗濯機（家具付き賃貸につき）
ＣＤプレイヤ（家具付き賃貸）
本棚（家具〔略〕）
などなど充実した環境の上に、
さらにネット回線＋ＰＣまであるという、ゴージャスな生活。
まあ、それは一旦置いといて、教室まで到着。

教室の明かりがついている。
誰か中にいるのか？

ドアをそっと開けて、中の様子を見る。
嵩文零雨だ。

彼女は窓から西日が傾く教室の中で一人、
チョークを片手に黒板の前に立っていた。
そのシルエットと光のコントラストは、幻想的にすら覚える。

うん。いいもん見させてもらった。

あ、見つかった。
零雨はドアから怪しげに覗いている俺を見つけると、
突然チョークを黒板に向けて叩きだした。

タタタタと高速で打点していく。
物理とかで使う一秒間に５０回とか６０回テープに打点する、
あの打点タイマーより速いかもしれない。
何をしてるんだ？

ものの数秒で叩くのをやめた少女は、じっと俺を見る。
仕方がないから、教室の中に入る。
「何してたんだ？」
な、なんだこれ！？
黒板に描かれていたのはみんなおなじみＱＲコード。
＞ｉ１２１３０―１３３５＜
「これ、おまえが書いたのか？」
俺が今見た光景が信じられない。
零雨は俺の顔を見ながら、このＱＲコードをゆっくりと指さした。
読めと言ってるのか。
俺は携帯電話を取り出して、そのコードを読み取った。
「ｗａｔａｓｈｉ　ｎａｎｉ　ｓｕｒｕ　ｉｉ？」
ホントに文字をＱＲコードで表しやがった。
スゴイを越えてエグい。
だがな、めんどくさいことせずに、口でしゃべれ。

まあ、まずはこの少女の聞きたいことに答えよう。

「何すればいいかって？
　特に学校に用がないなら帰ればいい。」

零雨は首をかしげて、また、ＱＲコードを書いた。
＞ｉ１２１４２―１３３５＜
「ｏｔｏ　ｋｉｋｏｅｒｕ　ｉｍｉ　ｗａｋａｒａｎａｉ」
音が聞こえて意味が分からない？
意味プ～だ。
意味不明。
ふと、零雨の机を見ると、他の生徒がごみ箱に捨てた、
お菓子の箱や袋が山のように積んである。
近づいてよく見てみると、すべてきれいに袋に印刷されたＱＲコードが上を向いている。

まさか、こいつを…見て習得したとか？
訳が分からん。
そんな地味に使えそうで使えない技を習得して、どうしようってんだ？
零雨は次のコードを書いた。
＞ｉ１２１４１―１３３５＜
「ａｎｓｗｅｒ？」
いきなりの英語！
俺はどうやって答えればいいんだよ？
あれか、日本語と英語をトゥギャザーしてしゃべれと？
嫌だね。
とにかく、俺はチョークを持って黒板の前に立った。
言っておくが、俺は平凡な類の人間だから、そんな妙技は当然持ち合わせていない。

QRコードを読み込むと、アルファベットになっていることから、
アルファベットは理解できる可能性が高いな。

「ＣＯＤＥ　ＫＡＫＥＮＡＩ」

俺が大文字で黒板に書くと、
零雨はゴミの山の机の横に置いてある鞄から、
一つの黒い塊を取り出し、俺に渡してきた。
何これ？
二つ折りになっているその塊を開くと、電子辞書のようだ。

零雨が横から電源ボタンをポチリと入れる。
画面の内容は、辞書…じゃない？
「変換する語句を入力．．．」
そう映している。
よく見てみれば、キーボードの一番上の配列に、
辞書ならあるはずの辞書選択キーがない。

零雨の方を見ると、じっと俺を見ている。
そんなかわいい顔して俺を見たって、何も出てこねぇぞ？
俺は、この学校が部活強制だったことを思い出し、零雨の鞄の中を
覗いてみた。
中からは、やっぱり白紙の入部届がでてきた。

「この学校は部活強制だけど、入りたい部活はあるか？」
謎の黒い機械に入力して少しすると、画面に点でできたコードのよ
うなものが現れた。
零雨はそれを見ると、俺から黒いそれを取り上げ、また俺に渡した。
「部活とは何？」

おお、零雨と会話のキャッチボールができた！
ていうか、それは一旦置いといて、部活知らないのか！？
俺は小学校はまだしも、中学生にもなったら必ず耳にする普遍的単語だと思ってたんだが。
俺はこれに回答しなければならない。
部活の定義…
こんな感じか？

「授業が終わった後に同じ趣味・思考をもつ人物同士で行う特別活動。」
う～ん、これだと説明不足か。

「同じ、または似通った趣味・趣向を持つ学生らが自らの意志で集まり、
その共通の趣味・趣向に関する活動をする集団のこと。」

これだ。うん。
文が長ったらしいうえにややねじれてるが、
理解さえできればいい。
俺は、
「同じ、または似通った趣味・趣向…
【中略】
…活動をする集団のこと。」
と機械に入力して、零雨に手渡す。

「私は趣味・趣向を持っていない。」
そう返ってきた。
へぇ～、世の中にはこんな人もいるんだな。
趣味・趣向を持たないって、人生の楽しみがないのと等しいことになるよな。

人生に楽しみがない・・・おもいっきり鬱じゃねーか。

「特に入りたい部活がなければ、帰宅部に入った方がいい。」
俺はそう思いながら入力してまた渡す。
「入ると？」
「学校の授業が終わったら、すぐに家に帰れる。」

今度は、零雨は返答に時間がかかった。
「入る。」
「ならば俺がその手続きをしてやるから、少し待ってろ。」

俺は入部届に必要事項を記入し、零雨に渡した。
入退部を繰り返してるから手慣れたもんさ。

零雨が黒の翻訳機に何かを入力している。
ぱっと零雨が翻訳機の画面を俺に見せた。

「ありがとう。」
そう画面に書いてあった。

俺は肝心の忘れ物を取り、零雨をつれて職員室へ行った。

適当な先生に頼んで入部届を承認してもらい、二人そろって校門を出た。

「何をすればいい？」
零雨は、翻訳機の画面にそう表示された文を俺に見せる。

「家に帰って、好きにすればいい。
明日の学校には遅刻するなよ。」

零雨にそう入力した機械を手渡すと、黒い翻訳機を鞄にしまい、すたすたと帰っていった。

彼女は一体何者なんだ？
謎だ。謎すぎる。
言葉を話さず、不自然な日本語。

対話するには黒の翻訳機が必要で、
その翻訳機の方が日本語は断然うまい。

直接の会話に使うのはアルファベットかQRコードで、
部活すら知らない。

ミステリアスを超越した、究極タイプのミステリストであることに間違いない。

思い返してみれば、俺が零雨に放課後会ってから今まで、
零雨の表情の変化は一切なかった。

第1話－4　二人の転校生　QRコードと転校生と俺（後書き）

QRコードは実際に読み取れます！
ぜひ読みとってみてください！

第1話－5　二人の転校生　二人目の転校生

翌日。

俺が教室に入ると、また席の数が増えているような気がした。

デジャヴ？

いや、気のせいだろう。

今までの疲れが俺に悪影響を及ぼしているんだ。きっと。

いやまて、1、2、3……

多い。やっぱ席一つ多い。

俺は頭がイカれてしまったらしい。

幻覚が見える。

何でだろう。

煙たい葉っぱとか、怪しい葉っぱとか、危ないキノコとか、変なクスリとか、

手錠はめられそうなやつには手を出してないんだが……

とにかく、病院に行かなくては。

……ああ、保険証、実家においたままだった気が。

俺が席に座ってふと横をみると、

すでに嵩文零雨が昨日と同じく着席したまま、機能停止している。

しばらくして、担任が教室に入ってきた。

「今日も、うちのクラスに転校生が来た。

二日連続ってのも珍しいが、まあ今日の一時限目もそういった訳

で、時間割変更。
　また自己紹介タイムだ。」

おいおい、自己紹介の時間とか、もうめんどくさくてやってらんねーよ。
昨日のテンプレそっくりそのまま言ってやるから覚悟しとけ。

「おーい、転校生、入ってこい。」
担任の手招きで、転校生が入ってきた。

おお……マジか……

またもやのＢＩＮＧＯ！
黒髪のこれまた可愛らしい女子。
少し照れているようだ。

「それじゃ、今日は自己紹介はこの子から先にしようか。」
と担任。

一言言わせてもらうとだな、
普通は転校生から自己紹介するもんじゃね？

担任は、転校生を教卓の前へ。

「私の名前は、神子上麗香（ミコガミ　レイカ）っていいます。
　よろしくお願いします。」
にこやかな顔で、やや緊張気味に言った。

＞ｉ１５８８５―１３３５＜

神子上麗香か……
珍しい名前ではあるが、昨日の名前と比べるとアリな名前だ。

そして、どっかの無口ちゃんとは真逆の性格だ。
彼女にしたいね。
ただ、あまりアクティブすぎる性格だと、
なにかと面倒だからそうではないことを祈る。

で、ここからは俺たちの自己紹介だ。
自己紹介でねつ造しているやつらが昨日より明らかに増えている。
が、また冗談の範疇としておこう。
一人一人自己紹介を済ませ（俺もテンプレ披露）、

そしてとうとう零雨の番になった。
どんなあいさつをするのか、気になる。

零雨はすーっと静かに立ち上がり、無言で一礼して座った。
おお、シンプル、そして無難！
所要時間わずか3秒。
見事にクラス最速タイムを叩き出しやがった。
自己紹介のタイム競ってるんじゃないんだが……

苦笑いの担任がすぐさまフォロー。
「ああ、この子が昨日転校してきた子で、名前は嵩文零雨。
シャイで、人とお話するのが苦手らしいんだ。」
神子上は、わかりました、とうなずくと、
また次の生徒が自己紹介を始めた。

5分後、自己紹介も終わり、

神子上は担任に席を指定され、
そこに向かう途中で俺と零雨の間を通り過ぎた。
そのとき、
「みーつけた」
と神子上が零雨に小声で言い、
ニコリとしたのを俺は見逃さなかった。

第1話－6　二人の転校生　ミステリアスな転校生

その日の昼休み。
神子上麗香の机の周りには大勢の生徒がいた。
「ねぇ、誕生日っていつ？」
「どの辺りに住んでるの？」
「付き合ってる彼氏とか……いちゃったりする？」
などなど。

その反則級のかわいらしさと愛想の良さで初対面からたったの数時間でクラスに馴染んでいる。
速すぎる。
俺が小学校の頃に転校したときは、馴染みだすのに3日はかかった。
たぶん彼女には人の心を引きつける何かがあるんだろう。
いるよなー。そういうニクい奴。

……？
俺は一つ、あることに気がついた。
神子上は質問に対する答えのうちのほとんどを、
「うーん……秘密。」
と言ってそらすのだ。
趣味は何？
部活とか何部やってたの？
好きなアーティストとかいる？
こんな感じの質問さえだ。
何故秘密にするのだろう。

「ねぇねぇ、コウ。」
「何だ？」
俺の座席（オアシス）の後ろから女子の声がした。
振り返ると、メガネをかけた木下千賀（キノシタチカ）、通称チカがいた。
人物紹介をすると、
昨日、一昨日と所用で学校を休んでいた。
俺の友達の一人で、性格はやや活発。
髪が波打っていて、クセ毛なのは生まれつきだそうで、本人曰く
「私、ストレートヘアの遺伝子を持って生まれたかった」
とのこと。
本人は納得してないが、俺的視点から言えば、
今のヘアスタイルの方が雰囲気的に似合ってる。
一度俺が、
金出してパーマかける奴もいるんだから、
そいつらから見れば、ストレートになりたい、
とはちょっと贅沢な悩みだな、
と言ったことがある。
その瞬間にチカの目の色が変わったね。鬼に。
「あんた、私の悩みなんて分からないでしょ！？
髪の手入れは面倒だし、櫛は髪にすぐ絡まっちゃうし、
朝は寝癖が直らなくて地獄！分かる！？」
と、怒ったチカに俺はぶっ飛ばされた。
髪の質で悩んでるやつに軽率な発言は慎むべきだと学習したよ。
と、まあどこにでもいそうないなさそうな、そんな感じの女子。
「昨日休んでたからよく分からないんだけど、

嵩文零雨ってどんな性格の子なの？」
と、隣の席の零雨に聞こえないようにヒソヒソ声で話すチカ。

「変人。この一言に尽きるね。」
俺も声を潜める。

「変人ってどの辺りが？」

「全体的に。
まず、しゃべらない。動かない。話しかけても無反応。
自分でQRコードを作ることができるという、無駄にスゴイ技を持ってる。」

「え！？QRコードって、ケータイとかでピッと読みとるアレ！？
アレ作れるの！？」
チカが思わず声をあげる。

「QRコードが何だって？」
その声を聞きつけたジョーが乱入。

「嵩文さんが自分でQRコードを作れるってお話。」
チカが控えめに言う。

「え、コウ、お前何で知ってるんだ、そんなこと？」
ジョーは声を潜めることなく普通に言う。空気読め。隣は零雨だぞ。

「昨日の放課後に、嵩文が教室に一人残っててさ。
俺が忘れ物取りに戻った時に会ったんだよ。」
俺はジョーに目で隣に本人がいるぞと牽制しながら言うと、
ジョーは小さく2，3回うなずいた。

「じゃあお前嵩文としゃべったのか？」

「んー、まあ、な。俺が教……！？
誰かが俺の背後から急に口を手で塞いだ。

「コーちゃん、だったっけ？
ちょっと今日の放課後、教室に残ってくれる？」
俺の口を塞いでいたのは、神子上だった。
それと、俺はコーちゃんじゃなくて、コウだ。
俺はコーちゃんなどいう、ラブリーなあだ名はごめんだ。

神子上はそういうと俺から手を離し、人差し指を口元で立てて、俺の目を見た。
今の話を黙ってろと？

「俺はコーちゃんじゃなくて、コウっていうんだ。
愛称で呼ぶなら出来ればコウって呼んでくれ。
それとお前、嵩文と知り合いなのか？」
俺が聞くと、
「え、あ、まあね。」
と答えた。

なぜ初対面の転校生同士が知り合いなのか、
俺の理解の範疇を越えているが、それは気にしないでおく。
俺は、黙っておくよ、という意味を込めてうなずいた。
すると神子上はありがとう、と一言言って去ってしまった。
ジョーとチカにジロジロ見られながら。

「何なの？あの人。

いきなり私たちの話の腰を折って！」
チカがやや不満そうにつぶやいた。
「謎だな。」
ジョーも言う。

ミステリアスキャラはクラスに二人も要らないと思ってるんだが、どうよ？
あんまりにもミステリアスで強烈な奴が多いと、なんかクラス全体がカルト化しそうで怖い。
「とにかく、放課後は俺残るから先に帰っててくれ。」
俺がそういうと同時に、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

で、待ちに待った放課後。

俺がガラリとドアを開けて教室に入ると、
神子上麗香、嵩文零雨の二人がいた。
他には誰もいない。

「あ、コウ君」
神子上は俺が入ってくるのを見つけると、
俺が開けっぱなしにした教室のドアをバタリと閉めた。
教室の窓の鍵は全て閉まっている。

なるほど、簡易の密室完成ってわけか。
俺が今さっき入ったドアには鍵が掛かってないから、あくまでも簡易だ。

誰の机か忘れてしまったが、とにかく窓際の適当な机に俺は腰掛ける。
神子上は腰掛けた俺に近づき、向かい合って俺と同じく机に腰掛ける。

で、零雨はというと、自分の席に座り、何もない黒板をただひたすら見つめている。

ぱっと見、これはいったい、どういうシチュエーションなのかと

疑う人はいるだろうか？
いや、疑わない人はいないだろう。
なにせ、俺と神子上は問題ないが、零雨が……
ついでに俺の気持ちを率直に五文字で言おう。

帰りたい。

「初対面なのに、呼び出してごめんね」
と、神子上が話を切り出した。
悪いと思っているなら、どうか手短に。早く帰りたいんで。

「あなた、1．7f……あ、じゃなくて、嵩文さんと会話したって本当？」

「ああ、そうだが……」
今、無機的で奇妙な単語が聞こえた気がするが、きっと気のせいだろう。
多分テスト疲れだ。うん。そうしか考えられない。

神子上は振り向いて零雨に声を掛けた。
「嵩文さん、終わった？」

すると零雨はコクリとうなずいた。

あれ？零雨が会話に反応した。
昨日は俺の言葉を「意味不明」とか言ってたのに。

俺が滑舌悪い？
いや、滑舌が悪いなんて言われたことは、
俺のクソッタレな人生の中で一度もない。
逆に聞き取りやすいと言われるぐらいだ。

「うまくいったみたい」
そんな俺の疑問をよそに神子上が言う。
もちろん、俺には何が終わって、何がうまくいったのかさっぱりだが、
そんなことは俺の知ったこっちゃない。

とにかく神子上はそういうと、
俺の目を見て、真剣な顔をしてこう言った。

「盗み聞きされちゃうといけないから、ちょっと移動してもいい？」

「そんなに重要な話なのか？」

「うん、とっても大事な話」

「信用できるかもわからない初対面の俺に？」
戦場みたいな生きるか死ぬかの世界では命取りだ。
平和ボｋ……平和な日本で良かったな、神子上。

「絶対にあなたでないといけないの」

「なぜ、俺？」

「それも、後で話すわ。
とにかく、移動していい？」
神子上が立ち上がる。
「どこまで移動するんだ？」
「私の家」
おおっと、まさかの展開！
俺お持ち帰り！？
え、何、俺に一目惚れ？
……冷静になれ、俺。
よく考えたらまずあり得ない。
零雨がいるし。
それに、今日の昼休みの意味深な言動も、それだと説明がつかない。
そして何よりも、神子上の顔が真剣そのものだ。
一瞬異常に上がった俺のテンションを冷却しながら、
「もう一度聞くが、家まで俺を呼ぶほどの大事な話なのか？」
と聞くと、神子上は首を縦に振る。
「うん……多分あなたの想像以上に。」
ふと思ったんだが、神子上の家、急に引っ越してきたなら、
まだ荷解きとか終わってないんじゃ……？
まさかまさか、いや、あり得ないと思うが、
親か誰かに「男手が足りないから一人連れてきてちょうだい」
って言われてるとか……
（拉致ってきて）

そうならソッコーで帰宅しよう。
「部活は入ったのか？」
「一応、帰宅部がいいって言われたから、それに入ったわ。
コウくん、今日は用事はある？」
「大丈夫だ。」
早く帰りたいが、それはただ俺の気分であって、
特に用事があるわけでもない。
強いて言うなら、観たいＴＶがあるってぐらいなもんだ。
「じゃあ、行きましょ。」
神子上が鞄を手にとると、零雨も同じく鞄を持って立ち上がった。
神子上の家、遠かったら帰んのだるいな……
と、思いながら、俺は今日初めて会った神子上とかいう人の家に、
自動的にお邪魔することになった。

第1話－8　二人の転校生　世界の真実と管理人

神子上の家は学校から歩いて２０分の、
遠いとも近いともいえない、なんとも微妙なところにあった。
俺の家の方角は学校から見て南方面で、神子上の家は東方面だ。
ここからなら、歩きで３０分ぐらいか。

到着したのは閑静な高級住宅街。
道に沿って一軒家がずらっと立ち並んでいる。
つまり、一般に俗世間から勝ち組と称される分類の人々がすむエリアだ。
高級車を持っている家が多いのが、その動かぬ証拠だ。

高級車……誰か1台だけでいいから俺に恵んでくれ。
免許とったら、かわいがってやるから。

「ここが私の家よ」
神子上が後ろにいる俺たちの方を振り向きそういうと、
家の前の腰の高さほどの小さな門を開けて、敷地に入り、
ドアの鍵穴に鍵をさす。

「家族は？」

神子上が鍵を開ける前に聞いておく。
ドアを開けたら不意打ちで神子上の親父と鉢合わせになって、
「あ、ああ、あはは……、どうも、初めまして……」
なんて事態になったらアレだからな。

最悪の展開としては、親父が頑固親父という男気溢れる純国産タイ

プで、
その親父が俺を娘の彼氏と勘違いして、
「そこに座れぇ！！」
と言われることが考えられる。
万が一の事態として有りうる。万が一だが。

そんなことでビビって、喋るときに声が裏返って恥をかかないように、
前もって心の準備をしておきたい。

「一人暮らしよ。家族はいないわ」
と、神子上。

「ああ、そう。俺と同じだな」

「コウくんも一人暮らしなんだ……」
意外そうに答えた神子上。
神子上も一人暮らしだったのか。
俺も神子上が一人暮らしなんて意外だと感じた。

ていうか、この家2階建てだよな？
一人にしちゃ、広すぎやしないか？

ガチャ、という音とともにドアが開いた。

「お邪魔します」
俺は一言、神子上に続いて入る。
零雨はその後。

家の中に入ると、まあ、女の子らしいオシャレな部屋、

という感じだ。

リビングには木製の本棚が一つ置いてあり、中心にはテーブルとイス5脚。

その奥には地デジに対応してそうな薄型テレビが、ドンと構えている。

不思議なことに、ブランドやメーカー名は載っていない。

うむ、ここにもミステリーが。

それもそうだが、一人暮らしで、なぜイスが5脚もいるんだ?

仮にも神子上に彼氏ができたとしても、2脚あれば十分のはず。

「神子上、一つ聞いていいか?」

「ん? 何?」

「神子上の家族は何人いる?」

神子上が、自分を含めて5人、と言ってくれれば、イスの疑問は簡単に解決する。

家族そろって、実家から神子上の家に遊びにいく、と考えれるから。

《5人家族》、またはそれに類する答えはすぐに出るはず。

そのはずだった。

「さっき、家族はいないって言わなかったっけ？」
これが神子上の答えだった。

「俺が言ってるのは実家の家族のことなんだが……」

「だから、私にはその家族自体がいないの」

「聞きにくいことだが、孤児だったのか？」
俺は神子上の暗い過去に触れようとしているらしい。
ここは慎重に……

「私には過去にも現在にも未来にも《家族》はいないの」

俺の頭の中で予想している回答が、ことごとく裏切られている。
ちょっと調子が狂うな……
まず、親なしにして子は生まれない。
必ず産みの親がいるはず。
少なくとも、地球に芽生えた最初の生命以外は。

「そのことについても、今から話すわ」
俺が返答するより先に神子上が言う。

「ああ……分かった」

今更気がついたが、俺が心配していた荷解きの手伝いは、どうやらないようだ。
紀憂に終わって一安心。

待て、一階に段ボールは見当たらないが、

二階に未開封（モンスター）の段ボールが隠されているかもしれない。
やはり引き続き警戒と注意が必要だ。

「まずは座りましょ。
　コウくんはそっちに座って」
神子上は俺にそう言って、俺が指定された席の、
反対側のテーブルのイスに、今まで空気と化していた零雨と並んで
座った。
俺と女子二人がテーブルを挟んで向かい合っている構図だ。

「じゃあ、本題に入るわね」
神子上が切り出す。

「コウくん、あなたに頼みたいことがあるの」

「引っ越しの荷物の荷解きか？」
何度も言うが、それはゴメンだ。

「あはは、そんな、違うわよ。
　あなたに私達と友達になってほしいの」
神子上は笑って言った。

え？それだけ？
まさかの、わざわざ家まで呼んで、たったそれだけってやつ？
いくらなんでもシャイすぎるだろ！

「もちろん、あなたをここまで連れてきたのには、
　さっきから言ってるように、それなりの理由があるの。
　……聞いてくれる？」

「ああ。聞くよ」
あくまでも、帰りたい姿勢は見せない俺。

神子上は、ふー、と一呼吸おいて話し出した。

「何をいきなり言い出すかと思うかもしれないけれど、
私と嵩文さんは同じなの。」

同じ？

「双子とか？」

「ううん、私達は双子じゃない。
私達は人間じゃない。
もっというなら、物理的な存在、
つまり物体でも、エイリアンでも、動物でも、植物でもない。
究極的には、
私達は本来物理的に存在しない……今ここに存在しているのは仮の姿ということ」

「何言ってるかさっぱりなんだが……」

物理的な存在じゃないとすると……幽霊？
ああ、考えただけで寒気がしてきた。

「私達はシステム。
そして、今ここに存在している私達は仮の姿で、真の姿は存在しない。

つまり、私達は本来、物理的に存在しない」

……明日俺、この二人に近くの精神科の先生を紹介してやろう。

「私達はあなたたちを管理しているの」

「……は？」

開いた口が閉まらないとは、正に今の俺のことだ。

「さらにいうと、あなたはここに存在しているわ。
でも、本質的にはあなたは存在していないの。
さらにさらに言うと、あなたが存在していると思っているこの世界も、
本質的には存在してないの」

「どういうことだ？
現に俺は今、ここでこうやって座って存在しているし、
この世界だってこうやって存在しているじゃないか！」

あああああああ、頭がおかしくなりそうだ。
神子上は今、この世界がすべて《虚》であるといっているのだ。
世界が全て《虚》ならば、《実》はどこにあるんだ！？
そんなバカな話はない。

「信じられないでしょうけど、ここはシミュレート空間、つまり仮想空間なの。
正確な現在位置は、ステージ番号２５、
私達はステージ２５と呼んでいるわ」

あり得ない。

俺がシミュレートされているだと？
これはマジで精神科に連れていかないと……

「……つまり、ここはコンピュータの中と？」
一応、話には合わせておくようにしよう。
それが無難だ。

「正解。補足して言うなら、このシミュレートは、
膨大な数のコンピュータが連携して実行されているの」

いまいち、いや、全く現実感がない。

そうか、わかった！
これは夢だ！！
俺は寝ていて、夢を見てるんだ！

「今からここがシミュレート空間であることを、
証明してみせるわ」
神子上は席を立ち、キッチンへ。
零雨は座ったまま、おとなしくじっとしている。
ホントにシミュレート空間だと証明され……るわけないよな。

「これはリンゴ。そしてこれは包丁」
神子上はそう言って包丁でトントンと
綺麗にリンゴを8等分にし、その一切れを俺に。

「食べてみて」

言われたとおり、食べてみる。
何の変哲もないリンゴだ。

みずみずしくて、うまい。
ただ、やや渋みが……

いやいや、何故俺は頼まれもしてないのに、産地不明のリンゴの評価をしている？

「リンゴでしょう？」
神子上はニコリ。

神子上のほほえんだ顔には、俺のＨＰが２５回復するぐらいの癒し効果がある。
実際、俺の体力はＨＰでは表されないし、
回復もされないから、ただの形容であることをお忘れなく。

「ああ、普通にリンゴだ」
俺が答えると、神子上は、
「このリンゴ、見てて」
と言い、零雨に《あれ》をやって、と指示する。

零雨はうなずいて、テーブル上に無造作に置かれたリンゴをただひたすら見つめる。

ただひたすら。

……！！！！

少しすると、リンゴが砂になり始めた。
それからものの１０秒も経たないうちに、

リンゴの水分はどこへやら、薄茶色の乾いた砂の山になってしまった。

かつもくしてみる。
変化なし。

頬をつねってみる。
痛いだけで変化なし。

「シミュレート空間じゃないと、こんなことできないわよね」
神子上が言う。

確かにシミュレート空間らしい。
それと、もう一つ大事なことも理解した。

これは夢じゃない。

頬をつねったら痛かったからだ。

「信じてくれる？」
神子上が問う。

「俺が何て答えるか、シミュレートなら分かるんじゃないのか？」

「シミュレートしているのは、物体と、原始的生物だけ。
高等生物は脳みたいな物理的な《モノ》や、
その身体はシミュレートの対象だけど、
そのシミュレートから生まれる精神的なものは私たちには分からない。」

「つまり、脳味噌に流れる微弱電流とか、そういうものはシミュレートの対象だが、
その微弱電流の意味するもの（＝思考）は分からんと？」

「そう。
……信じてくれる？」

「ああ。」
信じたくはなかったが、リンゴを見せられては信じるしかない。
だろ？

その後も長々と話があったが、まとめると、
・この世界はシミュレート世界で、この宇宙全体で一つの世界である。

・本物の世界はコンピュータの外にあると考えられるが、実際のところは不明。

・ステージとはシミュレートの段階のことで、
数字が高くなるにつれ、ハイレベルな世界になっていく。
例えるなら、最初は０次元（点）、次に１次元（線）、２次元（平面）、３次元……
と段階を踏んで進化している感じ。
だから、ステージ２５＝２５段階目のシミュレート世界、というわけだ。

・平行世界は存在し、今はステージ１から３０まであり、各ステージに一つの世界があるらしい。

・ＵＳＥＲという、このコンピュータの所有者がいるらしい。

世界の創造主といったところか。

・シミュレートの最終ステージは４２で、
ＵＳＥＲがステージ４３以降は存在してはならない、と指定したらしい。
コンピュータの性能に限界があるからだろう、と神子上は推測している。

「他に何か聞きたいことはある？」
神子上が一通り話終えて言う。

「ある。
４００字詰めの原稿用紙に聞きたい事書いて積んだら、エベレストを軽く越えるぐらいある。
まず、おまえらは何者なんだ？」

「最初にも言ったけれど、私たちはシステム。言い換えるなら、管理人ね。
システムはステージ０に分類されているの。
ステージ０には世界がない。
私たちが動作するのに必要なものしかない。」

「必要なもの？」

「各ステージのデータとか、私たちが存在するのに必要なメモリとか、
私たちをアップデート、つまり強化するためのプログラムとか」

「やっぱりアップデートとかあるのか」

「うん。
この子、嵩文さんはＳ０－ｖ１．７ｆ。
ステージ１から２５までを基本的に管理しているの。
私はＳ０－ｖ３．０ａ。
今はステージ３０までしかないけれど、
最終的にはステージ２５～ステージ４２まで管理する予定よ。
私と嵩文さんの違いは、人間的な柔軟な思考が可能かどうか。
感情の有無とかもあるわね」

「ｖ１．７とか、ｖ３．０っつーのは、バージョンってわけか」

「そうそう。
その後のアルファベットは、ステージ０以外のステージに行った回数を表していて、
嵩文さんはｆだから、バージョンが１．７の状態で６回行ってるわ。
私はａだから、初めてよ」

どうやら、
ａが１回目、ｂが２回目、ｃが３回目……と続くようだ。

「まあ、あなたに理解できるように話しているから、
ステージ０には実際、アルファベットとか、
文字なんて概念が存在しないっていうことは覚えておいてね」

まあ何も知らない俺が、
いきなり言葉抜きの概念だけで理解しろ、なんてのは無理な話なわけで。
噛み砕かれた表現にしてもらえないと、おそらく誰も理解できるや

つはいない。

「で、この世界に来た理由は何だ？」

俺がそう聞くと、なぜか神子上の顔が赤くなった。

何か恥ずかしいことでもあるのか？

「……」

神子上は黙ってうつむき、何かを考えている。

当たり前だが、《今日の夕食は何にしようかしら～》ではない。

「言うべきなのかな……秘密にしておくべきなのかな……」

神子上はそう呟くと、隣で窓から空を眺めていた零雨の肩を叩いた。

「ねえ、言った方がいいと思う？」

零雨は神子上に顔を向けると、首をかしげて、「さあ？」とジェスチャー。

「う～ん……」

さらに神子上は悩む。

「言っていいのかな……」

あー、そんなに悩むなら言わなくていい。

時間がもったいないしさ。

「……もう、言っちゃおっか。うん、言っちゃおう！」

そういって顔を上げた神子上は、俺に顔面スマイルを見せた。

第1話－9　二人の転校生　Be Friend Or Delete

「恥ずかしいことなんだけど……」
神子上が視線を俺から少し逸らす。

「ステージ0に大規模な障害があって、
ステージ25に関するデータと、私のプログラムの一部が吹っ飛んじゃったのよ。
障害の原因は分からないけれど」
神子上の顔が赤くなる。

「私は自分自身のデータを、嵩文さんはステージ25のデータを補いにきたの」

「嵩文の理由は分かったが、
なぜお前さんのデータの補充に、この世界に来たのかが、よく分からないんだが」

「ステージ25が、今の私を作らせる理由、
つまりアップデートの理由だったから。
私の失ったプログラムが、なぜ私に必要だったのか、その理由が見つかれば、
それを補充することで、私は失われたプログラムを補ったことになるわ」

どうやら、プログラムのバックアップ（緊急用の予備）は用意してないらしい。

「それじゃ、失われたデータの理由が見つからない可能性がある。

１００％回復するかどうか怪しいんじゃないか？」

「う……それは仕方ないわ」

神子上はこの指摘をされることが、一番恐かったらしく、声が一気にトーンダウンした。

「あ、それと」

神子上は声をやや強引に元の調子に戻し、言った。

「感情を持たない嵩文さんが、変なことをしないように見張る、監視役ってのも
私がここに来たもう一つの理由だよ」

神子上はまた、さっきとは微妙に違う、やや機械的な笑顔を見せる。

まあ、大層な話で。

まさしく、「世界を飛び回る」とはこの２人のことだな、などと俺は思った。

……！！

また空を眺めていた零雨が、突然ビクっとした。

その次の瞬間に、零雨はゆっくり瞳を閉じ、下をむいてしまった。

隣の神子上が特にそれに関して無反応だったため、

俺もスルーしてよいものと認識し、スルーする。

もしかしたら、一定時間何も操作しないと自動的に電源が切れるとか、

そういったエコ機能搭載のシステムかもしれない。

「最後に一つ聞きたいんだが、なぜ俺だけを放課後に呼び出したん

だ？
　そして、なぜ俺なんだ？」
まだまだ聞きたいこともあるが、早く帰りたいからこれで最後に。

「あなたが嵩文さんと最初に交流したから。
　昨日、これ使ったでしょう？」
神子上は、瞳を閉じた零雨の通学鞄から、あの黒の翻訳機を取り出し、俺に見せた。

「ああ、昨日、嵩文が持ち出してきた」

「嵩文さんがこの世界に現れたとき、
どこにいるか、全く見当がつかなくってね、
私もこの世界のどこに降りればよいのか、分からなくて困ってたの。
　そんな時、あなたがこれを使ってくれたおかげで、
この機械がステージ０の言語データベースにアクセスしているのを傍受して、位置の特定ができたの」

なるほど、嵩文がこの世界に現れたのち、神子上が現れた、ということか。
それはさておき、黒の翻訳機に通信装置が付いてるとは知らなかった。

「この装置を知っているのは、この世界であなただけでしょう？
　だから、あなたを選んだの。
　あと、今日のあなたの様子を見て、問題なしと判断したことも、理由の一つよ」

チクショウ、昨日俺が学校に忘れ物さえしなければ！！

……いや、今のは嘘。
だが、俺が昨日忘れ物をしたせいで、
トンデモナク面倒くさそうなことに巻き込まれたなんて、
これっっっぽっちも思ってない。
と、言えば若干嘘になる。

神子上は改まったように座り直し、言った。

「私たちと友達になってくれる？」

「別にいいが、なぜシステムとやらの回復作業から、友達になってほしいにつながるんだ？」

「長期の仕事になりそうだから。
それに、人と交流して色々経験するのも必要だと考えているから」
神子上は淡々と答えた。

その時、零雨が目を覚ました。

「普通に、友達として接すればいいんだよな？」

「もちろん！ただし、今の話は秘密ね」

「まあ、さっきもチラッと言ったが、俺は構わない」

友達が2人増えたと考えればいい。

「ありがとう、助かった。それと……」
神子上は続けた。

「今の話、理由なく口外したら、
この世から消すとまではいかないけれど、これになってもらうわよ」
神子上は指を指す。

「マジかよ……」
俺は思わず声を上げる。

これって、殺される以上にむごいよ。
うん、むごい。
そして、この状態になることを、世間一般では「消される」という。
神子上が言う「消す」は物理的にその物体の存在を「消す」、
と言う意味だということも分かった。

「わ……、分かった」
俺は答える。
いや、ヤバいってこれは。

「ありがとう！」
満面の笑みを浮かべた神子上が指さしているもの、
そう、それはテーブルの上の砂だった。

第1話－10　二人の転校生　時間と老後のツケ

神子上&嵩文（零雨はただ座っていただけだが）の衝撃的な話も一段落し、
窓から外をみると、
いつの間にか太陽は、あと少しで街中に沈み始める、というところまで下がっている。リビングに掛けてある時計は、もうすぐで六時だということを知らせている。

「そろそろ、俺帰った方がいいみたいだ」
俺はやっと言いたかったこの一言を告げると、神子上は残念そうな顔で、
「本当は、今の話もさっさと終わらせて、いろいろお話したかったんだけど」
という。

「まあ、明日も学校があるじゃないか」
友達になった、ということを意識して、砕けた言い方をしてみる。
神子上は照れくさそうな顔をしてうつむいた。
「うん……そうだね。明日があるしね」

明日……、神子上が噛みしめるように、そうつぶやいたとき、聞き慣れない声がした。
「私、少し……なら、時間を止められる」

「え！？」

「え！？」
俺と神子上は同時に声を出す。

零雨がしゃべった！
時間を止められることよりも、そっちの方がサプライズ。
飼っていた小鳥が、初めておしゃべりした瞬間を聞いた気分だ。
飼ったことはないがな。

「嵩文さん、しゃべれるの！？」
神子上は驚いた顔で聞く。
零雨はうなずき、透き通った声で話す。
「私……も話す……練習がしたい」

「いつから話せるようになったの？」

「……ついさっき。会話に必要な……最低限のデーターベースとプログラムが揃った」
「いつから集めていたの？」

零雨は首を横に振って、
「ＵＳＥＲ……があなたの言語データのアクセスを許可してくれた」
と、説明。
零雨は、だんだんとスラスラ言えるようになってきた。
……そういえば、神子上との話の途中、急にビクッとしたり、寝たりしていたな。
その間に何かしらやってたのかもしれない。

「良かったじゃない！
それなら、もうこれは要らないよね？」

神子上は、黒の翻訳機をどこからか取り出し、それを片手に聞く。
「……要らない」

ま、零雨が話せるようになって良かったことには変わりない。
ＵＳＥＲとかいう謎の存在に感謝感謝。

てか、翻訳機を使っての会話とか、
いかにも普通の女子高生を演じたって、怪しさ満点だ。

比喩する必要はないと思うが、一応念のためどれぐらい怪しいか比喩しておくと、
とある山奥のＡさんの別荘で起きたＡさん殺人未遂事件で、
一緒に宿泊していたＡの友人達のうちの一人の、
服が血で汚れており、血の付いた包丁を持っているのに、
私は無実ですなどと堂々と言い張るＢさんぐらいあやしい。

……やっぱこの比喩は気にしないでくれ。頼む。
それと、もっと巧い比喩表現を思いついたら、教えてほしい。

すまん、話を元に戻そう。
まあ、よくよく考えれば、白髪に赤い目という、
零雨の特異な容姿の時点で怪しがられるのは明白なわけで。
怪しがられる材料が一つ減った、という感じだ。

「嵩文さん、今日は時間が時間だし、また明日にしようよ。時間を止めるなんて……

零雨が神子上の言葉を遮った。

「ＵＳＥＲが時間の一時停止を許可してくれている」

マジで？ＵＳＥＲって、そこまで介入してくんのか？

「……じゃあ、ちょっとだけね。
私達には差し障りがないけれど、コウくんの寿命が短くなっちゃうから」

神子上は言う。

……って、おいコラちょっと待て。
俺の寿命が減るとか、さらっと言うな！

「おいちょっと待てよ！
俺の寿命が減るってどういうことだ？」

俺が聞くと、神子上は意外そうな顔をして、首をかしげる。

「え……？そんなの、当たり前じゃない」

「当たり前って……」

「んー……、じゃあ例え話ね。
寿命が残り３０分の人がいたとするよ。
現在時刻は午後６時３０分と仮定ね。いい？」

「ああ」

「この寿命３０分の人は、そのままだと午後７時に亡くなってしまう。
それで、例えばその人が午後６時３０分から１５分間、
時間の止まった世界にいたとする。
時間が進みだしたとき、時刻は当然午後６時３０分よね？
でも、その人は時間の止まった世界に１５分間いたんだから、

１５分ぶんの寿命は減ってる。
だから、その人は午後６時４５分に亡くなってしまうの。
ね？寿命が減るでしょ？」

言われてみれば、確かにそうだ。
「……確かに」

確かに本人は３０分生きたのだが、時間が１５分止まっているなら、
そうなる。
とすると、
俺が時間の停止した空間にいた間の《ツケ》は、
俺がヨボヨボのジジイになってから払うのか……

嫌だ……

死ぬ間際、俺の家族（いると仮定）に遺言を遺している最中に、
「はーい！時間切れでぇっす☆」
ってなって、途中で昇天するのは。

遺言じゃなくとも、例えばＴＶで野球中継を見てて、
延長戦に突入したところで寿命尽きて昇天、
「いいところだったのにー！」ってなる可能性もある。
いや、普通に寿命全うしてたなら、そら諦めもつくだろうが、
「あん時に時間を止めてなければ……！」
って俺の場合は後悔する。
たぶん。きっと。いや、絶対。

人生志半ば、不慮の事故で死亡とかなる予定なら、別に構わないか。
本来の寿命に到達するよりもずっと前に逝くのだからな。
その場合、死ぬ時間が固定されてるわけだから、

逆に時間を停止している分だけ長生きできる。
やべ、思考が超ネガティブだ、俺。

「もしもーし、コウくん？」
俺が、あの世では野球中継とか、やってんのかな？
などと思い始めたとき、神子上から呼ばれていることに気づいた。

「何？」

「今、すっごーく暗い顔してたから、どうしたんだろうと思って」

「……後悔しないかな、と思ってたんだ」

「何が？」

「自分の寿命を短くして、死ぬ間際に後悔するんじゃないかと」
俺が言うと、神子上は困った顔をする。

「……そうね、時間が止まってるっていうのは、
やっぱりコウくんにとっては特殊な環境よね……
私達はシステム、言い換えればプログラムだから、寿命がない。
だから、時間に束縛されることはないけれど、コウくんは……」
そういって黙り込む。

しんと静かになるリビング。
時計のカチ、カチ、という音だけが響く。

……俺は、何も無理に今ここで時間を止める必要はないと考えている。
この全宇宙の時間を停止する理由が、ただおしゃべりしたいからっ

てのは、
近所のコンビニに買い物に行くのに、ヘリコプターに乗ることと同じで……
なんというか……そう、用途が明らかにミスってる。
この若干気まずい系の静寂を破ったのは、零雨だった。

第1話－11　二人の転校生　奇妙な合成菓子

「逆のことを……すればいい」
これが零雨の答えだった。

「逆？」
俺が聞き返すと、零雨はうなずいて続けた。

「世界の時間を……停止すると、コウの寿命は減る。
コウの時間を停止すると……コウの寿命は長くなる」

なるほど、俺が止まればいいんだ。
物理的にじゃなくて、時間的に。
冬眠みたいなイメージか。
世界を３０分停止させたなら、その後俺が停止すればいい。
そしたら±０だ。
逆に世界を停止させた時間分以上の時間、例えば俺が４０分停止すれば、１０分寿命が延びる。
最高じゃねえか。
この理論で行くならば、俺が一万年停止したならば、
俺は一万年後の世界を見ることができるってわけだ。

「なるほど、これが俗にいう《逆転の発想》ね！」
神子上がポンと手を叩く。

俺はあることに気がついた。
「あのさあ、ちょっと言いにくいんだが、
そうこうしているうちに、もう１５分も経ってる」

これだ。

「あっ！」

「…？」

神子上は口に手を当てて声をだし、

一方の零雨は首をかしげた。

システムのバージョンが違うだけで理解力にこんなに差があるのか。

「そうよ！私たちが時間を止めるとかどうこう言っている時間自体が、

おしゃべりの時間じゃない！」

神子上が言うと、零雨も理解したらしい。

「時間……巻き戻す？」

「んー、そうしてくれ……いや、やっぱりそれは遠慮するよ」

俺は零雨の提案を退けた。

ここで時間を戻すと、過ぎ去った１５分ぶんの寿命が減る。

減った分の寿命を補うには、俺が停止しなければならない。

するとあら不思議、元の状態にカムバック。

それを補うためには……

そう、無限ループというくだらないオチが待っているだけだ。

とどのつまり、俺は過ぎ去った時間分の寿命は訂正できないことに気がついたのだ。

「そう……」

零雨は答えた。

神子上も理解したようで、何も言わなかった。

「コウくん、もう帰る？」

「ああ。これ以上初対面の人ん家での長居は俺の精神衛生上悪いから」
「そう。分かった」
神子上はおもむろに席を立つと、ちょっと待ってて、と俺に言って二階へ。
何をしにいったんだろうか。

あれ、零雨はどこへ行ったんだ？
零雨がさっき座っていたイスから消えている。
ふと横を見ると、鞄を持って俺のそばに立つ零雨の姿が目に入った。
いつの間に瞬間移動したんだよ！
零雨にはまったく存在感が感じられない。

「おまたせ！」
神子上が純白の紙袋を持って二階から戻ってきた。
「これ、持って帰って！」

「ん？何これ？」
神子上が渡してきた紙袋を受け取り、
中を覗いてみると、どうやらお菓子のようだ。
なるほど、こういうのはよくあるパターンだな。
お付き合いを続けるという意思表示をする常套手段、とも言えるか。
……一部の例を除いては。

「お菓子か。ありがとな」
俺が礼を言うと、神子上は
「私のオリジナルよ。
人間の味覚の嗜好データからはじき出した、
お菓子として最もうまいと感じられる味に合成したの」

と言う。

……出来れば、私のオリジナル、というところで止めてほしかったんだが。

合成って……食って大丈夫なのか？

合成って何か、いいイメージないんだが。

奇妙なお菓子モンを食った瞬間にコロリ、は絶対に嫌だ。

神子上は俺の若干戸惑う顔を察した様子で、

「やだなあ、多分食べても害はないって！」

という。

おいコラ多分って何だよ、多分って！

家に持ち帰って、食べたらあの世行き～のくだりはどこかで聞いたことが。

あ、あれだ。

ゴ●ブリ駆除のＣＭ。

俺は下手をすると、ゴ●ブリと同じ死に方をするのか。

一応、受け取っておこう。

食うか食わないかは俺の自由だし。

「そうか。受け取っておくよ。ありがとな」

俺は神子上の善意に一応の感謝をする。

「それとさ、私達、友達になったんだから、

次から呼ぶときは愛称とか下の名前で呼ぼうよ」

神子上が提案してきた。

なるほど、

嵩文零雨は零雨、神子上麗香は麗香っていうわけだな。

俺にはあだ名がついてるから、そっちを使うことになる。

「構わんが、強制はするなよ」
俺が答えると、神子上はもちろん、と答えた。
零雨も構わない、と答えた。

「それじゃあ、また明日ね」
玄関で鞄と紙袋を持ちながら靴を履く俺と零雨に、神子上がいう。
「ああ、また明日」
俺は零雨と一緒に神子上の家を出た。

太陽はすでに沈み、残照だけが空を朱に染めていた。

第1話－12　二人の転校生　零雨の実績と24％

さて、今、零雨と途中まで一緒に帰宅している。
零雨の家は神子上の家から南方面、
つまり学校から見て南東方面にあると、今本人から聞いた。

位置関係をまとめると、学校を中心として
東方面が神子上麗香、
南東方面が嵩文零雨、
南方面が俺、
という関係になってるってわけだ。

「なあ零雨、聞きたいことがあるんだが、聞いてもいいか？」
俺は、右隣を歩く零雨に話しかける。

「……？」
零雨の顔が無言で俺の方を向く。

「今からする質問は、ただ俺が何となく気になったから聞くわけで、
　無理な質問には答えなくてもいいからな」
俺はそう前置きをした。
零雨が分かった、とジェスチャーする。
零雨は話すのがあまり得意じゃないな。
口で答えれば済むことを、わざわざ無駄のない動作で表す。

「何で、零雨は今の姿で現れたんだ？」
これが、俺の聞きたかった質問だ。

「？？？」

零雨はイマイチ理解できてないようだ。

「言い換えるならば、
なぜ、女子の姿で現れたのか、とか、なぜ白髪なのか、とか。」
俺が付け加えると、零雨は理解したようで、頷いた。

「私……が女性として現れたのは……その方が好都合だから」

「好都合？」

「私が……Ｓ０－ｖ１．７ｄの時、男性の姿をして現れた。
……当時、私は短期の……作業を行っていた。
私は他人と接触する際、人間は相手が……男性であるか女性であるかによって、
態度が……大きく変わることを発見した。
男性よりも、女性の方が他人と接触しやすい。
……この事実が判明してから、女性の……姿で現れるようになった。」

「なるほど、接触っつーのは情報収集か」

「そう」

「ところで、今言ったその作業って何だったんだ？」
俺が聞くと、零雨は答えた。

「ステージ２５の……シミュレーションのエラーで……発生した強力な電波の受信・解析」

「ステージ２５？」

ステージ２５って、確かこの世界のことだ。

「西暦１９７７年８月１５日夜……地球、アメリカ……オハイオ州にて、
約７０秒にわたって受信した。
周波数は……１４２０．４１６Ｍｈｚ。
電波の発生源は、いて座方面……地球から約３．７光年。
原因はステージ２５の欠陥。
欠陥は……現在修復済み」
よく覚えてるな。
いや、当たり前か。

「なるほど、宇宙スケールか……」

まあこのスケールぐらいなら、二人にとっては標準的な、例えるなら部屋の中を歩き回る感覚なんだろう。

「不運にも、その電波は人間に傍受された」
「運が悪かったんだな」
俺はそれ以外に何も返答が思いつかなかった。

「私の髪の色については……この世界に現れる際、私が……
……色を指定しなかったから。
肌、目についても同様に……色を指定しなかった」

なるほど、何も設定しなかったから、リアルデフォルトで生まれたと。
色の指定っつうのは、たぶん色素だな。
人間でも遺伝的に色素を持たない人達がいるらしい。
彼らはいろいろな面でかなり苦労している、と聞いたことがある。

零雨は別だが。

「そうか。色を指定しなくて、後悔はしてないのか？」

茶髪や金髪ならばまだしも、白のロングヘアーは目立つ。

「後悔はしていない。

それが私に特に大きな問題にならない限り、修正しようとする意志はない」

と、零雨は答えた。

零雨がそう言うのだから、零雨の自由にさせりゃあいい。

俺がこうしろ、ああしろなどと言う権利はない。

「……それから」

今度は零雨から話しかけてきた。

「コウ、あなたは運が良かった」

「何が？」

「私はあなたが麗香の……家から出られる確率を、……およそ２４％と予測していた。

麗香は言わなかった。

もし、……あなたが私たちと友達になることを……拒否したら、あなたを消す予定だったことを。」

「……マジで？」

「あなたは試されていた。

私は麗香にあなたがＮＯと……言った場合、
麗香があなたを……私たちの友達として不適と判断した場合、
その場であなたを消すように……命令されていた。」

俺があの時、ＮＯと言っていたら、俺はリンゴと同じ運命を辿ってたのか！
何気ない選択が、その人生を大きく変えるとは正にこのことだろう。

しかし、高２にしてまさかの死亡フラグが成立していたとは……
いやー、危なかった。
脱出確率２４％とは、こりゃまた低い数字だ。
言っとくが、俺はこの数字の根拠は知らん。

零雨は繰り返し言った。
「あなたは運が良かった」

「あ……ああ、どうも」

そう俺が答えたとき、目の前に交差点が現れた。
ここで、零雨ともお別れだ。

俺は、零雨と別れて一人、家路へと向かった。

第1話－13　二人の転校生　俺、愚痴る。

残照も消え、空が綺麗なディープブルーに染まった頃、
俺はようやくマンションまでたどり着いた。
マンションの廊下の蛍光灯が、床を照らしている。

鍵をまわし、ドアを開ける。
すると、玄関から奥へと続く深い闇が俺を出迎えてくれる。
こういう時、独り暮らしの老人の気持ちが分かる気がする。
俺はまだまだしばらくは元気に力を抜きながら生きていく予定だが、
年を取るといつ死ぬか分からない。
せめて最期ぐらいは誰かに看取ってもらいたいもんだ。

とある外国では、ある独り暮らしのばあさんが亡くなって、
発見されたのはそれから４０年以上経ってからで、家具はなかなか
見れないレトロ品、なんて話もあったそうだ。

俺は闇に染まったリビングの明かりをつけるスイッチを、壁伝いに
手探りで探す。

パチン

明るくなったリビングはテーブルの上に置かれた洗われていない食
器や調理器具が、
床にはチラシやらごみ箱に捨て損ねたお菓子の袋やらが、
今朝の状態のまま、雑然と放置されている。

要は散らかってるってわけだ。

まあ、俺の家に来る奴なんて、まずいないから散らかってたって構わない。

家に来るのは、せいぜい契約している宅配クリーニング店のオッサン、

宅急便、新聞勧誘程度だ。

新聞の勧誘が来たときは、《独り暮らしで親がいません》のコマンドを使って退治する。

大抵の奴はそこで諦めてくれる、便利なコマンドだ。

たまによっぽどノルマが達成できていないのか、

親の住所まで聞きだそうとしてくるしつこい奴もいる。

そんな奴らには１０００ｋｍ離れた実家の住所を言ってやると、効果てきめん！

大人しく萎えて去ってくれる。

そもそも、俺は宿題やらＴＶやら外出やらで新聞なんて読む時間ねーしな。

というよりも、ぶっちゃけ、まず読む気がしねぇ。

ＴＶで十分、と俺は軽く一蹴。

さて、今朝の朝食の後片づけをしなければならないが、ちょっと疲れた。

俺は制服のまま、ソファにバフッと飛び込む。

白い天井を見つめながら、

散々だった今日一日を振り返ってみる。

今朝、神子上麗香が登場、昼休みに放課後来いと呼び出され、挙げ句には自宅連行……

……はあー、俺は運がいいのか悪いのか……
よりによって俺に勝手に向こうから秘密を打ち明けてきて、
友達になってほしい、裏では拒否するなら消すと……

神子上麗香はニコニコしながら裏であんな命令をしていたとは、鬼畜だ。

何が「システム」だ。
何が「感情を持ってる」だ。
何が「人間的思考ができる」だ。

声色を変えながら、ただ表情筋をヒクヒク動かしてるだけじゃねえかよ。

神子上麗香には「慈悲」という概念がないのか？

……もしかすると、これが麗香に欠けていたプログラムなのかもしれない。

チロリン、という音が聞こえたような気がして、鞄の中の携帯電話を取り出すと、着信が2件。

それぞれジョーとチカからだ。
内容は、どちらも「放課後に呼び出されてたけど、どんな話だった？」というもの。

真実を漏らすとこの世から消されてしまうから、
特に何でもなかった、ただこの学校の部活の仕組みが良く分からなかったらしく、
適当に俺を選んで聞きにきただけだった、

とメールしておく。

どうか納得してくれ。頼む。マジで。

しばらくして、2人から返信が返ってきた。
一言でまとめると、「ふーん」だった。
セーフ、どうやら納得してくれたみたいだ。

そうこうしているうちに、時計はもう夜7時30分を指している。

そういえば腹が減ったな。
今日は俺、色々と頑張ったし、ピザでも頼むか。

どこからか、「別に何もやってねぇじゃねえか」、
という声が聞こえてきそうだが、否定はしない。
だが、トンデモな話を聞かされて、
精神的に疲労していることぐらいは分かってほしいところだ。

まあ、ピザぐらいいいだろ？
ちょっとお高いだけの庶民の食いもんなんだし。

えーっと、確かピザの広告はソファの下に入り込んでいた記憶が……

あったあった。
お、500円引き券付きだ。ラッキー！

俺は早速ダイヤルする。電話に出たピザ屋のオッサン曰く、注文殺到で配達まで90分かかるらしい。
商売繁盛、儲かっちゃってるねえ。

ピザを諦めたとこで、
クソ暑い夜に晩飯を買いに行く気にも、作る気にもなれん。
ピザを配達してもらうのが楽だ。
というわけで、俺は構わずピザを注文した。

ふう、ピザが来るまでに風呂入って、朝食の片づけをやらねぇと。

汚れた食器を使い回して食中毒、学校休みますなんていうネタを、
確か去年の今ぐらいの時期に俺がやらかして、周りから散々バカに
されたという、
葬り去りたい過去があるから、食品衛生面だけは気をつけるように
している。

風呂上がりの俺が食器を洗い終えたとき、ドアチャイムの音がなっ
た。

「合計１５７５円になります」
顔を汗でびっしょり濡らした配達の若い男は言った。
お疲れさん。

「この券使えますか？」
俺が５００円券を差し出すと、男は難しい顔をする。

「これ、期限が1年前ですねぇ」

やっちまったね。
この恥ずかしさにつける薬なんてない。

配達の男が、ポーチからおもむろに何かを取り出す。

まさか、前回の未徴収分の請求書？
いや、俺はモノだけ受け取って金を払わないなんて外道なことはしない。

「この券を出したことにしておきますね」
その男は、しわしわだが有効な５００円引き券だった。

「あ、ありがとうございます」

「こちらの期限切れの券は回収しますね」
彼は俺から券を受け取ると、ビリッと破いてポーチへ突っ込んだ。

「本当はいけないんですけどね」
男は爽やかに笑った。

「では改めまして、お会計１０７５円になります」

「なんか、すみません」
俺はただただそうしか言葉が見つからなかった。

俺は料金と引き替えにピザを受け取った。
「ご利用、ありがとうございました」
男はそういって、彼もまた恥ずかしそうに足早に去っていった。

ドアを閉め、リビングへ。

世の中には、まだあんな親切な人いたんだな。
昭和の時代のとっくの昔に絶滅したものと思っていた。

俺はピザを、ＴＶを見ながら1人で食う。
ピザにはいつもと違ううま味があった。

ピザを食い終え、ふとソファの横にポンと置いた純白の紙袋が俺の目に入った。

……食ってみるか？
いや、何か不安だ。でも気になる。

気が付くと、俺は紙袋の中に入っていた小さな袋を手に持っていた。
水色のチェック柄のビニル（と思われる）袋。
口を空色のリボンで蝶結びにして止めてある。

紙袋の中には、他にもおなじような、
緑色やピンクといった小袋がいくつか入っている。

食べるべきか？それとも、放っておくべきか？

食って体を悪くする・もしくは天国への片道切符をｇｅｔする可能性も、わずかながら存在する。
麗香の《多分大丈夫》の発言が、どうしても気になって、なかなか一歩が踏み出せない。

かといって安全策をとって、食べずに置いておくというのも、俺の好奇心が許さない。

俺はこの葛藤をどうするべき？
このことを考えるのをやめると、結果的に安全策を取る形になる。
食べるか食べないかという、白黒ハッキリした問題だ。

グレーはあり得ない。

では、見方を変えて考えてみよう。
食べるか食べないかの問題は、麗香を信用するかしないかという問題に置き換えられる。

あいつがこの菓子で俺を消そうと考えている可能性はあるか？
あるなら、麗香を新しい友達、と信用した奴は、すべて消されることになる。
ないならば、こいつは無害。
ミスでもしない限り、食って問題はないはずだ。

麗香と零雨の話を総合的にまとめて考えてみると、
そう、よくよく思い出して考えてみると、
麗香も零雨も俺をおとしめる気はなさそうだ。

よし、食ってみよう。

俺は石橋を十二分に叩いた。
あとは渡るのみ。

俺は思い切って、空色のリボンに手をかける。

するりとリボンが解け、袋の中のクッキーが見えた。
一見、何の変哲のないクッキーだが……

クッキーの端を少しかじってみる。
確かにめちゃくちゃうまい。

変な味はしない。
舌が痺れることもない。

俺の紀憂で終わってくれそうな気配。
もう、何かあったらその時だ。

俺はクッキーを1枚丸ごと食べる。

そして、2枚、3枚、4枚……

結局、水色の袋の中のクッキーは、すべて食べてしまった。
それほどにうまかった。
残りの菓子はまた今度にしよう。

俺は紙袋をテーブルの上に置き、TVを消して、今日の宿題をするため、自室に向かった。

第1話－ＥＮＤ　二人の転校生　非日常という日常

翌日、俺が真夏の元気いっぱいの朝日と、モワァッとする空気に歓迎されながら登校し、
大量の汗をかいて教室に入ると、
濡れた背中の気持ち悪さをも吹き飛ばすような、異様な光景が目に飛び込んできた。

「ねえ、麗香の家って、学校からどれぐらいのところにあるの？」
そういっているのは、
昨日話の腰を折られたと、にがにがしく不満を言ったチカだ。

「えっとね、歩いて２０分ぐらい」
嬉しそうに答える麗香。

「零雨は？」
そういっているのは、
昨日話の腰を折られたと、にがにがしく不満を言ったチカに相槌を打ったジョーだ。

「……約２３分」
零雨は変わらない口調で答える。

あいつら、俺の友達に一体何を……
俺の顔が引き攣っているのが自分でも分かる。

「あ、コウ、おはよー！」
チカが教室の出入口付近で茫然自失状態で立ち尽くす俺と目が合うと、笑顔で挨拶。

「あ……ああ、おはよう」
この挨拶のおかげで歩くという動作を思いだした俺は、自分の机に向かい、その上に鞄を置く。
そして早速麗香と零雨に手招きして、教室の隅に呼び出した。
「お前ら、ちょっと集合」

「コウくんおはよう！昨日はよく眠れた？」
陽気な麗香。

「いやいや、おはようじゃなくてさ、お前、チカとジョーに何をした？」
嵩文零雨と神子上麗香の二人にかかっている容疑は、《チート使用》の容疑。
二人はその特別なポジションを利用して、チカとジョーをいじった可能性がある。

「別に。何もしてないわよ？」
と、麗香。

「何もしてないわけねえだろ。
じゃあ聞くが、どうして昨日の今日であの二人がお前らの態度をコロッと変えるんだよ？」

「だからホントに私は何もしてないって！
今朝、登校中に二人にばったり出会って、いろいろおしゃべりしてたらこうなったの！」

そんな短時間でそこまで親しくなれるもんなのか？
なんか腑に落ちないが、朝からそんなに追及するほどのやる気はな

い。
そういうことにしておこう。
そのほうが俺にとっては楽だし、
第一、わざわざ追及して人間関係を損ねた、という馬鹿な真似はしたくない。

「そうか、疑って悪かったな。
それと……昨日、零雨から聞いたが、
俺がお前の家で友達になるのを拒んでたら、俺を消してたって？」

「そうよ」

さらっと言うなよ……
麗香は誰にも聞かれないように小さな声で言う。

「秘密を知っている人物は可能な限り少ないほうがいいのよ。
私達がここにいるだけでもシミュレートに影響を与えているんだから。
もし私と零雨がここにいなかったら、コウはいつも通りの生活をしてたはず。
例えるなら、小学校の授業参観みたいな感じ」

「どういうことだ？」

「授業参観日は、担任の先生はいつもと違う服装をしてくるでしょう？
いつもジャージ姿の先生が背広を着てきたり、女性なら化粧をしてきたり。
授業も、普段と違う授業をする場合も多いでしょ？
生徒だってそう。

後ろに自分の親がいるから、それをどうしても気にしてしまう」

「まあ、大抵の場合はそうだが……」

「つまり、親という存在、つまり私達がいることで、
先生や生徒、つまりあなた達に影響を与えてしまう。
授業も変わってしまう」

「言いたいことは何となくだが分かった。
この世界への影響を最小限に抑えるため、というわけだな」

「その通り！
だから、口外しないでほしいとコウにお願いしたのもそのため」
麗香はフレッシュな顔をして答える。

「しかしだな、友達になってほしいとお願いしたとき、なぜそれを俺に黙ってた？」

「いった時点で結果が変わってしまうじゃない！
それを言っちゃったら、消されたくないからって、みんなＯＫする。
それじゃダメ。心から進んで協力してくれる人じゃないとダメなの」

俺の場合、進んで協力したというより、
俺に特に害を及ぼさないだろうと判断したからなんだが……
このことは黙っておいたほうがよさそうだ。

ジョーとチカが、俺達が教室の隅で話している内容が気になったらしく、接近してきた。

「陰でこそこそと何話してるんだい？
俺も話に入れてくれよ」
と、ジョー。
無理だ。諦めろ、ジョー。
お前にこの話はついていけない。
それに言ったら俺が殺される。

「まあ、そんなに大した話じゃないのよ。
コウが、『部活は何部に入るつもり？』って聞いてきたから、
それについて色々とね」
麗香、ナイス！！

「ああ、そういう話だ」
俺も喜んでその話にあわせておく。

「ふうん、それぐらいの話なら、隅に集まってコソコソ言わなくたっていいんじゃない？」
う……チカ、鋭い……
怪しまれてる。

「で、どの部活に入るの？」
……と、思ったが違った。セーフ。

麗香はにこりとして言った。
「やりたい部活も見つからなかったから、帰宅部にしようかと思ってるの」
零雨も帰宅部、と言った。

「俺もコウもチカも帰宅部なんだ。
帰宅部だったら一緒に帰れるじゃん！」

ジョーのテンションが急上昇。

「また、新しい仲間が増えたわね！」

と、チカもうれしそう。

俺からすれば、また新しい悩みの種が増えてしまったってわけなんだが……

「仲間って、友達？」

麗香が首をかしげて不気味発言。

「友達って、まあ、そう……だけど？」

チカがまごつく。

零雨はさっきから黙って、服装の乱れがないか気にしながら聞いている。

「友達……友達って、こうやって作るの？」

麗香、もうやめとけ。

「はい？」

ほーら、チカが謎めいた発言にどうしたらいいかと困ってるじゃねえか。

「あ……ごめんね。

私、今まで友達だよって言われたことがなくて……

友達って、こうやって作るんだ、なんて思って」

麗香がしみじみと答えた。

まあ、大抵は友達っていうのはこんな風に

話が合って盛り上がることから始まることが多いが。

「そっか……でも、麗香は零雨ちゃんと昔からの知り合いなんでし

ょ？
　友達じゃないの？」
と、チカ。

「零雨とは友達だけど、もう当たり前すぎて分からなくなっちゃってた。
　今までずっと二人きりだったから。
　二人だけじゃ、ちょっと寂しかったかな」
一応、麗香は零雨と友達らしい。

「ま、これからは私達も友達になるわけだし、何も心配することはないよ！
　仲間も増えたんだし、盛り上がっていこうよ！」
盛り上がらないでください。俺が疲れるから。

「おう！夏休みも近いことだし、親睦を深めるのにはもってこいじゃないか！」
と、テンションが上がりっぱなしのジョー。
ちょっとお前、落ち着け。
一発ぶち込まれたら黙ってくれるか？と、俺は心の中で思う。
ハト派の俺は、よっぽどのことがない限り、
髪型のことをちょっと言っただけでぶっ飛ばすチカとは違って、実際にぶち込むようなことはしないが。

「ありがとう！」
麗香は笑った。

こんな感じで、
ステージ０という、よく分からんところから発生した二人の転校生は、

こうして頼んでもないのに俺達を非日常（ハレ）という新しい日常（ケ）に巻き込んできたってわけだ。

第1話－ＥＮＤ　二人の転校生　非日常という日常（後書き）

第一話終了です。

今話の豆知識【小説×現実＝】

・１９７７年８月１５日、
アメリカのオハイオ州で１４２０Ｍｈｚの強力な電波を約７２秒間、
ビッグイヤー電波望遠鏡が観測。

１４２０Ｍｈｚの周波数は、地球外生命体が通信に利用する可能性が高いとされ、
受信する以前から、地球外生命体探査の為に、この周波数の電波の使用を世界的に禁止していたそうです。

受信した電波はいて座付近から来たと推測されていますが、未だに謎の多い電波だそうです。

プリントアウトされた電波の記録を見たジェリー・Ｒ・エーマンが、その記録された部分を赤丸で囲み、Ｗｏｗ！　と書いたことから、この信号はＷｏｗ！シグナルと呼ばれています。

参考【ｗｉｋｉｐｅｄｉａ】より

第2話－1　ハウス・クリーニング　きっかけ（前書き）

第2話、連載開始です！
※目次から飛んできた方へ※
この小説は、オムニバス形式ですが、0話と1話を読んでもらわないと、話が分かりませんので、
お手数ですが、ブラウザのバックボタンよりお戻りください。
m（＿＿）m

推定読了時間：約3時間6分（186分）
（500文字／分、500文字以下切り上げ）
参考：1パートは平均約10分程度です。
しおり機能をご活用ください。

第2話－1　ハウス・クリーニング　きっかけ

「ねえねえ」
それは週末という安息日を目前にした、金曜日の昼休みのチカの一言から始まった。
「そういえばさあ、コウの家に遊びに行くってこと、なかったわよね？」

俺は2週間後に始まる夏休みを、
今日もギラギラと輝く外の景色を教室の窓際からぼんやりと眺めながらただ一人、
脳内でフライングして満喫していたわけなんだが、
近くにいたジョーとチカによって、
そんな空想も一瞬で崩れ去り、現実世界に強制送還されてしまった。

「はい？」

「だから、『コウの家に遊びに行くってことってなかったよね』って」

「あー、そう言われれば。
俺の家とチカの家には行ったことはあるけど、コウの家はないな」
チカの隣のジョーが言う。

俺は前述したように、俺の家のインターホンを押すのは、
クリーニング屋と、宅急便と、新聞勧誘ぐらいだ。
後たまにピザ屋が来るぐらいで。
それ以外はあまりない、というよりも俺が受け付けない。

ご近所付き合い？
ああ、そんなことばもあったな。

「だからさ、今度の日曜、遊びに行っていい？」
「断る。」
俺は即答する。

「え？なんで？」
チカが少し残念そうな顔をする。

「俺の家に遊びに来るなら、推奨は一年前、
遅くとも半年前には予約を入れないと受け付けないことにしてる。
そういう訳だ。おとなしく諦めてくれ」

「どういう訳よ！？」
チカの額に若干の青筋が立っているが、まだぶっ飛ばされるような気配はない。
まだ安全域らしい。

まあ、実際のところ、俺の家は見事に散らかってるし、ゴミだらけだし、
到底「ＷＥＬＣＯＭＥ！我が家へ！」なんて状況じゃない。
もちろん、今日が金曜だから、俺が一念発起して、
帰ってから超速で片付けを当日まで不眠不休でしたって、当然間に合わない。
そんなファンタスティックな状態を、
家族に見られるならまだしも、友人には見せたくない。

「いいじゃない、遊びに行ったって！
それとも、何か用事でもあるの？」

チカの理性が働いたようで、口調が少し穏やかになる。
「……」
用事か……名案だ。
さて、どんな言い訳をしようか……

「ない？ないならいいじゃない！
じゃあ、遊びに行くよ！」

俺に言い訳をする猶予も与えてくれないのか……

「だが断る」
俺は頑なに拒否する。

「では、理由を簡潔に０．５秒以内で答えなさい。」
と、強気のチカ。
０．５秒以内、短けえな、おい。
だが……
「……いいぜ、答えてやろう。理由は『いやだ』」
フッ、決まった……
俺の勝ちだ。答えられないとでも思ったか？
適当に俺が答えられそうになさそうな問題を作ったつもりだろうが、甘かったな。
世の中には０．５秒以内で言える単語もあるのだよ、チカ。

「私達を家に入れたくない理由があるのね？
……あっ！分かった！
コウは一人暮らしだから、家の片付けとかやってないで、家の中が凄いことになってて、友達が家に入れる状態じゃないんじゃない？
そういえば去年、皿洗いしないで自分で食中毒にかかってたもん

ね」

う……図星。

さすがは女の端くれ、勘が鋭い。

「……食中毒の話は持ち出すな。

俺だって今もそれでへこんでんだからよ」

チカはにやりと笑った。

「ふーん、家の中が片付いてないってことは否定はしないんだぁ」

ああ、迂闊だった。

言わずもがな家の中の状態がばれてしまうとは……

俺も落ちぶれたもんだ。

「おい、ジョー、こいつを何とかしてくれ」

俺が救助を求めたそいつは、冷酷にもこう言い放った。

「俺も、コウの家がどんなのか気になる。俺も行きてえな」

四面楚歌、孤立無援、多勢に無勢―

誰も俺の味方をしてくれそうな奴はいないのか……

麗香と零雨は零雨の机で何かを話している。

と思ったら、俺達に顔を向け、こっちへ来た。

援軍ゲットのチャンス！

「おい、ちょっと聞いt……

「ちょうどいいところに来たわね！

今、今度の日曜にコウの家に遊びに行こうって話になってるんだけど、二人もどう？」

俺の言葉を遮ったチカはあっさりと俺から頼みの綱を取り上げてしまった。

絶望。

「そういった話にすらなってないし、
まだ俺の家に遊びにいけるかどうかって話をしてる段階だ！
俺の家は無理だし、勝手に話を進めるな！」

「今、『まだ』って言ったよね？
ということは、ＯＫしてくれるのね？」
「いやいや、だからそれは言葉のあやで……」

チカ、いいとこだけ聞き取って利用しようとするな。
しかも俺がそう否定した後も無視して続けた。
「コウもＯＫしてくれたみたいだし、おいでよ！！」

だ　か　ら、本人そっちのけで話をするな！
それに俺は許可した覚えは全くない。

「なんか、当の本人は全力で否定してるけど？」
麗香は俺の味方をしてくれそうだ。

「でも、私もコウくんの家には行ってみたいかな？」
「ぇ？」
ドラマもビックリな急転直下の麗香の発言に俺唖然。

「ところで、どうしてコウはこんなに嫌がってるの？」

ジョーは一つため息を吐き、静かな口調で、

「一人暮らしが大変で、家の中の整理の時間がなかなか取れないらしい」
と、オブラートに言う。
若干皮肉に聞こえるのは俺だけか？
まあ、パパママに飯だの洗濯だの家の掃除だのと、身の回りの世話をしてもらって、純粋培養されたやつら（呼び名でＪ君とかＴさんとか）に独り暮らしの大変さは理解できないだろうが。

「……そうだよ、チカとジョーが言うとおり、俺の家は片付いてなくて恐ろしいことになってるよ。だから残念だろうが、また半年後にしてくれ」
今から半年後といえば、今は7月だから……来年の1月か。
年末に大掃除をすれば何とかなりそうだ。

「そんなこと、許されると思ってるの？
否！！私の母性本能が許さない！
みんな、日曜日はコウの家を掃除しに行こう！」

チカの暴走が始まった。
それから、俺に対して母性本能を全開にすんな。
俺が惨めな気分になる。
チカが結婚して、カカア天下として君臨し、チカの後継者が生まれたら、思う存分母性本能を発揮してくれ。
（夫は不運にもハズレくじを引くことになるが、夫は少なくとも俺じゃないからいい。）
つーか、俺の苦労をいたわろうとか、そういう気持ちの欠片すらないぞ、こいつら。

「母性本能って何だろう……」

麗香がボソッと呟いた。
なーんかいやな予感。

「私も掃除しに行く！」
俺の懸念は見事的中、麗香はスマイル。

「私も……同行する」
零雨も来てしまうらしい。

「友達の家なんて掃除したことないな……
俺もちょっと興味ある。行っていいか？」
わざわざ聞いてくれてありがとう、ジョー。
答えはＮＯだ。
もしジョーが俺の家を掃除した時に、ベッドの下から親に見せられないようなモノが
出てくるのを期待して来たいと言ってるなら、残念な結果に終わるだろう。
俺はそんなモノは一切持っていないからさ。

とにかく、散らかってる俺の家に入ることは何があっても俺が許さない。
……と言いたいところだが、この状況だ。
諦めなければならないことも……
……ちょっと待て。
そうだ、みんな俺の住所知らないから、来れるはずがないじゃないか！

真夏の中、ちょっとかわいそうだが、
日曜日は４人で俺の家を探すとこから始めてもらうこととしよう。
多分見つけられずに日が暮れる。

「……仕方ねえな、そこまで言うなら来ていい。
5人もいればそれなりに片付くだろうし。ただし、何の報酬もねえぞ」

降参したかのような顔を作って言った俺は、
心の中でほくそえんでいるのだった。

この後、やばいことに巻き込まれることなんて知らずにな……

第2話－2　ハウス・クリーニング　早朝の来客

日曜日の朝。
俺が寝ていると、ありえないはずのインターホンの音が聞こえてきた。
「ピンポーン」
……誰だ？
まさか、こんな早くにあいつらが俺の家を見つけられるわけがねえ。
何せ、俺の住所も行き方も教えてないんだから。
きっと宅配便か何かだ。
それに今は朝の八時半を回ったところ。
それにしても早いなあ。
「はい、どなたです？」
俺はインターホンの受話器を取る。
「コウー、起きてる？」
……ガチャ。
今、チカっぽい声が聞こえてきたような気がするのだが……
きっと今のは幻聴だ、うん。
起きたてだから頭が回ってないんだ。
それから幻聴に突っ込んでおくと、寝てるやつがどうして来客の応

対などできる？
俺が受話器を戻してそう考えていると、
またもやインターホンが、しかも凶悪な連打攻撃が俺を襲う。
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン
ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン……
俺は今寝ぼけてるから、こんな幻聴が聞こえるに違いない。
一回水で顔を洗った方が良さそうだ。
俺はさらに加速するインターホン連続攻撃（DOS）の悪夢の中、洗面所の蛇口を捻る。

ピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポ
ピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポ
ピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポ
ピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポ
ピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポ……

蛇口からは、夏の生暖かい水が勢いよく流れている。
俺は冷たい水で顔を洗いたい。
洗面器に水を貯めてそんなかに冷蔵庫の氷でもぶち込んで冷やすか。
それにしても耳障りだ。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ
ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ
ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ
ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ
ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ
ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ

ピピピピピピピピ……

それにしてもインターホンの連打攻撃がひどい。
かの名人は一秒間に１６連打も出来たらしいが、
何故かは解らん、明らかにインターホン攻撃が１６連打どころでは済まされない激しさなのだ。

俺は仕方なくぬるい水で顔を洗うと、一応この音が幻聴でないことが分かった。
当然俺は即この攻撃の停止を求めるべく、インターホンの受話器へと飛んだ。

「ちょっとコウ！あんた何してんの？早く開けてよ！」
そんなチカの声と共に攻撃は止んだ。

……しかし何故俺の家がばれた？
何故チカの声がインターホンから飛んでくるのだ？
ぼけから完全に覚めた俺は、この不可思議な状況の理解に苦しむ。
俺が今右手に握っているのは電話の受話器であってほしいところだが、
残念ながら確かにインターホンの受話器だ。
つまりチカは俺の家の前に間違いなくいる。

「『コウ』という方は存じ上げておりませんが……
人違いではないですか？」
大人しく騙されて帰ってくれねえかな……

「嘘！その声は絶対コウだって！とぼけたって無駄よ！」

騙されるわけねえか。

……それにしても、一体どこで俺の住所を調べ上げたんだよ。
お前の情報力には感服するよ、全く。

「とにかく、みんな暑くて死にそうだから、早く中に入れて！」

「断る。」

俺が、はいそうですか、と素直にドアを開けるわけねえだろ。
つーか、皆で雁首揃えて来てんのかよ。
インターホンにカメラがないから初めて知った。

「断る！？おとといＯＫしたのはどこのどいつよ？」

「東ドイツ」

「……ふざけるのもいい加減にして！
明日、学校でぶっ飛ばすよ？」

……なぜ、こいつはこんなにも実力行使が好きなのだろうか？
まあいい、男には諦めも肝心だ。
開けてやることにしよう。
ここで意地張って明日、目に青あざが出来ることになるのは絶対に避けたい。
学校でアザの理由を聞かれたら、それこそ恥さらしもいいとこだ。

「……はあ、わかった、ちょっと待ってろ」
俺はそう言い捨てて、受話器を戻し、部屋着のまま玄関に向かう。
玄関のドアのレンズを覗くとなるほど、ジョーも零雨も麗香もいる。

俺はドアを開けた。

「開けるの遅すぎ！何回インターホン押したと思ってるの！？」

汗まみれのチカがたらたらと愚痴を垂らしているが、気にしない。

それよりインターホンが無事で何よりだ。

賃貸だから、備品が壊れたらいろいろな面でだるい。

特にインターホンを壊れたまま放置したり、

買い換えと称してカメラ付きのインターホンにレベルアップ出来ないあたりが。

「まあ、へどが出るぐらい汚い家なんだが、それでもいいなら入っていい」

俺がそういうと、全員が俺の家に入ってきた。

ここで一つ気になったのは、麗香と零雨が全く汗をかいていないことなんだが、

ジョーもチカもいるし、今は指摘しないで黙っていた方が良さそうだ。

「はあ～、涼しいぃぃー」

チカが冷房の入ったリビングに入ると、そう言ってエアコンの涼風にあたりだす。

ジョーも暑かった～、と言ってソファに座る。

「でも、このエアコン、雑菌の納豆みたいなニオイがする。

コウ、最後にエアコンを掃除したのはいつ？」

チカが聞いてきたから、
今年は時間がなくてやってない、去年の夏に掃除したきりと伝える。
俺もこのニオイは気になってはいたんだが……

「じゃあ、このエアコンも掃除しないとね。コウ、エアコン洗浄スプレーはある？」
チカが言う。

「あー、多分ないから買いに行かなきゃならん」

「ねえ、コウくん、メモ帳か何か持ってない？」
突然麗香が聞く。

「あるけど、何に使うつもりだ？」
俺が問い返すと、
「家の掃除に必要な買わなきゃいけないものをリストにして、みんなが書き込んでいったらどうかなって思ったの」
という。
「なるほどな、それで、その買い物の代金は誰が支払うんだ？」

チカが言った。
「あんたの家の掃除なんだから、あんたが払うのが当然でしょ！」

常識的に考えればその考えは正解なのだろうが、
正直、そこまでして掃除をするつもりはない……

というのも、先日、思い切ってちょっと値の張るCDプレーヤーを買い、今は金欠状態。
よって、節約中なのだ。

「あー、やっぱり台所『だけは』清潔だな」
「俺のこと馬鹿にしてるだろ、ジョー」

こんな感じで約15分。
俺の家を一通り視察したお客様は、次々と必要なものをリストアップしていく。
それに比例して膨らむ支出の2文字に怯える俺。

「こんなもんでいいかしら」
チカがそう言ってリストアップの終わったメモ帳を、ジョーに。

「こんなもんだろ」
ジョーはメモ帳を麗香に。

「うーん……私は分からないけど、こんな感じなのかな～」
麗香は曖昧な返事をして零雨に渡す。

「……」
零雨はちらりとみると無言のままチカへ返す。
麗香と零雨は（俺達が普段やってるような）掃除なんてやったことがないだろうな。

「コウ、今からこれを買ってくるから、お金！」チカはそう言って手を差し出す。
他人に何の躊躇もなく、金銭を要求するその図太さに俺は呆れた。

「……まだ朝の８時台だ。店が開いてないに決まってるだろ。
とりあえず何を買う予定なのか、ちょっと見せろ」

メモ帳には、
エアコン洗浄スプレー
雑巾
中性洗剤
バケツ
スポンジ
たわし
掃除機
ゴミ袋
ラバーカップ（トイレのあのスッポン）
消臭剤
芳香剤などなど……
２０の品物がリストアップされている。

「あー、まず掃除機は却下。家にある」
俺がそういうと、チカが反論。

「あの超ふっるい掃除機使うの！？
せっかくだから新しいの買った方がいいって！」

掃除機は俺が実家から持ってきたやつで、確か製造から２０年は経ってる。

「まだ動くうちはダメだ。
それに今俺は金欠だから、買う金がねえ。
ましてやこんな暑い中、持って帰るのもきついだろ。掃除機用の紙パックで十分だ」

「そ、そうね。紙パックでいいわよね」

チカがやすやすと持論を撤回したのは、
掃除機を持って帰るという重労働をさせられるリスクを
回避する為であるということは、
俺が《こんな暑い中、持って帰るのもきついだろ》と
言った時のチカの表情から明白だった。

俺はチカの華奢な《掃除機》の文字の後ろに、「用の紙パック」と
書き加える。
《掃除機　用の紙パック》
筆跡が明らかに違って違和感があるが、字は読めるから気にしない。

どうでもいいことだが、高校生が、しかも男が朝から掃除機用の紙
パックを
友達の間で話題に出すこと自体、ジョーからすれば
予想外で突発的、つまりゲリラ的な会話だったらしく、
どう反応すればいいのか困ってる様子だ。
生活臭のある話題で悪かったな、ジョー。

他にも、布団叩き（騒音になるため禁止されている）、
衣類用防虫剤（まだ未使用のものがある）、
台所のまな板（実家から持ってきたやつで、相当古いが家に新品が
ある）など、
８つの品物が削除、変更され、最終的に購入予定リストには１５品
目があがった。

「これでいいな？」
俺は仕上がった購入リストを皆に見せる。

特に異論は出なかったから、メモ帳をテーブルの上に置く。
リストの品物買うだけで、五千円は確実にサヨナラだ。
俺は、明日から両親からの生活費その他諸々が届くまでの約二週間、爪に火をともす、いや全身に灯油をかぶって火をともすぐらいの覚悟で生き延びる決心をした。

購入リストの吟味で、気がつけば時計は午前9時半になっている。
俺はまだ歯も磨いてないし、着替えもしていない。
早朝の来客で起こされたのだから、仕方がないといえば仕方がない。
面倒だが、本気で買い物に行くらしいから行く準備をせねばならん。
今日は家でダラダラする予定だったんだが、まさか炎天下の買い物をしに行くことになるとは……

「まだ朝の9時半だから、10時になったら出掛けよう。
俺、ちょっと支度する。
インターホンで起こされたから、まだ歯も磨いてないし、着替えもしなくちゃならん。」
俺は大きな背伸びを一つ、そういい残して洗面所に向かった。

第2話－3　ハウス・クリーニング　分解された俺のエアコン

俺が行く準備を整い終えたのは、俺がさっさと手早くしたおかげで、出発目安時刻の午前１０時になる２０分前だった。

つまり、俺は支度を１０分で終えたのだが、
当然ながらそれを褒めたたえてくれる奴はいない。

俺は早朝の珍客どもが集まっているリビングに入った。

「俺はいつもこの時間はこの番組を観てるんだ！」
ジョーの声が聞こえる。

「その番組、どこが面白いの？
私はこっちが観たいの！」反論するのはチカ。

ジョーはテレビのリモコンを片手に、
チカはテレビ本体のボタンの前に立ってのまさかのチャンネル争い。

おいおい……俺の家で何やってんだよ……
しかも勝手にテレビの電源入れてるし。

おまえらは修学旅行の宿泊先でチャンネル争いをする学生とやってること同じだぞ。

たった１日ぐらい、テレビを観なくたっていいだろ？
と言ってやりたいところだが、
幸か不幸かこの二人の気持ちが分からないわけではないから困ったもんだ。

俺もテレビは大好物だからな。

だから、
こんなところで俺の許可なくテレビをつけた挙げ句、
チャンネル争いを展開するなぞ、言語道断！潔く腹を斬れい！
とは言いにくい。
つーか、むしろ俺もチャンネル争いに参加したい。

というのも、俺がここで独り暮らしを始めて1年と4ヶ月、
チャンネル争いをすることは、当然常識的に考えてありえない。

もちろん、独りでチャンネル争いをプレーできないわけではない。

例えば、
片手でリモコンを、もう片手でテレビのスイッチに手をかけ、
自分ともう一人のキャラクターを、声色を変えながら一人二役で演じればできる。

ただし、試合結果は、完全に計算し尽くされた出来レースだ。

さらに一人でやってると虚しくなって、無性に恥ずかしくなる、
万が一他人にその場面を目撃された場合、プレーヤーは変人にしか見えないという、
なんとも素晴らしいオプションまでついてくる。
コアでちょっと変わったマゾヒストの方におすすめの、俺イチオシのゲームだ。

いつだったか、俺も無性にチャンネル争いがしたくなって、
夜中に一人、リモコン片手にやろうとしたが、プレー直前に強烈な羞恥心に襲われ、

あわや大惨事になるとこを未遂に終わった記憶がある。
素人にはおすすめできないと、俺はその時悟ったね。

あれは今思い出しても、「なぜ俺はあの時……！」と拳を握りしめながら、
そう思わずにはいられん。

自分以外の敵がいてこそ、有意義なチャンネル争いができるわけだ。

さて、思慮にふけるのもこれぐらいにして、
止める側の立場にいる俺は、残念ながら現在開催中のチャンネル戦争を止めねばならない。

「おいこら、なに人の家でチャンネル争いしてんだよ！
ほら、リモコンよこせ」

「え～」
ジョーは言う。

「『え～』じゃねぇよ。
ここは賃貸だが一応は俺の住んでいる家だ。
家主の俺の言うことに従ってもらわないと困る」

ジョーはため息を一つつくと、素直に応じた。
よしよし、いい子だ。

さて、問題はチカだ。
彼女はここぞとばかりにチャンネルを変え、ソファにでんと居座っている。

「ほらチカ、お前もだ」

俺はそう言ってリモコンの電源ボタンを押す。

「ちょっと、せっかく観ようと思ってたのに！」

「テレビを観たい気持ちは俺も痛いほど分かるが、今日ぐらい耐えろ。
それに、チカが観れてジョーが観れないのは不公平（アンフェア）だろ？」

そう言うとチカは、ムスッとした顔でわかった、と言った。

これで一件落着、と。
鳩的解決主義万歳！
ちょっと中国語風に言ってみた。
あ、簡体とか、繁体とかは絶対に気にするなよ。
あくまで「中国語風」だからな。

ドガガガガガ、カランカランカラン……

？？？
今の音は何だ？
ベランダから聞こえてきたが。

そういえば、零雨と麗香がいない。ベランダか？

俺がサッシに手をかけ、軽く手前に引くと、簡単に開いた。

鍵が開いているということは、二人は確実にベランダにいるな。

「零雨、麗香、ベランダで何してｒ……

俺はそう言いながらベランダに出たのだが、
あまりのインパクトの強い映像を見てしまったために、思考停止してしまった。

「……ちょ、おい零雨！
お前何やってんだ！早く元に戻せ！」

零雨はどこから持ってきたのかは知らないが、
ドライバーを持って、エアコンの室外機を分解している。
さっきの音は、室外機の外枠を外す音だったらしく、
室外機の薄汚れた大きな羽根が生暖かい風をＨｅｌｌｏ☆と顔を出しながら、
元気に回転している。

危ねぇ。

俺が注意しても、
零雨はエアコンの排気にスカートをヒラヒラせながら、
こちらをちらりと見るだけで、分解をやめようとしない。

俺は部屋に戻って零雨の安全確保のため、エアコンの電源を切った。

ジョーとチカが文句を言っているが、無視。

「零雨、ちょっと分解するのやめろ」

俺が言うと、近くで欄干に体重をかけ、外の景色を眺めている麗香が言った。

「零雨ちゃんは無意味なことはまずしないわ。
きっと何か考えがあるのよ」

「はあ……分解する理由、か……」

零雨がエアコンの室外機を分解する理由が、俺にはさっぱり解らん。

俺は零雨の作業を覗き込んでみる。

零雨は緑色の電子基板を露出させると、一つの部品をブチッと引きちぎり、
俺に渡してきた。

俺のエアコン……

その部品は上面が銀で、十字状に溝が入れられてある。
側面が黒いビニルのようなもので覆われた円筒形の部品で、
下の方から針金状の導線が二本伸びている。

「このエアコンは……もってあと約92時間。
今コウが持っている電解(でんかい)コンデンサの……防爆弁の作動が原因で動かなくなる。
早急に交換する……必要がある」

でっかいコンデンサ？ボウバクベン？
いきなり宇宙語しゃべられ、理解できない。
俺が分かったのは、エアコンが危篤状態で、
何の役割を果たしているのかよく分からんこの部品を交換すれば、
エアコンは延命できるということだけである。

「ほらね。零雨ちゃんは無意味なことはしないって分かった？」
麗香が言った。

「まあ……」
俺は言葉を濁す。

「その部品……貸して」
俺は零雨にでっかいコンデンサなるものを返す。

「この部品は……電気をためる部品。
この上面の銀色の部分……膨らんでいる」

零雨はその部分を指で示した。

なるほど、確かに膨らんでいる。
で、防爆弁ってどこについてる？

「この十字状に入れられた……溝が防爆弁の役割をする。
部品の中に封入された電解液が……劣化することで気化し、
その圧力で……爆発、周辺に被害が……及ばないよう、
圧力を調整する……それが防爆弁の役割」

んー……何となーく分かった気がする。

俺は、防爆弁というやつが、コイツが劣化して吹っ飛ぶのを防ぐ部品で、
作動するとそれきり、という風に解釈させてもらった。

「正直言うと、よくは理解できていないんだが、

とにかく、交換しなきゃならんのだな？」

学校の成績に関係のない、よく分からん小難しい話は聞き流しておくのが一番。

そういうわけで俺が聞くと、零雨は頷いた。

そこで気になるのがこの部品の値段だ。

それからどこで売ってるのかもだ。

「それでだ、零雨。

そのでっかいコンデンサとやらはいくらぐらいするもんなんだ？」

俺が言うと、零雨が突然停止した。

あれ？そんなに深く考え込まなくても、これぐらいの値段、でいいのだが。

零雨は何か言っている。

「そのでっかいコンデンサとやらはいくらぐらいするもんなんだ？

認識失敗

再認識

そのでっかいコンデンサとやらはいくらぐらいするもんなんだ？

認識プログラムエラー？……プログラム正常。

問題の解析開始

語句に分解……」

まさか、俺が零雨をバグらせた？

何か俺は重大なミスを犯してしまったのか？

俺がやらかした感、というか、確実に俺がやらかしたな……

「あーあ、コウ、やっちゃったわね……」

麗香が外の景色から俺に視線を変えて言った。

「もしかして、俺って相当ヤバイことした？」

「零雨ちゃんが壊れてしまうほどの問題ではないと思うけど、ほっといたら、零雨が自力で問題が解決するまで、ずっとこのままね……」

「俺は何をしてしまったんだ？」

「えーとね、零雨ちゃんに、突飛なことは言わなかった？例えば、話が急にねじれたとか」

特に思い当たる節は……ない。

「あのね、気がついてると思うけど、零雨ちゃんの理解力は、私よりも劣ってるし、あなたにすら劣ってるのよ。私は一応最新版だから、抽象的表現までならある程度は理解が出来る。

零雨ちゃんの場合は、認識するプログラムは軽量だけど、古くて低機能だから、認識機能は脆弱なの」

ふーん、なるほど。

ちょっと面倒くせえな、零雨がバグると。

そんな会話をしている間にも、零雨はブツブツと呟いたままだ。

「でっかいコンデンサ、でっかいコンデンサ、でっかいコンデンサ……

話に関連性の……ない単語……でっかい

でっかいの意味……でかいの促音化表現？

でかいは……大きい

この電解コンデンサの形状……円柱に酷似……
でかいに……関連性なし
この電解コンデンサのサイズ……比較的小型……
でかいに関連性……対義語、関連性低いが要確認……
でっかい……過去の対話の類似した語調……電解……
そのでっかいコンデンサとやらはいくらぐらい？
……置換
その電解コンデンサとやらはいくらぐらい？
検証……修正完了」

突然零雨はバッと俺のほうを向く。
あまりに突然の出来事に、俺はビビッた。

「わっ……な……何だよ？」

「この部品は大型の……コンデンサではない。
このコンデンサは大型……ではなく小型に……分類される。
なお、この部品の種別は……でっかいコンデンサではなく、電解コンデンサ」

あ、俺、聞き間違いしてた？
だからこんなこうなったのか……気をつけよう。

「俺の聞き間違いだったみたいだな。ごめん」

俺が謝ると、零雨は何事もなかったかのように話しだす。

「閑話休題。
この電解コンデンサは……市場に大量に流通している……汎用性の高い部品。

それほど値段は……かからないはず」

零雨に聞いても、結局具体的な値段は分からなかった。

俺も話を元に戻すと、エアコンは俺の生命線だ。
簡単にポックリと、くたばってもらっては困る。
まして二週間後には夏休みという、エアコンの本領発揮する時期をひかえているのだ。

「そうか……とりあえず、二人とも部屋に入れ。
お前らもそろそろ買い物に行く準備をしとけよ」

零雨は分かった、とうなずいて、先に部屋の中に入っていった。

「零雨ちゃんがブツブツ言うのは、自分が何を考えているのか、私に理解してもらって、問題解決の助言をもらいやすくするためなんだけど、
あんな風にブツブツ言ってたら普通の人に怪しまれちゃうよね？」
麗香は眉をひそめながら苦笑。

「ははは……まあな」
俺はこの二人がプログラムであると実感した。

「聞き間違いぐらいは簡単に修正できるように、私が後で教えておくね」
麗香は俺にそう言って部屋に入ったので、俺も部屋に入った。

俺は心の中で気になっていることがある。
それは零雨と麗香が学校の制服姿だということだ。

日曜だし、普通は私服を着てくると思うのだが……
このことについてはまた後で聞こう。
で、第二次チャンネル戦争が勃発してるのはなぜだ？
ジョー対チカの構図は変わらず。
しかも前回より明らかに激しい。
ジョーがリモコンを持って、テレビの前に立ちはだかるチカに体当たりで突撃、
リモコンの信号をテレビに伝えようと躍起になって……ってお前ら、いい加減にしろ。

「ちょっとコウ、なんでエアコン切ったの？」
テレビの前で仁王立ちをして、ジョーのリモコンからの信号を絶賛ディフェンス中のチカが言った。

「ちょっとエアコンの調子が悪いんだとさ。
零雨が教えてくれた。
……つーか、てめーら何またテレビつけてんだよ！」

俺はテレビのコンセントを引っこ抜いた。

「あーっ！コウ！ちょっと何すんの！」

「もう１０時だ。ほら、買い物に行くぞ」
まったくこいつらは……

俺がこいつらの熱きテレビ魂に、深い畏敬の念をおぼえたのは、言

うまでもない。

第2話－4　ハウス・クリーニング　５０円と　もやしの塩ゆで

近所のスーパーまでは徒歩で約１５分。
日用品から衣類、自転車、さらにはテナントとして旅行代理店まである、
総合的な店だ。
こういうタイプの店には、もしかしたら正しい呼び名があるのかもしれないが、
一応、ゲームも携帯電話も同じ《ピコピコ》として一括混同して認識する、
とある人種の思考回路を適用して、この店をスーパーと呼ぶことにしよう。

「あ〜〜……
やっと着いた……」
バテバテのチカが言う。

「何でお前ら（俺と零雨と麗香）はそんなに体力が……残ってるんだよ」
ジョーもバテている。
そりゃ、チャンネル戦争を二度も繰り広げりゃ、バテるに決まっている。

冷房の入った店に入ってすぐのところにひっそりと設置されている長椅子を見つけたチカが言った。

「ちょっと休憩させて」

俺達は長椅子に座った。

座ると同時にみんなが、ふう～とため息をつき、あまりの見事なハモり具合に俺達は笑った。

俺達が今座っている椅子は、階段の近くにあり、注意して見なければ見過ごされてしまうような、そんなところにある。

もちろん、俺達以外に座っているものはいない。

「俺、今思ったんだけどさ、
時間節約のために手分けして買い物をした方がいいんじゃね？」
ジョーが提案する。

「あ、それがいいかも」
チカも賛成。

「そっちの方が効率的ね」
麗香も賛成。

「……」
零雨は何も言わない。

俺も賛成したいところなんだが、残念ながら財布には１万円札が１枚のみ。
もちろん、俺の持っている最後の紙幣であり、リアルな命綱でもある。

「俺も案としては賛成なんだが、俺の財布には１万円札しか入ってない。
手分けして買い物をするのはあいにく無理だ」
俺が告げると、チカは言った。

「そうだ、じゃんけんしよ！」
と。

「は？」
ジョーは脈絡のないチカの発言に、
いや、俺を含めたチカ以外の全員が脈絡のない発言に《？？？》を返す。

「ほら、いくよ？
最初はグーッ！じゃんけんポン！！」

チカの合図で強制スタートし、俺達は慌てて手を出す。
じゃんけんゲームは零雨も麗香も知っていたようで、
何の問題もなく反応することが出来た。

じゃんけん一回目、引き分け。

「あいこでポン！！」

じゃんけん二回目、引き分け。

「あいこでポン！！」

じゃんけん三回目にして、決着がついた。

結果、零雨の一人負け。

「コウ、ちょっと失敬☆」

「あ、こら返せ！」

チカは笑みを浮かべながら俺から財布を取り上げると、零雨に持たせた。

「零雨ちゃん、何か飲み物を5人分買って、1万円を崩してきて」

零雨はコクリとうなずくと、立ち上がって行ってしまった。

「おい、チカ！」

「えへへ……いいじゃん、あたし達掃除頑張るからさ」

「あのな、チカ。
俺はあの1万円から今日買い物をした金額の残りで2週間ほど食っていかなきゃならん。
今の俺にはジュース代が激痛なんだ」

俺は一ヶ月1万円生活よりもハードな、二週間5，０００円以下（推測）の生活をせねばならぬのだ。

ああ、CDプレーヤーなんて買わなけりゃよかった。

「大丈夫、何かあったらお金、私が貸してあげるから」

明らかにその場凌ぎの言い方をしているチカに、
俺はカチンときたが、よくよく考えればジョーと麗香もこの話を聞いている。

つまり、不利なのはチカの方だと気づき、平常心を取り戻す。
いかんいかん、こんなところで取り乱しては。

少したって、零雨が白のポリ袋をぶら下げて帰ってきた。

「あ、お帰り！」

零雨は依頼主のチカに俺の財布とジュースを渡すと長椅子に座る。
無駄のない動きだ。

「ありがとう」

チカは袋の中を見た。

直後、チカ硬直。

「天然水……」

チカは袋からペットボトルを取り出した。

なるほど、確かに天然水だ。
ただの《水》。

ただの《水》というと販売業者や愛飲者から抗議書が届きそうだ。
言い直そう。

なるほど、確かに天然水だ。

ただの《どっかの自然の奥深くから採取した（らしい）、純水にミネラルという不純物を含み、味わいのある液体》。

天然水は、他の飲料よりも安いという（俺が勝手に定義した）法則から、
飛ぶ金が減ったのだから、喜ばないわけがない。

ただしチカの一言で実際に被った被害総額、計４５０円（レシートより一本９０円）は、
普通のジュースを購入した時の被害総額、概算５００円（一本１００円と仮定）に比べると
その軽減された被害はたったの５０円という微々たるものである。

たかが５０円、されど５０円。だからといって侮ってはいけない。
５０円あればもやしを１袋買ってもお釣りが来る。これ重要。
明日からしばらくの間、飯はもやしの塩茹でだけになるかもしれないからな。
たった一袋のもやしが、俺の命を明日へとつなげてくれる、
重要なライフラインになるかもしれない。

そう考えると、俺の返ってきた財布の中で何気なく居座っている５０円が、
光り輝く命のチケットに見えてきた。
やばい、幻覚だ。
よし、明日あたり病院の先生に診てもらって……金がないから無理じゃん。

「……まあいっか」
チカは呟いて、俺達に水を配る。

俺は、現金から変換された天然水に想いを馳せる。
そうだ。もやしが云々よりも、まず1万円がこれで崩されなければよかったのだ。

ちくしょう、こんなもん大事に飲んでやる。

ジョーとチカは何の躊躇もなく詮を開ける。

俺は開けるべきか取っておくか少し悩んだが、腹を決めてパキッと詮を開けると、
ジョーが言った。

「お金がどうこう言ってても、結局は飲むんじゃん」

「しょうがねえだろ、もう買っちまったんだからよ」

「あれ?、零雨と麗香は何で飲まないの?」
チカはペットボトルを開けずに持ったまま座っている二人に声をかける。

「あ……うん、後に取っておこうかなって」

零雨と麗香が飲食をする場面を、俺は見たことがない。
昼休みの学校、みんなが昼食を和気あいあいと食べているとき、
二人は揃って教室から出てどこかへ行ってしまう。

隣のクラスの俺の友人の話によると、
昼休みが始まると、校舎の屋上で二人が背中合わせになって、

ぼんやりと空を見つめているのをよくみかけるのだという。
なぜそんなところにお前がいるのかと友人に尋ねてみたが、
何かを隠すようにうやむやな返事をするだけで、結局答えてはくれなかった。

二人は１０分程すると教室に戻って、俺達の話の中に合流する。
そんなパターンが二人が引っ越してきてからごくごく自然的な流れで定着していた。

「ふーん、そう。
でも熱中症にならないように気をつけてよ。
せっかくの日曜日が台なしになっちゃうから。私もみんなも」

残念ながら、ここに約一名、日曜日どころか、二週間分の生活が台なしになりそうな人がいる。
それはもちろん俺だ。

「そろそろ、行こっか。
みんな、この袋の中に飲みかけのやつ入れて」
チカは白いポリ袋にみんなの飲みかけを回収しようと立ち上がった。

「ちょっと待った」
ジョーが物申す。

「みんな同じペットボトルだから、一緒に入れてしまったら見分けがつかなくなる」

もし、一緒に入れてしまった場合、未開封の零雨と麗香を除いて、
３つのペットボトルが持ち主不明になるわけだ。

つまり、3分の2の確率で、ジョーまたはチカと間接キスをしてしまう。
チカならまだ許容範囲ぎりっぎりだが、ジョーと男同士のキスは俺は無理。
Ｉ　ｌｏｖｅ　ＢＬ！！な方には申し訳ないが、
俺はＢＬ趣味は一切ないし、間接キスを想像しただけでおえ～だ。
ただ、俺は個人の自由は尊重したいと思っていることだけは頭に入れといて欲しい。

「見分けがつくように目印付けておこうぜ」
ジョーが言うと麗香が反応した。

「付箋紙持ってきたけど、使えるかな？」

麗香ナイス！！

「俺、筆記用具持ってきてっから、付箋紙に名前書いて貼っとけば間違いないだろ」
俺は購入リストにチェックをする為に持ってきたペンを見せた。

「いいじゃん、お前ら、ナイス！」
ジョーはグッと親指を突き立てて、爽やかに笑った。

俺達は親指ほどの大きさにちぎった付箋紙に名前を書いて、ペットボトルのふたに貼った。

「これでよし！」
チカは回収したペットボトル入りの袋を右手に持って、さらに言った。

「じゃんけんしよ」
と。

また性懲りもせず……

「今度は何のために？」
俺が聞くとチカは
「買い物をするとき、二人組に分けたほうがいいと思うの。だってほら、５人がバラバラになると確かに効率的だけど、つまんないでしょ？
だから、ジャンケンで勝ったほうと負けたほうと二人組み作ったほうが楽しそうじゃん」

こうして始まった
ジャンケン・リターンズ～誰となるかはお楽しみ～
というゲーム（命名は俺）。

誰だ？
痛いネーミングとか言った奴は？
……すまない、薄々分かってると思うけど、俺センスないんだ。
もやしの塩茹でで食いつないでいくことに免じて許してくれ。

とにかく始まったジャンケンで、
俺と零雨、チカとジョーと麗香の２グループになった。

ジョーの顔が若干いやらしいが、人間だから仕方がない。
ただジョー、気をつけろ。
チカからはぶん殴られる可能性が、麗香からは下手すると消されるかもしれんぞ。
お前の両隣にいるのは爆弾（特に麗香は危険）だということを自覚

しておけ。
と、言いたいところだが、言えない。

その代わり、優しい優しい内なる俺が、今日のジョーの無事を祈願して、
今度お百度参りに行ってくれるそうだ。安心しろ。

今度がいつになるのかは分からないがな。

俺と零雨のペア、意外に安全かもしれない。
零雨に変なことを俺が言わなければ。

こうして、ようやく買い物が始まったと、そういうわけだ。

第2話－5　ハウス・クリーニング　ショッピングカートという名の凶器

「これはどう見たって俺達に重量物がまわってきてるよな……」
俺は零雨と二人、手分けして買い物をするにあたって、
書き直した購入リストを眺め、店内もを歩きながら愚痴る。

この購入リスト（改訂版）はチカと麗香が書いてくれたのだが、
チカの陰謀だろう、重量物があらかた俺達にまわってきてる。

純粋というのか無知というのか、麗香はチカの陰謀に気がつかなかったっぽいな。

ラバーカップにエアコン洗浄スプレー、消臭剤に芳香剤、
極めつけにはスタンダードな水色の大きな円柱形のフタ付きのごみ箱……

対するチカ率いる3人組はというと、掃除機用の紙パック、ゴミ袋、
雑巾等、
軽量物ばかりだ。

大体、こっちは2人であっちは3人だ。
重量物は3人で手分けした方がいいのは明確だろうが。ボケ。

チカがいざ掃除をするぞというときにただ一人、
テレビの前にふんぞりかえってあれやこれやと指示だけ出してる姿が目に見える。

まあ、そうなった時は俺が文句をつけるがな。
……あまり迫力がなさそうとか言うなよ。

ところで、この間、ジョーとこんな熱い議論を交わした。
俺が完璧なまでのハト派と勝手に自負しているのは、既に知っていることだと思うが、
そのことに関する話だ。

「コウってさ、喧嘩したことある？」

「……口論までならあるが、それがどうした」

「俺はコウはもうちょっと暴力的になった方がいいと思うんだ」

「ジョー、暴力による解決っつーのは、
サル以下、知能を持った生物が使う、最も原始的なコマンドだ。
俺達は新しい解決方法として話し合いというやりかたを獲得した。
これはお前でも分かるよな？
被害を最小限に留めておきながら解決することができる方法を、
手に入れておきながら、お前はわざわざ非効率的な方法で
問題を解決した方がいいと、そう言っているわけだ。
ちょっとお前には言い方がきついかもしれないが、
俺はそういった理論はゲスの極みだと……」

「ちょ、ちょっと待ってくれコウ！」

「……何だ？」

「話は最後まで聞いてくれ。
俺だって暴力的な解決がいいとは思わない。
日本政府が弱腰外交だと揶揄（やゆ）されるのはなぜか、ちょっと考えてみてほしいんだ」

「そりゃ、政府の御偉いさんが張りぼての無能集団と化しているからだろ」

「ははは、辛辣（しんらつ）だな……

まあ、それもそうなんだけど、俺が考えるには、

徹底した平和主義が日本の憲法に明記されているからだと思うんだ」

「で？」

「で、日本外交では、何か事件があったとしても、

軍事力を背景にした外交ができない。

その代わり、何と言っているのかというと、

《そんなことをするなら話し合うぞ》と。

今のコウは、そんな政府の外交方針と変わらない、そんな風に俺は見える」

「間違ってはない。というかＥｘａｃｔｌｙ。正解。」

「俺が暴力的になったほうがいいというのは、

そんな弱腰だと、相手にナメられることもあるだろうと思っての話なんだ。

確かにコウの言うとおり、暴力的な解決はゲスの極みかもしれない。

でも、世の中そう出来た人間ばかりじゃない。

そういった人間に対処していくにあたって、暴力的な面をちらりとみせることで

平和的な解決方法がとれるんじゃないかってさ」

「ふむ、そういう考え方もありなのかもしれんな……」

俺はそこでジョーの理論に納得したわけなんだが、
今思い直してみると、ジョーが言っていたのは極端な話、
《たまには恐喝しろ》と言ってるんだよな……
ああ恐ろしい。
今思い返せば、議論していた内容は意外に難解な話だったと思う。

つんつん、と後ろから夏の短い袖を引っ張られた気がして俺は振り返る。
いつの間にか立ち止まって、考え込んでいたらしい。

零雨がどこかからショッピングカートを持ってきていた。

「……使えそうな道具を見つけた」

「お、気が利くな。
使い方は分かるか？」

「……分かる」

零雨がカートのグリップをしっかり握っていたので、
俺は零雨にカートを押してもらうことにした。

「それじゃ、とっとと買いもん終わらせるか」
俺が歩きだすと、【左隣】に零雨が並んだ。

「まずは、ごみ箱だな」
俺がリストを見ながらつぶやくと、
零雨は、「……ゴミ箱売り場はあっち」と、１８０。回れ【右】。
ショッピングカートが勢いよく振り回される。

「おわっ？！」

結果、俺は零雨の持っているショッピングカートという凶器の殴打が
腹部にモロヒット。

零雨のその華奢（きゃしゃ）な体のどこから
そんな油圧級パワーが出てくるのかは分からないが、
俺は６メートル程空中飛行したのち、頭から地面に墜落した。
不幸中の幸い、店の商品に激突せず、店の通路上を飛行したらしく、
がしゃん、という音は聞こえなかった。

このシーンの目撃者は、俺が自動車に跳ね飛ばされたように見えた
に違いない。

つーか、今の一撃のおかげで…俺立ち上がれん……

なぜか俺の心に時速１００キロ以上で手から射出され、
木製、または金属製のバットで渾身の力で打ち返される、
野球ボールに同情の念が湧いてきた。
かわいそうに、あいつら、そんな扱いされたあげく、
酷いときは池にはまって見捨てられることだってあるんだぜ。

俺が墜落現場で腹を抱えながら、痛みにもがいていると、零雨が寄
ってきた。

「……当たった」

ああ…当たったさ。
ショッピングカートが…変形しているのだから、
当たってないと…いうやつはいないだろう。
当たって…ないと思うやつ、いたら出てこい。

「……立って」
零雨は無表情で告げる。
俺の心配は…一切なしか、そうですか。

今分かった……この世界をまとめるシステムとやらは総じて…鬼畜だ。

「……立って」
零雨は繰り返し言う。
…無理だっつーの！
少しは俺のこと心配……できないんだよな、麗香と違うから。

俺が立ち上がれずにもがき続けてながら零雨を見上げると、
零雨はちょこんと首を傾げた。

「……立てない？」

モロに衝撃を受けて…何事もなかったかのように…立ち上がるのは…さすがに無理があるだろ。

「コウくん？コウくん！」
近くを偶然通り掛かった麗香が駆け寄ってくる。
麗香は俺と、変形したショッピングカートを手に持つ零雨を見て、状況を察知したらしい。
おお、助けがきた！

「零雨、時間を止めて！」
零雨が頷くと、店の中が急に静になった。
本当に時間が止まってるのかは分からないが、不思議な気分だ。
店の中はいつもＢＧＭが流れているが、それが聞こえなくなったからだろう。

「コウくん、ごめんね」
麗香は申し訳なさそうにして言う。
で、なぜ麗香が手を組んでパキパキ鳴らしてる？

ドッ！！
大きく振りかぶった麗香の右腕は勢いよく、頭に直撃、俺は意識を失った。

第2話－6　ハウス・クリーニング　特急列車【嵩文零雨】

次に俺が目覚めたのは、解散する前に座った、あのベンチの上だった。
気を失っている間に、俺は不覚にも三途の川を奇声を上げながら泳ぎまわる夢を見てしまったのだが、ここは現実だよな？。
足がちゃんとあるから、きっと現実に戻ってきたに違いない。そう信じよう。

見上げると、ショッピングカートを持ったまま、
直立不動で俺を見つめる零雨と目が合った。
俺は零雨がわざと俺を吹っ飛ばしたわけじゃないのは知っている。
吹っ飛ばした後の対応には不満が残るが、零雨だから仕方ない。
さっきの事は許してやろう。

「麗香はどこに行った？」

俺は麗香がいないことに気がつき、零雨聞くと一言。

「……グループに戻った」

「そうか」

不思議なことに、腹に響くようなあの鈍痛もなく、
麗香に相当な勢いで殴られたはずの頭は、コブすらできていない。

ちょっとタイム。
痛くないって、俺ホントは死んでるんじゃね？
もしそうならなぜ零雨がここにいるのか説明がつかねえから、多分

ここは現実。
そうじゃなかったとしても、どのみちこの世界で生きていかなければならない。

「今何時だ？」
俺が零雨に問うと、俺が何時か聞き終え、零雨がそれを理解した瞬間が、
午前１１時３分５６．８２６３１…［中略］…２３４５２秒だったという。

俺がストップをかけるまで、零雨は小数点以下、数字を吐き出すのを止めなかった。

ＱＲコードに続く零雨の無駄な妙技そのニ、超正確な時刻。

麗香も正確な時刻を言えるのだろうか？
旧システムの零雨が言えて、新システムの麗香が言えないはずはないだろう。

それはさておき、このベンチで解散したときは、確か１０時半頃だったと思うから、
俺が気絶して夢の中でヒャッハーしてた時間は大体２０分くらいか。

俺は立ち上がった。
零雨の持つカートの変形は、
何事もなかったかのように綺麗に元通りになっている。
他のカートとすりかえたかと思うほどだが、

カートには特徴的な傷があり、それがすりかえられたものではないと証明している。

俺はカートを覗く。が、そこには何も入っていない。

つまり俺達は２０分ぶんチカ達に遅れてるわけだ。

「このままだとチカ達を待たせることになる。
さっさと買い物しねえとチカに何されるかわかんねえ。ちょっと急ごう」

零雨はゆっくりとうなずき、購入リストとペンを貸してほしいと言った。

何をするつもりなのかは知らんが、俺は言われたとおりに貸す。

零雨は購入する商品に適当な数字を書いている。

「この店の商品配置から考えると……この順番に回る方が……効率がいい」

いつの間に調べたんだ？

辺りを見回すとなるほど、近くに店内の地図がある。

「それじゃ、その順番で回って行こうか」

俺達はベンチから再出発した。

その直後。
零雨の歩く速さに俺が走って追い掛けるという不思議な構図が出来上がっていた。
その速さは競歩の選手もおったまげるほどで、ほとんど俺は全力疾走に近かった。

零雨はリストに載っている一つ目の商品の売場、トイレ用品売場へと直行。

「零雨歩くの速すぎ！俺がついていけねえよ！」

俺の声に若干速度を落とした零雨だが、まだまだ速い。
零雨はラバーカップの陳列エリアに入ると、その速度を維持したまま、
数あるスッポンのなかから適当に手にとって、カートに突っ込む。

「おい、もうちょっと商品を確かめてから突っ込めよ！」

「コウの家のトイレの……タイプには、私が今……入れたタイプのものが最適」

零雨はそういってトイレ用品売場を通過。

言葉はちょいちょい詰まるくせして、動きだけはスムーズな奴だ。

特急列車【嵩文零雨】は、次の消臭・芳香剤売場駅も停車することはなく、
零雨が適当に商品を突っ込んで去っていく。
俺はバテバテでかろうじて追い掛ける。

エアコン用品売場駅、通過。

ごみ箱売場駅、通過。

箒売場駅、通過と、零雨の速度がスローダウンする気配はない。
誰かコイツを止めてくれ。

そう俺が願っているとはつゆしらず、
零雨は通路の狭い売場に入り込み、高速で歩き抜ける。
走り抜けるのではない。

十字路の交差点に差し掛かろうとしたとき、零雨がいきなり急停止、
零雨の学校指定の黒の制靴から金切り声が上がる。

「え、あ、ちょっ……！」

俺はあまりに急なイベントに対応できず、零雨に突っ込んでいく。
すまん、ぶつかる！！

ドッと零雨の背中に激突した俺。

「ぶつかってすまん」

俺が謝ると零雨は振り向いて言った。

「……構わない。むしろ私にぶつかって……正解」

ぶつかって正解？

俺が前を見ると、８０歳ぐらいのばあさんが、
俺達の目の前をよちよちと、愛嬌のある動きでゆっくり横断中。

俺が零雨にぶつからなければ、あのばあさんにぶつかってたわけか。

「もしコウがあの人と……衝突した場合、相手は……全治数ヶ月の大怪我を
　避けることは……できなかった」

「できればお前の持ってるその殺人カートで俺を吹っ飛ばしたときも、
　今みたいに直前で防いでくれたら良かったのだが」

俺はそっと悪態をつく。

「覚えた。この道具の……名前は『殺人カート』」

ちげーよ。
零雨に冗談は通じないのか。
まあ、麗香も理解力が乏しいと言ってたし、今のは俺の落ち度を認めざるを得ない。
電解コンデンサとかいうマニアックな部品の名前は知っていて、
ショッピングカートを知らないのはなぜだ？

「いや、コイツの名前は『ショッピングカート』、略して『カート』。
　今の『殺人カート』は忘れろ」
零雨は頷いた。
頷く返事が多いのは零雨の癖だろうか？
「それから、あの時……私は停止する……発想がなかった。
　停止することを教えたのは麗香」
ほう、俺が気を失っている間にそんなやりとりがあったのか。
麗香、サンクス。
つーことは、俺があの時カートでホームランされてなければ、
零雨はカウキャッチャーのついた蒸気機関車、さっきのばあさんは
線路の上に佇む牛、
という関係だったわけだ。分かるよな？
＞ｉ１５１４２―１３３５＜
もっとも、こんなに急いでるのは俺が零雨に吹っ飛ばされ、
麗香に殴られ気を失っていたからで、
あのばあさんと会っていたという保証はないが。
「……時間を潰した。
　少しペースを……上げる」
へ？
零雨はそういうとまた（とんでもないスピードで）歩きだす。

「ちょっと速過ぎるって、さっき言ったばっかじゃねーか！」
俺は零雨をまた追い掛ける。

「はぁ…はぁ……」

俺と零雨が集合・解散場所に指定された例のベンチに戻ると、
３人は既にそこにいた。

「コウ遅かったじゃない、どこで何してたの？」
チカが聞く。

「ああ……ちょっと……いろいろあってな……」
零雨に吹っ飛ばされて遅くなったとはとても言えない。

で、チカとジョーが手にしているソフトクリームは誰の金で買った？

「あっ、そうそう。
　コウたち帰ってくるのが遅いから、これ（ソフトクリーム）買っちゃったわよ♪」

やっぱり俺の金かよ。
確かソフトクリームはここでは一個３００円だから、二人で６００円か。
財布を握らせるんじゃなかった……
人の財布にたかる豚野郎に！

これはいくらなんでも俺だってキレる。
一丁怒鳴り込んでやらねえと……ただしあくまでもハト派だから理性が持つ限り暴力抜きでな。

「てめえら……俺が金欠なのを知ってて……ざけんなよ！
……俺を……殺す気だろ……帰れ。
……こっちは生活がかかってるんだよ！
てめえらの小遣いみたいに有り金全部自由に使えるんじゃねーんだぞ！」

久しぶりに怒鳴ったな。
チカとジョーは思ったよりも素直に反省してくれているようだ。
その反省が真意なのか、はたまた演技なのか、
そこまで俺は見極めることはできない。

だが、この辺にしておくのがいいだろう。

「……ごめん」
チカが謝った。

「勝手に使った分は返すから」

「いや、もう返さなくていい。
お前ら、本気で反省してそうだし」
俺が言うと、チカは意外そうな顔をする。

「零雨、今何時だ？分単位でいいから教えてくれ」

零雨は午前１１時４５分と答える。

「昼メシの時間だな。
チカ、お前料理できるか？」

俺が聞くとチカは、
「えっ、私が料理するの！？」
という。

「温室育ちのチカには難しいか？」

「そ…そんなことないわよ！私だって料理ぐらい……」

「そんじゃ、今日の昼メシよろしく」

チカに昼メシを作るように頼んだのは、３００円分の仕事をしてもらう為に他ならない。

え？３００円でその仕事は労働基準法違反だって？
今、俺の持っている１００円の価値は、
チカやジョーたちの金銭感覚で言うところの一万円だ。
そう考えると安いもんだろう？

俺は今度はジョーに目を向ける。
コイツには……そうだな、今日の買い物で買った荷物を運んでもらおう。
結構な重量があるから、罰にもってこいだ。

「ジョー、お前は今日買ったやつの荷物運びだ」

「うへぇっ！これ全部！？」

「なんだ、何か文句あるのか？」

「……」

「はい、お仕事決定」

こうして俺は、見事手ぶらで帰れることになった。

第2話－7　ハウス・クリーニング　大型ゴミ置き場

それから俺達は俺の家に戻った。

ただし、麗香だけはちょっと持ってきたいものがある、と言って家に帰っていったから、今俺の家には零雨、チカ、ジョーがいる訳だ。

「コウ、暑いからエアコンつけようぜ」

荷物運びの仕事を終えたジョーは、シャツをパタパタさせる。

「エアコンが調子悪いんだから、我慢しろ。
俺だってエアコンつけたいさ」

エアコンは買い物に行く前、俺が突然エアコンを分解しだした零雨の安全確保のために電源を切ってそのままだ。

零雨が室外機の電子基板から電解コンデンサを引きちぎっちまったから、

電源を入れることはすなわち、パンドラの箱を開けることを意味する。

電解コンデンサを交換すれば済む話なのだが、

いかんせんどこで手に入れたらいいのか分からない。

「零雨、例の部品はどこで売ってるか分かるか?」

俺が聞くと零雨は首を横に振った。

「あ～！こんなに暑いのにエアコン無しはきついわ！
コウ、扇風機はある？」

チカが欲しがったので、
俺は別の部屋から扇風機を引っ張り出してリビングに置いてやった。
ついでに俺は家のありとあらゆる窓を開けて、部屋の中の通気性を確保。

これで家の中に風が入ってくるようになったが、
元が熱風であるから冷却効果はイマイチだ。
ないよりあった方がいい、そんな感じだな。

「一応涼しくなったし、チカ、約束の昼飯ヨロシク」
俺が言うと、チカはハイハイ、といってせっせと首を振っている扇風機の前から立ち上がった。

「何作ればいいの？」

俺はこれといって食いたいものがないから、ジョーに聞いてみる。

「ジョー、お前は何が食いたい？」

「思い浮かばねえや」

と、いうことらしいので、チカの自由にさせることにする。

「得意料理でも何でもいいから、好きなように作ってくれ。
ああ、カップラーメンは無しで。俺の非常食だから」

「そう、それじゃあ冷蔵庫の中のもの、勝手に使わせてもらうわよ」

「ああ、勝手に使ってくれ」

俺はソファに腰を下ろして、テレビリモコンの電源ボタンを押す。

あれ、テレビつかねえ。

あー、そういえばプラグ引っこ抜いたんだったな。

俺はテレビのプラグをコンセントに差し込む。

その時、ジョーが言った。

「コウ、前々から言おうと思ってたんだけどさ、
家の所々にパンパンのゴミ袋があるじゃん？あれ何？」

「ああ、あれ捨てようと思ってくくってそのままになってるやつか。
捨てにいかねえとな」

ちっ、サボろうとしてるのがばれたか……

俺は零雨に目を向ける。

ジョーは荷物運びでへたってるから、

ゴミ捨てを手伝ってもらうのは零雨がいいだろう。

「零雨、悪いが今からゴミ捨てに行こうと思うんだが、手伝ってくれねえか？」

零雨はうなずいた。

それから俺と零雨は家の中で宝探しを始めた。

お宝はもちろんゴミ袋。
やるならもっとマシな宝探しがしたい。

零雨は（ゴミ袋を放置した張本人の）俺があっちこっち動き回っているのとは対照的に、
まるで答えを知っているかのように宝を探し当てる。

そのおかげで、ゴミ袋は思ったよりも早く集まったんだが、零雨のミステリー能力に俺はなぜか若干の恐怖を覚えた。

「次は零雨、ゴミをマンション一階のゴミ捨て場に捨てに行くから、
ゴミ袋を持ってついてきてくれ」

ゴミ袋の数は合わせて7つ。
面倒だから、もう一回で持って行ってしまおう。

俺は袋を4つ、右左均等に持つ。
零雨は残りの3つを持つ。

「俺らちょっとゴミ捨ててくるからな」
ジョーに言い残して俺と零雨は家を出た。

エレベーターに乗り、途中で乗り合わせた家族御一行に嫌な顔をされながら、一階に向かう。
嫌な顔をされる理由は単純明快、両手に持ってる、若干の不健全な芳香を伴うブツだ。

一階に着くと、御一行様は足早に出て行く。
俺と零雨も続いて出て、ゴミ捨て場へ。

ゴミ捨て場には、他の住民が出したゴミが山を成している。
いろんなニオイがＲＥＭＩＸ（リミックス）され、
俺達のゴミ袋の不健全な芳香どころではない、強烈な悪臭が鼻につく。
このニオイにはどうしても慣れることができない。

俺は４つ、そのゴミ袋の山のてっぺんめがけて、袋を放る。

「零雨、ゴミ袋」

零雨から受け取ったゴミ袋も、間違いなくてっぺんめがけて投げる。

「零雨、ありがとさん。
部屋に戻ろう」

俺は言うが、零雨は大型ゴミ置場の方へと歩きだす。

「部屋はそっちじゃないぞ」

俺がそういっても足を止めず、大型ゴミ置場の中に入っていく。

「どうしたんだ、零雨？」

大型ゴミ置き場を入ってすぐのところで立ち止まっている零雨の隣に駆け寄る。
零雨はさらに奥へ進む。

「……これらの物品の……所有者は誰？」

突然零雨が聞いてきた。

「いや、捨てていったものだから、誰が持ってるとかそういうのは……」

俺が解答に困りそういうと、零雨は一台の空気清浄機を引っ張り出してきた。

デザインも新しく、新品同様、まだ使えそうだ。

「あいにく、空気清浄機はもう家にあるんだが」

「……これは空気清浄機として使えない」

零雨は言う。

「……でも」

零雨は空気清浄機を立たせ、近くにあった古くて重そうなオーブンレンジを手に持ち、

高々と持ち上げる。

さすが、俺をカートで吹っ飛ばしただけある。

そして空気清浄機の真上からハンマーのように思いきり叩きつける。

バコン、という音と共に空気清浄機のカバーが割れて外れた。

「……部品としては使える」

零雨が手にしているオーブンレンジも、ガラスにヒビが入ってしま

ったが、
そんなのはお構いなし。

ポイ、と（ゴミ捨て場の中で）投げすてて、
空気清浄機の電子基板を取り出す。

なるほど、そういうことか。

零雨は、空気清浄機から、エアコンで逝きかけていた電解コンデンサと
同じものをみつけ、ブチッと引きちぎった。

「これはコウのエアコンで……故障しかけていた電解コンデンサと……
　全く同じもの。
　新しい部品だから、交換に……適している」

ははは、零雨が俺のエアコンを分解した時、汎用性の高い部品だと言っていたが、
まさかこんなところにあるとは思わなかった。

「ありがとな。
　しかし残念ながら俺の家にはそれを取り付けるはんだごてがないんだ」

零雨はそれを聞くと、おもむろに携帯電話を取り出した。
零雨の髪と同じ透き通る白色の携帯電話だ。
前に行った麗香の家のテレビと同様、型番もメーカーの名前もない、
ミステリアス携帯である。

零雨は早打ちで携帯の操作をする。
早打ち、俺もできるようになりたい……

零雨は携帯を閉じて元にしまう。
携帯を取り出してからここまでの時間はたったの数秒間であるから、
恐らく早打ちの中でも神の領域に分類されるだろう。

「麗香にはんだごてを……持ってくるようメールした」

「それはご親切にどうも」

俺はちょっと嫌みっぽく聞こえてしまったかなと深く反省をする。

「部屋に戻ろうか」

俺は零雨に呼びかけると、零雨はうなずいた。
やっぱり零雨はうなずくのが癖みたいだな。

俺の左隣りに零雨が並んで歩く。

「ところで」

俺は一つ聞いてみる。

「あんな沢山のゴミの中から、
どうしてあの空気清浄機に同じ部品が使われてるって分かったんだ?
分解してひとつひとつ調べたなら納得がいくが、そうじゃなかっただろ?」

零雨は俺の顔をじっとみて答えた。

「……私だから」

第2話－8　ハウス・クリーニング　謎の植物ヒャクラミソウ

俺と零雨が家に戻ると、なんとジョーが部屋の中を掃除しているではないか。

「あ、戻ってきた」

ジョーは部屋に床に散らかったゴミを、今日買った水色のごみ箱の中に放り込む作業を中断して言った。

「お前が進んで掃除をするなんて意外だな」

「本来は俺達はコウの家に遊びに行きたくて声をかけたんだ。
これが早く終われば、遊べるだろ？」

俺の脳内の来客リストの備考欄には《掃除をしにくる》とは書いてあるが、
《遊びにくる》という単語はどこにも書かれていない。
だが流れ的には時間が余ったらそうなるだろうな。
まあ、いっか。

俺も掃除に参加することにする。
俺は古い掃除機についている、ゴミの入っている紙パックを取り出し、
新しい紙パックを装着。

ジョーがゴミ拾いをしてくれた床に仕上げの要領で掃除機をかける。

２０年以上前の製品だから、重くて持ち運びが不便だ。
その割には非力な吸引力の割には音がクソでかい。

この掃除機には飛行機のジェットエンジンが実は搭載されてるんじゃね、
と思うほどうるさい。

ジェットエンジンの吸引力は非常に強力で、
アイドリング状態のエンジンの前に人が立つと簡単に吸い込まれるらしい。

もっとも、ジェットエンジンは石油駆動だからありえないが、
掃除機に搭載されていたら、吸引力は格段と上がると思う。
ジェットの高温の排熱で家が焼けそうな気がするが。
というか、掃除機本体が推力でどっか飛び去っていきそうだな。

ふと、汗だくになりながら料理しているチカの姿が目に入った。
火を使ってるから暑いんだよな。

誰もいない空間に向けて延々と空気を飛ばしつづける扇風機をチカに向ける。
俺も鬼じゃないんでな。これで幾分かはましになるだろ。

チカのパーマがかった髪がふわりと揺れる。

「ああ、ありがとう」
俺をちらりと見てチカは言った。

しばらくすると、インターホンが鳴った。
麗香だ。
俺が玄関に出て応対すると、麗香は大きなマイバッグを持ってきていた。
「コウの家のベランダがなんか寂しいなと思って、持ってきたの」
家に上がった麗香はリビングでそのバッグを床に置き、
じゃーん、と言って中身を取り出した。
「いや、俺そういうの苦手だから」
麗香は二つの小さな植木鉢、袋に入った腐葉土、何かの種を取り出した。
「え、嫌いだったの？」
「いや、嫌いじゃないんだ。ただ、毎日世話するのが苦手でな。
今まで育ててきた植物は、実を結ぶ事なく召されていったから」
麗香は無邪気に笑った。
「ふふふ、安心して。世話が要らないやつだから」
「一般に世話が要らないと言われているサボテンすら枯らしたんだ。
宇宙空間で何もなくてもひとりでに成長するようなタフな奴じゃないと、
俺の家では生きていけない」
麗香が目を見開いて聞く。

「ヒャクラミソウのこと、何で知ってるの？」

「なんじゃ、そのヒャクラミソウっていうのは」

俺はもちろんのこと、何も知らない。

「宇宙空間で栄養も何もなしで勝手に成長する植物だよ？」

だよ？と聞かれてもな……

「人類はまだ地球外生命体がいるかどうかすら知らないんだ。
チカとジョーがいる前では話さない方がいい」

「じゃあ、コウくんは何も知らないのね？」

「知ってたら知ってたで大変だ。
というか、今知っちまったな、俺」

やべ、明日から俺、宇宙人とかの噂が多い、
あの連邦政府に命を狙われる羽目になるかもしれん。
もしかしたら、零雨と麗香の正体がどこからか漏れて、
既にどっかのビルから雇われのスナイパーが
俺を狙撃するタイミングを計ってたり……

あの時に学校に忘れ物をしてなければ、零雨に会うこともなかったし、
こうなることもなかっただろう。ちくしょう！

「『知っちまった』って、知ったら何か大変なことになるの？」

「そういうのに敏感な連邦政府があるんだよ。
表向きは世界のリーダー、裏では暗い噂がちらほらっつー政府がな」

麗香は俺の不安をとりさるような微笑をする。

「大丈夫。何かあったら私達が絶対に守りきってみせるから」

「はは、心強いな」

俺の胸に、麗香の言葉が響いた。

「あ、そうそう。
零雨ちゃん、頼まれてたはんだごて、用意したよ」

麗香は新品のはんだごてを持ってきていた。

それを聞いた零雨がどこからともなくやってきて、無言で受け取る。

「エアコンの修理は早い方がいいわね」

麗香は、さっき買い物に行った時に買った、エアコン洗浄スプレーを持ち出して、
大きめの椅子はない？と俺に聞く。
エアコンの掃除をやってくれるらしい。

俺は自室の椅子を一つ、エアコンの前に置いた。

「……コウ、延長コード」
はんだごてのコードが短く、室外機まで届かないらしい。
はんだごてを右手に持つ零雨がそう言った。

延長コードも調達し、エアコンの修理が始まった。
同時に掃除もするという、俺一人にはできない芸当だ。

俺も掃除機を持って、作業に戻る。

恥ずかしい話、俺は今、こいつらが掃除に来てくれて良かったかもしれない、
と思い始めている。
料理を（半強制だが）してくれているチカ、
せっせとゴミを集めているジョー、
エアコンを掃除してくれている麗香と、
修理をしてくれている零雨。

まさかこんなに身近に俺のことを思ってくれる友がいたとは。
俺も馬鹿だな。

「エアコンの掃除、終わったよ」
麗香が言うと同時に、零雨も修理が終わったという。

「サンキュ、これでエアコンが使えるな」
俺はエアコンの電源を入れた。

開けていた窓も閉めると、涼風と、キッチンからのいい匂いがが部

屋を漂いだす。

「手伝おうか？」

麗香はキッチンで一人奮闘中のチカに声をかける。

「うん、そうしてくれる？」

チカはそう答え、キッチンから出てきた。

「疲れたからちょっと休憩」

俺はそんなチカに対して文句は言わない。
もし料理しているのがジョーであったとしても俺はそうするはずだ。
理由なら腐るほどあるが、
まあ一番の理由は「疲れた状態で料理をしても、たいていロクなことにならない」と、俺が前に悟ったからだ。
まあ簡単にいうとあれだ、クルマでよく事故を起こした時にドライバーが言う、
疲れてて、前をしっかり見てなかったとかいう言い訳と同じだ。

俺はチカに代わって料理を始めた麗香の隣に立つ。
麗香は野菜を包丁で切っている。

「お前、料理できるのか？」

麗香は、ほっこり笑って、

「私は一人暮らしなのに、料理ができないんじゃ、おかしいでしょ

？」

「そう言われれば納得。
で、チカが何作ってたのか、分かるのか？
『何作ってて、ここまでできてるから』、とかそんな会話はなかったが」

「どこからどう見たって、チャーハン作ってたとしか、私には見えないんだけど」

キッチンの上には、確かにチャーハンを作ってるっぽい雰囲気はあった。

俺もチャーハンぐらいは余裕で作れるから言える。
チカの野菜の切り方からして、あいつは料理が下手だ。
何だよ、この大きさバラバラの切り方は。
こんな切り方、小学生でも出来る。
……まさかとは思うがチカ、お前は実は米を洗剤で洗うような奴じゃないよな？
これからも頑張って精進して、、料理の腕を上げるんだな。
カカア（鬼嫁）天下で、家事は夫任せ、料理の一つもできずに家の中でゴロゴロ。
そうなったら離婚の確率急上昇だ。
俺は別にそうなっても構わんのだが、
貧乏クジを引く男（仲間）がまた一人、余計に増えるのが絶えられん。

「あっ」

麗香が声を上げた。
そして俺の顔を見ると、眉をひそめて笑う。

「……指、切っちゃった」

麗香が左中指を見せる。

左中指の第一関節から先がきれいに切断されて……というのではなく、切り傷だ。

指から血がにじむ。

「痛いか？」

「……うん」

俺は食器棚から消毒液とバンソウコウを取り出す。

俺も料理してたまに怪我をするから、近くに置いているのだ。

「……ほらよ」

「ありがとう」

俺は麗香がバンソウコウを指に巻くのを興味津々で眺める。

「……どうしたの？」

それに気づいた麗香。

「いや、お前らも怪我するんだな～と思ってな」

「わ、私だって身体の強度や運動能力はコウくんたちと変わらない

んだから、
　怪我だってするし、骨折したりもするわよ！……病気にはならないけど」

「零雨もそうなのか？」
「もちろん！」

麗香は即答する。

「ありえない速さで歩いたり、ショッピングカートで俺を吹っ飛ばしてたりしてたが？」

「身体の構造上の限界は、あなたたちが思っている限界よりも上なのよ。
　多分零雨ちゃんはその限界ギリギリで動いてたんだと思う」

「なるほど、お前らが特殊なプログラムだから、俺てっきりだと無敵と思いこんでた」

「……私達が無敵、というのも間違いじゃないけど」

麗香は意味ありげに言うと、また野菜を切りはじめた。

俺もこんなところでずっとサボってたら、チカとジョーに怒られる。
部屋の掃除に戻ろう。

第2話－9　ハウス・クリーニング　★☆☆

あれから麗香とチカの二人で昼メシを作っていた。
「昼食、できたよ」
チカが汗を拭いながら言う。
今は午後1時半をまわったところだ。
昼メシの時間に間に合ったな。
チカは食器にチャーハンをよそい、
麗香はリビングに集まった俺達に一つ一つ手渡す。
「はい、これは麗香ちゃんの分ね」
チカが皿に盛る。
「え？私の？」
なぜか驚く麗香。
どうしてそこで驚く必要があるのか、俺には理由が分からん。
「当ったり前じゃないの！
　食べないつもりだったの？」
チカは麗香を見て言うと、
首をひねって「分からないなあ」といいたげな顔をして、
また食器にチャーハンを盛る。

「はい、零雨ちゃんの分」

麗香は自分の分と零雨の分を持って、キッチンから出てくる。

「いただきます」

俺が配った割り箸を皆が一斉に割る。

俺の家には、残念ながら5人で使うような大きなテーブルがない。
一人で食べるのに特化したテーブルならあるが。

一人暮らしで寂しい思いをしながら
毎日を送っている俺にとってみれば、そんなアットホームな装備は
いらない。
一人暮らしでアットホーム装備をつけたって、
ただ寂しくなるだけで、なんの利益もない。
かえって場所をとるし、どうせテーブルの上がまた散らかるだけさ。

今回は、そういうわけで皆地べたに座っている。

それはさておき、肝心のチャーハンの味なのだが……
特に言うことはない。うまくもないし、まずくもない。普通。

厳密に評価するなら、チャーハンの中でもむちゃくちゃうまいところと、
残念なところが混ざっている。

簡単にいうと、むちゃくちゃ旨くて★★★（星三つ）の部分と、

残念ながらあまりおいしくない☆☆☆（星なし）の部分とが合わさって、端数切り捨てで、★☆☆（星一つ）という感覚だ。

ちなみに俺は食通ではない。

しかし、俺の評価は一般論であると確信しているから、万人に納得してもらえると思っている。

現に、この中で食事中の人間（プロブラムも含め）は誰もうまいとは言っていない。

作った本人もそう思っているらしく、いい顔はしていない。

「それにしても、小一時間掃除しただけなのに、大分綺麗になったね」

チカがしみじみという。

「俺達三人（ジョー、俺、零雨）、けっこう頑張ったぜ！」

ジョーは誇らしげだ。

「中でも、零雨の整頓の速さは凄いぜ？もうどこに何があるのか分かってるみたいにテキパキ掃除するんだ。

もう家の中の半分は片付いてると思う。

ちょっと残念なのは、コウのベッドの下には何もなかったことだな」

「ジョー、そんなの期待してたの？

あんた、私だからまだ許せるけれど、

他の女の子の前でそれ言ったら絶対に引かれるからね！」

チカがジョーを叱った。
これはチカのあふれんばかりの母性本能のしわざか。
で、一応チカの言うところの《他の女の子》である麗香はというと、苦笑。
零雨はいつも通りの鉄仮面。頭をナナメに《?》信号を快調に発信中。
どうやら「ベッドの下」の意味を、理解していないようだ。
だからといって、俺が零雨に解説してやる気はさらさらないんだが。

「でも、これぐらいのペースなら、あと2時間ぐらいで終りそうね」

麗香がさりげなく話題を変え、ジョーを救出。

ジョーは、口にだしては言わないが、麗香に感謝している顔だ。多分。

「そうだな。
掃除が終わったら、用意周到な俺がトランプを持ってきたから、それでゲームだな。」

ジョーが言うが、ジョーが用意周到かは疑問符が浮かぶ。
クラスで一番よく忘れ物をするのはジョーだし。

ああ、そうか。
「楽しいイベントがあるときは」という前提がついてたんだな。悪い悪い。

ジョーが俺をじっと見つめる。

「コウ、今心の中で俺がよく学校で忘れ物をするくせに、こんな時

だけ用意周到だな、って悪態ついてたんじゃないのか？」

「よく分かったな。お前にしては上出来だ」

俺はニヤリ。

「……一言多いぞ」

「ところでだ」

俺は聞きたかったことを聞く。

「俺は住所も教えてないのに、何でお前らは俺の住所が分かったんだ？」

チカが答えた。

「金曜日の学校帰り、私達がさよならしたと思わせておいて、じつはみんなで協力してこっそり家まで尾行してたのよ。だって、コウがあんなに嫌がってたのに、いきなりいいよ、なんて言われたら、何か裏があると思うでしょ？で、私なりに考えてみたら、そういえばコウは住所教えてないってことに気がついたの。なるほど、住所が分からなかったらコウの家に行けないもんねー。だから、私が声をかけて、コウを尾行することにしたわけ」

俺の作戦、完全にばれてたんだな。

それよりも尾行されてるとは知らなかった。

４人で俺を尾行したならば、

誰か一人は音をだすとか、見つかるとかでしくじると思うのだが、

チームワーク完璧だな。

お前らなら、カーリング、ちょっと練習すれば地区大会で優勝できると思うぜ。
競技人口が少ないから、多分出場者はお前らだけになりそうだ。
戦わずして地区大会優勝……棚からぼたもちだ。

「お見事だな。
まあ結果的には来てもらって正解だったかな、と思ってる」

チカは胸を張って
「あたしに嘘は通用しないわよ」
と自慢げにいう。

「それにしても」

チカが零雨を眺める。

「零雨ちゃんの髪って本当に綺麗だよね～
綺麗なストレートだし、白い髪が雪みたい。
私やお年寄りの白髪とは違って、しなやかだもん
いいな～私、零雨ちゃんがうらやましい」

単純に褒めているのか、嫉妬しているのか、チカの真意は不明。

とりあえず、ここで零雨は何か返事をしなくてはいけないんだが、
ちゃんと理解できているか？

「……ありがとう」

できてたようだな。

しかし、このあと零雨が他人を褒めることに対する期待値は、どんな計算の間違え方をしたとしてもゼロ。

なぜかって？簡単な話だ。計算の最後に０倍するからさ。

もし褒められたのが麗香なら、そのあとを続けることができるだろう。

ここはひとつ、俺が零雨をフォローする必要がありそうだ。

「チカ、前も言ったがお前はそっちの天然のクルクルの髪型の方がストレートより断然似合ってる。

確かに手入れは男の俺からも見ても面倒臭そうだけどよ、それなりの価値があると思うぜ、俺は。

それにクルクルはチカの代名詞（トレードマーク）だ。

商標登録しても何の問題もないほど、似合ってる」

無難なフォローができたな。

「あのね、コウ。

私はイメチェンしてみたいわけ。イ、メ、チェ、ン。

クルクルがわたしの代名詞（トレードマーク）っていうのも気に入らないの！

私、今までに頭の後ろにワカメつけてるみたいになってるって言われたことがあるし、寝癖ついてるよって勘違いされたことだってあるの！

コウが本気で似合ってるって言ってるのかどうか分からないけれ

ど、
　私は1回がらりとイメチェンしてみたいの！」
この話を麗香はうんうん、と首を縦に振りながら聞いている。
それにしても、
チカの後ろ髪を見て《ワカメ》を連想したそいつの想像力と、口に出す度胸はすごいな。
勝手で申し訳ないが、尊敬させてもらおう。

ごちそうさま、と俺が言うのと同時に、チカも言った。
どうやら俺とチカが最後だったようだ。

食器の後片付けは俺がやることになった。
箸は割り箸だからごみ箱に捨てるだけでＯＫ。
俺は皿をただひたすら洗うだけでいいのだ。
幸いにして残した奴はおらず、きれいに完食してくれているおかげで、洗いやすい。
皿に乗せられずにフライパンの上に残ったチャーハンは、今日の俺の晩飯になりそうだ。

地味にリアルだろ？

俺以外の皆は、俺が皿洗いをしているのを見てか、食後すぐだというのに掃除をやりはじめた。
一致団結して役割分担している。主導は麗香。

いい友達を持ったもんだな～、俺も。

そう思いながら皿を洗う。

皿洗いも終わり、ふと俺はチカと麗香が冷蔵庫の食材をどれくらい消費したのか気になり、冷蔵庫のドアを開ける。

ハハハハハ……冷蔵庫の中の食材がキレイサッパリなくなっている。見事に空っぽだ。野菜室も、冷凍室もすっからかん。あるのは氷だけ。

……財布の中には、確か４５００円程残ってたから、今日、明日からの一週間分の食材を買いに行ったとして、使えるのは半分の２２５０円。

一週間は七日だから、２２５０円を7で割って、一日分は約３２１円。

一日に食事は3回だから、さらに3で割って、一食分は約１０７円。

冷蔵庫の前で、俺は嫌な汗が流れる。

やべえ、もやしを買いに行かねえと。

第2話－10　ハウス・クリーニング　八万円の価値

それから約1時間半、俺達は家の掃除を死ぬ気でやった。
おかげで俺の家は朝とは見違えるほどにきれいに、美しくなった。

ジョーもチカも俺も一心不乱に掃除をしたのだが、
なかでもやはり、零雨と麗香の貢献は絶大だった。

俺がトイレ掃除にかかった時間で、
零雨と麗香は部屋一つ分丸々の掃除を終わらせる、処理の速さ。
そして掃除のクオリティーも高かった。
ここにクリーンルーム環境必須の製品の生産ラインを置いても、
なんら問題はないと言い切れそうなほどだ。

清掃業者が集まって、ノウハウを共有しながら掃除したとしても、
このクオリティーには足元にも及ばないだろう。

2人が掃除をする際、部屋のドアの鍵を閉め、部屋の中を密室化（ブラックボックス）してから
掃除をしていることから、二人にチート使用の容疑が再び俺からかかっているが、
当の本人は口を揃えてそれを否定している。

なにはともあれ、ようやく掃除が終わったわけだ。
現在時刻は午後3時半。
遊ぶには十分な時間があるから、ジョーやチカが不満を言うことはないだろう。

俺達はリビングに集まった。

「ふう、やっと終わったね」

チカは額から垂れる汗を手で拭う。

ジョーはエアコンのリモコンを手にすると、設定温度を最低まで下げ、強風にする。

普通なら俺が文句をつけながらジョーからリモコンを取り上げ、設定をもっとゆるくするのだろうが、今回は好きにさせてやろう。

例の二人を除いては全員汗だくなのだ。

エアコンはピッと反応して風力を強めるが、

俺のエアコンの《強風》は弱風に毛が生えた程度のパワーしか出ない。

強風のワンランク上の《暴風》という選択も用意してほしい。

「コウくん、部屋を掃除してて気になってたんだけどさ、これは何？」

麗香が俺が先日購入した、段ボールに入ったままの新品のＣＤプレーヤーを持っている。

結構な重さのはずだが、麗香は発泡スチロールを持つように軽々と持っている。

「ＣＤプレーヤーか。

前々から欲しかったやつで、この間奮発して買ったんだよ。

そいつが今俺が金欠になってる元凶だ」

「へぇ〜、いくらぐらいしたの？」

と、麗香。

「確か４０，０００円ぐらい」

「高っ！！」　ｂｙジョー

「コウはホントにバカね。
ちゃんと生活に困らないように貯金してから買うのが定石でしょ？」

チカは俺に説教するつもりらしい。

「偶然見つけた一点限りの半額セールで４０，０００円のシロモノだ。
普通に買ったら８０，０００円する。
こんな絶好のチャンスを逃がす、それこそ大バカもんがどこにいるんだよ？」

俺の言っていることはすべて事実である。

「それなら分からないこともないけれど……
そんなに高いの、本当にいるの？」

チカが俺に疑問を投げ掛ける。

「普通のＣＤプレーヤーが壊れちまったし、それに満足できなくなったから買ったんだ。
この機種は巷（ちまた）では結構評判が良かったし、試聴してみて気に入っ

たからな。
　まだ後悔はしていない」
「『まだ後悔はしていない』って、後悔する予定なの？」
麗香がちょっとおかしな質問。
「まだそいつは箱から出してないから、いざ使ってみたら期待はずれの音だったとかで、後悔する可能性がある。それだけの話だ。
　……そうだな、この際箱から出しておくか」
俺は段ボールを開け、一番重い再生装置を持ち上げる。
これはマジで重い。
年寄りに持たせたら一発で腰が逝くね。
まあ、ホントに高いやつはスピーカーの方が断然重いんだが。
スピーカー一つ１００ｋｇ越えもあるらしい。
そこまでいくと、持ち運びには、クルマを持ち上げるあの赤いジャッキが要りそうだ。
段ボールの中には、大まかに、ＣＤを読み込んだり、再生・音量操作などをしたりする心臓部と、
２個のスピーカーの３つが入っている。
アルミの光沢のある心臓部をリビングにある収納ラックに納め、その両端にスピーカーを置く。
なかなかいい。
コンセントにプラグを差すと、本体の液晶パネルが光る。

「ねえ、ＣＤ入れてみようよ！」

おやおや、さっき説教しようとしたチカの早い変わり様。

「コウが８０，０００円の価値と認めた音を聴かせてくれ！」

俺は評論家じゃねえんだよ。

気に入ったから買っただけだ。

それにスピーカーにはな、エージングっつうのが必要なやつがあるんだ。

エージングっていっても、ただ音楽をかけっぱなしにするだけだが。

スポーツをするときにやるウォームアップのスピーカー版だ。

それをやると音が良くなるらしい。だが本当かはやってみねぇと分からん。

「んじゃ、テストも兼ねて、一枚流すか。
ＣＤは俺が勝手に選ばせてもらうぞ」

「そうだな……」

俺はきれいに整頓されたＣＤケースの中からどれを流そうかと悩む。

８０'ｓ、９０'ｓは古臭いと引かれそうで却下。名曲が多いんだがな～

ＪＡＺＺ?渋いと言われそうだな。

ＣＬＡＳＳＩＣ?硬モノと言われそうだ。

それともＰＯＰＳ？数が多くて困る。

こうして見てみると、意外と広いジャンルの音楽を聞いてたんだな。

お、これは何だ？

……デスメタル。光速で却下。音の良さが分かるとは思えん。

というか、こんなもの買った覚えも借りた覚えもない。もちろん聞いたこともない。

お前は一体どこから来た？

「コウ、迷ってるの？
私が決めようか？」

チカが俺の後ろに歩み寄って急かす。

ＰＯＰＳでいいか。一番新しい奴を流しときゃ、何も言われないだろう。

「ほら、チカ。
コイツを持って行け」

俺はＣＤをチカに渡すと、早速プレーヤーにＩＮ。

解像度の高い、きめ細やかな音が部屋に響く。

そうそう俺が聞きたかったのはこの音だ。

「うん、何か表現しにくいけど、しっかりした音が出てるね」

チカの感想。

ふにゃふにゃな音しか出ないでこんな値段で売ってたら、ぼったくりだろ。

「やっぱり迫力あるな。
俺もちょっと欲しくなってきた。
コウ、今度それ貸してよ」

ジョーは羨ましそうに見つめる。

「拒否する。」

これは自宅据え置き用のプレーヤーだ。
コンセントがない時は、裏に乾電池を入れて～というタイプじゃない。

「そうだ、トランプやろうぜ！」

ジョーは思い出したかのように言うと、
持ってきたショルダーバックからトランプを出す。

麗香がジョーの顔をじっと見る。

「私、トランプっていうゲーム？やったことないんだけど……」

麗香の一言でジョーとチカが耳を疑う。

「え？ちょっともう一回言って」

「私、トランプやったことがないの」

今度はジョーとチカのあごが外れる。

俺だけ納得。

「それ本当？」

「まあいいじゃねえか！

俺（ジョー）が教えてやるから、それで問題ないだろ？」

それから俺達はまず単純なババヌキから始めた。

第2話－11　ハウス・クリーニング　修羅場

「いいか、柄は違っててもいいから、同じ文字のカードが2枚揃ったら捨てるんだ。
このジョーカーっていうカードは1枚しかない。
このカードにはペアのもう一枚がないから捨てられない。
つまり最終的にはこれだけが残る。
これを最後まで持ってた人が負けだ」

現在、ジョーが二人にババヌキの遊び方をレクチャー中。
ジョーの説明はかなり親切で、サルはもちろん、
その阿保さ故に乱獲され、絶滅危惧種に指定されているアホウドリ
でも理解し、
すぐにでも遊び出すだろう。

俺とチカはそんな牧歌的な空気を漂わす三人の様子をじっと観察中。
正直言って暇だ。

「……と、まあ説明するとしたらこれぐらいだな。
もし何か言い忘れていることがあったら、俺が思いだしたときに
説明するよ」

「つまり、そのジョーカーを最後まで持ってなければいいのね？」
麗香は確認する。

「その通り！
それじゃあ、俺とお前ら（零雨と麗香）で一回練習してみよう
コブラ男とワカメババアを待たせるのは悪いから、
カードの枚数は半分に減らすから」

コブラ男？ああ、俺が口から毒を吐いてるから……ってやかましいわ！
と、突っ込んではいるがこれぐらいは俺の許容範囲内、まだまだグリーンゾーン。

「なるほど、私の髪がクルクルでワカメっぽいから、ワカメババア……」

問題なのは、チカの《ワカメババア》だ。

「あんた、私のコンプレックスをネタにするなんて、いい度胸してるじゃない。
……ちょっとこっち来な！！」

そう。俺が心配していたのはまさしくこれだ。
そして予想通り告げられる、チカ様からのありがたいありがたい私刑遂行のお言葉。

チカは最後の言葉を声を張り上げて言うと（近所迷惑になるからもっと控えろってんだ）、

零雨と麗香の方を向いて、「ちょっと待っててね」とニコリ。
トランプを持ったままのジョーのストレートな髪をわしづかみにして、
リビングの隣の広い部屋（リング）に引きずり込む。

ジョーが髪を引っ張られ、痛いと連呼するも、執行人の耳には届か

ない。
いや、受信拒否しているという方が正しいか。
そうだ、内なる俺に聞いておこう。
今日のジョーの安全祈願のための御百度参りはもう行ったよな？
え？まだ行ってない？
それは残念だ。
俺が部屋を覗くと、チカがジョーの胸倉を掴んで、処刑に取り掛かろうとしているところだった。
「おい、チカ！」
「あんたみたいに人の気持ちが分からないような奴には……コウ、どうしたの？」
ジョーは俺が止めに来たとでも思っているらしい。
安堵の表情を見せる。
「やるときは俺の家のもん壊すなよ。
あと、マンションだから結構近所に響く。騒音にも気をつけてくれ」
「オッケー♪」
チカは胸倉を掴んだまま右手でオッケーサイン。

「え？あ、おい、ちょ、コウ！止めに来たんじゃねえのか！？」

俺は言うべきことは言わせてもらったから、この部屋にはもう用はない。
ここに俺がいたら邪魔だろうから、部屋から出ることにする。

部屋を出て、ドアを閉める時、俺はジョーとチカに目を向ける。
チカは俺が出ていくのをじっと、ジョーは切実な目で見つめていた。

「では、ごゆっくり」

微笑んでゆっくりとドアを閉める俺。
やっぱり俺って性格悪い？

まあ、私刑といったって、死ぬわけじゃないから、大丈夫、問題ない。

その後、部屋から聞こえてきたのは、壮絶な修羅場ボイス。

チカは喧嘩とか強いからな～、
確かチカは末っ子で、上にそう歳の離れていない兄が二人いると前に本人から聞いた。

その兄達と共存していくには、喧嘩のような、実力行使のスキルが不可欠だったんだろう。

だからといって、高校生にもなって、何の躊躇もなく人をサンドバッグ代わりにするのは大人げない。

そうは思っていても、俺は俺、チカはチカだ。
まあチカが制裁を下すときは、大低相手が悪いことが多いし、
闇雲に人を殴る訳じゃないから大目に見れる。

「コウくん、チカちゃんっていっつもあんな感じなの？」

トランプ講座が中断され、何もすることがなくなった麗香。

「アイツは髪質のこと、かなり気にしてるからな」

「へえ～」

「俺も前に、悩んでるチカに、お前みたいな髪質にするために金出すやつだっているんだから、
贅沢な悩みだな、って言ったことがあるんだが、
見事にぶん殴られた。
今のジョーみたくあからさまにじゃないから、蹴り3発とアッパー2発で済んだがな」

「チカちゃん……」

「おそらく家で真っすぐにするためにいろんな方法試してるんじゃねえかな。
どんな方法にせよ、元が遺伝的な問題だから対症療法的なことしかできないが」

隣の部屋からの修羅場ミュージックが激しくなってきた。
チカの罵声やらジョーの謝る声（ヴォーカル相当）やら、

ドスンという物体の落下音（ベース相当）やら、
ビンタの音（その他楽器相当）やら……
今となっては、朝やってたチャンネル戦争がかわいく思える。
つーか、騒音に気をつけろって言ったばっかじゃねえかよ。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊１０分後＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ドアが開いた。

「次言ったら、今日の２５６倍だと覚悟しておきなさい！」

そこからまずチカが出てきた。
しかしなぜ２５６倍？
多分気にしたら負けだ。
（＝俺は敗者）

「はぁ～せいせいした」
チカは乱れたワカｍ……この上なく美しい髪を手ぐしで直す。

次に、腹を抱え、背を丸めたままのジョーが部屋から出てきた。
顔にビンタの跡はあるものの、アザや内出血は見当たらない。
チカの優しさが垣間見える。

「コウ、お前ひどいな……」

ジョーは俺を睨み付ける。
オレナニモヤッテマセンケド？

「何が？」

「俺がこうなるのを分かってて……」

「因果応報だろ。普通に」

俺が言うと、ジョーは黙った。

「チカちゃん、ちょっと来て」

麗香がニコニコしながらチカに手招きをしている。

「何？」

「夢、ちょっとだけ叶えてあげる。
コウくん、ちょっと部屋借りるね」

麗香は旧修羅場ルームにチカを連れ込み、開けないでねと一言、ドアを閉めた。
開けないでって、中で機織りでもやるのか？

「え？何？何？」

ドアからそんなチカの声が聞こえる。

「ジョー、今のうちに3人だけでババヌキしとこうぜ」

「ああ」

ジョーはカードを配る。

俺の手元には、17枚のカードが配られた。
ジョーカーは見当たらない。
ということは、ジョーか零雨のどっちかが持ってるわけだな。

配られたカードの中で、既に同じ数字が揃っているカードを場に捨てる。

その結果、俺は9枚残り、ジョーは10枚、零雨は12枚残った。
うまくいけば一抜け出来そうだ。

「じゃ、俺は最後でいいから、お前らどっちが先にカードを引くか決めてくれ」

俺は少し余裕をかまして言った。
その結果、ジョーは俺から、俺は零雨から、零雨はジョーからカードを引くことになった。
つまり、ジョーが最初に俺のカードを引き、次に零雨、最後に俺だ。

ジョーは俺からカードを一枚取ろうとするが、どれにするか迷っているようだ。

ちょっとここでジョーの心理解析《素人版》
迷いの原因は何か？
迷うということは、カードを取るという行動に対して、
何かしらのデメリット的な要素があるということになる。
考えられるのは二つ。

一つは、ジョー自身の持つカードと、同じ数字のカードが出ないという心配。
一つは、俺がババを持っているのではないか、という心配。

ゲームを始めたばかりだから、前者はまず有り得ないだろう。
持っているカードが多いということは、
カードを場に捨てることができる確率が高いということだ。

ということは、ジョーは俺がジョーカーを持っているのではないか、と考えているという線が濃厚だろう。
しかし俺はジョーカーを持っていない。
ジョーの今の行動が、俺を混乱させる為の作戦でないとすると、
このジョーの行動から得られる結果は大きい。

ジョーカーを持っているのは零雨だ。

ジョーは悩み抜き、俺から一枚ダイヤの5を引いて、
手持ちのもう一枚のカードと共に場に捨て、ため息を漏らす。

零雨は表情一つ変えずに、ジョーからカードを取って捨てる。
俺にも、地球上で心理学者を名乗るやつらにも、
彼女に対して心理戦を仕掛けることは絶対不可能だ。
彼女はゲームに勝とうが負けようが、何とも思わない。
パソコン相手に心理戦が効かないのと同じだ。

俺は何のためらいもなく零雨から一枚抜き取る。

零雨は、今11枚のカードを持っている。
ババを引く可能性は11分の1、低い。

と、思っていたが、ラッキーなことにいきなりババを引いちまった。
ここは何食わぬ顔をするのが一番だ。
俺はカードをシャッフルするようなことはせず、
適当にババをカードの間に差し込む。
シャッフルすると、ジョーに俺がババを持っていると感知される危険性があるからだ。

シャッフルをしないと、今俺が抜いたカードが手札のどこにあるかが分かる。
シャッフルをすると、カードがどこにあるかが分からない。
シャッフルをするという行為は、そのカードをどこにあるか分からなくすることだ。

カードをシャッフルする理由は何か？
引いたカードがババだからしかないだろう。

相手に情報をむやみやたらに与えてはならない。これは鉄則。
ゲームだろうが、外交だろうが、それは昔から変わらない。

今の政府や一部の企業は、それが分かってないようだが。
国民や顧客の情報を無くしたり、ばらまいてみたり、
もうドアホのドの文字も出ないような人間がいる。

隠し事はいけないから、もう忘れてしまおう、何でもオープンにしよう、
というその素晴らしい心意気は尊敬に値するが、
やっていいものと悪いものの区別がついてないのが残念だ。

まあ、該当者は一回集まって真剣にババヌキで一抜けに挑戦してみろ。
情報を制する者が社会を制する時代だということが単細胞でない限り分かるだろう。

逆に己の目先の利益のためだけに、
常識的に出さなきゃならん情報を、改ざんしたり隠蔽したりと、
脳ミソがトロットロに溶けて腐っちまった、たちの悪い連中もいる。

腐ったものは交換でもしない限り、元には戻らないから、
こいつらはスクラップにでもして捨てるしかない。

シビアに言わせてもらったが、というかこれくらいは社会の一般常識だ。

そうこういっているうちに、気がつけばいつの間にか8周目に突入している。
今現在一番優勢なのは、カードの枚数的には零雨だ。
順調にカードを減らして、残り5枚。
続いてジョー、最後は俺だ。

俺はまだババ持ったままだ。
ジョー、そろそろババ引いてくれ。

ジョーは見事にババ以外のカードを俺から抜き取っていく。
まるで俺の手札を見透かされているようだ。

もう何周目かは覚えていない。
零雨が一番に最後のカードを捨てた。

「……」
一番になっても、なんの反応もない零雨。
そのクールフェイスは、トランプというゲームの雰囲気と相成って、
一層ミステリー度をアップさせる。

「チッ、コウと一騎打ちか……」
ジョーは短く舌打ちをすると、俺から一枚、
普通のカードを引く。

零雨が一抜けしたため、俺はジョーからカードを引き、場に。

ジョーは俺からまたもや普通のカードを抜く。
どんだけ強運なんだよ。
この時点の俺のカードの残り枚数は3枚、ジョーは2枚。

俺の手に残ったのは、スペードのエースとダイヤのキングとジョーカー。

次は俺の番だ。
ハートのキングをジョーから抜いて、残り二枚。
ジョーは残り一枚。

次にジョーが俺の持っているスペードのエースをそのきらめく強運で抜いた場合、
俺の負けが確定する。

ジョーが手を延ばす。

ゆっくりとカードを掴む。
引き抜く。
ジョーの顔が落胆に変わる。

俺の手元に残ったカードは、スペードのエース、一枚。

ジョーカーはジョーが持っている。
最後の最後に運に見放されたか、ジョー。
ジョーは焦って、2枚のカードをシャッフル、カードを広げる。

ジョーの持つカードは、何かのエースと、ジョーカーの二枚。

次は俺。
戦況は変わった。俺が有利だ。
勝利のカードか、地獄のカードか……
地獄のカードを取れば、ゲームは続行、
どちらかが勝利のカードを選択するまで終わらない。

勝率は2分の1。
ここまでスリリングで結構楽しかったが、
このまま終わらせるのもあれだ。ちょっと遊んでやろう。
勝率を上げる作戦も兼ねてな。

俺はゆっくり手を延ばしてジョーのカードを掴む。

「いや、こっちか？」
俺はニヤリ。もう片方のカードを掴む。

「それともこっちか？」

また最初に掴んだカードを掴む。

「やっぱこっち？」

また掴むカードを変える。

「もう早くしてくれよ～」

と、ジョーが言った。

「フッ、その一言、待ってたぜ」

俺は言ってさっと掴むカードを変え、今度はそれを引き抜く。

取ったカードはハートのエース、作戦成功。

俺はカードを場に捨て、二番抜け。

ジョーは負けだ。

「どっちがババか教えてくれてありがとよ」

俺は盛大に笑った。

「へ？俺教えてねーけど？」

零雨も分かっていないようだから、種明かし。

今後はこの技は使えなくなるな。

「お前、引かれたら俺の負け（厳密には違うが）のカードを俺が掴んでる時、

早く引いてほしいと思ったんじゃねえか？」

「当然だろ」

「じゃあ、逆にお前が負けのカードを俺が掴んでるときは、どう思った？
間違っても『早く引いてほしい』とは思わねえだろ？」

「で？」

「お前は鈍いなー……
お前が引いてほしくないカードを俺が掴んでる時に、『早く引け』なんて絶対言わねえだろって話だ。
言うとしたら、俺が負け（厳密［略］）のカードを掴んでる時しかないだろ」

「あー、チクショウ！やられた！」
ジョーが唇を噛む。

「まあ、いいんじゃねえか？罰ゲームも何もないし」

ちょうどその時、旧修羅場ルームのドアが開いた。

第2話－12　ハウス・クリーニング　イメージチェンジ

俺は今、開いた口をどう塞ごうか、そのきっかけも方法も思い付かないでいる。

「どう？」

俺をこんなみっともない状態にさせたのは、そう言って自慢げにする神子上麗香だ。
この凶悪な単独犯は、部屋から最初に出てきたのだが、それはなんの問題もない。
問題はその後に出てきたチカだった。

そう。チカの髪がストレートになっている。
髪形が変わっただけだが、チカの印象がガラリと変わった。
本当にイメチェンしやがった。
しかもババ抜き1ゲームという短時間に、だ。
ただそれだけと言われればそれまでだが、こいつは俺の中でこの奇妙な二人組が現れる事件に次ぐ大事件である。
例えるなら、サッカーの国際試合をサッカーボールではなくゴルフボールでプレーするようになるぐらいの大事件だ。

「なんか、知らない間にストレートになってて、超ビックリなんだけど」

チカが突然の変化に対応できず、少しオロオロ。
そんななかから垣間見える、チカの喜びの顔は印象的だ。

ここで少し、ジョーのリアクションを観察することにしよう。

まず、ジョーの驚く顔が面白い。
尻餅をついたような状態で、目と鼻は大きく開き、俺と同様口が開いている。
それはまるで……

「ちょっとジョー！バケモノを見たような顔しないでよ！」

その表現がバチッとはまるね。《バケモノ》。

「わ、ワカメが……チカのワカメが湯がかれて伸びてる……」

誰か、牧田（ジョー）に座布団一枚やってやれ。
チカは溢れ出すうれしさをこらえながら、むっとした表情を強引につくると、
ジョーの頭をゴツン、とゲンコツで一発。

「うまいこと言ったつもりか！！」

チカは俺を見ると、
「コウもいい加減そのマヌケ面をどうにかしてよ」
と言う。

おっと、開いた口を塞ぐのを忘れていた。
元に戻しておく。すんなり元通り。

「チカちゃん、満足した？」

麗香の質問にチカは考え込む。

「う〜ん、どうやって真っすぐにしたのか、麗香が教えてくれたら、一番いいんだけど……」

「おいおい、どんな風にしてたか、そこは覚えておくべきだろ……」

俺はチカのマヌケっぷりに内心、頭を抱える。

お前なあ、どうやったら今あったことを見事にご放念できるのか、ちょっとやり方を教えてくれ。

「だって、麗香にちょっと座ってって言われて座ったら急に眠くなって、

起こされてふと気がついたら、もうこの状態だったのよ?」

ん? つまりこれは……

俺はその話を聞いて、麗香に目で信号を送る。

《お前、今度こそはチート使っただろ》

麗香は俺にだけ見えるよう、舌をちょこんと出した。

これは明らかに認めた。あとで現行犯逮捕だ。

「麗香、どうやったのか教えてくれる?」

チカは麗香の肩に両手を乗せ、その切実な願いをぶつける。

「あー…それは秘密」

「え〜、教えてくれたっていいじゃない」

「ごめん、言えないの」

「言えないことはないでしょ？ねえ？」

「あのね、ホントに秘密だから……」

やはりどうしても納得できないチカは、教えろ～と手で麗香の肩をブンブン揺すってやめない。
麗香は麗香であうあう～とか変な声だしてる。

あのー、俺いつまでこの二人のバカを鑑賞しなくちゃいけないんでしょうか？
この話題もそろそろお開きするには適している頃合いかと……

ジョーはこの二人の織り成す光景を、ほほえましそうに眺めている。
チカにボコボコに殴られ、最後のゲンコツでとうとう頭が逝ってしまったか？
さよなら、サンドバッグ1号（ジョー）。

「……」

零雨はというと、非の打ちどころのない、完璧なまでの蚊帳の外の雰囲気を周囲に醸し出している。
場に溜まって放置されていたトランプをパパッと集めて、
まるで熟練者のようにキレイにカードの順番を並べ、
ダイヤのエースからキングまで、スペードのエースからキングまで、ときっちり整頓している。

零雨、無表情で状況の把握が苦手なところは困りもんだが、
そういった縁の下の力持ちみたなところは俺は嫌いじゃないぜ？

零雨はA～Kまでの52枚のカードを整頓し終え、整頓されずに残った、
さっきババヌキに使ったジョーカーと、使われなかったジョーカーの2枚をどうしようかと考えているようだ。
特別なカードだからな、どこに入れるかは迷うのは当たり前だろう。
あるときはハズレのカードとして、またあるときは最強のカードとしてゲームに存在するそれは、他のカードとは一線を画したものである。

カードの最初に入れるか、それとも最後に入れるか。
それが零雨の迷っている内容のようだ。

零雨は俺の視線に気づき、ふと顔を上げた。
俺と零雨の視線が合い、俺は気まずくなってさっと視線をそらす。

すると零雨はすぐに作業に戻った。
零雨はジョーカーをどう処理するのかやっぱり気になり、俺は感づかれないように観察する。

しばらく考えていた零雨の頭上に、電球が一つ光った。
零雨は2枚のジョーカーの一枚を最初に、もう一枚のカードを最後に入れトランプの整頓を終える。

ほほう、彼女らしい考え方だな。

さて、視線は変わってチカと麗香。

「ねえ、一生のお願いだから、どうやったのか教えて」

チカはまだ麗香を揺すりつづける。
麗香は秘密といって譲らない。
そりゃそうだろ、どうやったか教えたら、大変なことになりかねないからな。
何だったっけ？
確か記憶によれば、世界が不必要に変化してしまうんだったかなんかだったな。

「なあ麗香。
　チカのその髪はいつぐらいまで持つんだ？」

チカと麗香の延々と続く問答も聞き飽きてきた。
そこで小型ではあるが、よっぽどのことがない限り壊れない、頑丈な俺の使い捨ての助け舟、通称《丸太号》が出航。
この舟は頑丈だが、あいにく動力は非搭載。
出航したら最後、潮の流れに流されるタイプの舟だ。

チカは揺する手をはたりと止めて、俺を見る。
見る方向が違うだろ。答えを知っているのは俺じゃなく麗香だ。

「……大体、２週間ぐらいかな」

「そんな……」

麗香が答えると、チカはがっくりと落ち込む。
どうやら、この髪型が半永久的に持つとでも考えていたらしい。

それを見た麗香は、慌ててチカに付け加える。

「あ、でも、完全に元通りになるのは一月ぐらいあるから、ね？
それに、ストレートでも元の髪型でも、どっちも似合ってるから。
チカちゃんが思ってるほど悩む問題じゃないって！」

「やっぱし結局は元に戻るんだよね……」

「……そうだ、いいこと教えてあげるよ！
髪の手入れがずっと楽になる私だけが知ってる、秘密の方法」

チカはその言葉にピクッと反応。
秘密とか誰にも言っちゃダメとか、そういうのにチカは弱い。
案の定、チカはこの話に食いついた。

「誰にも言っちゃダメだよ？あのね……」

麗香はチカに耳打ちをしながら話す。

「……それだけ？」
チカはキョトンとした顔をする。

「それだけ」

チカがキョトン顔のまま硬直した。

「ホントにそれだけ？」

麗香は頷く。

「帰ったらやってみて」

「やってみる」

「じゃあ、この話は終わり。トランプやろう」

麗香は言う。

「トランプはさっき零雨が片付けちまったんだが……」

俺が助け舟を出した代金として、余計な一言を添える。

「せっかくやってくれたのに、ごめんね」

チカは零雨に一言言うと、キレイに整頓されたカードの束を掴んで、バラバラにする。

「……」

零雨だからこれを黙って見ていられるのであって、カードを整頓したのがもし俺なら、一言ないし二言文句をつけただろう。

配られたカードは、俺は１０枚。他も一人当たり１０，１１枚程だ。

やるゲームはもちろん暗黙の了解でババヌキ。

大富豪とかその他諸々の別のゲームをするなら、その度に二人にルールからやり方まで、ゼロから教えなければならない。

ジョーの口がＶ字に曲がり、目が自慢げに俺を向いている。

ほほう、俺がジョーにやったあの技をやろうってわけだな？

フッ……そうはさせないぜ。
俺は右手を小さく上げる。

「俺にちょっと提案があるんだが、5人でババヌキとなると1周するのに時間かかる。
それにボーッとするやつとか出てくるとさらに時間がかかるよな？」

俺は上げた右腕をジョーの方に指差す。

「ああ、ジョーのことね」
チカが相槌。

「何で俺限定なんだよ！」（ジョー）
はい、無視。

「で、『順番が回ってきたら3秒以内にカードを取る』っつう特別ルールの導入を提案する。
制限時間以内にカードを取らなかったら、ジョーが1回パスという罰則付きでな」

「ちょっと、お前それは明らかにおかしいだろ！
もしチカが3秒経っても取らなかったら、俺が1回パスか？」（コウ）

「ああ、その通り」
流石ジョー、自分の立ち位置をわきまえてやがる。

「ちょっとそれはないぜ、コウ！」

「なんだ、パス1回じゃ物足りないか。そうかそうか。
それならパス3回でどうだ?」

「そうじゃないだろ!
『制限時間以内にカードを取らなかったら、その人が1回パス』が普通だろ」

「じゃあ、今ジョーが言った特別ルールでいいな?」

「そうしてくれ」

「そういうわけだ。どうだ?」

「それは名案ね。
あと、負けた人はやっぱり罰ゲームよねー……」

チカがジョーの案に賛成した。

よし、これでジョーはあの技モドキを使えなくなった。
というか自分で使えなくした。
ハハハハハ、愚かなやつだ。
たったの3秒では、あの技は使えない。時間が要るからな。
そのことに本人は気付いてないようだが、そんなことはどうでもいい。
それよりも今チカが言った罰ゲームシステム、そっちの方が重大だ。

「おい、罰ゲームって、何すんだよ?」

そんな《負けたら●●》のダルいシステムは、TVの中だけで十分だ。

「そうねぇ、小麦粉とか、パイとか、ドライアイスとか……」

「ねーよ」

「そうだよね、あるわけないもんね……
じゃあ、ゲーム毎に私が決める！」

あくまでも罰ゲームシステムは導入するつもりらしい。

「ま、いいんじゃね？」

ジョーの役に立たない一言で、なんと導入が決定してしまった。

第2話－13　ハウス・クリーニング　隠し事

「じゃあね～！また明日～」
「アディオース（ＡＤＩＯＳ）！」

夕方、セミがジーコ、ジーコと超サラウンドな鳴き声で大合唱している中、
チカとジョーが先に帰ると言い、
俺はマンションのロビーまで見送りに行くことになった。

見送りに行くのはあれだ、俺の中に存在する、《親しき仲にも礼儀あり》の精神からだ。
ジョーとチカは、俺の家に居残る零雨と麗香にそう挨拶する。
一つ言っておくと、ジョーが今言った《アディオス》、
これって再会が望めそうにない相手に対して言う言葉なんだな。

……アディオス、ジョー。

どこへ旅立つ気なのかは知らんが、まあ達者でな。

「?Ｅｈ?
Ｊｏｅ　ｓｅ　ｈａ　ｉｄｏ　ａ　ａｌｇｕｎａ　ｐａｒｔｅ?
Ｄｅｓｐｕｅｓ　ｄｅ　ｃｏｎｏｃｅｒ　ａ　Ｊｏｅ　ｙ　ｙｏ，
ｓｉｎ　ｇｒｕｍｏｓ，ｙ　ｌａｍｅｎｔｏ.」

突然麗香がジョーに不明な言語を話し出した。
口調、場の流れからするに、スペイン語か?

「は?なんつった?」

ジョーのまぶたは、現在麗香の顔を連写モードで撮影中。

「……スペイン語、だよ？」

麗香は日本語でジョーに疑問符を投げかける。

「俺、スペイン語わかんねえから」

「でも今、Ａｄｉｏｓって……」

はは～ん、分かった。

彼女はスペイン語で話されたから、スペイン語で返したと。

なるほどなるほど……めんどくさっ！

「じゃあ、アディオスって意味知ってる？」

「《さようなら》の意味だろ？」

「そうだけど、正しく言うなら《再会が絶望的な相手に言うあいさつのさようなら》って言う意味でね……」

「あ……アハハ、そ、そうだったのか

俺知らずに使ってた。

大丈夫、明日また学校で会えるから」

麗香はほほ笑んで

「言葉は適切な場面で適切なものを選んだほうがいいね」

と、さよならの意味を込めて、小さく手を振った。

「じゃあ」
俺、チカ、ジョーは家を出た。

エレベーターの中でジョーが、
「チカ、お前って本当に容赦ないよな……」
とおもむろに抗議を始めた。

「ほんっとにジョーって単純なんだから。
罰ゲーム一番当たってたのは断トツであんただよ？
あんたが負けなければいいだけの話じゃない、ねえコウ！」

「あ？ああ」

ゲームでの場面の内容は各個人の豊かな想像力にお任せする。
ジョーがボロ負けして、ドSモード全開のチカに、
あんなことやこんなことを強要させられ、
それを確実に遂行した事実だけは述べておこう。

中にはその罰ゲームがもし俺に当たってたら、
今すぐベランダから放物線を描いて……というレベルのものもあった。
さすがにジョーも拒否をしたが、チカの命令は絶対的だ。
ジョーは泣く泣く……

チカは、誰にも言わないと言っておきながら、
携帯のカメラでこっそり撮影していたことは、ジョーには秘密だ。

マンションの出入口に来たところで立ち止まったチカは、
俺をジィーっと睨みながら俺に急接近。
顔面と顔面の距離、０ｃｍ。

俺とチカの額が接点だ。

「……顔、事故ってるぞ」

俺は言った途端、やらかしたと思った。

「誰の顔が事故ってるのよ？」

最悪の勘違い。

俺は、額と額がぶつかってるぞ、という意味で言ったんだが、

チカは「お前の顔、ブッサイクだな」という意味で取られたようだ。

「俺はただ額同士が衝突してると言いたいだけだ」

主張が事実だとより理解されやすいよう、冷静に弁明しておく。

「そう……」

チカは大人しく俺から離れ、俺の肩をしっかり握った。

チカは一体何がしたかったんだ？

「……せっかく掃除したんだから、汚さないでよね？」

「分かってるさ、それぐらい」

「どうせあんたのことだから、『メンドクセ～』とか言って、
２日も経てば元通りになりそうで、心配なのよねー
だからさ、定期的に遊びに行くね」

いいえ、

最大限の謙譲をもって遠慮させていただく。

「新しい別荘が出来て良かった～
こういうのがあるといろんな場面で使えそうだしー」

チカはニカッと笑うと、俺から手を離し、ジョーを引き連れ去っていく。
それにしても、盛大に勘違いしていったな、アイツ。
俺の家は俺の家で、チカの別荘じゃないことぐらい分かるだろって話だ。

次来る時は、きちんと見えるよう、メガネの度を合わせてから来い。

チカは俺が背後から強烈な視線を連射していることに気づかぬまま、軽い足取りで俺から離れていく。

夏休み、俺の家が冷房の効いた会員制の娯楽施設になる可能性、確定的に１００％。
当たる確率は天気予報の比じゃない。

俺は家に戻った。

玄関に入って早々、リビングにいる麗香から呼び出し。

「コウくん、ちょっと貸してほしいものがあるんだけど」

「ちょっと待ってくれ……

……はいはい何だ？」

俺は玄関でパパッと靴を脱ぎ捨て、速足でリビングに入りながら応答。

リビングに入った。

周りを確認。

破壊、分解された俺の持ち物一なし

「コウくん」

麗香は俺愛用のパソコンを指差した。

デスクトップ型のパソコン、砕けた言い方をすれば、箱とディスプレーが分割されてるタイプのパソコンだ。

「あれちょっと貸して」

「何に使うんだよ？」

「ちょっとね」

ちょっと、ねえ……

そのちょっとが、どれぐらいのスケールなのか、俺には分からん。

「……壊すなよ、大事なやつなんだから」

俺は明日からの約１４日間をどうサバイバルするかという現実を、チカとジョーがいなくなって、少し寂しくなったリビングを見て思い出す。

ピンチにも程がある。
この人生最大にして難関の問題をどう切り抜けるか、この命題からは逃れられない。

親に臨時で送金してもらうか？
しかしそこは俺自身が撒いた種、尻拭いを親にしてもらう訳にはいかん。
最終手段だ。

電気、ガス、水道は親が払ってるから、これは使い放題。
俺が意識しなければならないのは不幸中の幸い、食料のみだ。

キッチンに入る。
そういえば、冷蔵庫は空だが、米の方はどうだ？

……在庫僅少、持って４日で売り切れ（ＳＯＬＤ　ＯＵＴ）。
まだ１０日分足りない。

カップラーメンはどうだ？
……ストックは５つ。
まだ足りない。

パンは昨日で使い切ったから、当然ない。

災害など緊急時用の持ち出しバッグには、３日分の食料。

んー、全部使い切ったとしても、６日分足りない。

俺は電卓を持ち出して、一人用のテーブルに座る。

一食分の値段を再計算するとだな……使えるのは最大２００円ぐらいか。
恐らくここから諸々の理由で引かれていくはずだ。
するとやはり一食１００円台のメニュー……
あああああっ！考えたくもねえ！

「はあ……」

俺はテーブルから逃げた。

麗香がパソコンをいじっているのが俺の視界に入った。
現実逃避には申し分ない材料だ。

「麗香、何をやってるんだ？」

俺は画面を覗く。
何かの設定画面のようだが、普段ネットしかしない俺は普通、全く興味がない。
だが今は違う。
麗香がいじってるとなると、何をしてるのか、俺自身も異様だと感じるほどに気になる。
気持ち、分かるよな？

「えっとね、このパソコンの性能とか、いろいろ見てるの」

「なぜ調べる必要がある？」

「それは……コウくんでも言えない」

俺は辺りを見回す。
あれ、零雨がいない。

「話は変わるが、零雨はどこに？」

「隣の部屋」
麗香は旧修羅場ルームを示す。

「零雨ちゃんが出てくるまで、危ないから開けないでね」

「……分かった」

どうやったら俺がチカとジョーを見送りに行った一瞬の間に、
普通の部屋を立入禁止の危険区域に変換できるのか、
今度２人に解説してもらおう。

俺が想像できるのは、
ガス爆発、粉塵爆発、水蒸気爆発……
爆発系しか思い浮かばない。
あと、硫化水素とか一酸化炭素、塩素、ダイオキシン等の有毒ガス。
これらが部屋の中を充満しているとしか、俺の愚劣な思考回路では
予想できない。
ましてや、今は生きるか死ぬかの問題に直面しているわけで、
悠長に部屋の中がどうなっているかなどと考えてる暇なぞ存在しない……はずなのだが、
なぜか俺はそんな疑問によりももっとどうでもいい、
時間つぶしに聞けばいいようなことが、気になっていた。

「ところで麗香」

「何？」

「今気になったんだが、
この世界って無数のコンピュータが連携して進んでるんだよな？」

「え？まあ、そうだけど」

「陳腐な質問で悪いが、
そのコンピュータの塊と、このパソコン、どれぐらいの性能の差がある？」

な？どうでもいいだろ？

ところが意外な反応が。
この質問を言った途端、麗香はギクッと背筋を伸ばして硬直。
「う〝……」

「……何か俺変な事言った？」

心配して尋ねると、麗香は目をぎゅっと閉じ、髪が乱れるぐらい大きく首を振る。

「そんなこと……そんなことは絶対にないよ！」

胸に一物（いちもつ）ありげに急に慌てたように答えるのが、
俺には理解できない。
ミステリアスな行動である。

「じゃあ、今のギクリは何？」

「あ……き、聞かないでっ！」

明らかに取り乱している麗香は、俺を左手で突き飛ばした。

「ちょ、ごっ！？」

コイツも油圧級パワーユニットを内蔵してやがる。

俺は昼と同様、スケールは小さいが、約3メートル後方へ「どすこぉい！！」と射出され、本棚に激突。

爆風で吹き飛ばされた感覚だ。

こいつ、華奢な身体の女力士だったのか。

ドスン！

つーか、怪力はこいつらのデフォかよ……

下の階の住人よ、チカの修羅場タイムといい、今の俺の騒音といい、ドスドスうるさくて申し訳ない。

作用・反作用の法則を完全無視してイスに相変わらずの姿勢で座っている麗香は、

ディスプレーと対面したまま、頭を抱えている。

「制御失敗、次こんなことがあったら……」

麗香が小さく呟き、がくっとうなだれる。

ふいに辺りが暗くなった。
頭上に何かが迫ってきている気がして、倒れ伏せたままで顔を上げた。

「おい、嘘だろ……？」

見なかったことにしておきたかった。
さっき衝突した影響で、超大型の本棚が俺めがけて突撃中。

俺の好きな漫画や小説、料理や節約のＨｏｗ Ｔｏ本から、親父から譲り受けた六法全書まで、
俺に知識を与えてくれる味方だった彼等は今、
俺という主人に対して大規模な一揆を完遂するべく、
こぞって傾いた本棚から飛び出してきた。

俺はつい3分前まで、大好きな漫画や小説で死ねるなら本望だと大口を叩いただろう。

ところが俺は今、本能的に気がついてしまった。

死んだら読めねーじゃん！

この場合の死因は何だ？圧死？確実に圧死だ！
やばい、でももう間に合わねえ！
視線を麗香にやると、頭を抱えた麗香と目が合った気がした。

気がつけば、時間がゆっくりと流れている気がする。
これが死ぬ間際のスローモーションってやつか……

ゴツン、と頭に何かが当たって、目の前に落ちた。
皮肉にも、最初に落ちてきた本が俺の一番大好きな漫画の第一巻だった。
反乱が始まったか……俺ももう長くなさそうだ。
影はどんどん濃くなる。

背中、足、腕、いろんな所に本が次々当たる。痛い。
最期にデカンと一番デカイもの（＝本棚）に当たって死ぬんだよな……

パソコンの前のイスに座っている麗香の足元が、落ちてきた本で見えなくなった時、麗香が言った。
「あっ！」
俺はもうこれ以上目を開けていられなかった。

……ドスン！！

結果、俺は本の下敷きになった。感覚で分かる。
だが、なぜか「最期の一撃」がなかなか来ない。
ていうか今、ドスンっていったよな？
俺が目を開けると、本で何も見えない。
本棚のミシッという音が頭上から。
「コウくん！」
すぐ近くで麗香の声がする。
……助かったっぽいな。
死ぬと思って散々喚いた揚句、助かる。
分かるよな？この複雑な気持ち。
麗香は本棚を戻し、大量の書物に埋もれた俺を発掘。
雪崩に遭った人が助かるときの気分を味わった気がした。
「コウくん大丈夫！？」
「……バカヤロー。
ぶっ飛ばすならしっかり着弾地点を考えろってんだ」
俺は本に顔を埋めたまま、今思い付いた鮮度抜群の皮肉を忘れないうちにぶつけておく。
麗香は俺の右腕を掴むと、本の山から俺を引きずり出す。

勝手に放置してりゃ、自分で起き上がってたところをわざわざ……つーか、仮にも女子高生に助け出されるって、どうよ？

引きずられた状態から、俺は今度は麗香に抱き枕にされた。

「ホントにごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

その言葉は真意なのかどうか疑わしいと思っていたところ、急に強く抱かれた。

俗にいう《抱擁》だ。

このシーンだけ切り抜いてみたら、完全なるラブシーンだ。

だが、麗香が俺の耳元で囁く言葉は、ラブシーンとは掛け離れたものだった。

第2話－14　ハウス・クリーニング　神と人間の違い

「頭蓋骨、脳、異常なし
脊髄、異常なし
肋骨、異常なし
胸骨、異常なし……」

「どこが悪いのか俺が一番分かってるから、いちいち口に出すな」

俺の損傷している部分は、
ひねくれた思考回路を持つ頭と、この勝手に人の悪口を言う舌だ。
自覚はあるが、直しはしない。

俺の簡易身体検査を完了させた麗香は最後にやさしく、ケガはなかったよ、という。
普通、それはこっちのセリフだ。

「さてと、これどうすっかな～」
なかなか離さない麗香の腕からちょっと強引に脱出した俺は、本棚とその下の床に目をやる。
散乱した数百冊以上の本、直すの面倒だ。
ここはいつもキレイにしてあったから、掃除の対象外だったのだ。
もし掃除していたら、コイツの整理で日が暮れただろう。

「私が戻すね」

麗香は一歩前に出ると、そのまま直立の姿勢を保つ。

本が一冊、宙に浮いた。
ここでポルターガイスト現象だと普通の人間なら騒ぎ立てるのであろうが、俺は動じない。
気がつけば、すべての本が宙に浮き、揃って静かに本棚に帰投開始。
１０秒程で、全部片付いた。
さすが、世界の管理人（ステージ・ゼロ）。
麗香は俺の目を見ていう。
「コウくん、ごめんね、思わず手が出ちゃった……」
「お前が『思わず』か？」
「私達はね、見かけは一つの総合型のプログラムなんだけど、中身は複数のプログラムの集合体。
感情プログラムの《コウくんを私から離すべき》という結論の方が、
感情を制御するプログラムの《協力者を攻撃してはいけない》という
命令よりずっと早く出ちゃって、突き飛ばしちゃった」
人間で言うところの感情と理性の関係に一番近いな。
そこまで似せてあるのか……
ていうかその前に、
「それって完全にお前の構造上の欠陥だよな？」

「欠陥……つまり持ってない
ということは、私が探していたものの一つは、
感情系のプログラムを制御するプログラム……？」

「ああ、そうかもな。
でも、そこは完璧に直さなくてもいいと俺は思うね」

「え……何で？」
意外そうな麗香。

「そりゃ、お前なら直せば神のような人格者にでもなれるだろう。
だがな、人間にゃどこか必ず抜けてるところがあるってもんだ。
そういうところがあるから、人間っぽく見えるわけさ」

「うふふふ……」

麗香が笑いをこらえている。

「ねえコウくん、言ってること矛盾してるよ」

「は？どこが？」

「《神》って、この世の創造主だったり、この世界を司る何かだったりする訳でしょ？
その仕事をしているのが《私と零雨ちゃん》。
神って、私達のことを指し示す言葉じゃない？」

「指摘されればそれもそうだが、

じゃあお前が《神》だって世間にバレたらどうなる？
それこそ世界が変わっちまう。
目的の何やらよく分からんデータ回収とやらができるどころの話じゃなくなってくる」

「……」

麗香は黙り込む。

「だからといって、その欠陥を放置しとけとは言わん。
今みたく吹っ飛ばされるような事があっては、俺の残機がいくらあったって足りん。
ましてや今の怪力の矛先がジョーやチカだったら、一発で人間でないとバレる。
昼の零雨だってそうだ。
ショッピングカートで6メートルも俺をぶっ飛ばしゃあ、な？
だが完全にその穴を埋めてしまうのもおすすめしないね」

「さじ加減、難しいわね……」

「俺オススメの改善案は、その怪力の制御だな。
怪力を使う必要があるとき以外はリミッターでも掛けておけば、まずバレないだろ」

「私にはもうリミッターがかかってるんだけど……」

「今のお前で？」

麗香はコクリ。

「今は5段階中のＬｅｖｅｌ2。
　1はシステム障害の時のみの非常用だから、2が標準」

標準にしては解放しすぎだ。
何を基準にした標準かと問いたい。

「ならＬｅｖｅｌ1．5あたりでも新しく作って、
　パソコンで一般人の常識的な身体能力でも調べてそのあたりにセットしときゃいいだろ」

「うん、ありがとう。
　更新は明日の午前0時にするね」

俺は壁の時計を見る。
もう6時半だ。

俺も麗香も隣の部屋の零雨も、一人暮らしだから、遅くまでいても問題はない。

「ところで麗香、話は戻るが、
　俺のパソコンと、世界を動かすコンピュータ群の性能、
　どれぐらい差があるもんなんだ？」

麗香はまたもやギクリ。

「お前さんが何を隠そうとしてるのかは知んねえけどよ、

ただ、俺はどれぐらいの差があるのか聞きたい。
無理なら答えなくてもいい。
また吹っ飛ばされるぐらいなら、聞かないほうがよっぽどマシだからな」

「本当に、それだけだったの……？」

「それだけだ」
俺は頷く。

「本当に、本当にそれだけ？
理由も……」

「ただ何となく思っただけだ。
特に理由はない」

俺が言いきると、麗香は腕を組んだ。

「う～ん、そうね……
コンピュータ群の処理能力を、今まで地球に生まれてきた知能のある生物全ての処理能力と、
人間が今まで作り出した頭脳回路、
つまりスーパーコンピュータからアイロンまでの処理能力の全てを合計したものとすると、
コウくんのパソコンは、指で物を数えるときに使う骨を構成する、ある一つの破骨細胞の中のミトコンドリアね」

「……意味が分からん」

俺のパソコンはなぜか既に計算機でなくなってるし。
ついでに聞いておこう。

「それじゃあ、俺は？」

「コウ……くんの処理能力と比べるの？」

「どれぐらいになる？」

「え～、ちょっと難しい……
えっと、コンピュータ群の処理能力を、今まで地球に生まれてきた知能のある生物全ての処理能力と、
人間が今まで作り出した頭脳回路、
つまりスーパーコンピュータからアイロンまでの処理能力の全てを合計して、
さらにそれを一万倍したものとすると、
コウくんは、指で物を数えるときに使う骨を構成する、
ある一つの破骨細胞の中のミトコンドリアの中にあるタンパク質を構成する、
とある元素の一電子の体積の8分の3倍分の体積を持つことが出来る『空間』かな？」

「……よくスラスラ言えたな」

結局比較すると、俺は物体ではなくなり、物体を構成する粒子の存在を確保する空間になった。

へこむぜ、俺。

「コンピュータはコンピュータでも、

コウくんのと、コンピュータ群とでは、構造が全く違うのよ。
世界を動かしているのは、一つが数百兆ｑｕｂｉｔの量子コンピュータの無数の集まり。
コウくんのパソコンは、ノイマン型コンピュータ。
だから落ち込むことはないわ」

「量子コンピュータとかノイマン型とか知らねえ……」

麗香は少し困惑した顔を見せたが、
すぐに元の表情に。

「コンピュータがどうとか、分からないなら忘れちゃってもいいよ。
じゃあ、ちょっとパソコンの続きをやるね」
麗香はまた、パソコンの前のイスに座った。

お言葉に甘えて忘れることにしよう。
学校のテストにも関係なさそうだしな。

しかし引っかかる。
俺の能力と俺のパソコンの能力の差を比較してみよう。
俺のパソコンを破骨細胞のミトコンドリア並とすると、
俺は電子一つの体積の８万分の３（＝８分の３÷１万）に相当する空間なんだろ？
体積比的に割が合わないような気がするのだが。

暫く画面を操作していた麗香だったが、ふと電源を落とした。

「あれ、もう使わないのか？」

麗香は首を振って答えた。
「ちょっと改造するさせて」と。

麗香がそう言ったのと同時に、旧修羅場ルームのドアが開き、
右手にはドライバー、摂氏数百度のホッカホカのハンダごて、
左手には何やら怪しい漆黒の電子基板と針金を抱えて、久しぶりに
零雨登場。

俺のＰＣ分解する気満々だな……

エアコンの次はパソコン、最終的に俺の醗酵しかけの脳味噌まで改
造するんじゃ？
俺の脳味噌には何が入ってるかって？

今は大根と味噌だ。今糠漬けに挑戦してる。
うまくいけば在庫僅少の白米のお供にするつもりで……

「絶対に壊さないから！」
冗談はさておき、麗香は俺に強く言った。

「そこまでいうなら……」
パソコンは賃貸に付属していたのではなく、完全に俺のものだ。
その点に関しては問題ない。
渋々了解した俺だが、破壊されてしまうのではないかという不安は
隠せない。

作業担当の零雨は、麗香から説明を受けるとまず、本体の箱を開け
た。

見ていてドキドキの作業だ。言っておくが、決してワクワクはしていない。

零雨は慣れた手つきで針金を切断し、電気回路にハンダごてで溶接していく。

初めはきれいな平面だった回路（マザーボードっていうらしい）が、どんどんハリネズミ化され、最終的に生け花に使う剣山の状態にトランスフォーム。

「俺に触わるとケガするぜ！」とでも言いそうな、物理的にえらく攻撃的なフォルムに生まれ変わったマザーボードに、例の謎の真っ黒な電子基板が針金を介して接続される。

ハンダごての先端から白い煙が線香のように上がる。

改造したはいいが、ちゃんと元の箱に入るのか？

そんな心配は無用、零雨はあっという間に元通りに直して終わり。

「パソコンにソフトを１つ、新しいのを追加したんだけど、絶対に消さないでね」

麗香は俺に絶対を強調して命じる。

「どうせネットしか使わないから安心しろ」

零雨は麗香から《破骨細胞のミトコンドリア並》とけなされた俺のパソコンの電源を入れた。

闇鍋ならぬ、闇改造された俺のＰＣは、普段と変わらない起動画面を見せる。

2分程で、背景画像未設定の青のデスクトップ画面とわずかなアイコンが現れ、起動は無事完了。

「動作に問題ないみたいね」

麗香はパソコンから少し離れたところから言い、
麗香のバッグから例の植木鉢と腐葉土、謎の種を再び持ち出した。

零雨はせっかく起動したパソコンを終了させる。
なんだ、使わねえのかよ。

「ねえコウくん、好きな色は何色？」

「ん？悪りい、もう一回言ってくれ」

俺はちょうど明日からの買い物に行かないとやばいな、と考えていたところで、
麗香の言葉を聞きそびれてしまった。

「『好きな色は何色？』って」

「青」

青ね、と言った麗香は、俺に例の謎の種を見せる。

「コウくん、本当はこれ、植物の種じゃないのよ。
これね、私達の仕事がどれだけ終えたかを示す植物型のプログラムなの」

「どうやって示すんだ、それを」

「植物ってさ、種→発芽→成長→蕾→花→種っていうのが1サイクルだよね？
それになぞらえて、示してくれるの。
種はできないから、最後は花で終わるけど。
今コウくんに聞いたのは、咲くときの花を何色にするか決めるためなの。
3つ種を撒くけど、コウくんの青の花が一つ、
零雨ちゃんの選んだ色の花が一つ、そして私の決めた花が一つ咲くのよ」

「そりゃ、当然世話いらずだな」

敢えて言うならコイツら二人（零雨＆amp;麗香）の世話をすればいいだけだ。
楽勝楽勝！

「麗香、もし俺が緑色が好きって言ったら、緑色の花が咲くのか？」

くだらん質問だが、聞いてみる。

「んふふ、うーんまあ、できない事もないけど……地味というか、なんていうか……」
苦笑いを浮かべた麗香は言葉を濁す。
つまり、俺が緑色を指定すれば、
茎や葉が緑色で、花まで緑色という迷彩植物（ステルスプラント）の一丁上がりだ。
そんなどーでもよいことに、この貴重な種のようなものを使う気はさらさらないが。

麗香はサッシを開けて、ベランダに出た。
俺は一つの植木鉢と、腐葉土が入っている袋、《種のようで種でない何か×３》を持ってベランダに出る。
紅い夕陽が俺の目の中に直接入り込み、思わず目を細める。

「どの辺りに置いた方がいいかな～」

麗香はちょっとワクワクしているようすで、ベランダをウロウロ。
俺の目には麗香はただの何の変哲もない、愛くるしさがちょっとばかり過積載の女子高生にしか見えず、
コイツが４０以上の世界を見守るプログラムだとは、
俺がコイツに吹っ飛ばされたにも関わらず、信じがたい。
部屋に残って床に正座し、何をするでもなくただじっと蝋人形の如く待機している零雨の方が、よっぽど現実味がある。

「やっぱりここしかないかなぁ……」

ウロウロしたが結局、サッシのすぐとなりに置くことに決めたようだ。
俺も異論なし。
直径２０センチほどの小さな植木鉢に土を投入、種を３つ三角状に埋めて完成。

「でーきたっ！」

麗香は育ってほしいけど、育ってほしくないな～と呟く。
まあ、零雨も麗香も、仕事が終わればこの世界から消えてしまう、期間限定の存在だ。
今日、一緒にトランプでエキサイトしていたチカとジョーは、いずれ二人が消えてしまう事実を知る術なぞ当然なく、ともすれば一生ものの友人が新しくできたとでも思っているのだろう。

まだついこの間初めて会ったばかりだというのに、別れることを考えてしまう俺。

植木鉢を優しく撫でながら、かすかに微笑む麗香の顔を見、それから外の景色を見た。

夕方だというのに蒸し暑さの勢いは衰えず、
近くにある、今年初めてお目にかかる入道雲が、朱に染まっている。
俺は汗を拭ったが、やはり麗香は汗をかいていない。

「そういやさ、」

俺は聞きたいことがあったことを思い出し、ここで聞いてみる事にした。

「ずっと気になっていたんだが、何でお前ら汗かかないんだ?」

「……いつから気付いてたの？」

「今朝、お前らがチカとジョーと一緒に来た時から」

「いや、だってほら、汗くさい人とあまり一緒にいたくないでしょ？
人に嫌われたら、特にコウくんに嫌われたら私達が困るもん」

通常の精神を持つ人間なら、とっくの昔にお前らのこと嫌ってるだろうよ。

勝手にエアコン分解しだしたり、ショッピングカートでいきなり人間野球を始めたり、

店内を高速移動して置き去りにしたり、左手でどすこいと張り手されてぶっ飛んで圧死しかけたり、パソコンを闇改造したりと、

一般的な精神の耐久値をぶっちぎりで突破するところを、俺が耐えているのは、

俺の真の堪忍袋が、強靭なカーボンなんたら繊維でできてるという理由と、

お前らの事情を知っている事を差し引いて考えてるからで、世界中、どこを探したって俺のような奴はいないさ。

「それともう一つ。
お前ら、私服はないのか？」

「……持ってない。
最低限必要なこれだけしか……」

麗香は今着ている自分の制服を引っ張る。

そりゃまずいな……

これから夏休みだっていうのに、制服で過ごしましたっていうのは

ないだろう。

俺はこの後、買い物に昼行ったスーパーに行かねばならん。
買い物に連れてって、俺が食料を買ってる間に
コイツらに私服のウィンドウショッピングでもさせるか。
そんで後日、自分らで買いに行けばいい。

俺がその旨を話すと、麗香は喜んでついて来ると言った。

「……行く」
零雨も行くようだ。

本日2回目の買い物、俺達はそれからすぐに出発した。

第2話－15　ハウス・クリーニング　裏世界の住人

さて、時間は飛んで買い物帰り。
時刻は午後8時を回ったところだ。
さっき携帯で確認した。

日は沈み、遠くの空はゆっくりと紫色に変わっているが、
俺達の頭上には、真っ黒い雲が覆っている。
恐らく、出発前に俺がベランダから見た入道雲が流されてきたのだろう。

辺りは暗く、帰り道につく住宅街の電灯が地面にスポットを当てている。

俺の両隣には、例の《人の形をしたなにか》が歩いている。

「結局、どんなものを買えばいいのか分からなかったぁ……」

隣で嘆いている麗香の肩には大型のマイバッグがかかっている。
中に大量のもやしと、その他少量の激安のセール品が入っているのは、
麗香の粋な計らいでマイバッグ持参の値引き（5円）を受けることができたという、
心温まる前途があった証拠であり、
さらにそれを自宅まで持って行ってくれる無料宅配サービスまで行ってくれているからだ。

「初めてだから仕方がない。
でも一歩目は踏み出したじゃねえか」

俺は麗香のマイバッグから突出している、数冊のファッション雑誌を指差す。
聞いて呆れるぜ？
食料品を買い終えて迎えに二階に上がったら、この二人、いるはずの衣料品コーナーの若者向けの売場にいなかったから、俺は慌てた。
で、探しに探し回ったところ、
紳士服売場でカッターシャツの特売を真剣な眼差しで吟味しているのを
１５分かけてやっとこさ見つけ出したってわけさ。
俺は思わず突っ込んじまった。「真夏の就活ですか？」ってな。
まあコイツら二人が真性のバカではなく、
にわか信じ難いと思うが超純粋、
言い換えたら天然記念物なもんだから、仕方がない。

俺はこの二人の珍行動を見た時、
高校が制服でよかったと、この時生まれて初めて思ったね。

私服だったら、そりゃもう、どんな服装で学校に来るか予測がつかない上、
もしかするとそもそも服という概念自体……ゲフンゲフン。
そういうわけだ。
で、俺が呆れ顔で、１０代～２０代向けのファッション雑誌をオススメしたと
そういういきさつだ。

どこでそんな金を手に入れたのかは知らんが、これらの雑誌は麗香の自腹だ。

「私、ちゃんと選べるかな……」
バッグから雑誌をスルッと取り出してページをパラパラめくる麗香。
俺を挟んで反対側、零雨はというと、
「……」
この通り、無表情で何の変化もない。

「さあな。選べるかどうかはお前次第さ。
心配なら、今度チカに連れていってもらえばいい。
あいつはダサ子じゃないからまあまあ使える」

「うん……」

麗香は力無さげに頷くと、真剣な表情で雑誌に目を向ける。

「おいおい、暗くなってきてんのにそんな真剣に読んでると、電柱に頭ぶつけっぞ？
それに最近は柄の悪い連中がこの辺をうろちょろしてるって噂もある」

隣の港区に縄張りを持つ、その筋（ヤ●ザ）の方達が、
チンピラのオマケ付きでこちらに進出してきているらしい。
港区は前から相当治安が悪く、それこそ拳銃だの麻薬だの賭博だのと、
やりたい放題で警察も手がつけられない状態で、
つい最近、やっとこさ構成員の一部摘発に成功したとか。
隣の俺達の住む町はその反対で、

近所に高級住宅街があることからも分かると思うが、結構治安がいい。
隣町の関係にありながら、よく治安が維持できたものだと、感心しながらも首を捻っていた俺だが、そんな時代も終わりつつあるようだ。

まあさすがに手榴弾の大量密輸が発覚したというニュースを聞いた時は、
いくら治安がいいといっても、不安がらずにはいられなかったが。

俺の勝手な推測では、やつらは高級住宅街を狙っていると踏む。
資金源不足か何かが理由だろう。

「うん……気をつけなくちゃね」

麗香はぱたりと雑誌を閉じ、バッグの中に入れようとしたその時だった。

「あっ！」

バサッ……

後方からバイクの音が聞こえ、俺達のすぐ近くを横切ったと同時に、麗香が雑誌を落とした。

「危ない運転ね」

麗香は愚痴をいいながらすぐに雑誌を拾い、バッグの中に

「……バッグが、ない」

「は？」

「今、私が持ってたバッグ！」

俺の隣の零雨が袖を引っ張って言う。

「……コウ、バイク。」

はあ、噂をすればなんとやら、バイクの運転手はノーヘルのチンピラ二人組じゃねーか。

生意気にも、２０メートル先で停車し、さっきまで麗香が持っていたバッグを掲げ、挑発してくる。

あん中には、雑誌数冊と俺の食料品……やべっ！

「おい、冷静になって聞け。
……追い掛けっぞ！」

無駄だと分かっていての悪あがき、もしかしたら転倒してくれるかもしれん。

「うん！」

「……コクリ」

麗香と零雨は同時に頷いた。

第2話－16　ハウス・クリーニング　バスタブからのスカイダイビング

俺は駆け出した。
それにつられて、零雨と麗香も走り出す。

それを見たチンピラ共は、高笑いを上げ、二人乗りバイクを発進させる。

予想通りだ。
だがしかし、俺はここから先はノープラン、誰かそんな俺に突っ込めるなら突っ込んでみろ。

なけなしの金で買った食料品をそう簡単に諦められる訳がない。
やるだけやってみるか、そういう気持ちで走っている。

全速力で走る俺の速さに同調して駆ける零雨と麗香。
そして、俺の駆ける速さで逃げて行くバイク。
ちくしょう、完全に遊ばれてる。

どうすりゃいい？

バイクといえど、原付ではなく、ワンランク上の最高速が3桁のいいバイクだ。
いくら移動が速い零雨と麗香でも、バイクの最高速に対応できるかと聞かれると、
人間の構造上の耐久限界がそこまで高いとは思えず、
追い付くのは難しいと判断せざるを得ない。

走り出してからどれぐらい経っただろうか、
俺は既にバテバテモードに突入してから久しい。
バイクの野郎は、更に調子に乗って俺のバテバテの速度に落としやがった。

くわぁーーー、コイツらうぜえ！

俺達は騎手に目の前にニンジン垂らされて、
それ食べたいが為に走るアホ馬そのものじゃねーか！

「コウくん止まって！」

かなり後ろから麗香の声が聞こえた。
止まりたくなかったが、いつまでもこれを続けてても、きりがない。
俺は走るのをやめた。

俺が走るのをやめたのを見たチンピラ共は、
ケラケラと耳障りな笑い声を辺りに響かせながら逃亡、
十字路の角を右に曲がって俺の視界から消えて行った。

人生終わった……

一週間分の食費の被害で運が良かったかもしれない。
俺の財布はズボンのポケットの中だ。

「コウくん、今から取り返しに行こうよ」
いつの間にか近くにいた麗香が俺の肩をポンと叩く。
「取り返すっつったって、もうバイクはどっかに行っちまったし、ここがどこかなのすら……」
俺はそこから先が言えなかった。
それは決して悔しくて言葉が詰まったからではない。
顔を上げると、俺のマンションが堂々と建っていたからだ。
「零雨ちゃん、どういうことか教えてあげて」
麗香は零雨に何かを説明させるようだ。
「……あの人間二人と、麗香のバッグに……マーカーをつけた」
「マーカー？」
「そう。
ここはステージ２５……私と麗香の管轄下にある。
いくら相手が人間の思考という……高度で複雑な不確定要素を……持っていたとしても、
私の管轄からは逃れることは……不可能。
よって、彼らをシュミレートしている……コードを追跡するのが最善……と判断。
現在も継続して……監視している。
現在、ここから西へ約……８９０メートル離れたところで、
同じく西方面に……向かって平均時速２３ｋｍ／ｈで……逃走中」

「……と、そういうことなの」

麗香は自慢げに胸を張る。

……チート全速力だな。

コイツらにしかできない超能力捜査だ。

「つーか、そんなことできるなら、もっと早く走らせるのをやめろよ。

俺はもうバテバテだ」

零雨が言う。

「……追跡プログラムの作成とデバッグ、組み込みに……時間がかかった。

成功するまでは……追跡しておくべきと判断した」

追跡っつっても、向こうからすりゃ、ただの《おふざけ》だったけどな。

「デバッグがどうたらこうたらは俺にはわからんが、

そんな案があるということは、もしかしたら取り返す方法とかもあんのか？」

俺はちょっと期待して言った。

「もちろんあるわ！

期待していいわよ！」

麗香が期待の発言。
これは頼もしい。

「でね、コウくん、あのバッグを取り返すのに、コウくんの家の適当な部屋を一つ貸してほしいの」

「なぜ？」

「むふふ……見てからのお楽しみ」

お楽しみとかいいから早く取り返そうぜ、と言いたかったが、麗香の回復スマイルを見ていると、言いづらくなってしまう。

「ま、まあ期待しとく」

俺はこんな返事しかできなかった。

俺の家に手ぶらで帰って来た俺達三人は、零雨と零雨は適当そうな部屋を探すといって、
昼間に友達総出で掃除した家の中をあちこち動き回る。

俺はこの間、どうしても落ち着いていられなかった。
リビングに入って、
この間買ったＣＤプレーヤーに一番のお気に入りのＣＤを入れ、
少々大きめの音量で鳴らしてソファーに腰掛け、
足で貧乏ゆすりをしながらそれを聴いていた。

落ち着け、俺。
まだ生活の希望が失われた訳ではない。
零雨と麗香がいるじゃないか。

心で言い聞かせても、そうそう落ち着くものではない。

気がつけば、俺はプレーヤーの音量をどんどん上げていた。
恐らく俺は音楽に現実逃避したかったのだろう。

「俺……らしくないな」

まったく、口は悪いわ、何もしないわ、俺はちっちぇ男だな。
今に始まったことじゃねえが。

そう思いながら呟き、プレーヤーの音量をもとの大きさまで下げる。
本当は下げたくなどなかったのだが……近所迷惑になるからな。

リビングを見渡す。
夕方まで、ここで5人、いや、零雨を除けば4人か、まあそんなことはどうでもいい。
大人数でバカ騒ぎしていた時を思い出す。
ジョーがあんなこと、こんなことをやらされていたが、あれは爆笑ものだった。
思い出すと、思わず口が変形してしまう。

「俺、一人で笑ってんのか……キモ」

キモい、塩をかけられたナメクジを触るときの感触ぐらいキモい。
俺が自分にツッコミを入れた瞬間、エンジンの如くアイドリングし

ていた足も大人しくなり、
音楽の力も、もう必要なくなった。

なに、お前は女子高生に俺のピンチを助けてもらおうとでも思ってるのか？

そんな問いが、ふと頭に浮かんだ。

そうだ、その通りだ。
だが、いくら彼女達の姿が女子高生であっても、それは真の姿ではない。
本当は、何百億年以上も世界を見つめてきた、姿を持たない管理人だ。
だから、姿が女子高生だとしても、二人には失礼だが、
中身は超人クソババア、美化するなら神だ。

そこまで思って、俺はまた突っ込んでしまった。

「《超人クソババア》って、どんだけセンスがイカレちまってんだよ、俺。
　中学校にでも戻りたいのか？」

ああ、地味に調子取り戻してきた気が。

そこに麗香が俺を呼びに来た。

「コウくん、準備ができたから、今から取り返しに行こう」

「……ふう、分かった。行くか」

俺は腹を決めてCDプレーヤーの電源を切り、立ち上がる。
玄関に行こうとすると、麗香が俺の腕を掴んだ。

「どうした？」

「そっちじゃなくて、こっち」

麗香に引っ張られるまま、俺がたどり着いたのは浴室。
浴室の入り口に、さっきまで履いていた俺の靴がちょこんと置いてある。

「なぜ俺の靴がここに？」

「浴室から出発するの」

はあ？
とうとうイカレちまったか？
麗香が浴室のドアをガラッと開けると、零雨が普通に立っていた。
制服姿のな。

外から見た感じ、どこも変わっていないように見えるのだが、
麗香に促されて靴を履き、浴室のバスタブを覗き込んで絶句。

「……おい、ちょっと聞くぞ。
　このバスタブの底面が抜けて、禍々しい（まがまがしい）程真っ暗闇の、
まるで世界の終焉を連想させるような奇妙な空間が奥に広がっているが、
　これは一体何なんだ？」

麗香はにこりと笑う。

「さっき二人組の動きが止まって、なんか……本拠地っていうの？」

「アジトか？」

「そうそうアジト。場所は分かったんだけど、結構距離あるのよね、直線で４キロぐらい。
で、そんなに時間もかけてられないから、ワープしちゃえっていうことでね……」

「で、どこにワープすんだ？
まさかアジトのど真ん中とか言わねえよな？」

「えっとね、確か零雨ちゃん、さっき詳細地図書いてたよね？
ちょっと貸してくれる？」

麗香は零雨から昼間にペットボトルの識別に使ったのと同じ付箋紙を受け取り、俺にそれを見せた。
付箋紙にはアジトの場所と、その周辺の略図が書いてある。
よくもまあこんな小さい紙にこんなに情報載っけたものだと感心するほどだ。

それによると、アジトから約５０メートル離れた大きな公園の隅に到着することになっている。

「目的地はそこ。
ワープは私、コウくん、零雨ちゃんの順番ね。
それから、安全のために先の人が入ってから３０秒待つことを忘れないで、特にコウくん」

安全のため……何か引っ掛かるが、そういうことなんだろう。

「じゃ、お先ね！」

麗香はバスタブに腰をかけてそう言うと、するりとバスタブの奥の穴へと落ちて行った。

恐ええ……暗闇の先が見えないから余計に恐い。
なんちゅうハードでホラーな仕様だコノヤロー。
こんなの、常人には飛び込む勇気なんぞあるわけねえ！

一寸先は闇という言葉があるが、正にそれだ。

「……３０秒経過」

零雨が飛び込みの許可を与えてくれたが、こんなの自殺する覚悟がねえと絶対無理だ。
高飛び込み１０メートル、そんなかわいいもんじゃない。
せめて、こんなダークな空間じゃなしに神々しい、白く光り輝く幻想的な空間にして欲しかったぜ。
それなら俺も躊躇なく飛び込めそうな気がする。

「……システムに負担がかかっている。
これ以上は……待てない」

バスタブを覗き込んだまま躊躇う俺の背中を、コイツはドン、と押しやがった。

「あっ！コラ押すな、押すな！」

俺は頭からバスタブに突っ込む形になりながらも、バスタブのふちを手でしっかりと掴んで落ちぬよう耐える。
どっかのバラエティー番組でよくあるシチュエーションだ。
言っとくが、チキンとかそういうレベルじゃねーからな！
この穴は本能的に無理だ！全く笑えねえ！

「……その要望には応えられない」

零雨はとどめの一押しを、俺に。

キュル、という音が俺の手から鳴り、それは静止摩擦力の限界を超えたことを俺に教えた。

「うわっ！」

頭からという見事なまでに最悪の体勢で穴に突入した俺は、痛みを覚悟した。
俺、今日何回こんな「うわっ」とか「ちょ、ごっ！！」みたいな奇声を上げればいいのだろうか？

穴の中はひんやりしていたが、突然湿り気のある、生暖かい風が俺の顔に当たった。

同時に目に入るのは公園の地面……ではなく、幻想的で美しい、ライトアップされた広大な街だった。

一体何がどうなってる？

まず現状整理だ。
俺は今、目的地であるはずの公園ではなく、なぜか夜景が見える位置にいる。
次に、俺は頭から穴に突っ込んだ。
そして、夜景のライトアップがどんどん大きくなってきている。
……考えたくはないが、俺って今、都市上空で自由落下（スカイダイビング）中？

真上を見上げると、公園らしきものがある。
確かにあの付箋紙上に印された地図の通りの位置にいるようだ。

零雨と麗香の鬼畜っぷりには度肝を抜かれるぜ。
地図上では目的地にいるが、実際はその遥か上空にいると。

パラシュートもない状態で突き落とされた俺が、生き延びられる訳がねえだろ。

遥か下から声がする。

「コウく～ん！遅いから心配しちゃったじゃな～い！」

麗香だ。

「俺を屍（しかばね）にするんじゃ意味ねーだろが、このバカヤロー！」

落下しながら会話という、シュールの極みといえるシチュエーションの中、

人生最期の言葉を麗香に投げかける。
まさか死に際の言葉が罵声になるとは思いもしなかったぜ。

地面までもう時間がない。
俺は目を閉じ、静かにその時を待つことにした。

いつの間にか、姿勢が頭からではなく、背中から落下する体勢になっているが、どうせ死ぬから関係ない。

そう思った途端、背中に押し返されるような力を感じた。
パスン、快い音が聞こえ、風が止んだ。

「私だってバカじゃないんだから、簡単にコウくんを死なせる訳無いでしょ？」

耳元で聞こえた麗香の声に、俺は目を開ける。
なんでまた逆お姫様抱っこされてんだ、俺は。
……なるほど、落ちてくる俺をお前がキャッチする予定だったわけか。

「分かったから、まずは下に下ろせ」

人差し指を地面に向けて指さす。

「……コウくんのバーカ」

麗香は俺を微笑む。

「バカはいいから早く下ろせ、恥ずかしい」

「誰もいないから……」

「誰かいるとかいないとか、そういう問題じゃねーよ。
この逆お姫様抱っこ自体が恥ずかしいと言ってる」

俺がふと見上げると、遥か上空から白い物体が落ちてくるのが見えた。
同時に麗香も顔を見上げる。

「あ、零雨ちゃんだ」

零雨は速度を下げる事なく、地上に接近している。

「おいおいおいおい……」

減速しろ減速！
零雨の予想落下地点には俺と麗香がいる。

麗香も気がついたようで、ひょいと俺を抱えたまま下がる。
早く降ろせってんだ麗香。

近づいてくるにつれ、零雨の様子が明らかになった。
乱回転の状態で落ちてくる。

「これやべーんじゃねえの？」

「ちょっとこれは……」

麗香も心配そうに見つめる。

結構大きな地響きがした。

俺が麗香にキャッチされた場所には、うつぶせの状態のまま、身体が半分、砂の地面にめりこんだ状態の零雨。

「……」

「……」

嫌な沈黙。

俺を突き落としてから今までの間、零雨に何があった？

「零雨ちゃん、なんで失敗なんか……」

麗香がポツリ。

「俺も謎だ」

俺がお姫様抱っこという他人には見せられない状況にあることさえも忘れ、

しばらく零雨を観察していると、腕が動いた。

両腕を地面に立て、白く長い髪を垂らしながらゆっくりと起き上がるその姿は、

和製ホラー映画のワンシーンのようで、気味が悪かった。

立ち上がり、首を2，3回左右にパキパキ鳴らしながら振ると、直立の体勢になる。
ワープ完了とでも言いたげだ。

「どうしたの？
珍しく失敗するなんて」

麗香が零雨に問いかけると、零雨は答えた。

「プログラムの終了に……時間がかかった」

「……それは後でも大丈夫でしょ？
何のためにワープの出口を1キロ上空にしたのか、分かってる？」

俺はなぜあんなところに出口を作ったのか、微塵も知らない。
注意される零雨と注意する麗香の会話は、まるで部下と上司を思わせるような雰囲気だ。

上司のような麗香は、部下のような零雨にゆっくりと話す。
俺の立ち位置？
麗香に抱えられている無様な俺は……聞かないでくれ。

奇跡的に零雨にケガはなく、一通り零雨を注意した麗香は、やっと俺を地面に下ろしてくれた。

地面の感触が懐かしい。

ちなみに、何でワープの出口が1キロ上空にあったか、零雨と麗香の会話を聞いて分かった。

答えは簡単、《ワープホールの存在がばれない様にするため》であった。
たったそれだけのために俺はスカイダイビングを堪能せねばならなかったのか……

「さ、早いとこバッグを取り返して、帰ろう」

麗香は俺にごめんねとも言った。

「まあな、あんな連中は社会のゴミみてえなもんだ。
俺はあんまりそういうやつらとは関わりたくねえし、さっさと帰って風呂に入りてえ」

俺は自分自身の、麗香に逆お姫様抱っこを長時間されるという、不可解なシチュエーションによって狂った調子を正すため、ちょっときつく言ったのだが、
それが麗香のスイッチを押してしまったようだ。

「社会のゴミ……」

麗香は何かを思い出すように言う。

「ゴミはきちんと《掃除》して片付けないとね♪」

麗香の声が急に明るくなった。

「麗香、お、お前今何をしようと言ったのか理解できてんのか？」

麗香は頷いた。

「彼らに罰を与えて矯正させるんでしょ？」

ま、まあ正しいんだろうけど、ニュアンスが微妙だな。
というか、恐ろしいこと言いやがる……
本気で戦うつもりなのか？だとしたらそれまずいだろ、どう考えたってよ。
ここは素直にどうにかしてバッグを取り返して帰る、それが賢明だと俺は考えるね。
完璧なハト派（自称）を名乗る俺にとっては、
暴力による解決なんてゲスの極みであると確信しているし、
チカみたいなかわいいレベルならまだしも、
そういった本気の戦いに関わることは本能的に嫌う。

「おい麗香、俺はやつらとやりあうのはおすすめしない。つーかやめろ。マジで。
第一、俺達の目的はバッグを取り返すことで、やり合いをしに来たんじゃないだろ。
やりあいをするのはやむを得ずの最終手段だ。いいな？」

俺が麗香を牽制すると、彼女はそうだねと言った。
ここで零雨が口を開く。

「……『やむを得ない』と判定する……基準は何？」

「物理的に攻撃されそうになった時とか、俺達のうち誰かが向こうに捕まったとか、そういう状態になった時」

零雨はそれ以上何も聞かなかった。

「じゃあ、出〜撃！」

麗香は声を張り上げる。

「夜中に騒ぐな、近所の住民に迷惑だろ」

俺達は公園を出て、オレンジ色のナトリウムランプが地面を照らす、
片側一車線の道に出て、
零雨と麗香が付けたという、《マーカー》に向かって歩きだす。

第2話－17　ハウス・クリーニング　チンピラ無双

「……マーカーをつけられた……人物はこの建物の中にいる」

公園から歩いて1分、廃墟になった5階建ての建物の前で零雨は立ち止まる。

建物の前には、10台以上のバイクが駐輪してあり、どれもよく手入れされている。

廃墟を見上げると窓ガラスはなく、打ちっぱなしのコンクリートの壁に、

錆びた鉄筋から出た茶色いエキスが染み付いていて、寂しい雰囲気が漂っている。

夏の夜中に廃墟の建物の中に潜入……ハハハ、肝試しそのまんまだな。

唯一違うのは、中に生きた人間がいるということだ。少なくとも11人以上。

麗香は不安そうな顔を俺に見せ、

「やっぱり、コウくんは危ないから公園で待ってて」

と言う。

「心配してくれる気持ちは分かるが、

なら、なぜ俺はわざわざスカイダイビングしてここに来たんだ?」

「……ごめんね」

麗香はまた謝る。

「何かあったら、コウくんの携帯電話に連絡するから」

「そんなもの、中で没収されたら終わりだぞ？」

「大丈夫、携帯がなくても、連絡しようと思えばできるから」

携帯がなくても……チートか？チートだよな？
まさか緑の公衆電話に１０円玉積んで連絡するわけじゃあるまいし。

「それは嘘じゃないよな？」

「私が今までに嘘ついたことある？」

この質問は、俺はどうかと思う。
まだ会ってから日にちも経ってない。

「……分かった、けどよ、あまり相手を怒らせんなよ？
そうなったらたまったもんじゃねえ」

麗香は大きく縦に首を振る。

「うん、分かった」

そういって建物の中に入ろうとする零雨と麗香を見ていたが、
あることを思い出して引き止める。

「ちょっと待った」

二人が俺を見る。

「何か勧められても、全部断るのを忘れんなよ。
変なもの、危ないものかもしれないからな」

二人はそれを聞くと、ゆっくりと建物の中へと入っていく。

さて、チキンな俺は公園へと向かう。
零雨と麗香がもし男ならば、足取りは少しは軽くなっていただろう。
俺も情けねえな。

適当なベンチを見つけ、腰掛ける。
目の前には、４００メートルトラックが丸々入りそうな、広い砂地の広場が広がっている。

零雨と麗香は俺をここに連れてきて、一体何をさせたかったんだ？
空を見上げると、あのぶよぶよの入道雲がへばりついている。

はあー、何にもすることがねえ。

今何時だ？
携帯電話で確認すると、午後９時だ。
普段ならばこの時間帯は日曜の夜だから……どうでもいい。

そういや、ここはどこだ？
ダイブしているとき、眼下に都市が広がっていたことから推測すると、というか
チンピラのアジトがある時点で、ここが港区であることは明白だ。

ピリリと携帯電話が鳴る。

「うおっ！とっとっと……」

ポケットから携帯電話を危うく取り出し損ねて砂の上に落としそうになる。
……セーフ。

で、発信元は……なんだ、チカだ。焦らすなよ。

「……もしもし」

《もしもし、コウ？》

「ああそうだが。どうしたんだ？」

《いや、昼は悪いことしちゃったかなーって思って》

今はそれどころじゃないんだよチカ。
零雨と麗香がチンピラ集団の中に突入してって、
例のバッグを取り返そうっていう大事なときだ。

何でこんなタイミングにどうでもいい電話をしやがる！？

「ああ、気にするな。

確かにあの天然水とソフトクリームの出費はクリティカルヒットものだったが、
多分……なんとかなる」

《その言い方、絶対今ピンチでしょ？》

「！！！」

ギクリ。
落ち着け、チカは俺がここにいることは知らないはずだ。
冷静に対応していこう。

「……大丈夫だ。
お前は昼飯作ってくれた、もう罰ゲームは終わったじゃねーか」

《そうだけど……
あのさ、私ついさっき、コウがどれだけ生活が苦しいか調べてみようと思って調べてみたの》

余計なお世話だ。
人の懐事情を穿鑿（せんさく）しようとするな。
この本能おせっかいが。

「で？」

《『で？』って、強がっちゃって。
あんた、一食１００円台の生活しないと２週間だっけ？持たないよ？》

「ああ、知ってる」

《知ってて何でそんな余裕かませるわけ？
ファーストフード店の１００円商品で二週間食いつなぐつもり？》

「その発想はなかった。
いいこと聞かせてもらった。サンキュー」

《・・・あれ？速い……》

「どうした？」

《いつもと比べて通話料金の加算速度が速い……
コウ、今どこにいるの？少なくとも近所じゃないわよね？》

ドキッ！！
鋭い奴だな……

「ん、まあちょっとな」

《『ちょっと』って、あんたお金がないのにどうしてそんな遠くにいるの？
どこにいるかは知らないけどさぁ》

「あー、……いつも金欠のときに行く激安の店があってだな、
そこが俺の家からちょっとばっかし遠い。
今、店の駐輪場にいる。
自転車で帰ろうとしていたところに、ちょうどお前から電話が来たってわけだ。
たぶんそのせいだろ」

《ふ～ん、そう》

納得してねえな、こいつ。

結構現実味のある話だと思うんだがな……

《まあ、あんたをピンチの崖に追いやったのはあたしだし、ホントに生活に困ったら少しだけ援助してあげるから。言っとくけど、あたしの小遣いからの出費だから、期待はしないでよ？》

「どうも、そりゃ心強い」

《正直に喜んだらいいのに……》

俺は今それどころじゃねえんだよ。

《ま、帰り道に気をつけて。バイバーイ♪》

ツー…ツー…ツー…

勝手に切りやがったが、これはこれでいい。

俺は携帯電話を閉じたが、同時に着信音。

今度は電話ではなくメール、発信者は……麗香だ。

メールの中身を見る。

……終わったな。

メールによると、

あいつらは犯行を認めた上で、
「帰してほしければそれ相応の対価を支払え、無理ならさっさと帰れ」と言ってきたらしい。
で、対する麗香は「力ずくでも取り返す」と言ったそうだ。
変に挑発してどうする、ドアホ。

それで、向こうが1対1の直接対決総当たり戦の連続試合を提案、二人はそれを受け入れたらしい。
チンピラもチンピラで女子高生になんちゅう無理難題を押し付けやがる。
そして受け入れた2人もまた……

そういういきさつで、「近くの公園の一番広いグラウンドで行うから離れてろ」だとよ。
つまり戦場はここらしい。

……お前らがそこまでしてんのに俺だけ逃げ回ってるようじゃ情けない。
男の意地、ぜってーこのベンチから動かないからな！

ちょうどその時、零雨と麗香がチンピラを引き連れやってきた。
チンピラの人数が多い、多過ぎだ。
８０人はいる。

俺と麗香は目が合い、口元が小さく動く。

《バカ》

彼女の口は確かにそう言っていた。

そうだ、俺はバカだから動かねーよ。
お前らもお前らでバカだろうが。

俺から約１５メートル先で、２人と８０人ぐらいのチンピラが向かい合う。
１５メートル、結構遠いようで、案外近い。

一人目の相手が2人にそれぞれ現れた。
サル……いや、チンピラ社会のしきたりなのかはよく知らないが、彼らは素手で闘うらしく、危険そうな物体を手に持っているやつはいない。

それぞれの相手は、２人に近づくと中腰になり、こう言った。

「お嬢ちゃん、威勢がいいのは分かるが、
家でパピーとマミーが待ってるんじゃねえのか？
その綺麗な顔に傷がつかないうちにさっさと家に帰りな」

周りのやつが笑う。中に、見覚えのある二人組もいた。
それよりも今言った奴の口調が俺そっくりでなんかいらつく。

零雨と麗香は同時に即答。

「「嫌」」

もし同じシチュエーションで俺に言われたら、
しっぽを振って喜んで帰って行くところを、あたかも当然のように拒否。

「……お嬢ちゃんよ、なめてんじゃねーぞ！

女だからといって容赦しねえ！」

麗香の相手のチンピラがつかみ掛かろうとするが、ぴょんと右へと回避、チンピラはスカを喰らって麗香の横を通りすぎる。

「その動き見てるとあなた、弱いわね」

分かったような口を叩く麗香にチンピラはチッと舌打ちすると、ざけんじゃねえと声を張り上げながら本気で殴りにかかる。

沸点が液体窒素並に低い野郎だ。

常温で沸騰してんじゃねーよ。

零雨の相手のほうも殴りにかかるが、零雨に顔面を片手で押さえられ、無言で押し返される。

そのとてつもないパワーで押し返されたチンピラは背中から倒れ、地面をこすりつけながら、順番待ちのチンピラの列の先頭の足元に。

一方麗香は相手の胸倉を掴み、斜め上方に投げ飛ばす。

射出角４５。のベストな角度で発射されたチンピラは、放物線を描きながら目測５メートルの遊覧飛行。

うつぶせの状態で地面と激突したチンピラは、小さくうめき声をあげる。

プールに飛び込んで腹打ちしたような、というと分かりやすいだろう。

最初の二人が一刹那のうちにやられてしまうのを見たチンピラ集団は、

涼しい表情の零雨と麗香に目を見張る。

「おい、大丈夫か？」
チンピラ集団の中から3人、麗香に投げ飛ばされ悶絶しているチンピラに駆け寄る。
これがサル社会の仲間意識ってやつか。
仲間意識を向ける方向さえ間違っていなければ、
こいつらは善良な一市民であっただろう……と俺は推測する。

「肋骨にヒビがいったかもしんねえ！」
駆け寄ったチンピラの一人が叫ぶと、チンピラ集団の零雨と麗香に対する目が変わった。

「おい、誰がケガさせろつった？
一対一のタイマン勝負は中止だ」

ボス猿は俺に指を指す。ゲッ……

「おい、部下の失態は上司の失態、
こいつの治療代２５０万と慰謝料２５０万の合わせて５００万、
きっちり耳を揃えて払えよコラ！」

……俺、ボスと勘違いされてんな。
あと、出来たらアバラの治療で
どんな最先端の治療を受ければそんな金額になるのか、興味を引くところだ。

「オラ、行くぞ！」

ボス猿の合図とともに、総勢約８０名の男が零雨と麗香に襲い掛かる。

ウオォオオ！

近所迷惑にならない方がおかしい程の声の馬鹿でかさで吠えながら、

二人を取り囲む。

やべえ、これって警察呼んだ方が良くね？

ていうか、今までなぜ気がつかなかったんだ俺は？

俺が１１０番しようとズボンのポケットから携帯電話を取り出した時、麗香が叫んだ。

「コウくん危ない！」

急いで顔を見上げると、チンピラが空から降ってくるのが見えた。

「うおっ、危ね！」

とっさの判断でベンチから逃げる。

さっきはベンチから動かないって言った俺だが、まだ死ぬには時期尚早というもんだ。

飛んできたチンピラはベンチに激突、ものすごく痛そうだ。

零雨に目を向けると、チンピラの足を両腕で掴んでぐるぐる振り回している。

振り回されたチンピラは、遠心力を強制チャージ、
ハンマー投げの選手そっくりの体勢の零雨は、
チンピラが固まっている方向に投げ飛ばす。

サングラスを装備した人間砲弾は目標に見事的中、固まっていた
集団が将棋倒しになる。

変わって麗香は、目の前の敵の顔面パンチ、蹴り上げ、アッパー
など、
複数方向から同時に繰り出してくるさまざまな技をニコニコしな
がら全回避、
同時に後方から襲い掛かろうとしたチンピラに、無駄だとばかり
に後ろ蹴り。

なんか見てるとチンピラチームボロ負けじゃねーかよ。
てめーら一応喧嘩強いんじゃねえの？

俺が言うのはいろんな意味で変な話だが、もっと頑張れよ……

電話は……いっか。だるいし。

それからおよそ３０分程戦闘を繰り広げ、
チンピラは零雨と麗香に一撃も当てることができないまま惨敗。
戦闘不能になったチンピラが横たわっているという、
ドラマでアリガチな光景が目の前に広がっている。

文意的には矛盾しているが、《良く見かけるシュールな場面》と
表現するとしっくりくる。

「もう終わり？
バッグ返してくれる？」

ウ～ン、と大きく背伸びをしながら麗香は問う。
まるで軽い運動をしたあとのようだ。

「……勝手にしろ！」

このボス猿が叫んだ一言で、チンピラ無双は終了。

零雨は、アバラの折れたらしいチンピラの前に立つと、

「…ケガはあと少しで完治する」

と、意味深な発言をして、ベンチの横で傍観していた俺に向かってくる。
麗香は前々から欲しかったプレゼントをもらったような笑顔とともに、
Ｈａｐｐｙオーラを散布しながら廃墟へと一人向かう。夜中に、だ。

取り返した嬉しさというのは理解できなくはないが、
時、所（ＴＰＯ）、場合を考慮すると、どの方向から見ても麗香のスマイルには怖さが前面に出る。

「なあ、零雨」

俺の目の前で立ち止まっていた零雨に質問。

「こっからの帰りはどうすんだ？」

「……通常の手段を……用いて帰る」

「つまり、徒歩か？」

零雨はコクリとうなずく。

今現在、午後９時半であること、ここが俺の家から直線で約４キロの距離があることを考えると、

帰宅は１０時半以降になるのは間違いないだろう。

交通機関を利用しようにも、所持金が少ないためボツ。

はあ～と、やり場のない溜息を吐きながらグラウンドを眺める。

くたばって立ち上がることすらままならなくなったチンピラが、今だに倒れ伏している。

「持ってきたよ～！」

明るい声、麗香がたくさんのバッグを持って戻ってきた。

茶色のブランド物のバッグや、白のお洒落なバッグ、花柄のバッグなどなど……

恐らく全部ひったくりの被害に遭ったバッグだろう。

やつらがどうやって盗んだのかは知らないが、ウエストポーチもある。

これ盗んだ奴、神業だよ、マジ。

「中身は無事だったよ」

麗香の大きなマイバッグには、
大量のもやしをはじめとする食料品、ファッション雑誌数冊などがちゃんと入っていた。

「おお、そりゃ良かった。
餓死せずに済んだぜ」

麗香は、不吉なことを言わないでよ～と言って地面にバッグを一列に並べた。
見ているチンピラはさぞ悔しいだろうな、ハハハ……

「で、他のバッグはどうするんだよ？
持ってきたはいいが、俺の家に置いてはおけんぞ」

「中に携帯電話が入ってるのもいくつかあるみたいだし、ここで持ち主に電話してみる」

「チンピラの前はさすがにマズイだろ！」

というわけで、結局、俺の家に帰りながら電話することになった。
女物のバッグを三人で手分けして持った。
零雨と麗香は似合うからいいが、
男の俺が女物のバッグを持って出歩くなど、通常であれば絶対にしない行為だ。

ではなぜそれを今しているのか、それは二人に対して感謝しているからだ。

「あ、はいはい……いえいえ、とんでもないです！偶然見つけただけですから……」

麗香は今3人目の携帯電話に電話しているところだ。
チンピラをボコボコにして取り返したとはとても言えないため、近くの公園に放置されているのを発見したという設定にしてある。
今言った麗香の「偶然見つけた」とはそういう意味だ。

やはり、こういう場面では男から電話がかかってくるより、女の人から電話がかかってくる方が、相手も安心するだろう。

《男性よりも女性の方がコミュニケーションをとりやすい、》
なるほど零雨があの時言ってたことは、間違いではない。
ただ、男としての俺は少し切なくなった。

第2話－18　ハウス・クリーニング　招かれざる客

「おい、コウ！帰ろうぜ！」

翌日。
学校の授業が終わり、俺待望の帰宅の時間がやってきた。
別に学校が嫌いなわけではないが、
やはりどうしても帰宅の時間になると解放された気分になるもんだ。

「おう！」
ジョーに誘われた俺は、鞄をしっかりと持ち直して、先に教室を出たジョーの後を追う。

俺がジョーに追いつくと、ジョーは既に零雨と麗香と並んでいる。
階段を下り、上靴を下駄箱にしまい、校門を抜け……
俺達はごく普通の会話をしながら歩いていく。

「コラ――ッ！あたしを置いていくなっ！」

昨日、ガラッとイメチェンしたチカが後ろから高速で迫る。

「うお、なんか来た！」

ジョーがオーバーリアクションをとると、
チカはあたしにはちゃんと木下千賀っていう名前がある、とジョーの頭を鞄でバシッと叩く。

だんだんと日常と化しつつある俺、チカ、ジョー＋零雨＋麗香の５

人揃っての下校。

帰宅部っていいもんだ。
大会に出場するからと休日を返上することも、遅くまで残って練習することもなく、のんびりとした時間を過ごせる。
自分の好きなことが出来る部活と出会えたなら、どれだけ苦しくてもやっていけるだろうが、
残念ながら巡り会えなかった者にとっては、部活に入ってもただの苦痛な時間を味わうだけである。
そういう意味では、《帰宅部》はフレキシブルな最強の部活であると俺は信じている。

つまり放課後とは、ある人にとっては、同じ趣味を持つ仲間との親睦を深める時間であり、
ある人にとっては、将来の自分を変える時間であり、
ある人にとっては、ただの苦痛な時間であり、
またある人にとっては――まあ俺達のことであるが、のんびりと過ごす時間でもある。

「ところでさ、コウ。
あんた本気で一食１００円台の生活を2週間も続ける気？」

「仕方ねえだろ、消えた銭は帰ってこねえんだからよ」

「……コウ、あんた今日暇ヒマ？」

「いや、帰ってからやらにゃならんことがある」

言い忘れていたが、
昨日、ひったくりからバッグを取り戻した俺達は、
真っすぐ俺の家に戻り、零雨と麗香は家に他のバッグを預けて帰っていった。
もちろん麗香が電話した際に持ち主から保管の許諾をもらっている。

やらなくてはいけないこと、それは家にあるバッグをすべて元の持ち主に送ること。
もちろん宅配便の送料着払いで、だ。
電話した中で一人だけ、俺達が加害者だろう、と勝手に決め付けてきた妄想ババアがいたが、麗香が苦心しながらも納得させてくれた。
俺としては不愉快な話である。

ま、そいつのバッグは送料着払いのクール便、速達で送ってやるつもりだ。
冷んやりしたバッグを受け取るがいい。

被害者の住所は昨日のうちに麗香が電話で聞き出しておいたから、
あとは宛先を書いて業者に宜しくするのみ。
間違えて送らないかが少し不安だ。

このひったくりから取り返すまでの一連のことは、
例え友達だろうが家族であろうが、一切口外禁止の事項だということは当然のことである。

「ふ～ん……そう」

ぷいと突然そっぽを向いたチカは、ジョーをジロジロ見ながら、

「ねえジョー、面白い動画あるんだけど、見る？」
と聞き、携帯電話をちらつかせる。

まさかだとは思うが、いやまさかしか想像できない。
ジョーの罰ゲーム盗撮映像、チカが見せるとしたらこれしかない。

「おおっ、お前がそんなことを言うなんて、よっぽど面白い動画だったんだな？」

ジョーは盗撮されていた事実をまだ知らない。

「まあ、結構面白かったよ」

チカは下心のある笑いを浮かべながら携帯電話を操作。

「ほら、これ」

「・・・。」

言葉にできないジョー。

「エヘヘ、どう？」

「おい、こりゃないぜ！
俺の珍映像流出なんてされたらたまったんねえな！
流すんじゃねえぞ、間違ってもネットに流すんじゃねえぞ！」

流してほしいのかほしくないのか、ジョーはそんな言い方をする。
俺なら躊躇なく流すね。目に黒帯入れてな。

「ネットには流さないわよ。
……友達には送ろうと思うけど」

「お前、そんなことしたら俺、電車に轢かれに行くからな！」

「あたしだってそんなに鬼じゃないから、送る友達は限定するわよ。
例えば、あたしの女友達全員とか」

「お前のメルアドリストのほぼ全員じゃねえかよ！」

ジョーとチカが漫談とはいえない、珍妙な会話をしている間、
麗香はしきりに後ろを気にしていた。

「どうかしたのか？」

チカとジョーの会話を邪魔しないよう、こっそり聞く。

「……ううん、何でもない」

俺が後ろを振り返ってみても、いつもと変わらない風景があるのみで、
変わったことなんてこれっぽっちもなかった……と、その時は思っていた。

「……チカ、後で消しておけよ」

突然ジョーが、妙に冷静になって言ったもんだから、チカは「え？」
と思わず声を上げた。

「だから消しとけって。

そんな映像を送ったら、俺だけじゃなしにお前もイメージダウンすると思うんだ」

「どうして？」

「俺に変なことをさせている変態チカがまる分かりだぜ？」

携帯電話片手に両手で口を隠して焦るチカ。

「あ～！あたし何考えてたんだろ！
あたしってば調子に乗って……」

「消しておけよ」

チカは激しい勢いでそりゃ、もう消しておくと言った。

「じゃあ悪いが、俺は用事があるからこっから近道させてもらうぜ」

俺は途中みんなにそう告げ、一人マンションまで帰宅することにした。

「じゃあね！」「バイバイ！」「また明日な！」

零雨以外からのあいさつをもらい、一人ショートカットで自宅マンションへ。
それにしても今日も暑い。
元気な西日が俺を加熱する。

マンションに着くと、目の前に高級車が停まっている。
こんなマンションの前に、迷惑な奴だな……
エレベーターに乗り込んで自宅のある階を押す。
ゆっくり上昇するエレベーター。
俺の他には誰も乗っていない。
さっさとバッグ送らねえとな……めんどくせえ
エレベーターのドアが開き、外に出た瞬間、目の前に厳ついオッサンが登場。
「ちょっとお兄ちゃん来てくれるか」
そのドスのきいた一言でひょっこり現れた3人のこれまた厳ついオッサン。
その腕には入れ墨が入っている。
最近ちまたで話題のこちらに進出してきた筋の入った人である確率は高めだ。
見た目からしてかなり危険。
「なっ!?」
両脇をしっかり確保され、俺は鞄を持ったままエレベーターに連れ戻される。

1階に下ろされ、マンション前の高級車の後部席中央に押し込まれた。
俺の両隣には厳ついオッサンが座り、俺が出られないようになっている。

これって、誘拐じゃね？
いや、断定できる。これは誘拐だ。
任意同行という名の誘拐！

「悪いのう、兄ちゃん」

最初に現れたオッサンはそう言って運転席に座り、エンジンをかける。

高級車に乗せてくれるのはうれしいことなんだが、もっとマシなシチュエーションで乗りたかった。

動き出したクルマの中で、運転手のオッサンは煙草に火をつけた。

「兄ちゃんをうちの頭（カシラ）が呼んどる。
何や、話によると兄ちゃんの友達が頭（カシラ）の息子をようけ可愛がってやったそうやな」

かわいがってやったっつーことは……まさか昨日のあの中にこいつらと通じる奴が！？

「その顔、心当たりがあるみたいやのう……」

運転手は口から煙を吐く。

「フッ、まあ気楽にいこうやないかい」

気楽にって言われても無理！

迫力が！

右に左にクルマは曲がっていく。

すると、前方にチカとジョーの歩く姿が見えた。

「同じ制服の奴がおるということは、兄ちゃんはこの近所の高校か？」

「……（無視）」

無視しか出来ねえな、この状況じゃ。

まさかワンランク上の敵が待ち伏せしてるとは思いもしなかった。

「……兄ちゃんも喧嘩は強いんか？」

「喧嘩とか有り得ないっす！」

思わず口から出た俺の言葉に、運転手のオッサンの眉が動く。

「ほな、お前、カタギか？」

「カタ……ギ？」

カタギって何？

今さっき俺が発した一言で、急に話しやすくなった俺は、

相手の様子を伺いながら、返事をしていくことにする。

「簡単に言えば《普通の人間》ってことや」

完璧なまでのハト派の俺がカタギでないわけがない。

だが、昨日の行動はグレーゾーンだな。

「変な話に聞こえるかもしれませんが……暴力は性に合わないんで……」

クルマは港区に入り、建物も高いものが目立ってきた。

「フン、わしの前で嘘ついてもかまわんが、くれぐれも頭（カシラ）には嘘は禁物や」

嘘じゃねーよ、人生で一度も拳を交えずに高校生になる奴は男ではほとんどいないと思うが。

「頭（カシラ）って、……組頭（カシラ）っすか？」

「そや、東播会（とうばんかい）の組頭、久方龍男（ひさかたたつお）や」

服装、言い方、その他諸々から分かってはいたが、やはりこのオッサンらはみな極道……

運転手のオッサンの携帯電話が鳴る。

普通の着信音だ。

運転中にも関わらず、オッサンは電話に出る。

「へい……捕らえました……はい、場所変更……」

俺はこの間、オッサンの携帯電話の着信音がかわいいアイドルの着ボイスだったらウケるだろうなとか、どんなメールしてんのかとか、いろいろ想像していた。

「……へい、了解です」

第2話－19　ハウス・クリーニング　お出迎え

クルマは港のコンテナ置場に到着した。
ドラマみたいにいい感じで雰囲気が出てる。撮影にはすごくリアルでいい。

ちょっと待て、何を言っとるんだ俺は。
ここで何されるかを想像したら、沈められるぐらいなもんじゃね？で、そんな雰囲気が出とると。

「ほな兄ちゃん来てもらおうか」

同じような高級車が数十台、きれいに整列されているなかに、俺が乗っているクルマも入る。

この場所は鉄臭く、地面のアスファルトが赤褐色になっている。

コンテナ置き場の反対側を見ると、金属質の工場が軒を連ねている。近くにあるトタン屋根の工場の入り口からは、物を切断する、キリキリという音がし、
時折赤い火花が飛び出す。
工場前の道路には大型のダンプカーが工場脇に路駐してあり、その近くには擦り切れたタイヤや煙草の吸い殻、ペットボトルや空き缶がゴロゴロ。
誰かが不法投棄して行ったと思われる家電製品もちらほら。

どうやらここは工業団地のようだ。
海の匂いがぷんぷんしながら、ゴムや鉄といった人工的な臭いが漂う場所。

まさか俺がこんな所にくる羽目になるとは、思いもしなかった。
俺の両隣にオッサンが俺をガッチリ確保している状態で歩く。
5分なのか、10分なのか、俺には分からないが、結構歩かされた。
コンテナ倉庫の角を直角に曲がると、目の前には海が見えた。
子供ならはしゃぐんだろうがな……

俺の前に、正装をした男達が横6列、縦10列に並んで、
その先頭には若いチンピラと、年季の入ってそうなオッサンが待ち構えていた。

「頭(カシラ)、連れて参りました」

「うむ」
頭(カシラ)の久方という男、年齢は60歳ぐらい、
オールバックの純国産の顔、がっしりとした体つき、腹から響くような、太い声。

俺の中での極道の頭(カシラ)のイメージにおもしろいほどピッタリだ。
頭がおかしくなったのだろうか、
極道のナントカ会が総出で俺を迎えてるっぽいにもかかわらず、恐怖は一切感じられない。

俺ってこんなに肝っ玉座ってたか?

「こいつで合っているか?」
きつい声で頭(カシラ)がチンピラに問うと、
チンピラは間違いない、早く殺してくれと言った。

このチンピラ、確か昨日の晩、
零雨と麗香に対して1対1のタイマンがどうのこうのと騒いでた大人げない奴だ。

で、ボロクソに負けたからパパ～って泣きついたと。迷惑どころの話じゃねえ。
しかも殺せって今サラッと言ったよな？

死亡フラグとかの次元を何気に飛び越して、死亡確定かよ！

「殺すのはまだ早い。
お前の言ってた女二人を探し出してからだ」

いかつい声の頭（カシラ）はそう息子をなだめる。

今の状況を冷静になって考えてみよう。

まず、俺が立っているのはコンクリートの地面で、
右側には海、左側にはコンテナ倉庫っぽい建物。
前にはナントカ会のみなさんが勢揃いされているし、
後ろは無防備なように見えるが、物陰に隠れている人間が今チラリと見えた。
後ろへの逃走は諦めたほうがいいだろう。

脱出方向として一番現実的なのは海に飛び込むことだろう。
他はリスクが高い。
ただ、俺は泳ぎは速くない。
後ろから銃で撃たれたらそのままプカプカ海をさまようことになるだろう。

どちらにしろ脱出は絶望的だ。

かわいい声が緊張の中聞こえてきた。

「お電話です～」

頭(カシラ)こと久方龍男はおもむろに携帯電話を取り出した。

「ピッ……もしもし、久方だ」

お前かよ。

アイドルの着ボイスをまさかの頭(カシラ)の携帯電話から聞けるなんて、意表を突かれたぜ。

それよりも、なんかシリアスに色々脱出方法を探っている時に、そんな着ボイスを聞かされると、

何か表向きは殺したと言っておきながら、裏でコッソリ俺を逃がしてくれそうとか、

今回だけは助けてやると言ってくれるとか、

そういう実はいい人だった的なことを期待しちまうじゃねえかよ、ジジイ！

それはそれでラッキーだし、そんなことになれば一番いいのだが……

「……そうか……分かった……ピッ」

この頭(カシラ)が電話している間に、イメージががらりと変わったのは俺だけか？

「親父、いつまでアイドルの着ボイスにしてんだよ？

もっとマシなやつにしてくれよ」

チンピラ息子の意見に同感。

「俺の好みにいちいち口出しするな、バカ息子」

息子がバカだという自覚はあるんだ。

てっきり親バカだと思ってたんだが、意外だな。

そして側近らしき人物が一人こっちに向かってくる。

頭（カシラ）は側近らしき人物に小声で何かを話す。

電話っすね、はいはい……

「昨日お前といた女二人を呼べ」

側近は俺にいかにも偉そうな口調で述べると、俺を睨み付ける。

周囲の厳しい監視の中、俺は鞄から携帯電話を取り出し、麗香にかける。

零雨と電話すると電話の向こうで下手に停止されてしまう可能性がある。

すると俺の命が危ない。

だから俺は麗香にかける。

3回のコールの後、麗香が電話に出た。

「かくれんぼ～♪

楽しい楽しいかっくれんぼ～♪

ドキドキのかくれんぼ～♪」

……ピッ

俺の友達の中にこんな電波キャラいたか？

「どうした？」

側近らしき人物が尋ねてくるから正直に答える。

「かけ間違えたみたいっす」

「早くしろコラ！
お頭がわざわざ貴様のために待っているということを自覚しろボケが！」

お頭さんがどれだけ偉いとか知らねえよ。

俺は無視さながらの無言というささやかな反撃をすると、携帯電話の発信履歴を確認。

確かに今麗香の携帯電話にかけたことは画面にきっちりと証明されている。

じゃあ、今出たのは誰だ？

もう一度かけてみよう。

今度はコールが1回も鳴り終わらないうちに繋がった。

「コウくん、なんでいきなり電話切っちゃうの？」

ちゃんと麗香に繋がった、良かった。
麗香の声が何か違う。どこか震えているような気がする。

「さっきのお前か？」

「うん、そうだけど」

「あのさ、俺ちょっとやばいことに……

「知ってるよ。左向いて」

俺は電話を耳につけたまま左を向くが、倉庫の巨大なシャッターが見えるだけで、誰もいない。

「そのまま視線を上にあげていくと……」

麗香の誘導通りに視線をあげる。

――いた。

コンテナ倉庫の屋根にゆったりと腰掛けてこっちに大きく手を振る麗香。
その反対側の手には、携帯電話を握っている。

《かくれんぼ》とは、周りを見渡して探してみろということか。普通にわからん。
こんな非常時には、もっと率直に正しく物事を伝えることが重要だってのにこいつは……

そんな麗香の後ろからひょいと零雨が登場。
俺の周りのやつらも突然現れた零雨と麗香に釘付けだ。
二人は倉庫の屋根の端にある排水管をつるつると伝って地上に降りてきた。

「こいつ、こいつらで間違いない！あの白髪の女、間違いない！」
指をさすチンピラの顔はこわばり気味。
数人の部下が二人を捕らえようと四方から迫るが昨日と同様、返り討ちにあう。
麗香は俺と頭と等距離の位置に立つ。
上から見ればちょうど△(こんな)感じだ。
麗香は声を張り上げた。

「あなたたち、直ちにコウくんを解放しなさい！」

その口調からは怒りが滲み出ているのが良く分かる。
そして隣の零雨は相変わらずの無表情である。
あいつが怒るところを俺は初めて見た。

「お前ら誰にそんな偉そうな口をきいてんだ？ァア？
こちらは東播会の久方龍男だぞ！」

俺の隣の側近らしき人物がもう吠える吠える……

誰か耳栓を貸してほしいんだが、もってないかね？

頭はううむと唸り、声を張り上げた。
「お前らにはこの会のことをよく知らんようだな。
ここにいる俺達は皆、他の勢力から破門にされた者ばかりだ。
掟を破り、居場所がなくなった者達が全国から集まる、
最後の安息地、それが俺達の会だ。
そこらの組織とは訳が違う！
荒くれ者が多いのがこの組織の特徴、
しっかり覚えて冥土の土産に持っていくんだな」

「早く解放しないと、あなたたちの方が冥土に逝くわよ？」

麗香は△の均衡を破り、零雨と共に頭に歩み寄っていく。

「親父、近づかれたら終わりだってのは今ので見たろ、早く殺ってくれ」

チンピラがうざい。

親父さんこと頭は懐からさっと拳銃を取り出し、
近づく麗香に向けた直後、引き金に力を入れた。

パンパン、と2回音がした。

歩くのをやめ、下を向く麗香。

「ぁ……」

制服の右胸と左脇腹の辺りが、じわりと赤に変色していく。

麗香が撃たれた！

撃たれた身体をしばらく見ていた麗香だったが、
身体がふらりと揺れて倒れそうになり、足で踏ん張る。
4，5歩粘って歩いていたが、やがてひざを折った。
麗香は倒れた。

あの変態ジジイ、何の躊躇もなく引き金を引きやがった！

「おい、麗香！」

俺は麗香をここから助け出したい気持ちでいっぱいだったが、
両隣の男に抑えられ、どうすることも出来なくて不甲斐ない。
腹の底から巨大な怒りが湧き出てくる。

今の俺にとって、ハト派がどうのこうの、そんなのは全く関係ない。

とにかくあのジジイとそのチンピラを殺してえ！
何気軽にトリガー引いてんだ、ゲームじゃねえんだぞ！
俺の目の前にもし拳銃が落ちてたら、
例え背後の構成員に最終的に殺される運命にあったとしても、
間違いなく俺はジジイとそのチンピラ野郎のミソに風穴開けてるね！

零雨は表情一つ変えずに早足でジジイに近づいていく。
表情には表さないが、麗香が攻撃されたことはしっかり分かっている。
零雨はふらふらと大きく変則的に蛇行しながらジジイに近づく。
いいぞ零雨、復讐だ！

ジジイは、一瞬眉を寄せ、零雨に向けて数発撃つ。
弾は零雨の横すれすれを掠めていくが、なかなか当たらない。

撃つのをやめ、チッと舌打ちしたジジイは銃口を零雨からそらし、
拳銃振ったり叩いたりしている。
その表情には焦りが見える。
弾切れか弾詰まりかは知らないが、絶好のチャンス！
今だ零雨、殺ってしまえ！俺の代わりに麗香の仇をとってくれ！

チンピラは近づいてくる零雨を恐れ、後ずさりをしている。
いいザマだ！

――――パン！

ジジイとは違う方向から聞こえた銃声。

音源は、俺のすぐ近くにいる、
側近の如く振る舞い、俺に偉そうな口を叩いたあの男だった。
零雨の頭に凶弾が直撃し、零雨は踏ん張ることもできず、地面に接吻した。
「零雨、死ぬんじゃねえ！」
俺の叫び声は辺りに響くこともなく、どこかへ吸い込まれていってしまった。
犯人は俺のすぐ近くにいたのに、俺は2人目の被害者を出すことを防ぐことが出来なかった。
俺の手の届く範囲にいるのに、怪しい行動になぜ気づかなかったんだ俺は！
自分が腹立たしくて、自分自身を殺したくなってきた。
やりきれないこの思いを、俺はどこへぶつければいいんだよ？
”わ、私だって身体の強度や運動能力はコウくんたちと変わらないんだから、
怪我だってするし、骨折したりもするわよ！”
昨日、麗香が俺の家で昼食を作っているときに言った言葉だ。
結局のところ零雨も麗香も、
ただ人間に超能力という＋αがついただけの存在だったのかもしれない。

――結局、二人は銃殺されてしまったのだから。

俺の隣で零雨に発砲した男が、地面に倒れた2人の少女に近づいていき、脈をとる。

「頭、死にました」

ジジイの奴はうむ、と一回頷いて俺に顔を向けた。
その瞬間、空が一瞬暗転したかのような錯覚に陥る俺。

「安心しろ。
お友達の葬儀はここできっちりやらせてもらう。
お前を殺すのは葬儀が終わってからだ」

零雨と麗香はもう動かない。
地面にに血だまりができている。
なんだよ、あっけなく殺されやがって！

ジジイは不愉快極まりない高笑いを撒き散らしながら、近くの部下に命令をする。

「ハハハハハ、では早速葬儀を始めよう」

ジジイは人を殺して上機嫌である。
社会のゴミ野郎という表現はこのジジイには生やさしすぎる。
言葉で表現できないほど腐った野郎だ。

こんなやつが、のこのこと何十年にも渡って生きられるこの社会、
こんなやつに仕立て上げたジジイの親、
こんなやつの前で無力さを実感する俺、そのすべてに俺は怒りを覚えるね。

数人の部下が、使い古された大型トラックのタイヤと鎖をそれぞれ二人分用意する。

部下は鎖でタイヤと亡き骸(なきがら)をチャリチャリ鳴らしながら、
ぐるぐるに巻き付け、離れないように固定している部下の服に赤い血が付く。

やがて顔が青くなった零雨と麗香の遺体に鎖を巻き付ける作業が終わってしまい、
男達は数人がかりでタイヤと一体になった麗香を海に投げ込んだ。

ジジイとチンピラは微笑を浮かべながらその光景を眺めてやがる。

俺が死んだら、こいつらだけは俺の手で絶対、絶対に呪い殺してやる。
その狂った脳味噌を俺が潰してやる。

男達は続いて零雨を海に投げ込んだ。
水しぶきをあげ、海へ沈んでいく。

「……葬儀は終わった。最後はお前だな」

ジジイは、部下から新しい拳銃と、使えなくなった拳銃と交換して、

俺に銃口を向けた。
俺はあいつを呪い殺してやるという怨念を持てるだけ持って、死を覚悟した。

――――――パン

もう聞き慣れた乾いた音が聞こえた。

その銃声はジジイが発したものではなかった。
俺はしぶとくまだ生かされている。

目の前のジジイの手にあった拳銃が消えている。
手から消えた拳銃はジジイの足元に転がっていた。

「もう私怒ったからね！」

高いところから声が聞こえ、俺は反射的に倉庫の屋根を見上げる。

……麗香！？

なぜ麗香があそこにいる！？
たった今麗香は零雨と一緒に海に沈められたはずだ。

麗香は最初に現れた時と同じように屋根に腰掛け、
手には薄い、色だけ見ればかわいらしい金属光沢のある桃色の拳銃が一丁。
その銃の狙いの先にはジジイ。
つまり麗香がジジイの拳銃を神がかった精度で撃ったわけだ。

「ぁあ？」

俺の隣の側近らしき人物が見上げる。
チンピラが見上げる。
ジジイが見上げる。
ジジイの後ろに整列している手下が見上げる。

この場にいた全員が、この意味不明な事態に混乱。

後ろから、最初と同じようにひょいと顔を出した零雨。

「お前ら、誰だ！？」

チンピラが叫ぶ。

「今あなたたちが殺した私達よ」

「死人が蘇るだぁ？
んな馬鹿な話があるかってんだ！」

隣の側近［略］がまたまた吠える。

「信じられないでしょ？
死んだ人が蘇るなんて。
ゾンビみたいでしょ？」

麗香は屋根からひょいと飛び降りた。

「あっ――！」

俺は思わず声を上げた。
あんな高さから普通に飛び降りたら死ぬだろうが！
スカイダイビングをしたときはきっとチートを使ったんだろ？
今は使っていない……はずだ。

案の定、麗香は飛び降りた後、地面に伏せた状態のまま動かなくなった。

「なんだこやつ？
飛び降りなんて気でも狂ったか？」

ジジイは目を大きく見開いて、この混沌とした状況の理解に励んでいる。

コンテナ倉庫の屋根から見下ろす零雨の右手にも拳銃がある。
お前ら、どこでその武器を手に入れられたんだ？

仮にもここは日本で、それを持ってるだけで塀の向こう側へ連れていかれる国だ。

屋根を見下ろす零雨の隣から、麗香が現れた。
麗香が飛び降りた地点には、麗香の横たわる姿がある。

つまり、麗香が二人いるのだ。
地面に横たわる麗香と、屋根から見下ろす麗香。

いや、海に沈められた麗香もカウントすれば三人か。
まるで人形の中に人形、その中にも人形、で有名なマトリョーシカ人形のようだ。

零雨は屋根からぴょいと飛び降りると、
麗香と違い、すたっと両足で着地した。

「お、お前は何者だ!?」

チンピラが叫ぶ。

零雨は目の前の衝撃的な光景に自失茫然としているお頭一行に言った。

「私の現在の活動名は嵩文零雨。
本名はＳ０－ｖ１．７ｆ。
この世界の他、およそ数十の世界の管理をＵＳＥＲから委託されているプログラム。
ステージ２５、つまりこの世界で活動する上で足立光秀（俺の名前）は

この社会に私と神子上麗香、Ｓ０－ｖ３．０ａを順応させるのに必要な重要な存在である。
彼に危害を加えることは、いかなる理由があっても認めない。
よって、足立光秀に危害を加えているあなたたちを排除する」

なんかペラペラ喋るな、おい。
喋ったら世界が変わるんじゃないのか？
……つまり、零雨と麗香は本気でこいつらを排除しようとしているってことか。
死人に口なしってわけだ。

「面白い演説を聞いたなぁ？
『あなたたちを排除する』だとさ！」

チンピラは己の恐怖を打ち消すためだろうか、そう言って零雨を馬鹿にする。

その間、ジジイは地面に落とした拳銃を拾い上げ、銃口を再び零雨に向けた。

「無駄」

零雨はいつもの通り、表情一つ変えない。

「それがハッタリだと今証明してやろう」

ジジイは引き金を引いた。
それに続く発砲音。

だが、零雨は倒れなかった。
そして俺は目を見張った。
零雨の右手は、顔の直前では何かを捕らえている。

「無駄だと私は言った」

零雨は捕らえたもの――――銃弾を手の平に広げて見せた。
俺も驚いた。

ジジイは何発か撃ったが、全て直前で零雨に捕らえられてしまう。
そのザマは俺にとって爽快極まりないものであった。
つーか、ジジイ撃ち過ぎだ。

ジジイは何を血迷ったのか、銃口を俺に向けた。
それを見た零雨は、桃色の拳銃を取り出し、ジジイに向けて一発。

それはジジイには当たらなかった。
その代わり、ジジイはまた拳銃を落としていた。
何故かは分からないがジジイは銃を拾い上げても、俺に銃口を向けることはなかった。

「その銃、もう使い物にならないわね」

「なっ!?」

俺のすぐ後ろで声がし、直後に俺を囲んでいた男達は倒れた。

「コウくん、お待たせっ!」

麗香が俺の隣に来る。

「零雨ちゃん、あの久方とかいう男の拳銃の銃口に弾を突っ込んだのね。
銃口に零雨ちゃんが撃った弾が突っ掛かってるから、撃ったらその場でドカン。
だから撃てない」

「……親切に解説をどーも」

零雨もミリ単位の精度で発砲したのはすげえと思う。
ただ、それよりもその解説を聞いている途中でまた一人、俺達に銃口を向けている奴がいるのが気になる。
チンピラ野郎だ。

麗香はチンピラに言った。

「撃てるものなら撃ってみなさいよ」

引き金を引いたチンピラの銃口から、ブワッと綺麗な花が飛び出した。
手品か何かでよくありがちなやつだ。

「ぁあ?!どうなってんだ?」
チンピラがほざく。

「うふふ、面白いでしょ?」

麗香は俺に微笑みかけるが、
拳銃を持った数十人もの極道者が俺を殺そうとしているという、

戦場以上にエクストリームなリンチ状態を体験中の俺にとって、そんな小ネタは正直面白くなかった。面白く感じれるほどの度胸はない。

「それよりも、なんか零雨がペラペラ喋るようになっているのが気になるんだが」

俺の素朴な疑問である。

「ああ、今私達Ｌｅｖｅｌ3の状態だから、ステージ０に配分される処理能力がちょっとばかり増えるのよ。
だから、処理が追いつかずに途切れ途切れの発言しかできない零雨ちゃんがあんなに喋るの」

Ｌｅｖｅｌ、あのリミッターがどうのこうのという話で出てきた単語だ。

「零雨はあんなにペラペラ喋ってるが、
もし一人でも排除し損ねたらお前らの正体が世間にバレるかもしれんが、
そのことについてはどう思ってるんだ？」

「やだなあ、ここは私達のホームグラウンドよ？
絶対にバレないから、コウくんはそんな心配はしなくていいよ」

「ホームグラウンドの意味がよく分からないんだが」

「現在地（ここ）はステージ０。
ステージ０の中にステージ２５相当のレベルの空間を一時的に作り出してるの。

空間の広さは1キロ立方メートルの立方体。
それよりも遠いところからの情報、例えば遠方の景色とかは、
ステージ25からリアルタイムで取ってきてて、バレないようにしてあるのよ。
この空間には私達しかいないから、どんなことをしてもオッケー」
話によると、いつの間にやら異世界に転送されているそうな。

「すごいでしょ？」

「あーあー、すごいすごい」

早く生きて家に帰りたいんだよこっちは。
麗香は俺の心中を察したのか、
前で銃弾のＯＮＥ－ＷＡＹ（一方通行）キャッチボールをしている零雨の隣まで進み、
ナントカ会に向けて言った。

「あなたたち、警告を聞かないなんて、
もうどうしようもないから、今からバラバラにしちゃうね。
水分、鉄分、カルシウム、各種タンパク質、アミノ酸……
身につけている貴金属からプラスチック、紙切れまで……
私直々に全部粉々にして物質別に分別してあげるから、感謝するのよ」

この女子高生が言ってることが恐すぎると感じるのは俺だけではないはず。
バラバラ事件なんて言われると、頭とか腕が胴体から……なんだが、
今麗香が言ったのは、物質別に分子単位で分解してやるという次元の違う話だ。

確かに粉々になって粉末の山がいくつか出来るだろうけどよ、
エグすぎないか？いくらなんでも。
極道の連中はビビってさっきまでの元気はどこへやら、
ただの真っ青な顔の連中と化していた。

まったく、零雨といい、麗香といい、いつもあいつらの発想は俺の
予想の斜め上を飛んでいきやがる。
ＱＲコードどで意志疎通を計ろうとする零雨しかり、
バスタブにワープホールを設置するのもしかり、
今の麗香の発言もしかり。

極道Ａ「お、おい、お前白い粉が全身についてるぞ」
極道Ｂ「そういうお前だっていっぱいついてるじゃねえか」
極道Ｃ「なんだこれ、払っても払っても粉が取れねえぞ」

「全部分解されて意識が保てなくなる前に、ちゃんと今までの悪行
を反省することね」

と麗香は言った。
どうやら白い粉＝分解された物体らしい

「あなたたちが意識を保てるのはあと残り１５分。
　それがあなたたちの寿命」
冷たい顔の零雨はそういい捨てると、麗香とともに俺の前に来た。

「待たせてゴメンね、帰ろ？」

「お前ってマジ、冗談抜きでやってること残酷だ。
おもいっきり引くじゃねえか」

すぐ殺すならまだしも、ジワジワって。
俺はそこまでの復讐は望んでない。
さすがは鬼畜システム。

俺たちは麗香が作ったという脱出口へ向かう。

「そうかな？」

麗香は首をかしげた。

「そうだとも。
どんどん自分が自分でなくなっていくのが目に見えて分かってしまうじゃねえか」

「……そうなるのって、怖い？」

「怖いさ」

「……あのね、私思うんだけどね、
人間って、生き物をひいきしすぎだと思うの」

「何をいきなり言い出すかと思えば……」

……これである。

「私達の立場から見るとね、

ほら、そこの隅っこに転がってる空き缶、あれとコウくんはほぼ一緒の価値なの。
どちらも同じように原子からなる物質で構成されていて、シミュレートを任されているプログラムも一緒。
違うのは、あなたが自律して動くこと、不確定要素があること、それだけなのよ。
例えば、生ゴミを土に変えるのは、何の問題もないでしょ？」

「まあ、生ゴミ処理機があるぐらいだからな」

「じゃあ、生きた人間を土に変えるのはどう？」

「まず、青い制服の人に連行されるね」

手錠付きでな。

「ほら、扱いが違うでしょ？」

「そりゃ、そうだろ」

「ね？」

「……もういい。さっさと帰ろう」

しばらく歩いて、麗香が立ち止まった。

「ここが、ステージ０と、ステージ２５の境界線」

麗香が立ち止まったそこには、特に変わったものはなかった。
境界線が見えるわけでもなし、違った雰囲気を感じ取れるわけでも

なし、
ただの普通の地面があるだけだった。

「ジャンプで境界線越えようよ」

提案した麗香だが、境界線が分からない凡人の俺にとって、
境界線をきっちり飛び越えられることだできるか自体が怪しい。

「まず、どこが境界線なんだ？」

「ごめんね、コウくんには分からないんだよね」

麗香がそう言って、ここが境界線、と教えてくれた。
すると、じわりと地面に赤い線が浮かんだ。
これが境界らしい。

「じゃあ、行くよ？」

「せーのっ！」

第2話－END　ハウス・クリーニング　ホームタウン・クリーニング

「……。」

帰ってきた。

今俺は自分の家のリビングのソファに座りながら、

麗香の家で散々な説明を聞かされた後の俺のように、若干魂が抜けている状態である。

あの時と違うのは、ソファの横にあるものが、菓子の入った袋ではなく、

見知らぬ人のバッグであるということ、家が綺麗さっぱりしていることぐらいだ。

勘違い防止のために言っておくが、見知らぬ人のバッグは俺が引ったくったとかそういうのではない。

俺は無実だ。

あの赤い境界線を越えた後、零雨、麗香と別れ、俺は真っすぐ家に帰ってきた。

二人がどこへ行ったのかは俺は関知はしないが、

ステージ0に作った空間のコピーの後片付けをしなければならないと言っていたことだけは覚えている。

分解されて粉末になったナントカ会の連中を、宇宙空間全体に密度が均等になるように散布するとも言ってた。

恐ろしいやつらだよ。

零雨と麗香は、俺の家の掃除だけではもの足りず、隣町から進出し

てきたゴミまで掃除してしまった。
警察でさえもなかなか手出しできない社会のゴミが溢れる、いわばゴミ屋敷だった港区をバッサリ斬った零雨と麗香。
さすがだとは思うが、どう考えてもやり方は荒かった。

生ゴミを捨てるように、零雨と麗香は人間を捨てた。
それは、真の意味では平等な扱いなのかもしれないが、そんな理論はこの地球にいる限り通用しない。
もちろん、帰る途中で俺がたっぷり時間をかけて、
「郷に入らば郷に従え」と教えてやったから、次はそんなことをしないだろう。
次からは、まあ今回は半分仕方なかったのかもしれないが、よっぽどのことがない限り簡単に人を攻撃したり、粉々に分解するようなマネはしないはずだ。

ふう、と溜息を漏らしながらボーッと宙を見る。
説教のし過ぎで喉が痛い。

「ん？」

ＣＤプレーヤーがペロリと舌を出しているのが見えた。
電源切った時に間違えてイジェクトボタンを押したのか？
俺はＣＤをプレーヤーから受けとって、ケースの中にしまい込んだ。

ＣＤのジャケットって前衛的なものが多い気がする。
ショップの中で目立つ装飾を施して注目してもらおうという魂胆なのかもしれないが、
そういう装飾がショップに溢れてしまうと、逆に地味なものが目立

ちそうな気がする。

ＣＤのジャケットのデザインで思い出したが、
そういえば零雨と麗香は結局私服がないままなんだよな。

ポケットに入っている携帯電話を取り出して、チカに電話をかける。
余計なお世話かもしれないが、零雨と麗香の私服の購入を依頼するためだ。

《もしもし、コウ、あんたがあたしに電話してくるなんて珍しいわね》

電話に出て最初の挨拶がこれだ。
若干の上から目線のこの言い方、イラッと来る。

「何でもいいだろーが」

《分かった！もうお金を使い切っちゃって、援助してほしくて電話したのね？》

「違うね」

俺は瞬答。
そんな世の終わりみたいなことがあってたまるかってんだ。

《も～そんなこと言って～、素直に援助してくださいって言えばい

いのに》

「他人の金をあたかも自分の金の如く使う誰かさんとは違うんだよ」

俺の金を握らせ、勝手に零雨に水を買わせに行ったチカとか、
アイスクリームを買って食べていたチカとかな。

《何そのイヤミ、あれはあれで私が昼ご飯作って終わりじゃなかったの？》

「……ふう、とにかく、俺がお前に電話したのは別の用件のことだ」

こんなところで言い合いしてても先には進まん。
少し強引だが、本題に戻らせてもらう。

《自分の不利な状況になると、そうやって逃げるのね》

「俺はたださっさと本題に入りたいだけだ」

《……で、何？》

「零雨と麗香の服装のことなんだが」

《ああ～それね。あたしも気になってたのよ、
昨日は日曜日だってのに学校の制服姿でコウの家にいくなんて。
（理由を）聞いてみようかなと思ったんだけど、
なかなか言い出すタイミングがなくて、結局聞けずじまいになっちゃったのよねー
それでさあ――――》

用件の主題を言っただけで、
よくもまあ準備していたかの如くペラペラと言えるな。
これが女の特徴ってやつか。
電話で長話になりやすいというのも頷ける。

「……ちょっといいか？
語るのはそれぐらいにして、そろそろ俺に用件を言わせろ」

《あっ、ごめん、つい喋っちゃって……》

「お前、通話料金で親に怒られたことはないか？
俺が考えるに、女同士の電話とかになると、携帯のバッテリーが持たないぐらいの長話になってると思うんだが」

《……なかなか鋭いわね。
長話に備えて、今も携帯の充電スタンドを装着させたままこうやって電話してるのよ。
普通に使ってたら電池なんて3ヶ月ぐらいで寿命がきちゃうからお金がかかっちゃうのよ。
だから、家にいるときはこうやって極力電池を使わないようにして――
っていうか、そんなことあんたには関係ない話でしょ？
……で、用件って？》

「今度あいつらと服を買いに行ってやってほしい。
あいつら、こっちに引っ越してきたはいいが、どういうわけか私服は持ってきてないらしい。
そんでよ、あいつら冗談抜きで服選ぶセンスねえから、お前がしっかりとコーディネートしてやってほしい」

引っ越してきたということが嘘であるということは、今のところ俺しか知らない。

《何でコウがそんなこと知ってるの？》

「昨日、お前らが帰った後、買い物に行ったんだが、その時にそいつらもついてきてよ、
衣料品を見たいって言い出したから理由を聞いたらそれだったわけだ」

《――コウ、それ嘘でしょ？
明らかに昨日電話した時の話と矛盾してるわよ？》

ぅ……

自分で自分の首を絞めてしまった。
昨日の激安店にチャリで買い物に行った話をしてたことをすっかり忘れていたぜ。
もうちょっと頑張って働こうぜ、俺の海馬。

《……謎だわ。
昨日は何してたの？
まさか変なことはしてないわよね？》

「……」

《まあいいわ、今度あたし、他の友達と久しぶりに買い物に行くことになってるから、
友達からオッケーもらえたら二人も誘ってあげる》

「そうか、悪りいな」

《『悪りい』って、あんたも親切心で電話してるんじゃないの？
もしかして、麗香に頼まれたの？》

「いや、俺が独断で」

《そう、用件はそれだけ？》

「ああ」

《じゃあ、切るね》

「また明日」

《バイバイ》

……ピッ

もう8時か……腹減った。

冷蔵庫の中には、今は大量のもやしが入っている。
塩茹でにして食うか。
どこか虚しい感じがするのは、もやしという響きが原因だろうか？

俺はそう思いつつも何気に携帯電話をいじる。

アドレス帳に、当然ながら零雨と麗香の名前があった。

何故そんなことをしたのかと聞かれても、俺には分からない。

俺は、零雨の備考欄に、「修理屋」、麗香の備考欄に、「理容師」と書いていた。

もしかしたら、俺はあいつらが目的を果たせば消えてしまうのを知っているから、

非日常という日常が確かに存在していたという、

証拠兼思い出を残しておこうとでも無意識のうちに考えていたのかもしれない。

テンプレ通りの起伏のない平坦で普通の人生を望む俺が、だ。

……そうだな、これからは零雨と麗香が何をしたか、この備考欄に書いていくことにしよう。

まて、やはり備考欄には字数制限があるから、パソコンに記録しておこう。

アホらしくなってすぐに記録なんてやめちまうだろうけどよ。

「……っとやべえ！」

今日バッグを送る約束だった。
早いところ出しに行かないと持ち主に迷惑かかるじゃねえかよ！

俺は空腹に耐えながら、大急ぎで数個の段ボールに、バッグを一つずつ入れる。
そして宛先が間違ってないかを確認して、住所を書いたメモ紙を貼る。

あとは、コンビニに行って住所を宅急便の注文用紙に写して終わりだ。

さっさと行っとかねえと、明日発送になっちまう！

その後、俺が近くのコンビニの敷地に駆け込んだ時、
コンビニから出て行く宅急便の車を見て、慌てて追いかけたことは秘密である。

第2話－ＥＮＤ　ハウス・クリーニング　ホームタウン・クリーニング（後書き）

第二話終了です。
作者自身、最後の極道の最期の描写はきつすぎたかな、と思っていますがいかがでしょうか？
感想、レビュー、その他諸々は３６６日、２４時間体制で受付中です。
ポイント評価、１ポイントだけでも……あつかましいですね、すみません。

さて、第3話についてですが、夏休みが舞台になる予定です。
普通に考えたらそんな絶好な舞台、逃すはずありませんよ。
一応第４話も夏休みを舞台にした作品を書きたいと思っています。
コメディー部分拡大は確実でしょう。
え？今までにコメディー部分なんてなかった？
それは困りましたねぇ……（笑）

というか、この小説の正式な分類はどの分類なんでしょうね？
ファンタジー？コメディー？ＳＦ？

この小説はフィクションです。
登場する人物、団体、組織名、地名などは架空のものです。

第3話－1　音楽祭と妹　奴が来た！（前書き）

第3話連載開始です。

待ってくれていた方もいらっしゃると、信じたいです。
適度に頑張っていこうと思います。
どうぞよろしくお願いします。
5人では寂しいので新キャラ投下します、はい。

推定読了時間：約3時間56分（236分）
（500文字／分、端数切り上げ）
※読了時間は、個人差があります。
しおり機能をご活用ください

第3話－1　音楽祭と妹　奴が来た！

「あ～、チクショウ！」

何で夏休みの最初（ハナ）からこんなダルイことをやらなきゃならん羽目になるんだ！

俺は今、肉まんの蒸し器のような暑さに汗を滝のように流しながら、目的地に向けて自転車を全力で漕ぎはじめてから約二時間が経過し、己の体力・精神力が限界に来ているにもかかわらず、速度を落とすことができないという地獄を一人体験している。

なぜこのような事態になったのか、目的地はどこか、それを説明するためには、
時間を巻き戻す必要がある。

＊＊＊回想＊＊＊

遡ること五日前。
その日は一学期の終業式前日であった。

終業式間近になると、全国の小中高校の大部分でこぞって実施される「短縮授業」。
俺達の学校も例外ではなく、午前中に授業が終わる。
とはいっても、ほとんど授業なぞ、それ以前に行われた、
教師達の大人の事情でペースアップされた濃密な駆け込み授業のお陰で
どの教科もやりつくしてしまったため、実質的には休みのようにな

っている。
結果、生徒は授業中にもかかわらず席を立ち、
友達とこれでもかと言うほどのマシンガントークの弾幕を教室の至る所で展開させていたり、
携帯電話をイジッて遊んでる奴がいたりと、騒がしい。
本来ならばこの状況を改善・指導しなければならない立場の教師陣も、気が緩んでいるのか、
一時間目からこの三時間目まで、生徒の会話に入ってみたり、寝てみたりしている。
教室の窓から雲が変形していく様子をのんびりと観察し、
「あの雲、ここのバーコード校長に似てんなぁ」といった感じで、
特に考えずに静かにボーッとしていたかった俺にとっては、不快極まりない環境だ。

「あ、そうだ足立、お前の両親からメッセージを預かってるぞ」

担任の担当する教科の授業中、担任は俺に茶封筒を渡してきた。
足立とは俺のことで、足立光秀、あだ名はコウだ。
俺の実家はここから約千キロメートルの遠隔地の田舎で到底通えないため、
一人暮らしをしている。

「あ、どもっす」

俺は封筒を受け取った。
文面からしてお袋の書いた手紙のようだ。

以下、内容。

【光秀、ちゃんと朝昼晩、三食きっちりとってる?

今年は猛暑になりそうなんだって。倒れたりしないように気をつけるのよ。
それから、三食きっちりとると、夏バテ防止になるんだって。
食中毒の多い季節だから、衛生面には気をつけてね。
熱中症にならないよう、こまめに水分……
――――――――《中略》――――――――
ところで、美羽（みわ）が光秀に会いたいっていってうるさいから、
夏休みの間一緒に暮らしてあげてやってほしいの。
七月二十三日の午前十一時二十五分着の飛行機の便を予約したから、
美羽を空港まで迎えに行って頂戴。
夏休み分の仕送りは美羽に持たせて行くから、会ったらすぐに受けとって。
今回は美羽と夏休みを過ごすわけだから、
仕送りも奮発していつもの三ヶ月分送るね。
いつもより多い分、独り占めしないで、美羽にいい思い出を作ってあげて。
それから……《以下略》……】

めんどくせえのレベルじゃねーぞ、これ。
手紙に出てきた美羽とは、現在小学一年生のガキ真っ盛りの俺の妹、足立美羽のことだ。
寂しがりで、泣き虫で、わがまま。
こんなガキの扱いほど精神擦り減らすもんはない。
もちろん、俺にもこのようなガキンチョの時代があったわけだが、
家でゲームしたり友達とカードゲームで対戦したりと、割と大人しい方だったような気がする。
確かに、いつもの三倍の額の仕送りがあることに関しては夢のある話ではあるが、
美羽のことを差し引いて考えるとプラマイゼロ、

むしろ差し引きすぎてちょっとばかりマイナスの方向に傾いている。

美羽をこっちに寄越してきたのは、両親が美羽の世話に疲れたからではないか、

という息子としてあらぬ疑いを俺は持っているんだが、理由はこうだ。

この手紙の文面には、俺の家に美羽を寄越していいかどうかの伺いの文章が一文字たりとも存在せず、

その上飛行機の便を既に予約してある節まで書いてある。

この手紙が来るまでに、実家からそのような連絡は無かったことも考えると、

そう取ってもおかしくはないだろう。

それよりも、小一の娘を一人で飛行機に乗せるのはちょっと酷じゃねえか？

飛行機のシートベルトを扱えるかどうかも怪しい。

「ねえコウ、何の手紙だったの？見せて」

チカは俺が手紙を読んで苦い顔をしているのに気がついたようで、わざわざ席を立ってこっちへ来た。

「ほらよ、俺の妹がこっちに来るんだとさ」

チカに手紙を渡すと、くい、とメガネをかけ直し、食い入るように文章を眺める。

「――ふーん、妹が来るんだ。

コウは家族のこととかしゃべらないから、妹がいるなんて初耳」

「そうだよ、参ったぜ、マジで」

「今何年生？」

「小一」

「じゃあ結構小さいのね」

「そう、そこが問題なわけだ。
チビで一人じゃ何もできないクセしてあーしろ、こーしてと口ばっかり、
喜びゃ、ギャーギャー騒ぐし、何かちょっといえばワーワー泣くし、
自我丸だし、欲求垂れ流しの超めんどくせえ相手だ」

「……コウ、ちょっと聞いていい？
今あんたがボロクソにけなした妹は、本物の妹？」

チカは心持ち嬉しそうな顔つきで俺を見つめ、回答を待っている。
それはまるで血の繋がっていない兄妹が織り成す、
斬新極まりない昼ドラが身近でリアルに体験できると期待しているような顔もちである。

「残念なことに、血の繋がっている妹だ」

二重の意味を込めた残念である。

「ふーん、でもあれからまだコウはお金もらってないんでしょ？
あたしからの援助も頑なに断っちゃうし……今朝は何食べてきたの？」

「もやしを一袋塩茹でにして食ってきた」

知っている人も多いと思うが、一応説明しておくと、
今から約二週間ほど前、俺はＣＤプレーヤー（一点限りの半額セールで四万円）を購入し、
若干の金欠状態に陥っていたのであるが、そこに特例的出費がタイミング悪く重なり、
食費を一食百円台まで落とさなければ生活できない状態まで陥ってしまった。
そして今もその爪痕が今朝の朝食に響いているのだ。

「……じゃあ、今日の昼ご飯の予定は？」

「抜き」

「夕食は？」

「もやし」

「あんた、そんな生活してたら本気で死ぬよ？」

「俺はそう簡単に死にはしねえよ。
それにもやしは値段の割に意外と栄養価があるんだぜ？」

「分かった。あたしがあんたにモヤシオタク、略して《モヤオタ》の称号をあげる」

「そう言われて俺は一体どのようなリアクションをとればいい？」

「素直に喜べばいいのよ」

「わーい、わーい、やったーって全っ然嬉しくねえし」

モヤオタと言われて喜ぶ奴の顔が見てみたい。
万が一、奇跡的にモヤオタと言われて喜ぶ奴が周辺にいたり、
または実際にモヤオタと言われて喜んでいる映像、画像を持っている方がいれば、
ぜひ俺に御一報頂きたい。

「それよりもさ、そんな状況で空港までの交通費どうするの？」

「ないものは仕方ないさ」

「仕方ないって、どうするのよ？電車で行っても一時間はかかるよ？」

「頑張るしかないさ」

＊＊＊回想終了＊＊＊

というわけで、俺は自転車で空港まで向かうという暴挙に出ているわけだ。
しかも今朝寝坊して予定より一時間遅く出発したせいで、
ペースアップを余儀なくされている。

帰りはどうするかって？
……知らん。とりあえず美羽に会えば待望の生活費（特大）が手に入る。
生活費が手に入れば選択肢が格段と広がる。

あとどうするかは流れに任せりゃどうにでもなるだろ。

当然、このような状況下で歩道を走ることなど危なっかしくて不可能なため、
ガラにもなく俺は車道の隅で立ち漕ぎをして、並走する内燃機関と競走している。
唯一助かったのは、今俺が乗っている自転車に二十一段階変速機がついてることで、
路面の状況に合わせて適切なギアにチェンジ出来るから、
上りでは回転力（トルク）に重点を置いたギアに、
平面や下りでは最高速に重点を置いたギアに設定でき、足の負担が一定に保てる。
普段は変速機なんて使わないんだが、こんなに便利なアイテムだったのかとこいつを見直したぜ。
それでもやはり、交差点で減速を余儀なくされ、
一旦失った勢いを回復させるまでにはそれなりの体力を消耗する。
出発してから何回かあったのだが、赤信号で停止した直後に青信号になると、ものすごく腹が立つ。
体力を回復させるでもなく、ただ単に勢いを殺すだけの仕打ち、
俺にとってみれば単なる拷問以外の何物でもない。

遠距離が故に、モチベーションの維持に苦労するかと思いきや、
意外なところにモチベーション維持に役立つ強力な助っ人がいたため、
気分が滅入りそうになっても、なんとかペダルを回し続けている。

「空港まであと……五キロメートル」

強力な助っ人とは俺の頭上にちょこちょこ現れる青い板のことで、
このように目的地までの残りの距離を教えてくれる。

あとどれぐらい残っているのか分からずやみくもに自転車を漕ぐのと、
残り距離が分かっている状態で漕ぐのとでは、雲泥の差がある。

このように、俺がこうして漕ぎ続けていられるのは、
体力的には変速機、精神的には案内板がサポートしてくれているお陰であることは明確であった。

それから三十分後。
俺が空港近くの駐輪場（有料・二百円／日）の受付窓口へ自転車に乗ったままＦ１のピットインさながらの勢いで突然進入、急停車したしたのを見た半袖姿の受付のオッサンは驚いたようだった。

「兄ちゃんお急ぎかい？」

頭に白髪が生えたオッサンは目を丸くしながら言った。
俺はあの一件以来「兄ちゃん」と呼ばれることに過剰反応を起こしてしまったようで、
言われると今は亡きナントカ会、東播会だったか、とにかくその連中のことを思い出してしまう。
このような症状は一過性のものであると信じたい。
何しろ、これからしばらくの間、妹からそう呼ばれる運命にあるからだ。

「ええ」

俺は駐輪代を確かにオッサンの手に渡した。
やりくりして辛うじて生み出すことが出来た二百円。

オッサン、この二百円はただの二百円じゃねえんだぜ。
それは俺の節約魂が生み出した努力の結晶そのもの、大事に扱ってほしい。
オッサンは駐輪場所を指定すると、
いってらっしゃい、と急いで駐輪し駆け出して行く初対面の俺に言うのだった。

駐輪場からターミナルまでは三分ぐらいか。
走りながら携帯電話を取り出して時間を確認すると午前十一時三十分、
美羽の到着する便よりも五分遅れている。
これは急がねば、兄ちゃんがいない、と美羽がワンワン騒ぎだしちまう！
本当にめんどくせえ。

ターミナルビル内に入ると、高い天井、ひんやりした空気、そこそこの数の利用客が目に入る。
そのなかに美羽の姿はぱっと見た感じでは見当たらない。
ターミナルを歩き回り、飛行機の便を調査した結果、飛行機は既に到着しているらしい。
しかし美羽の姿はない。
待ち合わせの場所を決めておかなかったことを思いきり後悔している俺だが、
後悔ばかりはしていられない。
まだ俺が行ってない場所はあるか？
――ある。インフォメーションセンターと、利用者専用出口。
もしかしたら、迷子扱いされているかもしれん。
その場合はインフォメーションセンターに連れていかれているだろう。
そうならば、飛行機の到着からそれほど時間が経っていないことを

考えると、
暫くすりゃ、迷子の放送でも流れるだろう。
しかし、インフォメーションセンターに迷子はいないかと俺が問えば、
職員は迷子探しを始めてしまうだろう。
迷子探しを装った方が楽といえば楽なんだが、実際にやるかと言われれば気分的に憚(はばか)られる。
というわけで、まずは出口からあたってみよう。

――いた！
出口の前で、美羽の両脇に空港職員男女一名づつ、四十代前半の体格のがっちりした男と若い女の二人がいる。
女の方は、中腰になって、美羽と会話している。
どうやら美羽の相手をしながら、俺を待っていたらしい。

第3話－2　音楽祭と妹　美羽の欲求

「あっ！おにーちゃんだ！」

背中に身長の割には合わない大きなキャラクター付きのリュックサック、
一泊用のキャリーバッグを持っている美羽が俺を指差して笑った。
あまり人を指差すのは良くないことなんだが、小一のチビだ。今言ったって分かりやしない。
空港職員は、俺の顔を見るなり軽く一礼。
俺はまず、付き合ってくれていた空港職員と話をせねばならん。
顔も名前も知らない連中と話をするのは苦手だ。

「ああ、どうもありがとうございます」

敬語はどうしても慣れない。

「この子のご家族様でしょうか？」

聞いてきたのは若い女の職員。
男の職員の方は、そろそろいかねばならぬ用事があるからと、場を去っていった。

「はい、美羽の兄の光秀といいます」

俺の口から美羽の名前が出てきたことで家族と認識したらしい。
職員は美羽を俺の隣に持ってきた。

「さようでございますか」

「仕事中に迷惑をかけてしまい、すみません」

「とんでもないです、あまりにも小さい子が一人で出口から出てきたので、
最初迷子かなと思っていたんですが、
『着いたらお仕事してる人に渡してって言われた』って、メモを渡してくれたので」

職員はそのメモを俺に差し出す。
なるほど、親が出口で美羽を待たせるよう、お願いしてたってわけか。

「とても大人しく待っててくれていたので、感心しました。
うちにも小学二年生の息子がいるんですけど、やんちゃばっかりして言うこと聞かないんです。
帰ったらこんな子もいるって、教えます」

俺は携帯電話の時計をちらりと見て、そろそろ失礼しますと言った。
向こうは深々と一礼をして、俺達が去るのをただニコニコして爽やかに見つめているだけだった。

飛行機に乗っている時、客室乗務員が機内販売をするのを見かけると思うが、
その時の乗務員の笑顔の中には、どこか作られたような機械的笑顔の人がいる。
表情筋を笑顔モードにしたとしても、それが心からの笑顔なのか、マニュアルで規定された笑顔なのか、何となく察しがつく。
心からの笑顔は、俺の腐りかけの心に響かせる何かが存在するが、機械的な笑顔は、俺の心には何も感じない。

ただ不気味なだけである。
麗香も笑顔を見せるが、あれは感情的笑顔なのか策略的笑顔なのか分かりづらい。
それだけ精巧な笑顔を麗香は持ってるわけで、
そこまでの完成度(クオリティ)の笑顔を彼女達が作れるならば、
誰も何も言わないはずであるが、俺がこのように言及していることからも明確なように、
そこまでの品質は残念ながら到達していない。何とかしてほしいものである。

俺は美羽の手を引きながら、そんなことを考えていた。

「にいちゃん、ジュース！」

「俺はジュースじゃねえよ」

一年数ヶ月ぶりの再会を果たし、美羽と最初に交わした会話がこれである。

「美羽、俺に渡すものはないか？」

「えっとね、おかねをわたしてってね、お母さんから言われた」

「それはどこにある？」

「えっと……」

美羽は立ち止まって背中のリュックを下ろし、ガサゴソと探しはじめた。
まったく、小一の娘に大金を持たせる親の心理が掴めない。

「あった！」

美羽は緑色の銀行の名前が入った封筒を俺に渡した。
なかなかの厚みがある。中を覗くと一万円札がみっちり。
それから、俺に向けてと思われる、メモ紙が一枚。

【光秀へ
　相談も何もせずに勝手に決めてごめんね。
　美羽がどうしても会いたいって言って聞かないから、
　ついこっちで話を進めちゃって……】

親バカだな。

【でも、「かわいい子には旅をさせよ」って諺もあるぐらいだし、結果的には良かったかな？
　美羽が帰るタイミングはこっちから連絡して教えるから、それまでは仲良くしてあげてね
　　母より】

かわいい子には旅をさせよ、その諺を適用するのは数年ばかり早過ぎだと思うのは俺だけではないはずだ。

「おなかすいた～」

リュックを背負った美羽は俺に第二の欲求を伝える。

「オイオイ、リュックのチャックが開いたままじゃねえかよ。
　そのうちリュックからモノ落っことすぞ」

俺は美羽の後ろに回ってチャックをしっかり閉じながら、辺りを見回す。
売店はあるが、レストラン的なものは見当たらない。
とはいっても空港だ。どこかにレストランがあるはず。
レストランがあるとしたら、恐らく見晴らしのいいところ、最上階もしくは屋上か。

上の階に上がると、俺の予想通りの場所にあった。
値段的にもそこそこで、高すぎもせず、安すぎもせず。

「昼飯はここでいいな?」

美羽と連れてレストランに入る。
田舎暮らしの美羽にとって、レストランはあまり行ったことがないのだろう、ものすごく喜んでいた。
外食ごときで喜ぶなんて、いつの時代の人間だよ、と心の中で突っ込んでいる
俺であるが、実のところ、俺も嬉しい。
もちろん、それは今までモヤシで命をつなげてきた俺にとっての久しぶりのまともな食事だからであり、隣で騒いでるチビとは理由(わけ)が違う。

店の人に案内されたテーブル席は、窓から飛行機の離着陸がよく見える、見晴らしのいい席だった。
店の人が水とおしぼりを持ってくると、美羽は早速水を飲む。
俺がメニューを見ながらどれにしようか考えている間、
美羽はデザートのメニューを見ながら、俺にチラチラと視線を送ってくる。
要はデザートが食べたいのだ。
喉が渇いた、腹が減ったという欲求はどうしようもないものである

が、
デザートが食べたいという欲求は、贅沢の部類に入る。
美羽は小さいながらも、そのあたりは理解しているらしい。
そんな美羽の行動を俺はそれを知らんふりしてまずはメニューを決める。
もうこいつでいいか、値段もボリュームも悪くはない。

「美羽、お前は何を食べたい？」

美羽の食えるメニューはお子様ランチ程度であることぐらいは百も承知だ。

「えっとね、美羽はね、これが食べたい」

「お子様ランチセットＢってやつか？」

「うん」

「注文はそれでいいか？」

「……。」

美羽はデザートメニューを見つめるだけで、何も答えなかった。
分かりやすい奴だ。

「俺と約束してくれるか？
俺の言うことを聞いて、その通りにすること。
ここでは、俺は美羽のお父さんお母さんの代わりだ。
田舎とは違って、ここは都会だ。危険なものもたくさんある。
もし、言うことを聞かなかったら、死んでしまうことだってある。

だから、今俺が言っている約束は、美羽の安全に関わる大事なことだ。
俺の言うことを聞くと約束できるなら、そこのメニューから一つ、好きなものを選んでいい」
美羽の顔がパアッと明るくなった。
「約束する！」
「なら欲しいものを一つ選んでいいぞ」
美羽はこれが食べたい、とチョコレートケーキを指した。
パフェとか言われたら堪んねえなとか思っていたが、そうでなくて良かった。
注文した料理が届き、口に入れている間、美羽は楽しそうに飛行機の中での出来事を述べていた。
俺は方耳で聞きつつ、どうやって俺の家まで帰ろうかと思案していると、
突然美羽が声を張り上げた。
「あっ！お母さんからもう一個わたしてっていわれてたのがあった！」
美羽はリュックから、茶封筒を俺に渡した。
封筒には、「往復の交通費」とだけ書かれており、四万円も入っていた。
こういうのがあるなら早く出せよ。

俺の家はそんなに金持ちじゃないのに、
どっからそんな金が沸いてくるのか不思議だとも思ったのだが、俺の知ったことではない。
とりあえず、これで帰りはなんとかなりそうだ。

会計を済ませ、近くの自動販売機で茶を二つ買って、駐輪場に自転車を取りに行った。

「お帰り」

駐輪場のオッサンは俺の隣にいる美羽を見つける。

「お兄ちゃんの妹さんかい？」

「はい」

オッサンは中腰になって美羽に話しかける。
美羽はおいといて、俺は自転車を取りに行くことにしよう。
背後から会話する声が響いてくる。

「お名前は？」

「足立美羽です」

「何才？」

「六才」

「どこからきたの？」

「お家から飛行機に乗ってきた」

「そうか、誰と一緒に来たのかい？」

「美羽一人」

「はぇ～！一人かい！偉いねえ、おっちゃんビックリだよ！」

「エヘヘヘ……」

俺が自転車を引いて美羽の元に向かうと、オッサンはその場にはいなかった。

「美羽、さっきのオッサンはどこ行った？」

「どこかに行っちゃった」

オッサンは小走りで俺達の元に戻ってくると、美羽に駄菓子の沢山入ったビニル袋を渡した。

「いいんすか、もらっても」

「かまわんよ、俺の死んだ孫そっくりだったからな、これくらい惜しくはないよ」

孫が死んだとか、サラっとＨｅａｖｙ（ヘビィ）な話をしないでくれ。

オッサンは一瞬暗い顔を見せたが、すぐに元のとおり、陽気な顔に

戻った。
傷はまだ癒えてないらしい。孫については触れない方が良さそうだ。

「ありがとうございます」

俺達は駐輪場を後にした。

「おにいちゃん、次はどこ行くの？」

自転車を引く俺と、キャリーバッグを引いて行く美羽は、空港まで戻る。

「家に帰る」

「もうお別れ？」

「バーカ、んなわけがあるか、俺の家だ」

「おにいちゃんの家はどこ？」

「ここから自転車でおよそ三時間の……っつっても分からんか」

「遠いの？」

「遠いな」

「美羽の家から空港までと、にいちゃんの家から空港までとどっちが遠い？」

「俺の家から空港までの方が遠いな」

空港前のタクシー乗り場に来た俺達は、タクシーをアイドリングさせ、
歩道の日陰でタクシー仲間と談笑している運転手の集団に向かった。

「すみません、ちょっと遠距離になるんですけど、いいっすか？」

「おっ、どこまで？」

俺が住所を教えると、運転手が口々にお化けだお化けだという。
遠距離客のことだろうか？

「おい新入り、お前行けよ、ノルマ達成率、営業所内で断トツ低いんだろ？」

「いいんですか、私が行っても」

「おう、行ってこい」

そんな会話の末、背中を押されて集団から出てきたのは、
若い男性の運転手、二十代後半ぐらいに見える。

「すみません、お待たせしました」

「自転車も載せられますか？」

「トランクに載せておきましょう」

美羽を先にタクシーの後部座席に乗せ、
運転手と二人掛かりで自転車を横倒しにしてトランクに載せるも、
案の定トランクが閉まらない。
自転車の車輪が二つ、バンパーのように飛び出している。

「仕方ないですね、このまま行きましょう」

振動で自転車が落ちないよう処置を施し、タクシーに乗り込んだ。

第3話－3　音楽祭と妹　麗香の暴走

タクシーに揺さぶられることおよそ一時間半、俺の住んでいるマンションに到着。
自転車で三時間もかけて移動して来た道程（みちのり）を、
二倍の速度で巻き戻して帰ってきたわけで、俺は人間と機械の越えられぬ壁を痛感。
道中の美羽の様子を述べておくと、
見慣れない街の景色に興味津々で、
クルマの窓に鼻を押し付けんばかりの勢いで眺め、
それだけならば良かったのだが、途中でお茶を飲もうとしてこぼしかけるわ、
突然トイレに行きたいと言い出すわ
（トイレ探しでメーターが二段階も余計に上がりやがった、ちくしょう！）で、
飛行機の中で大人しくしていたかどうかも疑わしい程の元気さであった。
後部座席で俺が美羽を見張ってたから良かったものの、
ちょいと目を離せば走行中にシートベルトを外し、
流れる景色の中に飛び込んでしまいかねない程のじゃじゃ馬ぶりだった。

我ながらよくコイツを生きたまま自宅に連れ帰ることができたもんだと感心するね。
これから暫くの間、コイツと一緒に過ごさねばならぬのか……胃が痛くなるぜ。

俺は運転手の男に二万円弱の料金を払った。

「次、何かご用がありましたら、ぜひ私にお願いします」

運転手の男は連絡先の書かれた名刺一枚と、ティッシュ二つをちゃっかり俺に渡し、
自転車をトランクから下ろすと、アクセルを踏んで颯爽と視界から消えて行った。
憎い奴だな……帰りも頼んでやろうじゃねえか、バカヤロー。

家に戻ると、時計は午後二時を指している。
俺が家を出たのが朝八時半、六時間ほど家を空けていたわけだ。
外出時間のうちおよそ半分が自転車を漕いでいた時間であることを思い返してみると、
俺って意外とすごいんじゃね、と思ったり思わなかったりだが、
まあこんなことも今回が最初で最後さ。
そうであってほしい。

「お家、きれいだね！」

美羽が生意気にも俺の住居についての評価をし始めた。

「美羽の家よりずっときれい！」

「ああ、そう。良かったじゃねえか」

「ねえ、美羽のともだちここに呼んでもいい？」

「お前の友達がわざわざここまでやって来るとは思えんな」

「あ、そっか。ここは美羽の家からずっと遠いんだった」

美羽はへへへと笑う。

こんなちびっ子に対して授業をする小学校の先生は偉い。マジ尊敬する。

こんなのが何十人と束になって「せんせー」とか言って迫ってくるわけだろ？

ああ、恐ろしい。俺がもしその立場になったら下手すりゃ半日で辞職だね。

俺にガキは扱えねぇ。

「おい、美羽ちょっとこっち来い」

俺は美羽のリュックとキャリーバッグを両手に、

以前チカによるジョーへの激しい制裁を行った部屋、旧修羅場ルームに誘う。

部屋には急遽用意した布団と、あらかじめ空にしておいたタンス、実家から送られてきた衣類などの生活用品一式、元からあったミニテレビなどが用意されている。

「なに？」

「この部屋はお前が自由に使っていい部屋だ。

勉強するのもよし、遊ぶのもよし、寝るのもよし、好きなようにしていい。

ああ、暴れ回るのは、なしだ」

「美羽の部屋？」

「そうだ」

そういうと美羽は異常なほど喜びだした。
やったー、と大声を張り上げ、ぴょんぴょん跳ね回る。
恐らく実家には美羽の部屋など存在しなかったんだろうが、はしゃぎすぎだ。

「今暴れるなっつったろ？」

「あばれてないもん、うさぎさんのマネしてるだけだもん」

「跳ね回らなくてもいいし、うさぎのマネもしなくていい。つーかするな」

俺の目にはうさぎではなく、バッタが跳びはねているように見えたが。

「は～い」

俺は半分呆れながら、キャリーバッグを開けた。

「なんじゃこりゃ！？」

中には美羽のおもちゃがぎっしり詰まってんじゃねーかよ！
おもちゃ同士の隙間は一切ない。
髪の毛が入る隙間さえだ。
これは正に３Ｄテトリスだ。縦横奥行きの全ての方向から見ても完璧。
キャリーバッグをひっくり返してだそうとするも、
おもちゃとキャリーバッグの隙間が存在しないため、落ちてこない。

「お母さんがね、全部用意してくれたの」

と、美羽。

お袋、こんな才能を隠し持っていたのか！

いや、これは才能ではない。特殊能力の域だ。

キャリーバッグを根気よく叩き続けていると、プリンのように中身がツルンと出てきた。

おもちゃの塊が床に当たると、バラバラになり、個々のおもちゃが顔を出す。

リュックサックの方もひっくり返してみたところ、多少のおもちゃは出てきたものの、

ほとんどは地図だったり、学校の宿題だったり、実家から持参のお菓子だったりと、

健全な内容であった。

キャリーバッグの中にこんな伏兵が潜んでるとは思いもしなかった。

それから時間が進み、時は夕方。

美羽と久しぶりのまともな買い物を済ませ、

（一人の方が良かったが、マンションのベランダから転落してもらっては困るので仕方なく）俺は夕食の用意、美羽はテレビを見ていた。

実家には、美羽がここに無事到着したという連絡をタクシーを降りてすぐにしたから、向こうも安心しながら飯を食えるはずだ。

美羽は口をポカンと開け、アホ面（づら）のまま、ただただ食い入るように

画面を見つめている。
時刻的には夕方のニュース番組が終わり、バラエティー番組の時間に差し掛かっている。
今日の夕飯は簡単なラーメンだ。
時間もかからず、すぐ出来上がる。

「おい、夕飯できたぞ」

「は～い」

美羽は実家から送られてきた食べ慣れた食器にラーメンが入っていることに安心した様子で、
俺には目もくれず、ただひたすらテレビを見つめながら食っていた。
もちろん、テーブルは一人用であるから、俺は美羽に席を譲って、パソコン用の椅子に座って食っている。
テレビばかり見やがって、俺に会いたいと言って聞かなかったんじゃねえのかよ。
まあ、ちびっ子なんて大概そんなもんだろうが。
それに、四六時中ついて来られるようじゃこっちも迷惑だし、特に事欠いて言う必要はなかろう。

「ねえ、おにいちゃん、ちがう（番組）の見ていい？」

「え？ああ、別にかまわん」

俺も見たい番組があるのだが、これはあらかじめ予期できていたことである。
ここで俺は一歩大人になって譲らねば。
……ちょっと待て。
これって俺、チャンネル争いできんじゃね？

やったぜ、これで念願のチャンネル争いができる。
……いやいや、小一と高二が争ってどうするんだ、俺。
絶対に俺が勝つじゃねえかよ。大人げない。
美羽が変えたチャンネルでは、子供向けの大衆アニメをやっていた。

「美羽、それ食ってこれ見終わったら風呂入れよ」

「うん」

俺にわき目も振らずに答えた美羽は、どんどんテレビに引きずり込まれていった。
俺が家を出てここで生活し始めた一年数ヶ月の空白を蹴っ飛ばし、片時も離れず一緒に暮らしていたんだという雰囲気をそれとなく醸し出す美羽は、
俺にわずかな安堵を与えてくれたような気がする。
面倒臭い奴であることには変わらないが。

美羽が見ている番組も終わろうかという頃、俺の携帯電話が鳴った。
俺は発信者を確認せずに通話ボタンを押した。

「もしもし」

《……私》

この声は零雨だ。
普通に会話してもただならぬ、ミステリアスな雰囲気が出てくるが、

電話だと、零雨には悪いが、幽霊が電話してきているようで恐ろしい。

「お前から電話なんて珍しいじゃねえか」

《……ジョーからの伝言》

「ほう、何だ？」

《……音楽祭へのステージ出場メンバーに……選出された。
明日午前十時に……高校前に来てほしい》

「はあっ！？んなこと一言も聞いてねえぞ！」

音楽祭とは、夏休み中、お盆直前に高校で開かれる祭で、参加は自由。
去年、俺も興味本位で行ってみたが、グラウンドに仮設されたステージの上で、
音痴なくせして歌が上手いと思っている、
自称バンド（中身はただのナルシスト集団）の痛々しいショーをやっているのを見て、
興ざめした記憶がある。
しかも伴奏も下手くそというからやってられん。
それでもやはり、こんな祭に来る輩は少なくなく、人でごった返していた気が。
ステージの近くでは、仮設テントの下、生徒が持ち寄ってきた不要な中古ＣＤを格安販売したり、
アーティストのグッズを販売していたりと、文化祭の前哨戦的な雰囲気があった。
中古ＣＤやグッズについてはなかなかのものも交じっており、そこ

目当てに行く価値はあるかと。

話を戻すが、音楽祭の出場・出店申込期限は今月末であることから推測すると、

ジョーはやる気満々らしい。

《……苦情、依頼主に……伝える？》

「伝えなくてもいい。俺が直接抗議する！」

俺は通話を切って、ジョーにダイヤル。

「おにいちゃん、お風呂～！」

「俺は風呂じゃねえ！」

あ～！こんな時に！

受話器のボタンを押す直前で携帯を置き、浴室へと向かう。

美羽は浴室前の洗面所で何もせず突っ立っていた。

「一緒に入ろ？」

「誰がお前と一緒に入るかっ！

小学生になったんだろ？自分で身体洗えねえと友達に笑われるぞ」

「え～」

「『え～』じゃなくてよ……

……一人で入れたらオレンジジュースあげてもいいんだが、どう

する？」

「やっぱり一人で入る～！」

「よし、ちょっと待ってろ」

ジュースに釣られるとは、かわいいじゃねえか。
俺は高い位置に掛かっていたシャワーを低い位置に掛け、
シャンプーその他諸々を床に置き、湯加減を調節する。
作業をしながら気がついたのだが、
美羽の頭の中は、《オレンジジュース＞＞＞＞俺》なんだな。少しへこんだ。

「ほら、準備できたぞ」

既に裸になって待機していた美羽だが、俺にはそんな趣味は存在しないのでスルー。
浴室に飛び込んだ美羽は、覗かないでねと言い、ドアをぴしゃりと閉めた。
覗くなといいつつ、洗面所で自らああいう恰好をしている時点で……な？
俺は洗面所にバスタオルと美羽の着替えを用意し、再び携帯電話を手にとった。

プルルルル……

《もしもし》

「もしもし」

《ああコウ、零雨から連絡は届いた？》

「バッチリ聞いた。だからこうしてお前（ジョー）に電話している。あれはどういうことだ？」

《知らねえよ、俺はチカに言われて零雨とお前（コウ）に連絡を回しただけで、
俺も何故か強制参加になってて仰天だぜ》

「チカが？」

《おう、チカは麗香から頼まれたと言ってた》

「何だよ、その芋づる式の連絡網はよ！」

《俺に言われたって知らねえよ！》

「勝手にそんなこと決まって、お前はどう思ってるんだ？」

《まんざらでもないかな～と》

「俺はゴメンだぜ。
俺の妹がこっちに来てるから、それどころじゃねえんだよ」

《だから俺に言われたって知らねえって！》

「……分かった。ちょっと犯人（麗香）に抗議（講義）してくる」

……ピッ

めんどくせえ……

続いて麗香にダイヤル。

プルルルル……

《もしもし？コウくん？》

「ああ、そうだ」

《どうしたの？》

「どうしたじゃねえよ、何勝手に俺を音楽祭ステージの出場メンバーに登録してるんだよ！？」

《だって、登録には最低四人と補欠一人が必要なんだもん》

「だからって勝手に登録していいわけねえだろーが！」

《ちょっと、なんでそんなに怒ってるの？》

俺、チカ、ジョー、零雨、麗香の五人でやるつもりらしい。

「はあ、お前はこの世界に来てから間もないからな……仕方ねえか。いいか？こういう大事なことをする場合は、必ず当事者にオッケーを貰ってから
行動を起こすものなんだよ。
下手するとお前、せっかくの仲間が出来たのに孤立するぞ？」

《……そうなんだ、ゴメンね》

「というわけで、出場メンバー登録を撤回してくれ」

《ごめんなさい、一度登録したら変更できないんだって……》

「おい――――――！」

《本当にごめんなさい！》

「……チッ、そうなったもんは仕方ない。
まず、なぜ参加しようという気になった？」

《この間ね、コウくんの家を掃除した時、音楽を聴いたでしょ？
何で人間は音楽を聴くことを好むのかなーって、それが知りたかったの》

「『人はなぜ音楽を愛するのか？』えらく哲学的な疑問だな」

《答えを得るのは難しいと思う？》

「かなり難しいと思うね。
お前の理解力のレベルで解が得られるかすら分からん」

《でね、音楽を聴く立場じゃなくて、
演奏する立場になったら何か分かるかもしれないって
考えてたら、ちょうどいいイベントがあって……》

「で、こうなったと」

《ごめんね》

「……仕方ねえな、明日朝十時に学校前なんだろ？」

《うん》

「処理能力オーバーで停止とかすんなよ？」

《大丈夫よ、停止しても一定時間が経てば、また再起動するから》

「俺は停止自体するなといってるんだ。
チカやジョーの前でそんなことになれば一大事だろ？」

《うん、気をつける》

「じゃあな、また明日」

俺は電話を切った。
夏休み前に空想していた理想の夏休みからどんどん遠ざかっていく。
クソッ！
気ままに起きて気ままに食い、気ままに宿題をし、気ままに遊び、
そして気ままに寝る。
そんな生活が良かったのに……

誰だ？俺に人間失格（ニート）の烙印を押そうとしたやつ！
俺は宿題するからニートじゃねーよ！
とはいっても、説得力ねえなぁ……ハハッ
ニートと俺は紙一重か。心得ておこう。

とにかく、明日は学校に行かねば。

第3話－4　音楽祭と妹　面倒な奴

翌日。
俺は集合時間に遅れないよう、朝七時に起きた。
というか起こされた。あのチビに。

夜中の一時頃、美羽は一番のお気に入りと思われるおもちゃを握り締め、
「一人で寝るのが怖い」、と半泣きになりながら俺の部屋に飛び込んできた。
どうやら寝ている最中に目が覚めてしまったらしい。

その時俺は、勝手に強制参加決定になった音楽祭のステージの上で、どのポジションにつけば一番目立たないかをベットに寝そべりながら考えていたところで、
結局どの位置にいても同じように目立つという最悪な答えしか見つからぬまま、
一人用のベットを二人で共有して泣き寝入りする羽目になってしまった。
それで、偶然朝早く起きた美羽の目に最初に飛び込んで来たのは、俺が寝ている姿。
それを見て本能的に俺を起こしたようだ。

俺はもう少し寝ていたかったが、今朝十時に高校前に集合という予定がある。
二度寝は遅刻の可能性の最大要因であることを考えると、勇気をだしてベットから降りる必要があった。

「今日の朝ごはんは何？」

美羽は目をこすりながら話しかける。

「朝メシは顔洗いと歯磨きをしてからだ」

俺は歯ブラシをくわえたまま、フライパンにベーコンを二枚突っ込んで加熱、
中の脂が染み出てフライパンにまんべんなく広がってきたところで
昨日買った新鮮な生卵を二つ、それぞれ目標（ベーコン）に向けて爆撃。
一回で一気に二人分の目玉焼きを作る。
完熟の目玉焼きが出来たところで、顔を洗い、歯ブラシを収納。

それから冷蔵庫から早く傷みそうな野菜をちょいと引っ張り出し、
パパッと調理。
電気、ガス、水道は親持ちであるから、
加熱時は当然火力はＭＡＸ。
これが日頃のストレス解消に役立っている。
もちろん、生で食えるやつをわざわざ調理するのはダルいから、
生オッケーのやつは洗って皿に盛るのみ。
後はパンでも焼いときゃ一丁上がりだ。

「おい美羽、できたぞ」

「は～い」

美羽を例の一人用テーブルに座らせ、朝メシを並べる。

「ほらよ、オレンジジュース」

「あ、忘れてた！」

美羽は昨夜、一人で風呂に入ったのは良かったものの、
肝心のオレンジジュースをもらうのを忘れるアホをやらかしていた。
こういうガキは大低、自分に不利なことはすぐ忘れるくせして、
有利なことはいつまでも覚えているものなんだが、美羽はちょっと
他とは違うらしい。
田舎ののんびりとした雰囲気が美羽をそうさせたのかもしれない。

美羽は幸せそうにジュースを一気飲みする。
俺はこの後出かけにゃならんのだ。頼むから、腹壊すなよ？

テレビをつけると、朝のニュース番組で特集をやっていた。
集団失踪の特集だ。
内容は、港区に拠点を置く指定暴力団の東播会の構成員が忽然と消
えた、というものであった。

「何のじけんなの？」

美羽がニュースに興味を示したようだ。

「人が一度に何人もいなくなったんだとさ」

「ふ～ん、見つかるといいね」

「……そうだな」

もうあいつらはどうあがいたって見つからない。
粉分塵になって宇宙空間を漂っている彼らをどう見つけることが出
来ようか。
俺はチャンネルを変えた。

まあ、どこの局もこの時間帯はニュースだからさして変わりはないが、
この話題にはできるだけ遭遇したくないのが本音だ。

いつも見慣れているのとは違う番組を見ていると、朝八時に番組が終わり、
「キッズタイム」と称した一時間半の番組が始まった。

テレビで番組表（地デジの特典的機能（オマケ））を確認すると、
三十分の番組が三連で一つの番組になっているらしい。
なるほど、これは夏休みに入ったガキ共が、
俺のような休日昼起きの堕落した生活を送らせないよう、
子供らが好きそうな番組を朝に持ってきて、釣るってわけだ。
ただ、大人の事情で予算はあまりないらしく、
放送できるのは旧世代のアニメだったり戦隊ものだったりと、昔のテープの使いまわし程度。
今は、昭和の香りが漂う実写カラーで、
昆虫野郎がバイクで爆走しているオープニング映像が流れている。

俺は立ち上がって食器の後片付けを始めた。
美羽はどうやら雑食らしく、
明らかに男子向けの番組であるにもかかわらず、美羽の目は完全にテレビに吸引されていた。

「美羽、それおもしろいか？」

「……」

「おい、聞こえてるか？」

美羽はテレビを見たまま反応しない。
おもしろいかどうかは、もう聞かなくても分かった。
すっげえおもしろいらしい。

「ねえ、おにいちゃん、このテレビ（番組）は次いつやるの？」

昆虫野郎がホネホネの雑魚を蹴散らし、
明らかに悪党と分かる人物と対決するシーンの最中、美羽が口を開いた。

「明日もやってんじゃねえの？」

「じゃあ、（またこれが見たいから）明日起こしてくれる？」

「……別に構わないが、二度寝するなよ？」

ハハ、美羽のやつ完全にテレビ局側の思惑通りの反応をしてやがる。
俺はこの時はただそうとしか考えてなかったのだが、
このあと、これが意外な方向から俺を苦しめることになる。

集合時間一時間前、俺は行く支度を始めた。
学校前集合と言われただけで、
麗香がどこで何をするつもりなのか、俺には見当がつかない。
まあ、もし学校に用があるにしても、
夏休み中は私服登校ができるから、改まって制服に着替える必要はない。

「どこに行くの？」

俺の行動に気づいた美羽は、テレビから一瞬目を離して俺に聞いた。

「ああ、ちょっくら出かける必要があってな。
一旦高校まで行く」

「こーこー？」

「学校だ、学校」

大低、ちびっ子にとって、外出は（比較対象としては不適切かもしれないが）犬と同じように出るだけで喜ぶものである。
俺みたく年を取ってくると、
これまた俺のように留守番したがるインドア指向が出てくるやつもいるが、
時間を遡ればきっと外出したくてたまらない頃がどこかにあるはずだ。多分。
で、俺の予感通り、美羽も行きたいと言い出した。

「お前は一人で留守番してろ」

「イヤ！美羽も行きたい！」

「大人しく留守番してりゃ、今度はぶどうジュース買って来ようと思うんだが」

「美羽も行く！」

チッ、この手は効かねえか。

大体、もし学校に入ることになった時、部外者である美羽を中に入れてくれるとも限らん。
そうなれば俺は必然的にクソ暑い陽射しがそれこそ俺を射す中、校門の前かどこかでみんなを待つ羽目になる。

「美羽、邪魔しないから！」

「あのな、俺は遊びに行くんじゃねえんだぞ？
遊びといわれれば遊びなんだろうが、俺にとっては一大事なんだ。
それにお前がついてきても、することなんてないと思うぞ？
家で大人しく遊んでた方がいいと俺は思うがな」

「それでもいい！」

「……分かった、早く服着替えて行く準備しな。
その代わり、何があっても絶対に文句を言うなよ？」

「うん！」

美羽は大きく頷いて、自分の部屋に駆け込んで行った。
負けたよ。
これだからガキは苦手なんだ。

「着替えてきたよ！」

「おま、何ちゅう格好して出てきやがる！？」

靴下は左右別々、ズボンはいいとして、前後逆のシャツ、よくそれ

で「できた」などと言えるな。
ったく、コイツはマジで手がかかる。

「ほら、ちょっとこっち来い、手直しだ」

というわけで、俺は美羽と学校前に到着した。

「ちょっと、遅いじゃない、十分も遅刻よ？」

俺以外のメンバーは既に揃っており、俺待ちだったようだ。
チカは俺を睨み付けたが、俺の手に繋がれている小動物を見てほっこり。
どうか変にチカの母性本能が刺激されませんように――――

「おい、そのちっこいのはどうしたんだ？
もしかしてお前、どこからか誘拐してきたのか？」

「バカヤロー、俺がそんな変態（ロリコン）に見えるなら
お前（ジョー）、ちょいと病院行って眼球取っ替えて出直して来い。
俺の妹だ、俺の。昨日電話でちらっと話したろ？」

ジョーは納得した様子で頷いた。

「悪いな、俺が出かけるときになってコイツが一緒に行きたいと言い出してな。
そんで遅れた」

「いいのよ、こんなかわいい娘が遅れた原因なら、いくらでも許すわ！
あんた一人だけで遅れてきたなら死刑だけど」
遅刻で極刑すか、世の中変わったな。命がいくらあったって足りん。
「コウくん、ごめんね」
麗香は俺と目が会って早々謝ってきた。
麗香は、零雨と共に夏の洒落た格好をして来ている。
ちゃんとチカとその友人たちと一緒に買い物出来たようだ。
チカもジョーも私服だ。
「麗香さ、昨日の晩に連絡してきてさ、
《コウから怒られた。勝手に決めてゴメン》って、あたしのところに電話してきたのよ」
「ああ、俺（ジョー）のとこにも連絡が来た」
「なんかさ、麗香って不思議ちゃんだよねー」
「不思議……ちゃん？」
麗香はチカの言葉に首を傾げた。
「そうそう。
なんか、あからさまに表立って変なことしてるわけじゃないけれど、
あ、今回は別ね？なんか、麗香の周りに不思議空間がまとわり付

いてるって感じ？」

麗香は俺に不安そうな表情を浮かべた。

《私の正体、ばれちゃったかなぁ……？》

《いやいや、ばれてない、ばれてない》

俺は手を小さく振って合図した。

「おにいちゃんのお友達？」

隣にいる美羽が俺に聞いた。

「ああ、そうだ」

「みんなおっきいね」

「当たり前だろ、俺の歳でお前ぐらいの歳の友達がいたら、変な疑いをかけられる」

「まあ、一旦学校入ろう？」

チカの提案で学校の中に入ることになった。

俺が懸念していた美羽立入禁止の制約を受ける事なく、むしろ歓迎された。

グラウンドで部活に勤しむやつら、特に女子から熱烈な視線を浴びることになったのだ。

視線の先には美羽だ。

かわいい、かわいいと連呼し、美羽が視線を向けた先の女子は悲鳴

を上げる。
中には携帯電話で撮影をするやつらまでも現れた。
心理が良くわからねえ。

「なあ、麗香」

「なに？」

「ちょっとお願いがあるんだが、こいつ(美羽)を引いてくれないか？
女子の視線が痛い」

「いいよ」

美羽を麗香に渡し、下駄箱でスリッパに履き替え、二階の職員室へ。
麗香は職員室のドアを二回ノック、ドアを開け、職員室に顔を突っ込む。

「すみません、音楽祭担当の先生はいらっしゃいますか？」

「……おう神子上じゃねえか、どうした？お前らも出るのか？」

職員室の奥から出てきたのは一番見慣れた顔――――もしや担任が担当？

「はい、昨日申込みをしたんですけど、担当の先生がお休みだったので」

「担当の玉城(たまき)先生は今
会議室で来賓(らいひん)とお話し中だから、ちょっと待ってもらわんといかん。

そこは暑いだろ？待ってる間、中に入って涼んでおけ」

「失礼します」

担任は俺達を中に入れると、奥の待合室的なところに案内した。

「足立（俺）、お前が出るとは意外だな」

担任が絡んできた。

「勝手に名前書かれて完全に強制参加っすよ」

「ガハハハハ、だろうと思った。
お前が人前に出るなんざ、普通じゃ考えられんからな。
まあ、たまには青春を堪能したらどうだ？ハハハハハ――」

「音楽、青春、か……」

担任が下品に笑う中で麗香がつぶやいたが、俺以外聞こえなかったようだ。
どうやら麗香の《人はなぜ音楽を愛するのか》という疑問に、《青春》という単語が答えまでのパズルの一ピースとして追加されたらしい。

「で、そのちっちゃいのも音楽祭に出るのか？」

「いや、ただの俺の妹っす」

担任は《ただの俺の妹》の意味をしっかり理解できていないらしか

った。

「そうか、兄妹でステージに出るのか。
足立といい、その妹といい、中々異色のバンドになりそうだな」

「出ません。」

チカが担任の一言に触発されてしまった。

「いいね、妹も参加しちゃう？」

「言い忘れていたが、こいつの名前は足立美羽（あだち みわ）だ。
それに、小一の妹が演奏できる楽器なんてたかがしれてる。
せいぜい《キラキラ星》を鍵盤ハーモニカで一曲やるのが限界だろ。
それとも本気で高校生が五人並んでキラキラ星を鍵盤ハーモニカで吹くつもりなのか？」

確かにあのレベルの曲ならミスることはまずないだろうが、簡単すぎて恥さらしだろ。
美羽とはレベルが合わなすぎる。
それに美羽が人前に出た時のあがり耐性がどれだけあるのかもわからん。
舞台の上で上がってしまうようなことがあれば最悪だ。
……一部の女子からはかわいいーと評価されるだろうが。

「お、（玉城）先生が来たぞ」

担任は待合室から出て行き、代わりに玉城先生が入ってきた。

第3話－5　音楽祭と妹　初日から……

「待たせて悪かったわね」

玉城先生というその人物は、見た目五十代のおばさんである。
職員室の冷房がキツすぎるのか、ダークグリーンのカーディガンを装備しており、
落ち着いたブラウンの縁のメガネは、優しい顔づくりに一役買っている。
ご近所付き合いがない俺が言うのは実に滑稽なのだが、
彼女を一言で言わせてもらうと、
「近所のご近所付き合いのいい、品のあるおばさん」といった具合だ。
ちなみに、俺達はこの先生とは面識がない。
そりゃ全校集会とか、そういう類の集まりで目撃することは良くある。
ここでいう面識とは、この先生の授業を受けたかということだ。

「え～と、何だったっけ？
……ああそうそう、昨日、音楽祭のステージの申込みをしてくれたんだよね？」

玉城先生は手に持っていたファイルから、
ホチキスで留められたプリントを五部取り出して俺達に配った。
説明によると、どうやらこれは出場にあたっての注意やらルールが載っているらしい。

何気に今気がついたんだが、玉城先生は会議室から直接俺達の元まで来た。

ということは、この注意書きの文章をいつでも俺達に渡せるよう、
前もって準備していたことになる。
面倒見が良い先生だ。

玉城先生は美羽の姿を見ると、ほんわかと微笑んだ。

「この子はどうしたの？」

「ああはい、俺の妹っす。
一人暮らししてる俺のところにしばらくいることになって。
今日ここに来るとき、付いていくとうるさかったので仕方なく」

「そう、私てっきりこの子も出るのかと思っちゃったわよ、ウフフ」

その冗談、さっき俺の担任がしていったところっす、先生。

「フフフ……、まあ、それぐらいの子だったら、
申込みせずに飛び入りで参加しても誰も文句は言わないと思うわ」

「あのー先生、それって本気で言ってるんですか？」

チカがなんか真剣（マジ）顔で聞いてる。

「冗談半分、本気半分ってところ。
ま、実際にそうなったとしても誰も怒りはしないわ」

それから玉城先生から、音楽祭に向けての詳細な説明を受けることになった。

「――――まず、音楽祭で発表する楽曲だけど、

これはあなたたちの自由に選んでくれて構わないわ。
もちろん、自作も可。
楽器については、学校にあるものを使っても、持参してきてもオッケー。
ただし、持参の場合、その楽器に何があったとしても全て自己責任ね。
学校では一切補償できないから、そのあたりはしっかり肝に銘じておくこと。
学校の楽器を使う場合は、使う楽器を本番前日までに、
今配った用紙の一番最後の紙に、
必要事項を記入して学校に持ってこないと、当日使えないので注意。
それから、練習に学校の教室を使いたいっていう人が毎年出てくるんだけど、
その場合は、使う毎に誰でもいいから、
適当な先生に一言断って使うようにしてちょうだい。
その時学校の楽器を使ってもいいんだけれど、
貸し出しの優先順位は三年生、二年生、一年生の順番になるから、
順番待ちになることも考えておいてね――」

玉城先生による話を聞いた後、
俺達は職員室を出て、俺達の教室を解放してもらって、その中にいる。
もちろん、俺達のためにわざわざ冷房をつけてくれるわけはなく、
教室の窓を全開にして自然の風を最大限に利用する必要があった。

「それじゃ、作戦会議始めるわよ」

チカが切り出した。

黒板の前に横一列になって俺達は並んでいる。

この黒板を使っていろいろメモしようという魂胆なのだ。

チカもジョーも零雨も麗香も俺もチョークを持っている。

俺の場合は《強引に持たされた》という表現が正しいが。

美羽は、職員室のすぐ近くにあった自動販売機で、

俺が買い与えたスポーツドリンクをどんどん消費している。

「まずは、音楽祭で発表する曲をどうするか、議論しようじゃないの」

「はい、俺が一つ案を」

俺は片手を上げて述べた。

「演奏とか、歌とかはっきり言ってダルい。

だからクラシックやろうぜ」

「……ごめん、コウくんの言いたいことが理解できないんだけど」

「麗香、そう焦るな。

クラシック音楽にはな、いろいろ面白いものがあるんだぜ？

例えば、一時間以上の長時間に渡って同じメロディを延々と、

それも聴衆が眠くなるようなものを流して、

最後にドドン、とでけえ音をぶっ放して寝た聴衆を飛び起こさせるよう、

意図して作られた曲とか、

人間が嫌う音を音楽の中に取り込んでみた曲とか、いろいろある」

「人間が嫌う音って？」

ジョーが口を挟んできた。

「こういう音をいうのさ、ジョー」

俺は黒板を爪で思いっきり引っかく。

ギィィィィィ！という高音が耳を刺す。

「ぐうっ！」

「誰が不快な音を実演しろって言った？」

チカに全力で背中を蹴られた。

お陰で黒板とＫｉｓｓする羽目に。

まさか黒板なんぞにファーストキスを持って行かれるとは、一生の不覚だ。

大学に入ってから、こんな会話が繰り広げられるとは……。

《おいコウ、お前のファーストキスはいつぐらいだ？》

《あ？俺？俺高二》

《へえ、どんなキスをしたんで？》

《後ろから鬼嫁街道まっしぐらの女子に蹴り飛ばされて》

《なかなか面白い話が聞けそうだな。

で、お相手はどんな娘？》

《黒板》

うん、断言できる。俺、今なら寸分の狂いもなく死ねる。
恐る恐る黒板から顔を離すと、黒板に俺の唇の跡が残っている。
ますます死にてえ――――――！

「ごめん、なんかコウがこの世の終わりみたいな顔するぐらいのことをしちゃったみたい。
まあ、いつもそんな顔っちゃそんな顔なんだけど」

「お前、謝る気ゼロで謝罪の言葉を口にすんな」

「それは置いておいて、コウ、さっさと意見を言って」

「はいはい。
要はだな、クラシックの中には、こういう曲があるぐらいなら、音符が一切存在しない曲もあると俺は考えるわけさ。
その曲にすれば、練習する必要もねえｓ……

「はい却下」

チカに即答された。
俺的には斬新でいいと思ったんだがな。

「う～ん、コウくんの言ってる曲って、特殊な曲みたいね。
音楽の概念に挑戦した作品ということみたいだけど、私は賛成できないなぁ」

麗香も困り顔。

彼女の出場目的はを考えると、確かに俺の案はそぐわないか。

「俺はアーティストの楽曲をそのまま練習して出たい」

ジョーの意見。

「零雨は、何か希望はある？」

チカの質問に対して、零雨は首を振った。

「零雨、ちゃんと自己主張しないとダメよ？」

「……今の私に主張するべき……思考概念が存在しない」

「どういうこと？」

「私はこの……事柄について何も……考えていない」

零雨のこの言葉にチカ、プッツン。

「ちょっといい？じゃあ今、零雨は何を考えてるの？
今私たちがこうして議論しているときに、別のことを考えてるわけ！？
そんなにやりたくないの！？」

「ちょっと、チカちゃん……」

「麗香は黙ってて！
……ねえ、何その非協力的態度！
ここにいる能なしコウだってクソみたいな内容だけど意見してる

じゃない！」

「おいコラ、チカ。女がクソとか汚ねえ言葉遣うな。品格が疑われるぞ」

「コウ！今それは関係ないでしょ？」

チカはマジギレしてる。
今のは確かに零雨の言い方が悪い。
《何も考えていない》じゃなくて、《何も思い浮かばない》だろ、普通は。

「私は……意見を持っていない。
……思考はしている」

「あんたのそのヘンテコリンな喋り方もイラッと来るのよ！
……じゃあ、書いてみてよ。
あんたが今何を考えていたのか、この黒板に書いてみてなさいよ！」

チカは手に持っていたチョーク（新品の長いやつ）を、零雨に向かって思いきりぶん投げる。
パシッ、と顔面直撃寸前で受け止める零雨。
反応速度だけは速い。

美羽がチカの剣幕に泣き出した。
それをチャンスとみたジョーが俺にアイコンタクトを送る。
《ちょっとこいつをチカから離そうか》

《おう、ヨロシク頼む》

ジョーは美羽の背中に手を当て、
美羽ちゃん、ちょっと外の空気を吸ってこようか、と
美羽とともに教室から脱出（バトルフィールドエスケープ）。
俺は零雨と麗香の影のサポート的立場にいるわけで、
めんどくさいが、そういうわけでここで逃げ出すわけにはいかない。
ファインプレー、ジョー。

零雨は表情一つ変えず、チカに冷たいまばたきを一回すると、
この世のものとは思えない、見たこともない奇妙な文字をつらつらと書き出した。
麗香に顔を向けると、真っ青になって硬直している。
大事なときに何してんだお前。
明らかヤバイ文字書きだしてるぞ。
俺がを横から突いても、後ろからどついても、
麗香は倒れそうになる身体を足で踏ん張るだけで、動かない。
零雨と麗香の言語なのかは良く知らんが、
これは止めないとまずいことになる！

「ちょっと待った」

俺が声をかけて、零雨の行動を止め、チカの視線を俺に持ってくることに成功した。
ノープランだが、成せば成る。

「……も、申し訳ない。
語弊を招く……表現をしたことについて、謝罪する」

は？
なぜにいきなり零雨が謝罪？

調子狂うじゃねえか。ノープランごときに調子とか言う権利はないだろうが。
しかし、どこかがおかしい。零雨が噛むとは。

「私は……あなたを怒らせる……意図はなかった」

零雨はそういいながら、チカに変な疑問を持たれないうちにと、おもむろに黒板に書いたキテレツ文字を消していく。

「な……何よいきなり！」

「……私は考えることが苦手。
故に、意見が……まとまるまで時間がかかる」

麗香を見ると、零雨の発言にリンクして麗香の口がわずかに動いている。
なるほど、そういうわけか。それなら合点がいく。
零雨一人では到底処理しきれない問題だと感じた麗香が、零雨の身体をちょいと拝借して事態を収拾させようとしているわけだ。
零雨が珍しく噛んだのも、話し方が若干違和感があるのも、零雨という人形を裏で麗香が操っているからだ。
まったく、大胆なことをしやがる。
文字を消し終わった零雨は、粉受けに黒板消し（ラーフル）を置く。

「チカちゃん……もう許してあげたら？」

麗香が元に戻ったが、麗香の話すスピードが少し間延びしている。

「……申し訳ない」

零雨は深々と頭を下げた。
麗香のやつ、とんだ自作自演をしやがって、
自分以外にももう一人同時に操作するとかどんだけ器用なんだよ。
まあ、俺も乗ってやるか。

「あたしが一人で勝手に盛り上がっちゃってるみたいで、ばっかみたい……」

「チカ、もう許してやったらどうだ？」

「……今は無理。
……ちょっと外に出て頭冷やしてくるから」

チカは頭を抱えながら教室のドアに手をかける。
その手は震えている。

「ついて来ないでよね！！」

チカは振り向いてそう叫ぶと、ダン！とドアを乱暴に閉めた。
すりガラスの向こうのチカのシルエットは、小走りでどこかへ去っていった。
教室の中には俺と零雨と麗香の三人が残っている。

「……ふう、危なかった」

麗香は黒板にもたれ掛かって安堵の表情を見せた。

「自作自演、お疲れ様」

「えっ、バレてた!?」

「俺には丸分かりだった。
だが幸い、チカにはバレてないようだったぜ」

零雨が動き出し、チョークを手に持った。
今さっき自分が書いたはずの思考記録が消されているのを見ると、
また一から書き直そうと、チョークを高らかに上げる。

「もう書かなくていいのよ、私が処理したから」

零雨はさっと麗香に顔を向け、「?」と返す。

「もう終わったの。
ちょっと私が身体借りさせてもらって、処理したから」

「……そう」

それを聞いた零雨は高らかに上げていたチョークをゆっくりと下ろし、
コロン、とチョークの粉受けにそれを置いた。
俺は身体を乗っ取られるとか、
考えただけで気味が悪いのだが、零雨は何も感じていないのだろうか。
はぁ、しかしまあ集まって早々こんな状態で大丈夫か?
こんな嫌な空気を会う度毎回吸わせられるとかなるなら願い下げだ。

「なんかチカが走っていったけど、何があったんだい?」

教室のドアが開き、美羽を連れたジョーが入ってきた。

「チカちゃんはちょっと頭を冷やしてくるんだって」

「そうか」

「事態は収束の方向へ向かってる。
チカはまたこの教室に戻ってくるから、追わなくてもいい。
つーか追うなって言われたし」

それを聞いたジョーは、やれやれ、と頭を振った。

「零雨、発言には十分気をつけろよ」

そう投げかけるジョーに、零雨は小さく首を縦に振った。

あれから十五分、美羽も泣き止み、話はチカ抜きで進むこととなった。

「私としては、自作曲をやってみたいかな？」

俺の聞き間違いでなければ、麗香は確かにそう言った。

「誰が曲作るんだよ？俺にはそんな小洒落たセンスなんざ持ち合わせてねえぞ」

聞いてるだけで耳を塞ぎたくなるようなちゃっちい曲より、プロが作った曲の方がいいのは火を見るより明らかだ。

俺はそのつもりで言った。

「作詞・作曲はみんながいいなら私が作っても……」

麗香の意志は堅そうだ。

が、俺が公衆の面前で恥をかかされることが確定してしまった今、俺が出来ることといえば俺の心理的被害を最小限に押さえ、精神を正常に保たせるように努力することだ。

大体、服選びのセンスすらもない麗香に作曲は無理だろ。

恐らく麗香が作った曲、それはそれは素晴らしい曲になること必至。

「俺、思ったんだけどさ、」

ジョーが口を開いた。

「さっきの玉城先生の話を聞いてたら、
何も一曲だけしか披露できない訳ではなさそうだし、
この際、やりたいやつ全部やったらどうさ？」

「お前、練習が大変になるだろーが。
今から盆休みまで二十日程度しかねえのに、そんな余裕あるのか？
それに、楽器の扱い方から何から何まで独学でやるんだぜ？」

「私に任せてっ！」

そんな勢い余りあるメガホンボイスで俺達の会話に入りこんできたのは、
教室のドアをガラガラ…バン！と荒々しく開けて再登場したチカだった。

「私の兄貴の中にバンドやってるのがいるから、お願いして教えてもらえばいいのよ！
楽器も一通り持ってるみたいだし、練習も出来る！」

ほう、これは俺自身もビックリのご都合主義的な展開。
それよりもだな……

「チカ、なぜお前は全身びしょびしょに濡れてんだ？」

「プールのシャワーで頭冷やしてきたのよ。
お陰で落ち着いたわ」

「服着たままでか？」

「どうせすぐ乾くんだからいいでしょ？」

「そもそも、夏休みはプールは閉鎖されてるはずだ。
敷地に入れたのか？」

「まあね、意外と簡単だったわよ」

俺は日頃から感じていたこの学校の設備のセキュリティーの弱さを憂いつつ、
お怒りモードから復帰したチカの話を聞いた。

「今日はその兄は大学の講義とバイトがある日だから、
今日家に帰ってきたら聞いてみる。
オッケーもらえるかどうかは分からないけれど、
やるだけやってみるから。
で、何やるの？」

ジョーが答えた。

「俺はさっき言ったとおり、有名アーティストの楽曲の中にやりたい曲がある。
麗香は自作曲がやりたいんだってさ」

チカは零雨に顔を向けるも、すぐに視線を逸らして言った。

「零雨は、やりたいのはある？」

「……何でもいい」

その会話はドライアイスが放つ冷気のように、ツンとしていて冷ややかだ。

やはり空気的にはさっきの気まずい雰囲気が尾を引いている。

「そ、じゃあ何が決まっても文句はないのね？」

「……ない」

「そういうチカは何がやりたいんだ？」

俺が問うと、チカは俺に視線を合わせたが、すぐにうつむいた。

「私は……ジョーと一緒で普通にやりたい曲をやりたい」

「なあ、また出直そうぜ？
俺さ、こんな雰囲気でやってても意味がないと思うんだけど、どうよ？」

ジョーがエクセレントな提案をしてくれた。
こんな暑い教室と気まずい空気からおさらばする方法、《出直す》。
喜んで賛成させてもらう。

「それでいいんじゃね？
どーせ、チカがこのままじゃどうしようもないだろ？」

というわけで、俺はめでたく家に帰ることができたわけだ。
現実逃避してるだと？そうだが、何か文句あるか？

次の日の会議は、やはり教室で行われることになった。
メンバーは昨日と同じ、
俺、チカ、ジョー、零雨、麗香、オマケ(美羽)の六人だ。
チカの機嫌も直り、さらに担任が冷房を効かせてくれた。
快適な環境の中、俺達は机を寄せて、向かい合って座っている。

「俺さ、やりたい曲のＣＤ持ってきたから、聞いてくんねえかな？」

ジョーがまず最初に切り出し、
持ってきた安っぽいＣＤプレーヤーを机に置き、ディスクを入れて流した。
昨日の別れ際に、自作曲希望の麗香と、無希望の零雨以外は、
やりたい曲が入ったＣＤを持ってくる約束をしていたのだ。

ジョーがやりたかったのは邦楽で、
説明によると、誰でも知ってる某アーティストの新曲らしい。

「俺、この曲気に入っててさ、やるならこれやりたいんだ」

ふ～ん、あっそ。

「麗香は自作曲で多分まだ出来上がってないと思うから後にして、
コウ、あんたは何がやりたいの？」

チカが俺を指差した。

「チャルメラ」

「？」

「ラーメン屋のあれだよ、メロディーが『・・，ー・・・・，・・・—』のやつだ」

チャルメラが某楽曲管理団体共の支配下にある可能性があるから正確な音程は述べない。
俺は鼻歌で歌ってやった。
キラキラ星よりずっと簡単だ。

「それ、本気で言ってるわけじゃないよね？」

「いや、マジの話なんだが。短くて何が悪い？」

「あはっ、だって、ドと（ピー）とミの三音しか……「ぉおっと、やりたいCD持ってきたんだ」

危ねえやつだ。
そんなこと言ったら音程が分かっちまうじゃねーかよ。
某楽曲管理団体共に金ふんだくられるとか、リアルにゴメンだからな？

「あるなら最初から出しなさいよ！」

チカは俺を必要以上に笑いながら睨んだ。
手を出し、そのCD貸してとチカが言ってきたので渡してやった。
昨日とは打って変わったチカの行動に、
俺は少し気味悪さを感じたが、人間には気分の浮き沈みがあることを考えると、
さほど重要なことではないかもしれん。

気にするな、俺。

俺が選んだのは洋楽。
英語の歌詞の内容、メロディ共に秀逸だと感じるものを選んできた。
一度聴いただけでは英語の歌詞の内容が分からない奴（俺も含め）は、
メロディーだけでも楽しんでおけばいい、ということだ。

俺の好きな曲だが、こんなふざけた音楽祭ステージの演奏に使うことは、
その曲を汚すことにもなりかねない。
なぜなら、俺は楽器に触った経験がないからだ。
リコーダー程度ならあるが、
ギターやらドラムやら鍵盤楽器やらに触ったことなど一刹那もなく、
さらに楽譜の五本線の左隅にくっついてる、
ヘンテコリンなクルクルの記号の意味、
あれは楽譜を読む上では超基本らしいが、全く分からない。
その上、ドレミのドはどこの位置？状態の上に、音符の長さも小学校の頃習ったきりで、
♪が八分音符だということだけ辛うじて覚えているような有様だ。
結局のところ、俺の記憶が蒸発しやすい脆弱な海馬の中に楽譜関係の情報は、
♪＝八分音符しか残っていないのだ。

もしそんな俺が、音楽祭までの短期間に普通に演奏できるようになったとしたら、
その曲がその程度の難易度の曲だったと証明してしまうことにもなりかねず、
それはその音楽製作に携わった人間の価値を落とすことに直結するかもしれない。

アーティスト及び関係者の皆様、申し訳ない。
そういうわけで、俺が予めここで代表して謝罪しておく。

チカが俺が持ってきたＣＤの再生をふと止めた。

「ねえジョー、今気がついたんだけどさ、
新曲ってことは、楽譜はまだ売ってないんじゃないの？」

「……意外なところに盲点発見」

「ダメじゃん！」

「耳コピすれば出来ないことはないんだがなぁ……」

「何、曲を聞いてそっから楽譜作るの！？」

「ああ。音程は絶対音感がある人がこの中にいれば作業は簡単だと思うんだ。
誰か絶対音感持ってる奴はいないか？」

絶対音感とは、ある一つの音を聞いただけで、
その音がドレミファソラシドのどの高さかが感覚的に分かってしまう能力のことだ。
当然のことであるが、俺はそんなオプション能力は装備されていない。

「……私なら……できる」

零雨が言った。

「零雨、ホントに出来るの？」

チカは意外な様子で言った。
音階なんてもんは、周波数的に決まってるわけで、
例えばある高さの《ラ》は４４０Ｈｚ（ヘルツ）、
言い換えれば一秒間に４４０回空気が振動したときに聞こえる高さだと
決まっているという話を聞いたことがある。
音楽を周波数的に考えれば、機械的に耳コピできるはずだ。
楽器の音の高さを何ヘルツか解析して、それを楽譜に載せるだけだ。
今の技術ではそれがなかなか難しいらしいが、
零雨の頭ん中は、旧型とはいえど人知を遥かに越えた何かが搭載されているわけで、
そんなごつくて変態的な処理能力とチートがあれば、こんなことぐらいお手の物のはずだ。
当然、麗香にも同じことが言える。

「やったことは……ない。
……でも、絶対音感はある」

表情一つ変わらない、冷たい声。
彼女は恐らく何があっても、
自ら言い出したことについては責任を持って行動するだろう。
それも機械的で、残酷なまでに。
失敗すれば始めから何回でもやり直し、障害物があれば容赦なく排除する。
これも麗香にも同じく通ずる。

思い出したくないが、俺が極道の皆様に港まで招待された時がそうだ。
俺が連れ去られる前、
麗香は「何があっても私達が絶対に守ってみせるから」と俺に言った。
その言葉に嘘偽りは欠片も存在せず、
途中、俺を守ろうとして射殺されるという失敗をしながらも、
最終的には約束通り、二人で協力しあいながら俺に銃口を向けたやつら共々、
異世界に置き去りにし、さらに分塵にまで分解して消してしまった。
恐らく彼女達の中では、
《約束＝絶対に遵守しなくてはならない規則》
というアンドロイド思考が行動をする上での指針の一つになっているのだろう。
そんな奴が自分から楽譜作りに名乗りを上げたのだ。

「じゃあ零雨、お願い」

零雨はうなずいた。

「おっとっと……」

「麗香、どうした？」

麗香は何かを支えているようだ。

「隣に座ってた美羽ちゃんが、急にもたれ掛かってきたの」

美羽が珍しくおとなしいと思ってたら、寝てたのか。
小一で学校で寝る癖つけるのはちとオススメできんな。
美羽は口を少し開けたままで、首が据わっていない。どうやら熟睡の模様。
麗香は寝てしまった美羽を元通りに座るよう、あれこれやってみるが、
どうしても麗香の方に身体が傾いていってしまう。

「麗香、あんたもう抱いてやりなよ。
美羽は麗香のこと、お母さんとでも思ってるんじゃない？」

「でも私、こんなちっちゃい子の世話したことないから……」

「諦めなよ、麗香。
その子の触手があんたの腕に巻き付いてるよ」

「わわわわわ……」

麗香が恐る恐る確認すると、腕にしっかりと抱き着いた美羽が寝息。

「そんな怖がることないでしょ、相手はかわいい子供なんだから」

「う、うん……」

麗香の狼狽ぶりにしびれを切らしたチカが立ち上がった。

「もう、そんなに子供が怖いの？
こうやって（美羽を）乗せて、ほら麗香手出して！
ちゃんと落ちないように抱いて……ほらできた、『お母さん』」

チカは麗香の前に美羽を置き、後ろから回り込むようにして抱かせた。

「コウ、このまま麗香に抱かせてもいいよね？」

「いいんじゃねえの？
チビもその方が落ち着くだろ」

ったく、美羽の奴、同級生に迷惑かけやがって。
麗香が顔赤くして困ってんじゃねえかよ、ハハハ……
どちらかというと親子というより、姉妹みたいだ。
顔は似てねえし、血も繋がってないが。

チカはニヤニヤしながら携帯電話を取り出すと、麗香にカメラを向ける。

「こ～んな麗香はなかなかお目にかかれないからね～
ほら麗香、こっち向いて」

「？」

チカは有無を言わさずパシャリ。

「ちょっと！」

「何がイヤなの？ほのぼのしててすっごく和むよ！」

そう言ってもう一枚。

「俺も撮っとこーっと」

ジョーがカメラを向ける。
写真集作ってるわけじゃねえんだからよ、
チカはべつに差し障りはないが、
ジョー、お前が撮ると美羽が汚れるからやめろ。

「零雨も撮っちゃいなよ！今のうちだよ？」

「……そう」

零雨はどこから持ってきたのか、
ブランド名なしのミステリアス一眼レフカメラを向け、超高速連写で撮影。
どうやら零雨は「撮っちゃいなよ！」を命令として捉えたらしい。
カメラから出る、古い映画のフィルムを回すような音が響く。

「コウは？撮らないの？」

「あ？俺？携帯忘れてきた。
後で写メ送ってくれ」

「コウくんまで私を……！」

零雨がガトリング砲の“連写”を中断した。
どうやら弾切れ（フラッシュメモリーの容量不足）らしい。
素早い手つきでメモリーカードをカメラから抜き出すと、
新しいカードを入れてまた連写を始めた。
その時間、わずか二秒。
熟練者による銃の弾倉交換レベルの無駄な素早さ、スゲー。

カメラのバッテリーの持ちも尋常じゃねえし、
こういう手のカメラは冷却が必要だとも聞いたのだが……
どうやら零雨のカメラはただのカメラじゃないらしい。

十分程盛り上がったところで麗香を除くみんな落ち着き、閑話休題。
結局零雨はメモリーカード十八枚、容量にして１４０ＧＢ以上を美羽と麗香のツーショットに費やした。
馬鹿としか言いようがない。

俺はチカに聞いた。

「そういやチカ、お前は何がやりたいんだ？
ＣＤは持ってきてるんだろ？」

俺が言うと、チカは手を突き出した。

「ああ、その前にちょっと聞いて。
……昨日、うちの兄貴のバンドの楽器を借りられるかどうか、あたしが聞いてみるって言ったの覚えてる？」

なんか言ってたな。

「一応、そのことについては『いつでも来い』って大歓迎で迎えてくれたんだけど……」

「だけど？」

ジョーが相槌を打つ。

「だけど……一つ条件があるって言われたの」

「どんな条件？」

「……」

チカはしばらく黙り込んで、恥ずかしそうに言った。

「……この曲をステージでやってくれたら全力で協力するって」

チカはレーベルに何も印刷されていない真っ白なＣＤを机の上に置いた。
どうやら家で作ってきたＣＤらしい。

「……あたしはこれを再生する勇気がないから、
コウ、悪いけどあんたやってくれない？」

「俺が？」

「そう」

「別にいいが、再生するのに勇気がいる音楽ってどんなもんだよ？」

「聞いたら分かるわよ。
……い、言っとくけど、これはあたしの趣味じゃないからね！」

俺はＣＤを受けとって、プレーヤーに突っ込んだ。
なんかチカから鉛色の重厚なオーラが吹き出してる。
俺は再生ボタンを押した。
それが自爆ボタンであるとも知らず。

第3話－7　音楽祭と妹　空中鬼ごっこ

それはショットガンで俺の頭をゼロ距離で撃ったような凄まじい衝撃だった。
あまりのショックに頭が吹っ飛んでしまったのではないかと、思わず手で頭が首の上にちゃんと乗ってるか確かめてしまったほどだ。

安っぽいＣＤプレーヤーから発せられるその音は、
俺が今まで本番で出来るだけ目立たないように地道に小細工しても、みんながやりたいと言った曲がプロ並みの完成度だったとしても、こいつは核ミサイルで全て無に帰すのと等しい破壊力。
インパクト強すぎだ。

「……マジでこれやるの？」

ジョーは面喰らっている。

「……協力がいるならやるしかない」

チカは机に顔を突っ伏したまま答えた。
どうやら恥ずかしくて顔向けできないらしい。
そこまで恥じる必要はないと思うぞ、俺は。

「お前んとこの兄さんって、こういう趣味があったんだな」

「それ言わないでよ！」

チカが持ってきたのはアニメソング、略してアニソンと呼ばれる部類のモノだ。
耳なし青狸とか、海鮮一家とか、そういうメジャーなものではなく、オタクっぽい、というか明らかにオタク系。
俺の近くの知り合いにも同系統のやつはいるし、
俺自身もそういうのはあまり気にしないタイプである。
そいつが俺にそういう系統の話を持ちかけてきても、別に抵抗もない。
さらっと聞き流したり、相槌を打ったり、時々返してみたりしている。
ただそれは《受け身》の状態での耐性で、こっちから発信することになるなど、
テレビが放送電波を発信するほど有り得ない話で、想定すらしていなかった。

「ま、趣味は人それぞれだからな。
趣味自体をマジョリティーなのかマイノリティーなのかで判断したり、
ステレオタイプで捉えてしまってはいかんだろ。
そういう俺も、チカから不本意ながらも《モヤシオタク》の称号を授けられた身、
ある意味マイノリティーなオタクの一部分に入ってるのかもしれんしな」

下手すると、もしかしたら俺は《モヤオタ》というオタクの中の新しい分野を切り開いてしまったのかもしれない。
ＣＤからは、女声の声優とおぼしき声がハイテンションで聞こえてくる。
よくもまあこんな高いキンキンの声を出して喉を痛めないものだ。

この曲に関して、零雨と麗香は特に変わった反応は示さなかった。

「元気が出そうな曲だね」

麗香は言う。

「……そうだな」

「やってもいいんじゃないかな？
私にはこの曲の何が問題なのか分からないけれど、
もし高い声が出ないんだったら、私が歌ってもいいよ」

麗香は無駄に純粋だな。
チカは突っ伏した顔をわずかに上げた。

「え？イヤじゃないの？」

「何言ってるの？イヤなんてことがあるわけないじゃない」

「オタクが聞くような曲なのよ？」

「オタクさんが聞いたって誰が聞いたって、音楽には変わりないでしょ？
誰が聞くかで曲を判断しちゃいけないと思う」

麗香の理論は正論だから困る。
この曲を本番でやったならば、後で周囲から生暖かい目で見られること必至だ。
俺達はそれがちょっと嫌なのだが、どうやら彼女にはそれが分から

ないらしい。

「俺はこの曲はゴメンだけど、これやったら練習に講師がつくんだろ？
どっちも捨て難い……」

「ジョー、あたしの兄貴は《講師》何て言えるレベルじゃないから、あんまり過度に期待しないほうがいいわよ？」

「聞き捨てならん言葉を聞いたな」

聞き慣れない爽やかな声が教室の入口から聞こえてきた。
睡眠中の美羽を除く全員が入口に注目する。
教室のドアを開けたまま柱に手を突いてもたれ掛かっている男は、俺の顔見知りではない。
男は片手を上げて挨拶した。
風貌は今時の流行を捉えている、長身の大学生。
顔立ちも整っていて、なかなかのイケメンだ。

「ちょっとお兄ちゃん！
なんでノックの一つもせずにドア開けちゃってるワケ？
てゆーか勝手に話に入ってこないで！」

チカはその男に怒鳴り散らすと、
白いＣＤが回転しているプレーヤーの電源を切った。
スピーカーが黙る。
話によるとチカの兄らしい。

「悪い悪い、高校の近くを通ってたら、俺の嫁のキャラソンが流れてきててよ、

お前今日学校行くと言ってたし、
もしかしたらお前が流してんのじゃねえかと思ったんだよ。
で、音楽に釣られているうちに気がつけばこの教室の前にいたわけだ。
ちょっと中を覗いてみようと手をかけたところ、すんなり開いたんでな」

ハーメルンの笛吹き男もこんなおっきな人間が寄ってきたと知ったら、
「こんなはずじゃなかった！」と笛を放り出して一目散に逃げるに違いない。
しかもイケメンの口からサラっと「俺の嫁」発言……
いや、例の俺の知り合いもその言葉をよく口にするし、
向こうから熱く語ってくれるお陰で、愛する気持ちはよく分かる。
しかし少子高齢化が進む今の世の中、
最終的な結婚相手は是非立体でお願いしたいところだ。

「そもそもなんであたしの高校にすんなりと入ってこれちゃうの？
兄妹といえど不審者として突き出すわよ！」

「無駄無駄、忘れたのか？俺はこの学校のＯＢだぜ？
それに先生に顔見知りはいっぱいいいるんだよ」

なるほど、この男は俺達から見て先輩に当たるわけか。
そりゃ確かに無駄だろう。
俺もこの乱入者を排除してやりたい気持ちが強いのだが。

「あの、誰ですか？」

名前を聞くために、とぼけたジョーが自称ＯＢに聞いた。

「あ、俺？
俺は木下千賀（チカ）、十七歳だ。
特技はキレることで、悩みは髪質。
ついでにスリーサイズは……」

「いい加減にしろっ！この変態！！」

チカは机に両手を突いて立ち上がり、座っていたイスを掴む。
それと同時に零雨も立ち上がり、動き出す。

「あんたのせいであたしがどれだけ大変な思いをしてると思ってるの！！」

チカはイスを勢いよく下投げでＯＢに向けて投げる。
チカの渾身の馬鹿力で斜め上方四十五度の、
遠距離に飛ばすには物理的に最も理想的だと言える
発射角度で放出されたイスは、宙を乱回転しながら舞う。
その放物線の終点の×マークは、その男の顔面についているようだ。

チカが投げたとき、
零雨は俺達が寄せている机に上靴のままよじ登り、その上を走り抜けていた。
机の端で踏み切った零雨は高く舞い上がり、両手を伸ばす。
伸びる手の先には乱回転するイス。

この状況は、もはやスロー映像なしでは語れない。
両腕で顔を庇うようにして着弾を待つ兄、容赦なく襲ってくるイス、
その後方からイスの進行方向を変えるべく放物線を描きながら追い

掛ける零雨。
零雨はイスが着弾する直前に両手でしっかりと捉え、
イスの軌道をずらすことに成功、兄の横をイスを持った零雨が飛ぶ。
ここまでは良かったのだが、ジョーやチカがいる手前、
チート能力で空中浮遊するわけにもいかず、
零雨は碁盤の目状に並んだ机の列に身を投じることになった。

ガラガラガシャン、と大きな音を立てて落ちた零雨とそのイスの姿は、
イスに座って呆気にとられていた俺には見えない。
美羽を抱えている麗香と、現状理解ができていないＯＢ以外の
全員が立ち上がり、零雨の元へと走り寄る。

「大丈夫か？」

零雨が落ちた周りの机のうち、二、三個が落ちた時の衝撃で倒れ、
その中の一つの机に落ちてきた時運悪く何かが引っ掛かったらしい。
零雨は倒れた机の下敷きになっている。

ガタ、と机が動いた。
どうやら零雨は無事のようだ。
この程度でくたばるはずがないと言った方が正しいのかもしれないが、
あまりにも薄情な発言になりかねないので、その表現は控えることとする。

「……大丈夫、特に……目立った問題はない」

零雨は上にのさばる机を押しのけて立ち上がった。

「大丈夫じゃねえじゃんかよ！」

ジョーの言葉は正しかった。
頭を怪我しているらしい。
雪のように白い髪の一部が赤く染まり、
ツー…と額から流血しているのが確認できる。

「ば、馬鹿なことしないでよ！
何で関係のない零雨がしゃしゃり出てくるの？」

「……あなたの危険な……行動によって、
……彼が大怪我をする可能性が……大きいと結論づけた」

だからってお前が怪我しちゃ意味ねえだろ。
イスが危険とかどうかと議論を交わす前に、
そもそも零雨の行動の方が危険だということを自覚しろ。
ジョーは力んで言った。

「だからって、あんなぶっ飛んだやり方以外にも何か他に方法はなかったのか？
奇跡的にイスを掴んで直撃を避けられたから良かったものの、
失敗してれば怪我人が二人になるところだったんだぜ？」

「……では問う。
……私と彼女の投げたイスとの……位置関係と……状況を考慮した上で……
あなたが……私ならどのようにして……彼の怪我を防ぐのか、
……その方法を教えてほしい」

ジョーは言葉に詰まった。

確かに零雨とチカは互いに簡単に手が届かない位置にいた。
どうしても彼の怪我を防ごうというならば、今のやり方しかなかったのかもしれん。
教室が静かになる。

「う～ん……」

美羽がお目覚めになられた。

「あ、美羽ちゃんが起きた」

「お母さん……？」

美羽は自分の腹に巻き付いている白い腕を母親の腕と勘違いしているらしい。

「ごめんね、私は美羽ちゃんのお母さんじゃないの」

麗香は美羽を床に立たせた。
振り返って麗香の顔を確認した美羽は照れながら言った。

「お母さんと間違えちゃった」

美羽はそれから急に何も言わなかった。
あまりに静かな教室に、チビはチビなりにこの空気を読み取ったらしい。

「どーしたの？」

「ちょっとな」

俺の隣に付いた美羽に答えた。

「あ！おねーちゃん！頭から血が出てるよ！」

全員の注目を浴びる美羽は、
ポケットから小さな布袋を取り出して中のものを零雨に渡した。
美羽はいつも怪我した時の為に子供用バンソウコウを常時携帯している。
親が通学中に怪我をしたら自分で応急処置ができるようにと、
美羽に持たせたのが始まりで、
今では美羽の中ではバンソウコウなしでの外出は不安になるんだとか。

「はい、セロテープ」

惜しい、七十点だ。

「美羽、それはバンソウコウだろ」

「あ、そうだっけ？」

零雨は受け取ったバンソウコウをジロジロ観察する。
使用法が分からないのか？
子供用とだけあって、
バンソウコウには小さい子供が使用時に喜ぶように企画、迎合設計することで、
バンソウコウ市場におけるシェア拡大をもくろむメーカーと、
キャラクターの著作権を持つ会社との
ライセンス契約によって使用が認められたキャラクターが印刷され

ている。

「……ありがとう」

「それね、白い紙をはがしてね、いたいところに貼って使うんだよ」

「……分かった」

零雨はやはり使い方が分からなかったらしく、
美羽から使い方の簡単な説明を聞くと、すぐに出血しているところに貼った。
美羽の説明の仕方は正しかったのだが、
零雨が怪我した場所は頭髪に隠れてしまっている。
つまり零雨は、正確には怪我した位置の髪にバンソウコウを貼ったわけで、
当然それが傷口を塞ぐことはなかった。

「零雨……ナイスボケ」

苦々しく親指を突き立てたジョーは、零雨に突っ込んだ。
「髪の上じゃ使えねえからな。
零雨、それは剥がして台紙に戻しておけ」

俺は言った。
おもむろに髪からバンソウコウを剥がした零雨は、
剥がした際に抜けた髪がバンソウコウに付着したのを綺麗に取り去り、
台紙に戻してポケットにしまい込んだ。

「申し訳ない、間接的とはいえ俺の妹が怪我をさせてしまって」

今まで黙っていた自称ＯＢが口を開いた。

「何よ、こんな時だけ兄貴面して……」

「お前は少しばかりお口にチャックして反省しろ。
……確か俺がこの学校にいたときは夏休み中、保健室は開いてなかった気がする。
んー、そうだな、俺の家に来るといい。
応急処置も出来るし、家の地下室に楽器がしまってあるんだ。
一度、楽器もどんなのか見ておきたいだろ？」

「でもそれって、今さっきの曲をやることが前提なんすよね？」

ジョーが恐る恐る聞くと、
自称ＯＢ（本名が分からないからこう呼ぶしかない）は言った。

「いや、そのことについてなんだけど、
なんつーか、妹のせいで怪我人が出てるわけだし、
この場に居合わせた兄貴的に、責任を取る必要があるだろ？」

そりゃ、チカがこのような行動を取らせるようなことをした元凶はお前（自称ＯＢ）だから、
そっちの観点から見ても責任は取るべきだ。
むしろこっちの観点から責任取れ。

「兄としてはもうこの際無条件貸し出ししていいかなと思っている」

今この自称ＯＢが撤廃を持ちかけている条件は、
百次元だろうとゼロ次元だろうと、どんな次元からの視点で見ても、

自称ＯＢの自己満足の為に取り付けたものであることは簡単に推測できる。
これは俺の単なるあてずっぽうの予想で、正確性や根拠はないのだが、
この自称ＯＢはただ自分の妹に自分の好きなことをやらせたいがために
こんな条件を出したのではないかと俺は踏んでいる。

まあとにかく状況がガラッと変わったからここで一旦整理しよう。

まず、チカの兄のバンド所有の楽器と講習を受けるためには、
例のアニソンの発表が条件だった。

次に、そのことに関していろいろ言ってると、兄ご本人登場、チカが暴れる。

最後に、今、チカの行動の謝罪ということで条件撤廃の話が出ている。
意外にわかりやすくまとまったな、俺。

「ま、とにかく家に来い、後輩」

「……あの、とりあえず名前を教えてくれませんか？」

麗香は立ち上がる。

「呼ぶときに困るんで……」

自称ＯＢは言った。

「俺の名前は木下匠（きのしたたくみ）だ」

第3話－8　音楽祭と妹　人との違いと差別

俺達は住宅街にいる。
学校から歩いて十五分の距離の住宅街の場所にチカの家がある。
麗香の家から近い。

何の用事で行ったのかは忘れたが、
俺は以前一度だけチカの家に嫌々呼び出されたことがあるため、
今回が初めてというわけじゃない。
何の用事で行ったんだったか――そう、思い出した。

去年、俺達が高一として過ごしていた夏休みも残り三日に差し迫った時だった。
あん時は確か「夏休みの宿題を写させて」とチカが電話を寄越してきたんだったな。
あいつはこちらの返答も待たずに、
「とにかく今すぐ来て！」とだけ言い残して電話を切っちまった。
その時俺は困った。
チカの住所が分からねえのにどうやって行けばいいんだよ、と。
それともう一つ。
俺も誰か宿題を写させてくれる仏のような人を探している最中だったのだ。
断ろうとしつこく電話を掛けること六回。
「何よ！？」とチカに半分理不尽にキレられながら俺の事情を説明をするも、
なぜかそれがまたチカの逆鱗に触れ、小一時間ほど罵倒されまくった。
電話を切れば良かったものを、わざわざよく無駄に耐えたもんだよ。
最終的には

「写させてくれる人を探すにも宿題を写すにも
一人より二人の方が効率いいからあたしの家に来て」と住所を教えられ、
渋々チカの家に行ったわけさ。
あの時は俺のコネでジョーをチカの家に呼んで、
宿題を写させてもらったおかげでギリギリ間に合った。
当時チカはジョーと違うクラスだったため面識がなく、
見知らぬ人を家に上げるのは抵抗があったようだが、
ジョー本人は快諾してくれていたことを告げると渋々家に上げることを認めた。
そっからだな、チカとジョーが親しくなったのは。
まあ俺にとってチカの家には散々な思い出しか残っていないんだが。

「ここが我が木下家住宅だ」

家の前に来た時、チカの兄こと、トン高ＯＢの木下匠先輩は
俺達を振り向いて、家をビシッと指さす。
チカの家は住宅街の中でも一回りほどデカイ。
茶色のレンガの三階建てのその家は、周囲に気品をばらまいてくれてやがる。
剪定（せんてい）されてからまだ間もない塀の植え込みは青々とし、
敷地に入ると見える、十五メートル四方ほどの庭の隅には
いくつもの花が彩っている。
こんな上品な家に似つかわしくないバイオレンス少女がいることで、
誰もが憧れるような理想的な住宅環境が逆に、リアルな現実を見せている気がする。

リビングに通された俺達は、匠先輩が出してくれた茶を一気飲みする。
零雨と麗香はやはり飲まない。
美羽は茶ではなくジュースが良かったようで、不機嫌そうに茶を飲み干した。

「チカ、お前が学校でケガさせた友達を真心込めて手当するんだ、ほれ」

「うわっ！とっと……」

匠先輩は救急箱をチカにイスを投げてくれたお返しとでもいいたげに剛速パスする。
それを何とか受け止めたチカは、ゴト、と重く鈍い音を立てて救急箱を床に置いてそれを開いた。

「……零雨、ゴメン」

「この程度の……損傷で死ぬことはない。
……安心して」

「今だからそんなこと言えるのだろうけど、
あんな無茶してもしあんたが大怪我してたら、
あたしその場で自殺してたはずよ？」

その時には既に零雨の傷口は血で塞がれていて、
応急処置も手遅れに等しい状態であったが、チカは一応一通りの応急手当を施した。

「さてと、そんじゃいよいよみなさんお待ちかねの地下室に行くと

しようか」

俺は一度チカの家に行ったことがあるといったが、
当時行ったことのある部屋はリビングとトイレだけで、
当時の俺がトイレを借りるため、リビングから出ようとしたところ、
チカが
「あたしの家を探検しようなんて馬鹿なことは考えてないでしょうね？

　そんなことをしたら家から二度と出れないと思いなさい」

と、そんなことは一ミクロンも考えておらず、
それどころか早く帰ってゆっくりしたいとさえ思っていた俺に、
完全無欠のカンチガイ理論をあたかもお前の考えていることは全てお見通しだと言わんばかりに言い切り、その上、厚かましくも俺に釘を刺した。、
俺は必要最低限の部屋の移動、すなわちトイレしか行くことが出来なかったのだ。
探検する気もない俺が、あの時リビングとトイレ以外にどこかの部屋に立ち寄る可能性は、例えチカが俺に戯言をかまさなかったとしてもまず有り得ないわけなんだが。
それにしても、あの時俺は長時間にわたってリビングにいたのだが、なぜ匠先輩と会わなかったのか不思議だ。

なぜか異様に長い階段を降り、
鉄の分厚い扉を開けて地下室の中に入ると、まずその広さに俺は驚いた。
天井は高く、まるで空き地のような一つのコンクリの打ちっぱなしの大部屋。

多分木下家の敷地全面を地下空間に仕立て上げたのだろう。
どこの地面を掘り返してみても、
この地下室を構成するコンクリートが現れることは間違いないと言い切れる。
上にある家屋を支えるために部屋の中に一定間隔で立っている柱は異常に太い。
その壁には吸音材が取り付けられ、天井に取り付けられた暖色の光を放つ電球がずらり。
部屋に入ってすぐ右の足元を見ると、中身不明の段ボールが積んである。
これは何だ？

「でっけえ部屋だなぁ、おい」

ジョーの声が響く中、一行は部屋を観察しながら匠先輩の後をついていく。
てか、部屋の中が響いてるとか壁の吸音材の意味無しだな。
匠先輩は言う。

「うちの親父は建築士なんだ。
まあ、丸く言えば建物を設計する仕事の人。
この家は親父が自ら設計した家で、ちょっとやそっとじゃびくともしない」

「へえ、そうなんですか」

麗香が返す。

「なんでも、例え一階から三階までが地震やら台風やら洪水やらで

潰れたとしても、
この地下室だけは潰れないよう作ってあって、
一トン爆弾が直撃してもびくともしない設計になってるんだとさ。
そうそう、部屋の入口にある段ボール、あれの中には保存食が一月分入ってるのさ」

「もはや地下要塞っすね」

俺はすぐに突っ込んだ。
どうりで地下に続く階段が長いわけだ。
コンクリが分厚い分、階段も必然的に長くなる。
まあそれにしても平和ボケし、堕落しきった日本には必要のない作るだけ無駄な耐久性を兼ね備えた家だこと。
家族を愛する気持ちがそうさせたのか、
ただの自己満足のためにやらかしたのかは分からないが、
こんなことをする財力を持つチカの親父の収入が気になる。
聞く勇気など俺にはないから聞かないが。

「このお部屋涼しいね」

俺の右手を占領している美羽は言った。
しかしこの部屋に冷暖房設備はなく、気温は全て自然任せの仕様のようだ。
もし、もしもだ、日本がどっかの国と戦争したり、あるいは侵攻してきたりして
この町にそれこそ一トン爆弾なりクラスター爆弾なりが降ってきたとしよう。
辺り一面が火の海になるのは当然のことであるが、
この場合、この地下室に逃げ込んで生き延びられるかと聞かれると、
首をかしげざるを得ない。

なぜなら、この部屋が蒸し焼き状態になる可能性があるからだ。
第二次世界大戦末期の日本では、空襲時には防空壕に逃げ込んだらしいが、
直撃は逃れられても防空壕の中が蒸し焼き状態になり、
命を落とした人が大勢いたらしい、という話をどこかで聞いた。
当時の防空壕は地面に穴を掘っただけの脆弱な作りで、
防空壕への避難はかえって危険だったことを考えると、
このチカの家の地下室と比べてはいけないのだろうが、
地下室という共通項があれば、誰だって比べてしまうものだろう。

「これが俺の愛する楽器だ」

匠先輩が埃が被らないように覆っていた布を外し、
自慢げに見せてくれた楽器は……リアルに本格指向のやつじゃねえか。
ドラムやらベースやらギターやら、どれも綺麗に手入れされている上、
どうやら使い始めてから間もないものらしい。
買い替えたのか？

「こんな立派な楽器、高そうだな……」

ジョーはドラムセットをまじまじと見つめて言った。
匠先輩は答えた。

「いや、実はこれ、貰い物なんだ。
あ、これは俺のバンドの楽器じゃねえからな？
バンドの楽器は使いまくってボロボロ、恐らく学校の楽器より酷い有様だ」

「貰い物って、それにしては状態良すぎじゃないっすか？」

「俺のオタク仲間が中学時代、株に興味もって、
それで名もなきベンチャー企業かどこかそこらへんに投資したところ、
今頃になって急成長、言い換えればバカ当たりしたんだとさ。
その会社は今は知らない人もいはいないぐらい有名になってる。
そこがどこかは言わないけどな」

そこは俺としては非常に気になるところである。

「それで、もうウン億以上儲けて、
『俺、こんなに金使い切れねえから』っつって俺にこれ（楽器）を
プレゼントしてくれたわけさ」

匠先輩、そいつの家に行って、ちょっと金庫開けてくるから住所教えてくれ。
俺なら使い道は山ほどあるからな。
金庫に閉じ込められてる諭吉さんも喜ぶし、国の景気も良くなってｗｉｎ－ｗｉｎだぜ？

「あいつ、儲けた金のほとんどを銀行に振り込んだところ、
やろうと思えば預金の利息だけで生活できるんだとさ」

「もはやＶＩＰレベルじゃないっすか」

「まあ、あいつはそんだけ収入がありながら、
『栄枯盛衰、こんな状態なのは今のうちだけさ』と言って、
あまり贅沢しないから倫理観、金銭感覚ともに正常を保っているところがすごいところさ」

さっきの金庫の話は冗談だったが、
そんな奴だと言われると盗みに入るもんも良心が痛んで流石に躊躇するだろう。

「さてと、せっかくここに来たんだから、一曲ぐらい演奏聞きたいもんだよな？」

匠先輩はギターをアンプに繋ぐと、ギターを弾きながら歌い始めた。
誰がどう聞いてもアニソンにしか聞こえないのだが、
メロディーをギターで弾きながら歌に熱中しているところを見ると、
やはりそれなりの実力があることは明らかだ。
つーか、この人半端なく楽器も歌も上手い。
こんな腕を持つ人間をチカは講師と呼ぶようなレベルの人じゃないと言っていたが、
普通に講師って呼べるレベルじゃねえか。

「（歌詞割愛）～♪っと……
まあ俺はこれぐらいしかできねえ。
こんな俺でいいなら教えてやるけど、どうだい？」

「お兄ちゃん（匠先輩）、すごいじょうずだったよ！美羽もやりたい！」

美羽はペチペチと小さな拍手をして喜んだ。
この歳の子供にはまだ、匠先輩の趣味は理解できないだろうな。
少なくとも美羽はそうだ。
振り返ると、チカが下唇を噛みながら震えていた。
その表情は、誰がどう見てもいい表情ではなく、顔は紅くなっている。

……そうかなるほど、そういうことか。
俺はチカを察した。
このＤＶ少女は、現在進行形で
兄の匠先輩の趣味をまるで自分の汚点のようにでも思っているのだろう。
《世間的にあまり良いイメージのない趣味をあたしの兄が持ってる》
男の俺には乙女心が分からないが、まあそんな複雑な心理が働いているに違いない。
そうなってくると、当然チカは兄の趣味を俺達をはじめとする知り合い、
友人にバレないようにするはずだ。
今気がついたのだが、
その証拠に、さっき偶然思い出した一年前初めてチカの家に言った話と繋がる。
チカはあの時俺をトイレとリビング以外の立ち入りを強く禁じた。
今さっきまで、俺は一年前のチカの言動の意味が全く理解できていなかったのだが、
ここにチカが禁じた理由が隠されていると仮定すると、話が合いそうだ。
匠先輩の所属しているバンドが、いわゆるオタクバンドであること、
そしてさっき先輩の「バンドの楽器は使い込んでズタボロ」発言、
そして先輩のあの楽器の操る上手さを考えると、
匠先輩がオタク趣味をエンジョイしだしたのは最近の話ではないと容易に推測できる。
つまりそれは、俺が一年前にチカの家に行った時、
先輩は既にそういう趣味を持っていたという可能性が高いということだ。
となると、兄の趣味を隠しておきたいチカにとって、
俺に家の中でウロチョロされることは絶対に阻止しなければならな

い重要事項である。
チカのすることだ、あんな言い方をしてもおかしくはない。
まあ兄の趣味がどうたらこうたら、そんな小さいことで騒ぎ立てるのは感心しない。

ダラダラと見ていて睡魔が襲われそうになるほどの長ったらしい説明をしたが、
俺がこの思考を巡らせたのはほんの数秒間だ。

「チカ、お前の兄はスゲエな」

俺以外誰もチカのことを気にしなかったため、
俺は震えるチカのとなりに並んで言ってやった。
チカは意外そうな顔をして俺の顔を見る。

「え？……それ嘘でしょ？」

「いや、真剣な話、俺はお前の兄を見てカッコイイと思うね」

「あんな兄のどこがいいのよ？」

「今の曲、全部独学で学んだんだろ？
ギターの弾き方から歌の練習までをよ。
バンド仲間と練習したにしても、
あそこまで持って行くには相当苦労したんじゃねえか？」

「そ、そんなのあたしの知ったことじゃないわよ！
向こうが勝手に上手くなっただけでしょ？」

俺は一息ついて話した。

「……もし、今お前の兄が演奏した曲が人気アーティストの曲だったら、
お前は俺の発言に『知らねえ、勝手に上達したんだろ』と同じ答えを返したか？」

「……何が言いたいの？」

「持ってる趣味がどうとか、
そんな下らない基準で人間の好き嫌いを決めてねえか？」

「くだらなくないわよ！」

「ほう、なぜ？」

「あたしまであんなやつと一緒にされちゃうじゃない
兄がオタクでも、あたしはオタクじゃないから、一緒にされちゃ困るのよ」

「そう言うと思ったぜ、バカチカ。
今言った台詞の《オタク》を《奴隷》に言い換えてみろ。
『兄が奴隷でも、あたしは奴隷じゃないから、一緒にされちゃ困るのよ』
あらびっくりのあからさまな差別用語に早変わり」

「意図的に差別用語になるように置き換えただけの、
ただの悪質な言葉遊びなだけじゃない」
「いつからお前のおつむは単細胞化が始まったんだ？
じゃあお前、この空欄に『悪質な言葉遊び』じゃなくなる単語を入れてみろ。

《兄が（　　）でも、あたしは（　　）じゃないから、一緒にされちゃ困るのよ》」

「・・・・・・」

チカは俺から目を離してうつむいた。

「言えねえだろ？
どんな単語を持ってきたって、差別的ニュアンスは残る」

「でも、オタクとか気持ち悪いじゃん」

「それはなぜ？
少なくとも俺はそんな風には思えないね。
お前から『モヤオタ』の称号を授かった俺としては、
俺を侮辱してるようで、いや、間接的に侮辱してるのが分かるから、
実際のところ内心はらわた煮え繰り返ってるわけなんだが、
それは一旦置いといて聞く。
なぜ気持ち悪い？」

「コウは気持ち悪いと思わないの？
平面に恋する人間なんて、有り得なくない？
電車を愛する人とか、パソコンばっかりいじってる人とか、
そういう自分の好きなものにものすごく執着する人とかさ」

「俺の質問の答えになってないんだが……まあいい。
それならバイクを愛する人間は気持ち悪いオタクだということになるよな？
宝石やらブランド物やら切手やらを収集するのも気持ち悪いんだ

ろ？
料理人が毎日毎日仕事場で修業してる姿すら気持ち悪いんだろ？
そんな考え方を拡張して一般化すれば、お前の言うように
『自分の好みのものを懸命にやる人は気持ち悪いオタクである』
という結論にたどり着くわけだ。
そうなると、ずっと髪のことを気にしてストレートになる方法を
捜し求めているお前は、気持ち悪い髪型オタクってことになる。
あれ？お前自身が気持ち悪いオタクになっちまったぞ？
この現象をどう説明する？」

「それは――――」

「な？こう考えるとお前の兄の趣味は別に特殊なものでもないだろ？
現に見てみろ、美羽はお前の兄にくっついて離れそうにもないし、
ジョーだって嫌な顔せずに、むしろ好意的に接してるじゃねえか。
お前の兄の趣味が恥だなんてステレオな考えは古い。
友人の分際で何をこしゃくなこのクソ野郎と思うかもしれないが、
一応言っておく。
お前の兄の趣味、認めてやったらどうだ？」

「……いまさら認めようったって無理よ」

「ま、俺の言いたいことは大概言わせてもらったし、後はどうする
かはお前の自由だ。
俺が必要以上に干渉する義理もない。
ただ覚えておけよ、
お前がもし兄の趣味を気持ち悪い最低の趣味と考えていても、
今みたいにあからさまに言わなけりゃ、俺は別に構わないと思っ
てるが、
同じ趣味を持つ何万、何十万、

下手すりゃ何百万人の人間を敵に回すかもしれないということをな」

チカは拳を握りしめたまま、何も言わなかった。
確かに世の中にそういう趣味や好みに対する偏見やら差別やらはしぶとく残っているのも疑いようのない事実である。
その根源はというと、俺が考えるに、やはり集団心理が関係していると踏んでいる。
このことについてダラダラとまたさぞ知っているかのように語りだすのは
面倒臭いし延々と翌朝まで語らないと終われねえ気がするし、
自己陶酔しているといわれのない因縁をつけられては堪らんから詳細は省くが、
簡単に言えば周囲の人間と同じような思考や生活をしていると、
深層心理のなかで集団のなかにいる自分と他人の僅かな違いが目立ち、
そこに優劣を本能的に求めてしまう、というものだ。
あいつはみんなと同じ趣味を持ってるから普通の人間、
こいつはみんなと違う趣味を持ってるから異端な人間、
それを象徴させる歴史的な話といえば、
かの有名なコペルニクスが唱えた地動説についてのいざこざだ。

分かりやすく言うと、
何か俺達の住む大地の上を太陽やら月やら星々がくるくる動いてるし、
これって俺達地球が世界の中心だっつー証拠じゃね？
と人間が見た目だけで判断し、さらにとんだ独りよがり属性までついた天動説が、
あろうことかローマ法王がそれが正しいと公の場で口走って宣言したために、

それが正しいとされてしまっていた中世のヨーロッパ。
そこに「よくよく天体を観察したら実は太陽の周りを俺達が回ってるっぽいぜ？」
と言い出したコペルニクスが異端者と言われて宗教裁判でなんちゃらという話だ。

「コウくん、聞こえてる？」

「ん、何か言ったか？」

何回か俺に話しかけていたらしい麗香にやっと気づいた俺は、少し慌てて返した。
少し考えすぎたな。
最後に言っておこう。
俺が匠先輩から出されたあの条件を嫌がったのは、
そうした自分が趣味差別をしていることに気がついていない輩から、変な目で見られたくないからで、
周りの理解がありさえすれば、俺はこの条件を何の気無しに呑んでいたに違いないことを。

「だからね、コウくんはどんな楽器が得意なの？って」

「笛が得意だ」

「笛？」

「中でも口笛は得意だぜ」

麗香は目を細めた。

「そういう意味じゃなくて、この中にある楽器の中で……っていう意味なの」

「ああ、そういうことか」

つまり誰がどの楽器を扱うかについての話だったわけだな。
その前に場の空気をもっと読もうぜ、俺。
……うーむ、ここはやはり取り扱いが簡単そうな楽器を言った方が良いだろう。
楽器持つだけで精一杯とか話にならねえからな。
とはいっても、どれも触ったことのない楽器だから、
どの楽器の扱いがどうとかわかんねえぜ、ハハハハハ……

「俺はどの楽器も触ったことねえからな、得意なものなんてねえ」

バンドセットの隅の方に、カラオケとかでよくあるマラカスがあるのだが、
いくら簡単だからといって得意なものはマラカスだと言ってしまうと、
舞台の上で俺一人がやる気なさそうに隅でマラカス振ってるとか、
見てる方は面白いかもしれないが、
やってる方はほぼ百パーの確率で壮絶極まりない羞恥と注目に晒されることになるため、全力でボツだ。
そんなことを考えていると、つい口から事実がポロリと出てしまった。

「さて、これは参った……
音楽祭に出るぐらいだから誰か一人は経験者がいるもんだと思っ

てたんだけどな、
まさか全員初心者（若葉マーク）だとは思いもしなかった」

匠先輩は頭を抱え込んでいる様子で……ってお前らも経験無しか！
ジョーとか、少しギターあたりをかじってそうなイメージがあったのだが。

「ここで云々嘆いても仕方ない。とにかく先に進もう」

匠先輩の一言で、俺達はどの楽器を使うのかの話し合いが始まった。

第3話－9　音楽祭と妹　他人以上、友達以下

それからまずどの曲をやるのかを決め、
その後誰がどの楽器を担当するかで盛大に騒いだが、
曲によって多少のメンバー変更もあるのだが、一応のパートは決まった。
演奏する曲は、俺達がやりたいと言った曲全てという強欲ぶりを発揮し、
役割分担は基本的に、ボーカルは麗香とチカ、
ギターが俺、電子ピアノが零雨、ドラムがジョーという構成。

俺達が演奏する曲には、男性ボーカル率百パーセントの曲も入っているため、
その辺はジョーと俺でカバーすることになった。
まあ、このメンバー構成について俺の率直な感想を言わせてもらうと、
みな、なかなかいいポジションにありつけて良かった、というところか。
楽器の演奏者が若干足りない感じであるが、
その辺はチカや麗香が歌いながら簡単なメロディーを弾くということで何とかするそうだ。

他人事（ひとごと）みたいな言い方だって？
そもそもこんなことになったのは、
麗香が勝手に俺をメンバー登録しやがったのが原因で、
俺はこんな恥さらし大会に出場するつもりは皆無だったんだよ。
勝手に登録されたからといって、
急にやる気がどこからともなく降ってはこない。
同じく勝手に登録されたにもかかわらず、やる気満々のチカとジョ

ーに関しては、
体内にやる気発生装置かなんかがついてるんだろう。

「誰がどのパートをやるかも決まったし、早速練習を始めよう」

「え!?今からっすか、先輩!?」

驚いた俺に匠先輩は腕を組んで強くうなずいた。

「ああ。チカの話を聞くと、二十日弱、本番まで時間がないのだろう?
こんな短期間に初心者が何曲も綺麗に演奏するのは相当至難の業だ。
舞台で恥を晒したくなかったら、これぐらいのことはやって当たり前。
そもそも俺自身、はっきり言ってお前達の演奏をこんな短期間で聞くに堪えるまでのクオリティーまで持って行ける自信がない。
第一、俺は普通の大学生。
教える腕もこの間までやっていた中学生の家庭教師のバイト程度しかない。
勉強は覚えるだけでも済むが、音楽は覚えるだけではムリムリ。
身体で覚える必要があるが、そこのノウハウは俺にはない。
つまり俺にも最適な教え方を見つけるために時間が要るんだよ」

「でも匠、そんな急に言われたって準備も何もしてないわよ!?」

チカが言うが、
匠先輩の表情は至って真剣だった。

「今日は初日だし、お前達も準備なんてしてきてないだろうから無理は言わない。
まずはとにかくCDの曲をバリバリ流して、曲を覚えろ。
曲の雰囲気、テンポ、特徴的なメロディーを覚えてしまえ。
お前達、やりたい曲が入ったCDはあるか？
昨日チカがみんな持ち寄ると言っていたからあると思うんだが」

「ああはい。持ってきてます。
ただ、零雨は曲は何でも良いといって持ってきてませんし、
麗香は自作曲希望なのでCDはありません。」

ジョーが言うと、匠先輩は持ってきたCDを貸して欲しいと求めた。
彼は俺達のCDを集め、どの曲がやりたいのかを聞くと、
残りのCDを持ったまま地下室の階段を上がって行ってしまった。
先輩は一体何を？

やることがなく、ヒマを持て余している美羽は、
匠先輩のドラムセットをめちゃくちゃに叩いて遊んでいる。
小一のガキが叩いて壊れるような軟弱な楽器じゃないだろうから放置しておいてもいいだろう。

ツンツン、と背中を突かれて振り返ってみると、零雨がいた。
その白くて長い髪には、乾燥した血がこびりついて目立っている。
後でしっかり洗い流したほうがいいだろう。

「どうした？」

「……木下匠は……私にとってどういう存在？」

零雨は俺だけに聞こえる大きさで言った。

「……ごめん、言ってる意味が分からない。
出来れば他の言葉で言い換えてくれないか」

「木下匠は……友達であるか……敵であるか……あるいは第三者、つまり他人であるか」

「これからは知り合いに分類されるだろうな」

「知り合い？」

「他人以上、友達以下ぐらいのランクの人間ってところだ」

「……私は知り合いの……取り扱い方を知らない」

プッ、取り扱いって、道具じゃあるまいし。

「俺も知らん。取り扱い説明書があれば是非是非読んでみたいものだ。
まあ、最適な人の扱い方はそれぞれ違うから、自分で考えるしかない。
匠先輩についてのアドバイスをするなら、
一つ、敬語か敬語っぽい言葉でで話せ。
一つ、匠先輩を優先した行動を取れ。
一つ、匠先輩の頼みや命令は状況にもよるが、出来るだけ忠実にこなせ。
これぐらいだな」

「……ありがとう」

それから少しすると、匠先輩がまた階段から降りてきた。

「おい、我が後輩共！俺からのプレゼントだ！受け取れ！」

さっきと違って何かみょーにテンションが高いな。

何かいいことでもあったのか？

「どうしたんすか、先輩。

自販機の下で十円拾った小学生のようなテンションですが」

俺は比喩がまずかったと思ったが、当の本人は気にしていない様子だ。

危ねえ危ねえ。

「まあ受け取れ。さっきお前らから預かったＣＤを、

この白レーベルのＣＤセットに焼いてきたんだ」

「それって、著作権的なものは大丈夫なんすか？」

ジョーは眉を寄せた。

「著作権って何？

……ていうのは冗談。

大丈夫さ、ちゃんとした音楽用ＣＤだから法的にも問題ない。

あ、俺はそんなに法律について詳しくないから説明はパスで」

「でもいいんですか？

このＣＤだってタダじゃないのに……」

「気にするな、ちょっとCDが余り気味で処理に困ってたところだったし。
CDを焼かないで捨てるなんてもったいないじゃないか」

匠先輩はケースに入った白レーベルのディスクを俺達に一枚ずつ配った。
零雨と麗香は受け取ると、
同時にケースからディスクを取り出して、匂いを嗅ぐという奇行をとって言った。

「全然焼けてないじゃないですか」「……焼けてない」

匠先輩は零雨と麗香からCDを取り上げ、記録面を見て言った。

「ちゃんと焼けてるよ」

「でも全然焦げた匂いがしません」

二人とも、「CDを焼く」という言葉をそのまま受け取ってしまっている。

「CDを焼くというのは、CDにデータを記録するということで、
実際に着火して燃やす訳じゃないぞ」

先輩はそういってニコッと笑って返した。

「お前ら、家に帰ったら何回もこのCDを聴けよ。
時間があまりないからな、無駄にはできない。
……さてと、次はいつ集まるかな?」

明日、明後日は匠先輩は用事があるため無理ということで、
次回の集合は明明後日（しあさって）になった。

第3話－10　音楽祭と妹　俺、困る

「ねえお兄ちゃん、買ってよ」

「ダメだ」

「欲しいの！」

「我慢しろ」

「おにーちゃんのドケチ！」

「何とでも言え、お前を甘やかすわけにはいかない」

「どーしても欲しいの、買ってくれなきゃやだやだやだやだ！！」

「昨日新しいの買ってやったばっかりだろーが」

美羽は頬を膨らませて抗議の顔を見せた。

匠先輩からＣＤをもらった次の日の朝、美羽が朝のテレビを見終わったあとのことだ。

昨日、チカの家からの帰りの途中に近所のおもちゃ屋に寄って、美羽の欲しがるおもちゃ、

《森のどうぶつのお家セット》なるものを買ってやったんだが、

今日も欲しいおもちゃがあるとねだりにねだっているのだ。

「でもこれ（昨日俺が買ってやったおもちゃ）だけじゃ楽しくないもん！」

どういうわけか説明しておこう。
美羽に買い与えた《森のどうぶつのお家セット》はシリーズものの商品で、
《森のどうぶつのお庭セット》、《森のどうぶつの畑セット》というふうに、
《森のどうぶつの○○セット》という子供にも分かりやすいネーミングがされている。
その中で美羽が欲しがるのは《森のどうぶつのお友達セット》という商品で、
買い集める上で基本となる商品、森のどうぶつのお家セットに主人公と思われるウサギーの人形が一体同梱されている。
森のどうぶつのお友達セットとは、
この主人公の友達という設定のキャラクター数体が入っている商品である。
これを販売している会社にとってみればこの戦略は有効なのかもしれないが、
いくら小一のチビガキといえどもこれがおもちゃ屋で「販売」されているのは知っているわけで、
その本質は「友達がお店で販売されている」という、
よくよく考えると末恐ろしいものである。
こんなものを美羽が欲しがるようになった原因は、朝の子供番組の合間に放送されるコマーシャル。
こいつが《かわいい森のどうぶつのお友達セット～♪［定価１９８０円（税込み）］》
などとぬかしやがるからこうなったのだ。

「お家に一人は寂しいから、友達を入れてあげたいの！」

「家に一人だけの寂しさは俺がつい最近まで現在進行形で体感していたからよく分かる。

だから買ってやりたい気持ちもやまやm…「それなら買ってよ！！」」

あのな、美羽。
人の話は最後まで大人しく聞きましょうって学校で習わなかったか？
先生の言うことはしっかり聞いて守らないと、俺みたいなろくでもない人間に仕上がるぞ？

「美羽、お前が持ってきたおもちゃで我慢はできないのか？
ほら、大きさは違えどもクマや犬のぬいぐるみとか、持ってきてんじゃねえか。
昨日買ってきたウサギの友達にすれば喜ぶんじゃねえのか？」

美羽はそっか、と一瞬納得したようだったが、
やはり買ってほしい衝動は押さえられなかったらしい。
何でもするから買ってほしいと言い出し、とうとう泣き出してしまった。
だからガキは嫌いなんだよ。
とうとう俺はウサギの友達を買ってやることを約束してしまった。

さて、美羽が朝早起きしたのは初日の朝だけで、
それからは俺が眠い中、美羽との約束を守るために起きて、
朝のテレビが始まる前に美羽をたたき起こしてやることが日常になっている。
それでそのテレビ番組を見て欲しいとおねだりしはじめ泣き出す。
ここに俺の利益は一切含まれていないというから困りもんだ。
こんなことが毎日繰り返しになることは俺の精神衛生上、
そして家計上悪いからどうにかしたい。

この問題に打つ手はあるのだろうか？なんとかせねば。
美羽にＣＭを見せずに本編だけ見せる方法……

……ハッ、簡単じゃねえか。

俺は携帯電話を手に取り、麗香に電話をかけた。

《もしもし？》

「おう、俺だ」

《コウくんどうしたの？》

「ちょっとお願いごとがあってだな……聞いてくれるか？」

《うん。何？》

「実はな――――」

「――――というわけだ」

《うん、いいよ。
じゃあ、ちょっと準備してから行くね》

「助かるぜ」

俺がしたあるお願いを快諾した麗香は一時間後、俺の家に来て作業をしてくれた。

翌日。
朝の十時ぐらいに起きた美羽は、
既に例の番組が終わってしまっていることに気づき、俺に文句を言った。

「なんで起こしてくれなかったの？」

至極当然の問いであろう。

「もうこれからは早起きもしなくていいぜ」

俺はテレビのスイッチを入れた。
画面には今朝放映された爆走昆虫野郎のオープニング。
そう。録画すれば問題なかったのだ。
今どきのレコーダーにはＣＭカット機能がついている。
俺の家にはレコーダーがないから、
麗香に頼んでレコーダーを借りて、取り付けてもらったのだ。

これで美羽がＣＭをみてモノを欲しがる心配も無し、
俺も早起きもしなくていいし、一石二鳥とは正にこのことだ。
美羽が昼に起きるという悪習を身につける可能性があるが、
それを補って余りあるメリットがこの方法にはある。俺には。

「わあ、ありがとう！」

「昨日来た姉ちゃんにちゃんと礼を言うんだぞ」

「うん！」

美羽は喜んでその録画した番組を見はじめた。

昼飯を食い終え、美羽が美羽の部屋で新しく買い与えたおもちゃで遊びだした頃、
マンションの廊下からカラカラカラカラン、という金属音が聞こえてきた。

「何だ？うっせえな……」

俺は冷房の効いた部屋の中で、
テレビを見て午後のひとときを堪能していたが、その音が何となく気になった。
音がどんどん大きくなってくる。こっちに近づいてきているようだ。

カラカラカラン、カラン……

俺の家のドアの前でその音が止み、続いてインターホンの音が鳴った。
インターホンの受話器をとってみるも、返事はない。
ただムフフフ……という笑い声が聞こえてくるのみだ。

「お兄ちゃん、お客さん？」

「知らねえ、お前はそこにいろ」

何となく嫌な予感がした俺は、恐る恐るドアのレンズを覗いた。
が、なんということはなかった。
白髪と黒髪の私服姿の女子高生二人組の姿が見えた。
笑っている麗香と無表情鉄仮面の零雨だ。

「おいおい、俺がインターホンに出たら何か応答しろよ、びっくりするじゃねーか」

そういってドアを開けると、麗香はさらに微笑んだ。
俺のＨＰが二十五回復。

「私達、ちょっとだけ人間っぽくなったよ」

そう言いながら麗香は後ろに回していた右手を高らかに上げた。
手にはさっきの騒音の元凶となるものが握られている。

「それで……俺をどうしようってんだ？殺しに来たのか？」

俺の顔から血の気がスゥーと引いていくのが分かった。
冗談じゃない！

なぜ麗香はニコニコしながら金属バットを引きずって俺の家に来たんだ！？

麗香が新しく覚えたのは何だ？怨みか？嫉妬か？
俺は麗香の琴線に触れるようなことをしたのか？
そしてなぜ零雨が一緒にいる？

「最終テストに協力してほしいの」

確かに麗香は言った。

「……とにかく、中に入れ。
中に美羽がいるから発言に気をつけろよ」

二人をリビングまで上げると、美羽が部屋から半身身を乗り出した。

「あ、お姉ちゃん！昨日はありがとう！」

「？」

麗香はなぜ美羽から感謝されているのか分からないようだ。

「美羽は今まで辛いのを我慢して朝早く起きてテレビを見ていた。
麗香がレコーダーを持ってきてくれたおかげで、
辛い思いをせずに堕落のみｔ……いや、『十二分』な睡眠時間が
確保出来たんだ」

「堕落？」

「言い間違いだ、気にするな。
決してレコーダーを使ったことによる、
美羽の生活習慣の乱れを懸念して言ったわけじゃない」

麗香は眉を寄せ、少し考えて言った。

「使い方には気をつけないとね」

意味深な言葉だ。

レコーダーの使い方に気をつけないとと言ったのか、
それとも俺の言葉の使い方に気をつけないとと言ったのか、
・・・・恐らくは両方の意味だろう。
零雨は例の如く言葉の裏の意味を理解するハイレベルな会話についていけず、「???」。

美羽がリビングに足を踏み入れ麗香の元へ加速しながら向かうと、
厚かましくも抱擁を求め、ダイブしやがった。
麗香は突然の小飛翔体に驚くまもなく、
抱き着かれてバランスを崩した。

……ドスン！

「コラ美羽！麗香にタックルするな！危ないだろ！」

「は～い……」

零雨が麗香に手を差し伸べ、麗香はそれを受け取って立ち上がった。
それでも美羽はしつこく麗香に抱きつき、俺が力ずくでやっとのこと引きはがした。
だがしかし、美羽はなぜか麗香にものすごく懐いてしまってるようで、
磁石のようにまた抱きついてしまった。
ひぃっ、と小声を上げる麗香。
何だ、やっぱり麗香は子供が苦手なのか？

「お姉ちゃん、お母さんとおんなじ香水の匂いがするね」

「へぐっ！？」

「どうした麗香？」

「い、う、ううん、何でもない！」

どうみても怪しい。

麗香は隠し事とか分かりやすいからな。

例の秘密は今のところバレてはいないが、少し不安が残る。

ちょっと失敬して匂いを嗅がせてもらう。

確かにしっかり香水がついている。

ちなみに、念のために失敬させてもらった零雨からはそのような匂いは検出されなかった。

「麗香、お前発情期か？」

「は、発情！？」

「零雨、麗香はなぜ香水をつけてるんだ？これから彼氏とデートか？」

「……香水をつけた理由は……私には理解できない。……思考の対応外」

「アハハ、お姉ちゃん顔赤いよ！」

「いやっ、その、これは……」

「これは？何？」

「実は……匂いもオシャレのうちって話を聞いて、それで……私そんな香水が発情のサインなんて知らなかったから……！」

「『発情』ってのは俺が適当にお前をからかうのに言っただけだから本気にするな」

「コウくんひどい！
私だってどんな反応されるのかちょっと怖かったし、
からかわれたらどうしようって内心びくびくしてたのにっ！」

「……はいはい、どうもすみませんでした」

どうやら、麗香の思考回路は和式らしい。
自己主張の強い洋式なら俺達の反応なぞ一切気にせず、
「だからどうしたの？」ぐらい言うだろう。

誰だ？トイレを連想したやつは？

……俺だ。

「まあ、どっから匂いもオシャレのうちという
言葉を聞いたのかは知らないが、それは合ってる。
ただ、中には気づいているのかついてないのか強烈な香水をつけて、
匂いというより臭いというべき香水（毒ガス）を振り撒いて、
周囲に不快をもたらすテロリストもいる。
俺はこういうやつは嫌いだ。
そんなやつに対する俺の辛辣（しんらつ）かつストレートな感想を言わせてもらえば、

『トイレの芳香剤付けて出歩くな』ってところだ」

「つまり、どういうこと？」

「何が言いたいかというとだな、使う濃度は程々にしておけということだ。
気分を悪くする」

「コウくん、私はどうなの？濃い？」

「それぐらいでいいんじゃねえか？少なくとも俺はそう思うね」

麗香はホッとしたようで、目を閉じてため息を一つ吐いた。

「……美羽、そろそろ麗香から離れろ。困ってるのが分からないのか？」

「ねえ、お姉ちゃんのなまえは『何れいか』なの？」

俺の注意を無視して抱きついたまま美羽は麗香に聞いた。
いまさらそれを聞くか？

「私の名前はｓＯ……じゃなくて、『神子上麗香』。
麗香って呼んでいいからね」

「漢字でどうかくの？」

「神様の神に、子供の子、上下の上って書いて、
下の名前の漢字は……難しい図形だからまた今度教えるね」

「美羽、『上』っていう漢字かけるよ！
こうかいて、こうかいて、こうかくんだよね？」

美羽は空に指で書き順デタラメの上を書く。

「美羽、書き順おかしくないか？正しくはこうだろ」

俺は美羽の手を取り、正しい書き順《一》、《丨》、《上》と空に書いた。

「ねえ麗香お姉ちゃん、誕生日はいつ？」

「うーん……秘密」

「じゃあ、好きな食べ物はなに？」

「えっと、秘密」

「好きな人はいる？」

「んー、どうかな？」

「体重は何キロあるの？」

「コラ美羽、女の子にその質問はしたらダメだ」

それから麗香、美羽の質問をはぐらかしてばかりいないで、一個ぐらいはまともに答えてやってくれ。

美羽は麗香にコアラのように抱き付いたまま、零雨に顔を向けて言

った。

「お姉ちゃんの名前は？」

零雨は表情一つ変えずに答えた。

「……嵩文零雨」

「誕生日は？」

「西暦二千△△年七月……」

「零雨ちゃんストーップ！」

俺も声をかけようかと思ったところだったが、麗香がいち早く零雨を止めた。

零雨が「誕生日」として言おうとした日付は、今月。

零雨は自分がこの世界に降り立った日付を「誕生日」として言おうとしていたに間違いない。

「美羽、この二人は俺に大事な話があるらしい。
そろそろお話もこれぐらいにしてお前の部屋で静かに遊んでろ」

「はーい！」

美羽は自分の部屋のドアを閉めた。

「美羽ちゃんにバレないように、ちょっとロックかけておくね」

麗香は美羽の部屋のドアノブを握る。
ドアが一瞬大きく歪んだが、すぐにまた元通りになった。

「これで美羽ちゃんはドアは開けられないし、
音も伝わらないから絶対にばれない。安心」

零雨と麗香はトランプをした時と同じように地べたに座った。

「で、最終テストって何の？」

麗香は俺にバットを渡して、二人は俺にくるりと背を向けた。

「とにかく、そのバットで私の後頭部を思いっきり殴ってみて」

「正気か？」

完璧なハト派を自称する俺に、殴れと？
ちょっと麗香はバグってる気がする。
おーい、ＵＳＥＲ！聞こえるかー！
お前さんの世界管理ソフトがバグってやがるぞ。
とっととこのバグを修復しろ！

「……早く殴って」

零雨までご乱心らしい。

「ちょっとお前ら、一回落ち着け」

「私は正気よ」「……落ち着いている」

「お前らは一体何のためにここに来たんだ？」

「コウくんに殴ってもらうため」「……コウに殴られるため」

二人同時に言った。

何がしたいのかさっぱりだ。

おまえら鬼畜ドSシステムじゃなかったのかよ？

いつからM属性に転換した？

「……コウが殴るまで……私達は帰れない」

「なぜ？」

「……USERの命令だから」

なるほど、つまりご乱心なのはこいつらじゃなくその上のUSERだったのか。

世界の創造主がそんなことさせたらもっとダメじゃねえか。

「お願いだから早く殴って」

麗香が催促する。

もう知らねえぞ？

俺はただ頼まれてやっただけだからな？

《完璧なまでのハト派（自称）》には傷一つつかないからな！

「いくぞ？」

「手加減しないでね」

俺は後ろめたさを感じつつ、どういうことか理解もできないままバットを振った。

第3話－11　音楽祭と妹　人間には理解できない理由

確かな手応えを手に感じた。
人を金属バットで殴る感覚。
俺は零雨と麗香の後頭部を思い切り殴った。
俺に殴られた零雨と麗香は床にうつぶせに倒れてしまった。

繰り返し言っておくが、俺は好きで殴っているわけじゃない。
零雨と麗香に有無を言わさず「とにかく殴れ」と言われたからで、面倒なことにならないうちに、俺に殺意はないことをここに表明しておく。

「おい……大丈夫か？」

俺は零雨を揺さぶってみるが、目を閉じて倒れたまま動かない。
……ちょっと、これやばくねえか？

「おい起きろ零雨！おい！」

どんなに強く揺さぶっても、どんなに耳元で大きな声を出しても、反応しない。
ただ、幸いにも生きてはいるようで、背中が一定のペースで上下し、鼻に手を近付けると、確かに呼吸しているのが確認できた。
これは麗香も同様だった。
いや、リアルにどうするよ、コレ？
目を覚ますのを待つか？それとも救急車を呼ぶか？
仮に救急車を呼んだとしよう。俺は一体どうなる？

救急車で病院へ緊急搬送されて、すぐに後頭部の打撃痕が発見され、

通報した俺はその時点で殺人未遂容疑が固まり、場合によっては即逮捕だ。
逮捕された場合、俺は容疑を認めるしかないから、
この案件はすぐに裁判所で刑事事件として裁かれることとなる。

俺の年齢や彼女達の状態なども加味され、
執行猶予がつくかどうか分からないが、とにかく実刑判決が下されるだろう。

＝……俺、人生終了。

しかも零雨と麗香には日本国籍があるのかどうか分からないから、
下手をすると彼女達が書類上では「存在しない」人間であることがバレてしまう可能性も残る。
こうなってしまうと零雨も麗香も学校に留まっておくことができなくなる。

昼のワイドショーでチカやジョー、担任の先生などへの突撃取材がなされ、
顔にぼかしが入った状態の彼らのインタビュー映像が全国ネットで配信されまくる。

そう考えると俺は生きた心地がせず、気分が悪くなって立っていられなかった。
零雨と麗香は相変わらず地面に伏せたまま起き上がってくれない。

心臓がバクバクと鳴り、全身が震えている。

人殺しをして逃亡し、全国に指名手配されたある人が捕まり、
「捕まって良かった」、
「こんなに気持ちが楽になるならもっと早く出頭しておけばよかった」、
と言ったという話を耳にしたことがあるが、今の俺はその気持ちがよく分かる。

ああ、極道者と戦ったあの時のように生き返ってくれないだろうか。
もし代替（スペア）の身体が無限ではなく三つまでしか用意されていなかったとしたら、
残機を使い切った麗香は永遠に動かない。
零雨は確かまだ一機残っているはずだから、起き上がってくれるはずだ。

もしこのまま零雨と麗香が目を覚まさなかったらどうなる？
数十にもおよぶ平行世界の管理人である彼女達を潰してしまった俺に、
どんな罪よりも重い罪を犯したということで、
彼女達の持ち主であるＵＳＥＲが罰を与えるだろう。

罪悪感半端ねえ。
……ああ、マジ死にてえ。
俺はこれ以上の思考を脳が本能的に諦め、
その場にへたりこんで横になった。

「もう、俺なんてどうなったっていい――――」

その呟きはリビングの壁に吸い込まれていった。
俺がやったことは人間として最低のことだ。
金属バットで人を殴った。それも後頭部を、だ。
いくら本人から直接頼まれたからといって、それはしてはならないことだった。

「……もう、出頭しようか」

一時間経っても、零雨と麗香は息はあるものの起き上がってはくれない。
俺は携帯電話を手にとった。

1、1、0。

あとは通話ボタンを押すだけだ。
このボタンを押せば、気持ちは楽になるだろう。
だが、押してはならないような気もして、なかなか押せずにいた。

その時、物音が聞こえた。
ハッとその方を見ると、身体を僅かながら動かしている零雨がいた。

「おい！大丈夫か！俺が誰だか分かるか？」

俺に支えられ、ゆっくりと起き上がった零雨は、俺の顔をまじまじと、無表情のまま見つめた。

「あなたの名前は……足立光秀、愛称……コウ、現在十六歳」

合ってる。

良かった、無事だった。

「……最終テスト合格」

零雨はまばたきを一つ、そういった。

最終テスト？何がテストだったんだ？

「う、ううー――」

麗香も起き上がった。

目をこすり、麗香は壁に掛けてある時計を見上げた。

「あ……うまくいったみたい」

「……何がうまくいったんだよ？」

「最終テスト」

「・・・は？」

麗香は後頭部をさする。

「痛むか？」

「う……うん、ちょっとだけ」

「悪かった、いくらなんでも少し強く殴りすぎたか」

「ううん！謝ることはないよ！
思い切り殴ってって、頼んだの私だし」

麗香は微笑んだ。

「……そろそろ教えてくれ。
《最終テスト》が何だったのかを」

「これはね、私達が、強い衝撃を受けた時、気絶するかのテストだったの」

「？」

俺はそう言われてもあまりよく理解できなかった。

「だからね、コウくんが私達の頭を殴って、気絶するかどうかのテストだったの」

「気絶して何になるんだ？」

俺は率直に疑問をぶつけた。

「今までの私達は、殺されることはできても、気絶することはできなかったのよ。
これは私達にとって、大事なことだって気がついて、それで……」

「……このアホが！」

「ヒクッ！」

麗香はびくつき、固まった。
それでも俺は言う。言わせてもらう。
言わないと気が済まない。

「俺がこの一時間、どんな気持ちでここにいたのか、お前ら分かるか？」

零雨は首を横に振った。
正直でよろしい。

「お前らなあ、言っておくが金属バットで人を殴るというのは、テンプレートな殺人方法の一つに挙げられるほどの凶悪なものだぞ？
いくらやってくれと頼まれたとしても、やった俺からすりゃ、相当なストレスがかかるんだよ。
お前らが事前の説明もなくただ殴れとぬかしやがるからなおさらだ」

「そうだったの……」

「いくらお前らがプログラムだとしても、少なくとも人間の姿をしている限り、こっちとしては心配せざるを得ないんだよ」

「ごめんなさい」

「麗香だけじゃねえぞ零雨、お前もだ。
俺に協力を依頼するのは構わないが、俺に負担をかけないでくれ」

「……理解した」

ところで、気絶する機能を備えた零雨と麗香だが、
そんな機能はどこで使うんだ？
普段の生活をしていれば気絶なんてまずしねえってのに。
俺からすれば、はっきりいって無駄な機能だと言いたい。
しかし、ＵＳＥＲが絡んでくるとなると、話は別だ。
創世者と考えられるＵＳＥＲがテストを命令した。
そこには人間の持つ、地球上最高性能を誇る（と、思われる）
一五〇〇ミリリットルのしわしわの脳みそをもってしてさえも理解できない、
高度な理由が隠されているに違いない。

と考えてみたものの、どう考えてもやはり意味はないような気がして納得がいかない。
……考えるのも面倒臭くなってきたからここらで考えるのも終わりにしておこう。

「麗香、」

「何？」

美羽の部屋のドアノブを掴み、ロックを解除した麗香は振り返って俺を見た。

「そういえばお前、作曲のほうは進んでるか？」

麗香は俺から視線を逸らした。

「作るといっても、どうやって作ればいいのか分からなくて……
楽譜の読み方は電子資料を探して読んだから分かるんだけど、
作曲の仕方だけはどうしても見つからなくて、困ってるの。
どうしたらいいと思う？」

「俺に聞かれたってだな……」

困るというものだ。
音楽を聞くことはあっても作曲はしない俺に、
ノウハウは当然一切持ち合わせていない。
麗香の言った《電子資料》とは恐らくインターネットのことだろう。

「実はその相談も兼ねて来たんだけど……」

「悪いな、チカなりジョーなりに聞いてくれ。
俺は力になれそうにない」

「それが、二人にはもう聞いちゃってて、
匠先輩にも聞いたんだけど、

≦己の表現したい熱い気持ちをただつらつらと旋律に変え、
歌詞（ことば）に変え、根性と愛情を持って作っていけばいい！
赤と青の中間は紫じゃない！緑だっていいじゃないか！≧

って言ってくれたの。
でも、正直何言ってるのか分からなくて。
それで、最後の望みでコウくんの所に……」

「それは残念だったな、ならば諦めるのも視野に入れておくべきだ

な」

「え～、そんなぁ……」

それにしても匠先輩の助言は意味不明だ。
特に後半の《赤と青の中間は紫じゃない！緑だっていいじゃないか！》は
完全に何を言いたいのか理解不能だ。
こう言いたいのだろうという抽象的なニュアンスすらも読み取り不可な表現をするぐらいだ、
もしかしたら匠先輩なら
零雨と麗香が気絶テストをせねばならなかった理由が分かるかもしれんな。
麗香は拳を握り締めた。

「絶対に、ぜったいに作りたいの！お願い！助けて！」

「頼まれてもムリだって言ったろ？」

「自分で作らないとどうしても疑問が解けないような気がするの！」

「俺にその分野の知識がない以上、手助けはできん。
足し算が理解できない者同士が集まったって足し算ができないのと同じなんだよ」

俺に作曲に関する情報、知識がない上に、麗香もないのだ。
集まったって出来るはずなどない。
そういう作曲に関する本とか、家にあれば貸してやりたいところだが……

……本、貸す？
そうか！あそこならば何かあるだろ。

「麗香、図書館は行ったことはあるか？」

「図書館？行ったことはないけれど……」

「そこに行けば何かヒントでもあるんじゃねえのか？」

「そっか、そうかもしれないわね。
図書館って、どこにあるか、分かる？」

「さあ？まあ少なくとも市内に一つはあるはずだ」

俺はそういってパソコンを立ち上げた。
図書館のウェブサイトはすぐに見つかった。
市内には十五の図書館があるが、
その中でも一番大きい中央図書館は港区にあるらしい。
紹介画像には、《図書館の窓から海が見える》の文字がある。
外観も改装されたばかりらしく、綺麗だ。

「ここに行けば、なにか分かるんじゃねえか？」

麗香は嬉しそうにしながら、首を縦に振った。

「ところで零雨は、楽譜作りはどうだ？」

「……問題ない、完成している」

「さすがだな」

ただの耳コピだから麗香ほどは難しくはないだろうが、
それすらもやったことのない俺にとっては、難しいことのように思えた。

「じゃあコウくん、行こう！」

「……は？」

「図書館だよ、『図、書、館』！」

「お前一人で行けばいいだろうが」

「図書館の利用の仕方とか、私分からないからついて来てほしいの！」

「図書館の人に聞けば大体分かるっつーの」

「でも、一人よりも『友達』と一緒に行った方が楽しい」

そこにタイミング悪く美羽登場。

「どこいくの？としょかん？」

「何処も行かねえよ」

「まだ決まったわけじゃないけれど、
今日図書館に行きたいなって、お話してたの」

「余計なことをてめえ！」
麗香

「あ、何かごめん」

俺は恐る恐る謝る麗香から美羽に視線を向けた。
そこには俺の予想通り、ニカァ、と笑う美羽がいた。

「美羽も行きたーい！」

「来るなあ！」

結局、俺は図書館に行くという名目で、
家から引きずり出され、ギンギンの太陽光が照る中、外出することになってしまった。

第3話－12　音楽祭と妹　図書館の外で見た夕日

「ここが中央図書館、か」

麗香は入口の前で立ち止まり、呟いた。
俺の右隣には美羽、左隣には零雨がいる。

「ねえコウくん」

「何だ？」

俺は額の汗を茶色のハンカチで拭きながら答えた。
別に青じゃなくたっていいだろ？

「探しているの、見つかるかな？」

「分からん、あったとしてもそれを見つけ切れるかどうかだ」

この図書館には数十万冊もの書籍が並んでいるらしい。
ネットの紹介文にさらりと書いてあった。

「そんなところでボーッと突っ立ってないで、暑いからとっとと中に入ろうぜ」

先に歩き出して図書館の中に入っていった零雨と美羽をよそに、
建物を見上げたままの麗香の背中を、俺はポンと叩いた。
水分一つ含まれていない、サラサラした感触がした。
コイツ、汗かかねえんだよな……俺は汗で背中が大変なことになってるっつーのに。

なんかうらやましい。

「あ、待って！」

後ろから小走りで追い掛けてきた麗香は俺を追い越し、
閉じかけている自動ドアに突っ込んで行く。
心の中の俺がマイクを持ってアナウンスしている。
《はい駆け込み乗車は危険です、おやめください！》と。

「あうっ！」

……フッ、バカだ、自動ドアに挟まってやがる。
一度プレスした自動ドアも、麗香に反応してドアが開いた。

「何で私がいるのにドア閉まっちゃうの？」

「お前が突っ込んで行くからに決まってるだろ」

さて、喜劇のようなワンシーンが展開されたのもつかの間、
俺と麗香は二人の後を追って中に入った。

俺の脳内辞書の「図書館」の欄には、
《使い回されてボロッボロの本ばかりを収めた建物であり、
　特に利用価値は見出だせない施設》
というイメージがあったのだが、どうやらそれはただの思い込みだったようだ。
新品の本棚が整然と並び、
最新の書籍も随時追加している旨の宣伝ポスターが貼られている。

さらに、破れたりバラバラに分解してしまった本も、
別室で専門の人が修繕しているそうだ。
本の修理屋がいるとは、これには驚いたぜ。
俺の家にも糊がダメになってバラバラになりかけの本が一冊あるんだが、
そういうのは修理してくれるのだろうか？
それにしてもいろんな創意工夫をして、利用者確保のために頑張っているな。
だが平日の昼ということもあってか、人は少ない。

「お兄ちゃん、こっちこっち！」

俺を呼んだ美羽は、入口横のベンチに座っている零雨に抱かれていた。

「零雨、お前が美羽を抱いてるなんて珍しいな」

「……珍しい？」

「いや、お前がそういう性格っつーか、なんつーか――「……仕様？」」

俺は零雨を気遣って《仕様》以外の言葉を探していたが、
当の本人からさらっと言葉が出てしまった。

「直接的に言えばそうなんだが、
もう少しオブラートに言えば……そう、
お前のイメージと今の行動とが何か合わない、ミスマッチだと思ってな」

「……それは良くないこと？」

「全然、むしろそういう一面があったほうが、意外性があって俺は好きだね」

零雨は二、三回まばたきした後に言った。

「……私はあなたに対しての恋愛感情は、
……現在発生していないが、……それでいいなら」

「今の『好き』を、そう解釈されてしまうと困るんだが……」

「プッ、コウくん発情期？」

俺の横で麗香は口を手で隠して笑った。

「ちげーよ」

それからその仕草はどこで覚えた、麗香？
からかうことは俺がさっき麗香をからかったことを学習したのだろうが、
この仕草はどこで覚えたのかは見当がつかない。
ま、二十四時間麗香を監視しているわけじゃないし、
俺と一緒じゃないときにドラマでも見て覚えたのだろう。

「好きにはな、《Ｌｉｋｅ》と《Ｌｏｖｅ》の二通りがあるんだよ。
《Ｌｉｋｅ》は《～が好き》の好き、
《Ｌｏｖｅ》は《～を愛している》の方の好きだ。
俺が言ったのは前者の意味だ、下手に勘違いしてくれるな」

「分かってるって、少なくとも私は」「……学習した」

両者それぞれの反応。

一方の美羽はというと、初めて来た図書館に気分がハイになっているらしく、

足をブラブラさせながら辺りをしきりに見回している。

美羽の足が零雨の華奢な足、特にすねにビシバシと打撃攻撃を繰り出しているのだが、

零雨は一向に気にする様子を見せない。

「ほら美羽、足をぶらつかせるな、零雨の足に当たってるだろ」

「はーい」

「返事だけはいい奴だな、たまには俺に褒められるようなことをしろってんだ」

「まあまあ、それはともかく、そろそろ本探し始めようよ」

「はいよ」

零雨は美羽を解放して立ち上がり、美羽は麗香の横についた。

「気に入られたな、麗香」

麗香は眉を寄せた。

「う、うん、それはうれしいことなんだけど……」

「邪魔だよな」

俺は美羽を麗香から引きはがし、暇になるであろう零雨にその世話を頼んだ。

「どうだ、世話できるか？」

「……恐らく可能、しかし……今までにこのような……ことをしたことはない」

「まあ、機転利かせて頑張ってくれ」

「……成功に向けて……努力する」

「ああ、それとだ、館内は携帯電話は使えねえから、電源を切るか、マナーモードにしておけ。そして館内では極力使うな」

「……分かった」

俺と麗香は作曲資料探しに、零雨と美羽は子供用の本が置かれているコーナーにと、二つに別れた。

「ふ～ん、こんな風に並べてあるんだ～」

俺の隣を歩く麗香は、物珍しそうに辺りを見回す。

「そんなに図書館の本の配列が珍しいのか？」

ここの図書館の配列方法は他のそれと変わらない。
内容ごとに本が分類され、同じ系統の本を集めて歴史なら歴史、
科学なら科学、小説なら小説、とひとかたまりになっている。

「うん、同じ系統の本を一カ所に並べておくなんて、私考えもつかなかった」

「じゃあお前らの持ってる世界に関するいろいろなデータは、
バラバラになって存在してるのか？」

「バラバラ。このステージ２５だって、
今は大体……七八億ぐらいの断片になってアドレス空間にあるのよ」

「木っ端微塵だな……
それだと断片同士のデータの連携とか、ランダムアクセスっつーの？
とにかくあっちこっち参照しなきゃならんのじゃないか？」

「そうだけど、シュミレートのコンピュータのデータの転送速度も速いし、
計算の処理能力もまだまだ余裕があるから特に問題はないよ」

我ながら難しい話に突っ込んでしまったようだ。
今の話は半分聞き流しておこう。

「音楽に関する資料はこの辺りじゃねえのか？」

俺はそういって足を止めた。
音楽関係のコーナーだと、本棚の横の側板に貼ってある。
麗香は本棚の前に立つと、
まず一番端の本「音楽についての１９８の知識」なる本を手にとった。
パラパラとページをめくって本を戻し、その隣の本を手にとってパラパラ。
また本を戻して次の本をパラパラ……

「麗香、お前片っ端から全部探していくつもりか？」

麗香はめくるのをやめ、振り向いて俺を見た。

「ううん、探していくんじゃない、『読んでいく』の」

「無理だろ、全部の本を読破するには相当な時間がかかる」

「もう私五冊読んだよ」

どうやらパラパラとページをめくっていたのは、
読みたい所を探していたのではなく、読んでいたらしい。
読書速度速すぎだろ……

「そんな速度で内容はきちんと覚えられるのか？」

「当たり前じゃない」

当たり前じゃないからこうやって聞いてんだろーが。

「まあいい、俺は図書館ん中ぶらぶらしてるから、終わったら呼んでくれ」

「分かった」

さてと、自由になった俺だが、これから何をしようか？
美羽の世話を零雨に押し付けてきたわけだし、
様子を見に行ってもいいんだが、零雨がいるから大丈夫だろう。

……いや、ちらっとでも様子を見に行った方がいいかもしれん。
たまに零雨はとんでもないことしでかすからな。

子供用の本が陳列されているエリアに入ると、静かだった。
子供専用のイスと机が用意されているコーナーを覗き込むと、
イスに座った零雨に抱かれて寝息を立てている美羽の姿があった。
零雨の近くには二、三冊の本がきっちり積んである。
呼んでいる途中で寝てしまったのか。
零雨に気がつかれないうちにここをそっと離れ、
本当の意味で暇になった俺は、
面白そうだと思った適当な小説を数冊手にとり、適当な席を見つけて座った。
用意されている会議用の長机にとってきた本を読む一冊を残して置き、表紙をめくった。

俺の隣では同い年ぐらいの女子高生が勉強をほっぽりだし、恋愛小説を読んでいる。
お盛んなようで。
イマドキの高校生の興味あることといえば、趣味と恋愛と大学ぐらいさ。
おっと、俺も高校生だというのに、なに年寄り目線で語ってんだ……
……
俺は大学は実力でいけるようなところでいいと思ってるし、
恋愛なんぞ俺には縁の薄い話だと思ってるし、
まあ興味あることといえば趣味ぐらいなもんで。
別にそれでもまあまあ楽しい生活が送れてるから何とも思わないが、
お付き合いの一つや二つは卒業するまでにしてみたいものだ。

「あ……え？」

俺が小説の世界に介入して間もない頃、隣の女子高生が小さく声をあげた。
何が起きたのかちらりと横を見ると、
慌てた様子で本を閉じ、勉強道具を広げている最中だった。
本に熱中しすぎて時間でも忘れたのだろう。

慌てている横顔を視界の端で見ていたから鮮明には見えなかったが、
どこかで見たことのあるような顔の気がした。

「なんだ、誰かと思えばお前か」

「もう、今勉強してるの分からないの？ちょっとだまっててよ」

……チカだった。

「今慌てて勉強道具広げたんだろ？」

「ち、違うし！アタシはさっきからずっと勉強してたってのー！」

「ふ～ん、あっそ」

「去年みたいに夏休み終了直前に宿題したって、
ロクなことにならなかったからねー、だから今年はこうやって宿題やってんの」

「そんなことをするのは最初のうちで、結局最後には……」

「な、ら、な、い！」

「そういってる割には、読書に勤(いそ)しんでたようだが」

「……ちょっとぐらいいいじゃない」

「そのちょっとが事故の元だぜ？」

「アタシはあんたと違うから……シッシッ」

チカに手であっちにいけとあしらわれた俺は、再び読書を始めた。
しばらくカリカリとシャーペンの走る音が聞こえてきたが、はたりとやんだ。

「ねえ、あんたは今日は何の用事でここに来たの？」

「麗香の曲作りのヒント探しに付き合ってんだよ」
「じゃあ麗香も来てるの？」
「ああ、零雨と美羽もオマケでここにいるぜ？」
「あんたってさー、いっつも零雨とか麗香とかと一緒に行動してるよねー
やっぱり美人さんは好き？」
「さあ？」
「自分のことでしょ？それすらも分からないの？
あ、そっか、自分では気がついてないふりしてるんだー」
こっちにゃお前らに言えない深～い事情があるんだよ。
「ねえ、コウってさ、どんな子がタイプ？」
「ここは図書館だろ？黙って勉強してろ」
「これ聞いたら勉強に戻るからさ、教えてよ」
「……消去法的な観点からいけば、
まずお前のような性格ブスは論外だな」
「それをアタシに言う？普通」
「タイプを教えろっていったのは何処の誰だよ」

「それにしても酷くない？」

「何だよ、不満か？」

「あったりまえよ！
自分のこと性格ブスだなんて言われたら誰だって傷つくのが分からないの！？」

「黙れ。
兄にイスぶん投げた分際でほざくな。
そんな女が性格ブスじゃなかったら、世の中終わってる」

「うう、ひどい……」

「お前なあ、見てくれはそこそこなんだが、性格が足引っ張ってるぞ。
も少しおしとやかな性格だったら、今頃カレシの一人や二人はいるはずなんだがな」

「いやいや、二人はダメでしょ。
大体、あんたも性格ブスじゃない、イヤミとか皮肉ばっかり言ってさ」

「さ、読書、読書っと……」

「……ほら逃げた」

俺も確かに性格ブスかもしれんが、チカほどじゃないっての。
ただのめんどくさがりなだけだ。

約二時間後、麗香が零雨と美羽を引き連れて俺の所に戻ってきた。

「コウくん、終ったよ」

「ほう、どうだ、いい資料は見つかったか？」

「うん、奥の方にＣＤの試聴室もあっていろいろと便利だったよ」

「そりゃよかったな」

俺は読んでいた本を閉じ、隣をちらりと見るが、そこには誰も座っていない。
チカは一時間ほど前にここを出ていったのだ。

「どうだ？曲は作れそうか？」

俺が麗香に聞くと何かいいたげに口をもごもごさせている。

「コウくん、あのね、」

「ん、何だ？」

「コウくんの家にあるＣＤ、一式全部貸してほしいの……」

「全部まるまるって、百枚以上あるぞ？
そんな大量に借りて、何するんだよ？」

「作曲の参考になるかなって……」

「いいぜ、貸してやるよ」

「お兄ちゃん、のどかわいた～」

口に白いよだれのあとをつけた美羽が言った。

「美羽はお手洗い行って顔洗って来い、そうしたら何か買ってやるよ。

零雨、よろしく」

「……？」

零雨は首を傾げた。

「だから、美羽の世話をしてやれってことだ」

「……洗顔の世話？」

「そうだ。野郎は女子トイレには入れんからな」

零雨は首肯すると、美羽の手を握ってトイレに向かった。

その間、俺は自販機で美羽と俺の分のスポーツドリンクを買って待機。

トイレから帰ってきた美羽は俺の手にある目当てのものを見つけると、

すぐにそれを欲した。

何度考えたって、チビの世話は面倒なだけで、何の得もねえ。

自分の子なら可愛いのだろうが、年の離れた妹だからな……

図書館を出ると辺り一面、夕焼けに染まっていた。

「わ～、見て！夕日が綺麗！」

麗香は夕陽に染まって黄金色に輝く髪を、
海から吹く磯風にたなびかせながら、海に沈んでいく夕陽を指差した。
もし麗香が普通の人間なら、俺はもう完全に惚れてるね。
今でも若干惚れてる面もあるが、
あまりそういう関係にはならないほうが、精神的に後々楽だ。

ここから海岸までは歩いてもせいぜい三分。
帰る前に、ちょっと夕陽が沈んでいくのを見ていくことに。

夏の湿った独特の香りを持つ磯風が、顔に当たる。
あと一時間もすれば風向きは百八十度変わって陸風になる。

海岸に沿って木の板の遊歩道が整備され、
塩害防止のために設置されたステンレスの柵からの日光の反射が眩しい。

「夕陽が海に沈んでいくところなんて初めて見た」

「なんだ麗香、ずっと管理してきて、一度も見たことがないのか」

美羽がいる手前、うかつなことは言えない。
麗香は頷いた。

「だって、（ステージ）０以外の場所にきたのは今回が初めてだから」

「そうだったな。零雨は見たことはあるのか？」

「……ない」

俺が上を見上げると、横一文字の虹が空にかかり、後ろを振り返れば、薄く紫がかった鮮やかな藍色の空が迫ってきている。

虹って意外なところに見つかるもんだな……

いつもこんな空をしている中、学校から帰ることがよくあるのだが、今までずっとこんな美しい景色が身近にあるとは思いもしなかった。

会社帰り、学校帰りのやつらは、

携帯電話の画面ばかり見てないで一旦立ち止まって空を見てみるといい。

俺的にはスゲエ癒される景色だ。

はぁ～こりゃため息も出るってもんよ。

麗香は零雨から例のカメラを借りて、夕陽を撮影していた。

「こんなのもう二度と見れないかもしれないから、
写真に残しておこうと思って――――」

俺の視線に気がついた麗香はそういった。

「普段は情報の塊にしか見えないから、こんな風に視覚的に見ることはなくて……　こんなに綺麗な景色があるなんて知らなかった…

…」

「感傷に浸ってるな」

俺もだが。

「ねえ、カメラもってるのに、何で《きねんさつえい》しないの？」

「記念撮影？」

「えー、麗香お姉ちゃん、きねんさつえい知らないのー？
みんなでいっしょに《しゃしん》に写って、思い出をのこすんだよ」

「へえ、カメラってそんな使い方もあるのね」

「大低はそういう使い方をするもんだ。
おとといだって、お前写真撮られまくってたじゃねえか」

「あれって、そういう意味だったの？」

「それ以外にどんな使い方があるんだよ？」

「しゃしん、とろうよ！」

「……そうね、撮っちゃおっか」

それを聞くと、零雨は麗香からカメラを取り上げ、
少し離れたところにカメラを置いた。

「……撮影まで……残り十八秒」

「なんだ零雨、記念撮影という使い方知ってたのか？」

「……図書館で読んだ書籍の中に……このような使い方をする……記述を……偶然発見した。……残り七秒」

……はいはい。

写真を撮られるのはあまり好きではないが、まあいいだろう。

俺達はカメラの前に横一列に並んだ。

夕陽をバックに撮影だ。

「ところで零雨、逆光だが大丈夫か？」

「……大丈夫」

「ハイ、チーズ！」

数秒後、カシャ、という音が数回聞こえ、撮影は終わった。

「あっけなく終わっちゃったね」

麗香はしみじみと言った。

「だいだい撮影っつーのこんなもんなんだよ」

零雨はカメラを取りに行き、きちんと撮れたかどうかの確認をしていた。

「零雨ちゃん、ちゃんと撮れた？」

「……問題ない」

零雨は俺に今撮影した画像の確認を求めた。
カメラについている液晶ディスプレーを見る限り、完璧だった。

＞ｉ１８４８０―１３３５＜

「なかなか上手いじゃねえか」

「……ありがとう」

「さ、写真も撮ったことだし、そろそろ帰ろうか」

俺がそういうと、麗香が困った顔をした。

「もうちょっと、ここで夕陽を見ていたい……」

「珍しいな、お前（麗香）がそんなこと言うとは」

結局、俺達がここを離れたのは日が完全に水平線の下に隠れてからで、
ライトアップされた街の中を歩くことになった。

ま、この辺りを仕切ってた
例のやくざ集団も消えて治安が良くなったわけだし、

それにつれてチンピラも消えたし、
別に何の問題もなかったから良かったが。

第3話－13　音楽祭と妹　キカイとニンゲンの音の見え方

俺は今家の前で鍵を探している。
太陽は当然沈んだ。
図書館の近くにある遊歩道で日没をこの目でしっかりと見てきた。

「お兄ちゃん、お家のかぎなくしたの？」

「なくしてねえよ、多分」

俺の隣には美羽、後ろには零雨と麗香がいる。
何故途中で別れず零雨と麗香が家に来るのか？答えは簡単。
《持ってきた金属バットを持って帰ってもらうため》だ。
金属バットを持ったまま図書館内をうろついて、
通報されるというおぞましい事態に発展するなんて全力を挙げて勘弁だからな。
図書館に行くときに俺の家に置いてきたってわけさ。

「えーっと、かぎカギ鍵……あった」

ポケットから鍵を取り出して解錠。
ドアを開ければ例のごとく暗闇がお出迎え。
俺はそんなのはお構いなくズカズカと入って照明点灯。

美羽は自分の部屋に飛び込んだ。
零雨と麗香は玄関で俺がバットを持ってくるのを待っている。

「はいよ、バットだ。
日が暮れてバットを持ち歩くのは怪しまれるから気をつけろよ。

まだ今ぐらいの時間ならなんとか女子野球部の部活帰りに見えるだろうからいいが」

「ありがとう、気をつける」

俺は麗香に手渡す。
もし持ち歩いているのが男なら、
赤い回転灯のついた白黒の車がお出迎えにあがるだろう。

「そういえば、零雨の楽譜はどんな出来なんだ？完成したんだろ？」

零雨は頷いた。

「……気になる？」

「まあ多少は」

そういうと零雨は持ってきたショルダーバッグから一枚の手書きの楽譜を俺に。
楽譜が読めない俺でも、零雨が作ったとなれば興味を持つ。

「……ひでえな、こりゃ」

零雨が作った楽譜は読めない俺でも分かるぐらい悲惨だった。
それを聞いた麗香が楽譜を覗き込む。

「どれ？……零雨ちゃんには悪いけど、なんか違うものに出来上がってる気がする」

「これは何の楽譜だ？ギターか？ドラムか？電子ピアノか？」

そう聞かざるを得なかった。
書いてある楽譜が汚い訳ではなく、むしろ印刷されたように美しい。
だが、楽譜の中に入り乱れる音符の量が異常に多い。
楽譜の五本線が、おたまじゃくしで黒く塗り潰されていて、読めたものではない。
いや、塗り潰されているとかそういうレベルを越えて、
五本線の遥か上空や下にも音を示すおたまじゃくしがわんさか。
零雨は首を傾げて答えた。

「……楽譜はこれだけ」

「楽器別に書かなかったのか？」

「……（コクリ）」

「完全にアウトだな、こりゃ。
どうやって作ればこうなるんだ？」

「……聞き取った周波数を……直接音符に変換した」

なるほど、ベースのような低音からシンバルのような高音まで、すべて一緒たくりに処理したわけだ。
つまりギターの音も、他の音も、全部一緒に記してあるということだ。

「楽器ごとに聞き分けて書かねえと意味ねえぞ？」

「……？」

「だから――――」

俺がそのことをじっくり説明してやると、ようやく零雨は理解した。

「……作り直す」

「その方がいい。
明日、またチカの家に行かなきゃならんのだからな、完成は早い方がいい。
何なら、俺の家で書いていくか？先輩から貰ったＣＤもある」

零雨は少し考えた後、靴を脱ぎだした。
ここで書いていくことに決めたようだ。

「私はバット（これ）があるから、遅くならないうちに先に帰るね。
作曲もしないといけないし」

「何作るか決まったのか？」

「うん」

「どんな（曲なんだ）？」

「うふふ、出来上がるまで秘密」

麗香はそう言ってドアを開けた。
零雨は俺の横を通り過ぎ、なんの挨拶もなくリビングに入っていく。

「じゃあ、お先。
何かあったら、連絡してね」

「おう」

ぱたりとドアが閉まった。
俺はため息混じりに鍵をかける。

中に入ると、零雨がCDをあのプレーヤーに入れているところだった。
零雨はプレーヤーのリモコンを手に一人用テーブルに腰掛けると、俺に新しい紙と筆記用具を要求した。
いくらなんでも、その態度は厚かましいと思うぜ?

「ほらよ、紙が足りなくなったらまた俺に言ってくれ。また渡すから」

「……ありがとう」

「あ、零雨姉ちゃん!どうしたの?」

リビングの異変に気がついた美羽は部屋から飛び出してきた。

「ちょっと静にしてろ、零雨は今大事な作業をしてるんだ」

俺は美羽を部屋に押し戻し、ドアを閉めた。

……ガチャリ
またドアが開いた。
あまりにも早くドアが開いたので、
俺はドアを閉めきってなかったのかと思ったが、
ヤツがまた出てきたのでそうではないようだ。

「今度はなんだよ美羽！」

「一人であそんでばっかじゃたのしくないから、一緒にあそぼうよ」

「はぁ！？なんでお前と……！」

零雨が耳コピしてる間は騒音防止のため家事ができねえから、
その間は漫画の新刊を読もうと思ってたんだが……

「……ちょっとだけだ、いいな？」

美羽はニィ、とほほ笑んで俺の腕を掴み、部屋に引き込んだ。
俺が遊んでやる気になったのは、
ここでまた美羽に駄々をこねられて騒ぎ立てられては困るからだ。
騒ぎ立てて零雨の作業効率が落ちれば、零雨の帰宅時間が遅くなる。
遅くなるということは、家事をする時間が減るということで、
下手をすれば睡眠時間を削って家事をやらねばならなくなってしまう。
明日は朝からチカの家で練習がある。
それで寝坊して遅刻でもしようものなら、
チカが鬼のような形相をして俺を殺しにかかるだろう。
恐ろしい恐ろしい、負の連鎖だ。
芽は早いうちに摘み取った方がいい。

「お、早速遊んでやがるな？」

美羽は例の《森のどうぶつの〇〇セット》で遊んでいた。

「美羽のね、いちばんのおきにいりなの♪」

「ほう、そうかい」

例の「購入されたお友達」も前買ったお家の中でイスに座らされたり、
台所らしき場所で料理をしていたりと、美羽を喜ばせるために必死に働いている。

美羽に買ってやった《おうちセット》を見るたびにつくづく思うのだが、
こんな壁一面が取り払われて中身丸見えの家、プライバシーもクソもねえよな。
商品的に考えたらこんなタイプになったのだろうが、
こんな家に住まわされてる
ウサギ（おうちセット付属の人形）もたまったもんじゃねえはずだ。
俺がこのウサギなら、

「こんなあからさまな欠陥住宅になんぞ住んでられっか！」

と家を飛び出しているに違いない。
もともとウサギは地面に穴掘って生活してんのに、
気がついたらこんなオープンプライバシーな家で
生活を余儀なくされているわけだし、そりゃ文句の一つは言いたくなるよな。
口が糸で《×》に縫われただけで声も出せないことや、
綿を詰め込まれてウサギの形状を保ってることを差し引いても、
そこから逃げ出さないお前はスゲエと思う。

まあ欠陥住宅云々はあるが、
ホームレス状態のウサギの友達がほぼ居候するからにはさぞ賑やか

なのだろう。

「じゃあお兄ちゃんはおともだち役ね」

美羽は主人公のウサギを握りしめると、他の人形をすべて俺に渡してきた。

……全部やれってか？

まあいいだろう。

これから俺が子供用の人形セットで妹と戯れることは、余程のことがない限りないだろう。

刮目（かつもく）して見ておくといい。

俺は受け取った人形の中から適当に一体を選んで右手に持った。

第3話－14　音楽祭と妹　人形遊び

俺はまずその人形を外からテクテク歩いていくモーションをとりながら、
家の中にお邪魔させる。

「ちゃんとおうちの前でコンコンってやらないとダメ！」

……怒られた。

テクテク、コンコンコン。

「げんかんのばしょちがう！」ｂｙ美羽

とはいってもだな、残念なことにお前ん家玄関ねえんだよ。
壁とともに撤去されてっから。

「ドアはどこにある？」

「ここ」

美羽は三階の屋根裏部屋を指差す。
まったく、とんでもない仕様の家だ。
この家は家に入るまでに家のレンガ壁でロッククライミングをせねばならないらしい。
セキュリティー万全すぎる。
だいたい、こんな高所にドアつけるって、どこの雪国仕様だよ。
あっても二階だろ。

「……高すぎないか？」

「マンションだからいいの！」

この小さな家をマンションに見立てる発想はなかった。
これがガキがたまに的を射た発言をする理由かもしれない。
美羽はまだ一回も的を射た発言をしてないのは置いといて。

何にせよ、あくまでもここは美羽に主導権を握らせておかないと、
騒ぎだしたら面倒だ。
もういい、いちいち人形一体ずつこんな風にやってたら
日が暮れる……いや、日付が変わっちまう。
もう友達同士集まって、大勢で家に押しかけたという設定でいいだろう。

「コンコンコン」

《だれですか？》

「チーッス、俺だ俺。
早く開けてくれ、カエサル」

「ちがう！このウサギさんはカエサルじゃない！」

……今のは俺が調子に乗った。
大勢で押しかけてドアを開けたところで、
「ブルートゥスよ、お前もか！」
って返してくれるっつーのがベストなんだが、
よく考えればこんなチビにこのネタが分かるはずがない。

無茶ぶりしたな。
ま、おふざけもこのぐらいに。何でもほどほどが一番さ。

「コンコンコン」

《だれですか？》

「お友達だよ～」

《はい！どうぞお上がり》

「お邪魔しまーす！」（くせえ芝居だな……）

《今からお茶つくってあげるからまってててね～》

・　・　・

しばらく美羽と戯れ、
美羽の顔がいかにもご満悦といった表情を浮かべるようになったころ、
コンコンと、リアルのノックが部屋に響いた。

零雨だ。

俺は美羽をそのままに、ドアを開けた。

「……終了した」

「そうか、ちょっと見せてみろ」

楽譜数部を受け取ると、さっきとは違って表紙がついているのに気がついた。
表紙には、その楽譜がどの楽器の楽譜なのかが記されている。
さっきとは違い、＜や＞、ｆ、ｍｐ、：—、♭、＃といった音楽記号が並んでいる。
やり方を変えたのだろうか？

「あとはこれを見ながら実際に演奏して、
おかしな音がないかをチェックするだけだな」

読めない楽譜をパラパラ、俺は言った。
零雨は俺から楽譜を受け取り、ショルダーバッグの中にしまいこんだ。

「……帰る」

「そうだな、気をつけて帰れよ」

今俺が言った言葉は彼女には無意味なものかもしれないが、
一応の儀式的な意味合いをこめて言っておく。

零雨は靴を履いて一言「……ありがとう」と述べると、外の暗闇に消えて行った。

さて、そんじゃあめんどくさいでも家事でもすっか。

美羽も腹減ったといってたし、まずは晩飯だな。
俺は台所で食中毒防止のために手を洗い、冷蔵庫を開けた。

第3話－15　音楽祭と妹　10min+α

「お兄ちゃん、朝だよ、お出かけしないの？」

そんな美羽の声とともに、俺は目を覚ました。
昨夜、「さすがに楽譜が読めねえのはやばいよな」と思った俺は、家事を済ませた後、パソコンでネット検索しながら勉強していたのだが、
どうやらいつの間にか寝てしまっていたらしい。
キーボードに顔面を押し付けて寝ていたようで、顔が痛い。

「うーわ、最悪、跡残ってやがる」

寝ボケつつ試しに顔を触ってみると、
キーボードの凸凹の跡ががしっかりと顔に残っている。

明後日の方向を向いたキーボードを元に戻したとき、
手首がマウスに当たってパソコンのスクリーンセーバーが解除された。
表示された画面右下の時計を見て俺ア然。
緊急事態発生。

「ウォォォオオッ！
美羽、今日はいつ起きた？」

「きょうは朝のテレビは美羽一人でみたよ」

「そんとき何故俺を起こさなかったんだテメー！」

「お兄ちゃんもみたかった？」

「んな訳があるかっ！」

時刻は午前九時五十分。
練習開始の約束の時間十分前じゃねえか！
これはマジでやばいぞ、チカに殺されるぞ！
俺はイスを倒す勢いで飛び上がり、
洗面所で顔に水をぶっかけ、歯ブラシを高速シェイクしながら着替える。
それと同時に着替えとパンを焼き、美羽に行く準備をするように言う。
人間本気になれば一度に三つぐらい同時に作業できるってもんよ！
もちろん、美羽は遅刻した際の免罪符代わりだ。
美羽の扱いがひどいだ？もう何とでも言え！チカにぶん殴られるよりかは断然マシだ！

「もうきがえてるよ！」

美羽は服の裾を引っ張りアピール。
裏表よし、前後よし、靴下よし、完璧だ。

「でかしたぞ美羽！」

「へへへ……」

照れる美羽をよそに俺は洗面所にとんぼ返り、
歯ブラシを元の収納場所に突っ込むと、チーン、とパンの焼き上がる音。

ベストタイミング！

「美羽！今パンが焼けたからテーブルの上に置いてあるジャムなりバターなり好きなもんを塗りたくって食せ！」

「はーい！」

美羽はこの緊急事態を理解しているのかどうかは知らんが、とりあえず俺は財布に千円札があるかどうかを確認し、ポケットに突っ込む。
壁に掛けてある電波時計を見れば約束の時刻まであと七分！
これはアレを使うしかない！

「いただきまー…「美羽、出かけっぞ！」」

見れば苺ジャムを文字通り塗りたくったパンを美羽がかじりつこうとしている最中だった。

「まだ美羽これ食べてなーい！」

「構わん！俺の修羅場を見たくなければついて来い！」

強引に美羽の手を引いた俺は家を出て鍵を閉め、エレベーターのボタンを押す。
しかしエレベーターは階下《5》で▲印のまま止まっている。
下からはおばさんの雑談。
エレベーター貸し切りで雑談すんなババア！

「そうだ美羽、お前はコアラになる自信はあるか？」

「こあら？」

「そうだ、コアラだ」

「……コアラ、なりたい！」

「ヨッシャ！俺という大木に掴まれ！」

……ポム☆

「そっちじゃねー！」

確かにそっちも比喩表現で使われることもあろう！
だがしかし、今こんな状況で掴んでどーする！？
つーか、ガキの分際で心得てるんじゃねえよ！

「なにがそっちじゃないの？」

「あーもう理解出来てようが出来てまいが何でもいい、とにかくおんぶだおんぶ！」

俺は屈んで背中を見せると、美羽は喜んで飛び乗った。

「いいか、しっかり掴まっておけよ！」

エレベーターは来る気配を今だに見せない。
ならば階段を下りる他方法はない！

俺は美羽を背負ったままエレベーター横の階段を駆け降りる。
おばさんの話し声がそれに連れて大きく、明瞭になる。

「ウォリャリャリャリャリャア――――！
そこの奥さん！エレベーター占領すんなボケ――――！」

階段を駆け降りながらそう叫び、
エレベーターが停止している五階のエレベーターホールをチラ見すると、
キョトン顔の主婦二名。
俺は構わず階段を駆け降りる。
まあ確かに、いきなり幼女を背負った青年に、
階段を駆け降りながら注意され、颯爽と消えていくというシチュエーションは、
なかなかあったものではないだろう。

とにかく、遅刻時間をどれだけ短くできるか、それだけが俺の頭を占領している。

ようやく一階にたどり着き、駐輪場で美羽を下ろして自転車を出す。
コイツでどれだけ時間短縮ができるか分からないが、徒歩よりは早いはず！

「ほれ、背中に乗れ！」

美羽はニコニコした様子で俺にしがみつく。

「いいか、ぜってえに俺から手を離すんじゃねえぞ？」

「うん！」

「よーし！行くぞ！」

俺は美羽を背負ったまま自転車に飛び乗って、急発進。
頭の中でチカの家までの最短ルートならびに最速ルートを弾き出し、
自転車をそのルートに乗せた。

「わー！お兄ちゃん速ーい！」

背中の美羽は相当喜んでいるようだ。
お前は恐怖心というものを忘れたのか？
俺が競輪スタイルで自転車を漕いでるから、
背中の美羽の負担は少ないだろうが、
高速で流れてく地面を見て怖がらないとは、肝が座ってやがる。

時間がどれだけ経ったかは分からない。
俺はチカの家の前に到着、自転車に乗ったままインターホンを押した。

ピンポーン

……ガチャ（インターホンの音）

「おう、俺だ」

《……》

「もしもし？」

《……》

「悪い、寝坊した」

《……コウ、アウト》

インターホンからチカの声がした。

「ゴメン」

《まあいいわ、

自転車の音が聞こえてきたってことは、今日はあんた一人で来たんでしょ？

まだ遅刻三分ってとこだし、軽い罰ぐらいで許してあげるわ》

「残念、俺一人じゃねえ。美羽もいる」

免罪符の存在を忘れてはならない。

《二人乗りしてきたの？》

「厳密には１．５人乗りだ」

《それどういうこと？》

「美羽を背負ってきたんだよ」

《よくそんなアクロバティックな技を……》

「人間本気になりゃ少しぐらい無茶こいてもどうってことねえよ」

《美羽ちゃんが落ちるとか、そういう心配はしなかったの？》

そうこう会話してると、匠先輩が出てきた。

チカはそれに気がついたらしく、

インターホンからガチャリという音が聞こえ、通信は途絶えた。

「おう、我が後輩D！

妹を背負って自転車とは、なかなかポイントが高いね」

何のポイントだよ。

「遅刻してすみません、先輩」

「なあに、これぐらい死刑で済むから安心しろ」

「……。」

「……冗談だ、本気にするな。

俺は千賀（チカ）とは違ってそういう血生臭いのは嫌いでな、

これぐらい時計の誤差の範囲だ」

匠先輩は笑って柵を開けてくれた。

「自転車は適当に花壇の隅にでも置いといてくれればそれでいい」

例の地下室に入ると、ジョーと零雨と麗香は壁に寄り掛かって雑談。

飛び起きてからここまでの俺の中のどっかの制御スイッチがパンク

してたらしい。
今思い返せばテンションが異常だった。
一言で言うなら、「寝過ごした俺（笑）」。

「おっす、コウ」

「おう」

壁に寄り掛かって一息つくと、チカと匠先輩が下りてきた。
匠先輩は手ぶらで、チカはノートパソコンを持っている。
どうもチカは匠先輩のアシスタント役になっているらしい。
イスの一件が響いたか。

「お前ら、ちゃんとＣＤは聴いてきたよな？」

匠先輩はチカにノートパソコンのセッティングをさせながら聞いた。

「はい、聞き過ぎて親に
『何回同じ曲聞くんだ？こっちも歌詞覚えちゃったぞ？』って怒られました」

ジョーは笑いながら答えた。
イヤホン着けて聴けばいいものを、わざわざ部屋に垂れ流すからだろ。
そういう俺も、暇がありゃ垂れ流しまくってたが。

「それぐらいやれば十分だ。
さて、耳コピさんと作曲さんは誰だったかな？」

「……私」「作曲は私です」

「どうだい？進捗状況は」

「……楽器別の……楽譜は全曲全て……作成済み……です」

「私も、一応全部書き上げました」

零雨が敬語を話すのを聞くのは初めてだ。
前回ここに来たときにそうするよう俺が教え込んだのだ。
匠先輩は目を丸くした様子で言った。

「はぁー！作業早いね！
耳コピなら俺でもこのぐらいの時間があればできるだろうけど、
何、大分前から作曲してたのかい？」

「いえ、昨日一晩で書き上げました」

麗香はそういいながら、洒落たショルダーバッグから楽譜ノートを先輩に渡す。

「これが作曲した曲です」

そういや、夕べ麗香にＣＤを貸すのを忘れてたが、大丈夫だったのだろうか？
匠先輩は受け取ったそれをペラペラめくると一言、

「かなり複雑な曲だね、これ本当に一晩で書き上げたのかい？冗談だろう？」

と、麗香に疑いの目を向けた。

麗香は嬉しいような困ったような、そんな表情を浮かべた。

「本当に一晩で書き上げたんです！」

「まあ、とにかくここに完成品があるわけだし、
どれぐらいの期間で作り上げたのかは問題ではないか。
問題なのは、『この曲の質はどうなのか』ということだな」

匠先輩は麗香の楽譜ノートを扇いで顔に風を送りながら、
チカが用意したノートパソコンの前に座った。

「作曲した子、名前何ていうのかな」

「神子上麗香です」

「はいはい、神子上さんね、作ってもらったメロディーをパソコンに打ち込んで、
想像通りの曲になっているか、ちょっと確認しよう」

匠先輩は三十分待ってくれれば打ち込みは終わるからといったが、
麗香が作った曲は予想以上に打ち込みしにくい曲だったらしく、
結局打ち終わるのに一時間以上かかってしまった。
その間、俺達は事前に兄から教わったらしいチカに、
地下室にある楽器の扱いを全部一通り教えてもらった。
まあ実物を使って教えてもらったわけだし、そりゃ分かりやすかった。
……ただ、チカ先生が噛み噛みだったのが残念ではあった。

「さてさてさて、打ち込みも終わったし、
ちょっと神子上さんの作った曲を流してみようか。

ヴォーカルは打ち込んでないから、そこのところ頼んだぞ」

麗香は顔を赤らめうつむいて、小さく「……はい」と答えた。

「それじゃ、好きなタイミングでこのボタンを押してくれ」

匠先輩はパソコンのイヤホンジャックを通してアンプに繋ぎ、麗香に再生（Enter）ボタンを押させた。

第3話－16　音楽祭と妹　楽譜と心の耐久性

麗香がボタンを押すと、最初にギターの音が聞こえてきた。
一つのギターで奏でられる、少し切ない雰囲気。
このような展開で入る曲はいろいろ聞いてきたが、
次の展開が全くもって斬新だ。
なんと、ギター以外のメロディーがフェードインしてきた。
フェードインの反対語はフェードアウト。
よく、曲の最後を同じメロディーを繰り返しながら消えていく表現があるが、
それを俗にフェードアウトという。
つまり麗香はその逆をとったわけだ。

さすが、考えることが違う。
フェードインは、高速道路で車が合流するように、自然に、滑らかだ。
正直鳥肌モノ。
そこから先のメロディーはノスタルジックで聴く人の心を揺さぶる、特徴的な前奏。
曲調はテクノともポップともクラシックとも言えない、
ハッキリ言ってカオスな曲調だが、
それがさらに無限に広い空間に一人残されたような孤独さと、
それでいて、包まれているような優しさをバランスよく引き立たせている。
聴いていてどこか心地よい。

麗香は大きく息を吸い込んで歌いだす。

「ううむ……」

匠先輩は聴きながらずっと唸っている。
チカとジョーは聞き惚れているようで、石像のようにじっと聴いていた。

麗香の曲が終って時計を見れば、曲はやや長めの七分だったらしい。
体感時間で三分ぐらいかと思っていた俺は、時計が早いのかと思ったが、
匠先輩がその疑いが間違いであることを証明した。

「七分三十六秒、か……」

腕時計で時間を計測していた匠先輩は、それを弄りながら呟く。

「どう……かな？
もしかして、やっぱりどこかダメなところがありますか？」

不安を隠せない様子で麗香は匠先輩に話し掛けた。
すると匠先輩は麗香の方に向き直り、真剣な目で見つめた。

「この曲は、盗作じゃないよな？」

「はい、全部私が作りました」

「本当だな？本当にオリジナルなんだな！？」

「は、はぃ……」

匠先輩の剣幕に圧倒され背中を少し反らした麗香。

「これは神曲だ……神曲の誕生だ……」

神曲って、宗教音楽じゃねえんだから……まあ言いたいことは分かるが。

「素人がこんな曲を作るとは、世の中何があるか分からないものだな。

耳コピさんの書いた楽譜も貸してくれないか？」

零雨は昨日の楽譜を一式匠先輩に渡すと、先輩はノートパソコンの電源を切り、

聞き惚れたまま固まっていたチカに、二人の楽譜とパソコンを自室に置くように指示した。

「ちょっとコピーしてくる」

匠先輩はそう言い残してチカの後を追って一階へと消えていった。

「……コウくん、どうだった？」

麗香はまだ気にした様子らしく、声は小さい。

「上出来だ」

「本当に？」

「ああ、複雑な割には雰囲気を壊す音もなかったし、統一性もあった」

「麗香に作曲センスがあるなんて俺聞いてなかったぞ？」

「安心しろ。俺もだ、ジョー」

「とりあえずこの曲は絶対に最後に回すべきだな。インパクトとセンスが凄すぎて他の曲が隠れてしまいそうだ」

ジョーは「絶対に」という言葉を強調して言った。

「同感だ」

「そんな……ベタ褒めされちゃ……」

麗香は恥ずかしかって、俺とジョーにくるりと背中を向けた。彼女が作曲をすると言い出したときは、悪い意味で素晴らしい曲になると読んでいたが、いい意味で裏切られた。

「今の（曲は）麗香姉ちゃんがつくったの？」

美羽は俺の横で聞く。

麗香は振り返りもせずに答える。

「うん、そうだよ」

「へえ～、すごいね」

「っふ、ありがとう」

「そういえば、しゃしんは美羽にはくれないの？」

「あ、昨日の写真？」

麗香はようやく俺の隣の美羽に顔を向けた。

美羽は頷いた。

何も知らないジョーは、写真についての説明を求めた。

「写真？
写真って、何の写真？」

「中央図書館って知ってるか？」

「中央図書館？ああ、海の近くの？」

「そこに昨日俺と麗香と零雨とこの美羽（クソチビ）とで行ってきたんだよ。
帰りにこのチビが『写真撮ろ～』と言い出してだな……」

「なるほ、その写真っていうわけか」

なるほって、そこまで言ったなら最後まで言えよ気持ち悪い。

「写真持ってるのは私じゃなくて零雨ちゃんなの。
零雨ちゃん、写真ある？」

匠先輩に楽譜を渡してからずっと

打ちっぱなしのコンクリートの柱にもたれ掛かってうつむいていた
零雨は、
その言葉を聞いて、身じろきひとつせずに答える。

「……画像データは……ある。写真は……ない」

長い髪が顔を完全に隠し、悲壮感と孤独感を醸し出す幽霊のような
零雨は、
何度見てもミステリアスで怖い。

「なあ零雨、お前もうちょっと明るくいこうぜ？
いっつも何かに取り憑かれたような雰囲気だけどさあ、
そんなお前が今みたいなスタイルでいられるとほら、
全体の雰囲気までそうなりそうっていうか、空気悪くなるじゃん
？」

ジョーは零雨にとっての難題を要求した。
感情もなく、理解力にも乏しい零雨にとって、
《明るい性格》も《暗い性格》も区別はつけられない。
どうしても彼女に《明るい性格の子》というイメージをつけたいな
らば、
《明るい性格の子》用の言動や考え方を
ひとつひとつを教えてやらなくてはならない。
そんな面倒臭い作業、ジョーが納得して親切丁寧に教えてやるなど
ということは
世界がひっくり返ってもまずないだろうし、
ましてやいくら俺が二人の協力者という立場であっても、
性格上お断りさせてもらうのは当然のことである。
ま、そんなだるい作業を快く引き受けてくれるとしたら
同種の麗香ぐらいのもんだろう。

案の定、零雨は答えなかった。

「……。」

「ジョー、彼女はもうああいう性格なんだから仕方ない」

「……そうだな、零雨が明るくなればそれはそれで違和感あるし。
でもさ、画像データがあるならちょっと見てみてえな」

「ジョーくん、見たいの？」

「え、ん、まあ、そりゃ」

「だってさ、零雨ちゃん。
ちょっとジョーくんにも見せてあげようよ」

それを聞いた零雨はゆっくりと顔を上げ、もっさりと動き出し、
自分のショルダーバッグの中からカメラを取り出してジョーに渡した。

「……使って」

「どうもありがとさん」

零雨はくるりと踵を返し、また元のように柱に寄り掛かって幽霊になった。
今日の零雨はどこか元気がない。
確かに今までも元気だったかと聞かれれば、
そりゃあああいう性格だし、お世辞にも元気などとは言えないが、

今日はどこかが違う。
このような元気のなさは、俺は一度だけ見たことがある。
麗香が転入してきたあの日の放課後、麗香の家で、
零雨が何かに気がついたようにびくついてスリープした、あの時と似ている。

ジョーが零雨のカメラを操作して画像を見ようと奮闘していたところに、
ＤＶチカが一階から降りてきた。

「あれ、あんたたち何してんの？」
「昨日零雨と麗香とコウが中央図書館に行ったらしいんだ。それで……」

「知ってるわよ、昨日図書館でコウと会ったから。
それでさぁ、ちょっと聞いてよ！
昨日あたしが図書館で勉強してたらさ、コウと偶然隣の席になって、
あたしのこと『性格ブス』呼ばわりしたのよ！
ひどいと思わない？」

「おいコラ、『性格ブス』に至るまでの経緯を、
誤解を招きかねない要点のまとめ方して説明してんじゃねえよ。
大体だな、俺がお前の隣の席に座った時点ではお前は恋愛ものｎ……」

「そんな細かいところはどうだっていいでしょ！」

「まとめんのとねつ造すんのは全然ちがうと言ってんだ」

「でもあんたがあたしを性格ブス呼ばわりした事実は変わってないじゃん」

「まあまあ、俺には状況がよく分からねえから、言い合いしないでとにかく何があったのかを正しく伝えてくれ」

ジョーが俺とチカの仲裁に入る。

「俺が図書館で適当な本を持ってきて本を読もうとしたところ、隣の席に勉強を放棄してラブストーリーを精読しているチカがいたわけだ。

チカは俺に気がついて、そそくさと今までずっとやってましたみたいな風体で勉強しはじめた。

そこでちょっくら雑談やって、んまあこの辺りはどーでもいい話だから省いとくが、とにかくだべった。

で、しばらく経ったところで、チカの方から話し掛けてきてだな、『コウのタイプってどんな子？』とか、後でも聞けるようなＴＰＯ認識不足のとるに足らない愚問を持ち掛けてきたのさ。

俺は俺で読書に集中し始めたところで、イラッとしていたのもあったが、

そこで優しい俺は『お前みたいな性格ブスはまず論外』と教えてやったんだよ」

「理由は分かったけどよ、もう少しオブラートに言ってやった方が良かったんじゃ？」

「ちょっとジョー！『オブラートに言ってやった方がいい』って、それどういう意味！？」

「言葉のまんまだけど」

「じゃあジョーもあたしが性格ブスだっていうの！？」

「少なくとも性格は良くないし……まあ、コウも性格ブスと言われればそれも間違いじゃない」

「ま、別に俺は何と言われようがカンケーねえことだけどな」

「……ちょっと、いい？
話の本題は写真……じゃなかったかな？」

麗香は脱線してもなお走りつづける俺達を元の軌道に戻す。

「ああ、そうだったな。
で、話を元に戻すと中央図書館に行った帰りに写真撮って、その写真をジョーが見たがっていると、そういうことだ」

「ふ～ん、そういうことだったの……
ねえ、あたしも見ていい？」

チカはジョーが操作するカメラの液晶ディスプレーを覗き込む。
ジョーは四人が写る集合写真を見つけた。

「お、これか？」

「ああ、それだ」

「あれ、麗香まだ美羽ちゃんのこと避けてるの？」

チカは写真の麗香の右腕を指差した。
確かに、美羽がピースサインをしている手を避けるように、
さりげなーく右腕を美羽から離している。

「やっぱり私、子供が苦手みたい……」

「どうして？かわいいじゃない」

「どうしてかは分からないけれど、あんまり好きじゃないの」

「麗香ってやっぱり不思議ちゃんだね、子供が苦手なんて」

「……。」

麗香は何も言わず、写真の中で俺に甘える美羽を見つめた。
俺もガキは苦手だし、まあ麗香も気にすることはないだろう。

「喜べ後輩！楽譜をコピーしてきたぞ！」

匠先輩は紙束を高らかに上げながら陽気に降りてきた。
ちょっと今思ったんだが、
耳で聞き取って作った楽譜をコピーすんのって、法的にどうよ？
やっぱ引っ掛かんのか？
……まあいいや、もしこんなことで捕まるようだったら、
とっくに刑務所が満室御礼状態だろうし、
下手したら服役待ち五年とか服役に予約制がつく事態にもなりかねん。

「よし、お前ら練習やるぞ！」

やる気満々の匠先輩は、俺達に楽譜一式（全楽曲、全パート）を配った。

「楽譜が出来たはいいが、読めないんじゃ話にならない。
そういうわけで、俺謹製のオリジナルテストを明日実施することを宣言する！」

なんか不吉な、学生の天敵の象徴ともいえる単語が聞こえてきたが、俺は一体どう対処すればいいんだよ。
ジョーは困った顔で言った。

「テスト……ですか？」

「そうだ、テスト範囲は今配った楽譜の中からしか出さない。
このテストはあくまでも《演奏する楽譜が読めるようになる》ことが目的だからな、
範囲外のものを勉強したって実戦（本番）では役に立たない。
役に立たないものはテストしても意味がないからな。
あ、それとだ、テストの点数は千賀（チカ）とお前らで争ってもらうつもりだ」

「ちょっ、お兄ちゃん！そんなのあたし聞いてないわよ！？」

「お前には昨日、一昨日と楽器の扱い方から楽譜の読み方まで、
一通りみっちり教えてやったんだ、それぐらいのハンディはつけておいて当たり前だ」

「だって、まだ習ってない楽譜の読み方とか、今コピーした楽譜に

は載ってるし、
それに……」

「黙れ！それでもお前は誇り高き木下家の長女なのか？
いいか、これは俺達木下家とお前の御学友との直接対決だ。
俺がわざわざアニメを観る時間を削って
お前（千賀）に教えてやったんだ、勝てないでどうする！」

「……」

匠先輩には、若干のナルシスト属性がついているようだ。
大体クラスメイトを御学友と表現する人間を生で見たのは初めてだ。
聞いたことがあったとしても、
それはせいぜい天皇家とかそこらあたりの人間に関する報道時ぐらいだ。

「……よし、黙った。
それじゃあ俺からテストについてのルール説明をするぞ。
耳の穴をかっぽじってしっかりと聞いておけ。
ルールは簡単だ。
まず、対決は千賀の点数と御学友四人の平均点で争ってもらう。
次に、このテストで負けた方が、勝った方に明日の昼飯と夕飯を
奢ってやること」

「そんなのあたしが負けたら、破産するじゃない！」

「負けなければいいだけだ」

「そんなこというけど、明らかにあたしの方がリスク大きいじゃん！
そっちが負けたら割り勘で一人分とちょっとの額で済むのに、

あたしが負けたら五倍の額を払わなきゃいけないじゃない！」

「完全に平等な条件下での対決もそこそこ面白いが、ちょっとこういうふうに不平等な条件があった方が、主催者側から見ればオイシイんだよ」

「なんであんたの自己満に振り回されなきゃ……」

「こうやって対決した方が盛り上がるし、やる気も出るだろう？それともう一つ。支払いは俺とこの青年の妹（＝美羽）の食事代も含む。

だから千賀が負ければ五倍ではなく七倍、御学友側が負ければ一人当たりの支払いは一食あたり7÷5で一・四倍だ」

確かにチカの反論も理解できるが、匠先輩の話も一理ある。惰性でテスト受けるより、競い合った方が頑張るから成績が伸びるというわけだ。

時間がない現時点では、この方法を採った方が効率がいい。その意図があることは、匠先輩の「やる気が出るだろ？」に含まれていた。

俺は賛成の意を表した。

「いいっすね、それで行きましょう」

「コウ！あんたそんなにあたしが破産するのを見たいの！？」

「頑張れ、匠先輩の言う通り、お前が負けなければいいだけの話だろ？

それにこういう言葉もあるじゃねえか。『人の不幸は蜜の味』っ

てな」

「ひっどい！
そこまでいうなら絶対に勝ってやるからね！
あんたが負けても知らないわよ？」

「別に無理に勝とうとしなくたっていいんだぜ？
ピンチなら俺が資金援助してやるからよ、ハハハ」

「それどーゆー意味！？」

チカは俺を睨みつける。

「自分で考えな。
言っとくが資金援助の話はマジの話だ。
お前が負けたときのペナルティーが俺達のそれと割が合わな過ぎる。
ま、それを『どうせ俺達が勝つんだから、お情けで援助してやるよ』ととるか、
それとも単に、
『対等な関係になるだけ近い状態で戦おうと親切心で言っている』ととるか、それはお前の自由だ」

「なんかムカつく……」

さっきまで横にいた美羽の姿がない。
俺はチカと火花を散らしている間、美羽のことをすっかり忘れていた。
辺りを見回せば、美羽はお気に入りの麗香に甘え、
毎回の如く困った顔をする麗香の姿があった。

ふう、どうもこの夏休みはゆっくりできそうにねえな……
来年は来年で夏休みは大学の受験勉強でパーになるだろう。
まったく、俺の望む平穏は一体どこへ逃げ去って行ったのだろうか。
それとも俺の平穏は近くにありながら分からないほどに変質してしまったのか？

……。

おそらく後者だろう。
チカはチカで女友達と遊びに出掛けたり、
長電話をしたり、俺達と一緒にいることが、平穏な日常だと感じているに違いない。
ジョーもそうだ。
あいつだって友達が俺一人しかいないとかそんな寂しい人間関係しかないわけがない。
ちょこちょこ雑談中に友人同士でどこか遊びに出掛けたときの、
なんら取り留めもない馬鹿話を話し出すことも多々あるから絶対にそうだ。

対して俺はどうだ？
何もせず、ただぼんやりと無駄な時間を過ごすことを俺の日常としている。
もともとの「日常」が違うのだ。
俺みたいな廃人風情のインドアピープルが、
いきなりアクティブな人間の日常を体験したって、それを日常と感じられるはずがない。
新しい生活スタイルを「日常化」するかどうかは全て選択者の自由。
俺はどう選択しようか？

「よし、改めて練習を始めるぞ！」

匠先輩がパンパン、と二回手を叩いた。

「全員楽譜を持って配置につけ！」

「……？どの曲の配置っすか？」

俺が聞くと匠先輩は固まった。

「……考えてなかった。

そうだな、まずは一番難しそうな神子上さんの曲にしよう」

俺達は予め決めておいた位置についた。

第3話－17　音楽祭と妹　世界の矛盾

「ジョーくん、ちょっとかわいそうだったね」
「ああ」

練習を終えた俺達（ジョー以外）は、チカの家を出た。
時刻は午後五時半。
周りの景色も、日没を予告するように黄ばんできている。
ジョーはああ見えて以外と楽器がうまく扱えなかったらしく、匠先輩に

「もっと強く叩け！熱くなるんだ！」

と注意されたかと思えば、

「叩くの強すぎ！頼むから楽器を破壊しないでくれ」

「ドラムが他の音を掻き消してる」

などと、注意と指導のガトリング砲の集中砲火を浴びて精神的に蜂の巣にされ、
さらに練習終了予定時刻になり、

「君は今日は残った方がいい。
この匠が懇切丁寧に教えてやろう」

との宣告を受ける始末。
練習から解放されたと胸を撫で下ろしていたジョーは、
「マジかぁ～」

と目を閉じ、眉間にシワを寄せて天を仰ぐことになった。
つまり、今現在、俺、美羽、零雨、麗香の四人でそれぞれの家路を辿っている。
はしゃぎ疲れた美羽は、零雨に背負われて寝ている。
俺が背負わないのは、自転車を引いているからだ。

「それにしてもお前、よくあんなの作曲出来たな」

「まあ、本当はもっとムードの出る曲も考えていたんだけどね」

麗香はそういって笑う。
俺が引いている自転車がチッチッチ、と単調な音を立てている。

「何でそれにしなかったんだ？
そっちの方が心に響くだろうに」

まあ、麗香の言う《もう一つの曲》は聞いてないから、あくまでも「響くだろうに」の「だろう」は《推定の「だろう」》だ。

「本当はそっちにしたかったんだけど、ちょっとね……」

「何が問題だったんだ？」

「雰囲気作りすぎて、人間の心が壊れてしまう可能性が……」

「寂しい感じの曲なのか？」

「……うん。
精神面が弱い人だと、生々しすぎて発狂する可能性があるのよ。

とくに美羽ちゃんみたいな小さい子ならなおさら」

「でも、何でそんなことが分かるんだよ。
お前らは人の心やら思考は理解できなかったんじゃねえのか？」

「でも、一人だけ例外がいるでしょ？」

麗香はそういって人差し指で自分の頭をツンツン、と突く。
それにしても、
《聴いたら発狂する可能性のある曲》とはどんなものか、想像もつかない。
だが、聴きたいとも思わない。
そんなんで俺が発狂するザマを他人に見せてたまるか。

「まあ確かにお前なら分かるかもしれないが……
どこにそういう精神面が弱いヤツには危険とか判断する基準があるんだよ」

「詳しいことを説明しようにも、ごめんね、
言葉にうまくできないぐらい難しくて、うまく伝わるかどうか……」

「……分かった、そういうことにしておこう。
そんな難しい話を聞かされたって、俺には理解出来ないのは目に見えてるからな」

奇跡的に理解ができたとしても、
そんなテストに出ないことは水に流して忘れてしまうに違いない。

「じゃあお前はそういう高度な理論を使って作曲したと？」

「コウくんにあげたクッキーと考え方は同じだよ」

「そうか」

俺が以前麗香から受け取ったクッキー。
あれは確か、
《最も万人ウケする味を演算処理で弾き出す》という危険な理論で作られた味だったはず。
弾き出した味に極限まで近づける為に合成という珍妙な手法が使われるため、
クッキーの中には何が入っているのか分からないという点で危険だ。
今回は音楽にそれを適用したらしい。

突然、零雨がおぶっていた美羽を麗香に強引に押し付けた。
俺はそのまま歩調を速めて去っていこうとする彼女の腕を掴んだ。

「どうした？」

俺が聞くと零雨は振り向く。

「……ステージ６の……二次元ユークリッド空間……処理エラー。修復しにいく」

「……は？」

零雨はそれだけ言うと、俺の手を払って路地の角を曲がっていく。

「おい、もうちょっと詳しく説明しろ！」

俺は追い掛け、角を曲がったが、そこには既に零雨の姿はなかった。

「行っちゃったね」

後ろから美羽を背負った麗香がやってきた。

「あいつはどこに消えたんだよ」

「多分今頃ステージ６で作業を始めてると思う」

「……なあ麗香、『ステージ６』ってどんな世界だ？」

「そこは零雨ちゃんの管轄で、
私の管轄じゃないから詳しくは分からないけれど、確か二次元の世界のはずだよ」

「二次元って、アニメとかのああいう世界か？」

だとしたらすっげえファンタジーだ。
だが、麗香の答えは違った。

「そんなのできるわけないわ。
今私達が縦横高さのある三次元の空間にいるから、
漫画とか絵画とかの二次元のものをああいうふうに知覚出来るだ

け。

つまり、漫画とかテレビだって、確かに縦と横で表現されているけど、

それを見る目は高さに相当する場所にあって、

決して印刷されている紙や画面上に目はないでしょ？

縦と横しかない空間で、物体が存在できる訳無いじゃない」

……全然意味が分からないのだが。

「だから、二次元の世界には縦と横しかないの。

縦と横しかない世界で、どうやったら高さを作り出せるの？

読書するように二次元の世界を捉えようとしたって、

その目は二次元の世界から飛び出しちゃってるでしょって」

「ううむ……よく分からないが、雰囲気だけは分かった気がする。

要は《高さがゼロの空間には物体は存在できない》っつうことでいいな？」

「うん、多分合ってると思う」

「じゃあ零雨はどうやってステージ６に入るんだ？」

俺が聞くと麗香は笑った。

「やだなあ、簡単なことだよ？身体を捨てて、本来の状態に戻ればいいの」

まあ、そうだろうが……

身体がない状態とは一体どういう感覚なのか、俺には想像がつかない。

そうだな、一回死んでみれば分かるかもしれない。
寿命で天のお迎えが来るまで、
死ぬのは丁重にお断りさせていただくことにしているから、
どういう感覚なのかが分かるのは恐らく数十年後辺りだろう。

「それにしても変ねぇ……おかしい」

麗香は首を捻った。

「何が？」

「記録によれば、
ステージ６で最後にエラーがでたのは地球時間換算で、
４５０，７５７，５３４，５８９，２７０，４３７，３６０，５２７年５ヶ月２８日１５時間４２分前のことで、
それまではずっと安定していたのに、何で今頃エラーなんて」

それよりもそのエラーが起きた年数が、
この宇宙の始まりのビッグバンが起きたとされる
百五十億年前の遥か昔になっていることが興味深い。
ていうか、そんな正確な時間情報を俺に伝えてどうしろと？

「しかも、ステージ６でエラーが出たなら、
他のステージでも同じようなエラーがでてもおかしくないのに、
どうして？」

「一つの世界で起きたエラーは連鎖するのか？」

「うん、このステージ２５はステージ２４をベースに作られているの。

それで、ステージ２４はステージ２３がベースになっていて、
ステージ２３はステージ２２……っていう構造になってるの。
それに、エラーの修正は、関係するステージ全て一括で行うから、
エラーが出るとしたら複数のステージでほぼ同時に起きるはずなのよ。
だから、ステージ６で起きたエラーは、
ステージ６以上の世界でも同様のエラーが起きてもおかしくないはずなんだけど……」

「なぜか起きないと？」

「うん、それまでに起きた最後のエラーといえば、
ステージ２５の強力な電波発生のバグなんだけど、
その時も他のステージには影響がなかったの」

「ま、すぐに他の世界でもエラーが出るとは限らないし、
とりあえずは零雨の帰還待ちだろう。
話はそれからじっくりと、
場合によっちゃＵＳＥＲも混ぜながらじっくりと対策を練ればいいだろ」

言っとくが、俺は世界の構造なんちゃらに手を出すつもりはない。
助言を求められたら少しは何かするかもしれないが、
基本的には俺はこの問題はノータッチの方向で行きたいと思っている。
どうみてもめんどくさそうだし、
そんなことに、いちいちしゃしゃり出てくるだけの体力と精神力は俺にはない。
そもそも、所詮俺はこの世界の一部品にしか過ぎないのだよ。
部品ごときが設計図に口出しする権利は微塵もねえ。

ここで寝ていた美羽が起きたため、この会話は終了となった。
俺達は家までのルートが分かれる十字路で麗香と別れ、
俺は自転車を押し、美羽はその隣をテクテク歩いて家路へついた。

……それにしても、不吉な予感がするのは俺だけだろうか？

第3話－18　音楽祭と妹　Offence And Punishment

それから日は沈んでまた日が昇った朝十時。

「時間は三十分。用意、始めっ！」

匠先輩はパン、と大きな音を立てて手を叩いた。

地下室に設置された大型テーブルを囲んでのテストが始まったのだ。

問題用紙と解答用紙は一緒になっていて、その理由は先輩いわく
「紙とプリンターのインクの使い過ぎでこの歳で親に怒られた」こ
とが原因で、
同時に紙資源の節約を命じられたからしい。
それでもともと試験時間一時間の予定だったテストを急遽三十分版
に圧縮し、
テスト用紙の枚数を減らしたそうだ。
どうりでテストの印刷文字が小さいと思ったら……
回答欄もミニマムサイズまで圧縮されてしまったため、
答案を枠内にきれいに詰め込む技術が必要になってくる。
が、中にはどうしても収まりきらなかったり、
文字が潰れてしまったりと、このテストは書きにくさの最高峰とい
える代物。
言っておくが、俺は昨日家に帰ってから久しぶりに猛勉強したおか
げで、この程度の問題は余裕だ。
実際のところ、猛勉強というより、自然に興味を持ったことを調べ
ていたら、
いつの間にかテスト範囲コンプリートしてたという感じだ。

零雨と麗香、チカのシャーペンの動きも滑らかで、
唯一頭を抱えているのは、俺の隣に座っているジョーだけだった。

「うう……分からん……」

テスト中の私語厳禁は万国共通のルールだ。
俺はそう横で独り言をのたまうジョーを尻目に、さらさらと答案を埋めていく。
美羽は匠先輩の横で俺の言い付け通り、静かにテストが終わるのを待っている。

チラリ、横から視線を感じた。
気のせいかと思えば、また見られている気がする。
そっと横を見れば、俺の答案を絶賛カンニング中のジョー。

姑息な野郎め……フッ、そんなヤツは俺がお仕置きしてやろう。

俺は別にチカに負けて昼飯と夕飯の支払いをするようなことになっても構わない。
零雨と麗香はどうかは知らんが、ここは教育的立場からジョーを矯正せねばならん。

俺はテストの答案を書き終え、俺は机（テーブル）に突っ伏して寝るをするふりをする。
めんどくさがりの学生がテスト終了までの時間を潰すのによく利用する常套手段だ。
その際、テスト用紙はジョーに見えるように偶然を装いさりげなく

置いておく。

「サンキュー、コウ」

俺が親切心で見せているとカンチガイのジョーは、俺だけに聞こえるように言い、

それまで黙っていたジョーのペンが走り出す。

第一段階、成功。

「テスト終了まであと五分だ」

匠先輩ははっきりとした口調で言った。

それが、俺の作戦行動開始の合図。

俺は眠たそうな目を擦りながら自分の答案に目を通す。

「うわ、回答が一個ずつ下にずれてやがる。

道理で最後の問題の回答欄がないわけだ」

俺は消しゴムをテスト用紙にこすりつける。

それを聞いたジョーの方からも、慌てて消しゴムで用紙をこする音が聞こえる。

「テスト終了だ」

匠先輩は俺達からテストを回収する。

ちなみに言っておくと、俺はテストの回答はズレてない。

最初から正しい位置に回答を書いてある。
俺がカンニングに協力していると思い、
完全に信頼したジョーは、俺の「ずれてやがる」の呟きを真に受けて、
自ら進んでテストの回答欄を一つずつずらしたわけで、
そんな回答がテストでいい点を取れるはずがない。

「コウ、ありがとさん」

俺にそっとお礼を述べるジョー。
いやいや、礼を言われるほどのことはしてねえから、マジで礼とか要らねえよ、うん。
これくらいの教育的指導は惜しまねえし、
それに後のジョーの愉快な反応が見れそうだし、それで十分さ。
これはあくまでも俺流の指導法である。
荒療治だという声も聞こえてきそうだが、そこはそこ、ご勘弁頂きたい。

テストの答案はすぐに採点されて返却された。

「千賀の点数は七十四点だ。
まあ、狙った点数ぴったりだったし、そこそこの成績だ」

匠先輩は淡々と答案を返していく。

「嵩文さんと神子上さんは優秀だね、満点だ」

この時点で、俺達の平均点五十点は確実となった。

「足立(俺)くん、君も結構いい成績だ。
千賀が『あいつはめんどくさがりの要注意人物』なんて失礼なことを言ってたけど、
点数を見る限りそうは思えないなあ、俺は」

「どうもっす」

俺はテストを受け取る。六十八点。
俺が『めんどくさがりの要注意人物』なのは認めるが、
恥をかくぐらいなら多少だるくても行動はする。
つうか、思った以上に点数取れてねえな……
よく見れば、潰れて読みにくい文字がある解答は全部×になっている。
匠先輩が漢字などの覚えていない文字をわざと潰して正解かどうか判別させにくくして、
採点者を惑わせマルをもらおうという作戦は通用させない方針なのは、
この採点結果を見ればすぐに読み取れるのだが、いくらなんでも厳しすぎだろ。

「牧田くん、残念だね。回答欄が一個ずつズレてるよ。……六点」

「ぬあああぁぁぁにぃぃぃいいいいい!?」

ゴーヤを食ったような苦い顔の匠先輩からテスト用紙を受け取ったジョーは、俺をギッと睨みつける。
ざまあみろ、自力でやりゃもう少しは取れただろうものを。

「フハハ！お前六点!?
どうしたんだ?勉強疲れか?」

「……ただのミスだよ」

ジョーは不正行為をした手前、表立って俺を糾弾することは出来ない。
彼の今の発言もそれを理解してのものだ。

「さて、四人の平均点の計算した結果、
六十九点と残念ながら千賀の点数の七十四点に及ばなかった。
約束通り、昼飯と夕飯は奢ってもらうよ」

「ジョー、今回は完全にお前が足引っ張ったな」

「……うるせー」

「あーあ、今月買おうと思ってたCD、諦めるしかねえかな～」

「……」

ジョーはばつが悪そうに下を向いた。
繰り返すが、俺は別に奢ることになっても構わないと思っている。
お袋が普段の三倍の仕送りをしてくれたお陰で家計的にも余裕があるしな。
俺がコイツにこう言ったのは、
コイツに対していい薬になると思ったからだが、良薬は口に苦し、
ジョーにとってはかなり精神的に喰らっているようだ。
もともとは勉強して来なかったのだから自業自得であるが。

ジョーは下唇を噛んで拳を握り締めた。体が少し震えている。
あれ、ジョーってそんなにナーバスな野郎だったか？

「コウ、回答欄が一つズレただけなのに、そんな責めることないでしょ？」

チカがジョーの肩を持った。
俺はジョーのしでかしたことをここで公にするつもりはない。
例え公にしたとしても、今のジョーの状態を見れば、
ただ彼のプライドをズタズタにするだけ、
つまり傷口に塩を塗るだけであることは明確であり、
幸いにも俺はそこまでやるほど性格はひねくれてなどいない。
だから俺はこう答えることにした。

「そうだな。ジョー、次からはそんな馬鹿なことすんなよ」

ジョーにしか伝わらない、暗号化された俺の真意だ。
真意をしっかり読み取ったらしい彼はゆっくり頷いた。

「ああ、もう二度とこんな馬鹿はしないよ」

さて、今日の財布の中には五千円札が一枚と千円札が二枚。
今日はいくら財布から消えて行くだろうか。

第3話－19　音楽祭と妹　最後の練習

さて、そんなこんなで練習すること本番前日。
練習のプロセスは通常のそれとなんら変わらず、
弾き間違えないように楽譜にその辺りをチェックして重点的に練習したり、
実際に演奏して各パートの音の大きさやら強さやらをチェックしたり、
時には楽譜を改良したりと、とくに変わったことはなかった。

まあ一つだけあるとすれば、
麗香が練習時、例のチートで秘密裏に時間をいじくって、
時間の流れを三分の一の速度にしていたぐらいのものだ。
ちなみにこれまで俺達は、約二十日に渡って練習してきたわけだが、
実際は六十日分練習していたことになる。
当然、ジョーやチカなど、他のメンバーは、この事実を知る由はない。

「お前ら、大分上手くなったな。
特に牧田（ジョー）くんは、あれだけ下手くそだったのに、
今じゃ完璧に演奏できるようになったし……
彼だけじゃなくみんなに言えることだが、
二十日でここまで伸びるとは正直思ってなかった」

最後の練習の合間、匠先輩は呟いた。
そりゃ、裏で練習時間が三倍に引き延ばされてるんだから、当たり前だ。

「ありがとうございます」

ジョーは匠先輩に軽く頭を下げる。

「ま、君の場合はスタートのクオリティーが低かった分、
伸びしろが大きかったともいえなくもないけどな、よく頑張った」

ジョーはハハハ、とニコリと歯を見せて笑う。

「よしっ！お前らは音楽祭の最後（トリ）の出演者なんだから、もう一丁通してやるぞ！
これが最後の仕上げの練習だ。次の練習はリハーサル、その次は本番だ」

匠先輩の発言に俺達は驚いた。
俺達の出演が音楽祭の最後なんて聞いてなかったからだ。
俺はあまりの衝撃的かつ絶望的な宣告を受け、
持っていたギターを思わずゴトンと落としてしまった。

「え、ええっ！匠、昨日の抽選会、オオトリ引いちゃったの！？」

チカはこの馬鹿兄貴！と罵倒しながら匠先輩の身体を激しく揺する。
昨日、学校で音楽祭のステージ出場順を決める抽選会があり、

「お前ら、少しでも多く練習しておきたいだろ？
俺が代わりに行ってきてやるから、しっかりやっておけよ」

と監督面の匠先輩は、俺達の期待を胸にチカ（練習場）の家から出て行った。
抽選会から帰ってきた匠先輩は俺達が結果を聞いても、

ただニヤニヤするだけで教えてくれなかったのだ。

「なあに気にすることはないさ。
学校で練習してるグループもチラリと見てきたが、
お前達のようなハイレベルなヤツはいなかったし、
オオトリを担うには十二分の実力があるとこの俺が認めてるんだ。
安心しな。何も心配することはない」

俺としてはあまり目立ちたくはなかったのだから、
そもそもオオトリだということ事態が由々しきことである。

「大丈夫、お前達の演奏なら恥をかくことはまずない」

……まあ、そりゃ、
俺が昨年音楽祭に行った時の出場者のクオリティーと比べれば、
こっちの方がまともに毎日練習やってたし、
俺も珍しく、というか仕方なくだが努力したし、
上手なのは当たり前といえばそうなのかも知れない。
下手な演奏で締めるより、そこそこのレベルの演奏でお開きにする
方が後味いいしな。
……別に自慢してるとかそういうわけじゃなくて、一般的にだ。

「それじゃあ最後の練習、曲を全部通してやってみよう」

匠先輩は演奏順のことで
頭がいっぱいになっている俺達を現実に引き戻す。

うしっ、そんじゃ最後の通し稽古、やるか。

俺達が演奏している間、匠先輩は目を閉じたままじっとしていた。
演奏が終わっても、彼は目を開けようとせず、
くるりと俺達に背を向けて言った。

「おつかれさん……お前ら……よく……頑張ったなっ！」

それから匠先輩は天井を見上げ、鼻を一回すすり、
「解散」とだけ短く、小さく言い残して、階段を上がって行ってしまった。

第3話－20　音楽祭と妹　トラフィック・アクシデント

当日の朝、俺は携帯の着信音で目が覚めた。
寝ぼけて視界がかすんでいるが、
俺の部屋のカーテンの隙間から降り注ぐ光り輝く太陽光線はしっかり確認できた。
まだ視界はぼかしをかけたように不鮮明で、細かい部分はよく見えない。
俺はぼんやりと見える携帯を手に取った。
なんかめんどくさいから発信者の確認はパス。
手探りで通話ボタンを探しだし、押す。

ピッ……

「……もしもし」

《……私》

「んあ？悪い、もう一回言ってくれ」

《……私》

「お前か」

《……そう。私》

電話してきたのは今回も零雨だった。

「どうした？昼飯の待ち合わせにはまだ時間があるだろ？」

時計はまだ午前十時を指している。

《……違う》

昨日、練習が終わった俺達は、本番当日である明日の予定を組んだ。
まず正午に高校近くのファーストフード店に集合、
後に学校へ行き、そこで地下室の楽器類を運んできた匠先輩と合流、
リハをやって本番、そういう手はずになっている。
しかし、零雨が伝えたいことはそれではないようだ。

「そんじゃ何の用で俺に電話を？」

《……連絡。ジョーが……出席できなくなった》

「ジョーが……どうかしたのか？
ドラムの叩き過ぎで手首でもイカレたのか？」

《……分からない。
……昼は予定通りに……『一応』集合》

「……おう、分かった」

＊＊＊

「ジョーのお父さん、今朝ランニングしてて、飲酒運転の若い男女二人組の乗った軽自動車との事故に遭ったんだって。
今意識がなくて、生死をさまよってるって」

麗香は低い声で言った。

高校近くのファーストフード店のテーブル席に、俺、零雨、麗香、チカの四人が座っている。
本番当日ということで、美羽は匠先輩に預けている。
昨日、匠先輩が進んで預かると言い出してきたので、ご好意に甘えているというわけだ。
まあそれはおいといて、ジョーの話。

「あぁ、そうなの……麗香はいつ彼から連絡を受けたの？」

「朝十時前に、ジョー本人から、病院の公衆電話からだって」

「それは気の毒な話だな……」

ジョーの親父さんがどういう職業についているかどうかは知らんが、一家の大黒柱なのだから、経済的にも精神的にもその打撃は大きいはずだ。

「電話してる時のジョーの様子ってどうだった？」

チカは紙コップ入りのジュースを口を湿らせるように一口飲んで聞く。

「淡々と用件を言ったら、すぐ向こうから切っちゃったから」

「こんな時にこういう話をするのはあれかもしれないけれど、家族のお葬式をあげた人の話だとね、式の間はバタバタしてて実感がわかないんだけど、一通り終わると思い付いたように悲しくなってくるんだって。そんな感じかもしれないわね。あたしは四、五歳の時以来、お葬式に行ったことがないから、どんな感覚なのかよく分からない、というか覚えてないんだけど」

「そういう話を今ここで、しかもこんな状況で言うか、普通。最初に断っておくっつーのを免罪符と勘違いしてねえか？……で、その親父さんの容態はどうなんだ、麗香？」

「一応緊急手術は終わって、後は運。今日の昼が峠だって」

俺は思わず大きなため息をついた。

いくら他人の事故とは言えども、これぱかりは他人顔など出来るはずなどなかった。

俺はジョーの親父の顔なんて見たことねえし、インターホン越しに話したとか、

そういうことも一切ない、ただの赤の他人の事故だ。

それでも、心配せざるを得ない。

「助かる確率はどれぐらいなんだ？」

「コウくんごめんね、そこまでは聞いてなくて……」

「なんで麗香が謝るの？
電話越しに根掘り葉掘り聞くのはジョーにとって辛いことだろうし、
そっとしておいた麗香の判断は正しいって」

俺が心配していることには変わりはないのだが、
助かる見込みを聞いた時の俺の心情に、
《話に対する好奇心》が少なからず含まれていた。
以前、『人の不幸は蜜の味』と言ったことがあったが、
それも程度のわきまえた状態での話。
好奇心を抱いた俺は人間失格だね。本気で。

「それで、音楽祭の方はどうする？
――そういえば、メンバー登録の際、補欠一人が必要だったよな？」

「コウ、なに馬鹿なこと言ってるの！？頭起きてる？
あたし達のバンドは正規メンバー四人と、補欠一人の五人でできてるのよ？
補欠が正規メンバー化してるあたし達のバンドに、補欠なんて……」

「ああ、そうだったな。悪かった。
ううむ……そうだ、お前（匠先輩）の兄は代わりに出場できねえのか？」

「匠？ムリムリ。
あたし達の出番の時間帯とバイトの時間が一部被ってて……」

俺はハンバーガーにかぶりついた。

「って、コウ！
何？あんたこういう話をしながらへーきでハンバーガー食べれるの？」

チカは俺に目くじらを立て、麗香も「それは……良くないと思う」と肩を持った。

「こういう時こそ食わねえでどうすんだよ？」

「……コウ、何言ってるの？
質問の意味が分からないんだけど」

「ここで俺達の出番直前までここでただ喋りまくってるつもりか？
麗香はどうしても自作曲を発表したかったんだろ？
ならばなぜ食わない？行動を起こそうとしない？」

こんな状況下では空気的にはそれはタブーなのだが、いつまでも昼食タイムをとっている訳にはいかない。
ここで議論だけしてても先には進まねえ。

「メンバー一人足りないのに、
どう考えたって演奏なんて出来ないのは分かるでしょ？」

「お前（チカ）は今までの六十……いや、二十日間の練習の成果を簡単に捨てんのかよ！」

なんでこんなに熱くなっちまってんだろ、俺。

「確かにジョーは残念かもしんねえ、でもよ、チカ。
特にお前は俺達が帰ってからのジョーの超絶特訓を知ってるんだろ？
あいつのゴリラのドラミングみたいなヘチョイ音だったのを、
匠先輩の指導の雨を耐えて、あそこまで上達したあいつの努力を、
簡単に捨てちまうのかよ！
俺達だけでもしっかりやって、終わらせるのがベストだと俺は思うね」

チカは俺にいきりたって反論した。

「『不完全』なまま完結させていいの？
確かにあたしはジョーの特訓を知ってる。
しんどさも練習の空気から伝わってきた。
……だからよ。
だから私はジョーがいないまま、
ドラムがない、『不完全』なまま出場して、終わるのが嫌なの！
あたし達の音楽はみんなで一つの作品でしょ？
片翼を失った鳥は、どれだけ羽ばたいても空を飛べないのよ！」

そこまで言って、チカは黙った。
賑やかだったはずの店内はシーンとしている。
同じくシーンとしたまま注文したものには手を付けず、
ずっと座ってやや下にうつむき、
テーブルの角をただひたすら眺めている零雨は、まばたきを一回。

「……えっと、コウくんとチカちゃん、
議論するのはいいんだけど、もう少し静かに、ね？」

麗香が俺とチカの中に入った。
他の客の目線が痛い。

「すまないな、迷惑かけて」

麗香に詫びて話を続けた。

「出るにせよ、出ないにせよ、とっととここから出て、
何か行動しなきゃ始まらんだろうが」

「あ、えっと、私も、一つ意見があるんだけど、いいかな？」

麗香が小さく手を挙げて言った。

「コウくんの話も、チカちゃんの話も、自分視点からの話だけど、
見方をちょっと変えて、ジョーくんだったらどう思うか考えてみ
ようよ」

麗香は手で前髪を後ろにかきあげる。

「もしチカちゃんの案を採用して、出場しなかったら、ジョーくん
はどう思うかな？
私は、『俺のせいでみんなの出場を辞めさせてしまった』って思
うと考えてるの。
ジョーくんがテストで六点を取ってこっちが負けた時の行動、覚
えてるかな？

コウくんが、『これじゃCD諦めるしかないかな』って言った時の行動。
彼、下唇を噛んで震えてたでしょう？
きっと『自分のせいで負けてしまった、みんなの足を引っ張っちゃった』って、
そう思って辛い気持ちを抑えてたんだと思う。
もし私の推測が当たってれば、彼は同じようなことを思うんじゃない？
『俺のせいで――』って」

「なるほどねー、確かに麗香の話も一理あるかもしれないわね。
とにかくコウの言う通り、早いとこお昼を済ませた方がいいかも」

「で、出たらまずどこ行く？」

俺が問うと麗香が答えた。

「まずは学校行って、担当の玉城先生に事情を話した方がいいと思う」

玉城先生、あの面倒見のいい先生なら、何か知恵を貸してくれるかもしれない。
おばあちゃんの知恵袋ってやつだな。

「なにはともあれ、学校に行かないと何も始まらないしね」

チカと俺の賛成票により、とりあえず学校に行くことが可決した。

第3話－21　音楽祭と妹　学校の怪談

「それはもう自分達で何とかするしかないわね、残念だけど」
校舎の会議室で俺達の話を聞いた玉城先生は、困った顔をして答えた。

「元々補欠って、誰かが出られなくなった時に出るものじゃない？
補欠も通常メンバーに入れちゃったら、そうなるに決まってるわ」
玉城先生は、俺達を補欠を通常メンバー化させたことで一通り静かに怒った後、
選択肢が三つあると言った。

「一つは、出場を諦めること。
一つは、牧田くん抜きで全部やり通すこと。
そしてもう一つは、同じ出場メンバーにお願いして、
牧田くんのパートをやってもらうこと。
誰かにお願いするなら、腕のいい子を見極めないと、
あなたたち、順番が最後とはいえ練習時間が短いのには変わりはないから、
本番でちゃんとできないかもしれないからね」

「すみません、先生。……迷惑かけて」

俺は一礼した。
俺が、何とかせねばならない。そう感じている。
なぜと聞かれても俺は知らん。

……そうだな、音楽祭に出たいと言い出したのが麗香だったからかもしれん。
美羽までとは言わなくとも、手のかかるやつで、俺がいないと何も出来ない。
俺が何とかせねば。
……まずいな、チカの変態母性本能がうつったかも。
早いところどっかでこの症状を治してもらわねえと、髪型がワカメになっちまう。

……少なくともチカがそう言いだしてこうなったなら、
俺もメンバー構成がおかしいことに気づかなかったことを棚に上げて、悪態の百や二百ぐらいかましているだろう。
俺は零雨と麗香の友達である以前に、二人の協力者なのだ。
この世界に住まわせてもらってる家賃ぐらいは払ったっていいだろ。
それに極道の一件でも、散々な目に遭ったが、借りがないわけでもねえし。
めんどくせえけど助けてやろうじゃねえか。
――俺一人で頑張るにも限界はあるけどな。

「コウ、あんた口では『めんどくさい』だの『やる気ない』だの言ってるくせに、やっぱやる気あるんじゃん」

「う、うっせぇ、チカ。
俺はただ目立つこともなく平穏にこの一日を乗り切りてえだけだ。
他人の前で赤っ恥をかかされるのなんざまっぴらゴメンなんだよ！」

そうだ。
そもそも行動しようってのは、俺が恥をかきたくねえっつう理由が大部分で、

家賃だの借りだの、そんなの食玩についてるオマケ程度の比率なんだよ。
……オマケ程度のな。

「どうするかはあなたたちの自由だから、よく考えるのよ。
はい、じゃあ他に用はない？
……そういえば楽器の貸し出し申請、昨日が締切だったんだけど、あなた達は申請出してないわよね。？今ならまだ間に合うけど？」

「大丈夫です、私達の方で準備してますから」

麗香はフフッっと、優しく笑った。

「そう。分かったわ」

失礼しました、そういって俺達は会議室を出た。
グラウンドに出ると、盆直前のハイパワー太陽が地面を溶かすような勢いで照射し、
蝉の狂ったような鳴き声が聞こえる。
空には雲一つない青空。
入道雲の一つぐらいあってもおかしくないのだが、
俺達の気持ちとは裏腹に爽やかな空が広がっている。

時刻は午後一時。
音楽祭のステージ開演は、熱中症予防のために気温が下がりだす午後三時から始まるらしいが、
すでにグラウンドにはどこぞのＰＴＡ寄贈だの卒業記念だのと書かれた、
白いテントがグラウンドを埋め尽くし、

人工の日陰の中で生徒が汗を垂らしながら商いを始め、あちこちから客引きの声が響いている。
掘り出し物目当てだろうか、昼飯を食った学生ら、つまりは客と一部の出場者が早々と店を回っている。

それにしてもまったく、暑さの最高潮の時間帯だっつうのに、よくやるぜ。
一緒に出店した仲間と、売上（生徒会に出店手数料を取られた残り）で
カラオケに行くのだというバカ元気な意気込みの声が聞こえてきた。
――カラオケ、最近行ってねえな。

「これから、どうする？」

俺の顔を麗香は覗き込む。

「さあな。
そろそろ匠先輩が楽器運んでくる時間だからな、とりあえず校門前で待つべきだろ」

グラウンドにできたテント迷路を解き、校門の前につくと、白い軽トラが一台。
荷台に大きなブルーシートがかかっており、その運転手は俺の担任と何か話しているようだった。
運転手は俺達に顔を向けると大きく片手を上げ、それにつられて担任も俺達の方を見た。

「匠、もう来てたんだ」

チカは近寄って窓から身を乗り出している運転手に話しかけた。

「まあ、楽器を荷台に載せる作業が思いの外早く済んだんでな、ちょっくら早めに着いたってところ」

「……で、この軽トラどうしたの？《わ》ナンバーじゃないけど」

「ああ、ちょっと友人のを借りたんだよ」

「そうなの」

「で、どうするんだ？牧田のパートは」

「匠は代わりに出られないの？」

「バイト先と掛け合ってみたけど、ダメだった。
時間をずらすのも『仕事が忙しいからやめてくれ』だとさ」

「なんだかお前のとこ、出場ピンチらしいな」

担任が割り込んできた。

「もしかしたら出場やむなしキャンセルになるかもしれんのだろ？
見たかったな～、足立がステージで演奏してるところ。
六十年に一度花を咲かせる竹よりも珍しい光景だろうからな」

そういう目で俺を見られんのは嫌だね。
そんなに珍しいなら担任の目を潰して、いっそのこと幻にしてやろうか？
実際には、やんねえけど。
ちなみに竹が六十年に一度花をさかせるっつうのは間違いらしい。

あまりにも珍しすぎて、ある竹が六十ウン年周期で花を咲かせたのを見ただけで、
実際は分からないそうだ。

「ま、とにかく一応楽器は持ってきたし、教室の中にでも入れておこう」

匠が親指で後ろの荷台をさして言うと、担任は軽トラの前に立った。

「おいお前らぁ！トラックが通るから道を開けろ！」

担任は叫びながら匠先輩の乗る軽トラを誘導しはじめる。
海がパックリ二つに割れた例の伝説のように、生徒がテント側に寄って道を譲る。

「まるで王様気分だ」

匠先輩は笑った。

トラックの荷台に載せた楽器は、俺達＋匠先輩の五人で、
現在使われてない、二階の特別教室に保管した。
予想はしていたが、やはり楽器は重かった。
ここまで運んできたのが報われるかどうかは、あとは俺達次第だ。

楽器を運び終え、俺達は埃っぽい特別教室の中で、
自販機で買ったお茶を飲み、一息つく。

「さてと、俺はそろそろバイトの時間が迫ってきてるからちょいと

ここらでドロン」

一気飲みして空になったペットボトルのキャップを締め、
忍者の真似をしておどけた先輩は、
「俺もお前らが出場出来るよう、最善を尽くすからな」と言い残して教室から出て行った。

「どうにかして、ジョーくんの代役を見つけなきゃ」

麗香がシンとした教室の中、ぽつりと呟く。
蝉の鳴き声で埋まっているグラウンドから、
軽トラのエンジンがかかる音が僅かに聞こえてきた。

「……ちょっとあたし、トイレ行ってくるね」

チカはそういって教室を出ていき、教室には俺と零雨と麗香の三人だけが残った。

「もういっそのこと、作っちゃおうかな……」

また麗香が呟いた。

「何を？」

「ジョーくん」

……それは、この世にジョーが二人存在することになる、ということ？

やめてくれ。
もしジョー（複製版）が俺達と共に出場している最中に、
モノマネ番組のようにご本人が登場すれば、
「お前、誰だ!?」のリアル珍シチュエーション、つまりリア珍が
生まれるわけで、
恐らく演奏後姿を消すであろうジョー（複製版）の存在が、
「あの人は一体誰だったのか?」というオーディエンスに解決不能
な問いを与えると共に、
俺達のバンドを伝説（レジェンド）として後世に語り継がせることにもなりかねん。
ましてやこの季節、
怪談なんなんかも旬の話題としてテレビやら雑誌やらで取り沙汰さ
れることも多い。
学校に伝わる《本当にあった怪談》として残ることも考えられる。

【おい、知ってるか?】

《何の話だよ》

【この学校の音楽祭、以前に生き霊が、バンドに出たことがあった
んだってよ】

《はぁ?そんな馬鹿な話があるかよ》

【いや、これマジの話なんだって!
……今から二年前の話、部活の先輩に聞いたんだ。
なんでも、そのバンドは男二人と女三人のバンドだったらしい。
そのバンドは本番までに相当練習したらしいんだけどな、
本番当日の朝、男二人のうち『M』って奴の親父が事故で緊急入
院したそうなんだ】

《ほう》

【瀕死の状態の親父を病室でずっと見守りながら、
頭の片隅では音楽祭のことも気にかけていた『M』は、
知らず知らずのうちに生き霊を作り出してしまったらしいんだ】

《それで？》

【その生き霊は学校のグラウンドでメンバー不足で
出場ができなくなった彼等の前に姿を現し、無事彼らは発表することができた】

《……》

【しかし、彼等の本番中、本物の『M』がステージに現れたことで騒動になった。
ステージにいるうちのどちらが本物で、どちらが偽者なのかと……】

《……で？》

【結局、生き霊側の『M』は発表後、どこかへ消えてしまい、
残った本人も、結局、あれが何だったのか分からなかった、そういう話だ】

《よく有りがちな怪談だな》

【最初は俺もそう思ってたんだよ】

《思ってたって、どういうことだ？》

【この話は今から「二年前」の話っつったよな？】

《まさか……》

【そう、その「まさか」だ。
百人以上の観客が、服装から何まで瓜二つの二人がステージにいるのを目撃したんだよ。
そして、その目撃者はまだこの学校にわんさか残ってる。
俺がこの話を聞いた先輩も、目撃者の一人だったんだ】

《うわぁ、マジぱねえ……》

と、まあこのような感じで姿形を変え、脚色されながら伝わって行く。
言わなくても分かると思うが、
俺が学校の怪談にでてくるなんざ、有り得ねえ話。
全力で阻止しなければならない。

「麗香、それはマジでやめろ。
つじつまが合わなくなったら大惨事だ」

「あ、ごめんね、ちょっと思っただけだから気にしないで」

「それならいいが……」

「まずは、他でリハーサルやってるところにひとつひとつ回って、お願いしてみようかな」

「そうだな、それがいいだろう」

俺の頭の中には、病院にいるジョーに会いに行くという選択肢も浮かんだのだが、
それは危篤の親父を残してドラムを叩けと言いに行くことを意味する。
タマの小さい俺には、そんな金属質な発言などできるはずもなく、
彼の気持ちを少し考えたなら、それがどれほど残酷なのかは容易に推測できる。

「ふう～、なんかトイレがきれいに掃除されてたわよ」

帰ってきたチカは少し嬉しそうだった。
俺達の学校、トン高（愛称）では、普段トイレ掃除も生徒がやるのだが、
文化祭や体育祭、入学式や卒業式といったイベントが近くなると、
業者に委託してみっちり掃除してもらう。
どうやら音楽祭の直前にも業者に頼んだらしい。

「へぇ～、どうだった？」

「一番大きいのは独特の《アノ》臭いがなくなったことね。
芳香も適宜に効いてるし、今回の業者は腕が良かったみたい。
清掃業者、変えたのかな」

「あれ？トイレって生徒が掃除するんじゃなかったかな？」

「あ、麗香は転校生だから知らないんだったね。

普段は麗香の言う通りなんだけど、
この学校、こういう大きなイベントがあるときは、
業者に頼んでトイレ掃除してもらってるの」

「そうなんだ」

「麗香も、ちょっと覗いてみて……っていうのもなんか変なんだけど、
今日行く機会があったら、確認してみて。キレイになってるから」

「うん、分かった」

お手洗いトークもここで終了。俺達は音楽祭出場メンバーを探すため、教室を後にした。

第3話－22　音楽祭と妹　零雨が欲しがるもの

「申し訳ないけど、うちにはそんな余裕はないよ」

もう何回目だろう。同じことを聞いて回るのは。
片っ端からお願いをした俺達だが、どのバンドからも良い返答は来なかった。
俺達は……、少なくとも俺はこの本番に向けて本気で練習してきた。
恥をかかぬよう、目立たぬよう、ただの自己陶酔ででしゃばってきたと思われぬようにな。
だが、他のバンドの奴はそこまで真剣に音楽祭を考えてなどないらしい。
友人と出かけたカラオケで一曲披露、そんなノリだった。
まったく、どんな訓練を受ければそんな軽いノリで公衆の面前に立てるのやら。
だから向こうからすれば、
演奏のクオリティーなんてどうでも良い、空気的に楽しければそれでよくね？
の気分で臨んでるのに、いきなりシリアスにやってくれと言われても、遠慮せざるをえなかったようだ。

もちろん、全部が全部、そういうバンドだったわけじゃねえ。
俺達の話を真剣に聞いて、「もし私で良ければ……」と言ってくれた女子もいた。
しかし、俺達が演奏する予定の楽譜を見て、表情を変えて言うのだった。

「すみません、わ、私にはこんな難度の曲を演奏する力量はなくて

……ごめんなさい」

俺達のやる曲がそんなに難しいのか？
そんな素朴な疑問が浮かんだが、考えてる余裕はなかった。
とにかく、ジョーの代わりを探さなくてはならない。

そうこうしているうちに、音楽祭のステージのライブが始まり、気がつけば、もう四時だった。

「コウくん、どうしよう……
私達の順番が回って来ちゃうよ……」

「ジョー本人とは連絡はつかないのか？」

麗香が電話でジョーに電話するが、すぐに電話を切った。

「ダメ……出てこない」

「ジョーの親父さんが突然事故に遭っちまったから、
病院に行くとき慌てて携帯電話を家に置いて来ちまったのかもしれん。
朝のジョーからの電話は公衆電話だったんだろ？」

麗香はコクりと頷く。
チカはもう我慢出来ないという顔をして言った。

「あたしは、演奏が終わってるバンドのところにもう一度お願いしてみる。
もしかしたら気が変わってくれてるかもしれないし。
みんなには悪いけど、その間に二階の楽器をグラウンドに持って

きて。
あたし、絶対に代役を引っ張ってくるから、
みんなは気晴らしに露店でも行って遊んできたらいいから！」
チカは出場者用に用意されている控室に走って行く。
「あっチカちゃん待って！私も行く！」
おい、バカ！
麗香、お前まで行ったら楽器運ぶのが大変になるだろうが！
心でそう思っていたが、口にはなぜか出てこなかった。
「コウくんも零雨ちゃんも、ちょっと気分転換してなよーー！」
そう俺達に言って麗香がチカを追い掛けて行く後ろ姿が見える。
俺の隣には、零雨ただ一人。
「……はぁ、仕方ねえな。楽器運ぶか」
階段を上って二階の特別教室へ。
西日に傾き始めた日が窓から差し込み、舞い上がった埃が幻想的な
空間を演出している。
こんな情景に見とれてる暇は俺にはない。
俺達は楽器を運び出した。
零雨が力を解放して、腕に油圧級のパワーを宿し、
早々と楽器を運んでくれたお陰で、すぐに作業は終わった。
「お前がいてくれたお陰で、作業が早く済んだ。サンキュー」

零雨は表情を変えない。

「そうだ、時間が浮いたことだし、休憩がてらちょっと店、まわってみよう」

俺は零雨の手をひいた。

少し、現実逃避がしたくなった。

控室に頼み込みに行っているチカと麗香の所には、行きたくなかった。

それで俺は、二人の言葉に甘えることにした。

ＣＤを売ってるとある店の前で、俺は立ち止まった。

フリーマーケットの要領で陳列がされてあるその店のＣＤの中に、少し珍しいものが入っていたからだ。

《もう聞くのが嫌になる～謎曲集　Ｖｏｌ．１～》

という名の、古ぼけたＣＤだ。

ジャケットやら使用されている字体の雰囲気からして、恐らく八十年代後半から九十年代前半のバブル全盛期に世に出回った、

ニッチなスキマ産業発の珍商品と推測できる。

これ、《Ｖｏｌ．１》っつうことは、Ｖｏｌ．２や３も発売を予定していたということだよな？

……ハハハ、さっすがバブル。

こんな無駄な商品、気になっちまうじゃねえか。

というわけで、俺は何気に買ってしまった。百円で。

歩きながら辺りを見渡してみれば、音楽祭とあるだけにお祭り騒ぎ

の様相だ。
綿アメやらアイスやら、射的やら、焼きそばやら……つうかもうこれ、
《音楽祭》じゃなくて《文化祭》だろ。
出店数は去年より今年の方が圧倒的に、具体的にはニ、三倍の数まで増えている。

隣のクラスの友人の話によれば、
去年までは《音楽祭だから出店するのは音楽関係の店だけ》という規定があり、
そぐわないものは切り捨て御免、顔を洗って出直して来い、ということだったのだが、
生徒会によって基本方針が自由化の方向へ変更された、ということらしい。
確かに、去年は音楽関係の店、店、店、店、店店店店店店店店店……で、
「バカの一つ覚え」とはこの光景のことを指すために
太古の昔から用意されていたに違いないと思ったほどだった。
俺としてはそれなりに楽しかったけどな。
自由化の影響だろう、
去年は客といえば同じトン高生かそのＯＢ、ＯＧ、学校見学にきた受験生ぐらいだった。
今年はというと、近所の小学生やら他校の生徒やら一般客の比率がぐっと増え、
人数も去年とは比べものにならない。
校門からぞろぞろと新たな客が入り込んでくるが、出て行く客の数は少ない。
つまり音楽祭ステージの観客数は
現在ジャンジャンバリバリ状態、つまり熱狂的増加中だ。

……何だよ？高校生がパチンコ用語を持ち出したって良いじゃねえか。

露店を歩き回っていると、射的の店が俺の目に留まった。

「零雨、あれ、やってみるか？」

零雨は俺が指差す方向に顔を向けるが、すぐに俺の目を見て「？」と首を傾げる。

「あれだ、『射的』って書いてある店」

「……それは義務？」

零雨の言葉に俺はドキリとした。
チカと麗香が頑張っているのに、射的は今やらなくてはいけないこと？
と遠回しに咎められているような気がしたからだ。

「いや、義務じゃないが……
……お前も、何も言わないだけで本当は気分転換したいんじゃねえのか？」

零雨に感情がないのは分かっている。
気分転換したいのは俺の方だ。

「……？」

「……すまない、今の話は忘れてくれ」

確かに二人は気分転換してきたら?とは言ったものの、やはり後ろ髪が引かれる。
ここは戻って……

零雨が俺の袖口をグイグイ、と二回強く引っ張った。

「どうした?零雨」

「あれは……何?」

零雨が指差したのは、小学生が持って遊んでいたスーパーボール。
しかしなぜ今こんな時にこんなものに興味を示した?

「あれはスーパーボール。よく跳ねるおもちゃだ」

「……スーパーボール……の主成分は?」

「さあ?知らんな」

俺はスーパーボールすくいをしている露店を見つけ、零雨をそこに連れて来た。

「おう、コウじゃん!」

「お、坂本じゃねえか、お前、ここの店番か?」

こいつは、名前は今回が初めて出たが、
人物としては今までに一刹那だけ登場している。
屋上で空を見上げる零雨と麗香を目撃した俺の隣のクラスの友人だ。

「んまあ、そんなとこ。
これで小遣い入ったら、プールに行こうと思ってるのさ。
えっと、お前の隣にいるのは……」

「零雨だ」

だよな、と小さく呟いた坂本は視線を下に逸らした。

「ん？どうした？」

「お前と、その、嵩文との関係は一体……？」

「友達だが？」

「本当に、ただの友達なのか？」

「何を言っとるんだね君は？
俺達が付き合ってるとでも思ってるのか？」

まあ、祭りの露店の中を歩く男女がいれば、
カップルと間違われることもあるだろうが、こいつの聞き方はおかしかった。

「なら別に……」

坂本はこれ以上このことの話題を避けたそうにしている。
零雨は青いプラスチックの水槽に手を入れ、水に浮かぶスーパーボールを手に取った。

「スーパーボールすくい、一回百円だぜ」

声の調子を元に戻した坂本は、口の端をつりあげて言った。
零雨は水滴のついた綺麗な赤色のスーパーボールをジロジロ眺めている。

「零雨、欲しいのか？」

俺が聞くと僅かに頷いた。
感情を持たないはずの零雨が、
なぜこんなおもちゃを欲しがったのか、俺には全く理解出来なかった。
麗香は以前、零雨が俺の家のエアコンの室外機を分解しだした時、
こんなことを言った。

“零雨ちゃんは無意味なことはしないわ。きっと何か考えがあるのよ”

そうだとすれば、零雨はこのスーパーボールをどうしたいのか。
零雨が収集している、
《ステージ２５の失われたデータ》の中に、スーパーボールの主成分があったのか？
ネタみたいな仮説だが、想像力の乏しい俺には、それぐらいしか思い付かない。
俺は坂本に向き直って言った。

「一回分負けてくんねえかな？親友ということで」

「コウ、悪いな。それは無理だよ」

「チッ、融通効かねえ奴だな」

「『代金の特別サービスはするな』って、リーダーに言われてるんだよ。
公平性を保つためウンチャラで」

頭のお堅いリーダーだな。

「でも、別の方法でサービスすることはできる」

坂本は掬い上げる道具、俺はダテ虫眼鏡と呼んでいるものだが、それに薄い紙を二枚セットして俺に渡す。
俺は百円を払う。

「本当は一枚しかセットしちゃいけないんだが……
いいか、サービスだから、誰にも言うなよ」

「サンキュー」

俺は遊び方を零雨に説明し、それを持たせた。

第3話－23　音楽祭と妹　救世主はスーパーボール！？

零雨は精密機械のような動きでスーパーボールを慎重に掬い上げる。

一つ。二つ。三つ。

……破れた。

ダテ虫眼鏡に穴が空いた。

「……おしまいだな」

俺がそういうと、
零雨は坂本にダテ虫眼鏡を返す。
その時、零雨の白い手が坂本の手と触れた。
何でもない、自然の成り行きの一場面だった。
しかし坂本は零雨に目を合わせると、すぐに視線を逸らす。
零雨はちょこんと首を傾げて坂本をじっと見つめる。

「……おーい、坂本。
意識が逝ってるぞー、こっちに戻って来い」

俺が話し掛けても反応しない。

「オイ、聞こえてるか？……オイ坂本！」

「ふぇ？あ、わりい、意識がお花畑に飛んでいってた」

「……お前っていっつもそんなんだよな。
ボーッとして、何、お前は悟りでも開くつもりか？」
坂本はハハハ、と苦笑した。
「サービスありがとな」
俺が礼を述べると同時に零雨が俺をつつく。
「……スーパーボール……もっと欲しい」
「そんなに気に入ったのか？」
「……大量に欲しい」
謎めく発言に俺は困惑するほか術がない。
「大量って、具体的にどんだけだよ」
「……千から二千」
「あー……そんなに手に入れて、何するつもりだ？」
「……使う」
「いや、使うのは分かる。
俺が聞きたいのは『何の用途に使うか』ってことだ」
俺と会話していても無駄だと考えたのか、零雨は坂本に顔を向けた。

「……坂本、さん」

「あ、何か？」

零雨が敬語で話し掛けるのに驚いて、坂本まで敬語。

「……これ……大量に欲しい……です」

「すみません、商売柄、一人に大量に渡すことはできないんです。……えっと、スーパーボールを仕入れた所なら紹介できますけど。僕が仕入れてきたので」

「坂本、そこはここから近いのか？」

俺が聞くと急に砕けた言い方で坂本は答える。

「ここから北東へ歩いて十分ほどの所にある小さな工場だ。ほとんど知られてないけれど、あそこは夏になると工場で作ったスーパーボールの直販してる。行ってみればすぐわかる。ゴムみたいな臭いがするから。夕方五時までやってたと思うから、今日買うなら早めに行った方がいい」

零雨はそれを聞くと何も言わずおもむろに立ち去って行く。

足の向かう先は……校門。

「嵩文さんのああいうミステリーなところ、俺は好きだな……うん、惚れた」

坂本は零雨と触れ合った手を見つめる。

「坂本……悪いことは言わねえ、あいつとはあまり関わらない方がいいぞ。
散々な目に遭う、つうか、お前一人で対応できるような奴じゃない」

俺が坂本と会話している間も、零雨は俺から離れていく。

「なんだコウ、俺と嵩文さんがくっつくのが嫌なのか？
……やっぱ他の男に取られたくない感じ？」

「……ちげーよ。とにかくあいつ(零雨)は特殊すぎる。
お前の今後の人生のためにも、そいつとくっつこうとするのはオススメしない。
付き合うなら死ぬ覚悟で臨まなきゃならん相手だ、ということを俺は忠告しておく」

「確かに髪とか容姿は特殊だけど、他に何かあんのか？
まあ、神子上さんのいつも笑ってるあの顔もいいかなって正直思ってたりするクチで……」

「この色男、処置無しだな。この末期症状が。
……いいか、チカ、零雨、麗香の三人は爆弾、
特に零雨と麗香はツァーリ・ボンバ級の核爆弾と思って良い。
予言しておこう。
もしお前が運よく麗香と付き合うようになったとしても、それは長くは続かん。
的中率は自信満々、堂々の百パーセントだ」

「ツァーリ……ボンバ？」

「冷戦時代に旧ソ連が作り上げた史上最大の核爆弾のことだ。
実際に爆破実験を行い、威力は広島の原爆の三千倍以上、
その衝撃波は地球３周したらしい」

「何でお前、そういうのに詳しい？」

「昨日テレビでやってからに決まってんだろ。
もともと興味ねえ分野の話だし、テレビで垂れ流されてきたのを
偶然傍受したんだよ」

「……で、嵩文さんと神子上さんのどこにそんな危険因子が？
俺には全く想像がつかない……嵩文さんは分からなくはないけれど」

はっきり言って、あの二人は全身が危険因子で出来ている。
何をするにしても危険だ。
現に、麗香と初めて会った日に裏で
合格確率２４％（零雨の計算による）の適性検査を俺にしていたとか、
正直笑い話にもならなかったし。
いや、だって不適合と判断されたらコッソリ殺されるとか鬼畜以外
の何者でもない。
今はあの時とは大分様子が変わってきたが、危なくないわけではない。

「死にたくなけりゃ、近づかないほうがいい。
自己陶酔気味の中学生のような発言に聞こえるかもしれんが、
お前がどうなっても俺は助けには行けねえから」

俺はそこまで言って辺りを見回すが、零雨は既に校門を出て行ってしまったようだ。
姿が見つからねえ。

「悪い、ちょっと俺、もう行くわ」

俺も校門に向かった走り出す。
後ろから俺を引き止めようとする坂本の声が聞こえてくるが、これ以上付き合ってるヒマはない。

教えられた通り、北東の方角へ突き進んで行くと、前に零雨が歩いているのが見えた。

「零雨！無言で行こうとすんなよ……」

暑い中走ったせいで、背中は汗でぐちゃぐちゃに濡れているのが分かる。
零雨は俺をじっと見つめる。
いや、見つめられても困るんすよ。

「……だいたい、そんな大量のスーパーボール、何に使うんだよ？」

すると、零雨は途切れ途切れに自分の考えていることを喋った。
多分正しく理解できているとは思うが、相手が相手だけに表現ミス

がないとは限らない。
それでも、俺は俺なりに零雨の考えを読み取ったつもりである。

「それはいくらなんでもアレじゃないか？」

零雨は首を横に振った。

「……ホームセンター……にも行く」

「出場時間に間に合わないなんてオチは、マッピラゴメンだぜ？」

「……オチ？」

「ん……なんでもない」

「……コウ、私の考え……は正しい？」

「……わかんねえ。だが、賭けてみる価値はあるかもしれん。お前のその『考え』に」

零雨が考えていたのは、恐らく音楽祭始まって以来の不足メンバー補填法に違いないだろう。
成功するかどうかは分からないが、パフォーマンスにもなるだろう。
俺としては目立ってしまうのがやはりどうしても気に食わないのだが、
メンバーが足りない手前、何をしても目立つことを思えば、

もうどうでも良くなってきたってのが本音だ。
俺と零雨は工場に向かった。

＊＊＊

「に、二千個もいるんですか！？」
俺からの買い注文を聞いた五十代後半ぐらいの工場長が目を丸くして聞いてくる。
俺と零雨は工場の事務所の中にいる。
「はい、今すぐ必要なんです」
「今すぐって言われても、そんなに急には用意は……」
「そこをなんとかお願いしたいんです」
完全敬語状態の俺は口下手な零雨に代わってこのような感じで交渉中。
俺の心臓は現在激しいビートを打っているのが分かる。
あまり他人とは喋らない俺が、
急に見ず知らずのオッサンに無理な頼み事をするわけだから、そうならない方がおかしいだろう。
「あなた達、買うお金は、あるんですか？」

「あ……えっと、三千円じゃ、足りないですよね」

俺は財布を覗いて言う。

現実問題、買う金ねーのに売ってくださいって言ってるわけで、

「厚顔無恥もいいところ、どんだけ顔面分厚けりゃそんな発言が出来んだタコ！」

といわれるような要求なのは百も千も承知だ。

「そうですね。

うちはねえ、どこでもそうなんですが、

中小企業はみな自転車操業やってるようなもんなんで……

急な買い注文はうれしいんですが、こっちも原材料にお金が……」

「どうにかなりませんか？」

「そもそもあなた達はうちのスーパーボールで何をしようとしてるのか、

出来れば教えてくれません？」

俺が事情を説明すると、工場長のオッサンは苦笑した。

「それはいくらなんでも無茶苦茶な挑戦じゃありません？」

「これしか方法が思い付かないんです。

それに、俺の隣にいる彼女が、そういうのが得意なんですよ」

「そういうのって……得意不得意というよりも、出来る出来ないでは？」

「とにかく、お願い出来ませんか？
お金はまた後で現金で払いに来ます。
俺の高校の生徒手帳、ここに置いていきますから」

ここで俺の生徒手帳を工場長に渡せば、
俺は住所から電話番号までの一括を預けたことになる。
こうすれば、商品を買うだけ買って料金を踏み倒されるという、
向こう側の心配を打ち消すことが出来るかもしれん。

「う～ん……そこまでいうなら、やってみましょう。
ただし、後で代金はしっかり払ってもらいますからね？」

「ありがとうございます！」

俺は深々と一礼し、隣の頭をがっしり掴んで零雨にも強制一礼。

「足立……さん？」

俺の生徒手帳を見て工場長は言った。

「はい」

「足立さん、はい、覚えました」

それから工場長は零雨をまじまじと見つめて一言。

「それにしても、最近の若者の美的センスはおじさんにはよく解りませんな」

「あの、彼女の髪は、先天的なものだそうで……」

これは零雨が転入してきたとき、担任が説明した。
本当はこの世界に下りるときにカラー指定をしなかったからだが、
一応「そういうこと」になっている。

「ああ、すみません、もうこれ以上のことは聞きませんから」

察したように工場長が俺の言葉を遮った。

「えっと、これから俺達、
ホームセンターにも行かなくちゃいけないんで……またここに戻
ってきます」

「分かりました。何とかして用意しましょう」

俺は工場長と握手した。
順番が回ってこねえうちに、ホームセンターにも行かねえと。

第3話－24　音楽祭と妹　スーパーボールの使用法

必要なものを買い揃え、
俺の財布が寂しくなっちまったと嘆いていると、実は零雨が大金を持っていたというとんでもない事実が発覚した、
ホームセンターからの帰り道、俺達はさっきの工場に寄った。

「足立さん、つい今しがたスーパーボールを臨時で生産しました」

工場長はこれが今さっき生産したものです、と俺達の目の前の、大きな二つの段ボールを指差した。

「ありがとうございます」

「では、代金は……」

「いくらですか？」

「ええと、合計で三万円になります」

さ、三万円……高けえなぁ、おい。
それを聞いた零雨が、工場長にきっちり耳を揃えて三万円、無言で渡した。

「あ、持ってた……ですか」

「すみません、よくよく探したら、お金あったんで」

工場長は零雨を見た。
背中に背負った木の棒やら板が零雨を覆い尽くさんとばかりに迫っているのを、
彼女は背中ですべて受け止めている。
零雨が、小学校によく置いてある、
背中に荷物を背負って書物を読んでる、あの「二宮金次郎」もビックリの状態である。

「……足立さん、何か持ってあげたらどうですか」

「彼女に、『私はこれを持つから、あなたはスーパーボールを運んでほしい』と言われて。
俺は逆の方がいいだろって言ったんですが、言うことをきかなかったんです」

これは事実で、俺が持とうとすると零雨が強く拒絶し、
仕方なく手ぶらでここまできたってわけだ。
もちろん、ここにくるまでの周りからの
「どうしてあいつは隣の少女に荷物を持たせておきながら、平然と歩けるのか」
という痛い視線の矢面に立たされたことは言うまでもない。

「えっと、では三万円、確かに頂きました」

それから工場長は重い荷物を背負っている零雨に視線をなげながら聞いてきた。

「これから良条高校に向かわれるんですよね？」

俺が頷くと、工場長は俺達を工場脇の駐車場に誘導した。

「ここから歩いて十分程のところとは言えど、その荷物じゃ大変でしょう。
うちの社用車で送っていきますよ」

「そんなことして大丈夫なんですか？」

社用車はあくまで会社で使うクルマであり、このように私的に利用していいはずがない。

「いいんですよ、この工場は私の工場なので、誰も文句を言えませんから」

工場長は停めてある白の社名入りワンボックスカーのトランクを開けると、
零雨の荷物を下ろし、放り込んだ。
彼女は嫌がったが、工場長はそれを遠慮ととったらしく、それは少々強引だったが、まあ気にしない。
時間もあまりなかったこともあり、俺達は工場長の好意に甘えることにした。

ワンボックスカーは三分ほどで校門前に到着した。
後部座席に座っていた俺と零雨は、後ろのスライドドアから降りる。
校門の前に立っていた男性が、それに気がついて近寄ってきた。

「なんだ、誰かと思えばまたお前らか」

その男＝俺の担任は、どうやら校門前で
不審者侵入防止の見張りを任されたらしく、
昼からここにいるのはそのせいだと言った。
まあ確かにそんなバカ元気で下品な大声の持ち主、
不審者もあまりのエネルギッシュな下品さに近寄らないのは当然の
……ゲフンゲフン。
いや、何でもない。

「おい、足立、今（担任）俺のこと見て変なことを思ったんじゃな
いだろうな？」

「いいえ、何も思ってないっす」

リアル敬語と砕けた敬語、やっぱ俺は砕けた敬語の方が性に合うな。

「そうか……ならいいが」

荷物を運び出し、工場長にお礼を言うと、
工場長は、また何かあれば宜しくお願いしますよ、と軽快に去って
行った。

「足立、今日は先輩が楽器運んできたり、
今の何か中小企業かなんかの社用車で登場したりと、お前ら大忙
しだな」

「そもそもジョーが……牧田の親父さんが事故に遭ってしまったから
こういうことになってるだけで、こんなの二度とゴメンっすよ」

「いやあ、足立がどんどん社交的になっていくようで、俺としては卒業時はどんな風に『出来上がってる』のか楽しみにしてたんだがな……
やっぱ変わってないか」

「人間、そう簡単には変わらないもんすよ」

「学生の分際で分かったような口を……まあ確かに的を射てはいるが。
俺もこの間同窓会があって行ったんだが、性格はやっぱりみんな変わってなかったなあ。
変わったといえば、学生時代、あんなに髪フサフサだった奴が、寂しい毛髪事情を抱えてるぐらいだったしな、ガハハハハ……」

また始まった、この下品な笑い。
耳に悪いからもうちょっと上品な声で笑ってくれたまえ。

荷物を持って、俺達が楽器を運んだところに行くと、
チカと麗香が首をうなだれて座っていた。
麗香はチカの背中に手を回して、慰めようとしている。
ただ麗香には人を慰めるようなことをしたことはなかったから、その動きは手探りにも近かった。

「チカ、やっぱ見つからなかったのか？」

俺が話し掛けるとチカは俺の声に驚いて一瞬びくついた。

「あんたたち、どこほっつき歩いてたのよ……」

そう言ったチカの目が赤い。

「頼み込んでみたけど、やっぱりダメだった。
『とっとと帰ってその寝癖みたいな髪直して、
ステージで謝る準備でもしておきなって』って言われちゃったし……」

「さっき俺達はスーパーボールすくいをしてた。
その時に零雨が名案を思いついたんだよ。それで、その準備で遅くなった」

「準備って、何するのよ」

「俺達四人で、五人分のパートをやる。その準備だ」

「無茶よ！自分のことでも精一杯だったのに、誰が二人分請け負うのよ？」

「電子ピアノ担当の零雨だ。彼女が自ら申し出た」

「確かに零雨はどの楽器を持たせても上手だったけど、物理的に無理よ。
両腕で鍵盤触りながらドラムも同時にやるなんて。
腕が四本ないと無理な技よ？」

「分かってる。だから俺達は準備してきたんだよ」

俺は段ボールの箱を開けた。

「スーパー……ボール？」

「そうだ。スーパーボール、こいつが不可能を可能にする」

「どうやってやるのよ？」

「ジョーが担当するドラムは、叩いて使うものだ。
バチで叩くのは無理だが、このスーパーボールで叩く。
原理はこうだ。
床に設置されたスーパーボールをテコの要領で上に射出する。
ドラムの上にスーパーボールが着地するように、だ。
着地したスーパーボールの音でドラムが鳴る。
ちゃんと音が出るよう、大きいサイズのものを注文しといた」

「そんな人間離れした荒業、どう考えても無茶よ」

「俺もそう思う。だが、当の本人はやる気満々みたいだぜ？」

零雨は、どこから持ち出したのかは分からんが、すでに工具箱を開いて、
さっきホームセンターで購入した材料で射出装置の製作に取り掛かっている。

射出するのに、零雨の空いている片足、
この足でテコ棒を踏み込んでスーパーボールを射出する高さ、
叩くドラムへの軌道調整を行うのは当然のこと、
きちんとリズミカルに音が鳴るようにしなければならない。

つまりは決められた位置に、決められた速度で、
そして決められたタイミングで正確に鳴らさなくてはならないということだ。

「……まあ、パフォーマンスには、なるかもね」

チカが首肯した。

「もう出ないわけにもいかなさそうだし、
メンバー不足のまま普通にやって顰蹙買われるよりはマシかも」

「俺達の出番はあとどれぐらいでまわってくる？」

「今やってるバンドの次の次がうちら。
……あんた達、もしかしたら逃げ帰ったんじゃないかって、
心配してたんだからね？」

「お前らを置いて逃げるほど俺は性格は腐れてねえし、
逃げてもそれは一時的なものしかならない、
というよりも俺の世間に対する評価がさらに悪化することのは目に見えている。
そんなどこぞの大企業がやるような浅はかな真似、
俺はよっぽどのことがない限りしねえよ」

チカは俺の顔をまじまじと見つめる。

「……コウ、あんた変わったね」

「お前が俺の性格を知らなすぎるだけで、これは俺のデフォだっつうの」

「コウくん、かっこいいね」

麗香が口を開いた。

「『嫌なことから逃げない』って、難しいことだもんね」

「そ、そーいうはなしはまた後だ。
それにしても、お前(チカ)の髪のことバカにした奴、ちょっとバカだな……」

「でしょ！？
あたし、本気でぶん殴りにかかりそうになったんだけど、麗香が止めてくれたの。
そんなこと言う脳みそがあれば、ちょっとは知恵をかしてくれたっていいじゃんねえ？」

「いやそっちじゃなくてよ、そういうものは
自分の心だけで思ってれば良いのにって意味で、
そんなの口に出して言ったら、自分の評価が下がることぐらい目に見えてるだろってもんだ。
誰が言ったのかは知らんが、お前の髪が寝癖っぽいのは俺も同感……ぐはっ！」

ああ、まずい、俺も余計なことを言っちまった、チカの鉄拳制裁がくるぞ、これ。
これは……逃げても良いいな？逃げてもいいよな？

「言ってくれるわね……あんた」

「じょ、冗談だ、本気にしなでくれよ？」

「……いいわ、ジョーをシバき倒すのはやりがいがあるけど、

あんたはどっか殴っちゃいけないような雰囲気があるのよね……
だから、あんたには罰として、これが終わったらたっぷり奢ってもらうから、
お財布の方、覚悟しておきなさいよ」

「殴っちゃいけない雰囲気って、お前、今さっき確かに俺を殴ったよな？」

「え？何のこと？」

とぼけるチカ。徐々に元気を取り戻してきたようだ。

十五分後、零雨が声を発した。

「……完成」

零雨が作り出した射出装置、その構造は非常に簡素なものだ。
ボールを射出すると、オートマチックに次のボールが発射台にセットされるようになっている。

「できたか、なら発射テストだな、零雨やってみろ」

零雨が足でテコ棒を踏み込むと、勢いよくボールが飛んで行く。

ドン、とドラムに着地し、音が出る。
バチで叩いたのとは音が違うが、まあこれぐらい良いだろう。

「零雨、あんた簡単そうにドラムに当ててるけど、ちょっとあたし

もやってみていい？」

チカがテコ棒を踏むと、ボールは明後日の方向に飛んで行く。

「難っしい！零雨、あんたこんなんで演奏できるの？」

零雨は頷くと、論より証拠といわんばかりに、テコ棒連打的踏み込み。

雲一つない西日の中、空に舞ういくつもの球体は、ドラム目掛けて落ちて行く。

そして見事百発百中、リズム感のあるビート＋シンバルの音が響いた。

「零雨って、意外にすごい技持ってるのね……」

「それでだ、一番デカイ、名前なんつうやつだったかな、零雨はこのリアルの方のペダル踏み込み式ドラムまでは扱えない。片足はピアノのペダル、もう片足はテコ棒、両腕で鍵盤だからな。麗香、お前出来るか？」

俺が聞くと、麗香は笑って頷いた。

「コウくん、私が練習してるとき、私が足でリズムとってたの知ってたでしょ？

練習中、ずっと私の足ばっか見てたんじゃなかった？」

「まあ、そうだが」

「イヤラシイなあ、練習中どこに目がいってるのかなって思ったら……

コウくんもやっぱりオトコノコだね」

「あのなあ……演奏中に足でバシバシと耳障りな程大きな音立てながら
リズムとってるアホは世界中探してもお前一人だ。気にならないわけがねえだろうが。
それにイヤラシイ目をしてたのは俺よりジョーの方だ」

「へえ～、『俺より』、なんだ……
とにかく、ペダルのドラムは私がやるね。
『バシバシ』ペダルを踏んであげるから、安心してね♪」

バシバシ叩きすぎてブッ壊すなよ……
絶望にうちひしがれてる匠先輩を想像しちまう。

「練習と違うことをやるわけだし、ちょっとここで練習しようよ」

麗香は言った。
俺達の最後の練習、リハーサルが始まった。

と、いうのもつかの間、さてこれからリハーサルやるぞって時に現れたのは玉城先生。

「あなたたち、もうすぐ出番がまわってくるから、出るならもう準備しておきなさいよ」

先生はわざわざ俺達にそれを伝えに来たのだ。

本当、面倒見の良い先生だ。

「え!?もう順番がまわってきたのですかぁ!?」

チカが声を張り上げた。

「あなたたちの前の順番の子達が今ステージに上がったところだから、

そろそろ準備しておくべきじゃない?って思って呼びに来たんだけど。

ほら、楽器も自前みたいだから、

ステージの楽器と取り替えるのにも時間がいるから、

前のグループが終わってから行くのは時間がかかりすぎるでしょう?

見たところ、ステージに出るみたいだし」

玉城先生はちゃんと呼びに来たからね?といってくるりと背を向けてステージの方へ歩いていく。

「……楽器、運ぼっか」

麗香がそういってギターと電子ピアノを持つ。

「そうだな、零雨、麗香、本番でのぶっつけ勝負になる。頑張れよ」

「うん」「……最善を尽くす」

四人で運んだ楽器はいつもより軽いような気がした。
多分気のせいだろう。
仮設のステージの裏に楽器を置くと、そこにいた玉城先生が聞いてきた。

「やっぱり四人でやるの？」

「まあそうっすね、代わりやってくれる人も出てこなかったし……仕方ないっす」

「そう、残念ねぇ……でも期待してるから」

玉城先生がそういったちょうどその時、俺の携帯電話が鳴った。

……ピッ

「はいもしもし？」

《ああ、俺だ》

「お、ジョーじゃねえか！」

俺の言葉にチカと麗香は俺を向く。

《もう発表は終わった……んだろ？》

やはりジョーは音楽祭の発表のことを気にしていたようだ。

声のトーンが暗い。

「いやまだだ。もうすぐ俺達の番がまわってくる」

《ホントか！？》

「何どうした？」

《いや、今から全力で行けば順番に間に合うかもしれないと思ってな》

「お前の親父さんは大丈夫なのか？」

《じゃなきゃお前に電話なんかしてねえって》

「そうか、良かったな」

《親父が死んだら笑い事じゃ済まないしな》

「ああ。

で、病院からここまでどれぐらいかかる？」

《タクシーで大体十分ぐらい》

「超微妙だな、こっちはいつ順番がまわってきてもおかしくねえ」

「おいお前ら、順番回ってきたぞ！
ステージの楽器取り替えるから手伝え！」

話の途中、ひょっこり現れた担任は言い放った。

「ジョー、残念ながら今から出番らしい」

《……担任の声、聞こえたよ》

ついで受話器の向こうから落胆のため息が聞こえてきた。

「……切るぞ」

《分かった》

時間とは実に残酷である。
あと十分、たったあと十分でジョーが揃うというのに、時間は嘲笑ってそれを赦さない。

麗香は担任と協力しながら学校の楽器をステージから下ろし、零雨はチカと協力して匠先輩の楽器をステージに載せている。
俺も何か手伝わねえと。
零雨や麗香に時間の進行速度を遅くしてくれなどとは到底言えない状況だ。
ジョーには気の毒だがここは俺達だけでやらせてもらうしかない。

「お前ら、いっちょ頑張ってこい」

ステージの準備が終わり、
担任の古典的激励を受け、舞台の定位置に立つ俺の手にはギター。
舞台の下に広がるオーディエンスの顔が嫌な程はっきりと見える。
見渡す限りの人、人、人。
俺と同じクラスのやつの顔、学校見学に来たと思われる中学生とその一家、
近所に棲息していると思われる時間と体力に裕福なご老人……などなど。

やっぱここに出なきゃ良かったと後悔するも、
ここに出るのはアンフェアな必然があってからで、
やはり逃げられない通過儀礼的なイベントだということを再認識する。

ま、ステージに立ってまでグツグツと文句鍋を掻き回すわけにもいかねえ。
潔くやりますか。

今までのバンドが盛り上げてきたせいで観客のテンションはＭＡＸ。
なんか演奏始まる前からノリノリで踊ってる奴、というか集団がいるし。
ここで盆踊りをするのはお門違いだと思うが……
よく見たら盆踊りではなさそうだ。
まだ何もやってねえのにクルクルとターンしたり手拍子とったり、
ピースサインしたりと狂気の沙汰という言葉がふさわしい行動だ。

いやあそれにしても、舞台に立つと意外と一人一人の動きがよく分かるもんだ。
授業中に先生がみんなと違うことをしている生徒を素早く発見する

理由はこれだな。

みんなが準備できたところで、麗香がマイクを持った。

「えっと、演奏する前にみなさんに一つ言っておかなきゃいけないことがあります」

麗香が言うと、ざわめいていた観客の声がトーンダウン。

「私達は本来五人で演奏する予定でした。
今朝、そのメンバーの一人のご家族が交通事故に遭い、
ここに来ることが難しくなってしまいました。
幸い、その方は瀕死の状態から回復傾向にあるそうです。
ですが、そのメンバーはまだ病院にいて、ここにはいません」

なんだよ、俺とジョーの通話を盗み聞きしてたのかよ。

「ですから、私達四人で、五人分のパートをやります。
出来るだけ頑張りますので聞いてください」

麗香がそういうと、気分がハイの連中が叫んだ。

「ガンバレェェェェッ！」

いや、要らないからそういうの。

一曲目。
一曲目は俺が希望した例の洋楽だ。
俺が歌わなきゃならんわけだが、その辺のレッスンも匠先輩から受けている。
俺は舞台の最前部に立つ。
嘆いていても仕方がないが、こんなはずじゃなかった……

とにかく、この曲は最初にドラムから始まる曲だ。
零雨、頼むぞ。

演奏開始の合図は、本来ならジョーがするはずだったのだが、本人がいない以上、俺がやるしかない。
俺は後ろを振り向いて零雨と目を合わせる。

いくぞ……3、2、1

俺が手を大きく振ってカウント中、零雨は早速スーパーボールを射出する。

激しいドラムとシンバルの音が響くと同時にうお～と唸る聴衆。
続いて麗香のギターと零雨の本業である電子ピアノが入る。

演奏中、俺は歌いながらも一体感を感じていた。

ドラムも音は少し違えど、まるでジョーが叩いているような感じがする。
零雨、お前は何も言わなかったが、
演奏中にもちゃんと他のパートの音も聞いていたんだな。

チカは零雨の隣でピアノ型シンセサイザを目まぐるしく扱っている、はずだ。
はずだというのは俺が舞台の最前線にいるからで、
チカがしっかり演奏しているというのは、チカのパートの音が聞こえるから分かる。

曲がクライマックスに突入しても、ドラムの音は寸分違わず性格に鳴り続けている。
ドラムを叩くのに使われ終わったスーパーボールが舞台の至る所に跳びはね、転がり、舞台から観客の方へと飛んで行く。

一曲目が終わると、やたら歓声が聞こえてきた。
零雨に対する歓声だ。
悔やまれるのは零雨がそれを聞いても何も思わない点にあるが、
それはあまり関係はなかった。
そして二曲目、チカ希望の曲だったんだが、それもそのような感じで終わった。

そして三曲目にうつろうとしたその時だった。
麗香があれ見て、と遠くを指差して言った。
よくよく見てみると、一人の人間がこっちに走って来ているようにも見える。
見覚えのある走り方、あの動きは……ジョーじゃねえか！

ジョーは回り込んでステージに息を切らしながら駆け上がると、
おっす、と力なさ気に手を挙げた。

「ハァ……途中からでも……ハァ、行った方が……
……俺のせいで、ハァハァ……」

「おいおい、ジョー、ちょっと落ち着け、な？」

観客は突然の乱入者にどよめきを響かせる。
すると、麗香がマイクを持った。

「今飛び込んできた彼が、足りなかったメンバーです。
えーっと……ちょっと今から楽器を動かさなくちゃいけないので、
少し時間を下さい」

麗香はそういって、麗香の足元にあるペダル式ドラムを持ち上げようとする。

「おい、一人じゃ無理だろうが」

俺が手を貸し、二人掛かりで持ち上げる。
本当は麗香一人でも十分いける重量（もちろん凡人には無理）なのだが、
一人で持たせて観客に違和感を与えることは避けなければならなかった。

「コウくん、ありがとう」

「……ちょっとコウ、

このスーパーボールが散乱している状況が俺にはうまく理解が出来ないんだけど……」

「なぜこうなったのかは後で事を追って順に説明する。今は演奏だ。観客（みんな）待ってる」

ドラムを置き終え、ステージの裏からチカがバチを持ってステージに上がる。

「ジョー、あんたが来なくたってあたしらでなんとかやっていけてたんだからね？」

「全力ダッシュで来た俺に言う言葉かよ、それ」

「……親父さん、助かって良かったね」

チカはそう突き放したかのように言うと、ジョーの胸にバチを押し付けた。

「……サンキュー」

俺達は本来の位置に立った。

チカの家で練習したのと全く同じメンバー構成、フルセットだ。

「お待たせしました、それでは三曲目に行きたいと思います」

三曲目、これはジョーが希望していた曲だ。

ジョーはバチを慣れた手つきで、いや、匠先輩に調教されたとおり

にこなす。
零雨の技巧的演奏の品質は高かったが、やはり本物のバチを持った人間には敵わない。
バチとスーパーボールじゃ音色が違うんだから仕方あるまい。

そしてやってきた最終曲、“Ａ　Ｂｅａｕｔｙ　Ｓｕｎｓｅｔ”。
もちろん作詞・作曲は麗香だ。
―Ａ　Ｂｅａｕｔｙ　Ｓｕｎｓｅｔ《美しき日没》、
麗香がインスパイアされたものそのまんまっちゃそのまんまなんだが、
俺と違ってなんかセンスを感じる。
俺ならどう付けるかって？
俺ならそうだな……俺なら……作曲者じゃねえから無理だ。うん。
作曲すること自体がセンスの要る作業だし、曲名っつったら、
そのセンスの集大成を一言で表す言葉だ。
理論的に考えてセンスのない人間が、
センスのキマった曲名を思い付くことなどまずありえない。
どうでもいい話だが、練習中、この曲を呼ぶときはみんなＡＢＳって呼んでた。
ＡＢＳって、クルマの非常制動時にタイヤがロックして
操縦が効かなくならないよう制御する装置の略称であり、
あるプラスチック樹脂の材質の略称でもあるんだよな。
本当にどうでもいい話だろ？

さて、この最終曲は担当メンバーが大きく変わる。
ヴォーカルは麗香とチカ、ドラムが零雨、電子ピアノがジョー、シンセサイザが俺だ。

俺は空を見上げる。
夏の暑い空気は未だに衰えず、今夜もまた熱帯夜になるだろう。
俺達の背後には沈んで行く最中の太陽がある。
確か図書館の近くで見た夕日は今と同じぐらいの時間帯だった。
つまりは麗香がインスパイアされた夕焼けが偶然にも一面に広がっているわけだ。

最初にギターの切なげな音が鳴る。
実際、こうやって外で演奏すると、
メロディーは鮮やかな夕焼けの中に溶け込み、全身の五感で一つの景色を眺めているようだった。
頬を撫でるようにソフトに流れる空気まで再現してある気がするほどだ。
メロディーを聴かせて空気の流れまで脳内補完させるとは、
やっぱ麗香の作曲センスはジーニアス（天才）。

例のフェードインが始まり、本格的に演奏が始まる。
麗香のやつ、シンセサイザをバリバリ使いやがるから俺の負担がでけえんだよ。

演奏中、見覚えのある人が観客の中に混じっているのを見つけた。
あれは――匠先輩じゃねえか！
匠先輩は俺の妹の美羽を肩車している。何であの二人がいるんだよ。
匠先輩はバイトで忙しかったんじゃねえのか？
美羽はチカの家で待機のはずじゃなかったのか？

美羽は手で匠先輩の頭を押さえ付けて上半身のバランスをとりながら、

俺達の演奏を聞いている。

美羽は俺と目が合うと、大きく手を振って何かを叫びだした。
何を言っているのかはこっちの演奏の音量が馬鹿デカイから聞き取れんが、
ニコニコしながら手をブンブン振り回しているところをみると、
どうせ「お兄ちゃーん！」とか、「美羽はここだよー！」とか、
そういう無価値な絶叫だということが容易に推測できる。

そんなことを思いながらなぜ俺はシンセサイザを使いこなせるのかというと、
それはもちろん、体が覚え（させられ）ているからで、
他のパートの音を聞きながらシンセの前に立てば、流れ作業的に勝手に動く。
まあ、一番苦労したのはこの曲だったし。

美羽から目を離し、観客の方を見渡せば、みな一様に口を閉じて黙って聞いている。
オイオイ、全校集会で先生の注意を聞かず、
なかなかおしゃべりが止めない連中が、生徒の分際の俺達の演奏で黙るって、逆じゃね？
それだけ俺達の演奏を真剣に聞いてくれているわけだから、
それはそれで嬉しいことではあるのだが、
俺としては隣とだべりながら軽く聞き流す程度の気持ちで聞いてほしかった。

――っとっと、危ねえ、危うく弾き間違えるところだった。
いくら流れ作業的に演奏が出来るといっても、
あまり演奏から意識を遠ざけ過ぎると、
手を止めてしまったり弾き間違えちまう。

これは誰でも一度は体験したことがあると思う。
反省して、ちょっと演奏に意識を戻した方が良さそうだ。
弾き間違えたら後でチカに何されるか分かったもんじゃないし。

そして、演奏は終わった。

第3話－26　音楽祭と妹“Ａｆｔｅｒ・・・”

ありがとうございました、と俺達は一礼して舞台から下りた。
はあ～、やっと音楽祭からの束縛から逃れられたぜ。
あれこれいろいろやってきたが、今回のようなことはもうゴメンだ。
死ぬ。

「お前ら、俺の予想の遥か上を行く演奏をかましてくれたな」

舞台から下りたところにクラス担任は腕組みをしながら立っていた。
そのとなりには、玉城先生。

「演奏、ものすごく上手だったよ～
やっぱり相当練習したのよね、それだけのレベルの演奏をするぐらいだから」

「兄にどうしたらいか聞いてみたら、
『俺が練習の監督をしてやる』って言い出して、結果的にこうなりました」

チカは照れを隠すためか、視線を砂の地面に落として言った。

「良いお兄さんじゃない」

「とんでもないですよ！
あいつ、みんなで学校でまず何をやりたいかって相談してたら、
突如彗星の如く現れて現れてあたしの個人情報（スリーサイズ）を暴露しようとしてきたんですよ！」

「ふうん、お前って言えないぐらい《小さい》のか？……あべっ！！」

はい、俺、見事にバチンと平手で頬をぶん殴られました。

「コウ、今日一日あんたと一緒にいて、
ちょっと見直したと思ったけど、あんたやっぱり相変わらずの性格ブスね」

「痛ってえな……人間、そう簡単に性格は変わんねえよ、よっぽどのことがない限り」

チカがむっとした表情で俺を睨みつけていると、
観客のアンコールサインが聞こえてきた。マジ勘弁してくれ。

「どうやらお前ら、相当気に入られたらしいな。
時間はあまりないぞ。出るなら行ってこい」

担任はにやりと笑って言った。
もちろん、俺は出る気はない。
最近のコンサートとかライブでも
アンコールなしで終わってしまうことなんかよくあるのに、
そういうサービスを求めてきてるわけだろ？
誰か贅沢という言葉を彼らに教えてやって……「コウ！何ボーッとしてんの！行くわよ！」

うえええええ！？出んのかよ！
俺はチカに腕を掴まれて舞台の上に引っ張り出された。
それと同時に沸き上がる拍手。

ああ、後でこれぜってえにトラウマになるわ。

ステージの上に立つと、麗香がマイクを持った。

「アンコール、ありがとうございます。
全部最初から通すのには時間がかかりすぎるので、
一、二曲が限界ですが、宜しくお願いします」

また拍手。

観客から麗香に対して可愛いぞーなどという、
演奏と全く関係のない野次が飛んでくる。
そして麗香、その一言一言に反応して照れんなよ……

少しして、麗香はマイクを持ったまま俺達に集合をかけた。
円形状に集まっての臨時会談だ。

「ねえ、何の曲やればいいのかな？」

と、麗香。

「知らねえよ、観客にアンケートでもとって、
一番人気のある曲やって終わりでいいんじゃね？」

「あ、それいいかもしれない」

「コウ、たまにはいいこと言うじゃん」

なんか知らんが俺の口から出任せの適当に言った案が何故か採用され、
麗香がアンケートを取りはじめた。

その結果、当然の結果といえば当然なんだが、麗香の曲、
“Ａ　Ｂｅａｕｔｙ　Ｓｕｎｓｅｔ”が一番人気があった。

「じゃあ、始めます」

麗香は言ってマイクを所定の位置に戻し、立ち位置についた。
それにつられて俺達も動く。
俺も含めなんだが、人が動いてからしか自分も動かないとは、なんとも受け身な人間だ。

それはともかく、この曲が終わった後、麗香が軽く暴走しはじめた。

「次の曲は、この曲のつづきの曲です」

俺はそんな曲など聞いてなかった。
俺だけじゃない。
チカも、ジョーも、そんな曲なんて練習どころか聞いたことすらない。
だから俺達はポカン顔をするほか、やることが思い付かなかった。
零雨だけは仮面をつけているの如く、どんな状況下でも表情を変えない。

ジョーがマイクを持っている麗香に向かって歩きだし、ヒソヒソと

何かを喋った。
ジョーの表情からして恐らく「そんなの練習してねえぞ」的な講義に違いない。

麗香はそれにヒソヒソと何かを答えると、
ジョーは納得したように二、三度深く頷いて元の立ち位置に戻った。

麗香はマイクを持って続けた。

「この曲は、まだ誰にも聴かせてません。
ここにいるバンドのメンバーも知りません」

観客は再びどよめきだすと同時に、
未知の領域を探検するような、そんな期待に溢れた顔をしている。

……ん？麗香が作曲してて、未発表の曲って――！
「精神が狂うかもと自己封印したあの曲」じゃねえのか？
俺は麗香を止めるべく、舞台の最前線に立つ麗香の肩を掴んだ。

「おい、麗香！
それは例の『危ない曲』じゃねえだろうな？
そうならやめろ。
近所のガキも大勢いる。
みんながとち狂ったら、後で収拾がつかなくなるぞ……ぁ」

麗香は「大、丈、夫」と、俺の額を人差し指で突きながら答えて笑う。

「公衆の面前で小突くなよ……イチャイチャしてるとか勘違いされ

ちゃ困るだろ」

「ちゃんと危険なところのメロディーは変えてあるから」

「一応お前耳付いてんだろ始め俺の話を聞けよ……というか、誰が演奏するんだよ」

「私一人で出来る曲だから」

結局、ちぐはぐな会話しかできなかった上に、俺は言い負かされてジョーと同じく、元の立ち位置に戻ることとなった。

「これは私一人で演奏する曲です。
良かったら聴いてください。曲名は“Ａｆｔｅｒ．．．”」

麗香はそう言って電子ピアノの前に立った。
俺達は所定の位置でただ何もせずボーッっと突っ立っていることだけが仕事である。

日は沈んでしまい、空はディープな青紫の空が広がっている。
なるほど、夕焼けの次は夜空だからな。
曲は電子ピアノ一台で夜空そのままの美しさを表現、観客は黙って静かに聞いている。
感傷的な曲だ。
しかし書き直したとはいえど、麗香の曲の中に聴いたら精神があーだこーだとか、
少なくとも俺が聴いた限りではそういうストレンジ要素は一切合切含まれていない。
一体どうなってる？

内なる俺が首を捻りに捻ってもげそうなぐらい捻って考えたが、
結局のところ演奏終了までに解は見つけられなかった。
俺達はステージを降りた。
まあ、答えが分からなくともいい問題だ。恐らく。

第3話－ＥＮＤ　音楽祭と妹　みんなが待ってる

音楽祭終了直後、俺と麗香は音楽祭の後片付けの為に担任に呼ばれた。

「あたしらは先に帰ってるから、片付けが終わったらそのまま家に来て」

チカは別れ際、俺達にこんなことを言った。
なんでも、音楽祭成功の打ち上げをやるらしい。
俺としては後片付(これ)けが終わった後、
そのまま帰宅してベッドに飛び込みたいところだ。
だが面倒なことに美羽は匠先輩が持ってる。
俺が美羽を置いて自宅に帰ることはさすがにできない。
そんなことすりゃ、今後しばらく続くであろう兄妹生活に亀裂(クラック)が入る。
もともと俺は美羽のようなガキは嫌いだ。
嫌いだからといって険悪な空気の中、一つ屋根の下で同じ釜の飯を食うつもりはない。
仲良くとはいわんがそれなりの仲は保持しておきたいというものだ。

「音楽祭の後片付けとか、めんどくせえ。
つうか自分のゴミぐらい自分でごみ箱にもってけってんだ低脳野郎め」

俺は愚痴りながら
ごみばさみで校庭に散乱したゴミを掴んで麗香の持つゴミ袋に放り込む。

「そこまで言わなくてもいいんじゃないかな？
もしかしたら気がつかないうちにゴミを落っことしたのかもしれないじゃない」

「……だとしたらこの近所は相当数のドジっ子で構成されていることになる」

「え～？そう？」

はさみを動かしながらテントを片付けている生徒の間をくぐり抜けると、
グラウンドの中の開けた場所に出た。

「いくら人がうっかりを起こすのは仕方ないといっても、この数はさすがにねえだろ」

そこには大量のゴミがごみ箱のゴミをぶちまけたようにグラウンドに散らばっていた。

「……ひどいね」

「ああ。……そんじゃ、これ（ゴミ）は見なかった、ということで」

「コラ、コウくん！
『ゴミはちゃんと片付けないと』いけないでしょ？
先生から頼まれてＯＫしたのに、放棄するつもり？」

踵を返して立ち去ろうとする俺の腕を、麗香に掴まれた。がっちりと。

元はといえば、ゴミ拾いは頼まれたんじゃなくてお前が自ら申し出たわけで、
もうちょっと楽な手伝いを希望していた俺まで
同じバンドのメンバーということで担任に道連れにされた揚句のこの惨状だ。
（チート使えば）麗香一人で十分なところを、わざわざ俺まで付き合わされているのだ。

「……へいへい分かりました、やればいいんだろ、やれば」

俺はゴミを袋にはさみでひたすら入れるが、俺がせっせと入れても入れてもゴミは減らない。

「……なあ麗香」

「うん？何？」

「これぐらいのゴミ、お前の例の能力でパパパッと掃除できねえの？」

「ダメ」

俺がぼそりと呟くと、麗香は首を振った。

「なぜ？」

「人がいるから、むやみやたらに使うわけにはいかないの」

「零雨は人前であんな曲芸をやっててか？」

「あのね、零雨ちゃんのあの技は、
確かにボール一個一個の軌道を計算して飛ばしていたけど、
理屈的にいえば、練習すればコウくんでも出来る技でしょ？」

「それはそうだが……
地球が滅ぶ日までずっと練習しつづけたとしても、俺にはまずできないだろうな」

「そう？私は出来ると思うけどなぁー」

「俺の身体能力的に無理だ」

「……話を戻すね。
零雨ちゃんのやったことは理屈的に説明できるけど、
今コウくんが私にできないかって言ったのは超常現象の類になる。
そういうのは、ほら……ね？」

「……分かったことにしておこう」

そうこうしているうちに、
他の後片付けにまわっていた生徒は仕事が終わり、
友人とともにバカ騒ぎしながら学校をあとにしていくのを見たのも、
かなり前のことになってしまった。

しかし俺達のゴミ拾いは主に完璧主義の麗香のせいでなかなか終わらず、
まだグラウンドの半分を掃除しただけに過ぎない。
時計を見れば午後八時をさしている。
校舎の明かりも職員室の一部――見回りの先生専用の部屋だけし

か灯っていない。
虫の静かな透明の鳴き声が虚しく聞こえてくる。

「それにしてもお前ってさ、」

「うん？」

「俺達と初めて会った時と比べると、変わったよな」

「そう？」

「自覚はないのか？」

「うーん、あんまりだけど……そんなに変わった？」

「だいぶな。
今日昼飯食ってる時にお前が
『ジョーの気持ちも考えてみよう』なんて言い出した時、俺は確信した。
お前は変わった。
いや、変わっている、変化していると言った方が正しいのかもしれん」

「どうして？
どうしてそれが私が変わったっていうことに繋がるの？」

「……あのさ、お前バカだろ」

「……へ？」

「お前は何をしに《ここ》に来た？
自分の吹っ飛んだ感情プログラムを修復しに来たんだろ？
修復の進行具合を把握してないって、
いつ修復を終えるのかのめども立たねえじゃねえか」

麗香は黙り込んで目を閉じた。

「そうよね、常に把握しておかないとダメだよね……」

しばらくの間、沈黙の中で作業をしていたが、突然麗香がか細い声で聞いてきた。

「ねえコウくん、私のこと、嫌い？」

「は？……ん、いや、別に」

「ホントに？正直に答えて」

「だから別になんとも」

「本当は私のこと嫌いなんじゃないの？
早く私とさよならしたいんじゃないの？」

「どうしたんだよ、急に」

俺はゴミばさみを動かす手を止めて聞いた。

麗香に目を向けると、彼女は俺から視線を逸らして俺に横顔を見せることしか許さない。

「だって……！

……コウくんがあんなこと言うから」

麗香が今回のように俺を忙しい中、音楽祭に引っ張り出したのは正直に言うとムカつく。

だが俺は麗香に対して嫌いだという感情はない。

麗香が俺のどの発言を根拠に俺が麗香を嫌いと考えていると考えているのか、俺には分からなかった。

「ぁ…でもやっぱり、コウくんの言ってることは正しいかもしれない……」

麗香は独り言のように言った。

「私は、人間（ひと）じゃない。

どこにも存在しないはずの“存在”。

好きになるにも嫌いになるにも、その対象が存在しないとそんな気持ちにはなれない。

だからもともと存在しない私に対して何とも思わない。

何とも思わないから私がコウくんにどんなことをしても一緒にい

てくれる……
そうだよね……うん、納得」

麗香は寂しく笑う。

「ごめんね、変なこと聞いちゃって。掃除、早く終わらせよっ」

「……はぁ～、このバカは全っ然分かってねえなぁ。
あのな、――――……・・・。」

月明かりに照らされた麗香の目からキラリと流れる水――泣いている。

「……泣いてんじゃねえよ」

「私ね、……わからないの
自分が“いる”のか“いない”のかわからないの」

「お前がいなけりゃ俺はここでゴミ拾いなんてしてねえよ。
今頃妹の世話に手を焼いてるはずだ。
お前が元々物理(ハード)的に存在しようとしてまいと、
結果的にお前は今ここに、俺の目の前にいる、存在してんだ。
そもそも、お前が存在しねえなら俺も存在しねえじゃねえかよ。
俺だって一応お前らの管理下にあるプログラム(ソフト)で動いてんだろ？
ということは、チカもジョーも美羽も存在しねえよな？

存在するものに対してしか感情を持てないならば、感情の概念はどこから来るんだよ？
イデア世界か？そうじゃねえだろ？
イデア世界が万が一あったとしても、それもソフト的存在でしかない。
……システムのくせして矛盾だらけの理論、ぶちかましてんじゃねえよ。
それから俺がお前に対して何も感じていないなどという虚言をもう二度とかますんじゃねえ。
次そんなこと言ったら、俺はお前との協力関係を切る」

「……ありがとう」

「チッ、せっかくたまにはお前のこと、人として評価してやろうと思ったのに、見事に空気をぶち壊してくれたな」

「……え？」

「なんだ、不満か？」

「ううん、すごく嬉しい」

「嬉しいのに泣くなよ」

「コウくん、『嬉し涙』、知らないの？」

「少なくとも泣き出した時は別の意味で泣いてたろーが。
……つかさ、そろそろやってくんね？」

「え？何を？」

「誰も見てねえから……よろしく」

「うん、分かった」

麗香は辺りをぐるりと見回し、周囲に視線がないのを確認すると、俺にゴミ袋の口を持つように言った。

□の形に開かれたゴミ袋の中に、グラウンドに散らばったゴミがどんどん吸い込まれていく。無理な話だが、始めっからこうしときゃ、こんな遅くまで掃除しなくても良かったんだよな。

「これで一丁上がりっと……」

口を結んで俺はゴミ袋を肩に担いだ。袋に穴はないから服が汚れる心配もない。

「サンタみたいだね」

俺の格好を見た麗香が言った。

「ゴミを担いでくるサンタクロースか？世界中のサンタ信者が聞いたら泣くぞ」

ましてや真夏のサンタクロースがゴミをプレゼントすることになれば、

この蒸し暑さ、腐敗臭もすさまじいだろう。
生ゴミ、それもきちんと水の切ってない生ゴミなんかプレゼントされたら、
それは即阿鼻叫喚の地獄絵図フェスティバル開催の合図だ。

「そうかもね」

ゴミ捨て場にゴミを放り込むと、後ろから声が聞こえた。

「あら、あなたたちまだここにいたの？」

声の主は玉城先生だ。

「今日は先生が見回りの当番なんすか」

「ええ、さっき校庭を歩いてくる人影が見えたから誰かと思って。
……もしかして、今までずっと掃除してたの？」

「まあ、そんなとこっす。
主に麗香（こいつ）が完璧主義のせいで
グラウンドの掃除がなかなか終わらなかったんすよ」

「えっと、神子上さん？
先生が言うのもおかしいけど、そこまできっちりやらなくてもいいから」

「でも、命令は絶対「うおおおっと！メール来た！」」

命令は絶対とか、危なっかしいワードを軽く口にしやがってこいつ！
ちなみに、俺の携帯電話に着信があったのは事実で、
携帯を開くと「六十七件の着信」と表示されている。
あ、今また着信があって一件増えた。
こんなに大量のメールを送り付けてきたやつ、まあ想像はつくが一
応確認しておく。
すると読み通り、全部チカだった。
受信ボックスには、

件名：早く戻って来い
件名：早く戻って来い
件名：早く戻って来い
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）ボケ
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）カス
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）アホ
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）ウスノロ
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）ヘタレ
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）ブス
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）足手まとい
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）迷惑製造機
件名：早く戻って来い（ー|ー＃）チキン
件名：早く戻って来いｑ（ー|ー＃）ｐ地獄に堕ちろ

件名：早く戻って来い（ー｜ー＃）本気で
件名：早く戻って来い（ー｜ー＃）そろそろ
件名：早く戻って来い（ー｜ー＃）殺すぞ
件名：早く戻って来い（ー｜ー＃）コラ
・
・
・
のおびただしくも美しい羅列。
こんだけ大量のメールが来たら逆に怖くて戻れやしねえ。
しかも途中からいわれのない罵倒が……
てか≦本気でそろそろ殺すぞコラ≧とか怖いんですけど！

「あ、私にも来てる」

麗香は俺に携帯電話の画面を見せた。
送信元はチカだ。

件名：後片付けまだ～？（＾＾＊）セカセカ
件名：あとどれぐらい？
件名：コウ待ちなら放っときなよ
件名：いつ頃来れる？
件名：まーだーおーわーんーなーいーのー？

何なんだこの温度差は……
しかも着信たったの五件。
女の本性ここにありといっても過言ではないだろう。
少なくともチカにはピッタリと該当する。

「やっぱりみんな心配してるんじゃないの？メールまで送ってくる

ってことは」

画面を見ず、親からのメールと勝手に推測した先生は言う。
勘違いだと気がつかないまま、
話の受け答えだけは整合性がとれるなんてことはあるもんで、麗香は
「そうですね、早く戻らないと」
と答えた。

当然脅迫めいたメールが大量に送られてきた俺にとっては、
自分の身を心配されるのではなく、自ら心配する方が正しいのだが。

「そういえば、見回りは先生一人なんですか？」

「ええ、まあ」

「じゃあ何かあった時は大変ですね」

確かに、言っちゃ失礼かもしれないが、
もうおばさんである先生一人に学校の見回りをさせるのは大変だろう。

「このへんは治安がいいから、私一人でも十分なのよ。
一時期、引ったくりとかゴロツキとかこの辺りに出てきた時があったでしょ？
あの時はさすがに若い男の先生を含めた三人で順番に見回りしてたんだけど、
最近は不思議とてっきり見なくなって。
それで、もう一人でも十分だろうって」

この時俺は確信した。
この学校はセキュリティーが薄すぎると。
いくら治安が良くてもおばさん一人に学校のセキュリティーを任せるのは危険すぎる。

「さ、もう遅いから、早く帰りなさい。
これは私が片付けておくから」

玉城先生は俺からごみばさみを取り上げると、俺と麗香の肩を持った。

「はい、帰った帰った！良い子は家で勉強しないと」

「うふふ……はい」

麗香はそう答えて俺の腕を掴んだ。

「コウ、ほら早く！
早く“帰らないと”みんな待ってるよ！」

ははは……待ってる、ね。
俺にはチカが手をパキパキさせながら仁王立ちして待ち構えている姿しか想像できなかった。

第3話－ＥＮＤ　音楽祭と妹　みんなが待ってる（後書き）

第3話、「音楽祭と妹」では、ほのぼの系の話として書かせていただきました。
気がついてみれば、1話を書ききるのに平均2ヶ月かかっちゃってますね……
いや～、ここに書きたいことがよりどりみどりあって、
何を書こうかと迷っちゃいます。

書きたいことがあるなら
一部毎のまえがき、あとがき欄を利用したらいいじゃないか、

と、最初は思ってたんですが、
物語の合間に現実に引き戻すっていうのは、
やはり話に没頭したい方にとっては邪魔者、興ざめですよ……ね？
え？私のどうでもいい挿絵のほうがよっぽど興ざめだって？
……それはもう理解してます。はい。
目障りな方はお手数ですが、挿絵表示ＯＦＦでお楽しみいただけたらと思っています。
文体も赤ちゃんに鉛筆握らせて落書きしたようなとんでもないものですが、
それでも最初から最新話まで読んでくださる仏のような方もいらっしゃるわけです。
ああ、ありがたやありがたや。

えーっと、やっぱりここにいろいろ書きすぎるのもあれなので、
今回は読んでくださったお礼をさせていただきます。（またここに追記するかもです）
次話からは、ミステリーな物語が今頃になって本格的に始まる、と

いうつもりで製作中です。

私のほうの活動報告にちょこちょこ小話、愚痴、質問、独り言を書いてます。
この小説についてのこぼれ話も、僅かながらあります。
タイトルにかかわる「大人の事情」とか……

たまに笑えそうで笑えない本当にあった話も載ったりします。

もし良ければユーザーページに一度遊びに来てくださいね。

第４話－１　スパイラル・トレイン　前日（前書き）

第４話連載開始です。

マンネリ化してないことを祈るばかりです（笑）
気楽に読んでいただけるとうれしいです。
それと、今話は短編的性質の話になるかもしれません。
長さも前話と比べると大分と短くなる予定です。
※この物語はフィクションです。
　実在する人物・団体・組織名・愛称等は全て架空のものです。
推定読了時間：２時間５５分（１７５分～）
（５００文字／分、端数切り上げ）
※読了時間は、個人差があります。
　推定読了時間は、ＥＸ話を含みます。
しおり機能をご活用ください

第4話－1　スパイラル・トレイン　前日

電話が鳴った。

「もしもし？」

《あ、コウ？お母さんだけど》

「どうした？突然こんな時間帯に電話なんか掛けてきて」

《いやね、美羽の様子が気になっちゃって。
昼間、ちょこちょこ家に電話してたんだけど、
ずっと出なかったから夜に、と思って。》

「多分その時間帯は友達の家に行ってた。
足繁く通う用事があったから」

《ふ～ん、珍しいこともあるものね。
美羽は、もうコウの家に来てからどれぐらいだっけ？》

「今日で三十日目」

《ああ、もうそんなに経ってたのね……
お母さん、てっきりまだ二週間ぐらいかな、なんて思ってたら。
コウ、美羽にどっか連れてあげたりした？》

「まあ、隣町の図書館と俺の友達の家ぐらいだけど」

《遠出はしてないの？》

「明日から友達と四泊五日でちょっと九州に旅行行く予定が立ってる。
もちろん美羽も連れてく。
お袋の言う“美羽の思い出作り”は問題ねえよ」

《あらそうなの……
……でもお盆の時期もだいぶんと過ぎちゃった、
というかもうあと一週間とちょっとで八月終わっちゃうわよ?》

「美羽の学校の宿題はもうほとんど終わらせてる」

《コウは?美羽だけできてもあんたができてなくちゃ……
「大丈夫だって!お袋は何でも気にし過ぎなんだよ」》

《そう?ならいいけど……そうそう、美羽の帰る時期なんだけどね、
今から一週間後の昼二時発の飛行機でどう?》

「二時発ってこっち側発の飛行機のことだよな?」

《当たり前でしょ!
あんた、こっち発の飛行機に誰が乗ってくるのよ?》

「いや、つかさ、仮にも小一の子供(ガキ)を飛行機に一人で乗せることについて、
どう思ってるのか真剣に聞きたいところなんだが……」

《うーん……本当はね、お母さんかお父さんか、どっちかがついて行ってあげた方が
いいのかもしれないけれど……

行きはどっちも忙しかったからついて行ってあげられなかったのよね》

「じゃあ帰りぐらいはこっちまで迎えに来てやれば？」

《でもねー、飛行機代高いでしょ？
それに行きは美羽一人で行けたんだから、帰りも行けるんじゃない？》

前例主義とは実に恐ろしいものだ。
別に前例主義自体が悪いといっているのではない。
前例にそれなりの理由があると考えれば、前例はいい教科書になり得るだろう。
ただ、俺のお袋のように理由もくそもない、
いきあたりばったりの前例を持ち出してきて可能だなどとぬかす輩が現れるとなると話は別だ。

「いやいや、いくらなんでも美羽が可哀相すぎやしないか、お袋？
見知らぬ人と長時間同じ空間で過ごすんだぞ？」

《そうかもしれないけれど、
ちょっとスケールの大きな≦お使い≧させてると思えばいいんじゃない？》

「誰がどう考えたってスケールでかすぎだろ！
千キロ離れた実家に『自分』を届けにいくお使いとか、
それだけで安っぽいドキュメンタリー映画が一本できあがるっつうの！」

《じゃあ、コウがこっちまで送りに来る？》

「俺はそんな暇人じゃない。新学期の準備もせにゃならんだろうし」

《じゃあ仕方ないけれど、美羽一人で乗せるしかないわね》

「お袋、専業主婦だろ？」

《そうだけど》

「家事で忙しいかもしんねえけど、たまには親父に家事頼んで迎えにきてやれよ」

《そう出来たらいいんだけどね……》

そのあとお袋と色々話したが、結局美羽は一人で飛行機に乗ることになっちまった。

いくらガキは嫌いだといっても、さすがにこれには同情するというもんだ。

あと、美羽の荷物は宅急便で送ることとなった。

俺にはお袋のような３Ｄテトリスのスキルはねえから、美羽の持ってきたキャリーバッグの中に荷物を全部納め切ることはできない。

飛行機には荷物持込制限があるから、新しいバッグを持ち込ませる訳にもいかず。

《それと、最後にちょっと美羽と代わってくれる？
今どうしてるのか、ちょっと声が聞きたいから》

俺は受話器のマイクに手を当てて美羽の名前を呼んだ。

美羽は「はーい！」とバカ元気に答えて美羽の部屋から飛び出して

きた。

「ほら、お袋から電話だ。
お前の声を聞きたいんだとよ」

そう言って受話器を渡すと美羽はそれをすぐに耳にあてて「お母さん？」と一言。

美羽が電話している間に今どういう状況なのか、簡潔に説明しておこう。

音楽祭の打ち上げをチカの家でやったとき、
匠先輩がひそかに温めていたという
メンバー全員＋美羽の旅行計画を打ち出してきて、
俺は遠慮したんだが、まあ、その、
とある髪ボサボサの女子高生からの圧力とか、勝手に話が進んでるとか、
色々紆余曲折があって行かされることになったんだよ。
そんで、その出発日が明日、前夜にあたる今になって
お袋が突撃電話を仕掛けてきたと、そういう状況だ。

ちなみに、俺が一人暮らし中に外泊するなどという華々しいイベントはなかった。
だから旅行バッグから何から何まで新規購入だ。
一昨日、昨日、今日と三日に分けて買い物（美羽付属で）に行ってきた。
正直これだけで疲れるっつうのに、
遠出をしようというのだから体力はもとい、生命力が持つかどうかが怪しい。

滋養強壮に効くらしいリポビタン〇、重いが一箱旅行かばんの中に忍ばせてある。
別に瓶の中に爆薬詰め込んでるんじゃねえんだし、特に問題はないはずだ。
飛行機にも乗らねえし。

出発は明日の夕方頃で、なぜか俺の家に一旦集合してから行くことになった。
というかそもそもにこの計画を練るために集合するときは必ず俺の家だった。
俺がわざとすっぽかすとでも考えたのかは知らんが、多分そういう意図だろう。
あれから俺は家の中の掃除には気を使うようになったおかげできれいなままだし、
まあ別に来ても構わないっちゃ構わないのだが。

「うん！じゃあね！バイバーイ！」

美羽がマイクに向かって話し掛け、受話器を俺に渡してきた。
ん？また俺と代わってくれって言われたのか？

受話器に耳を当てる。

「もしもし？」

ツー、ツー、ツー、ツー……

って切れてんじゃねえかよ。
美羽のやつ……まあそうか。
六歳のチビガキに電話の使い方なんていちいち覚えてなんかねえもんな。
実家の電話ならまだしも、
ほとんど使ったことのない一人暮らしの野郎の家の電話なんだから、
使い方わからんでとりあえず俺に返却したと、多分そうだ。
まさか電話が繋がってないのに受話器に向かって「もしもし」と話し掛ける
バカ丸出しの高校生に仕立て上げようとかそういう悪意はないだろう。

「お兄ちゃん、誰とお話しようとしてたの？」

「こっ、このっ、ガキの分際で……」

ちょっと待て、美羽は電話が切れたのを知ってて、
そこからどうしていいのか分からなかっただけかもしれん。
悪意があると判断するのは時期尚早というものだ。
ほら、現に見てみろ、この頭の中スッカラカンにしか見えない、
純粋そうな小娘がそんなことするはずねえじゃねえか。

「……ん、いや、ちょっとボケただけだ。

お前が突っ込んでくれるかなと思って」

「ふ～ん」

やっぱり俺の思い過ごしだった。
美羽は納得したように二、三回小さく頷く。
少し考えるそぶりを見せた美羽は旅行の最終準備に取り掛かろうとしていた俺を呼んだ。

「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだ？」

「何でやねーん！」

「時差ツッコミ……だと？」

分かるぞ、俺の苦し紛れのボケだった発言を本気にして、
今自分が何をせねばならないのか
精一杯の努力を注ぎ込んで考え出した末の「切り返し」なんだよな？
分かる分かる。
だがそのツッコミをするには時間がかかりすぎた。
ツッコミが逆にボケになっちまってる。
思わず俺の方がツッコんじまったよ。

「ま、親切にどーも」

えへへ、と笑いを浮かべる美羽の頭に手を乗せる。

「あとの準備は俺がやっておく。
ちょっと早いがお前はもう寝ておけ」

「え～？美羽まだ眠くないよ」

「起きてて何するんだ？
テレビ見るか遊ぶかのどっちかだろ？」

「美羽もお手伝いする！」

「準備のか？」

美羽は元気に頷く。
小一のガキにできる旅行の準備の手伝いってあるか？
かばんにモノを詰め込むにも、その程度の年齢の器用さはたかがしれてる。
乱暴に突っ込んだような感じでぐちゃぐちゃになるだろう。
俺が作ったチェックリストを読み上げて確認しようにも、
「衣類」とか「袋」とかまず読めそうにない漢字が多数あるから、
まず円滑には進まない。

「仕方ねえな……ちょっとこっち来い」

美羽を旅行かばんの前に座らせ、俺はそのとなりに座る。
美羽が自動でこなせる処理はないと判断した俺は、
美羽に一つ一つ単純な質問をしていくことにした。
まず持って行くつもりの衣類一式を美羽の前に置いた。

「美羽は何するの？」

「服は上下二つで一つなのは知ってるよな？」

「上下？」

「簡単に言えばシャツとズボンだ。
いつも着るとき二つとも着るだろ？」

「うん」

「その上下二つを俺のものとお前のものでいくつずつあるか数えてくれ」

「はーい！」

この考え方にはワンピースとか
そういうのは考慮には入ってないが、後で別にカウントさせる。
美羽は指で一個、二個、三個、と数える。

「お兄ちゃんのが十個で、美羽のが六個」

十個……上下ワンセットと数えるためには二で割って、
十着÷二＝五日分、よし。
四泊五日の初日は自宅だから着替えは四日分で十分なのだが、
旅行先で何があるか予想がつかないから予備で一日分余分に持って行くことにした。
美羽の方は、六÷二＝三日分であるが、
残りの二日分はカウント対象外のワンピースを持ってくから問題なし。

「じゃあ次、靴下は二つワンセットで俺とお前の分、いくつずつあるか数えてくれ」

「うん。えっと、一こ、二こ、三こ……」

美羽が旅行の準備を手伝うことで、
結果的に作業効率が上がったかと聞かれれば、むしろ急激に低下したと言った方が正しい。
でもまあここ一ヶ月近く生活してきて
初めて俺に協力的態度を見せたのだから、これぐらいは我慢できる。
もちろん「明日出発なのだがまだ準備が一切出来てねえんだこの畜生！」的な、
前門の虎、後門の狼の比喩が妥当であろう、
絶望的状況の渦中にいるならばこんな余裕は生まれてこない。
準備は八割がた終わって、あとは持って行くものの最終点検だけだったから良かった。

全部の点検が終わって気がついてみると、夜の十時半になっていた。

第4話―2　スパイラル・トレイン　1日目―旅立ち

ピンポーン

「……はい」

「……私」

翌日。

このようにして俺の家に一番早く訪れたのは意外にも零雨だった。
俺が玄関のドアを開けると、零雨一人だけが突っ立っている。
零雨は「ちょっと海外に一～二週間ほど出張するんです」と言わんばかりの
黒のごつくて渋いキャリーバッグと、それと全く似合わない
女の子っぽい、かわいらしいベージュのショルダーバッグに荷物を詰め込んできていた。
四泊五日の旅にしては少々、いや、かなり荷物の量が多い気がする。
ショルダーバッグ自体もかなりのサイズで、
一泊二日ぐらいの軽旅行ならばこれ一つで十分、という大きさだ。

「……ちょっと荷物、多すぎやしないか？」

オッス。ぐらいの軽い挨拶をしようとドアを開けるまでは思っていたんだが、
さすがにオッス。で済ますには荷物が多すぎた。

「……必要最低限の……装備」

「どうやったらその量で必要最低限の装備って言えるんだよ？」

「……旅先でのあらゆる事態を……想定した結果の……必要最低限の……装備」

「どんな想定をしたらそうなるんだよ……」

「……窃盗、誘拐、ゲリラ（Guerrilla）。……氷河期、隕石、「もういい！」」

氷河期ってなんだよ氷河期って！

隕石もよっぽどの悪運（ラッキー）がない限り直撃しねえし！

地味な疑問だが、なぜゲリラだけネイティブ発音？

ネイティブはともかく、

零雨は旅行先に自宅を持って行くぐらいの装備をしているという認識でいいだろう。

「……まあいい、とにかく中に入れ」

俺は零雨を家に上げた。

リビングの時計は午後四時を指し示している。

集合時刻は午後四時半だから零雨はかなり早く家に来たことになる。

「あ！零雨姉ちゃんだ！」

リビングでテレビを見ていた美羽が零雨に気がつき声をかけた。

「お姉ちゃん、美羽と一緒に旅行に行くんだよね？」

零雨はゆっくりと頷く。
これは彼女のイエスと答えるときのテンプレの答え方だ。

「いっしょに楽しいおもいで作ろうね！」

約束の時間の十分前には、既にメンバー全員の顔が俺の家に集まっていた。

俺、チカ、ジョー、零雨、麗香、美羽、そして最高責任者の匠先輩の七人だ。
参考までに、男女比は三対四である。

「日焼け止め、ちゃんと塗っておかないとね……」

俺の家の中で堂々と日焼け止めを塗りたくりはじめたチカ。
それは家を出る前にやってこい。

「麗香はもう日焼け止め塗った？」

「日焼け止め……？」

「えっ、まさか持ってきてないの！？」

麗香は首を横に振った。

「うん……持ってない」

「ちょっとそれヤバイよ！
……ほら、あたしの日焼け止めの予備あげるから。
せっかくきれいな肌してるのに、紫外線に曝すなんてもったいない」

チカは麗香に新品の日焼け止めを投げ渡した。

「あ、そうそう。
それ、ちゃんと肌に合うか試してから使わないと、
あとで大変なことになるから気をつけて」

麗香は眉で富士山を作って苦笑いした顔を俺に向ける。

《ホントはいらないのに貰っちゃった……》

麗香はチカに気がつかれないようそっと俺にジェスチャー。
なら貰うなよ。

「零雨は？日焼け止め持ってる？」

零雨も首を横に振る。

「あんたたち、日焼け止めなしで旅行に行こうなんて勇者ね」

チカは苦笑いを浮かべて零雨にも日焼け止めを……
てかいくつ日焼け止め持ってきてんだお前は！

さて、今回の旅の移動手段は鉄道だ。
移動手段については匠先輩なりのこだわりがあるらしく、
「旅行と移動は違う」ということだ。
なんでも、新幹線や飛行機を使っての旅行はただの移動に過ぎず、
旅を楽しむならば道中も楽しめ、だそうだ。
夕方に旅行に出発することから勘がいい人は予想がついてるかもしれないが、
移動には寝台特急を利用する。
列車の中にベッドがのってるアレだ。
俺の家から電車を乗り継いで一時間程のターミナル駅。
ここで乗車する電車が来るのを待つ。

「ねえお兄ちゃん、あのボタンはなに？」

美羽が興味を持ったのはプラットホームの柱に付いているボタン――SOSボタンだ。

「ああ、あれか？」

「何のボタンなの？」

「あれを押すと地球環境維持に貢献できる。要するにエコだ」

「へぇ～」

「ハハハ、おいコウ、妹に嘘教えるなよ。
本気にしてるぞ」

ジョーがそう言って笑う。

「いや、俺は嘘なんかついてねえって！
現にあのボタン押したら電車が止まってエコじゃねえか」

「そりゃ、そうだけどさ……意味違うし。
それじゃ、ＳＯＳボタンのＳＯＳはどう説明する？」

「ストップ（Ｓｔｏｐ）・温暖化（Ｏｎｄａｎｋａ）・促進（Ｓｏｋｕｓｈｉｎ）だが？」

「上手いこと当て嵌めやがったな……」

突然、零雨がＳＯＳボタンに向かって歩きだした。
まさか……！

「ちょっ！零雨っ！やめっ！」

ボタンを押そうかとする間一髪のところで俺の手が零雨の手を弾く。

「……あのさ、これ冗談だから本気にすんなよ？」

「……？」

「いや、『？』じゃなくてさ……ちょちょちょいっと待ったやめろマジで！」

またもやボタンを押そうとする零雨を俺は慌てて羽交締めにして阻止。

「だから、冗談だからボタンを押すなって！
　押したら鉄道警察が手錠片手に追い掛けてくるだろうが！」

何もないのにＳＯＳボタンは押したら絶対にダメだ。
周囲の迷惑になるだけでなく、法にも触れる。
俺は零雨をみんなの元へ帰した。

それからしばらく電車を待つが、
というか予定に余裕がありすぎてかれこれ一時間近くホームにいる。
どうしてこんなに余裕を持たせてあるのかは本当に謎なんだが、
まあバタバタしているよりかはマシだろう。
俺もこういう何もしない待ちぼうけタイムは好きだから、嫌とは感じない。
何も考えずに見上げる、
黄色に少しオレンジがかった、やまぶき色の空に浮かぶ雲は風情があっていい。
やっぱり俺には時間という概念があまり好きではないらしい。
時間に追われることのない縄文時代とか、
弥生時代に生まれれば良かったと思う今日この頃……

美羽はただ暇でつまらないだけの時間に感じているようで、
俺の手を汗で湿った小さい手が手が握っているのだが、
その手が俺をあっちこっちに引っ張ろうとする。
動き回りたいらしい。
だが間違って線路に転落でもされたら大変なので俺がしっかり手綱

は持っておく。

麗香は八月ももうすぐ終わりだというのに、夏休み風情全開だ。
リボン付きの麦わら帽子をかぶって列車がホームに滑り込んでくるのを待っている。
チカはホームのひさしが作る日陰に隠れ、
西日がどんどん日陰を侵食していく度にどんどん残り少なくなっていく日陰へ逃げる。
そんなに焼きたくないならこんな計画なんて立てないで、
冷房の効いた家でゆっくりしておけば良かったものを。

匠先輩は耳に∩形ヘッドホンをつけてミュージックプレーヤーの音楽を聴いてノリノリ。
漏れてくる音にキンキンの高い声が混じっていることから、
やっぱ匠先輩の例の趣味の音楽なんだろう。
ジョーはというと、近くの売店で買ってきたペットボトルのお茶を少しずつ啜りながら、携帯電話をいじくっている。
零雨は俺に制止させられた後は大人しくなり、
ホームのベンチに腰掛けてどこか遠くを見るような目をしながら待つ。

美羽が俺の手を強くぐいぐいと引っ張った。

「何だ？」

「のどかわいた」

暑い中での水分補給は重要だということぐらい知っている。

俺は皆に断って美羽と売店に行く。

「えっと、そんじゃ美羽、
ジュース全般、コーヒー、おしるこ、コーンスープ以外のどれか好きなのを選べ」

「えーっと……ぜんぶお茶しかないじゃん！」

「スポーツドリンクは選んでいい」

美羽はうーん、と一通り考えた末、紅茶を選んだ。
どうしても甘いものが欲しかったとみた。
そこで俺は売店のおばちゃんにペットボトルの紅茶とお菓子をいくつか買った。
合計で六百円ぐらいの出費だ。

「お兄ちゃんだけ（お菓子買うなんて）ずるい！」

「バカ、俺一人で全部バカスカ食うかってんだ。
お前も食うに決まってるだろ」

久しぶりに空港で会った時のあの初々しさは何処へやら。
一月経ってみりゃ、こんなに図太くなっちまった。
俺の教育が悪かったのか？
……まあ、これぐらい気を許すぐらいになって初めて本当の兄妹って言えるんだろうが。

日も本格的に沈み始めようという頃になって、ようやく俺達が乗る電車がホームに入ってきた。
赤の匿体の長方形の電気機関車が尻尾を牽いて

タコ足配線のように複雑に絡み合うポイントをすり抜けて走ってくる。

俺達が乗るのは、寝台特急「あさがお」。
寝台特急は１９５０年代から７０年代までは人気があったそうだが、最近は衰退傾向にあるらしい。
俺達がこれから乗ろうという電車が、
十年後にはなくなってるかもしれないというのはちと寂しい気もするが、
輸送手段は時代とともに変化していくのは世の常。仕方あるまい。
なくなるのは惜しいからといって、まさか
（平安時代の輸送手段の一つである）牛車に乗って通勤・通学はしねえだろう。
それと同じだ。
ちなみにこの寝台特急「あさがお」、夏休み限定の臨時列車だそうだ。
俺達に割り当てられたのは、二人用の個室三つと、一人用一つの四つ。

切符の管理はすべて匠先輩がしてくれているのだが、
行きだけで一人当たり乗車券、特急券、寝台券その他諸々五枚の切符が必要で、
往復七十枚もの切符を管理しなくてはならないらしい。
考えただけで目が回るぜ……

「じゃあお前ら、俺は一人の部屋でいいから話し合ってどの部屋にするか決めな」

匠先輩は俺達にその五枚の切符を俺達に配ると、
自分の荷物をさっさと部屋に運び込んでしまった。

寝台特急の客車の通路は狭く、一人通るのがやっとなので、
他の乗客の迷惑にならぬよう、
俺達は二人用の個室に匠先輩以外全員集合、
部屋割りの臨時会議を開催することにした。
……それにしても今になって疑問に思うことがある。

なぜホームであんだけ待ちぼうけの時間があったのに、部屋割りの話を誰もしなかったんだ!?

そんな俺の愚考をよそに、会議は着々と進んでいく。

「まず、コウは妹と一緒じゃないとダメだろ?」

ジョーがまるで俺が美羽なしでは生きて行けないような言い草だったから、
俺はムカついて言ってやった。

「別にお前がこいつの世話するならそれでもいいんだぜ?
喉渇いただ、お腹すいただ、一緒に遊ぼうだ、
そういうのを一挙に引き受けてくれるなら逆に俺は大歓迎だ」

「そんなこと言って~、ホントは妹のこと好きなんじゃないの?」

チカまでそんなことを言い出した。

「実の妹が大好きとかそんな奴がいるならそいつの顔が見てみたいもんだ」

「えー！それを美羽ちゃんの前で言う？普通！」

「ハメやがったな……」

「お兄ちゃんは、美羽のこと……きらいなの？」

美羽は不安そうに俺を見上げる。

ああ嫌いさ、とスカッと言いたいところなんだが、

美羽にとってみれば、

旅行が始まって初日に「お前のことは嫌いだ」なんて言われたら、

旅行どころの問題じゃなくなるのは明らかだ。

「嫌いだったら、

お前がこっちにきたその日のうちにお前をお袋んところに返品してる」

「じゃあお兄ちゃんが、いま美羽といっしょにいるってことは、

お兄ちゃんは美羽のことがすきなんだね！」

「残念ながら正解のようでそれも違う」

「じゃあお兄ちゃんは美羽のことどうおもってるの？」

「さあな？」

「教えてよ～！」

「これは教えてもらうもんじゃない、自分で感じ取るものだ」

美羽にはこんな分かったような口を利いたが、正直なところ、俺にも分かんねえ。
ガキっぽいところは嫌いなんだが……
美羽のことどう思ってるの？と聞かれた時はドキリとした。
不満そうな顔をする美羽だが、それが俺が今できる最大限の解答だ。

「とにかく、コウくんは美羽ちゃんと一緒なんだよね？」

部屋割りの話に麗香が話を戻す。

「まあな」

「じゃあ、零雨と麗香、俺とチカの割り当てかな」

ジョーは零雨と麗香がいつも一緒に行動していることを
考慮に入れての割り当てを考えたようだが、チカがそれに反論した。

「えー！あたし『こんなの』と一緒に寝るとか有り得ないんだけど！」

「俺はコレ扱いかよ……」

「夜中に何してくるか分かったものじゃないわ！」

「ひでえ……俺は何もしねえよ……多分」

「ほら！今『多分』って言った！鬼畜！」

「そういう意味じゃねえって……」

俺にもそういう意味でしか取れなかったのだが、そういう意味とはどういう意味？

「そんなに不安なら今一人部屋にいる匠先輩をこっちに連れてきて、兄妹仲良く寝ればいいじゃないかよ」

「アレは絶っ対に嫌！
あんなオープンドスケベ、被害に遭う確率１２０％よ！
あいつのベッド下ほどおぞましいものはないわ」

「じゃあチカは誰とならいいんだよ？」

「男子以外なら誰でも♪」

「……なんかさ、俺が全力でのけ者扱いされてんのは気のせい？」

麗香がジョーの肩を持った。

「私はそんなこと思ってないから」

「……ごめん、逆に懐疑心が生まれたよ」

まとまりそうにもないから俺が重い腰を上げてやることにしよう。

「とにかく、このわがままブスワカメは女子と一緒になりたいんだろ？」

「誰がブスって？」

「いや、図形的なブスじゃなくて、もっと凶悪な性格の方のブスだ

から安心しろ」

「コウ……旅行が終わったらきっちり『精算』してもらうわよ」

「それはブスが治ってからにしてくれ。
お前がおしとやかになってから精算しようじゃないか」

「どういう意味よ！」

「性格が丸くなってからってことだ」

「あたしがおばあちゃんになってからとでも言いたいの！？」

「別に今から性格が丸くなるならそれでもいいんだぜ？
そっちの方が世のため人のためになる」

「悪者扱いしないでよ……」

チカの心理的耐久値の限界が見えてきたから、
ここらでジョーの仇討ちはやめておこう。

「で、だ。
チカと一緒になるとしたら……麗香がいいんじゃねえか？
零雨は基本的に何でもいいタイプだし。
零雨、異論はあるか？」

零雨は俺の問いに対して首を横に振って答えた。

「じゃあ部屋割りは決まったな」

俺と美羽、零雨とジョー、チカと麗香、そして匠先輩。

この四グループに決まった。

第４話－２　スパイラル・トレイン　１日目―旅立ち（後書き）

一応一泊目の部屋割り設定です。
ＰＣ完全製作（笑）なので、
背景を透過色にして緑の背景になじむようにしてみました。
＞ｉ２０１４６―１３３５＜
背景を青に変えても透過色だから大丈夫！
透過色って、便利ですね。

第4話－3　スパイラル・トレイン　1日目―緊急事態（前編）

電車が走り出してから約一時間。
すっかり日も暮れちまって、窓の外に写るのは俺の顔と街の夜景だけだ。

部屋割りが決まってからはみな大人しく部屋に篭ってるらしい。
電車ん中でドンチャン騒ぎするよりかはだいぶんとマシだが、
ビミョーな孤独感を感じているのも事実。
もちろん同じ個室に美羽もいるが、孤独感は一人だけの時に感じるもんとは限らん。

トントン、俺と美羽の個室のドアを叩く音。

俺が応対にドアを開けると、ドアを叩いたのがジョーだということが分かった。

「どした？」

ジョーはシリアス顔だ。
トランプしようぜみたいな雰囲気とは程遠い。

「あのさ、
これをお前（コウ）に言うべきなのかどうかは分かんねえんだけどさ、
なんか零雨の調子がおかしいんだよ」

「ほう、どんな？」

「零雨は部屋割りが決まって、

部屋に入ったら一言『しばらく寝る』とだけ言い残してすぐ寝ちまったんだよ」

「疲れてたんじゃねえの？
あいつも無表情鉄仮面顔してっけど、結構精神的に疲れてんだ、おそらく」

「そうか……俺の考え過ぎかな……？」

ジョーは首を捻る。
零雨が感情を持っていないことを知っているの人間は俺しかいない。
精神的に疲れてるとでも言っておけばジョーは渋々ながらでも納得するだろう。
だが、俺は納得できない。
彼女が疲れて寝るということは理論上ありえないのだ。

「納得できそうにない顔してるようだが……
他にどこか気になるところがあれば言ってみろ」

「一つだけなんだがな、零雨の寝言が気になる。
『六に移動』とか『消す』とか『直す』とか断片的に口走るんだよな」

「『六に移動』か……」

「ん、何か心当たりでもあるのか？」

「いや、何も」

「そうか……」

六に移動……恐らくステージ６のことだ。
消す、直すの言葉もステージ６のエラー修復のコマンドと考えれば納得がいく。
これは麗香に知らせた方が……

「悪りいな、どうでもいいこと」

「起きたら零雨に文句言ってやれ」

「ははは、そうだな。
だけど実際に言うとなるとなんか気が引けるな。
お前は何も思わねえんだろうけど」

「あいつが無口だからか？」

ジョーは、まあそんなところだ、と笑った。

「ところで、チカと麗香はどうしてる？」

「さあ知らんね。
なんか静かに雑談してるっぽい。
ごくたまにだけど二人の笑い声が聞こえてくるからな」

「ふーん」

「『ふーん』って、お前が聞いてきたことなのに関心薄いな」

「ついでに聞いただけだからな、あまり意味はない」

俺としては意味は大ありなんだが、ジョーに話すわけにもいかねえ。分かったことは麗香は現在の零雨の状態とは関係がないということだ。

「あー、ジョー、ついでに一つ頼みがあんだけどさ」

「ん、なんだ」

「俺、ちょっと自販機でジュース買ってくるから、その間美羽のこと見ててくんねえか？
目を離してる隙に車窓から身を乗り出して死にました、じゃ笑い話にもならねえから」

「身を乗り出してって、幼児じゃねえんだから……まあいいけど。つかさ、電車ん中に自販機あんの？」

「らしいぜ、何号車かは知らねえけど」

ジョーに美羽を任せ、俺は自販機ではなくチカと麗香のいる個室に向かった。
零雨をあのままブツブツ言わせるのは危険だと俺が勝手に判断したからだ。
俺はドアをノックする。

「はーい」

中からチカの声が応対した。

「俺だ、開けてくれ」

「だめー」

ダメって何だよ。
中からうふふと麗香の笑い声が聞こえる。

「何でだよ」

「だめー」↑チカ
「うふふ、だめー」↑麗香

「なぜ？」

「ここは女の子の秘密の部屋だからダメー」
「だめー」

はあ……何がしたいんだか……
俺にはそうやって困惑させてもてあそぶ女心が全く分かんねえ。
今度麗香に女性心理のアルゴリズムでも教えてもらおうか。

俺は仕方なくメールするため携帯電話を取り出した。
送信先は当然麗香だ。

【件名：1．7ｆ
本文：6のコマンドがうるさい】

大分ストレートな表現になっちまったが、
1．7f、つまりは零雨の本名の一部なんだが、
その意味を知るのは俺と麗香だけだし、
間違ってチカが見たとしても、意味のかけらも理解できないだろう。
送信はすぐに終わった。

するとすぐに麗香が部屋から出てきた。

「あれ、麗香どこいくの？」

「うん、ちょっとトイレ」

ドアを閉める間際にチカにそう答え、通路で待ってる俺を見つけると駆け寄る。

「ごめんね、大事な話だったのに、茶化したりして」

誰にも聞かれぬよう、声を落とす。

「どこにお前が謝るエッセンスがあんだよ。
反省する要素ゼロなのに謝るな」

「……うん」

うん、と言われて笑いたくなるがそこはしっかりとセーブし、本題に移る。

「で、零雨のことなんだが……」

「メールでだいたい予想がついたよ。

零雨ちゃんがステージ6の修復時にコマンドを口走ってるってことだよね？」

「あんなメールでよく推測出来たな」

「推測は私の得意分野……みたいだから」

「みたいって自覚ないのか？」

「推測とか比喩に関する学習量が他に比べて圧倒的に多いから」

「まあ、日本にいたらそうなるわな」

日本社会は推測社会と言っても過言ではないだろう。
いわずもがなをモットーに生活している日本人は、
推測や暗喩の理解なしでは生きていけない。
例えば京都のぶぶ漬、つまり茶漬けが良い例だ。
京都では訪問客にそろそろ引き上げてほしい時にぶぶ漬を出すらしい。
これは「そろそろ御引き取り願います」のサインで、
相手もそれを知っていることが前提で成り立つ水面下での会話の一つだ。

「ところで、ジョーくんは？」

「俺の個室で俺の代わりに美羽の面倒を見てる」

「そう、じゃあ個室には零雨ちゃんだけがいるんだね」

「そうなる」

「エヘッ、人払いしてくれてありがとう」

「やって当然だろ」

「やっぱりコウくんは優しいね」

「言われるほど俺は優しくねえよ」

俺の優しさ偏差値は全国平均で３０ぐらいだ。恐らく。

麗香は微笑を浮かべて零雨のいる個室のドアを開けた。

部屋に入ると、ジョーの言う通り、ベッドで仰向けに寝ている零雨の姿。

「ステージ６の修復って、前にやってなかったか？」

「私の管轄外だからよく分からないけど……
またエラーが出たのか、それとも前のエラーがまだ修復途中なのかのどっちかだと思う」

「どっちにしろあまりいい事態ではないな」

「でも、エラーとか、トラブルが起きなかったら、
私達の存在意義がなくなっちゃうから……」

「そうなったらそうなったで、また新しい存在意義を見つけだせば良い」

俺がそういうと麗香はえっ、と声を上げて驚き、澄んだ瞳で俺を見

つめた。
よっぽど俺の発言が斬新に聞こえたらしい。
そして俺を見つめたまま、顔を綻ばせる。

「コウくん、ちょっと手伝ってもらっても良い？」

「内容によるが」

「この部屋に誰も入って来ないように、通路で見張っててほしいの」

「鍵かければいいだけの話だろ」

「締め出すのはジョーくんがかわいそうだから、
彼が部屋に戻ってこようとしたら適当に時間稼ぎしてほしいの」

「いいぜ、通路で見張ってれば良いんだろ？」

「ありがと。
五分ぐらいで終わるから」

「……どっちかというと、俺よりお前の方が優しい気がするんだがな」

俺が部屋の去り際に言う。
別にお世辞かましてるんじゃなくて、俺の本心からの言葉だ。
俺より麗香の方が優しい、そう思うだろ？

通路に出る。
人はおらず、ただ鉄の車輪がガタゴトと鳴り響く音だけが通路を占領している。

通路の窓にはいつの間にかカーテンがかかり、外の状況は確認できない。
隔絶された細長い空間の中で、俺は携帯電話を取り出した。
別にメールをするわけでも電話をするわけでもない。
ただ今流行りの携帯ゲームとやらで遊んでみたくなっただけだ。

画面ばかりに気を取られて見張り（本業）を忘れることがないよう気をつけてはいたが、
ゲームとはなかなか熱中しやすいもので、気がつけば二十分も経っていた。
ちと遊びすぎたか……
反省して携帯電話を折り畳んでポケットの中にねじこむ。
それにしても麗香、遅せえな。
何かトラブルでもあったのか？

ドアをノックしてみるが、麗香の反応はない。

「麗香？」

……無音。

「麗香、時間かかりすぎじゃねえか？」

……静寂。部屋の中から反応はない。
チッ、中で何やってんだ。

「おい、入るぞ」

やはり返答はないが、俺は断ってんだ。問題ない。

ドアを開けると、零雨のベッドの縁にもたれ掛かって魂が抜けたように停止している麗香がいた。

……何が、どうなってんだ？

これは異常、その一言に尽きる。

俺は反射的に部屋のドアの鍵を閉めた。

「おい麗香！こんなとこで呑気に寝てんじゃねえぞ！」

俺が麗香に揺さぶりをかけても人形のように反応しない。

なぜだ、なぜ麗香が停止している！？

「麗香ぁっ！！！」

完璧なまでのハト派を自称する俺だが、この場合はやむなしだ。

俺は麗香の頭を一、二発殴った。

麗香の頭は意外に硬く、殴った拳が痛い。

「起きろっ！仕事サボってんじゃねえぞこの石頭！」

ふと見上げた瞬間、

カーテンの閉まっていない窓ガラスに何かが写ったような気がした。

……俺の背後に、誰もいないはずの人の姿。

それが、一瞬だけ見えたような気がした。
性別は分からない。
ただ、セミショートぐらいの髪の長さの高校生っぽい姿をした誰か。
俺は部屋の中をぐるりと見渡す。

いない。

いや、鍵はさっきかけたばかりだ。
この部屋に俺達以外の人間がいるわけがない。
それに、さっきのは一瞬見えた≦気がした≧だけに過ぎない。
俺の思い違いだろう。

しかし、「火のないところに煙は立たぬ」という諺も……どうでもいい！！

携帯電話が俺に着信を知らせた。
送信元はジョー。

【件名：（件名なし）
内容：遅いけどどうした？】

やばい、ジュースを買いに行くにしても時間がかかりすぎてる。
しかし、ジョーのいる部屋に戻るわけにもいかない。

とにかく時間がない！
どうやって麗香を正常な状態に戻すのか、それを考えねば！

第４話－４　スパイラル・トレイン　１日目―緊急事態（中編）

落ち着こう、まずは落ち着いて考えよう。

こういう時は状況整理が重要だよな。うん。
まずは、麗香の状態をしっかりと確認して、対処はそれからだ。

麗香の呼吸を確認しようと試みるが、
何度確認しても息をしていないという残酷な結果しか出てこない。
呼吸停止状態といっていい。

呼吸と同時に確認するものといえば……あー、アレだ、あの、
その、そう、脈だ！

俺、慌て過ぎだ。
ちょっと深呼吸して心拍数を落とそう。
１、２、３――――――よぉし、そうだ……
落ち着け、慌てても冷静な判断はできないからな……
ましてや脈拍なんて神経を集中させないと分からんから、まず落ち着け……

……よしっ！

俺は麗香の首筋に手をそっと延ばす。
……うぉっ！
右足に何かが当たる感覚とともに音がっ……て、携帯かよ……はあ、
焦るぜ。

誰だよ、こんな時に電話かけてくるやつ……ジョーか。

――ピッ

「もしもし？」

《コウ、遅いけどどうしたんだよ、さっきメールしたけど返信来ないしさ》

「あ……ああ、悪い、気がつかなかった。
――ていうか、今それどころじゃねえんだ！」

あっ、つい本音が……

《それどこじゃないって、どうしたんだ？》

「あ、それは……だな……」

やべえよ、それどころじゃないとか言うんじゃねえよ、この脳足りん野郎！

《なんかやばそうだけど、救援に行こうか？今どこにいる？自販機前か？》

「来なくていい！つーか来んな！！」

《そうか？ものすごく焦ってるようだけど》

「これは俺一人でしか対処できない問題だ、お前が来てもどうにも

ならない！」

《……何があったんだよ？ちょっと説明してみろ》

説明とか無理ィィィィ――――！

……あ、閃いた！この手なら行ける！

ピンチな時に速攻で知恵を授けてくれた神様サンクス！

「――いいか、話すぞ。落ち着いて聞いてくれ」

《ああ。というかお前が落ち着け》

「実は俺は今、腹が痛くてな、トイレに行きたくてたまんねえんだ」

《……行ってこいよ》

「ああ、だから今トイレ前にいるんだ。

……だがな、一つ問題が」

《どうしたんだ？》

「俺がトイレに駆け込む直前にオッサンが先に入っちまって……

今もそのオッサンがトイレから出てこない」

《……汚い話、オッサン、気張ってんのか？》

「どうやらそうらしい。

俺も早く気張りてえ……」

《確かに、それなら俺が救援に行ったところで『……で？』ってなるだけだよな》

「そういうことだ、電話切るぞ！」

《最後に一つ》

「なんだ？簡潔に言えっ！」

《……幸運を》

ブツッ、ツー、ツー、ツー、ツー……

……ブハァー、危なかったけど何とか乗り切ったぜ……
話の整合性も取れたし、満点クリアだ。

さっと携帯を元のポケットにしまい、麗香の首筋を触る。

……脈なし。

瞳孔の開きは……はあ、開いてやがる。
普通はここで死亡と判定するんだろうが、相手はプログラムだ。
身体は死んでいるように見えても、
本体のプログラムが存在するうちは死んだことにはならない。
身体が死んでも、本体さえ残っていれば、
というか本体は物理的に存在してないわけだから破壊のしようがないが、

とにかく身体を失ってもまた新しく身体を作り出すことができる。

……ということは、これは本体に異常があったということか。

考えてみれば、怪しい人影っぽいのを見たような気はするが、

中には誰もいなかったわけで、ドアの前の通路で俺が見張っていたから、

第三者がこの個室に入ることはまず有り得ない。

いくら俺が携帯ゲームに夢中になっていたからといって、

狭い通路でドアを開ければ視界に入り、気がつく。

さて、状況は確認できた。

ここはステージ6のエラー修復に向かっている零雨を起こすべきだろう。

「零雨、出張中悪いが、起きてくれ。緊急事態だ」

……。

「もしもーし、起きろ、お前の相棒がトラブってるぞ」

……。

「呑気に寝てんじゃねえ！起きろ！」

そこまでしても起きない零雨に、

俺は――本当はこんなことはポリシーに反するからしたくないのだが、零雨をたたき起こすことにした。

零雨の頭をゲンコツで数回殴る。が、起きない。

……俺がここまでしてんのに起きてくれねえのかよ。

まあ、これで零雨が起きるようなら、ジョーも俺のところに来ないよな。
俺が零雨を殴ったせいで乱れた髪を直しながら辺りを見回す。
零雨が起きない以上、この問題は俺が何とかしなくてはならない。
しかも迅速に。
何かいい方法はないか……
俺の家ならまだしも、道具が少ないこの状況だ。
ハードルはかなり高い。

零雨の荷物が目に入った。

そういえば、なんかやたらいろんな事態を想定した装備をして来たとか言ってたな。
こういう事態も想定してるのだろうか？いや、してないはずはない。
何か使えそうなものがないか、ちょっと失敬して探させてもらおう。

まずはこのベージュのショルダーバッグから捜索。
衣類、バスタオル（こいつらも風呂入るんだな）、家の鍵らしきもの……
それぐらいで、得に使えそうなものはなかった。
バスタオルには実は怪我を一瞬で回復させる特殊な機能が備わってるとか、
そういうビックリアイテムの可能性も否めないが、そんなことを考えていてはきりがない。

バスタオルはバスタオルとして考えよう。

今度はこの黒のキャリーバッグ（デカブツ）を調べてみよう。
このキャリーバッグを開けるためには、
どうやら四桁の暗証番号を正しく入力する必要があるようだ。
こういうのは体当たり戦法で、
一万通り全部の暗証番号を試してみるのがもっとも確実なのだろうが、
そんな時間はない。
零雨が設定した暗証番号を推測せねばならない。
俺はこの類の推測は大の苦手なんだよな……
俺の思考回路の中に零雨の思考回路が内包されているならまだしも、
何を考えているのかすら分からないと常日頃嘆いている相手の暗証番号だ。

ううむ……暗証番号なあ……
もし零雨がこういう事態を事前に想定していたならば、
暗証番号も俺が推測できそうなものになっているに違いない。
もし俺が零雨ならば、暗証番号はチカやジョー達には絶対に分からないものにする。
あらゆる事態を想定したものを持って行くとなると、
なかには開けてもらっては困るものも入っているだろう。

ということは、俺と零雨と麗香の三人だけしか知り得ない暗証番号の線が高い。
俺と零雨と麗香の三人だけが知っている共通の事項はそれほど多くはない。
世界の構造、彼女達の目的、本名……
一番暗証番号に適しているのは本名だろう。

ｓ０－ｖ１．７ｆもしくはｓ０－ｖ３．０ａのどちらかなんだが……
数字は三つしか入っていない。

アルファベットのどれかを数字に変換できればちょうど四桁になる。
ということは最後のアルファベットを数字に変えてやればいいわけだな。

確か、ｆは６を表すとかそういう意味合いだった。

０１７６

ベターなアレだけど、こいつで開くか？
開かなかったらその時はその時で考えればいい。

……カチャ。

拍子抜けだ、まったく。０１７６で大人しく開きやがったぜ。
俺って実はこういうの苦手とか言いつつ、潜在能力は備わってたりしてな。
……いかんいかん、自惚れる時間があるならとっとと麗香を助けろよ、俺。

こっちのバッグの中にはいろいろ怪しいものが沢山入っている。
メインはショルダーバッグで、サブがこのデカブツキャリーバッグってわけか。
大きさ的に逆だろというツッコミはともかく、使えそうなものを見

つけた。
ノートパソコンだ。

システムというのは黒好きなのだろうか、
ススでもついたのかと勘違いしそうなほどに
真っ黒のノートパソコンがバッグの中に入っていた。

相手がプログラムならば、それを直すのもプログラムを介して、というわけだ。

ノートパソコンを広げてみると、やはりメーカーやブランド名はどこにもついていない。
パソコンの扱いはネット閲覧と軽い文章（零雨と麗香の観察日記）を作成するぐらいで、
正直操作に自信がないのだが、やるしかない。

電源ボタンを押すと、黒い画面に白文字が浮かんだ。

Ｉｎｐｕｔ　ｓｅｃｕｒｉｔｙ　ｃｏｄｅ　－＞　＊＊＊＊

インプットセキュリティーコード……暗証番号を入力しろということだよな？
＊が四つあるから四桁だ。
適当に０１７６と入力して、Ｅｎｔｅｒボタンを押してみる。

すんなりとパスしちまったが、コレで良かったんだよな？

次に現れたのはログインのユーザーを選択する画面。
ここも黒画面に白文字だ。
ＰＣが苦手な人には嬉しいカーソルが出現したので、

タッチパットで操作が出来るようになった。
で、ログインするユーザー名なのだが……なぜ俺の名前が選択肢にある？

＊Ｌｏｇｉｎ＊

Ａｄａｃｈｉ　ｍｉｔｓｕｈｉｄｅ
０１７６
０３０１

他のユーザー名は数字になっている。
０１７６……零雨
０３０１……麗香
そういうことだろう。
一応俺の名前があるわけだし、そっちのユーザー名を使わせてもらうことにしよう。
俺のユーザー名をクリックすると、
英語での表示から一変、慣れ親しんだ日本語の表示に変わった。
最初から日本語にすれば良いのに、なぜわざわざ英語表示させるのか……疑問。

次に接続先を選べと言われた。
「ステージ０」と「接続しない」の二つが用意されていたから、
とりあえずステージ０の方を選択しておいた。

ハードウェアアクセラレータ起動中

起動率―■■■■■■■■■■―１００％
ハードウェアアクセラレータ起動完了
プライマリシステム３．０ａと同期中
同期失敗
セカンダリシステム１．７ｆと同期中
同期完了
接続の許可申請送信中．．．―

選択した途端、このようなよく分からんメッセージ的なものが現れた。
ハードウェアアクセラレータって何？
勝手に起動しちゃったけど大丈夫なものなのか？
同期失敗とか出てるしさ。
……ここに来てどこか間違えたのではないかと不安になってきた。
だいたい、これで麗香が助かるかどうかも分からない。
ここまで来て無駄なことやってましたとか、
チャンチャン♪で済むような話じゃないところもまた怖い。
そうこうしているうちに１．７ｆ（多分零雨のこと）から接続の認証を得て、無事？に繋がった。

今度は何やら沢山の選択肢が出てきて、
どのボタンもよりどりみどりの押し放題的なことになったんだが、
どのボタンを押せば良い？

ヒントになるかどうかは分からないが、画面の左下に、何やら情報が流れている。

アクセス元：ステージ２５
アクセス先：ステージ０

これを見て、俺は今やっていることの重大さを理解してしまった。

アクセスしてるのはステージ０。
ステージ０という管理領域の《異世界》に遠隔操作でアクセスしている。
今、ステージ２５を含めて３０ほどの異世界がこのステージ０によって管理されている。
つまり、俺が適当にポチポチとボタンを押しまくって、
変なボタンも知らず知らずのうちに押すとか、そういうことにもなりかねない。
ステージ０を破壊するようなことがあれば、
操縦の効かなくなったバイクのように、この世界全体が一斉に崩れ出すことになる。
もちろん、その影響は俺達にも降りかかってくる。
恐ろしいのは、どのような形で俺達に影響を与えてしまうのかが分からないことだ。

麗香を助けだそうにも、下手に動き回れば俺達、ひいては世界が危ない。
麗香救出作戦はここで俺のチキンさ故に暗礁に乗り上げてしまった。

第４話－５　スパイラル・トレイン　１日目―緊急事態（後編）

今までは適当に操作してここに来たが、ここからは失敗は許されない。
だがな……どのボタンを選択すれば良いのかが分からん。

やたらと選択肢があるから困る。
いくつボタンがあるのか数えてみると、十六もある。
どれもやたらと小難しい単語が並んで、
中には何のボタンなのかまったく理解できないものさえある。

どうしたものかとしばらく悩んでいると、ＰＣからピーという音が。
もしかして制限時間内にどれか選ぶ必要があったのか！？

……と、思ったらなんてことはなく、右下に「新着メッセージ」の文字。
新着メッセージ？いや、冷静に考えれば明らかにおかしいだろ。
俺が今日初めてログインしたのだ、新着メッセージが来るはずがない。
大衆向けのメールサービスならば「ようこそ」メールが来ることも有り得るが、
ステージ０へのアクセスが許可されているのは、
推測ではあるが俺と零雨と麗香の三人だけだ。
ということは、
俺にメッセージを送り付けてきたのは零雨か麗香のどちらかと限定できる。
ああ、あとＵＳＥＲの可能性もあるか。
とにかくメールはウィルスの危険も考えられなくはないが、開封してみることにする。

【件名：０１７６（Ｓ）
内容：なぜここに来た？
ここは世界の中枢部分。
用がなければ早急にログアウトしろ。
返信無ければ百八十秒後、接続許可を取り消す。】

零雨……からのメッセージ？
強硬な姿勢ではあるが、文体はどこか零雨っぽい。
０１７６って書いてあるし、零雨なんだろう。
これはチャンスだ！零雨と意志疎通が図れる！
メールを開けるかどうか考えていて時間を潰してしまったがために、残り時間は一分あるかないかぐらいしかない。急いで返信をしなくては！
えーと、返信ボタンはどれだどれだ？
あ、あった！ぽちっと。

【件名：麗香が……
内容：動かなくなったから助けようと思ってきた】

よし、送信！

二秒後、返信が来た。早っ！！
メール相手が相手だから納得はいくのだが、一瞬で返事が返ってくるのはやはり不思議な感じがする。
０１７６の後についてる（Ｓ）が地味に気になるが、それはあとで聞こう。

【件名：０１７６（Ｓ）
内容：ステージ６の修復が完了した。
そっちに戻る。
何もしないで待て。】

これを読み終わった途端、人の気配がしてふと顔を画面から引き離すと、
ベッドの上で上半身を起こして俺を見ている零雨がいた。

「あ……お帰り」

「……。」

「すまんな、勝手だけど、零雨（お前）の荷物いろいろ探させてもらった」

零雨は澄んだ目で俺をじっと見つめて言う。

「……あなたは構わない。
……ただし、中身については……極秘事項として……行動してほしい」

「そりゃ当然だ、いちいち言わなくても分かる」

「……そう」

「ところで零雨、さっきのメールの件名についてた（Ｓ）が何となく気になったんだが、ありゃなんだ？」

「……Ｓｅｃｏｎｄａｒｙ（セカンダリー）Ｓｙｓｔｅｍ（システム）の……頭文字」

「そのセカンド何とかっていうの「Ｓｅｃｏｎｄａｒｙ　Ｓｙｓｔｅｍ」」

「……悪い。
で、そのセカンダリーシステムとやらはどういう意味？」

「……『二次システム』」

「二次？」

「……一次システムは麗香。
彼女が……あらゆる事象に対しての……決定権を持つ。
私は……彼女のバックアップ。
……だからセカンダリシステム」

零雨はそう説明した。
音楽祭で零雨がチカと衝突したとき、その尻拭いをしたのはどこの誰だ？麗香だろ？
バックアップされてんのは零雨の方じゃねえかと、
満を持して渾身の突っ込みを入れたいところなのだが……我慢だ、我慢。

「ところで、零雨。
麗香は今どういった状態なんだ？」

零雨はおもむろに俺が操作していたパソコンを取り上げると、
なにやらカタカタとキーボードで入力を始めた。
そしてくるりとＰＣの画面を俺に向ける。

「……彼女の状態。」

そう零雨は言った。

プログラム名　ｓ０－ｖ３．０ａ
稼働率　　０％
稼動状態　　緊急停止
備考　　要再起動（自己再起動機能：切）
　　記録領域にデータ不整合のエラー

……。

麗香に一体何があった？

プログラムが緊急停止するということは、相当重度のトラブルがあったと推測できる。

それにしてもなぜ自己再起動機能が無効になってるのかが不思議だ。

もしもチカやジョー、匠先輩の目の前で緊急停止してぶっ倒れることがあれば、

それだけでも大惨事といえば大惨事なのだが、

きちんと自力で再起動できるならば「ちょっと立ちくらみしちゃって……」とでも

適当に言い訳できるだろうに、なぜ自己再起動機能を有効にしなかった？

「……零雨、麗香を起こせるか？」

「……安全を確認するまで……待って」

零雨はパソコンのキーボードを叩きだした。
まあそうだろう。
何も問題がないのに緊急停止することはまずない。
そんなバグがあれば、麗香は頻繁に再起動しなくてはならなくなる。

「零雨、お前ならパソコンなんて使わなくても大丈夫だろ?」

キーボードを叩きながら零雨はうなずく。

「何でパソコンを使うんだ?パソコンを使ったほうが効率がいいのか?」

零雨はキーボードを叩きながら俺の目を見る。
さすがはブラインドタッチ入力の達人。

「……かえって効率は落ちる」

「ならなぜパソコンを?」

「……あなたに現状を正しく理解してもらうため。
このソフトウェアは……麗香が作成した。
……語彙数の少ない私よりも……多彩な表現が可能な麗香が……
このソフトウェアを
作成したことで、……私の口頭での発信より、……コンピュータの画面を通して……
発信するほうが……あなたが齟齬なくより正確に……理解できると考えた。
……また、人間は耳で情報を受け取るより……視覚的に情報を受け取る……ほうが
より得意だ……という……データもある」

「それを一言で言えば？」

零雨ははたりとＰＣのキーボードを叩くのをやめた。
そしてうつむいて黙り込む。
俺の質問に対して最適な答えを探っているのだろう。
少しして零雨は顔をあげ、再び視線を俺に向けた。

「……百聞は一見に如かず」

「それでいい。
長々と説明するよりそっちの方が端的で分かりやすい」

零雨は再びＰＣの画面に視線を戻した。

……五分が経った。

「零雨、まだ終わらないのか？」

「……彼女のプログラムの……動作履歴に……今回の異常に該当する記録が……存在しない」

――つまり、何も異常がなかったのに停止したと？

俺がそう聞くと、零雨は首を横に振った。

「……ただ、彼女の動作履歴は……不正。
途中から……データが欠損している。
……原因は不明」

「それは、今回麗香がこんな状態になるまでの途中の道のりが“消えた”ということか」

「……そう。
……欠損箇所を……詳述する。
……今日の正午から……現在までの麗香の記憶が……存在しない」

「つまり――記憶喪失、なのか？」

「……非常に近い」

原因は分からないが、麗香は記憶喪失もとい記録喪失状態にある。
それは、麗香が今日俺の家に集合した時に、
チカからもらった日焼け止めのこと、駅のホームで待ちぼうけしたこと、
部屋割りで一悶着（？）したこと、同じ個室になったチカと談笑していたこと、
そして、麗香が今現在、零雨とジョーの個室にいる理由も、覚えていない状態だということだ。

「問題はそこだけなのか？」

零雨はゆっくりと頷く。

「……実のところ、俺も麗香ももうあまり時間がねえんだ。
俺はジョーに、麗香はチカに、それぞれ断って部屋を抜け出してきた。
それからもう結構時間が経ってる。
チカやジョーに怪しまれる前に、さっさと部屋に戻っておかねえとやべえんだよな」

「……やべえ？」

「ああ、悪い、問題が起きそうって意味だ」

「……学習した」

「でだ、これまた急かすようで悪いんだが、
できるだけ早く麗香を起こしてくんねえか？」

「……起動だけなら数秒」

零雨は再びＰＣのキーボードを高速で叩きだした。
そして最後に、キーボードの中で一番大きく、
よく使われるボタン――Ｅｎｔｅｒボタンを一段と大きく、バチン、
と叩いた。

「……麗香に何か問題があれば……私に連絡して。
いつでも……対応する」

「ありがとさん」

俺がそういい切った時、麗香が目を覚ました。

「おはよう、麗香。
目覚めの気分はいかがかな？」

「……あれ？ここは……どこ？」

「寝台特急、電車の中だ。
もうとっくの昔の話になるが、日も暮れたぜ？」

「……ぇっ、えっ、ええ――っ！！」

麗香はあわてふためき、カーテンのかかっていない暗闇の車窓を見て愕然とする。

「どうだ？タイムスリップした気分は」

「えっと、えっと、なんで私ここにいるの？
ついさっきまで私、旅行かばんに服詰め込んでて……
それで……今日着て行く服何がいいかなって考えてて……それで……」

「はいはい、ご苦労さん」

麗香は改まって正座し、俺を見上げる。

「ねえ、コウくん、真剣な質問なんだけど、
この電車は行きの電車？それとも帰りの電車？」

「安心しろ、行きの電車だ」

「よかったぁ～、初めての旅行だから、すっごくた楽しみにしてたの。
気がついたら家路だったとかじゃなくてよかった～」

「金出して旅行行って、家路の記憶しか残ってないとか寂しすぎだろ」

ホッと胸を撫で下ろす麗香に、零雨が一枚の紙を渡した。
そこにはカラフルなＱＲコードみたいなものが紙一面にふちなし印刷されている。

「……本日正午以降の、私が知る……あなたの言動および……おかれた環境のすべて」

「あ、ありがとう」

「零雨、その紙とインクはどこから？」

「……合成した」

ああ、そうですかい。

「麗香、現在時刻なんだが……」

「大丈夫、ここ紙に書いてあるから」

「ああ、そう」

「……ねえ、コウくん、一つお願いがあるんだけど」

「何だ？」

「今晩、一緒に寝てくれる？」

「……は？それって誘ってんじゃねえだろうな？」

「違うよ！零雨ちゃんが、
『万が一同じことが起きたとき、迅速に対処できるよう、
しばらくの間コウの近くにいろ』って。
ほら、ここに書いてあるでしょ？」

その奇妙な言語、というか模様で描かれた紙、
お前らは読めるんだろうが、当然平凡人の俺は読めねえ。

「すまんな、読めん」

「あ……そっか」

「でもそうなると美羽はチカの部屋と一緒になるよな？
チカ本人が美羽と寝ることを許してくれるなら俺は構わないんだが」

「……そうだね」

「ま、今回のお願いについては特別に俺が善処してやる。
お前はチカの所に戻っておけ。
チカが心配してるぞ」

麗香は俺を見てクスクス笑う。

「……なんだよ、文句あんのか？」

「コウくんもやっぱり、男の子だね」

「はあ！？誰がお前なんかに――！」

第4話－6　スパイラル・トレイン　1日目―答え合わせ

一通り麗香に付き合ったあと、俺はすぐにジョーのいる俺の部屋へと飛んだ。
ドアを開けるとジョーがお菓子をポリポリと食している。

「おう、コウか。トイレ、間に合ったか？」

「間に合ったに決まってんだろ。
……で、そのお菓子は……？」

「ああ、ちょっとおすそ分けさせてもらった。
お菓子見てたらつい腹が減っちまってな」

「誰におすそ分けしてもらったって？」

「……。」

ジョーは口を閉ざした。
なぜかはもう見当がついているだろう。
今ジョーが食ってるのは俺が出発前に駅の売店で購入したお菓子だからだ。
俺はジョーに迷惑かけたとは思っていたから、
菓子の一つや二つぐらい好きなのやっても良いかなとは思っていた。
だから別にジョーが食ってても、多少イラリとするが、咎める気はない。

「別に菓子食っても何も文句は言わねえけど、お前晩飯残すなよ？」

「メシ直前におやつ食った子供に親が言う常套句を……
つーか怒らないんだな。てっきり小言を言われるかと思ってたんだけど」

「別に怒りはしねえ。美羽の面倒な面倒を見てくれた礼だ。
勝手に忍び入ってポリポリしてたら話は別だがな」

しばらく俺の菓子を食って俺と談笑していたジョーだが、話が一段落すると手を叩いた。

「……そんじゃ、俺はこれでおいとまさせていただくことにするよ。
じゃあな、美羽！」

ジョーが立ち上がり、ドアに手をかけて振り向いて美羽に挨拶する。
美羽はニコニコしながらバイバイ、と手を振ってそれを見送る。
美羽、お前はホント誰とでも仲良くなれるんだな。
まるで白米だ。明太子ともふりかけとも納豆とも合う、万能食品白米によく似ている。
栄養的には偏っているものはさておき、
何と一緒になってもうまく味が調和する食品はそうそうないだろう。

ただし、「牛乳と白米」、この組み合わせだけは最悪といっても過言ではない。
俺がここで一人暮らしを始める前、つまり俺がまだ実家で暮らしていた時の話だ。

当時小学生だった俺は、青鼻垂らしたクソガキ真っ盛り。
家で大人しく遊んでることの方が多かったが、
たまに友人から遊びに行こうぜと近所の公園に誘われることがあった。
めんどくさいと拒否する俺を「子供はは大人しく外で遊びなさい」と、
論理的に明らかに矛盾している乱暴な理論を親から強行突破的に納得させられ、
家から引っ張り出され、友人の待つ公園に引きずり出された記憶がある。

まあそんなどうでもいい俺の黒歴史は置いといてだ、
俺が牛乳と白米という、
素晴らしほどにクソッタレな組み合わせと出会うことになったのは、
小学校の給食の時間のことだ。

シチュエーションとしてはごくごく単純なもので、
あるクラスメイトAが誤って俺の牛乳をこぼし、
白米に「ダイレクト☆イン」したことがきっかけだ。

お茶漬けの牛乳版という前衛的な組み合わせに当時の俺は、
深いインスピレーションを感じられずにはいられなかった。

これは新しい。白米＋牛乳。
なぜ誰も思い付かなかったのだろうか、と。

「ごめんね」と半泣きになりながら平謝りするクラスメイトAをよそに、
俺の思考はこの純白の未知の食品に対する興味のみに注がれ、ついに

言ってしまった最悪の一言。

「気にすんなよ、こうなったのは仕方がないし、俺がちゃんと食うからさ」

そう、自らこの未知のバケモノと戦うことを宣言してしまったのだ。
牛乳飯を鼻に近づけると、漂ってくる牛乳の独特の匂い。
に、匂うのは仕方ないさ、と、当時の俺は思い切ってその飯を口に頬張ってみる。
それは平謝りのクラスメイトAに
俺は大丈夫だから気にするな、ほら見てみろ、食ったけど何の問題もないぞと
行動で示す意味も含んでいた。

いたのだが……

その味と食感はまさに前衛食品の名に相応しいものだった。
常人は、いや、人類はこの組み合わせを発見してはならない、幼いながらもそう悟った。
白米の風味と牛乳の風味の相乗効果で生まれた、まるで濃縮された米の研ぎ汁のような風味は、
ブヨブヨになった白米と牛乳に含まれる脂肪分とが相成すなんとも言えない、
敢えて言うならゲテモノと称される類に分類される食感との間でさらに相乗効果を発揮し、
俺の味覚を強烈に刺激した。

口に含んだものを吐き出しそうになるが、

クラスメイトAがいる手前、「やっぱ無理」とはなかなか言いづらい。
ギブアップすること、それはお前のせいで飯が食えなくなった、と相手に面と向かって言うことだ。
へらへらしている相手ならまだしも、半泣きの相手にそれは傷口に塩というやつで、
チキンな俺には到底そんな相手をズタボロにするような発言は出来ず、
どうしようもなくなった俺は意を決してそいつらを喉の奥に流し込む。

白米も牛乳も胃袋の中に入れば全部一緒くたになるじゃねえか、
一緒くたになるのがちょっとばかり早過ぎただけで健康上は何の問題もない。

確かにそうだ。
だが、頭では分かっていても嫌なものは嫌だ。
しかし言ってしまった手前、食べる以外どうすることもできない。
俺は心の中で自分を呪いながらそれを完食した。

と、まあこれが俺と白米＋牛乳との出会いだったわけだ。
シチュエーション的には罰ゲームで食わされるより劣悪だったのだが、
俺にしてはよくぞ完食したものだと思う。

「ねえねえ、お兄ちゃん、お姉ちゃんのところに行っていい？」

美羽の一言が俺を現実に引き戻す。

「姉ちゃんって、誰？」

「チカ姉ちゃん」

「ほう、麗香じゃなくてチカか」

「うん、美羽のね、お話をね、聞いてくれるから」

「なるほど」

「麗香姉ちゃんはね、お母さんみたいでやさしいけど、美羽がお姉ちゃんのこときいても、『ひみつ』ばっかり言って教えてくれない」

彼女には秘密が多いのは明らかなんだが、
ねつ造でもいいから適当に質問に答えてやればいいものを、
正直な性格のせいか、秘密のことはストレートに秘密って言っちまうみたいだな。
確かに何が好きだ、嫌いな食い物はなんだ、
という質問をよくするガキには答えられる質問が少ないのかもしれない。

ついでにジョーと零雨についてどう感じているのかも聞いてみようか。

「ふ〜ん、じゃあさっきの兄ちゃん（＝ジョー）は？」

「おかしを分けてくれたり、話しかけてきてくれたり、優しいんだけど、
『お兄ちゃんのこと好き？』とか、『いつも何して遊んでるの？』とか
聞いてくれるんだけど、お話がすぐおわっちゃうからあまりおもしろくない」

厳しい評価だな。
ジョーはジョーなりに気を遣ってるみたいだが、
うまく話を繋げられずに沈黙が続いてるパターンか。
それを「おもしろくない」と……
別にそういう複雑な心理がまだ理解できないガキだからまだ許せないことはないが、やっぱ厳しいな。

「そうか……じゃあ零雨はどうだ？」

「本当のことというとね、あのお姉ちゃん、怖い」

「どこが？」

何となく分かるが一応聞いておこう。

「美羽がね、話しかけたらね、美羽のことじーっと見てくるの。
でね、美羽が何を聞いてもね、何も答えてくれないの。
たまにね、『言えない』って答えるだけでね……」

「――話を聞いてくれないと？」

美羽は頷いた。

「でもね、美羽ね、みんなのこと好きだよ。
ジョー兄ちゃんも、零雨姉ちゃんも、
美羽とお話が合わないだけで、やさしいから」

「なるほどな……」

コイツはコイツなりにいろいろ考えているらしい。

「でね、お兄ちゃん、チカ姉ちゃんのところに行ってもいい？」

「いいが、俺から一つ提案があるんだが、聞いてくれるか？」

「何？」

「どうせならチカと今晩一緒に寝たらどうだ？
たまには俺と寝るんじゃなくて、お前の好きな奴と寝ても良いんじゃないか？」

「お兄ちゃんはそれでいいの？」

「別に構わねえよ、お前がそれでいいならな」

チカと一緒になってる麗香を俺の個室に呼ぶためには、
美羽と麗香をトレードする必要がある。
俺にとっても、美羽にとっても、麗香にとってもこの話は悪くはないはずだ。
チカも美羽が一緒に寝ることを希望しているというならば、断る訳にはいかないだろう。
本当は、俺が麗香と一緒に寝たいと申し出てもいいのだが……かなり気が引ける。
第一、俺が言うんじゃチカが嫌がるに決まっている。
確実に目的を達成するために、悪いが、ここは美羽を利用させてもらうことにする。

「じゃあチカ姉ちゃんと寝る」

俺は美羽と共にチカと麗香のいる個室に向かった。
ドアをノックすると、僅かにドアが開き、その隙間からチカが俺を確認する。

「……何？」

「あのさ、コイツがやっぱお前と一緒に寝たいっつって聞かねえんだ、
悪いが、一緒に寝てやってくれねえか？」

それを聞いたチカはドアを開いて俺の隣の美羽を確認する。

「あたしは別にいいんだけど、麗香はどうするの？
ここに三人は無理だから、麗香がコウの部屋に行くことになるでしょ？
だから美羽ちゃんのお願いが叶うかどうかは麗香次第になるけど、それでもいい？」

「ああ、悪いが聞いてくれないか」

チカが美羽に目を向けると、美羽も顔を上げる。目が合う。
チカはニッコリと微笑む。

「美羽ちゃん、一緒に寝られるかどうか、麗香に聞いてみるから、ちょっと待っててね」

そしてドアは通路にいる俺達を残して静かに閉まる。
規則的に振動する車内で、俺は美羽の手を繋いでその結果を待つ。
麗香は零雨から俺と一緒にいろと言われてる。
だから麗香がチカに「いいよ」と返事する予想が、いや、予定と言った方がいいかもしれん。
とにかく分かりきっていた。

ドアが開いた。

「麗香が『代わってもいいよ』だって。
それじゃあ、美羽ちゃん、荷物入れ替えよっか」

チカと俺が手伝ったこともあり、荷物の入れ替えは滞りなく進めた。

「麗香に変なことしたら、あたしが許さないからね」

入れ替えの途中、チカに釘を刺された。
俺が下心丸出しの変態に見えるなら、今すぐ新しいメガネを買えと言ってやった。
するとチカはむっとした表情を浮かべるかと思いきや、プッ、と笑った。

「なんだよ、何か変なことでも言ったかよ」

「……なんでもない。
あんたなら麗香を預けても大丈夫そうって思っただけ」

他に何か別の意図があった笑いにも見えたが……気になるが、チカは教えてくれそうにない。

自分の個室に戻ると、麗香が備え付けの小さな机に頬杖をついて、ぼんやりとすっかり暗くなった外の景色を眺めていた。
外にはもはや街の光はない。
人気の少ない山の中、高速道路を走っているときに見える、寂しい景色そのものが映し出されていた。
高速道路と違うのは、道にオレンジのナトリウムランプが設置されていないことだ。

車内の光が外に漏れだし、
俺達の乗っている寝台特急と平行して走る線路を照らしている。

「物思いにでもふけっているのか」

「うん……」

麗香は短く答えた。
ついさっきチカと談笑していた時とは、明らかに様子が違う。

「本当は……俺と一緒にはなりたくなかったのか？」

麗香は振り向く。

「ううん、そんなことはないよ。
……あのことを考えていたの」

「あのこと？」

「音楽祭のこと。
まだ、問いの答えが出てないから」

麗香の問い。

「人はなぜ音楽を聴くのか」

俺が音楽祭に出るきっかけになり、匠先輩と出会うきっかけになり、そして、今こうしてみんなで旅行に行くことになったきっかけになった一つの問い。

この問いは正しい解を求めるのは難しい。

最初からそういう生き物だと言われればそれで終わりだ。

だがそれでは彼女が納得いかない。

俺はよくそんな難儀な問いを持ったものだと思う。

「……麗香、」

話しかける俺に、麗香は手の平を俺に向けてそれを制止させる。

「……ごめんね、あともう少しで答えが出そうなの」

「……。」

なぜ音楽を聴くのか？

その答えを麗香は見つけだそうとしているのか。

恐らくそれは人間の俺には理解できないレベルの精神論が絡んでくるだろう。

なぜなら、普遍的な解を誰も導いたことがないからだ。

少なくとも、導いた奴がいるという話は聞いたことがない。

「……つながり。」

麗香は言った。

「“人はつながりを持つために音楽を聴く。そして演奏する”
これが、私の答え」

麗香は俺を見る。

「コウくん、どうかな？合ってる？」

「その答えは俺から見りゃ、半分正解ってところだ。
俺なら“人はなぜ音楽を聴くのか”という問いにはこう答える。
“決まった理由などない、聴く人間それぞれに理由がある”と。
だが、お前からすればそれは正解だろう。
お前の答えもあながち間違ってはないだろうしな」

「答えは、一つじゃなくてもよかったんだね」

しみじみと麗香は言った。

「ああ。方程式の解と同じだ。
人の数だけ記号と式がある。
解くかどうか、解けるかどうかはは自分次第。

――っていうと、なんかキザっぽいか」

「うふふ……そうかもしれないね。
でも、合ってると思うよ」

トントン、とノックの音が聞こえた。
はい、とこっちが答える間もなく、
鍵のかかっていないドアをがちゃりと開け、ひょっこりと顔をだしてきたのは匠先輩。

「おい、そろそろ飯だから食堂車集合……邪魔だった、か？」

誰がそんな仲だと？
俺達は健全な親友としての仲だ、勘違いしてくれるな。
麗香の秘密を知っていることを除いては。

「……じゃ、そういうわけだから、早めに来いよ」

匠先輩は静かに言うと、そっとドアを閉めた。
後で誤解を解くのが大変そうだ。
麗香を見やると、カアアアと赤くなった両手で顔を隠している。

……まさか。
いや、まさか、な。

理屈的には有り得るかもしれんが、俺にはまずないだろう。まさか。

気がつくと、麗香は立ち上がって俺の手を掴んでいた。

「早く行かないと、変な勘違いされちゃうよ？」

その顔は少し嬉しそうにも見えた。

第4話－7　スパイラル・トレイン　2日目―記憶のカケラ

「もう、コウくんっ！起きて！朝だよ！」

そんな声が聞こえた気がした。
いやいや、まだだ。まだそんな時間じゃないはずだ。
これといって明確な根拠はないが、まだ布団の中にいていい時間だ、多分。

「もーっ！いつまで寝るつもりなの！？」

そんな声とともに掛け布団が引き剥がされたような涼しさを覚える。
（※実際に引き剥がされてます）
まあこれはこれで快適だ。
いくら冷房の効いた車内といえど、夏は夏、
掛け布団をかけて寝れば幾分かは暑くなるっつうもので……

「どうしたら起きてくれるのかなぁ……こうしたら起きてくれるかな？」

突然、胸に重圧がかかり、さすがの俺も異変に気がつく。

「ぬおおおおっ！？」

異変に気がつくと同時に体中を巨大な衝撃が襲う。
全身が痙攣しているような感覚に陥る。

目が覚めた。

「あ、やっと起きた」

やけに麗香のしたり顔が目についた。
そしてにこやかに、「おはよう」と言う。

「……さっきお前、俺に何した？」

俺は寝台車のベッドから上半身を起こす。

「起こしただけだけど？」

「嘘つけ。今さっきただならぬ感覚が全身を襲ったんだが？」

麗香の頭上に電球が光った。

「ああ、これのこと？」

麗香の両手にバチバチと放電音。
そしてニヤリと口角を上げて笑う。
正直、そんな笑い方をされると怖い。

「……それは？」

「７２，０００Ｖ、６００Ａの電流」

「・・・？
まったく理解できないんだが……」

「……じゃあ、もう一回やるよ？」

「は？」

麗香は有無を言わさず俺をベッドに押し倒すと、麗香の腕が俺の胸を圧迫する。
ただならぬ非常事態が迫ってきているということを、第六感がスピーディーに俺の脳に送信し続けているが、この状態じゃまさに手も足も出ない。

「こうやってね……」

「こうするの♪」

「ぐおおおおおっ！」

分かった、麗香は俺に高圧電流をぶっ放して俺を昇天させるつもりだったんだな？
起こすにしちゃ、激し過ぎる。つうか、生きてるだけで奇跡だ！

「分かった？」

「分かった。とうとう俺を殺しにかかるんだな？」

「違うよ！誰がコウくんを殺そうっていうの？
そんな人がいたら私が消してあげなくちゃ……」

「お前だお前！
俺に高圧電流ぶっ放して、こんがりと焼き上げるつもりだったんだろうが！」

「え？私？」

「そうだ、お前だ。
俺を感電死させるつもりだろ」

「……そんな死に方もあるんだ」

「律儀にそこで学習してんじゃねーよ」

「そんな死に方があるなんて知らなかった。ごめんね♪」

「軽く謝られてもだな……」

こっちは九死に一生を得てるわけで、下手したらサスペンスドラマよろしく、

「夜の寝台特急殺人事件！旅行中の高校生謎の『感電死』」と、新聞の一面を華々しく飾る可能性だってあった。

そんなやすやすと謝って済む問題じゃないってやつだ。

まあ被害者が幸運にも理解者である俺だから許せなくはないが。

「……その起こし方、今後絶対にするなよ？」

「分かってるよ」

俺は携帯電話を取り出し、現在時刻を確認。

「……あと一時間寝てても問題ねえじゃん」

現在時刻は午前六時半。列車の到着時刻は午前九時だからまだ余裕がある。

ちなみに匠先輩によるとこの電車の中で朝食は食べないそうだ。

朝食をとると予算オーバーになるから、

別途コンビニかなんかで朝食を買って食うらしい。

だからなおさら寝てても問題はない。

……もう寝るつもりはないが。

麗香はカーテンを開ける。
外の明るい日差しが車内に入り込み、俺は思わず目を細める。
早朝から太陽がはしゃいでる子供のように、ギンギンの光線を放つのはいただけない。

「……お前はいつもいつぐらいの時間に起きてるんだ？」

「うーん、寝てないって言った方が正しいと思う」

「寝てない……か」

麗香が寝てない、というか寝ないのは、
寝るという行動自体必要のないものだからだと理解した。
それに、どの世界で異常が発生するか分からない以上、
寝るということはその対応が大きく遅れるということを示す。
もしそれがその世界の致命的な欠陥であれば、悠長に寝ているなんて考えられないだろう。

「お前の場合は寝てないというより『寝れない』んじゃねえのか？」

麗香は窓の外を眺めながら静かに頷く。

「私は気絶したり、寝たりするってのは、形だけはできるの。
でも、本当に気絶したり寝たりするわけじゃない。

私の“内部”はしっかりと常に監視を続けてるの。二十四時間休まずね。

だから、さっきコウくんを起こしてて思ったんだ、『うらやましいな』って」

いくらうらやましいからといって、

腹いせに俺を高圧電気ショックでたたき起こすのはいかがわしいと思う。

まあそこはいくら頑張っても越えられない壁だからな……

かわいそうといえばかわいそうではあるが、

これは誰にもどうしようもできないことで、せいぜい嘆くことぐらいしかできない。

「じゃあお前は夢を見たことが……」

俺はそこで口をつぐんだ。

またもや俺は麗香に辛い思いをさせるところだった。

どこまで俺は無神経なんだ。

俺と麗香は基本的構造から違う。

俺は人間で麗香は感情を持ったプログラムだ。

寝ることができない彼女がどうして夢を見れるのか。

少し考えれば分かることを、

わざわざ口に出して聞くようになった俺の低脳さを恨む。

「……ねえ、夢って何？」

そんな俺の懺悔を気にしないというように麗香は振り返り、純真な目で俺を見つめる。

「んー、一言で言えば『物語』だ」

「寝ている間にお話が浮かぶの？」

「まあ、そんなとこだ。
物語っつっても、何の脈絡のない、カオスの集合体みたいなもんで、
眠りが浅い時に見ることが多い。起きる前の三～四十分まえぐらいとかな。
不思議なもんで、数分に思えるときの夢も、数時間体験してるような夢も、
大低の場合は目覚めたらすぐに忘れちまう。
もしかしたら、夢を見てたということすら忘れちまってるかもしれねえ」

「忘れちゃうんだ……」

「全部が全部ってわけじゃないところがこれまた不思議なところでだな、
インパクトの強い夢を見たときなんかは目覚めた後も覚えてることがある。
ま、そうでもなけりゃ、『夢をみる』なんて言葉は生まれねえわけだし――」

「……もしかしたら私、見たことあるかも」

「……マジで？」

麗香は大きく頷いた。

有り得ない。理屈的に考えて麗香が夢を見ることは不可能だ。

二十四時間営業のシステムが夢を？いろいろと矛盾してる。

「見たことあるかも、というより、見たって言えると思う」

「どんな夢なんだ？

差し支えない範囲で構わない、教えてくれ」

一応聞いてみる。

「えっと――

＊＊＊

何の用事だったのかは覚えてないけれど、何か大切な用事だったと思う。

とっても大切な用事というほどでは……ううん、とっても大切な用事だったかもしれない。

どれほど大切な用事だったのかは、覚えてないから計りようがないけれど、

とにかく大切な用事だった。はず。

私はステージ０にいる。

私はそこから別のステージに出掛けようとしていた。
つまり、大切な用事は、他のステージでやらなきゃいけないこと、なんだね。
ステージからステージへの移動は一瞬。
転送先の座標を指定して、実行コマンドを送信するだけだから。
転送にかかる時間は本当にわずか。
秒で表そうとすると、０．００００００００００００００００……って並べてもまだ足りないぐらい短い。
ほぼゼロ秒、といってもいいと私は思う。

私は出発前に、別のステージにある何かを捜していた。
そして、そこに行って何かをしようとしていた。
大切な用事だから、時間がないから、早く“何か”を見つけだして、そこの元に行かなくちゃ。

――私は検索プログラムを呼び出して、その“何か”の場所を見つけた。
自分を転送するために、転送用のプログラムに、その座標を入力する。
この転送プログラム、私あまり使ったことがないから、ちょっとドキドキする。
でも、そんなことは言ってられない。
どうしてかは覚えてないけれど、時間がないから。
覚えてないことばかりで、私って情けないよね。
管理人として失格かも。違う。“かも”じゃないよね。失格だよね。
座標の入力を終えて、最後に実行コマンドを入力。

私の転送が始まる。

転送はほんのわずかな時間だけれど、
私はその転送路の隅に、
不穏な影みたいなものが隠れているのを見つけて、転送を中止して、
転送路に降り立った。
転送路に異常があったら、
早い目に直しておかないと、後々使いたい時に使えなくて、困っちゃうかもしれないからね。

私はその影みたいなものに近づき、
まずこの不穏な影が何なのか、プログラムコードの解析をしてみることに。

……何これ。
解析結果を見て驚いたのは覚えてる。
でも、どうして驚いたのかは、これも覚えてない。思い出せない。
肝心なところが思い出せない。一番大切なところが。
解析結果の断片だけでも思い出すことだできたら……
そう私は思う。でも、私の記憶からは何も反応がない。だから覚えてない。

突然、その影が動いた。

＊＊＊

「……中途半端なところで終わるんだな」

「……ごめん」

「謝ることはない。これは夢なんだろ？
途中でぶつ切りになることだってある」

口ではそういう俺だが、引っ掛かる点がいくつかある。
麗香が夢を見た、という時点ですでにおかしいことなのだが、
それを述べる前に、まずこの夢について整理しておこう。
面倒な作業だが、これをしておくと後々楽に物事が進むはずだ。やって損はない。

麗香はステージ０からどこかのステージに急いで移動しようとしていた。
移動先は、どこかのステージの“何か”。
移動中、不穏な影らしきものを見つけた。
それが何か、途中で調べることにした麗香だが、解析結果は覚えていない。
不穏な影が移動するところで、夢は終わった。

簡潔にまとめると、こんな感じだろう。
まず、“どこか”のステージに行って“何か”に関係することをする、という点だ。
次に、急いでいたという点。
そして、これが一番の不可解な点なのだが、不穏な影らしきものと

は何なのか。

この麗香が話した夢のシチュエーションは、昨夜の零雨がどうのこうのといっていた話のシチュエーションと酷似している。

あくまで仮説でしかないのだが、

“どこか”にステージ6を、“何か”に零雨を代入すると、話がそのまんま現実にぴったりと繋がってしまう。

麗香はステージ0からステージ6に急いで移動しようとしていた。

移動先は、ステージ6の“零雨”。

移動中、不穏な影らしきものを見つけた。

それが何か、途中で調べることにした麗香だが、解析結果は覚えていない。

不穏な影が移動するところで、夢は終わった。

これは単なる偶然なのか？

偶然にしちゃ、話が合い過ぎてないか？

そもそも、麗香が夢を見るということ自体ありえないことだ。

麗香の……記憶の欠片（カケラ）？

その可能性は高い。

もしこれが昨夜、麗香の身に起きたことだと仮定する。
麗香のプログラムが停止し、記録が消えた理由が影の仕業だとしたら……

さらに論理は飛躍するが、なにかしらのプログラムのバグが影となり、
その影のバグが他のプログラムをバグに誘い込むものだとしよう。
バグに誘い込まれた麗香は、バグに捕まってしまう。
麗香自身にバグが影に誘発されて発生し、それを感知した麗香は、自分が影と同様に、他のプログラムをバグに誘い込むことがないよう、自らを終了させた。
その際、再起動時にバグが再発するリスクがあるため、再起動することのないよう、
自己再起動機能を切にして救援を待った。

そう考えられないだろうか。
いや、超現実的な仮説であるということは理解している。
だから俺はこの仮説すべてその通りのことが起きたとは思っていない。
しかし、麗香が夢として語ってくれた中には、現実との共通点がある。
ただの夢とするにはリアルとの共通点が多すぎる。

「ねえ、コウくんってば！」

「……あ？ああ、悪い、ちょっと一人の世界に入り込んじまった」

麗香はムスッとした顔で俺を睨む。

「コウくんってたまにそうやって考え込むことが多いけど、何を考えてるの？」

「たまに考え込むことが多いって、矛盾してるんだが」

「で、何を考えてるの？出来たら教えてほしいなぁ」

言うべきか、それとも言わざるべきか。
もちろん俺の選択肢は
↓いう
　いわない
だ。

俺は今までの考察を麗香に話した。

「う～ん、私自身が覚えてないから、正解とも不正解ともつけられないんだけど……
　確かに私が夢を見るなんて、よく考えたらおかしいよね」

麗香は眉間に手を当てて考えこむ。

「私が記憶を失ってる間に何があったのか、ちょっと時間があったら調べてみるね」

列車は予定通り、午前九時に終着駅に到着した。
扉が開いて一番乗りでホームに飛び出したのはやはり美羽だった。
俺が列車から降りると、もわっとした熱風が全身を包むのが感じられた。
そして夏の風物詩、蝉も毎年のことだが残り一週間の短い夏を謳歌している。

「着いたね～」などと中身のない会話を交わしながら改札を出た俺達は、
近くのコンビニで朝食を調達し、近くの公園の木陰の中にあるベンチで食べる。

俺はおにぎり二つとお茶、それと適当なサイドメニュー的なものをいくつか買った。
今思えば、サンドイッチ買えばこんなにたくさん買う必要がなかったと後悔する。
肉も挟んであれば野菜も挟んであるし、一応の栄養素は摂れる。
なんであの時俺はサンドイッチの目先の値段ばかり気にしてしまったのか……

おにぎり各種百五十円
サイドメニューの野菜類各種百二十円
ドリンク類（５００ｍｌ）各種百五十円ｅｔｃ……

こんなに買わなくとも、

サンドイッチセット各種三百円
ドリンク類（５００ｍｌ）各種百五十円

のシンプルかつお得な値段で食えたのに。

「匠、この後どうするんだっけ？」

チカは兄に尋ねる。

「今日と明日は九州の観光名所を巡ってだな、四日目はパアッと遊ぶ」

何ともざっくりした計画だ。
まあ、秒単位でスケジュールを作られるよりはマシか。

第4話－8　スパイラル・トレイン　2日目－零雨の怒り

さて、観光地を回って気がつけば時刻も夕刻になり、
宿泊先のホテルにチェックインすることになった。
ただ、このホテルの立地は特殊だ。

匠先輩があらかじめ手配したというレンタカーに乗って、ホテルまで来たんだが、
ホテルについての第一声は、チカの「……何もないね」だ。

何もない。
起伏のある草原、パソコンの「Ｗｉｎｄｏｗｓ　Ｘ（ピー）」の例の爽やかな草原の壁紙のように何もない。
強いて言うならちょっと遠くを眺めれば
草原の向こうに深緑の山々に囲まれているのが確認できるぐらいで、本当に何もない。
蝉も近くに留まるための木がないため、鳴き声も聞こえてこない。
サラサラと風が草原を撫でる音が聞こえてくるのみ。

「匠先輩、どうしてこんな場所にぽつりと立ってる、
まるでバブルの時代に立てられた、
過去の日本人のアイタタな遺産とでも言うべきボロいホテルなんかを予約したんすか？」

俺がトランクから荷物を降ろしている匠先輩に聞くと、彼は笑ってこう答えた。

「ここには本当に何もない。だからここを予約したんだ」

「……意味が分かんないんすけど」

「街中じゃ見えないものも、ここからなら見えるんだ」

「……ますます謎っす、先輩」

匠先輩は俺にひょいと俺と美羽の荷物を投げ渡した。
結構重量級に分類される方の荷物だと思ってたんだが、
いや、薄々気づいてはいたが、匠先輩もチカと同じく怪力？
同じ兄妹だからありえなくはないが、
そうすると木下家はガチムチのプロテイン体内生産家系だということになるな。
……暑苦しい。いろんな意味で。

匠先輩はクルマを駐車してくれるという四十代程のホテルの従業員のオッサンにキーを
渡すと、チカ御一行を引き連れてホテルのロビーに入って行く。
もちろん、俺もついていく。

ホテルの中は、まあどこにでもある普通の庶民的レベルのホテルだ。
ホテル特有のニオイはあまり好きではないが、まあ慣れだな。
それにしても、夕方だというのに俺達以外の客がいないのは不思議な感じだ。

チェックインを済ませた匠先輩と俺達は、

ホテルの男性従業員Bの誘導に従ってエレベーターに乗り、七階の七〇三号室に入る。
俺が家族旅行に行った時に泊まったホテルよりもずっと広く、七人が過ごすには十二分なスペースがある。

「わぁ～、すっごい広いお部屋～！」

美羽は入って靴を脱ぐやいなや、部屋の中を駆け回る。

「オイコラそこの暴走族、おとなしくしてろ」

俺が注意してもなお、頭に血が上ったガキは言うことを聞かず。
何度も注意するが、美羽は俺の言葉に耳を傾けようとしない。
これだから言うことを聞かないガキは困る。
耳垢が溜まって鼓膜がうまく機能してねえんじゃねえのか？
帰ったら、いや、いますぐここで耳掃除をしてやらにゃならんな。

その間、男性従業員Bは、
匠先輩に夕食の時間はいつにするかなどのテンプレな質問を適量に浴びせ、
するべきことを終えて「ごゆっくりどうぞ」と一言、
そそくさと部屋を出て行った。
特筆すべきこともない、ごく普通の従業員だった。
まあ一つ言うとすれば、
白髪のロングヘアーの零雨を物珍しそうにチラ見連射していたぐらいのもんだ。

……さて。
小さな暴徒と化したこのチビを、どう止めようか。

俺の言うことは聞かねえし、どうせ捕らえたところで、
「は〜い」と言いながら、またはしゃぎだすのがオチだ。

「……そろそろ美羽ちゃん、はしゃぐのもやめて、ゆっくりしよ？」

麗香も注意するが、美羽に麗香の性格を見切られてしまったらしく、
やめる気配はない。

「美羽ちゃん、いい加減にしないと、バカ兄が困ってるよ」

「誰がバカ兄だ、誰が！」

チカのバカ兄発言に俺が突っ込みつつ、美羽に目をやるが、一度着
いた火はなかなか消えない。
ジョーと匠先輩ははぁ〜、と溜息をついて俺を見つめる。
見つめるだけで終わるんじゃなくて、てめえらも何か言ってくれ。

そして零雨はというと……何も感じてないらしい。
木製のテーブルの椅子に腰掛け、
用意されている急須に電気ポットのお湯を入れ、湯呑みに人数分の
茶を注いでいる。
零雨がそういう飲食系のものを自発的に扱うとは……珍しい。

――閑話休題、今の美羽を止められるとすれば、零雨だけだろう。
俺がぶちギレて美羽を怒鳴り付けてもいいんだが、

一日中観光地巡りをしたせいでそんな気力も沸かない。
ここは零雨にお願いして止めてもらうべきだろう。

「零雨、はしゃぎ回ってる美羽に怒ってやってくれねえか？」

「……何を？」

「『はしゃぐのはやめろ、おとなしくしてろ』的なことだ」

「……了解した」

のっそりと立ち上がった零雨は、無駄に走り回る美羽の腕をがっちりと捕らえる。
美羽は零雨を中心に、ぐるりと円を描きながらバランスを崩し、どてんと尻餅をつく。
零雨は美羽が立ち上がったところで、掴んでいた腕を強引に引き込み、
空いている片手で美羽のあごを掴んで、ぐいと強制的に美羽の視線と零雨の視線を合わせる。
そういう荒療治を俺は希望した覚えはないんだが……

零雨は大きな声で荒々しく言う。

「……騒ぐな。」

こええよ、マジこええよ、しかも一言だけ「騒ぐな」って言うところがさらにこええよ！

怒ることはまずないけど、零雨は怒らせたらダメだ、絶対。うん。
チカもジョーも麗香も匠先輩も、零雨の行動に固まっちまった。
凍り付いた空気とはまさにこの事を言う。

美羽は恐怖のあまりに声を失っているのだが、零雨はそれを理解していないと理解したらしく、さらに続けた。

「……私は『騒ぐな』と言った。
……理解できているか？」

「……。」

「……質問に答えろ。」

「……。」

美羽の顔が歪む。

「……私は『理解できているか』と言った。
……返事しろ。」

「あ……ちょっと零雨、もうそろそろ――」

美羽があまりにもかわいそうに思えてきた俺が思わず零雨を止めに入ると、零雨は首を横に振った。
美羽はすでに声を上げて泣き出している。

「……まだ終わってない。
……もう少し待って」

くるりと美羽に視線を戻すとさらに尋問を続ける。

「……私はあなたが“泣く”返答が理解できない。
……明瞭な返答をしろ。」

小一のガキが“明瞭な”とか意味分かるはずねえだろ。

「……。」

「……言い方を変える。
……『騒ぐな』分かったか？」

美羽はようやく頷くことができた。
……次からは零雨に怒ってもらうのはやめよう。
怒り方がキツすぎる。
どこでそんな怒り方をマスターしたのかは知らんが、本気で怒ってるようにしか見えない。

零雨は美羽を突き放すと、俺に視線を送り付ける。

「……さっきの用件は……何？」

「あ、いや、もういぃ……」

俺も思わず尻すぼみの回答をしてしまう。

美羽が恐怖でチビってないかと気になったが、チビってなかった。

良かった。

蚊を一匹殺すのにバズーカ砲使うようなもんだったな……さっきのは。

「……ま、まあ、これからここで二泊するんだし、な、仲良くやっていこうじゃないか、な？」

凍り付いたままの空気を匠先輩が取り纏（まと）めてなんとかしようとする。

「そ、そうよ！

あたし、トランプ持ってきたんだけど……やらない？」

チカが美羽に話しかけるが、泣きながらそれを拒否した。

あんな厳しい怒られ方された直後に言われたって、そりゃやる気なんか起きねえわな。

「コウ、今回は仕方がなかったけど――

……俺、もう零雨はぜってえに怒らせないと心に決めた。

あんな怒られ方されたらチビるからな」

「ああ、お前（ジョー）の言う通りだ。
零雨は怒らせたらチカより恐ろしいからな」

零雨は俺達一人一人にさっきいれたばかりのお茶を配る。
ただし、美羽だけは受け取らなかった。当然の反応だが。

「美羽ちゃん、ここにお菓子があるけど、食べない？」

麗香は電気ポットの隣に予め置かれている和菓子を手に美羽に聞く。

「麗香、それは……食わせないほうがいい」

俺は麗香に忠告する。

「え？どうして？」

「こういうところに置かれてる菓子っつうのは、腹持ちがいいものばかりだ。
何故だか分かるか？」

「ううん」

「それを食ったら腹がふくれるだろ？
夕飯直前にそれを食ったら夕飯があまり食えなくなる。
それがこういうお菓子を出す目的だがな」

「どうして？
せっかく作った夕食を、わざわざ食べられなくさせるってことでしょ？」

「客が夕飯を全部平らげちまって、それでも食い足りない。
そういうことが起きれば、
『あそこは少ししか夕飯が出てこない。不満だ』って言われる可能性がでてくる。
それを防ぐためだ。
予め腹持ちのいいもんを食わせておけば、そういうことになる可能性を軽減できるからな」

「へえ、知らなかった。
でも、お客さんが大食いだったらって考えると、ホテルの人かわいそうだね」

「そうだな。
それと、この話は親から聞いた話の請け負いに過ぎない。
だから俺が実際にホテルの人間取っ捕まえて聞き出した訳じゃねえから、
信頼性については保証できねえ。あしからず」

「でも、何で食べないほうがいいの？
食べたら満足できるんでしょ？」

「元を取るからに決まってるじゃねえか。

夕飯代は俺達の財布から出てるんだぜ？
残すの勿体ねえだろ？」

「そこなの……？」

「そうだ、そこだ。
ついでに言っておくが、その和菓子は食わなかったら持ち帰りということで」

「……ドケチ」

その後、俺達は夕食の時間まで、
美羽に元気を取り戻させようと、和菓子以外の方法を、
あれこれ四苦八苦して模索することとなった。

第4話－9　スパイラル・トレイン　2日目－露天風呂にて

美羽も徐々に元気を取り戻し、夕食を食い終える頃には、すっかり元通りになった。
美羽をここまで元気にさせるまでのプロセスは、俺達の涙ぐましい努力を抜きにしては語れない。
ジュースを買い与えてみたり、美羽の好きそうな遊びに誘ってみたり――
ああ、あと、チカがジョーの顔をわしづかみにし、「変顔一号」と銘打って釣り目にしたり垂れ目にしたりしてたな。
普段は嫌がるジョーも、今回は嫌がらなかった。

こういうときにつくづく思うぜ、「ガキは面倒だ」と。
まあジョーの変顔一号も見れたし、まんざらでもないけどな。
みんな優しい奴で良かったな、美羽。

「それじゃあ俺達は先に浴場に行っとくからな」

夕食を食い終わってホテルの部屋に戻るとすぐ、俺とジョーと匠先輩の三人は、着替えなどの道具一式を抱えて大浴場に向かった。
もちろん男湯だ。
よっぽどのバカじゃない限り青の暖簾（のれん）と赤の暖簾を間違えることはない。
期待してたなら、残念だったな。

更衣室に人はおらず、

カポーンと開いた大浴場へのスライド式ドアの快い音も虚しく、
俺達三人組以外の姿はない。

こういう浴場に入ると、常日頃どのような入浴方法をとっているのか、
分かりやすい例を挙げれば、先に身体を洗ってから浴槽に浸かるのか、
それとも欧米式に浴槽に浸かるのが先か、といったような違いが分かるものだ。
だが、奇しくも足立家、牧田家、木下家の入浴方法は同一で、たいした違いは見受けられなかった。

昨夜、寝台列車の中でも入浴はできたんだが、
シャワーが六分しか出ない、
さらにお湯をひねるとしばらく水が出るとかいう超鬼畜仕様だった為に、
実際に温かいシャワーを浴びれたのはわずか二分だけで、
カラスの行水もいいところ、とんでもなくハードな入浴になった。
だからホテルのような「ジャンジャンお湯とか使っていいですよ」がどれだけ有り難いことなのかが身に染みて分かる。

「はぁ～、やっぱ男は裸の付き合いを経験してこそ本当の仲間だよな」

三人揃って露天風呂の湯舟に浸かってると、匠先輩がトンデモナイ発言をしやがった。

「先輩、言っときますけど、俺、そういう趣味はないっすからね」

俺の当然の反応である。
やらないか、などといわれた日にはもう……

「『そういう趣味』？」

「……気がついてないならいいっす」

「……あー、そういうことか。
大丈夫だ、俺は２Ｄの女性にしか興味はない。
立体に興味はない。ましてや野郎なんてもってのほかだ」

別の意味での問題発言をさらりと空気中に放出する匠先輩に、俺とジョーは思わずのけ反っちまった。
俺達に危害が加わらないだけマシか。

「……空がきれいっすね」

しばらく湯舟に浸かってじっとしていると、ぽつりとジョーが呟い

た。
その顔は夜空に向けられている。

「ああ」

俺は空を見上げて答える。

「綺麗だろ？
街中じゃ空気が汚れててこんな鮮明には見えないからな」

「じゃあ、先輩がここを選んだ理由っつうのは……」

「その通りだ。
ここの周囲は草原に囲まれてる上、近くには街がない。
だからここは夜空がより綺麗に見える。
それに山の中のように虫が沸いてくることもあまりないし、
隠れた観光スポットってところだろう。
まあ、俺は今メガネが曇ってて良く見えないんだけどな、ハハハ」

匠先輩のかけているメガネは確かに湯気で白く曇っている。
それじゃまともに見えんだろうな。

「……。」

「……。」

「……。」

それからしばしの静寂。
チョロチョロと流れる温泉（近くに活火山があるらしい。草原が広がってるのもそのせい）の音だけが虚しく響いている。
目は夜空を堪能し、耳は詫び寂びの静寂を堪能し、鼻は硫黄のニオイを堪能する。
そんな中、ガラリとドアの開く音が竹の仕切りの向こう側――女湯のほうから聞こえてきた。

「はあ～、なんでうちの兄（匠）はこんな何にもないホテルなんかを予約したんだろ」

そんなチカの声を聞くと同時に俺とジョーは顔を見合わせる。

（ヤツが来たぞ）

ジョーは人差し指で竹の仕切りの向こう側を指差しながら、そういうニュアンスでジェスチャーをする。

匠先輩はというと、女湯から自分に対する非難の声が上がっているにも関わらず、
そんなのお構いなしでゆったりと湯舟に浸かっている。
正直なところ、アホ面にしか見えんのだが、まさか……のぼせては、

ないよな？

「何にもないから予約したんじゃないかな？」

男湯でそんな会話をしているのもつゆしらず、仕切りの向こうの麗香がチカに言う。

「アハハ、そうかもね。
匠さ、音楽とオタク趣味のことしか頭にないから。
頭の中、ほんっとにスッカラカンで何も考えてないからね、アイツは。
もしかしたら、何もないホテルと何もない頭がどっかで共鳴したのかもね」

「仕切りの向こう側に先輩がいたらマル聞こえよ？」

「いるわけないじゃん！
男が三人もいればバカ騒ぎするに決まってるし。
でも、何も聞こえてこないから、いないんだよ」

ひどい言われようですな、先輩。
俺達もだが。

匠先輩ははぁ、と小さく溜息をつくと、ばしゃりと手で顔に湯を掛ける。

「あれ……」

「うん？どうしたの麗香？」

「今、向こうでパシャンって音が……」

「……何にも聞こえないよ。気のせいじゃないの？」

「気のせい……なのかな？」

「そうだよ、絶対！」

麗香は腑に落ちない口調だが、麗香が正解だ。
俺達は三人揃って趣味悪くも女湯での会話に聞き耳を立てているわけだからな。

「美羽ちゃん、」

チカが呼ぶ。

「美羽ちゃんもそこに立ってないで、早く入っておいで」

「うん……」

「どうしたの？」

「ここのおふろ、あつい」

「最初はみんなそうだって！
入ったら慣れるから、ほら、勇気出して、ね？」

「……。」

「もう、じれったいなぁ……」

チカの声とともにバシャバシャという音が聞こえ、
その音源はどんどんドアの方へ移動していく。
美羽のやつ、迷惑ばっかりかけやがって……
こんなことになるなら旅行に行く前から、
自宅で熱い湯に慣れさせる訓練でもさせておけば良かったかもしれんな。

「ほら、入ろ？
……そうそう、最初は足先からね。
床、滑らないように気をつけて……そう。
……ほら、入れた」

それからしばらく仕切りの向こうから聞こえてくる会話――主に俺達の悪口を、
ラジオを聞くように聞き流しながら湯舟に浸かっていたが、
とうとう匠先輩がゆっくりと立ち上がった。

「俺はそろそろ出るつもりだが、お前らはどうする？」

ひそひそと俺とジョーに話しかける匠先輩。

「そうっすね、悪口を聞くのも飽きたし、俺も出ます」

俺が答えると、ジョーもそろそろのぼせてきそうですから、と立ち上がった。
音を立てないよう、そっとドアを開け、大浴場を通り抜け、更衣室に戻る。

ホテルの浴衣を着て、
誰がお調子者の牧場のジョーだ！　ｂｙジョー
誰が正論を盾に戦う悪党だ！　ｂｙ俺
誰が三次元ハニートラップに引っ掛かるか！　ｂｙ匠先輩
と、チカと麗香の会話にケチをつけつつ、
匠先輩、それに引っかからないのは男としてどうよと内心突っ込みながら
俺は七〇三号室のドアノブをひねる。

が、開かない。

あいつら（女子）、律儀に鍵かけて行きやがったな……
諦め半分で俺がドアをノックする。
すると、ガチャ、とドアが開いた。
一瞬部屋を間違えたかとヒヤッとしたが、出てきた人物を見て安心した。

「なんだ、零雨か」

「……部屋番中」

「部屋に入れてくれるか？」

テンプレな頷き方で了解の意図を俺達に伝えると、ドアを大きく開く。

俺達三人は部屋の中に入る。

「何で零雨はチカ達と一緒に風呂に入らないんだ？」

ジョーが不思議そうに尋ねる。

「……“彼女”が嫌がったから」

「ああ、美羽ちゃん、まだ零雨のこと怖がってるのか……」

「……彼女が帰ってきたら……入る」

寝台列車に乗っている時、美羽は零雨のことを「怖い人」と言っていた。

その「怖い人」にあのような怒られ方をされたのだから、しばらくの間はこんな状態だろう。

匠先輩が身につけている腕時計を見て零雨に言う。

「そうは言ってもだ、チカと麗香は大分話し込んでる様子だったから、
なかなか出てこないと思うぞ。
部屋番は俺が引き受けるから、もう行って来い」

匠先輩は零雨の背中を叩いた。
しばらく考えるそぶりを見せていた零雨だったが、
思い付いたように荷物を持って部屋を出て行った。

「なんか、嵩文って独特の雰囲気があるな～」

三人になった部屋の中で匠先輩が言った。

「なんか、いつも集団の中にいるはずなのに、彼女だけ一人、みたいな。
寂しいとか悲しいとか思わないんだろうか」

「慣れたんじゃないんすか、そういう環境に置かれるのに」

俺はそう答える。そう答えるしかない。

「俺がそんな状況に置かれるならごめんだ」

「でも、零雨は今の方が幸せみたいっすよ。
零雨と麗香が俺達のグループに入ってきたのは、
麗香が転校してきた翌日だったんすけど、そんとき麗香が言ってました。
“私と零雨はずっと二人きりだった、だから友達の作り方を知らない”と」

「じゃあ、嵩文と神子上は一緒に転校してきたのか」

「ややこしいんすけど、零雨が転校してきた翌日に麗香が転校してきて、
その次の日に俺達のグループに入ってきたので。
でも、話からするとそうじゃないっすか？
『零雨と麗香は幼なじみか何かでずっと一緒で、
他人とコミュニケーションがなかなか取れずに友達が作れなかった』と考えれば。
零雨の喋り方もいつもあんな調子だし、正直おかしくないと思うんですがね」

あー……やっぱり敬語は馴れん。
しかも俺が立てている仮説が、真っ赤な嘘であるというからやってられん。

「そうかもな……」

そしてその嘘に納得する匠先輩。

「……お前ら、嵩文には優しくしてやれよ」

そして先輩はテレビのリモコンを手に取ると、
備え付けのテレビ（ブラウン管）の電源を入れた。

「あ、それと言い忘れてたが、女子どもが戻ってきたら、部屋を出るからな」

「え？どうしてっすか？」

「サプライズ・タイムだ。
まあつっても、天体観測なんだがな」

一見何も考えていないような先輩だが、結構色々細かいところまで計画を立てているらしい。

第４話－１０　スパイラル・トレイン　２日目－言語の作者

午後九時を過ぎた頃、大浴場から零雨がチカ、麗香、美羽の三人を引き連れて戻ってきた。

麗香たちが荷物を置いてふう、と一息つくと、匠先輩が立ち上がった。

「さて、そろそろ出掛けるかな」

「匠、どこ行くの？」

何も知らないチカは不思議そうに見上げる。

「外だ。
ほら、お前らも行くぞ」

「ういっす！」

ジョーも掛け声をかけて勢いよく立ち上がる。

「えっ、何？何しに行くの？」

チカはキョトン顔。

……あ、麗香もか。

「俺の頭は音楽と美少女以外何も考えてないってのは間違いだと証明してやる」

「……！！

ちょっと匠！なんであんたが――」

「悪口を言ってたのを知ってるかって？

簡単な話だ。なあ？」

匠先輩は口角を吊り上げてニヤリと笑い、俺とジョーに視線を送る。

「ああ。

俺は確か、『正論を盾に戦う悪党』だったか」

「俺は『お調子者の牧場のジョー』だろ？」

「！！」

それを聞いたチカの目の色が変わった。

「あ、あんたたち人の会話を盗み聞きしてたの！？

サイッテーね！！」

匠先輩は余裕ありげに答える。

「はあ？盗み聞き？
人聞きの悪いことを言わないでくれたまえ、妹よ。
こっちは三人揃って≦≦大人しく≧≧湯舟に浸かってた。
そこにあんたらの声が≦≦偶然≧≧に聞こえてきただけだ。
悪口が聞こえたのは不可抗力ってヤツだな」

「ぬうう……」

「第一、お前は麗香が男湯から物音がしたと言ってた時点で
俺らの存在に気がつくべきだった。違うか？」

恥ずかしいのだろう、顔を赤くして唸っていたチカだったが、
とうとう吹っ切れた様子を見せた。

「……はいはい、私が悪うございました、これでいい？」

「分かってくれたならそれでいい」

先輩は笑う。

「……さてと、話が横道に逸れたな。
サプライズタイムだ、お前らちょっとついて来い」

匠先輩は皆を引き連れて部屋を出ると、
一階に降り、ロビーにいる受付の人（男）に話しかける。

「今日予約していた木下ですが」

手に持っていた水色のチケットのような細長い紙切れを同時に受付の人に渡す。
受け取った受付の人は、分かりましたと言ってホテルの奥に消えて行った。

「先輩、何を予約してたのですか？」

何も知らない麗香は匠先輩に聞く。

「これを予約してたのさ」

それと同時に奥から出てきた受付の人の持っているもの――天体望遠鏡を指差す。

「ここの地域は夜空が綺麗なことで評判なんだ。
空気も澄んでるし、静かだし。
何もないからこそ見える景色だ」

匠先輩はカウンターで天体望遠鏡を受け取ると、重そうにそれを抱える。
受付の人が
「敷地はホテルから半径三百メートルほどですので、それより先には行かないでください」
などと匠先輩に注意事項を伝えている。
先輩は重量級の天体望遠鏡を抱えて重いのを我慢しながら聞いているように見える。
受付の人、客のこと気遣わないとか、ホテルマンとしてどうよ？え？口頭での注意事項伝達という、ある意味拷問に耐えた先輩は、俺達の前に来ると、望遠鏡をそっとマットの床に置いた。

「三脚とか、本体の組み立てはここ（ロビー）でやってから持って行く。暗い中で準備してもロクなことはないからな」

「先輩は天体望遠鏡を扱った経験とかあるんすか？」

馴れた手つきで組み立てていく先輩に、俺は疑問を投げかけた。

「まあ少しだけだが、ある」

先輩は俺に見向きもせず答え、ただ一心に組み立てを一人で行う。
俺達＝することがない暇人は、ただその作業を見ているだけだ。

「……天体望遠鏡っつうのはさ、高いし場所取るし使う頻度が少ないしで、
お蔵入りになりやすい道具なんだ」

俺達の暇さに気がついてか、先輩はうんちくを語りだした。
暇人にとってはちょうどいい暇潰しだ。

「……それに、『どこで、何を見るのか』。
これが大事だと大学の天文サークルの友人に言われた。
ここのホテルは要予約だが、結構いい天体望遠鏡が安く借りれる。
だから今言った値段、収納、使用頻度の問題を
一挙に解決できるこのサービスはなかなかいいもんだ。甘い汁を吸う感じでな。
俺らが考えなきゃならないのは『何を見るのか』ぐらいだ。
まあ、ここは空気が澄んでて空が綺麗だし、見るもんには困らないだろうけど」

自己完結かよ。
なんかズッコケな話のまとめ方したな。
だからといってどうしようもないが。
先輩は望遠鏡の各部を細かくチェック、最終調整に入った。

「この望遠鏡、一人で持ち運ぶのはなかなかキツイ。

誰か手伝ってくれるとありがたいんだが」

調整が終わり、先輩は俺達一人一人に視線を送る。
するとジョーが持ち運びの手伝いを申し出た。
先輩には裏でいろいろ動いてもらってるみたいだし、
少しは手伝ってやってもいいか。
手伝わねえと、なんか悪いし。

「じゃあ、俺も」

「望遠鏡は二人で十分だよ」

匠先輩はジョーと協力しながら望遠鏡を持ち上げて俺に言う。

「いいっすよ、遠慮しなくて。
つうかやらせｒ……やらせてください」

「そこまでいうなら、そこ、持ってくれるか？」

「ういっす」

俺は先輩に指示された場所を持って持ち上げる。
うお～、軽くなったぜ、とジョー。
このように男三人掛かりで望遠鏡を外まで運びだしているのだが、
その間、美羽はチカと麗香の間に入って幸せそうな表情を浮かべ、

その後ろに蚊帳の外オーラ発散中の零雨がぽつりとしんがりをつとめている。

「……よし、このあたりでいいかな」

せーのと号令をかけて望遠鏡をそっと草原の地面に置いた。
ホテルの入口から約百五十メートルの草原のど真ん中だ。
月夜に照らされた草がそよそよと涼しげになびいているが、
どうやら今夜は熱帯夜になるらしく、風は生ぬるかった。
外の天気はおおむね晴れ、
空の所々に綿を引き伸ばしたような薄い雲が点在しているが、観測に大した影響はなさそうだ。

「わあー、きれいな空ね」

麗香が目をキラキラさせながら見上げる。
確かに、天の川を構成する粒子のような恒星を
一つ一つを視認できそうなほどに空の解像度は高い。

「さてさてさて、どの星を観察しましょうか」

匠先輩はポンポン、と設置した望遠鏡を叩きながら言う。
するとジョーが右手を挙げた。

「俺、まずは土星がみたいっす」

すると、先輩は残念そうな顔をした。

「土星とか、時期が合えば見られるけど、今回は時期が合わないから見られないんだ」

「……そうなんすか」

「惑星を見るなら確か、天王星と海王星が見えるはず」

それを聞いて俺は空をぐるりと見回すが、
当然どれが惑星なのかを見つけだすことは出来なかった。
肉眼で確認できるならば望遠鏡はいらねえって話だよな。

「どれが惑星？」

チカも俺と同じく空を眺め、見つかるはずのない惑星を探す。
この状況の中で、いち早く動いたのは零雨だった。
彼女は天体望遠鏡の構造をじっと観察し、直後、匠先輩がセットした望遠鏡を勝手に調整し直しだした。
先輩はあっ、と一瞬声を上げてそれを制止しようとしたが、ふっと微笑んだ。

「……なんだ、俺より上手く（望遠鏡を）扱える人間がいるじゃねえか」

零雨は望遠鏡のレンズをを東に向けた。

「何を見たいんだ？」

俺が零雨に聞くと、零彼女は手を止めて答えた。

「……観察対象は天王星。
……２１時２０分現在……方位角約９８．６度……高度約１４．４度に……天王星」

「ああ、セットしてくれてるのか。サンキュー」

「……この望遠鏡の精度では……精細な像を映し出す……ことは出来ない」

「構わねえよ。
見えりゃいいんだよ、見えりゃ」

「何、その適当さ」

俺達の話を聞いていたジョーが、ぷっと吹いた。

「そんなに鮮明な像が見てえなら、天文台か“現地”に行ってこい」
「はいはい現地ね……って無理だバカ！」
「いいんじゃねえのか？
『人類初！天王星に名誉宇宙飛行士、牧田を乗せた宇宙船が着陸！！』みたいな感じで」
「天王星は木星型惑星（主にガスでできた惑星）じゃなかったか？」
「いや、天王星は天王星型惑星っつって、氷その他もろもろでできた星だ。
……もしかしてお前（ジョー）、知らなかったのか？」
「知るわけねえよ、よっぽどのマニアじゃねえ限り」
「俺はマニアじゃねえんだがなぁ～、なんで知ってんだろな？」
「自分の知識を自慢したいだけだろ」
「……さて、零雨、セットは終わったのか？」
「逃げやがったな……」
零雨はうなずいた。
ジョーが逃げたのなんのかんのとぼやいているが、そんなの気にする程のことでもねえ。

「零雨、見てみていいか？」

「……構わない」

望遠鏡のレンズを覗くと、中心に水色のぼんやりとした星が見えている。

俺は除きながら零雨に聞いた。

「この、真ん中にある青いヤツが天王星か？」

「……そう」

「ふ～ん、あそこにジョーが行くわけだな？」

「誰がはるばる天王星まで行くっつった！？」

「あれ、お前、行くんじゃなかったのか？」

「行、か、な、い！」

そこに美羽が近寄ってきた。

「何みてるの？」

「天王星だ」

「てんのーせー？
てんのーせーって、なに？」

「一言で言うなら、星だ」

「お星さま見てるの？」

「そうだ」

「ねえ、美羽も見ていい？」

「俺に許可取るようなことじゃないんだが……それよりもお前、身長足りるのか？」

試しに美羽に覗かせようとすると、やはり覗くのに身長が足りないことが判明。
俺は仕方なく美羽を抱えてやることにした。

「どれがお兄ちゃんがみてたお星さま？」

「真ん中にある青い星があるだろ？」

「……ないよ？」

「うそつけ」

一旦美羽を下ろして俺は望遠鏡を覗き込む。
……ない。
確かに中心にはない。
だが、中心から少しずれたところに、さっき俺が見ていた天王星があった。
地球の自転でちょいとばかりズレたらしい。
俺は望遠鏡の調整の仕方をしらないので、取り合えずまた美羽を抱えて覗かせた。

「中心からちょいとずれたところに青い星はないか？」

そう聞くと、美羽はあった！と声を上げて喜んだ。

「きれいなまんまるのお星さまだね」

「その星は、惑星っつって、ほかに輝いてる星（恒星）とは違う星だ」

「へえ～」

…

……

……

……

「……美羽？
そろそろ……兄の体力も……限界に来てる。
望遠鏡から目を……離してくれねえか？」

「いや」

「……いやじゃなくて……マジでキツイから……頼む……目を離してくれ」

「もうちょっと見てたい」

「美羽……麗香とかチカに……このきれいなお星さまが……輝いていることを……
……教えてやらなくて……いい……の……か？」

やばい、ちょっと、男として情けなくも体力が……もう……限界……

「教えてあげる！」

元気に答えた美羽は、ようやく望遠鏡から顔を離した。
それと同時に俺は美羽を地面にそっと着地させる。
ハァ……疲れた。

俺が両手をぶらぶらと振って一仕事終えた感を満喫しながら美羽に目をやると、
チビはいつの間にかチカと麗香の手を引っ張って、望遠鏡、見てみて！と誘っている。
ガキのあの永久機関が内蔵されているようなエネルギッシュさは一体どこから沸き上がってくるのか、甚だ疑問だ。

俺は望遠鏡から離れ、一人草原に仰向けになって転がった。
……望遠鏡を使って一個の点を観察するより、こうやって何も考えずに一人ぼんやりと無数の点の光る夜空を眺める方が、俺の性に合ってる気がする。いや、合ってる。確実に。

……疲れた。
旅行ってやっぱ無意識のうちにストレス感じるらしいからな。
――そういや、キャリーバックにリポビタン〇を一ケース入れてたんだったな。
部屋に帰ったらソッコー三本一気飲みしてやる。
良い子のみんなは用法、用量を守って正しく飲めよ？
リアルに三本一気飲みして病院行きとかされても、俺は責任取れないからな。

しばらくそこでじっとしていると、零雨が近寄ってきた。
俺は上半身を起こす。

「みんなと一緒のところにいなくていいのか？」

「……『零雨ちゃんが近づくと美羽ちゃんが怖がるから、
悪いけどちょっとコウくんのところにいてくれる？』……
と、言われた」

やけに饒舌なのは自分の言葉じゃないからだろう。

「誰に言われたんだ？」

零雨はそっと麗香を指差した。

「そうか。
……零雨、悪かった。
俺があの時、美羽を怒るように言ったせいで、こんなことになっちまって」

「謝る必要は……ない。
私に対する……謝罪は無意味」

「なぜ？」

「謝ることの目的は……許してもらうこと。
……過ちを認めてもらうこと。
私は……あなたのあの時の……行動が、間違っていたとは……考えていない。
……故に、過ちと考えていない……相手に対する謝罪は……無意味」

「そうだとしても、ほら、悪いじゃねえか。
俺が頼んだせいで、結果的に美羽がお前に恐怖心を抱くようになっちまった。
だから「私に……感情論は通用しない」」

「じゃあ俺はお前にどうすればいいんだよ」

「何も……しなくていい」

「……寂しくないのか？」

「……何も感じていない。
私は彼女（麗香）とは……違う」

俺は次に出てくる言葉が、言うべき言葉が見つからなかった。
零雨は何もしなくていいと言った。
だが、俺は申し訳ない気がしている。
どうすればいい？何を言えばいい？
俺の今の腐りかけの脳みそをフル稼働させても、適当な単語が見つからない。

「……。」

「……。」

気まずい雰囲気（少なくとも俺はそう感じている）。

「……正しかった」

ぽつりと零雨が言った。

「え？」

「……ここを選択したことが」

「ここって？」

「日本語圏に……私が降りたこと」

「何の話だ？」

「……七月」

「・・・お前が転校してきた時の話か」

「……そう。
……日本語は非常に……語彙が多い。
よって……複雑な表現も齟齬なく……簡潔に表現できる」

「誰が最初に日本語を作ったのかは知らねえけど、よく作ったもんだな、今思えば」

零雨はじっと俺を見る。

「……何？」

「……日本語はＵＳＥＲが……構成した」

「……マジ？」

ＵＳＥＲが、日本語の製作者？
にわかに信じられん話だ。
だってそうだろ？なぜ日本語なんだ？
なぜそんな大層なヤツが創った言語が、
こんなちっぽけな弓状列島の中でしか使われてないんだ？
英語のように大々的に世界に浸透してもいいはずだろ？
零雨は続ける。

「この言語の正式名は……「Ｌａ２」。
Ｌａは……ｌａｎｇｕａｇｅのＬａ」

「なぜ英語が正式名に採用されてる？」

「英語の前身……ラテン語もＵＳＥＲが……製作した」

「ほう……」

「……ＵＳＥＲが製作したのは……この２言語のみ」

「他の言語は？」

「……人間が創造した」

「ＵＳＥＲが言語を創った理由って何なんだ？」

「……主に私達の為。
今ように……私が人間と接触し……意志疎通を……図るためには、
……私達の思考を……人間の使用する……言語に変換しなければ
ならない」

「それで、正確な翻訳（変換）ができるよう、
ＵＳＥＲが創った言語を人間に浸透させる必要があった、と？」

「……そう」

俺はみんなのいる方に目をやる。
もうしばらく話していても問題なさそうだ。

「ラテン語……正式名「＊」は……人間に広く浸透させるための……言語だった。
それに対し……Ｌａ２は変換精度に……重点をおいた設計の……言語。
……だから日本語には……語彙が多い」

「でも、ラテン語は今でこそ英語になって世界中に広がってるが、広がる確証なんてないだろ？」

「……ＵＳＥＲが広がるよう……直接操作した」

「どうやって？」

「歴史に残る……人間の一部は……ＵＳＥＲの操り人形だった。
……例えば……ローマ帝国の歴代の王。
彼らは……ローマ帝国の領土を……拡大させた。
領土拡大とともに……言語も拡大する」

「……気味の悪い話だな」

歴史上有名な人物がＵＳＥＲのマリオネットだったっつうのは。

「彼らに操られているという……意識はなかった。
自ら行動している……と考えていた」

「そうだとしても、だ。
まるで歴史がＵＳＥＲの予定通りの展開をしているみたいじゃねえか」

「……その通り。
歴史はＵＳＥＲによって……一部操作されている。
ついでにいえば……この星に生命が誕生することも……
ＵＳＥＲの“予定”に……なっていた」

「人間が生まれてくることも……なのか？」

「……そう。
あなたたちが……ここにいるのは……ある意味必然」

久しぶりに頭が混乱しそうだ。
ちょっとここで話をまとめてこう。
・日本語とラテン語（現：英語）は、ＵＳＥＲの創作物である
・歴史は一部ＵＳＥＲの都合の良いようにある程度のレールが敷かれていた（敷かれている？）
・地球に生命が宿るのは必然的だった

よしよし、疲れていながら、上手くまとめられたな。

それからしばらく零雨と喋り、
時間もいいところになってきたところで俺達は部屋に戻った。
リポビタン〇を用法、用量正しく守って飲み（チカから“ご老体”

とバカにされながら）、
ちょいとばかりテレビを見て、眠くなったところで床についた。
部屋の電灯を消すとき、時刻は午前零時半を指していた。

第４話－１０　スパイラル・トレイン　２日目－言語の作者（後書き）

作者は、感想までいかなくとも、
ポイント評価していただけるとやる気がでます。
でも、感想を下さるとものすごくうれしいです！

今話は次話（５話）に向けての地味な伏線です。

第４話－１１　スパイラル・トレイン　４日目－回想

時は飛んで四日目の朝。
二泊した草原の中にぽつりと佇むストレンジホテル（俺命名）のチェックアウトを済ませ、
レンタカーに荷物を詰め込んでホテルを出た。

「昨日の卓球はすごかったね」

クルマの助手席に座り、シートベルトを装着したチカが言った。

「おかげで臨時の出費が出ちまったけどな」

運転席の匠先輩がそう言って苦笑する。

＊＊＊

昨夜は天体観測はせず、風呂上がりに全員で卓球という王道まっしぐらコースを堪能した。
卓球で使うボールはピンポン球と呼ばれることは知っているだろう。
ホテルの卓球台をレンタルするにあたって、
そのピンポン球もレンタルされたものを使ったんだが、
ホテルのオーナーは一体どういう趣向をお持ちなのか、
ピンポン球にイカツイ男の顔が、アメコミ調で、

しかも黒のマジックを使って手書きで描かれていた。
さすがにこれには引いたね。
だってそうだろ？
確かに物理的には試合にはなんら影響を与えない、
正確にはわずかな影響しかない落書きだが、
プレイヤーの気持ちとしては、回転しながら飛んでくる男の顔を
ラケットで打ち返すのは気が引けるし、それよりも第一に集中力に
欠ける。
まあそれは皆同じこととして我慢したが。

しばらくのんべんだらりと特に目的もなく、
ゆる～りと男の顔を打ち返すなどして卓球っぽいことをしていたが、
本気で戦ったら誰が一番強いのか決めようぜと突然ジョーが言い出
し、
誰が一番卓球が強いのかを決めることになった。

「どうしてそう一番になりたがる？」と、ゆとり教育で培ってきた
“お手々つないでみんなが一番、一人一人はオンリーワン”の究極
的ハト思考を
遺憾無く発揮する俺を尻目に、というか俺の言葉は普通にスルーさ
れて
トーナメントが開催されたのだが、結局決勝まで勝ち残ったのは零
雨と麗香だった。
「はじめての卓球」と言いふらしながらラケットを持った二人は、
あれよあれよと俺を含め周りの人間を圧倒し、
連戦圧勝の破竹の勢いというに相応しい高レベルな戦いを繰り広げ、
決勝戦ではどちらが勝つかの簡単な賭けが行われた。

ジョー＝零雨に五百円

チカ　＝麗香に五百円
匠先輩＝零雨に千円
俺　　＝面倒だから賭けない
美羽　＝倫理規定（年齢制限）により不参加

結果から言うと、勝敗はつかなかった。完全なる引き分け。
先攻の麗香が放ったサーブを零雨が打ち返すことで始まったゲーム。
打ち返すごとに男の顔が描かれたピンポン球の速度は、徐々に上がっていき、
あっという間にプロプレイヤー顔負けの速度まで到達した。
もし俺がピンポン球の顔だったなら、打ち返される時むちゃくちゃ痛いだろうなと、
どうでもいいことを思いながら見ていたが、
俺の横で見ていたジョー、チカ、先輩の反応は違った。
あまりのハイレベルの戦いに驚き入りながらも、
自分の賭けているプレイヤーに勝ってもらおうと懸命に応援している。

最初のサーブ開始から十分が経っても、０対０のままラリーは続き、
気がつけば周りには数少ない他の通りすがりの宿泊客が集まり、
二人の戦いにくぎづけになって立ち見している。
卓球は本気でやれば体力なぞすぐ持って行かれるのだが、この二人の体力に物理的限界はない。
涼しい顔をしながらプレーする二人に、
観戦していた宿泊客のオッサンが匠先輩に、この子達はプロかい？
などと聞き出す始末。

開始から十五分が経ち、周りの宿泊客も数が大分増えてきた。
何事かとホテルマンが駆け付ける事態にまで発展したが、それでも

二人の戦いは止まらない。

そして開始から二十分。

応援するのも疲れた匠先輩がぽつりと言った。

「もうそろそろ決着をつけてもいいんじゃないか？」

そうですね、そろそろ決着をつけましょう、と麗香が言い、

ピンポン球の打ち返す速度がさらに上がる。

零雨の打ち返す速度も上がっていき、ピンポン球が机にぶつかる音も変わってきた。

カッカッカッカッカからカカカカカカカカ、ガガガガガガガガガガガガと異常とも言える音に変わっていく。

もはや人間の展開できるレベルの戦いじゃねえ……

そして、ゲーム終了の瞬間（とき）が訪れた。

バキッ

嫌な音がした。零雨のラケットの根本が折れたのだ。

野球でバットが折れることはあるが、卓球でラケットを折ったのはおそらく零雨が世界初だろう。

ギネスに認定してもいい。

麗香の球を打ち返せなかった零雨のラケットからこぼれたピンポン球は、

宿泊客（ギャラリー）の頭上を飛び越え、

一定の距離を飛んだところで急速に減速、壁に跳ね返ってボールは

落下した。

ア然。

沈黙が空間を覆った。

宿泊客の一人が我に帰ってピンポン球を拾い、俺に渡してくれたのだが、

ボールは傷つき、ボコボコになって、一部ひび割れが入っていた。

どれだけすさまじいエネルギーだたのかを物語っている。

誰かが描いた男の顔も、ラケットに打ち返されるときに擦れて所々が剥げている。

「これは……引き分け、だな」

匠先輩はラケットが折れたでは仕方がない、と溜息をついた。

そして訪れた貸し出し道具の返却の時間。

ボロボロになって帰ってきた道具を見て、係の人が言った。

「弁償してもらいます」

＊＊＊

そう、匠先輩が言った臨時の出費とは弁償代のことだ。

「それにしても、二人ともあんなに動いたのに、よく体力が持ったね」

と、チカ。
それを聞いた麗香が、あ……と小さく声を上げて自分の侵したミスに気がつく。

「どうしたの？」

助手席のチカが振り返って麗香に聞く。

「ううん、何でもない」

「それならいいけど……」

「先輩、今日の予定は何でしたっけ？」

ジョーが聞く。

「今日は……そうだな、昨日、一昨日と観光したが、この中に観光だけじゃ満足しない人間が一人いるだろ？」

匠先輩はミラー越しに美羽の姿を見つめ、優しく尋ねる。

「美羽ちゃんはどこか行きたいところはある？」

「遊園地！！」

「と、そういうことだ」

クルマは草原の中のアスファルトのくねくね道を軽快に走り抜けていく。

第４話－１１　スパイラル・トレイン　４日目－回想（後書き）

評価・感想をいただけると、作者の励みになります。
出来ればよろしくお願いします。

作者は卓球、というよりも球技全般が苦手です（＝ｗ＝；）

第4話－12　スパイラル・トレイン　4日目－「ありがとう」

四泊五日の旅の四日目。
五日目の朝に俺達は元の生活圏に戻っていることを考えると、
四日目が旅の最終日と言っていいだろう。

そんな四日目を、順調に稼動中の使い切り型天然エネルギー生産施設「太陽」の
過生産なエネルギーをモロに喰らう遊園地で過ごしたわけだが、
正直言って語るほどのことはなかった。
暑苦しく蝉がジ～ジ～とどこにいても変わらない、
いつも通りのサラウンドな鳴き声を響かせ、
アスファルトの照り返しがきつく、少し遠くを見れば景色がゆらゆらと揺れている。
そんな中で他の来場者のそれと変わらない一日を過ごしただけに過ぎない。
あえて言うならば、八月の終わりかけの遊園地だったことで、
盆休みのような混雑もなく、順番待ちも比較的短くて済んだことぐらいだ。
どこにでもあるような平凡な遊園地の楽しみ方をした俺達が、
どんなアトラクションに乗って、というか俺の場合は
だいたいの場合において強制乗車だったんだが、まあそれは置いといて……
とかく、どんなアトラクションに乗ってどんな事をしたのか、それは想像にお任せする。
俺達を好きなように動かして、好きなように妄想……ではなく空想してもらって結構だ。

……好きに想像していいからといって、俺達に変な事させるなよ？

そして時は進んでその日の夕方。
俺達は、行きに降りた駅と同じ駅のプラットホームで、
行きと同じく列車が滑り込んでくるのを待っていた。

「やっぱしあんな強い日差しの中にいたんじゃ、日焼けはしちゃうよね……」

チカが手で扇いで、汗が滲んでいる顔に風を送りながら言った。

「仕方ないと思う。
こんな陽射しなんだから」

行きと同じく麦藁の帽子を被り、いかにも涼しそうに麗香が答える。

「あ～、夏休み明けの始業式で顔真っ黒になってたとか、なんかやだな～」

チカは今朝、ホテルを出発する前にこれでもかというほど日焼け止めを塗ってたのだが、
もしそれで日焼けしてたら、俺は日焼け止めの効能を疑うね。

「日焼け止めで満たしたプールに飛び込んだ直後」と形容できそうな程塗ってたからな。

「……ところで、麗香は日焼けして皮が剥けた経験って、ある？」

「え？、どうして？」

「麗香って、何か≦外出はよくするけど絶対に日焼けしない≧っていうイメージがあるからさ、
麗香が日焼けしてるところ、想像出来なくって」

プッと噴き出し、なにそれぇと言って麗香は笑った。
麗香、どんどん人間くさくなってくな。
それを傍で見ている俺は、喜ばしいのか寂しいのか、
はっきりと区別がつかない微妙な感情を抱き、人に聞かれぬよう、
透明な溜息をついた。

「ちょっと、あたしをバカにしてる？」

「うふふ、ううん、してないしてない」

「……で、日焼けしたこと、ある？」

「ううん、ない」

やっぱり、とチカは言った。

はあ、疲れた。
そこで俺は手持ちのバックから最後のリポビタン○を取り出し、ぐいっと飲む。
……ぬるい。常温。
クーラーボックスに入れてたわけじゃねえし、その上この暑さだ、ぬるいのは当然だ。
だが、やっぱ暑い日のドリンクは冷えていたほうがいい。

ところで、リポビタン○のCMに、
キャップを親指一本で爽やかに開けるシーンがあったが、
あれは俺にも出来るのかとふと疑問に思い、
人に見られぬよう、昨夜ホテルの部屋の隅でコッソリ実際にやってみたんだが――

当然ながらムリだった。

十分ほどキャップと格闘し、親指も痛くなり、ムリだと諦めを悟った瞬間、
何やってんだ俺、と急に恥ずかしくなった。
誰にも見られなかったことだけが唯一の心の救いだ。
あれは一人チャンネル戦争に匹敵するほどの激しい羞恥と後悔だったぜ。

空きビンを駅のごみ箱に放り込んだ直後、
俺達の乗る寝台列車“向日葵（ひまわり）”がホームに入ってきた。
確か、この列車も夏休み限定の臨時便だったんだっけか。

まあ、向日葵って名前がつくぐらいだし、合ってるだろう。
早速乗り込み、俺達は第二回部屋割り会議（今回も匠先輩は一人部屋）を開催した。
ホームで待つ時間があったのになぜ部屋割りの話を持ち出さなかったのだと、俺は思った。
……ん？
前にも同じようなこと思ったような気がするんだが……デジャブか？

部屋割りは行きと同じ部屋割りになり、美羽はチカと、ジョーは零雨と、俺は麗香と一緒になった。

寝台列車に一度乗っている分、どこに何があるのかなどの勝手は分かっている。
俺は慣れた手つきで荷物を部屋に運び入れた。

「……ねえ」

俺が荷物を運び入れ終えてベッドに寝そべった時、静かに麗香が口を開いた。

「なんだ？」

「今頃言うのもおかしいけど――もっと早く言うべきだったのは私、分かってる。
でも、言わせて欲しいの」

「どうした、いきなりシリアスになって」
「……笑わない？」
「話の内容によるが」
俺が答えると、麗香は視線を落として黙り込む。
「……笑わねえよ、真剣な話なんだろ？」
「本当に笑わない？」
「ああ」
「『ありがとう』」
「……が、どうした？」
「コウくんに言わなくちゃいけなかったのに、なかなか言えなかった言葉。
ほら、行きの電車で私――」
ああ、あのことか。
麗香がバグったこと。
あれはさすがに焦った。

「言いたいことは分かった。
だが、それは俺に言う言葉じゃねえ。
実際にお前を助け出したのは俺ではなく零雨だ。
今の言葉は彼女に言うべきだ」

「違うの」

「何が違う？
俺は何もしてねえぞ、言っとくが」

あの時、俺は麗香に対して何もしなかった。正確には結局何もできなかった。
二人の協力者として窮地に陥った麗香を俺は助ける義務があった。
友人として助ける義務があった。

だが俺は何をした？

何もしていない。
ただ零雨の荷物を漁っただけに過ぎない。
俺が何も手だし出来ずに泡吹いてたところを、零雨が見つけてちょちょいと助け出しただけ。
俺は何もしていない。何も。
それでも麗香は首を横に振った。

「違うの。
結果的にはそうかもしれない。
でも、コウくんは私を助け出そうとした。
それに対して私はお礼を言いたいの」

「……」

結果より途中のプロセスってわけか。
まあ確かに助け出そうとは思ったものの……
気持ちだけが空回りしてたからな、あんときは。
どうにかせねばと舞い上がって、自分自身の身の程も知らずに勝手に振る舞った。
その結果、ステージ0にアクセスしたはいいものの、
そこからどうしてよいか分からずに立ち往生しただけだ。
じゃあ他の方法があったのかと聞かれると、
貧相な思考回路しか持たない俺には答えることが出来ない。
だが、きっと別の助け方があったはずだと思っている。

「だから、お願いだから、お礼を言わせて。
ありがとうって」

「俺は礼を言われるほどのことはしてないぞ？」

「それでも」

「……言おうが言うまいが好きにしたらいい」

俺は頭をボリボリと掻きながら答えた。
正直、俺はこのシチュエーションで礼を言われるのは慣れていない。
本音を言うと、日常的に使う“ありがとう”は別に何とも思わないのだが、

こういう場面での“ありがとう”は、正直照れるし、恥ずかしい。
だから、俺は礼など言われたくなかった。

「じゃあ言わせてもらうね、『コウくん、ありがとう』」

「プッ」

俺は恥ずかしさを本能的に隠そうとし、つい笑ってしまった。

「……さっき笑わないって言ったよね？」

「ククク……悪い悪い、本当、約束破って悪い、ククク――」

「そこで笑わないでよ、恥ずかしいじゃない」

麗香は顔を赤くして、もうお礼なんてしてあげないからねっ！と言った。

「そうしてもらえると助かる」

「……え？」

「正直、俺はこの手の礼を言われるのは慣れてねえんだ。
二人して恥じらいながら礼を言うぐらいなら、いっそのこと言わない方が精神衛生上いい」

「私は言わない方が精神衛生上良くないと思うけど……
じゃあ、これからコウくんにお礼を言っちゃダメ？」

「いや、ダメってわけじゃねえが……」

「それなら言わせて。
その方が私は好きだから」

それからしばらくして食堂車で食事をとり、
シャワーで六分間しかお湯が出ないひもじさを体感しながらからだを洗った。
俺はは旅行の疲れもあって、早めに寝ることにした。
いつもよりも早い消灯だった。

第４話－１３　スパイラル・トレイン　？日目－１：２７ａｍの恐怖

途中、目が覚めた。
目を開けると暗い部屋が目に入った。
どうやら、夜中に目覚めたらしい。
夜中に起きることは誰にでも経験があることだろうが、
旅の疲れを感じて早めに寝たはずの俺が夜中に起きるなど、不可解な事象だった。
本来ならばいびきでも立てて爆睡してもいいはずだ。いや、そうでない方がおかしい。
まあ、実際に起きてしまったことには変わりはない。

暗い部屋の中を、列車の周期的振動と音だけが部屋を支配している。
俺は部屋の壁から発する緑色の光を見た。

ありゃなんだ？

身体を起こして目を擦ってよく見てみると、それはただの備え付けのデジタル時計だった。

「なんだ……」

時計は≦１：２７ａｍ≧と：を明滅させながら表示している。
１：２７ａｍ。
俺の感覚的に、この時間はまだ深夜の時間帯に当てはまる。
まあ世間一般にもそういう認識であろう。
匠先輩が好んで観てるという「深夜アニメ」とやらも、
夜中の３時ぐらいにやっているそうだから、その時間帯までは深夜

といえる。
雑談はともかく、まだ夜明けまではたっぷり時間がある。
そこで俺はもう一回ベッドに潜り込んで夜明けを待つことにした。

また、夜中に目が覚めた。
なんだよ、こんな時に限って眠りが浅いとか、マジ勘弁してくれよ。
せっかく起きたのにまた寝てしまうのが少しもったいないと思った俺は、
喉が渇いていたのもあり、就寝前に一本購入していたペットボトルのお茶を飲み干した。

その時、身体に不自然な力が加わっていることに気がついた。
どうやら列車は長いカーブに差し掛かったようだ。
運転手も大変だな、こんな夜中でも運転席に座って列車の安全運転を励行してんだろ?
飛行機は自動操縦機能があるから、パイロットは操縦桿を常に握りつづける必要はない。
だが、自動操縦機能がない電車の運転手は途中で居眠りとかしないのだろうか?
まあ、居眠りしてもらったら大惨事確実だろうから、
運転手が定期的に交代するとか、なにかしらの対策を練っているに違いねえ。
まあ思慮に耽っていても夏の夜は長く、そう簡単には明けてくれない。
俺は再びベッドに潜り込み、今度こそすがすがしい朝日が拝めるよう願いながら目を閉じた。

スッキリとした感覚とともに、目が覚めた。
だがそれと同時に俺は落胆することになった。
夜はまだ明けてはいなかったのだ。

三回目。

俺は不眠症を患っているわけではない。
だがなぜか夜中に目が覚めてしまった。
さて、どうしたものか……
もうスッキリと目が覚めちまったから、もう寝て夜明けを待つことは出来ない。
こんな夜中に、とはいってもまあ、あと一～二時間もすれば夜は明けるだろう。
苦痛の時間が始まるな、こりゃ。
俺は備え付けの時計を見て、夜明けまでの概算の時間を求めた。

≦1：27am≧

……ん？
最初に起きた時と時間が変わってない……？
この時計、壊れてたのか。
この部屋に入ってきたときは気にも留めなかったから、気づくも何

も分からなかったが……
とりあえず、口が渇いた俺はペットボトルのお茶を飲み干し、携帯電話を取り出した。
正確な時刻は何時だろうか、何か暇潰しになるものはないか、この二つの欲求の充足を俺はコイツに求めた。
暇つぶしになるようなものについては、行きにちょっとはまった携帯ゲームでいけるだろう。

携帯電話を開けると、現在時刻が表示された。

≦1：27ａｍ≧

……。

壁に備え付けてある時計と同じ時刻だ。
どういうことだ……？
あの壁のデジタル時計は壊れていることは確実であるから、この携帯電話の現在時刻を信用せざるを得ない。
まさか一分以内に三回も寝て起きてを繰り返すことはあるまい。
両者とも奇しくも同じ時刻を示しているが、携帯電話の時間はそのうち進む。
だが、この携帯電話の方の時計も壊れてしまっているのではないかと、
一抹の不安も覚えているのも確かだ。
何せ、壊れた壁時計と同じ時刻を示しているのだからな。
その不安を打ち消すため、俺は携帯電話の時刻表示が切り替わるのを待った。

1、2、3、4、5、6、7、8、9――
――55、56、57、58、59、60――

――61、62、63、64、65、66、67、68、69、70――
――95、96、97、98、99、100、101、102、103。

おかしい。
時刻が切り替わらない。なぜだ？
俺が切り替わる秒数を一秒ずつ数えていた。
人間がカウントするのだ、確かに多少なりとも誤差はあるだろう。
しかし、だ。100秒を越えることはどんな無謀なカウントをしても有り得ない。
この時計も壊れちまってたのか？
だとすると、一日は1440分だから、
1440の二乗分の1の確率で二つの時計が壊れたことになる。
1440の二乗。
携帯電話の操作はできる。
電卓機能でその答えを求めた。

1440×1440＝2，073，600

2，073，600分の1の確率。
そうやすやすと当たるような確率ではない。
だが、ここで実際に起きている。
この運が宝くじに向いていたら、小金持ちぐらいにはなれただろうな、ハハハ……
それよりも携帯が壊れたとなるとだるいな……

ここまで考えた時、俺はある一つの矛盾を発見した。

時計のこととは全く関係がないのだが、見過ごしてはおけない、非常に不可解な事象だ。
それは俺がペットボトルの茶を二回飲み干しているということだ。
俺はペットボトルのお茶を一本しか買っていなかった。
ということは、俺がペットボトルの茶を飲み干せるのは当然一回ポッキリのはずだ。
なぜ、俺は二回もペットボトルの茶を飲み干すことができたのだろうか。

俺はペットボトルの茶を手にとった。
飲み干したはずのペットボトルの中には、
いつの間にか茶がちゃぷちゃぷと音を立てて、入っていることを俺に伝えている。

おかしい。おかしすぎる。
非常に低い確率であるにもかかわらず、同じ時刻に壊れた二つの時計。
そして、何回でも飲み干せるペットボトルの茶。
俺は隣で寝ているはずの麗香に助けを求めて目をやった。

……いない。

もぬけの殻だ。

「……麗香？」

俺は一人つぶやき、麗香を探すため部屋を出た。

誰かの顔が見たい。他の乗客の顔でも構わないが、出来れば顔見知りの顔が見たい。

通路は消灯時間を過ぎても、
夜中にトイレに行く人のために常時点けられているため、明るい。
辺りをぐるりと一周見回すが、誰の姿も見えない。
俺は、麗香が行きそうな所を探すことにした。

トイレに行っているのか？それとも、また別の何かをしているのか？

しばらく寝台車両の通路を歩き、自動販売機が置いてある車両にたどり着いた。
この車両は、公衆の休憩室になっており、
自動販売機の他にも、テレビやソファー、小さな喫煙室が中に入っている。

「……あ」

そこに、人を見つけた。
麗香ではない。
どこかで見たことがあるような、セミショートの髪の、制服姿の男子高校生？
奇妙な風貌だ。
だが、奇妙な風貌だの、そんなことは今の俺にとってはどうでもいい。
俺は怪しむどころか、むしろ人に会えて安心していた。
彼はソファーに座ってうつむいている。

「あの……」

話し掛けても微動だにしない。
俺は構わず続けた。

「ここに俺と同じぐらいの年の女の子、来ませんでしたか？」

「……。」

「あの、すみません」

「……。」

何度話し掛けてもその青年は反応しない。
……寝てるのか？
そうかもしれない。
こんな夜中に一人でいるのだ、休憩室でくつろいでいるうちに、いつの間にか寝てしまっている。
そう考えるのが妥当だ。

「あの、もう夜も遅いですし、部屋に戻った方がいいんじゃないんですか？」

俺はその青年の肩を叩いた。
すると、その青年が急に俺に顔を向け、ニヤリと笑った。
な、なんなんだ、こいつ……
驚きのあまり後ろに一、二歩のけぞった俺を、
何が面白いのか理解できない恐怖の笑顔で見つめる。

「な……なんすか？」

俺の歯に青ノリでもついてんのか？

……おもしろくない冗談だ。全くもってくだらん。

彼は俺から視線を離し、ニヤニヤしながら壁に掛けてある時計を見つめる。

それにつられて俺の視線も時計へと移る。

≦1時27分10秒≧

その時計は古いアナログ時計だった。

秒針が一秒一秒、正確に時を刻んでいる。

俺は再び謎の青年に顔を向けるが、青年は視線を時計に固定したまま動かない。

時計に視線を戻すと、秒針は誠実に時を刻んでいた。

……ある時点までは。

1時27分30秒に差し掛かった時だった。

秒針がまるで跳ね返されたように逆方向へカウントし始めたのだ。

28、29、30、29、28、27、26、25――

時計は一秒ずつ戻っていく。

一体何が起きているのか、さっぱり俺には理解できない。

ハッキリ言ってカオスだ。
呆気に取られている俺の横で、謎の青年はククク……と笑い声を漏らす。
これの何がおもしれえんだお前はよ！
1時27分0秒まで巻き戻った秒針は、またそこで跳ね返り、また正常な方向へ時を刻む。

背筋に悪寒が走った。

青年も、時計も、尋常じゃない。
この古ぼけた時計に、秒針を逆にカウントさせるという、とんでもない機能が搭載されているとは思えない。
この謎の青年にしても、何が面白くて笑っているのか理解できない。
異常なほど謎に満ちている。

チキンな俺は、もう我慢の限界だった。
俺は逃げるようにして、
いや、誰が見ても逃げる格好でその青年から、その時計から、そしてその車両から離れた。

今見たものが信じられない。
何がどうなっているのか、俺はその情報の断片も理解できない。
そもそも、時計が逆方向に時を刻む理由など、どこにもない。
もし、俺が壊れたと思っていた時計も、30秒で逆カウントを始めているとしたら……
それは二つの時計が同時に壊れる確率よりも起きる確率が低い事象、というかほぼゼロに等しい確率だが、なぜか同時に壊れるよりも信

憑性があった。

俺の寝ていた部屋に逃げ帰ってドアに鍵をかけ、部屋の照明をつけることも忘れ、
置いていた携帯電話を開き、暗闇の中零雨との連絡を図る。
操作をする指は震えている。

メールの送信先に零雨を指定し、
「ちょっと俺の部屋へ来てくれ」と、打って送信ボタンを押す。

送信中・・・

短いメールのはずだが、その表示が異常に長い。

送信に失敗しました。
電波状況が悪い可能性があります。
別の場所へ移動して再送信してください。

何とも絶望的な知らせだった。
行きは車内でもきちんと使えたメールが、使用不能になっている。
もしかしたら列車が電波塔から遠いところにあるからかもしれん。
俺は時間を置いて再送信してみることにした。

それから何度も送信を試みたが、同じエラーメッセージが出て送信できない。
メールが無理なら直接電話してみるべきだ。
部屋を出て隣の部屋に行けばいるのだろうが、あの青年に出くわすかもしれないと考えると、どうしても部屋のドアを開けたくなかった。
零雨の電話番号を何とか入力し、通話ボタンを押して携帯電話を耳にあてる。

プププププププププ……（接続音）

・・・。

沈黙。

接続する音が聞こえたまでは良かったものの、そこからコール音に続かない。
やはり、繋がらないのか？

ギャァァァァァアアアア――――！！

咆哮に近い金切り声に似た大音量のノイズが聞こえ、
俺はぎょっとして思わず耳に当てていた携帯をベッドに放り投げる。
全身に戦慄が走る。

こんなノイズ、聞いたことがない。
そもそもこれって……ノイズ……なのか？
本当に金切り声じゃねえのか……？
……。
考えたくねえ。
もしこれがただのノイズだとすると、いや、ノイズと仮定しよう。
これがノイズじゃなくて金切り声とか、
よく分からん異形の怪物っぽい、臨場感溢れる咆哮ボイスだったらとかと考えるのは、
自分で自分の寿命を縮めることのように思える。

現実逃避してるだろうって？
現実逃避せずにこの場面を乗り越えられる奴がいるなら、主役、代わってほしいもんだ。
こんな最高にリアルなホラー、遊園地のお化け屋敷の比じゃないぜ。

話を戻そう。
この音がノイズだと仮定すると、
電話にちょっとしたノイズがはいることはよくあるが、
ある程度ひどくなってくると、普通、通話はぷつりと切れてしまう。
このノイズはアナログテレビの砂嵐の音よりタチが悪い。
こんな状況下ならなおさらだ。

投げた携帯電話は暗闇のベッドの上で液晶を光らせながら、
金切り声（のようなノイズ）を受信し続けている。
俺は嫌々携帯を拾い上げ、通話を切った。

とにかく、携帯電話が使えない。
あとは……嫌だが、零雨に会いに行くには直接部屋のドアを叩くし

か方法はない。

第４話－１４　スパイラル・トレイン　？日目－消えた乗客

俺は恐る恐る部屋のドアの鍵に手をかける。
俺が鍵を開けた瞬間に、例の気味悪い青年が待ち構えてるんじゃねえかと思い、
鍵を回すのを一瞬躊躇する。

あの青年のニヤリ顔はマジで気味が悪い。

……男のくせに、何ビビってんだよ、俺。
ヤツがいたらその時はその時、襲ってきたらヘビィな一撃を腹にでも喰らわせりゃ……
……あ、俺、殴り合いの喧嘩、したことねえじゃねえか。
この完全無欠のハト派人間、つまり俺はここで自分の身の程と無力さを感じた。
襲われたら抵抗する間もなく一発でゲームオーバーになるだろう。
開けるべきか、それともそのままここにいるべきか。

……。

携帯電話の時刻表示は、
≦１：２７ａｍ≧のまま変わらない。
壁に備え付けのデジタル時計も同じ時間を指している。
このままここにいて、時間が元のように進み、朝が来ることはあるだろうか。
始まりがあるものには、必ず終わりが来る。

この奇妙な現象も、始まりがあれば終わりは来るはずだ。
だが、終わりがいつ来るのか、それは誰にも分からない。
もしかしたら、それはずっと先のことかもしれない。

最悪の話、
そもそもこの現象自体がメビウスの輪のように、
始まりも終わりもクソもないようなものだったとするならば、
俺は来るはずのない終わりを待ちながら、一生このままここに居続けることになる。
当然俺達が目指していた終着駅（家）には着かないだろう。

深く深呼吸して、頭の中をきちんと整理してみる。
しつこいようだが、冷静な状況の整理はいかなる場合においても重要だと俺は考えている。
気持ちが少し落ち着き、全身の感覚が研ぎ澄まされる。

列車の走る音。
それによって起きる、不規則な振動。
カーブを曲がり続ける列車。
暗闇の中に一人取り残されたような感覚。
通路からは何も聞こえてこない。

「よし」

俺は思い切って、しかしそっと鍵を回し、開錠する。
カチャ、という音が聞こえた。
続いて俺はそっとドアを開け、通路に顔をだして周りの状況を確認する。

心配は不要、通路には誰の姿もなかった。

ふう、無駄な心配をしちまったな。
俺は零雨がいる隣の部屋のドアを軽くノックした。
部屋には零雨とジョーがいる。
そのどちらが出ても俺は構わない。とにかく独りでいるのは精神的にキツイ。

え？寂しかったらあの青年の所に行けばいいじゃねえかって？
確かに独りじゃなくなるけどな、
あの奇妙な人間は既に俺の主観フィルターによって敵属性に分類されてんだ。
分類した理由は何となくだが、あの青年が俺の味方になってくれるとは考えづらい。

さっきノックしたが、部屋の中から反応がない。
零雨ならすぐ反応して起きそうなものなんだが……
もう一回ノックしてみる。

……（無反応）。

出て来ない。
……ちょっと不躾だが勝手に部屋の中に入らせてもらう。
もちろん鍵が開いてれば、だがな。

ドアノブに手をかけ、ゆっくり回すと、ドアは簡単に開いた。

「邪魔するぞ……」

そっと声かけして部屋の中に入る。

……どうなってる？

部屋の中は空だ。何もない。

置いてあるはずのジョーと零雨の荷物もさっぱりなくなって、

部屋には綺麗にセットされたベッドが二つ、

通路の光に照らされ、暗闇の中でほのかに発光しているだけだ。

もちろん、二人の姿もない。

ジョーと零雨はどこに消えた？

まるでこの部屋には宿泊客はいません、というような様相だ。

俺は部屋を飛び出し、その隣のチカと妹の美羽が寝ているはずの部屋のドアを、勢いよく開けた。

やはりいない。

さっきの零雨の部屋と同じく、きれいにセットされたベッド。その他には何もない。

ふと目に入った壁に埋め込まれているデジタル時計は、≦≦１：２７ａｍ≧≧と表示されている。

ここの時計もそうか。

今更だが、どうやら時計の表示は正しいようだ。

時計が壊れたにしてはあまりにも確率が低すぎる。

つまり、実際にこの３０秒間を何往復もしているということだ。

やはり、午前1時27分ちょうどから午前1時27分30秒の間を、
あのアナログ時計が示すように繰り返しているのか？そうなる意味
が分からねえ。

俺はまた部屋を飛び出し、消え入りそうな僅かな望みを胸に、
匠先輩が寝ているはずの部屋のドアを開けた。

「チッ、いない」

やはり、部屋の中は零雨やチカのいるはずの部屋と同じ状況だった。
これは大掛かりかつ悪質なイタズラなのか？

俺以外の全員が部屋を綺麗さっぱり掃除して抜け出し、
時計も午前1時27分から進まないように改造し、
ペットボトルの茶も俺が飲んで、寝た隙に仕掛人が新しい茶と入れ
換えた。

だが、携帯電話が繋がらないのはどう説明する？
いくら大掛かりなイタズラだったとしても、電波塔まで改造は出来
ないはず。
だから繋がってもいい、というか繋がらなくてはならない。
……。

あああああっ！！！！
俺の頭の中を整理不可能なカオスが沸き出してきた。
事実との整合性がどうしてもとれない！矛盾しまくりだ！

俺は他の乗客がいるいないに関わらず、片っ端からドアを開けていくことにした。
ドアを開けて他の乗客がいたなら、それはそれは気まずいどころでは済まないが、
そうであってほしいと俺は思う。

俺は次々とドアを開けていくが、中はすべて、空、空、空。
何両にも渡ってすべてといっていいほど多くの部屋を調べたが、どれも空室同然だった。
ここから導き出される更なる異常事態、“乗客が消えた”。
ふつう、跡形もなく人が消えるなんぞ、ＵＦＯにでもさらわれない限り不可能だ。
だがしかし、現実問題、それが実際に起きている。

いずれにせよ、今この列車の中には、
乗務員、俺、謎の青年しかいない、ということになる。
八方塞がりだ。何もできねえ。
運転手に異状を知らせようにも、
この列車は旧型の客車で、非常通報ボタンがない。
運転手は先頭で電気機関車をグイグイ操作してるはず。
普通一般人が電気機関車の中に入ることはないはずで、
電気機関車と直接連結している先頭客車もそういうこと前提の設計になっている。
車掌がいたとしても、最後尾の車両にいるのかもしれないが、
途中で青年がいた休憩室を通過しないとたどり着かない。
そもそも乗務員がいるかどうかさえも怪しい。

これから俺は何をすればいいのか、全く理解できない。

……困った。
俺は絶望的な状況にやりきれない溜息を盛大に漏らす。
寝台列車という閉鎖された空間の中で起きる怪奇現象。
孤立無援。逃げ場はない。

……待てよ、そもそも俺はこの怪奇現象の「例外的」存在じゃねえのか？
俺は３０秒どころか１０分以上の連続した記憶を保持している。
時間が進まない世界の中で、俺だけが……
いや、俺と例の青年だけが正常な時間で進んでいる。
こういう考え方もアリかもしれん。

“周りの世界は正常な時を刻んでいる。異常なのは実は俺達のほうである”

……もうやめとこう。
これ以上考え込むと俺の脳がオーバーヒートして茹で上がっちまう。
茹でたカリフラワーのようになるのはゴメンだ。

俺は誰もいない通路に出て、例の青年がいないことを確認すると、
特に何かをするつもりはないが、適当に壁にもたれ掛かって、
この状況から脱出できるいい名案が、どっかに落ちてないものかと思う。

しばらくそこでボーッとしていると、どこからかジリジリという音が聞こえてきた。

……！！

俺が音がする方を向くと、
網目状に組まれたオレンジ色レーザーっぽい光がこっちに迫ってきているのが見える。
何かを探しているかのようだ。
コピー機が原稿をスキャンするように、一定の速度で迫ってきている。
嫌な予感しかしない。本能が危険なものだと警告している。
その光は小走りに近い速度で襲ってくる。
この程度の速さなら何とか俺でも逃げられそうだ。
俺は隣の車両に逃げ込み、連結部分のドアの窓からその光の様子をうかがう。
光は減速することなく一定の速度でなお近づいてきている。

その光は車両のドアをすり抜け、俺が逃げ込んだ車両に侵入してくる。
まずい！
俺はどんどん列車の隅に追いやられ、とうとうあの青年がいた車両にまで追い詰められた。

どうする？

隣の車両を覗き込むと、
例の青年が俺が話し掛けた時と同じ姿勢でソファーに座ってうつむいている。

どうしようかと一瞬の迷いが生まれ、それが俺の判断を誤らせた。

俺が青年がいるのは我慢して、隣の車両に逃げ込もうと決めた時には時既に遅し。

レーザーは俺の目の前まで迫っていた。

第４話－１４　スパイラル・トレイン　？日目－消えた乗客（後書き）

祝！お気に入り登録　３０件です！！
文才がない作者の稚拙な小説をお気に入りに登録していただけるのは、
とてもありがたいことです。
これからも、どうぞよろしくお願いします！

第４話－１５　スパイラル・トレイン　？日目－システムとバグ（前書き）

戦闘描写、苦手なんです……

第4話－15　スパイラル・トレイン　？日目－システムとバグ

オレンジの光が俺を通り抜けた。

……通り抜けた？

レーザーに当てられても、特にこれといった感覚もなく、俺自身も何ともない。

拍子抜けだ。

オレンジの光は青年をも透過し、さらに奥の車両へと進んで行ってしまった。

今のは一体何だったんだろうか。

ド、ドドン――――！

腹に響くような巨大な音とともに俺のいる車両が大きく揺れ、それと同時に通路の照明が一瞬ふっと消えてまた点いた。

あまりの揺れの激しさに俺はよろめいて不様に仰向けに倒れ、見事に後頭部を壁に打ち付けた。

「痛ってぇ……」

今のは我ながら見事な頭の打ちっぷりだった。

頭を打った痛みで目を開けることが出来ない。

「ここが内部みたいね」

聞き慣れた声がした。

この声は……

「ハッ……コウくん逃げて！」

麗香だ。うん。助けに来てくれたのか。

それよりも、今、「逃げろ」って言われた気が。

……逃げろ？

答えを出すまでもなかった。

突然何者かに首を締められたからだ。

ククククク――と笑い声が間近で聞こえ、やっとのことで目を開けると、

そこには俺の首を締める青年の姿が見える。

なるほど。確かにこりゃ逃げにゃならんな。もう手遅れだが。

「私の友達に手は出させないっ！！」

麗香がそういうと同時に、青年の顔に麗香の強靭な蹴りが入った。

謎の青年は強烈な一撃を喰らって俺から手を離した。

その話し方は正にヒーローものの王道を行くような感じだ。

ヒーローショー（？）かなんかに出れば、ちびっ子が応援してくれ

るぜ、きっと。
って、殺されかけながら何を思ってるんだ俺は！

麗香は青年の両肩を掴んで横に投げ飛ばした。
それと同時に俺の目の前に白い手が差し述べられる。
その手の持ち主は零雨だった。

「ここは危険。
私のすぐ近くにいること」

さらりと零雨は言った。
零雨が饒舌になっているということは、どうやら非常事態らしい。

「悪いな」

俺は零雨の手をとり、立ち上がった。

「麗香から離れて」

零雨にグイグイと引っ張られ、
麗香と青年のつかみ合いが行われている現場からやや離れた位置に
誘導される。

「零雨、あの青年は一体何者なんだ？」

俺が聞くと、零雨は簡潔に言った。

「自律思考型バグ」

「ううむ……無知な俺にも解るように、詳しい説明をしてくれると有り難いんだが……」

「彼は人間ではなく、なにかしらのプログラムの異常によって生成されたプログラム。

このプログラムは通常のバグとは違い、自ら思考し、

このシステム内での生存を図ろうとすることが解析によって明らかになった」

「……悪質なバグだな」

「バグよりもコンピュータウィルスに近い存在。

しかし起源は現在動作中のプログラム群のバグであると考えられることから、バグに分類される」

「しかしだ、これが一番謎なのだが、なぜ俺がここにいるのか、理由が分からん。

ここに俺がいることで何か変わるのか？」

「あなたは『利用された』可能性が高い」

零雨は俺の質問とは違うベクトルの答えを出し、

実際、俺はそれが零雨の解答だと理解するには少し時間が必要だった。

それにしても利用？あの青年は何の価値もない俺を利用したってのか？

どんな風に利用したのか、その利用法を是非とも教えてほしいところだ。
……まあ彼は今、麗香の猛攻撃を喰らうのに忙しくて、教えてなどくれないだろうが。

麗香は青年の肩を掴んで通路の壁に押し付け、身柄を拘束している。
にもかかわらず青年はニタニタ笑う。

「私もこのバグの除去に当たらなければならない。
あなたはここにいて」

零雨はそういい残し、俺の元から離れていった。
勇敢だな、と背中を向けている零雨に俺が言うと、
ゆっくりと振り返り、いつもの無表情のまま答えた。
「これが本来の仕事」と。

青年は零雨が近づいてくるのを見つけると、押さえ付けている麗香を軽々と弾き飛ばす。

「キャッ！！」

麗香は反対側の壁に背中を強く打ち付け、
一瞬ふらついたものの、またすぐに体勢を立て直した。
自由になった青年は、目の前まで近づいてきた零雨と向かい合わせになって睨み合う。
先につかみ掛かったのは青年の方だった。
彼は零雨の胸倉を片手で掴み、持ち上げる。

なぜか零雨は抵抗しようとしない。
青年はそのまま零雨を窓ガラスに向けて投げ付け、
零雨はガラスを突き破って列車から飛び出し、視界から消えた。

……と、思ったのだが、どうやら零雨は窓枠に運よくしがみついていたようで、
割れたガラス窓から顔を覗かせ、再び通路に戻ってきた。
零雨の両手にガラスが突き刺さり、そこから鮮血が流れ出る。
青年はそれを見てまたククク……と不気味な笑いを浮かべている。
まるで弄んでいるかようだ。

麗香はそれを見て立ち上がり、拳を硬く握りしめ、次の一撃を青年に喰らわせようと動き出す。

「ハァッ！！」

掛け声とともに麗香の右ストレートが繰り出されたが、
青年はふらりと、しかし素早くその攻撃を回避、
麗香の拳は青年ではなくその背後の壁にぶちあたり、そこに大穴が開く。

さすがシステム、緊急時の身体強化はそんじょそこらのチートとは違うぜ。
だが、麗香が攻撃を外してしまったために生まれた一瞬の隙を、彼は見逃さない。
背後に回った青年は麗香の髪を引っ張り、後ろへと薙ぎ倒したのだ。

「麗香！」

今がチャンス、青年は麗香に意識が向いている。
俺のことなど眼中にないはずだ。
青年のニヤニヤフェイスに一発蹴りでも入れてやろうじゃねえか、
そんなことを思い、
気がつけば身体は既に青年に向けて走り出していた。

ところが、途中で足に何かが引っ掛かって、俺は前につんのめり、
盛大に転んだ。

痛ってえ……
アゴを思いきり地面にぶつけたお陰で脳にダイナミックに衝撃が伝わった。
どうやら脳内アドレナリン大量分泌につき、正常な判断がつかなくなっていたようだ。
それにしても、まさか俺がドジ男だったとは……
俺の足に引っ掛かったものは何だったのかと、その方を見ると、零雨の足があった。

「彼は危険。
あなたは邪魔しないで」

怒られた。
どうやら俺の行動を察知し、それを阻止するためにわざと足を出したようだ。
……はいはい、大人しく戦闘を眺めときゃいいんだな？

平凡かつ無力な男はそうするしかないんだろ？ならそうさせてもらいますよ。
俺は起き上がって零雨を見た。

「……零雨、手に刺さったガラスは抜かなくていいのか？
止血がいるんじゃねのか？」

鋭利なガラスが零雨の手の甲を貫通、大量出血で手は血まみれ、指先から血がポタポタと滴り落ちているという凄惨な状態なんだが……

「この程度では私は死なない」

そういいつつも零雨はそのガラス両手からそれぞれ引き抜き、投げナイフの要領で麗香の上に馬乗りになっている青年の喉に向けて投擲、見事命中。
普通ならば事切れるんだろうが、突き刺さった青年の喉からは血は一滴も出ない。
やはり彼は人間ではなかった。
まあ正真正銘の人間は俺だけなんだが、零雨も麗香も、俺の中では人間（ひと）扱いだ。

一方、零雨の手に視線を向けると、ガラスを引き抜いたことで、傷口が広がってしまったらしく、
かえって出血量が増えてしまったのが確認できた。

俺はよかれと思って「抜いたほうがいいんじゃねえか」と言ったのだが――

「あ……なんか出血量、増えちまった……みたい、だな」

俺が言ったばかりに申し訳ない。

「こうすれば問題ない」

零雨はさっきよりも状態がひどくなった手を見て言い、両腕をなぎ払うように振り下ろした。

「……！」

零雨の両腕が刀になっている。
俺は予想外の展開に思わず素っ頓狂な声をあげた。
服の袖から出る二本の金属質の腕は、どこからどう見ても刀そのものだ。

「お前の身体、どうなってんだよ……」

「身体の組成を組み替えた。
これで止血完了」

「いや、腕が全くの別物と化している時点で、止血したとは言えないんじゃ……」

俺が言い切る前に、彼女は青年に向かって走り出した。
話は最後まで聞こう……って言えるシチュエーションじゃねえよな。
はは……
零雨は思いきり身体をねじらせて勢いをつけ、
その刀で青年の首を斬り上げた。

「……うわっ、ちょっ、こっちに転がってくんじゃねえよ気持ち悪い！！」

零雨が斬り上げたことで青年の頭と胴体がきれいに分裂、
生首と化した青年の頭が俺の足元に転がってきたのだ。

「ちょっと零雨ちゃん！
私危ないところだったじゃない！
何でもっと早く応援に来てくれないの！？」

首無しの青年に馬乗りにされている麗香は声を荒らげ、青年の腹を足で蹴り上げる。
青年（胴体）はバランスを崩して横に転倒、自由になった麗香はすぐさま起き上がった。

一瞬、俺の足元の物体が動いたような気がして視線を下に向け、
ちょんちょん、と足で小突いてみる。
軽く小突いたつもりがゴロン、と半回転して青年（生首）の顔が俺
に向けられてしまった。

……ニヤリッ

……！！
い、今、生首が俺に視線を向けて笑ったぞ！！
俺の顔は完全に引き攣っているのがわかる。
こんな気持ち悪いもん、近くに置いておけるかってんだ！
俺がこの生首を離れた所にやろうと、青年のスマイル顔面に蹴りを
入れる。

「がああああっ！！」

こいつ、俺の足に噛み付きやがった！
てか、痛い痛い痛い痛い痛い！
靴履いてるのにこんなに痛覚神経を刺激するとか、どんだけアゴの
力が強いんだよてめえ！！
首斬られたなら大人しく死にやがれってんだ！往生際の悪い首が！
振り払おうと、
生首が噛み付いた足を振り回してみたり壁にぶつけてみたりするが、
全く離れる気配がない。

「ちょ、零雨でも麗香でもどっちでもいいからヘルプ！ヘルプ！カモーン！」

零雨と麗香は頭を失った青年と戦っており、手が離せない状況らしい。
胴体も胴体で頭（司令塔）がなくなったんだから、大人しくくたばっておけばいいものを、頭なしで元気いっぱいに動いてやがる。
視覚も聴覚もないはずなのだが、まるで見えているかのような鮮やかな動き。

「誰かこいつを取ってくれ！！」

俺の叫び声に反応したのは、胴体だけの青年だった。
彼は二人との戦闘をやめ、俺の方に向かってきた。

「お前はお呼びじゃねぇ――！」

何でよりによってお前がこっち来るんだよクソッタレ！！
俺は逃げようとするが、足に噛み付いた生首が足枷になって思うように動けない。

「コウくんはダメッ！」

麗香の声が聞こえたと思った時には、
既に近づいてきた胴体がまるで割り箸を割るように縦に真っ二つに割れ、
バランスを崩して倒れた。
右半身と左半身に両断されてもなお、身体は片腕と片足でどうにか移動しようとする。
ぐ、グロテスクだ……
激痛に慣れてしまったのか、それとも感覚が麻痺してしまったのか、足に噛み付かれている首よりも、この異形の胴体の動きに気持ちがいってしまう。
そこに刀と一体化した零雨が、
うごめく半身にご自慢の腕でみじん切りにしてとどめを刺してしまった。
残るはこの忌ま忌ましい首だけだ。

「零雨、ついでにこいつをどうにかしてくれねえか？」

零雨は俺が指差す足元を見て、くるりと踵を返すと、
麗香の肩を腕刀でぽんぽんと叩き、彼女を連れて戻ってきた。

「零雨ちゃん、どうしたの？」

そう問う麗香に零雨が生首を指した。
生首が噛み付いた足を見た麗香は、困った顔をした。

「……ねえコウくん、一体どうやったらこんなことになるの？」

「転がってきた生首を蹴飛ばそうとしたらこうなった」

「あぁ……そうなの……」

「取ってくれると有り難いんだが……痛てえし」

「あ、うん、すぐ取るね。
コウくん、ちょっと痛いかもしれないけれど、我慢してね」

麗香は生首の左右のアゴの付け根に手をあて、アゴの骨を押し潰した。
バキッ、という不快音が聞こえたのを最後に、生首は俺の足から離れ、
その後麗香の怪力パワーによって生首は原型を留めることなく圧砕されてしまった。

胴体はみじん斬り、頭は圧砕、零雨と麗香の完全勝利だった。

第４話－１５　スパイラル・トレイン　？日目－システムとバグ（後書き）

感想、評価お待ちしています。

第4話－16　スパイラル・トレイン　？日目－Ｓｐｉｒａｌ・Ｔｒａｉｎ

「どうも、助かったぜ」

俺は生首に噛まれた部分をさする。
結構痛かった割には特に異常はなさそうだ。
少しすると、みじん切りにされた彼の姿がだんだん透明になっていき、消えてしまった。

「で、お前達はここに何をしに――」

そこで俺は言うのをやめた。
零雨と麗香が何をしにここへ来たのか、分かり切っていたからだ。
それはバグを消去しに来たことにほかならない。

「……いや、それよりも、さっさとこの超カオスワールドから脱出しよう。
“彼”も倒したんだし、もうここには用はないだろ？」

こんな意味不明な世界とはおさらばして、早くいつもの世界の朝日を拝みてえ。

「うん、脱出プログラムを起動させるからちょっと待ってて……」

麗香はそう答えたものの、一瞬で顔を暗くした。

「……プログラムが効かない」

「それは……脱出できないってことなのか？」

「そういうことになる、わね……」

「どうしてプログラムが効かなくなるのかは知らんが、どうにかならないのか？」

「原因は、この世界のシミュレートプログラムが書き換えられたからだと思う。

多分、私が彼の頭を潰したと同時に、シミュレートプログラムを書き換えられたみたい。

そこまで彼が考えていたのかは分からないけれど……あくまで一説だけど、

彼と同じようなバグがまた発生したとき、私達のような『駆除する側』の存在が邪魔になる。

だから意図的にプログラムを書き換えて私達をここに封じ込めて、同類が発生した時に、その同類の生存確率を上げようとしたのかもしれない」

「消される間際の最後のあがきってわけか。

はぁ、自己中なのか、仲間思いなのか……いずれにせよ、どこまでも往生際の悪いやつだ。

その生存本能に敬意を表してやりたいね」

「一応、書き換えられたプログラム解析し直して、作り直してみれば、脱出できるかもしれない。
零雨ちゃん、解析をお願いしてもいい？」

腕が刀のままの零雨は、ゆっくりとうなずいた。

「零雨、そろそろ腕も元に戻したらどうなんだ？」

「……戻せない。
シミュレートプログラムが変更されたことで、組成の組み替えが行えなくなった」

つまり、零雨はしばらくはその姿のままでいるということだな？
……少しかわいそうだが、そういうことなのだから仕方がない。
ガタゴトと揺れる列車の中で、
俺と麗香は大人しく零雨がこの世界のシミュレートプログラムを解析し終えるのを待っていた。

「麗香、お前は解析しないのか？」

「一人がやっても二人がやっても、作業が終わるまでの時間は変わらないから。
私がやってもよかったんだけど、ほら、零雨ちゃん、腕があんな状態でしょ？
もしも何かがあった時に対応しやすいのは、手がある私の方だし、

それに、解析中は無防備になるから」

だから、零雨ちゃんに頼んだの、と麗香は言った。
それからまたしばらく黙って解析が終わるのを待っていたが、とうとう零雨が声を発した。

「零雨ちゃん、終わった？」

「解析の続行が不可能」

「それ、どういうこと？」

解析が続けられない？どういうことだ？
麗香はその理由を聞くべく、零雨に耳を貸し、ヒソヒソ話をしている。
零雨の話を麗香が話を理解するにしたがって、顔がどんどん青ざめてきている。

「うん……うん――
……じゃあ、それまでに何とかしてとめないと、私達みんな消えてしまうのね？」

麗香の問いに、零雨は大きく首肯した。

「……麗香、どんな悪いニュースなのか聞かせてくれ。

俺も一応状況を把握したい」

「いいけど……」

麗香はあまり言いたくなさそうだが、聞いておかねばならない重要なことだと俺は思う。

俺は、麗香の説明を聞くことにした。

「えっとまず、この世界は、
私達が管理しているステージ２５のシュミレートプログラムに寄生して実行されている、
いわゆる“不正な空間”なの」

「まあ、時計が奇妙な方向へ進んだり、ペットボトルの茶がなくならなかったり、
通常では有り得ないことが起きてるからな、納得できる」

「でね、コウくん。
通常のシミュレート空間はとてつもなく広いけれど、大きさは無限じゃない。
空間の一番隅のほうでは、シミュレートしている物体が、
シミュレート対象外のエリアに飛んでいってしまうことがあるんだけど、
その場合は、ちゃんとその物体を対象のエリアに引き戻すプログラムが働いて、くれるから、
シミュレート対象外のエリアに飛んでいってしまった物体が消えてなくなることは、まずないの」

「例えるなら、野球で場外ホームランされたボールが、また野球場に戻ってくるってわけだな？」

「そういうこと。
でも、それは通常のシミュレート空間のお話。
この世界では、引き戻すプログラムが存在しないの。
だから、今コウくんが例えた例を使うと、
場外ホームランされたボールは、二度と野球場に戻ることなく消えてしまう」

「だんだん展開が読めてきたような気がするが……それで？」

「……単刀直入に言うとね、この列車はあと４分ほどでシミュレート空間の隅に到達するの。
つまり、それは私達が消えてなくなる、ということ。
もしシミュレート空間の外に私と零雨ちゃんが放り出されても、
消去されるのは物体としてのデータだから大丈夫。私達本体まで消去されるわけじゃない。
でも、コウくんは私達とは違って、
放り出されたら、そこであなたの存在自体が消えてなくなってしまう。おしまいなの」

「俺の人生もこのままいけば残り４分ってわけか。ハハハ……
……それまでの脱出はどうしてもできないのか？」

麗香は少しうつむいて力なさげに首を横に振った。

「脱出まではどれだけ急いでも、少なくとも３０分はかかっちゃっ

て……」

「列車の窓からでも飛び出したらどうにかなるんじゃねえか？」

「この空間は特殊な形をしていて、バネのようにスパイラル（螺旋）状の細長い形をしているの。

列車が通れるだけの、最低限の空間しかない」

列車はそう言って、通路の窓にかかっているカーテンを一つ取り払った。

窓の向こうには、漆黒の闇が広がっている。

「この窓から1メートル先に、空間の隅があるの。

この空間は、まるで地下鉄のトンネルのように細長くて狭い。

飛び出すなんて、とてもできないわ」

「じゃあ、スパイラルトンネルの中を運行しつづけるスパイラル・トレインってわけか」

これでやっとこの列車の終着駅が分かったぜ。

……知らない方がよかったのかもしれないが。

「現状は理解できた。

それで、打開策はあるのか？」

「この列車を、止める。3分以内に。」

「4分じゃなかったか？1分減ったぞ？」

「こうしている間にも時間は進んでるから――」

「早く言えよ、それ！
こんなとこでのんびりシリアストークしてる場合じゃねえじゃねえか！」

時間は進みつづけるものであるという世界の超大前提を、
それこそ頭のどこかにホームランしちまった俺も俺なのだが、
何としてもこの列車を止めなければ！

「と、とりあえず、運転士に列車を止めてもらわないと！」

「この列車には、私達3人しかいないのよ。
“私達で”止めるの。
私は先頭車両に行って、パンタグラフ（終電装置。≦≡≧（こんなの））を破壊してくるから、
コウくん達は別の方法でこの列車を止めて」

「お前がご自慢のチートを使って、
運転室にでも入り込んで非常ブレーキでもかけてくりゃ、一発で終わる気がするんだが……」

「それが使えたら、とっくに零雨ちゃんの腕は元に戻ってるわよ！
そうじゃないから、こうやって大変なことになってるんじゃない！」

麗香が珍しく声を荒らげて怒鳴った。

「そうだったな、悪い」

「とにかく、何としてもこの列車を止めるのよ！」

麗香はそう言い切って、先頭車両の方へと走って行った。
……で、俺達はどうやってこの列車を止めろと？
パンタグラフを破壊すりゃ、確かに加速することはなくなるだろうが、
と同時に車内の電気装置すべて、つまり自動販売機から列車の制御装置まで、
すべてダウンしてしまうことになる。
そんな中で、列車をどうやって止めろというのだろうか。
とんとん、と肩に冷たいものが置かれた。
零雨だ。

「今から列車を止める。手伝って」

そう言われ、零雨に連れて来られたのは、車両と車両の連結部分。
幌（蛇腹のあれ）で覆われている、あの狭い空間だ。
重いドアを開け、蛇腹の狭い空間に俺達二人は入った。
足元の鉄板が、カチャカチャと音を立てて動いている。
零雨は大きく腕を振り上げると、その幌を裂いた。
幌の隙間から、風が吹き込み、幌がひらひらと揺れる。

「零雨、何をする気だ？」

「ブレーキ管を切断する」

「ブレーキ管？」

「説明は後。あなたは私の身体を支えて」

零雨は四つん這いになって裂けた幌から上半身を大きく乗り出す。

「……このあたりか？」

「そう」

俺は零雨の足を押さえて車外に転がり落ちるのを防ぐ。

零雨は強風の中、次々と管を切断していくが、列車は減速する気配はない。

「零雨、ホントにこれでこのデカブツが止まるのか？」

騒音の中、不安になって俺は声を大にして聞く。

「切断したのは直通ブレーキ管、その他通信線と推測される。
自動空気ブレーキの管ではない。
自動空気ブレーキの管を切断すれば列車は必ず停止する」

零雨が答えた時、フッと車内の電灯が落ち、俺達は暗闇に包まれた。
麗香がパンタグラフを破壊したらしい。

「暗くなったな……懐中電灯、いるか？」

「用意している暇はない」

零雨は作業を続ける。

パァン、という大きな破裂音が聞こえ、
シュー、と空気の抜ける音が管から聞こえてきた。
零雨が自動空気ブレーキ管とやらを切断したようだ。

列車は管の破裂と同時に減速を始め、やがて停止した。

「零雨、やったな」

零雨とハイタッチしそうになるが、今零雨とハイタッチすると、
もれなく手がきれいに切断ないし血まみれになることを自覚し、途中でやめた。

「残り32メートル」

零雨は言った。

「それは、空間の端までの距離か？」

「正確には、この列車の先頭から32メートル先」

ギリギリセーフだったな。
もし零雨が切断するのがあと5秒遅ければ、
俺達揃ってこの世（広い意味で）からアディオスしていただろう。

それからしばらくして、足音が近づいてきた。麗香が戻ってきたようだ。
しかし、暗闇のせいで姿が見えない。

「ギリギリ間に合ったね」

足音の主はやはり麗香だった。

「う……麗香、焦げ臭いんだが、お前何してきた？」

「ああ、ちょっと、パンタグラフを壊すときに架線に触っちゃって……感電しちゃった☆」

「『感電しちゃった☆』じゃねえだろ……とりあえず、暗いから懐中電灯持って「ダメッ！！」」

壁伝いに懐中電灯を探していこうとする俺を麗香が呼び止める。

「なんでダメッ！！なんだよ、見えなかったら危ないだろ？」

「えっと……その……なくなっちゃったの」

「何がなくなったんだよ？」

「か、感電しちゃった時に服が焼けてなくなっちゃったの！！こんな姿、見られたくないから――」

「つまり……裸、だと？」

「ぅん……」

ああ、悩ましい。

俺は近くの部屋から懐中電灯と、触った感じ浴衣っぽいものを引っ張り出し、

麗香のいる辺りに戻ってきた。

「麗香、いるか？」

「ここだよ」

「……。」

俺と麗香との距離が予想以上に近かったため、少し驚いたが、とりあえず持ってきた浴衣っぽいものを麗香に渡そう。

「触った感じ浴衣っぽいのがあったから持ってきたんだが……使うか？」

「あ、ありがとう」

ゆっくり麗香が近づいてくるのがわかる。

「俺の場所、分かるか？」

「見えないけれど、聞こえるから大丈夫」

「もう受け渡しできる距離か？」

「多分」

「ほらよ」

浴衣らしき布を持つ手を音がする方角へ差し出す。
すると、俺の手が麗香の何かに当たった。

「ちょっと!!どこさわってるの変態!!」

「ち、ちげーよ!事故に決まってんだろーが!
大体、音で場所が分かってるとか言ってる癖して近づきすぎたお前が悪い!!」

「ちょっと、私に責任転嫁!?
言っておくけど、タッチした罪は重いわよ……ああ恥ずかしい」

「プログラムのくせに恥じるなよ……」

「何、プログラムは恥ちゃいけないワケ!?」

「……い、いいからとにかく早く今渡したやつ着ろよ!
懐中電灯が使えねえじゃねえか」

「……麗香、着替えは終わったか?」

「うん」

「じゃ、懐中電灯をつけてもいいな？」

カチッと、スイッチを押し上げ、懐中電灯の電源を入れると、電球の光が静かになった車内を照らしだす。
ああ、やっぱ光があるってありがたいもんだ。安心する。

懐中電灯の光は、麗香に当たり、男物の浴衣を着た彼女の香の姿が映し出された。
どうやら俺が持ってきたのはＸＬとか、いわゆる大きいサイズの浴衣だったようで、
浴衣の袖が麗香の腕の長さより長くて腕が袖に隠れてしまっているという、典型的なぶかぶかの状態での着用である。

「……ちと大きすぎたか？」

「ううん、これでいいよ。ありがとう」

「そうだ、零雨、早速なんだが解析の続き、お願いしてもいいか？」

続いて懐中電灯の光を零雨に当てる。

「既に開始している」

「そうか。
あとどれぐらいでここから脱出できるか零雨、分かるか？」

「約３０分程度で全工程が終了する」

「それは喜ばしい知らせだな」

そこまで言うと、さっきすっきり起きたばかりであるにも関わらず、突然強烈な睡魔に襲われ、何が起きているのかすら理解できないまま、意識を失った。

第４話－１６　スパイラル・トレイン　？日目－Ｓｐｉｒａｌ・Ｔｒａｉｎ（後

感想・評価をくださると、作者のやる気が上がります。

第４話－ＥＮＤ　スパイラル・トレイン　最終日－夢と現実の区別

目が覚めるとすぐに、俺はベッドの上で寝ていることに気がついた。

「コウくん、おはよう」

上体を起こし、声の主を向く。
いつもの麗香だ。
部屋の窓のカーテンはいつの間にか開けられ、俺が待ちに待った朝日が差し込んできていた。
寝起きのスッキリ感も上々、こんな朝は久しぶりだな。

「コウくん、夜中ずっとうなされてたけど、悪い夢でも見たの？」

「あ、ああ、そうらしい」

夢……？
あの壮大なバグの創り出した世界に放り込まれたっつうのは夢だったのか。
進まない時計、飲み干しても湧いてくるお茶、スパイラル空間――
確かに夢だったような気がする。
夢ならこんなカオス状態の世界を擬似体験することは容易だ。
俺のイマジネーション力は極度の貧相っぷりだと思っていたんだが、脳の無意識の領域のイマジネーション力はそこそこ残っているらしい。

……いや待てよ、夢だとしたら、なぜ俺の知らない単語が夢の中で出てきたのかが疑問だ。
「自動空気ブレーキ」なんつうマニアックな名前の装置を、凡人である俺が知ってるわけがない。
それとも、自動空気ブレーキというものすら、夢の中の架空の装置で、そもそも存在しないものなのか？
カオスな状況の中で、自動空気ブレーキというリアルな存在だけが、まるで白い布に黒いインクを垂らしたように俺の意識の中で際立っていた。

「なあ、“自動空気ブレーキ”って何か分かるか？」

こういうときは麗香に問うのが一番だ。
彼女なら何か知っているかもしれない。

「え、えっと、自動空気ブレーキ？」

「ああ、そういった名前の装置なんだが……」

「……私は、そ、そんな名前の装置は聞いたことがないわね」

そういう麗香の目が泳いでいる。
これは何か知っていると判断していいだろう。

「知ってるな？」

「だ、だから、そんな装置は知らないって！」

「顔に嘘と書いてある」

「……私は知らない」

「しらを切るつもりか？」

「私は知らない……」

「……。」

いくら知っているだろうと言っても、麗香は知らないの一点張りで、とうとう俺の方が折れて、質問を諦めた。

諦めたというより、途中でバカバカしく思えてきてやめたのだが。

まあそんな小さなことは俺にとってはどうでもいいことで、

とりあえず、今さっき俺が体験したものが夢なのか、はたまたリアルなのか、

それは俺には分からない。

とにかく、目が覚めたら朝だったという時点で、

俗に言う“夢オチだろ、それ”の烙印を押されるのは確定的だというのは

俺にも理解できるし、そうであってほしいと俺は思う。

何やらワケの分からんスパイラル空間とかいうミステリー空間に、

あれよあれよと不可抗力的な何かによって引きずり込まれ、

そこで気味の悪い青年と出会ってバトってうんたらかんたらなどと

いう、
トンデモ話が事実だとすると、俺の精神衛生上この上なく悪い思い出になる。
それに加えて、俺は零雨と麗香との関係を考え直さなければならないだろう。
零雨と麗香の協力者になってからまだ一ヶ月ちょいしか経ってないが、
これだけ高密度に不思議&恐怖体験をしていると、この先が思いやられる。

正直、これからも起こるであろう試練というべきイベントの数々を無事クリアできるのかと聞かれれば、
俺はキツイと答えざるを得ないだろう。

俺の家の掃除にしろ、なぜか最後は社会のゴミ掃除とかいう名目でヤクザと殺し合いになったし、
音楽祭だって、俺が描いていた悠々自適な夏休み生活を見事にぶち壊してくれたし、
今回の不思議体験も、恐らく旅行に出ていなければ体験することはなかっただろう。
すべてがすべて、零雨と麗香が引き金になって俺に災難がふりかかってきているわけだ。今のところ。

結局のところ、俺の二人への協力はある種のボランティア活動であり、
奉公したからといって、土地なり銭なり名声なりがもらえる訳ではない。
貰えるのは今言ったような災難だけである。

言っとくが、俺はマゾではないから、そういう環境下に置かれて興

奮するとか、まずない。

二人が入ってくることで多少、生活が変わるのは仕方ないと腹をくくっていたが、
まさかここまで変容するとは思いもしなかった。
出会った初めに「友達になってくれ」と二人から言われた時、俺は二人が入ってきたところで俺に特に害はないだろうと判断したが、今なら自信を持って言える。
“あれは人生最大の大誤算だった”と。

……話が脱線したな、元に戻そうか。

最終的に、
「この体験が事実なら、零雨と麗香との関係を見直す必要があると思うが、見直すのはいろいろ面倒だし、
今回の不思議体験は夢だった、ということにしておく方が楽だから、そっちでいいんじゃね？」議案が、俺の脳内議会で満場一致で可決された。
よって、今からこの体験は夢だった、という扱いで進んで行こうと思う。

気がつけばかなりの長時間にわたって考え込んでいたようで、
若干元気過剰気味の朝の日差しが窓から差し込む車内で、麗香は不思議そうに俺を見つめていた。

電車は予定通りの時刻に到着し、俺達は流れ解散方式で次々と別れ

ていった。
そして俺は美羽を引き連れ、五日ぶりに自宅のマンションの鍵を廻した。

カチャ。
いつもの渇いた音がノブから発せられ、開錠したことを俺に告げる。

「ただいまぁ――――っ！」

美羽が馬鹿元気な声を発しながら、一目散に家の中へと駆け込み乗車、
玄関でズテンと前倒しになってコケた。

「足元に気をつけろ、このドアホ」

俺もそのあとに続いて家の中に入る。
普段は気にならないんだが、やっぱ旅行から帰ってきたら、自分の家のニオイがする。

俺はリビングに入ると真っ先にテレビの前のソファに座って、テレビの電源をつけた。
これでようやく長い長い夏休みが終わるわけだ。
あと五日もすれば二学期が始まる。
ああ、そういや明日、美羽を空港に送り返すんだったな。
はぁ――また一人暮らし再開か。
うるさいのがいなくなって清々するぜ。

……と、虚勢を張ってはみたものの、
やはり手がかかる奴でも同じ釜の飯を食ってりゃ、多少なりとも別れに寂しさがついてくるもんで、一概に清々したとは言いづらいところである。
明日の美羽の出発の準備、クソだるいけどやらにゃならんな。

俺はせっかく座ったソファから腰を上げ、美羽の荷物の整理をすることにした。

第４話－ＥＮＤ　スパイラル・トレイン　最終日－夢と現実の区別（後書き）

自動空気ブレーキとは、空気圧で電車のブレーキを制御する装置のことです。
空気圧がかかると減速する仕組みのものもあるのですが、その場合、空気管が破裂した場合はブレーキが利かなくなってしまいます。
そこで、自動空気ブレーキの登場です。
自動空気ブレーキは、空気圧が下がると減速するように設計されています。
空気管が破裂すると、空気が抜けますから、圧力が０になり、自動的に最大ブレーキがかかります。
嵩文零雨は、この装置の性質を利用して列車を停止させました。
電車に乗ったとき、床下からポンプのような音が聞こえたり、シューシューと音を立てるのは、電車が空気を利用している証拠です。

第４話－ＥＸ　「ぬいぐるみと俺」（前書き）

第４話「スパイラル・トレイン」最終日の翌日の話です。

第４話－ＥＸ　「ぬいぐるみと俺」

「美羽、行くぞ」

「うん……」

寂しそうに答える美羽の手を引いて、俺は家の鍵を閉めた。
今日は美羽を空港まで送ってやらねばならん。
美羽を午後二時発の飛行機に乗せるということになっており、
それまでに空港に着いておく必要があるのだが、出掛ける時間より
俺達は早めに家を出た。
飛行機に乗せる前に昼メシを食わせておく必要もあるし、
美羽の夏休みの思い出が、図書館前近くの遊歩道で撮影した集合写
真一枚だけというのは、
あまりにかわいそうだと思ったからだ。
昨日、駅から帰ってくる途中で匠先輩に頼んで、旅行中に撮った集
合写真のネガフィルムを借りた。
早めに出掛けて写真の現像もしようってわけだ。
……匠先輩のカメラが今だにフィルム式カメラと、やや時代遅れ感
があるのだが、
カメラについては無頓着らしく、先輩は全く気にしてなかった。
「フィルムと現像してくれる店があるうちは現役だな」そんなこと
も言ってたっけか。

マンションのエレベーターのボタンを押し、エレベーターが俺達の
階まで上ってくるのを待つ。
エレベーター脇の階段、
音楽祭の練習の集合時刻に遅れそうになって美羽を背負って駆け降

りたな。
思い返せば、自他とも認めるめんどくさがりが、よく階段を使って一階まで降りたもんだ。

エレベーターで一階に降り、マンションを出ると、
既に俺が予約していたタクシーがエンジンをアイドリングさせながら待機していた。
このタクシーは、美羽がこっちに来る時に利用した際に乗ったタクシーだ。
運転手が運賃を支払った時に、
「タクシー要るなら是非呼んでくれ」と連絡先が書かれた紙を俺に渡してきたので、呼んだというわけだ。

一月近く前の話とはいえ、遠距離客ということで顔を覚えられていたようで、
俺が運転手に視線を向けると、お久しぶりです、と挨拶をしてきた。
こんにちは、と適当に俺も挨拶を返し、
早速運転手と美羽の荷物をトランクの中に詰め込む共同作業を始めた。

「美羽、お前は先に車の中に入っておけ」

俺が美羽に言うと、黙って車の中へと入っていった。
今日はやけに大人しい。
荷物を詰め込み終わった俺と運転手も、続いて車に乗り込んだ。

「今日はどちらへ？」

「空港までお願いします」

「はい、かしこまりました」

タクシーは発進し、俺の暮らすマンションが、他の建物に遮られて見えなくなっていくのを、後部座席に座っている美羽は後ろを向いてじっと見ていた。

「……美羽、忘れ物はないな？」

出掛ける前に俺が何度も確認したからないと思うが、一応美羽に聞く。

「たぶん……ない」

「そうか。
取りに帰るならば今のうちだぞ」

美羽は小さく頷くと、後ろの景色を眺めるのをやめ、前を向いた。それからしばらく沈黙が車内を支配していたが、運転手が空気を察して、俺達に話し掛けてきた。

「今回は帰省ですか？」

「まあ、そんなところです」

「妹さんを連れて、どちらに？」

「俺の家に来たんです。
美羽が田舎の実家からこっちに」

「ああ、そうなんですか～
ということは、今回行き先は空港ということですが……」

「はい、美羽が一人で乗ります」

「一人で、ですか？」

運転手は車のミラー越しに後部座席に座っている美羽に視線を向ける。

「お嬢ちゃん、今何年生？」

「一年生……。」

美羽は力無く答えた。

「え、え、えっと、小学校一年生の子を、一人で飛行機に乗せる……んですか？」

「はい、そうです。
俺も一人で乗せるのには反対だったんすけど、親が……」

「許さなかった？」

「というよりも、都合が合わなくてこっちに迎えに来れそうにないらしいみたいで。
俺自身もこれから二学期の準備やら何やらで送って行く訳にも行かないですし、仕方なく、ですね」

「小学校高学年ぐらいの子が飛行機に乗る話は聞いたことがありますが、
さすがに一年生の子を乗せるなんて聞いたことありませんね」

気がつくと、美羽が黙って俺の手をぎゅう、と握り締めていた。

美羽、こんなめんどくさがりで適当な俺のどこがいいんだよ？
俺のどこに離れたくないと思わせるような要因がある？
毎日お前と遊んでやった訳でもなく、欲しいものをジャンジャン買い与えたという訳でもなく、
どちらかといえばお前に我慢ばかりさせた。
音楽祭の練習でチカの家に通い詰め、
俺と美羽の二人だけでどこかに出掛けることはできなかった。
というか、機会があっても面倒臭がって行かなかったと思う。
そんな俺のどこがいいんだよ？
チカや麗香が美羽に好かれるのは理解できるが、俺が好かれる理由が理解できない。
時が経って、昔の記憶が美化されて、いいイメージしか覚えていな

いことはあろうが、
まだ記憶が美化されるには時間が足りなさ過ぎる。

だからといって、手を握るのをやめろと美羽に言うことは、俺にはできなかった。
正直、俺も美羽と離れたくはない。
一人暮らしの生活がまた始まるかと思うと、多少世話が面倒でも、ワイワイやってくれる美羽がいてくれた方が、
少し意外性のある生活ができて、それなりに楽しく過ごせそうな気がする。

美羽の代わりと言っちゃなんなんだが、ペットでも飼おうか。

……そういや、俺のマンション、ペット禁止だった。

タクシーは空港に到着し、料金を払ってタクシーから降りた後、空港ターミナルに入った。
入ってすぐ左のところに、写真を現像してくれる店、つまり写真屋があるのだが、
空港の中の写真屋に、俺達のように空港で写真を現像しようなんて奇特な人が果たしているのか疑問だ。
恐らく使い捨てカメラの売り上げで生き残ってるんだろう。
……まあ、そんなことは俺達にとってはどうでもよく、現像してもらえればそれでいい。

「すみません、写真のネガを現像してもらいたいんですけど」

俺は店のカウンターで暇そうにしている若い店員に話し掛けた。

「あ、えっと、そのネガは今回お持ちでしょうか」

「持ってます」

店員は突然話し掛けられて慌てたのか、当たり前の質問をしてきた。

「写真の現像をお願いしたいんですけれど、ネガは自宅にあるんです」とか、普通ありえないだろ。

ネガ持たずに手ぶらで行ってその客は一体何がしたかったんだ、という話だ。

店員の対応にいろいろな角度からツッコミを入れつつ、写真のネガを店に渡す。

「現像には３０～４０分程かかりますがよろしいでしょうか」

「はい」

俺は店員から受取時刻の書かれた紙を受け取り、店から離れた。

「美羽、腹減ってないか？」

俺の手を握ったまま離さない美羽は、うん、と頷く。

「前ここに来た時にレストランで飯食ったの覚えてるか？」

「うん」

「そこで昼メシにしようか」

「うん」

エスカレーターに乗って上の階に上がりレストランに入る。
最初ここに来た時と同じ、窓から飛行機の離着陸がよく見える席に案内され、
俺と美羽は向かい合って座る。

ここに来た時、久しぶりに会った俺に、
「にいちゃん、ジュース！」などと厚かましいというのか、図太いというのか、
とにかくそういうことを言うようなバカ丸出しのクソガキだったのに、
一月経ってみればこの変わり様だ。
親の温室の野菜同然の厚い庇護を受けて育っていた美羽にとって、
俺の少々荒い男の独身生活に触れたことは、心の成長の糧になったのではないか、
そんなことを俺は感じていた。
幼さは残ってはいるものの、一月前と比べて、
美羽が大きく成長したことを俺は認めざるを得ない。
最初は「一人で寝るのが怖い」と、
オモチャ片手に俺に泣きついてくる有様だったのが、今ではちゃんと一人で寝られるようになったし、

風呂も自分で湯加減を調整して一人で入れるようになったし、
日を追うごとに美羽は着実に成長していた。

「美羽、食べたいものは決まったか？」

テーブルに置かれたメニューを見ながら俺が聞くと、美羽は意外な
答えを返してきた。

「お兄ちゃんがたのんだのと同じものが食べたい」

俺が注文したのと同じのが食べたい？お子様ランチじゃなくてか？
……。
いくら小学一年生の知能でも、
自分が大人一人分の料理が食べられるわけがないことぐらいは理解
できているはずだ。
ならばなぜ、それを理解しているにもかかわらず背伸びをしようと
する？

「まあ、美羽がそれでいいなら俺は何も言わないが……今日でお前
ともお別れだしな」

さてと、俺は何を注文しようか……
俺が食べるものと同じものを美羽が食べるのだから、
注文するのは美羽でも食べられるものの中で、という条件がつく。

……よし、このハンバーグセットにしよう。
これなら美羽でも食べられるはずだ。
店員を呼んで注文を伝えると、作り置きでもしていたのか、５分ほどで料理が運ばれてきた。

美羽は慣れない手つきでナイフとフォークを手に取り、
俺が切っていくのを真似てハンバーグを切っていくが、切り口はガタガタ、
お世辞にも上手に切れましたとは言えないが、なぜか微笑ましかった。

「美羽、いいか？
　ナイフとフォークの持ち方は「じぶんでやる！」」

美羽は強く言うと、我流で肉を切りはじめた。
……そんなに突っ張らなくても。

結局、美羽は最後まで食べ切ることができず、ギブアップしてしまった。
レストランの人には悪いが、残すことにした。

最後の最後まで、美羽はデザートが食べたいとは言わなかったな。
言ったら好きなのを食わせてやろうと思ってたんだが……

レストランを出ると、飛行機の出発時刻の３０分前だった。
俺は美羽の手を引いて早足で写真屋に向かい、現像された写真を受け取った。
旅行中の美羽の笑顔がそこには写っている。

今の美羽とは大違いだ。
美羽のリュックサックにその写真を詰め込み、
その足で美羽に代わって搭乗手続きをした。
美羽が一人で乗ることを知った空港職員が気を利かせて、
職員一人同伴という条件で、特別に俺を飛行機の中まで入れてくれることになった。
もちろん、そのまま飛行機に乗って目的地の空港まで、という訳にはいかず、
美羽を席に着かせたら俺は飛行機から降りなければならない。
マニュアル通りの対応しかしてくれないものだと思っていた俺は、この対応に内心驚き、そして感謝した。

荷物検査を一通り終え、俺は美羽を引き連れて職員の誘導に従って飛行機の中に入った。
美羽の乗る席は、「Ａ０７８」、窓際の席だ。
俺は美羽を席に座らせ、シートベルトをつけさせた。

「あれ？お兄ちゃんもひこうきに乗るの？」

「いや、俺はここまでだ。
あとはお前一人で行く。
向こうに着くまで大人しくしてるんだぞ」

俺がそこまで言うと、美羽が急に俺の手をぎゅう、と、
タクシーの時より何倍も強く、しかも両手で捕え、泣き出した。

「いや！行かないで！」

「行かないでって言われてもだな、俺は飛行機のチケットを持ってねえから、な？」

「いやっ！美羽といっしょにお家にかえるの！」

「別れたくない気持ちは分かるが……ここに来た時にした約束事、覚えてるか？」

「お兄ちゃんの……言うことをちゃんと聞く……」

「そうだ、一月前、さっき行ったあのレストランでした約束だ。あの約束事は、お前がお袋と親父のいる家に帰るまで破っちゃいかん。
いいか、今からこのクソッタレかつバカな兄の言うこと、ちゃんと守れよ？」

「ぐずっ……うん」

「一つ、今着けたシートベルトは、飛行機が到着するまで、絶対に外すな」

「うん……外さな……い」

「二つ、飛行機の中で大声で騒いだり、周りの人の迷惑になるようなことをしないこと」

「……美羽、おとなしくしてる」

「そして最後の三つめ、もう泣くな。

悲しくなったらリュックサックの写真を見て、
数少ない楽しかった思い出を思い出すんだ、いいか?」

「……（大きく頷く）……。」

美羽はもう泣かないと言いつつ、その目からは新しい涙が次々と流れ出ている。
やべっ、俺までもらい泣きしそうじゃねえか、バカヤロー！
いかんいかん、泣くなと言っている俺が泣いてどうする!?
俺は激しく頭を振って自分を制しようと努力するが、出るものが止まらない。
いつしか、俺と美羽のやり取りは他の乗客、―キャビン・アテンダント《ＣＡ》達の注目の的になっていた。

「美羽、今した約束……他の乗客の皆がちゃんと聞いたから……な、破るなよ」

「グズズッ……う……ん」

「よし、立派だ。
美羽、手を離してくれ。
一人で大人しく飛行機に乗れたら、もう一人前だ」

そう言うと、美羽はそっと俺から手を離した。

「いいか、お前は一人だが一人じゃない。

何かあったらすぐに添乗員のお姉さんに言うんだぞ」

俺は近くで俺と美羽のやり取りを見ていたＣＡによろしくお願いします、と頭を下げた。

彼女は心から微笑んで、はい、と答えてくれた。

飛行機のプロがついたんだ、もう美羽は大丈夫だ。

「へぇ～お嬢ちゃん一人で飛行機に乗るの？」

美羽の席から通路を挟んで向かい側に座っていた白髪混じりの年配のおじさんが話し掛けてきた。

「うん……」

「何年生？」

「一年生」

「一年生！？

はぁ～、偉いねぇ。うん。

何かあったら、このおじちゃんに何でも言ってくれていいからね」

俺はありがとうございます、とそのおじさんに礼を言った。

「あんたも大したもんだよ、まるで親みたいだ」

「そう、ですか？」

「ああ、立派な親になると思うよ」

「どうも……」

俺がそこまで言うと、付き添いの空港職員が腕時計を見た。

「もうそろそろ出発時間なので……」

「ああ、そうですね。
――美羽、約束、絶対に破るなよ」

俺は美羽に言って背を向け、出口へと歩きだす。

「お兄ちゃん、まって！」

俺は職員にあと３０秒だけ、とお願いして美羽の席に戻った。

「お兄ちゃん、これあげる。
さみしくなったら、これ見て美羽のことを思い出して」

ガサゴソとリュックサックから出てきた美羽の手には、
《森のどうぶつのお友達セット》のクマのぬいぐるみがしっかりと握られていた。

「……いいのか？
お前が欲しがってたオモチャだろ？」

「いいの！
お兄ちゃんはずっと一人でさみしいでしょ？」

「……ホントにいいのか？」

「お人形さんもいいって言ってるからいいの！」

プッ、何だその理論。
俺は思わず吹き出してしまった。

「美羽、おもしろいこと言ってない」

「悪い悪い。
……じゃあ、そのクマさんの御意向にしたがって“預かって”おくとしよう」

俺は美羽からクマのぬいぐるみを受け取った。

「美羽がこのクマさんに会いたくなったら、いつでも電話して来い。
俺がクマさんをお前の家まで送ってやるよ」

郵送でな。
俺は受け取ったそいつを脇に抱えて美羽と別れた。

午後二時。美羽を乗せた飛行機は、予定通り空へと飛び立った。
それを俺は滑走路が見えるガラス張りの建物の中から見ていた。
ああ、これでやっと面倒なガキの世話から解放されたぜ……

俺はぬいぐるみを抱えて一人、空港を出た。
帰宅は電車に乗るつもりだ。
小さな子が遊ぶような人形を持った男子高校生が電車に乗っているという構図は、
さすがにシュールで恥ずかしい。
俺は近くの売店に行き、適当なものを購入、貰ったビニール袋に人形を入れた。
電車に乗ること約一時間、降りる駅に到着し、駅の改札を通り抜けると、
西に傾いた八月の陽射しが降り注ぐ。
ビルの屋上に設置された大きなデジタル温度計は、３３℃と表示されている。
飛行機は今頃向こうの空港に着いているだろう。

家に帰り、リビングのテーブルを見ると、一枚の白い紙が置かれていた。
何だこれ？
裏返すと、ぐちゃぐちゃの文字で、こう書いてあった。

【お兄ちゃんへ
いままでありがとう
みわより】

第４話－ＥＸ　「ぬいぐるみと俺」（後書き）

第５話では、初期より構想にあった、主人公が異世界トリップする話になる予定になっています。
これでようやく異世界タグが活きてきますよ！！

ちなみに、第５話は大長編になる可能性大です。
もしかしたら５０話越えるかもしれません。

なんにせよ、飽きられないように（笑）頑張っていこうと思いますので、
これからもよろしくお願いしますｍ（＿　＿）ｍ

第5話－A1　Ｌｏｓｔ－３１１－　ハイブリッド入部?拒否する!!（前書き

第５話「Ｌｏｓｔ－３１１－」が始まります。
王道の異世界トリップの物語をお楽しみ下さい。
（楽しませるほどの腕があるかは疑問ですが＾＾；）
推定読了時間：現在連載中のため不明（２８２分～）
（５００文字／分、端数切り上げ）
※読了時間は、個人差があります。
しおり機能をご活用ください。

第5話－A1　Lost－311－　ハイブリッド入部？拒否する！！

「はぁ、どうすっかな……」

夏休み気分がようやく抜けてきた九月の終わり頃。
俺はクラスの窓際の席で、ぼんやりと担任の数学の授業を聞き流しながら、
生活の変わり様を嘆いている。
あの音楽祭に出たせいで、同級生の俺に対する印象ががらりと変わっちまったらしい。

それでここ最近連日のように軽音部やらオーケストラ部やら、音楽系の部活からの勧誘がしつこく来ている。
丁重にお断りしているのだが、それでも我が部に是非入部してくれと、
１０分ほどの休み時間には同じクラスのやつが、
昼休みにはわざわざ3年の部長が頼み込んでくる始末。
今日はどうやって断ろうかと考えていると、授業にも集中できない。
匠先輩を紹介するから、お前らとっととすっこんでろと言いたいところなのだが――
何より不思議なのは、同じバンドを組んでいた他の仲間には勧誘が来ず、俺だけ来ているという点である。

「おい、足立（俺）！目が死んでるぞ、ちゃんと授業聞いてるのか？」

担任に注意された。

二学期に入ってから何回目だろうか。
このままじゃ中間テストの成績ガタ堕ち確定、
ただでさえ普通の成績の俺が、テストの平均点を割るとなると精神的にくるものがある。

「あ、すいません」

「足立、この問題を解いてみろ」

担任に手招きされ、チョーク片手に黒板の前に立たされる俺。
ああ、惨めだ。

問い

２つの放物線

$y = -x^2 - 2x$

$y = -x^2 + 6$

で囲まれた図形の面積Ｓを求めよ。

……聞いてねえから分かんねえよ。
でもまあ、とりあえず昨日ちょっとだけこの問題予習してたし、一応答えは書ける。
とはいっても、どうしてもやはり微分積分は苦手なんだよな～

とりあえず、答えっぽいのでも書いておいたほうがいいだろう。
俺は予習の内容を思い出しながら黒板に解答を書いていく。

「おお……足立、授業聞いてないようなオーラしながら、なかなかやるな」

解答を書き終えると、担任は感嘆の声を上げた。
どうやらこの問題で授業が詰まっていたらしい。
まあ、偶然予習したところが当たっただけなんだが。
みんな分からなかったぜ的な顔をしてるが、クラス全員が分からないわけではないはずだ。
なにせ、零雨と麗香がいるのだからな。
この二人は解法は人知を越えたすごい解法かもしれないが、確実に解けているだろう。
というか、これぐらいの問題が解けないようでは世界の管理なんてやってられないだろう。

「足立、座っていいぞ」

担任に促され、俺は席に着いた。
さて。
この授業もあと10分程で終わり、いよいよ昼休みが始まる。
それまでに急いで部活の勧誘から逃れる方法をどうにかして考え出さないと、
また昼休みがそれで潰れることになる。

…。

……。

……。

……。

キーンコーンカーンコーン――

ムリっす。

１０分では考えつかなかった。

「足立君！！オーケストラ部に入部してくれる気になったか！？」

昼休み早々、３年のメガネ部長（男）が教室に突入してきた。

「あだっちさぁ～ん！！

今日の放課後、軽音部の臨時の入部説明会を開くんで、ぜひともご参加願いまぁ～すですっ！」

続いて軽音部の３年の部長（女）の独特かつイラッとくる話法が俺の耳に飛び込んでくる。

しつこく勧誘に来ることで顔は覚えるだろうが、

“あだっち”などと気安く呼ばれるような仲じゃねえし、

そもそもこの時期の入部説明会って、完全に俺向けの説明会じゃねえかよ。

もちろん喜んで欠席させてもらうが。

俺はのんびりと自由気ままに高校生活を送りてえんだ、部活のしがらみなんかやってられっか。
毎回思うのだが、この勧誘集団は昼メシは一体どうしてるんだ？
あれか？早弁ってやつか？

ああ、そういや、オーケストラ部と軽音部の勧誘が同時に来るのは初めてだったんじゃなかったか？

「「ああ――っ！！」」

俺の予想通り、それぞれ相手の部長の顔を見るやいなや、大声を出して互いを指差して火花を散らす。

「お前は、軽音部部長！！」

「オケ部の部長さんじゃない！！」

「お前も足立君を勧誘しに来たのか！？」

「まさか、あなたもあだっちを狙ってたの！？」

二人は睨み合いの硬直状態、一触即発の状態が続く。
……チャンス！
俺は二人が睨み合ってる間にそっと弁当を持ち出し、そそくさと教室から脱出を図る。

……へっ、チョロイもんよ！
あの二人は俺がいなくなったことに気がつかないまま、口論を始めた。
とりあえず、昼メシを食う場所を確保しねえと。
まず、隣の教室の友人の席に逃げ込むという案が浮かぶが、見つかる可能性が大だ。
出来るだけ人目につきにくい場所がいい。
いくら人気が少ない場所といっても、
建物の影に隠れて一人寂しく食べるというみっともないことはしたくない。
となると、行き先は必然的に決まってくるな。
俺は階段を上りつめ、重い鉄の扉を開いた。
行き先、それは屋上だ。
人も少なく、開放的な空間であり、
そこで昼メシを食っていてもなんら怪しい点はないという、最高の環境である。

いくら屋上には人が少ないとはいっても、
この最高の環境を見落とさない人がいないはずはなく、
付き合っているのであろう、
男女二人、仲睦(むつ)まじく昼メシを食べている姿が2、3組見受けられる。
ちなみに、俺は現在彼女募集中である。

え？零雨と麗香がいるだろうって？バカ言うんじゃねえよ。
あの二人は規格外だ。
いくら見てくれが人間っぽい行動をする美人でも、残念ながら中身はプログラムだ。
それに、彼女達は作業が終わればこの世から消え、形なき存在に戻

ってしまう。
恋愛対象には適さない。
チカは……話にもならん。
M属性の人間ならば俺はオススメするが、
あんなバイオレンス眼鏡のどこに惚れ込む場所があるのかサッパリだ。
チカ好きがいたら惚れポイントを是非教えてもらいたい。
恐らく俺には理解できないだろうが。

屋上の日陰になりそうな場所を探すと、いいところを見つけた。
俺はそこに腰掛け、弁当を食べはじめる。
美羽がいなくなって早一ヶ月弱、再びやってきた一人暮らしの生活に慣れ、
弁当に何が入っているのか、開ける前から分かり切っているという寂しい生活にも慣れてきた。
俺製作の弁当は、お袋の料理と比べると、正直あまり美味くはない。
そりゃ、料理歴17年以上のお袋と1年半の俺との比較である。
そうでなきゃお袋のメンツが立たないんだろうが、なぜか悔しい。
そうはいっても、誰か俺の家に遊びに来るようなことがあれば、
簡単な料理の一つや二つ出せるぐらいの腕はあると思っている。

弁当を半分ほど食った時、屋上の鉄扉が開き、人影が二つ、現れた。

「あっ！いたっ！」

その声にギクリとする俺。
だが、顔を見てあの勧誘の二人ではないことが分かり、驚かせるなよ、と溜め息をつく。

「コウくん、こんな所にいたの？」

「ああ、そうだ、なんか文句でもあっか？」

「オーケストラ部と軽音部の部長さんが探してたよ」

麗香は零雨に小声で何かを言うと、零雨はさっさと階段から降りて行ってしまった。

「あの二人は探させたままでいい。
部活の勧誘がウザイからな」

夏の陽射しの名残もそろそろウザくなってきた九月。
額から流れ出た汗を短い袖で拭きながら、
今日も洗濯が大変だな、と汗まみれになった制服を憂いながら、
俺の隣に座った麗香を見やる。
こいつは絶対に汗をかかない。
どんな厳しい高温の環境下でどんな激しい運動をしても、息が上がることも、汗をかくこともない。
常に肌はサラサラ、羨ましいかぎりだ。

「そんなこと言って、人に迷惑をかけてるっていう自覚はないの？」

「お前が言うな、お前が」

「どうして？」

「どうして？じゃねえだろ。
そもそもこういう事態に発展したのは、
お前が音楽祭に俺を勝手にメンバー登録したからだということを
お忘れですか」

「それは……そうだけど、音楽の才能があったから、
こうやって部活に勧誘されてるんでしょ？
現に、同じメンバーの私には勧誘は来てないよ」

「はあ……俺のどこに才能があるのやら……」

俺は弁当を食い終わり、箱を元のように片付ける。
さてと……昼休みはここで麗香と喋って時間でも潰すか。
どうせ校内はあの二人が索敵（クリアリング）をかけてるんだろうし、
ここでじっとしておくのが賢明だろう。

ガチャ、という音とともに、新たな来客を告げる鉄扉の悲鳴が上がった。

「あだっち発見ぇーん！」

「とうとう見つけたぞ……手間をかけさせやがって……
俺を手間取らせた責任は入部してもらうことでしかなくならない！」

なぜ見つかったし!?
扉から第三の人影が現れ、それが零雨だと理解するには時間はかからなかった。

「嵩文さん、情報提供に感謝します」

オケ部の眼鏡は零雨に向かって一礼。

「麗香……とんでもないことしでかしてくれたな。
あの二人をここに連れて来るよう零雨に頼んだのはお前だろ?」

「エヘッ、二人から『彼を見つけたら是非御一報を』ってお願いされちゃって……
服従可能な命令は絶対服従が基本でしょ?」

「あのな……ここに逃げてきた俺の気持ちを察しろ、バカ」

柔軟性のないカチカチのアンドロイド思考しやがって……
そこは空気を読めって話だ。

「さて、足立君、俺と彼女(軽音部部長)から提案があるのだが」

「はい、なんですか?」

「ハイブリッド入部しないか？」

「……はい？」

「先ほど二人で話し合ったんだが、足立君が我がオケ部に入部すると、軽音部が困る。

逆に、軽音部に君が入部してしまうと、我がオケ部が困る。

そこで、君をオケ部、軽音部の両方に所属させればいいという話になってだ、

ダブル入部、つまりハイブリッド入部をすれば、ｗｉｎ－ｗｉｎな関係が出来上がる」

お前達はｗｉｎ－ｗｉｎだろうが、俺は完全にｌｏｓｅじゃねえか。

断る。

「お断りします」

「これは君がどちらに入部するか迷わないで済む最善の方法だと思わないか？

いままで君はどちらに入部するか決めかねていて消極的な解答をせざるを得なかったんだろ？」

「違います」

「じゃあ、なぜ？」

「部活というのに束縛されるのが嫌で。

俺、一人暮らしなんで、家事とかも全部自分でやらないといけな

いんで、ムリです」

「そこをどうにかして……！」

「すみません、諦めてください」

「あだっちという秀逸な人材を見つけたのに、放っておけるわけないじゃない！」

だから俺はお前からあだっちなどと呼ばれるような親密な関係を持った覚えなどない！！

この押し問答は、昼休み終了のチャイムがなるまで続けられた。

第5話－A2　Lost－311－　"I　am　Jamie"

「コウ、今日も散々な一日だったな」

今日はジョーと二人で帰宅だ。
というのも、放課後になると例の二人が教室に押しかけてくるため、執拗な勧誘から逃れるためには、授業が終われば即帰宅、これしか方法がない。
今週掃除当番に当たっている零雨と麗香とチカを待つ時間はない。
待っていれば即、勧誘の餌食になってしまうからだ。

「ああ、まったくだ。
あの部長らのしつこさは並大抵じゃない」

俺は後ろに注意しながらジョーに言う。
この間、俺がジョーと一緒に帰ってたら軽音部の部長に見つかって捕らえられ、
強制的に部活の見学をさせられた。
後ろからの追跡者に注意しつつ、慎重に帰宅しなければならない。

「確かに、お前が後ろから捕獲された時は俺もビビったぜ」

「ハハ……だろうな」

「あ、そういえばコウ、あれは買ったか?」

「ん？ああ、まあ買ったが……まだ開封してない」

「あれ、絶対面白いから、帰ったらやってみてくれよ！」

「そうさせてもらおう」

ジョーの言う「あれ」とは、ゲームソフトのことだ。
ゲーム機でやるゲームじゃなくて、パソコンでやるやつだ。
昨日の帰りにジョーが珍しく勧めてきたゲームソフト、
名前は忘れたが、ジャンルはロールプレイングゲームだ。
それを買い物ついでにショップへ行って買ってきたんだが、昨日は
洗濯物も溜まってたし、
することが多くてやってる暇がなくてできなかったが、今日は出来
そうだ。

「俺さ、今レベル２２なんだけどさ、
洞窟のボスが難しくてなかなかクリアできねえんだよな～」

「ああ、そう」

「何だよ、反応が薄いな。
お前も同じゲーム買ったんだろ？」

「いや、まだやってねえからゲームシステムとか全く分かんねえし、
どうせ今日始めたところでせいぜいレベル３ぐらいまでしか上がら
ん。
レベル２２なんていうのはまだまだ先の話だ」

「そうだろうけどさ、お前、もうちょい人の話に興味を持って聞いたらどうなんだ？」

「結構興味を持って聞いてるつもりなんだがな」

「残念だけど、傍目からみたら全然興味がないような風にしか見えないんだ」

「じゃあ、今から興味があるような返し方するように努力する」

「そうしてくれ」

「でさ、そのボスが堅くて堅くて。
俺剣士でいってるんだけど、なかなか攻撃は当たりにくいし、当たっても堅いからライフが全然減らないし」

「へえ～、そんなに堅いんか？ダイヤモンド級？
そもそも、そんな堅いって分かってんのにわざわざ剣で行く理由が分からん。
俺だったら機銃で蜂の巣にしてるね」

「なんかうざいが……まあ仕方ないか。
それからもう一つ突っ込ませてくれ。
大体、ＲＰＧに機銃とか出てこねえしっ！！」

「あ、そう」

「『あ、そう』じゃなくてよ、

そんな現代兵器でボスを駆逐できるならとっくにボスは絶滅してるわ！！

核とか使えば一発じゃねえか」

「それでいいんじゃね？

武器屋かなんかに核弾頭が置いてあるのも風情があってなかなか面白いと思うぞ、俺は。

誰が最初にその核弾頭を買うだけの資金を調達できるか、とか」

「何か違わなくないか？それ」

「ゲームだから何でもありだろ」

「まあ、とにかく、お前とはここでお別れだ、じゃあな！」

ジョーはT字路を左に曲がって行く。俺は右だ。

「帰ったら絶対にやってくれよ～！！」

「分かったから大声出すな」

＊＊＊＊＊

家に帰った俺は、鞄を自分のベッドの上に放り投げ、制服から私服に着替えると、

すぐにそのゲームソフトを開封してみる。
まずは説明書の熟読からスタートだ。
……意外と説明書、薄いな。これならすぐ読める、
手の平大ほどの小さな冊子に８ページという分量の少なさだ。
説明書の所々に“詳しくはチュートリアルで”などと書かれているのが気になるが、
冊子のページをこれだけ削れるということは、よっぽど詳しいチュートリアルなんだろう。
とりあえず俺はパソコンにディスクを入れてみることにした。
ゲーム機でいろいろゲームをすることはよくあるが、パソコンでゲームをやるのは初めてだ。

ディスクを入れてしばらくすると、インストールウィザードなるものが始まった。
説明書にも、まずこのウィザードに従ってインストールしろと書かれている。
長ったらしい利用規約を読み飛ばし、同意しますにチェックをつけ、≦≦インストール（Ｉ）≧≧のボタンをクリックした。

……ん？
インストール中に、エラーが出た。

「不明なデバイスが不正に接続されています。
　このデバイスがこのゲームの動作に支障を来たす可能性があります。
　インストールを続行しますか？」

続行ボタンと中止ボタンと、二つの選択肢が俺に提示された。
恐らくこれは以前零雨と麗香が俺のパソコンを闇改造して取り付け

た基板のことだろう。
どうせ中止してまたやり直したとしても、このエラーが出るに違いない。
俺は続行ボタンを押した。

その直後だ。
突如黒画面に変わり、画面の中心に白い文字で
《Ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ?》、訳せば《お元気ですか》と表示されたのは。
……ウィルスか?
いやいや、まさか市販のソフトにコンピュータウィルスが紛れ込んでるなんてまずありえない。
怪しいところのメーカーならまだしも、このゲームは大手ゲームメーカー製作のゲームだ。
ゲームにウィルスが紛れ込んでるとなれば、
メディアも大々的に報じ、メーカーも製品の回収を始めるだろう。
ならば、このＨｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ?は一体何なんだ?

Ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ?と書かれた文字の二段下に、
入力待ちを示すカーソルが点滅している。
俺は冗談混じりにこう書いた。

《Ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ?》
“あなたは誰?”

Ｅｎｔｅｒボタンを押すと、何と答えが返ってきた。

《Ｉ　ａｍ　Ｊａｍｉｅ》
“私の名前はジェイミー”

……ハッカー？
せっかくなので、ジェイミーと名乗る相手といろいろ会話してみることにした。
多分違うだろうが、もしかしたら、こういうゲームの始まり方なのかもしれん。

《Ｗｈｅｒｅ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｌｉｖｅ？》
“どちらにお住まいに？”

《……》
“（無回答）”

《Ｕｎ．．．．．Ｈｅｌｌｏ？》
“えっと……もしもし？”

《Ｉ　ａｍ　Ｊａｍｉｅ》
“（私の名前はジェイミー）”

《ＯＫ，Ｙｏｕ　ａｒｅ　Ｊａｍｉｅ》
“オッケー、あなたはジェイミー”

《Ｉ　ａｍ　Ｊａｍｉｅ》
“（私の名前はジェイミー）”

様子がおかしい。
相手は人間じゃないのか？
……となると、やはりこれはこういったゲームの始まり方なのかもしれん。

こいいうのは時間が経つと勝手に先へ進むものだ。
今度は放置してみよう。

《Ｐｒｅｓｓ　Ｅｎｔｅｒ　ｋｅｙ　ｔｏ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ》
“続けるには、ＥＮＴＥＲキーを押してください”

ほら出た、やっぱりこれはプレイヤーを驚かすためのちょっとしたジョークだったらしい。
全く、心配させやがって。
俺は何のためらいもなくそのボタンを押した。

《Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｍｙ　ｗｏｒｌｄ》
“私の世界にようこそ”

私の世界？
言葉の意味合い的にちょっと引っ掛かるが、まあいい。
そういう設定のゲームなのだろう。

今度は画面に日本語で“転送開始”の文字とともに、
作業の進捗状況を示すバーが現れ、ロードが始まった。
なかなか面白いゲームだ。
やっぱ、ゲーム中にもこういったビックリネタが潜んでいるのだろうか。

俺の携帯電話に麗香から通話着信が入った。
パソコンの画面に意識が向いていた俺は、半分興ざめ感を味わいながら、
携帯電話を手に取る。

「はい、もしもし」

《コウくん、今パソコンで何しようとしてるの!?》

「何って、ゲームだが。
ていうか、お前、俺を監視してるのか?」

《い、いいから、手遅れになる前に早くパソコンの電源を切って!!》

「は?手遅れ?何の話だ?」

《そのジェイミー……ブツッ、プー、プー、プー……

あ、電話が切れた。
今、麗香はジェイミーと言ったよな?
もしかしてこれは……ジョークじゃ、ない?
だとするとこれは一体何なんだ!!

俺は急いでPCの前に急行し、電源を切ろうとするが、同時に激しい光が俺の周囲を包み、電源を切ることができなかった。

第5話－A3　Ｌｏｓｔ－３１１－　エリア３１１と謎のシステム“ＥＬＶＥＳ”

なんかかなり乱雑になってしまいました。
※主人公がいろいろ毒を吐いていますが、気にしないでください。
あなたは決して悪くありません。

第5話－A3　Lost－311－　エリア311と謎のシステム“ELVES”

ふと気がつくと、真っ暗だった。
いや、ただの真っ暗闇ではないようだ。
俺の周囲上下左右３６０。すべての方向に無数の小さな光の点が美しく光り輝いている。
そして俺の身体はふわふわと宙に浮いている。
……浮いてるだと？
いや、確かに俺は宙に浮いている。
これは一体どういう状況なのだろうか。
ジェイミーの“Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｍｙ　ｗｏｒｌｄ”の言葉の後に
ここにいるということは、ここがジェイミーの世界ということになる。

暗闇の中光り輝く無数の点、宙に浮いている俺という状況を考えると、
ここは宇宙空間なのではないかと推測できる。
ただ、気圧ゼロ、酸素がないはずの宇宙空間で目玉が飛び出ることなく、
こうやって普通に息ができているというのは、どういうことなのだろうか。
宇宙に地球並の気圧と酸素濃度があれば、
そりゃ宇宙線の被爆、つまり放射線被爆を防ぐ防護服は必要だろうが、
放射線被爆を無視するならば今の俺のように宇宙飛行士が半袖の私服という軽装でも大丈夫なはずだ。
言い換えれば俺は今現在僅かずつではあるが、被爆しているということになる。

痛っ！！

俺の頭に何かがぶつかった。
咄嗟にぶつかってきたそれを捕らえると、それは今さっき電源を切ろうとしていた俺のパソコンだった。

ハハハ……何というカオス。

宇宙空間を漂うパソコンは、周辺機器と本体とが繋がれているコードをまるでタコの足のようにくねらせている。
俺はパソコン本体をたぐり寄せ、目の前を飛んでいるマウスを掴んだ。
赤く不気味に光る俺の光学式マウスのセンサー面に手を当て、マウスを少し動かして操作すると、真っ暗だったパソコンの画面が復帰した。

黒画面に白文字というデザインは変わらず、表示されている内容だけが変わっていた。

＊＊＊Ｅｍｅｒｇｅｎｃｙ　ｐｒｏｇｒａｍ＊＊＊
“　＊＊＊緊急プログラム＊＊＊”

Ｃｒｅａｔｅ　ｓｕｂｓｔａｎｃｅ
“　物質生成”

Ｏ２　２０％
Ｎ２　８０％

The pressure of 1 atmospheres
“1気圧の圧力”

Range
“範囲”

150m×150m×150m

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

……とりあえず、なぜ俺が呼吸できているのかという謎は解けた。
何とも信じがたいが、このパソコンが150m四方に1気圧の大気を生成しているらしい。
零雨と麗香の闇改造されたPCはやはり普通のPCではなかったようだ。
そして、PCの画面の隅に、
英語で“持続可能時間　残り16時間”と悪夢のカウントダウンが始まっていた。
つまり、あと16時間もすれば、大気の生成ができなくなり、瞬く間に俺は窒息死というわけだ。
ここは大気の生成を続けながら零雨と麗香に連絡を取るべきだろう。
俺はそのウィンドウを最小化し、麗香が以前俺のパソコンに入れたプログラムを起動させる。
画面の隅では、常に持続可能時間が秒単位で表示されている。

プログラムを起動させると、
以前麗香を助けようと足掻いた時に俺が零雨のパソコンで起動した例の画面が表示される。

とにかく、これであの時のように救難メッセージを送らねば、俺はここで冥土行きだ。

Ｉｎｐｕｔ　ｓｅｃｕｒｉｔｙ　ｃｏｄｅ　－＞　＊＊＊＊

インプットセキュリティーコード、つまり暗証番号を入力しろということだ。
＊が四つあるから四桁、暗証番号は確か、０１７６だったはずだ。

オッケー、暗証番号の入力はパスできた。
次に現れたのはログインのユーザーを選択する画面。
で、次はログインするユーザー名の選択だ。

＊Ｌｏｇｉｎ＊

Ａｄａｃｈｉ　ｍｉｔｓｕｈｉｄｅ
０１７６
０３０１

俺の名前のユーザー名ををクリックすると、
英語での表示から一変、慣れ親しんだ日本語の表示に変わった。
よしよし、順調だ。

次に接続先を選ぶ。
「ステージ０」と「接続しない」の二つが用意されていたから、
とりあえずステージ０の方を選択しておいた。

ハードウェアアクセラレータ起動中
起動率―■■■■■■■■■■―１００％
ハードウェアアクセラレータ起動完了
プライマリシステム３．０ａと同期中
プライマリシステム３．０ａが見つかりません
セカンダリシステム１．７ｆと同期中
セカンダリシステム１．７ｆが見つかりません

接続に失敗しました。
再接続を試みます

プライマリシステム３．０ａと同期中
プライマリシステム３．０ａが見つかりません
セカンダリシステム１．７ｆと同期中
セカンダリシステム１．７ｆが見つかりません

接続に失敗しました。
システムが見つかりません。
動作を決定してください。

システムが見つからない？そんな馬鹿な……
前はちゃんと繋がったじゃねえか！！

見つからないって、一体どうなってんだよ！！
持続可能時間を見ると、一気に２０分も減って残り１５時間４０分になっている。
どうやら他の作業を同時にやらせると、持続可能時間が大きく減るらしい。
これは無駄なことはできないな……
俺に与えられた選択肢は、

「接続を中止する」
「再試行する」
「システムを再検索する」

の三つだ。
接続を中止して保身にまわったとしても、１５時間以内に零雨と麗香が救助に来る可能性は薄いと考えた方がいいだろう。
この選択肢は没だ。
再試行したところで、もう既に二回も接続に失敗している。
三度目の正直ということわざもあるが、やはり失敗して持続可能時間だけが減る、ということだけは避けたい。
とりあえず、一番下のシステムの再検索をかけてみようではないか。

システムの再検索を選択する。

システムの情報を取得中
取得完了
現在地の情報を取得中
取得完了

お、すんなり行ったぞ。
しばらくすると、画面に取得結果が表示された。

システム名：ＥＬＶＥＳ
現在地：エリア３１１

……は？
システムの名前がエルベス？ｓ０じゃなくてか？
現在地もステージじゃなくてエリア３１１になってる。
これは柔軟な思考回路を持ってこの状況の整理に取り組まねばならないだろう。
まず、このＰＣの情報を完全に信用して考えるならば、ここはステージでなはい。
そして、ステージの管理プログラムである彼女達と繋がらない。
ここで考えられるのは、彼女達が管理するステージという領域の外側に俺がいる、ということだ。

そして、この空間の管理プログラムの名前はＥＬＶＥＳ。
空間名はエリア３１１。
全くの別世界に俺はジェイミーという謎の存在によって飛ばされたと考えると、話のつじつまが合う。
全くの別世界、つまり、異世界。
ステージとは全く違う世界。
麗香はステージは３０まであると言った。
そして、ステージは４２まで増えるだろうとも。

俺はそれが世界のすべてだと思い込んでいた。
ステージとは違う全くの別世界なんぞ、想像をしたことすらなかった。

さて、まあよくある普通の異世界モノのファンタジー小説だと、
気がつけば草原にいましたなどというような始まり方をするが、
人間が生きていけるような環境の星に偶然にも怪我することなく降り立ちました、というのは、
ご都合主義の塊ではないかと俺は思う。
いや、別ににそれが悪いと言っている訳じゃなくてだ、
逆にファンタジーの王道的な始まり方で俺はいいんじゃねえかと思っている。
面白い作品も多々あるしな。

リアルな異世界の飛ばされ方をするなら、
まず始まりは俺のように広大な宇宙空間にポツリ、というのがセオリーではなかろうか。
……まあ、小説で俺と同じように異世界の宇宙空間に飛ばされるような奇特な主人公がいれば、
その主人公の９９％は異世界に入った瞬間に窒息死、
宇宙の藻屑となるのが関の山、そこでジ・エンドなのだが。

小説は小説、現実は現実だ。
現実世界の俺は、ご都合主義的に、
ＰＣが大気を生成してくれているから９９％の中には含まれず、
こうやって生き延びているのである。
あー、どうせ異世界に飛ばされるなら気がつけば草原にいましたパターンが良かった。マジで。

現実厳し過ぎるって。

おっと、あまりウダウダとしてられねえ。
タイムリミットは確実に迫って来ている。
ＰＣが俺に与えた選択肢は、

「ＥＬＶＥＳに接続する」
「中止する」

の二つだ。
一応、管理プログラムがＥＬＶＥＳということは分かったし、
そこに接続してみる価値はあるだろう。

俺は「ＥＬＶＥＳに接続する」をクリックした。
持続可能時間、残り１４時間５７分。
減りが無茶苦茶速えええええ！！！！
ちょ、これ、生き延びられんのか俺？
やっぱ俺は９９％の一部になってしまうのか？

ＥＬＶＥＳに接続中
接続完了
ＥＬＶＥＳに同期中
同期完了

パッと画面が切り替わり、グラフィカルなメニューが表示された。
どうやら接続に成功したようだ。

しかもメニューが日本語という超親切設計じゃねえか！！
メニューの中に、≦≧天体検索≦≧なるものを発見した。
これを上手く利用すれば、地球と似た環境の惑星を探し出すことが出来るかもしれない！
ヨッシャアッ！
早速クリックして、検索する天体の条件を入力し、検索をかける。

検索ボタンを押すと、結果表示までの残り時間が表示された。
検索完了まで残り１時間らしい。
あと１時間、持ってくれよ、俺のＰＣ！！

＊＊＊＊＊＊＊

……眠い。
検索完了まであと２０分なのだが、俺に疲労という名の強烈な睡魔が襲ってきた。
部活の勧誘を避けながらの学校生活、結構体力的にも精神的にも疲れてきてたらしい。
タイミングが悪い時に限って疲れが押し寄せてくる。

――ｚｚＺ……！

寝たらダメだ、寝てしまったら、寝てる間にＰＣの持続時間が限界に到達、
そのまま永遠の眠りにつくことになっちまう。
中に浮いているパソコンを離すまいとしっかり握っているマウスのコードを放しそうになる。
マウスとかキーボードとか、最近はコードレスタイプが流行ってる

みたいだが、
俺のパソコンはコードタイプで良かった。
ちょっとだけなら寝ても問題ないだろうという悪魔の囁きを振り払い、
寝ないように自分の身体を叩いたりつねったりしながら２０分を耐えた。

検索結果　１件ヒット

惑星管理番号　２８５７５１９　適合率９４％

おっ……出てきた。
惑星管理番号……ハハハ、どっかのＳＦ映画みたいだな。
２８５７５１９をクリックすると、その星のモデルが表示された。
大陸の形は当然違うが、地球そっくりの風貌、言うことなしだ。

モデルの下に、「惑星２８５７５１９へ移動する」というボタンがある。
もしかして、この星に行けるのか？
俺は躊躇いもなくそのボタンをクリックした。

と同時に、俺は妙な安堵を覚えてしまい、ついに寝てしまった。

第5話－Ａ４　Ｌｏｓｔ－３１１－　翼を持つ人間（前書き）

いきなりですが、テンプレファンタジー開始です

今日は何となく連投…

第5話－A4　Lost－311－　翼を持つ人間

とんとん、と誰かに肩を叩かれ、目が覚めた。

「うわっ！！」

仰向けに寝ていた俺が上体を起こすと同時に、
人によく似た動物の驚くような声が聞こえ、強い風とともに砂埃が舞った。

「うえっ、ぺっぺっ！」

口やら鼻の中に大量の砂が入り込んできた。くそ、砂が目にもっ！

……砂？
目を擦って周りをよく見渡してみると、周囲は暗い。夜らしい。
一面砂しか見えないところを見ると、ここは砂漠か……
しかしながら、俺のすぐ下には待望の地面があるではないか！！息も出来る！
これが例の惑星ウンチャラカンチャラってところか！
ヨッシャァっ！

「生き延びたぞおおおお――っ！」

へっ、これでしばらくは生きて行けるぜ！！

「あの……」

日本語が聞こえてきたような気がして振り向くと……うわ、マジ？
人間だよ人間！
風貌的には俺と同じぐらいの歳、完全に中世ヨーロッパ風の少女である。

「あの……大丈夫ですか？」

「え、あ、まあ」

やばい、完全に日本語だよコレ！
意志疎通出来るって最高じゃねえか！
うん、これで俺もファンタジーの王道の仲間入りってわけだ！

「ごめんなさい、私が飛んだばかりに……」

「……飛ぶ？」

「さっきの砂埃は私のせいなんです、ごめんなさい」

「あ……ああ、別に気にしてないが、それよりも飛ぶって……？」

「あの、質問してもいいですか？」

「……ああ、どうぞ」

俺の質問に答えてくれよ……

「なぜ、あなたには翼がないのですか？」

「なぜって……」

ふう、だんだん落ち着いてきた。

夜だからよく見えないが、確かに少女の背中には足元まで続く大きな翼がついている。

この少女がこんな質問をしてくるということは、この星の住人はみんな翼を標準装備してんのか……

金とか地位とか要らねえからとりあえず一旦翼をくれ～なんて歌う歌があったが、

ここではリアルに翼を持ってるわけだ。

「ついてなきゃおかしいのか？」

「……神使様のご加護の証である翼を持たない人がいるなんて、聞いたことがありません。

こんなところで寝ているなんて、どうかなさったのですか？」

「……。」

この少女に俺のことを説明してもいいのだろうか？
ここは砂漠のど真ん中、目の前の少女以外に人間はいないが、
とりあえず無難な解答をしておいたほうがいいだろう。

「俺がここにいるのには特別な事情があってだな、翼がないのもそのせいだ」

「特別な事情？」

「ああ。常識じゃ考えられないようなとんでもない事情だ」

「良ければ、その事情を聞かせてもらえますか？」

暗闇の中、少女は問う。
教えてやってもいいのだが……
こんな砂漠のど真ん中で、奇跡的に現地人とコンタクトが取れているのだ、ここでの生活を確保したい。
いや、砂漠でじゃなくてこの世界でっていう意味で。
ここはやはり、一つ条件付きで教えるのはどうだろうか。

「事情を説明する前に聞かせてほしい。
君は、こんな砂漠の真ん中で一体何を？」

「私、ですか？

私は花摘みの帰りです」

少女はそういって、手に持っていたカゴの中身を俺に見せてきた。
だが、暗くてよく見えん。

「……そうか」

「それと、あなたの事情と、何か関係があるのですか？」

「い、いや、そうではないが……」

「……あまり、話したくない事情ですか？」

「いや、そんなことはない。
ただ、今話したところで、君に信じてもらえるかどうか怪しい。
確か、君は花摘みの帰り、だったな？」

「あ、はい」

「君の家はどこに？」

「ナクルにあります」

「ナクル……街か？」

「はい、結構大きな街です。
私の家は郊外にあって、ナクルの隅の方です」

「なるほど……」

「それが、どうかしたのですか？」

「できれば、俺をナクルまで案内してほしい」

行くあてはないが、とりあえずファンタジー小説では、こういう街に行くのがある種のテンプレのようになっている。行ってみるべきだろう。

そこでどうにかして職と屋根を見つけることができれば、この世界で暮らして行ける。

まあ、元の世界に戻れるならばそっちの方がいいにこしたことはない。

「あ、はい、いいですよ。
ここから街までは二日ほどかかるので、その間よろしくお願いします」

「ああ、よろしく。
……おっと、名前を聞いてなかったな。
俺の名前はアダチミツヒデだ、よろしく」

「私は“リン”って呼ばれてるので、リンって呼んでください」

「ああ、分かった。リンだな？俺を呼ぶときはコウでいい」

俺とリンは握手をした。

やっぱ握手はどこの世界でも共通の便利な挨拶だ。うん。
しかし、リンは俺と握手をすると、すぐに手を引っ込め、驚いた顔付きで俺をまじまじと見つめる。

「コウさんは、魔術師ですか？」

「魔術師？い、いや、違うが……」

魔術師という職業（？）がこの世界でどういう職業なのか分からないが、
とりあえず俺は魔術師ではないことは確かだ。多分。

「今、手を触れた時手がピリピリするほどの強い魔力を感じたんです」

「魔力？」

まさか、ファンタジーの定番、魔法がこの世界に存在しているというのか。
このエリア３１１の創造主はファンタジー好きで決定だな、うん。

「まさか、魔法を知らない？」

「ぜんっぜん知らん。まったく。
これぽっちも」

「世の中には不思議な人もいるものですね……」

だろうね。
リンから見れば俺は何も知らないベイビー同然の常識のなさなんだろうな。

「そういえば……あの、どうしてあなたがここで寝ていたのかという話がまだ……」

「ああ、それはまた日が昇ってから話そう。
あまりに突飛な話になるから、すこし親睦を深めてからの方がいい」

「そう……ですか」

「俺も君に聞きたいことが山ほどある」

それから、俺とリンは相談しあって、ここで一晩を明かすことにした。
地球との適合率９４％のこの惑星、何とかここで生きて行けそうな気がする。

第5話－A5　Ｌｏｓｔ－３１１－　ファンタジーの定番といえば……（前書き）

ファンタジーにはアレが付き物ですよね…
ただ、ちょっと生々しいです。

第5話－A5　Lost－311－　ファンタジーの定番といえば……

翌朝。
太陽（本当は太陽じゃないが、一応太陽としておく）が昇る直前に起きた俺は、
リンが起きるのを待っていた。

外が明るくなってくるにつれて、赤い砂漠の全容が明らかになってきた。
辺り一面砂だらけ、昨夜リンが言っていたナクルという街がどこにあるのか見当がつかない。
それにしても、このリンという少女、完全に外見が洋風であるにもかかわらず、
話す言語が日本語というご都合主義の祭典ともいうべきファンタジー度合い。
金色の髪と同じ色の大きな翼、う～ん……外見だけ見れば完全に天使だ。
昨夜の俺が翼を持たないことに対するリンの反応をみれば、
ここに住む人間（一応人間にしておく）はみな翼を持っているということは確実だ。
しかしそれにしても、神使様とは一体何者なのだろうか。
神使様のご加護の証である翼……もしそれが本当に神使が人々に翼を与えたのならば――
この世界も所詮はシミュレートされているプログラムだ。
宇宙空間でＥＬＶＥＳに接続できたのだからそれは間違いない。
翼を与えたというのが本当ならば、神使とはそのシミュレートプログラム、それからデータを
自由自在に変更できる存在でなければならない。
零雨と麗香は本当の自分達の姿を隠している。

前の世界の常識を持ち込んで物事を考えるのはミスの元だろうが、
零雨と麗香が自分の姿を隠しているのに、
この世界では世界を容易に変えてしまう存在が人々の前にひょっこりと顔を出すということが
俺には想像できなかった。
神使……もしかしたら、いにしえから伝わる伝承的存在なのかもしれない。
とりあえず、神使という存在と加護についての話は興味がある。
後でリンが起きたらそのあたりをさりげなく聞いてみよう。

……うん？砂漠の砂に突き刺さってる、あの箱は一体？
ここから目測１５０ｍ程の距離のところに、何かが突き刺さっている。
部屋着のままここに来てしまった俺は、仕方なく裸足で砂の上を歩き、その物体に近寄ってみる。
まだ早朝だからいいが、昼ごろになれば砂もかなり熱くなってくること間違いなし、
何とか対策を打たねば。

「おっと、こんなところにあったのか」

落ちていたのは俺のパソコンだった。
ここに来る途中でのプロセスは寝ていたから覚えてないが、
とにかくパソコン発見、俺の唯一の荷物だ。
パソコンは持続可能時間を過ぎてしまったようで、ただの箱と化していた。
まあ、本体に砂が入り込んじまってるし、また使えるようにするに

は修理が必要だわな。

俺は見つけた大きな収穫を肩に担ぎ、リンの元へ戻ると、彼女も起き出していた。

「おはようございます、コウさん」

「ああ、おはよう」

リンは俺の肩にあるものを見つけるとすかさず質問してきた。

「あの、それは一体何ですか？」

「俺の唯一の荷物、パソコンだ」

「ぱそこん……？
何かの儀式に使うものですか？」

「いや、違う。
コイツが俺をここに送り付けてきた元凶だ」

「送り付けてきた……？」

「まあ、それはなぜ俺がここにいるのかという話と絡めて、また後ほど話そう」

「ふふっ、焦らすのが得意なんですね」

「そういう意味で言ってるんじゃない！
ただ、どうして俺がここにいるのか、
言ったところで信用されないのが目に見えてるから言ってる」

「そりゃ、出会ってまだ時間も経ってませんしね」

リンはカゴのほかにも持っていた大きな袋から、瓶に入った何かを取り出した。

「サンの実、食べますか？」

「サンの実……？」

「砂漠では必須の保存食です」

リンは瓶からアーモンドの形をした黄緑色の木の実らしきものを2、3粒取り出し、
ひょいと口の中に入れ、微笑んだ。
この時点で俺は思った。
この世界で生き続けることになるなら、彼女と結婚してもいい、と。
それほど美しく、かわいらしかった。

「もしかして、食料も何も持たないで砂漠に足を踏み入れたのですか？」

「パソコン以外何も持ってないんだ。何も」

「どうしてそんな危機的状況の中で、
あなたは悠々と砂漠のど真ん中で寝ていられるのですか？」

「……眠かったんだよ」

「はい、とにかく食べないと、今日一日持ちませんよ」

「ああ、どうも」

俺はリンから受け取った実を見て、
これは異世界人の俺でも食べられる物なのかと一瞬不安になったが、
適合率９４％を信頼して、その実を口に入れた。
味はチョコレートとまではいかないが、結構な甘さだ。
舌に若干の渋味が残るが、まあうまい。

「それでは、行きましょうか」

しばらく二人でサンの実をかじっていると、リンが手をはたいて立ち上がった。
それに続いて俺も立ち上がる。
目的地には早いうちに着いた方がいい。

「ところでリン、一つ聞きたいことがある」

「はい、何でしょう」

「俺に食料を分け与えるだけの余裕があるのか？」

「多分大丈夫だと……思います」

「無理して俺に食料を分けようとしているなら、止めておいた方がいい。
俺は人の疫病神にはなりたくないんでな」

「大丈夫です、三日分残っているので、何とかなりますよ」

「三日って……一日分足りなくないか？
こっからナクルまでは二日かかるんだろ？」

「ええ。ですが一日分足りなくても、ちょっと我慢すればナクルまで持ちます」

「トラブルに巻き込まれなきゃ、だがな」

「そうそうトラブルなんて起きないので大丈夫ですよ、盗賊にでも遭わない限り」

リンはそういってスマイルを見せるが……
残念ながら俺は前の世界ではいろいろと巻き込まれて大変な目に遭っちまってるんだよ。

不安は見事に的中した。

盗賊に遭わない限り大丈夫と言っていたリンだったが、
その盗賊がそのまさかで空からダイナミックにデデーンと登場。
リン以外の初めての現地人は盗賊という俺の不運ぶりを遺憾無く発揮している。
巻き込まれるだけが俺の人生なんてクソッタレだ――っ！
俺の巻き込まれ具合は疫病神も舌を巻くぜ！ハハハ！……やばい、リアルに死ぬ。
だって奴ら、手に持ってる剣を上から投げ付けてくるんだぜ？
あんなの頭に当たって刺さりでもしたら、頭蓋骨がパカッと割れて中の脳がこんにちは確定だ。

リンは既に自衛の態勢に入り、身につけていた短剣を引き抜いて構える。
こんなかわいくて華奢そうな子でも、やっぱ盗賊対策してるんだな。
俺？素手だが何か文句はあるか？
強いて言うなら近づいてきた敵を肩に担いでいるパソコンで殴り付けるぐらいしかできない。
もっとも、ハト派の俺としては相手を傷つけることなく撃退するのが理想ではある。

「コウさん危ないっ！！」

リンが叫ぶと同時に俺の頭上でキン、という金属音が聞こえ、
俺のすぐ足元に軌道のずらされた盗賊の剣がサクッと砂に刺さった。
リンが短剣で俺の頭蓋骨直撃を間一髪のところで防いでくれたらしい。
命の恩人である。
と、そんな悠長なことも言ってられない。
俺も何とか形だけでもいいから自衛の態勢をとらなくては！

幸か不幸か、俺のすぐ目の前に刺さりたてホヤホヤの剣がある。
パソコンで殴り付けるよりかは幾分かは攻撃力はあるだろう。
俺はパソコンを砂の上に放り投げ、その剣を構える。
一応、中学の授業で柔道と剣道をやった経験はあるが、
相手を物理的に傷つけるのを嫌った俺は、
まともに相手に技をかけることもできずに終わってしまったという、
ある種の伝説を持っている。
簡単に言えば最先端をいくヘタレということである。

そんな俺が剣を持ったところで、相手にはなんら脅威はないのだが、
そんなことを知らない盗賊達は地上に降り立ち、俺を警戒しながら
俺とリンの周りを囲んだ。
３６０。どこを見ても盗賊の姿しかない。
どこからどう見ても絶体絶命の超ピンチ、しかも相手は空を飛べるときたもんだ。
地上を這いずり回ることしかできない俺は、機動力の格段と高い相手に対して、なすすべもない。
しかも地面は砂漠の砂という動きにくさだ。

「命が惜しければ武器を捨てて金目のものと食料を寄越せ」

盗賊の一人は言った。

「残念だけど、あなたたちに渡すものもなければ食料もないわ。
他を当たってちょうだい」

リンは強気の発言だが、何か秘策でもあるのだろうか。
一応言っておくが、俺を頼ってるならそれは大きなミステイクだ。

「俺達は4日も何も食ってねえんだ、せっかく見つけた獲物を逃がすわけにはいかない」

胃袋からっぽなんですね、分かるぞ、その気持ち。
――同情する気はないが。
盗賊の円陣は徐々に狭まってきている。
やつらの剣の攻撃範囲内に入ってしまえばこちらはゲームオーバー、それまでに打開策を思い付くことができたら――まあまず無理だろうが。

「これ以上近づかないで！でないと焼き殺すわよ！」

「ほう、焼き殺す？
やれるもんならやってみろ。
……どうした？俺達を焼き殺すんだろ？焼き殺してみろよ」

リンのハッタリに盗賊は無駄な足掻き、と嘲笑の声を漏らす。
おいおい……相手を楽しませてどうする。
リンは鋭い眼光を盗賊達に向けながら、その短剣を握り直す。

ボウ、と短剣の先から直径７０センチほどの火球が現れ、
リンはそれを振り回して迫り来る盗賊を追い払おうとしている。

「そんな家庭用の魔法で俺達に勝とうなんて、ハッ、けなげな奴だ。
後で遊んでやろうか。
それにしても、この羽根なし黒目黒髪の男、珍しい。
こいつを見世物屋に売りとばしゃ、相当の金が入りそうだ」

なるほど、この世界では魔法は日常的に使われてるのか……って学習してる場合じゃねえよ俺！
しかも俺、こいつらに珍獣扱いされてるし……
盗賊はリンの火球を見ても、一向に怯む様子はない。
リンの短剣を持つ手が震えてきた。
どうやらこれがリンの魔法の限界らしい。

「コウさん、ちょっと力を貸して！」

「力を貸すって……俺は魔法とか全然使えねえぞ？」

「い、いいから！手を貸してくれるだけでいいから！！」

リンは空いているもう片手で俺の手を掴む。

「あなたの潤沢な魔力、ちょっと借りるわよ！」

「はぁ……？」

俺に魔力が備わってるはずがないのだが……

リンは短剣の先の火を消すと、俺の手を強く握り締める。

ドゴゴゴゴ、という表現が相応しかった。

リンの短剣から放たれた二回目の炎は緑色をしていた。

火球は直径５メートルを超える超巨大なもので、正面にいた盗賊がその火球に巻き込まれた。

「グアアアッ！！」

火の中から飛び出してきた盗賊は火だるまになっていた。

全身に火がついたその男は、翼をばたつかせて消火しようと足掻くが、

それが逆に炎に空気を送り込んでしまい、さらに激しく燃える。

その男の全身からは不完全燃焼を示す黒い煤がもうもうと舞い上がる。

これが殺人の現場だ、俺はそう思った。

「ボスッ！助けで！！！」

「このウスノロ！早く火薬を投げ捨てろ！引火するぞ！！
消火はそれからだ！！」

「ひぃ……ひぃ……」

砂漠の中で火だるまになった男は、
ボスの命令を忠実に守り、身につけている火薬を入れた箱らしきものを外そうと……

ドン、という腹に響くような鈍い音とともに砂煙が舞った。
俺は思わず目を閉じ、周りの状況をシャットアウトしてしまったが、
リンも他の盗賊達も同様の行動をとっていたらしい。
俺が目を開けると、
そこには黒く炭化して動かなくなったその男の“破片”があちこちに散乱していた。
これは、頭。そこに転がっているのは、恐らく足。あれは多分、手だ。
どれもまだ火がついて、黒い煤を吐き出し続けている。

……これは、取り外している最中に火薬が引火、爆発したに違いない。
この世界の火薬は何でできているのかは知らないが、
前の世界の火薬は０．０何グラムの僅かな量でも十分危険で、
取扱に気をつけなければならないものだった。

黒く炭化したその盗賊の白い骨には、鮮やかな色の肉片が顔を出し

ている。

「こ、この……よくも俺達の仲間を……」

ボス格の男はそう言って俺達に再び剣を向け直した。
食べ物の恨みは怖いなどというが、現実問題、仲間を失った恨みの方がよっぽど怖い。
……相手、リアルに怒らせちまったみたいだけど、どうすんだよ、リン！

「次、火ダルマになるのは誰かしら？」

俺と手を繋いでいるリンが、さっきの朝食で俺に笑顔を見せたリンとは到底思えなかった。
このリンという少女、ただ者ではない。

第5話－A6　Lost－311－　職と屋根

「くそっ、こいつらを殺せ！敵討ちだ！！」

盗賊のボス格の男は手下に命令する。
ここで大人しく死体を回収して「覚えてろ」の捨て台詞とともに、
どっかへ飛んで行ってくれるとありがたかったのだが、現実はそう甘くはなかった。
うおお、と叫び声を上げながら、
一度は俺達から距離を置いて囲んでいた男達が剣を突き立てて俺達に突進してきた。
砂の上での動きにくさを、男達は超低空飛行によってカバー、
砂煙を舞い上げながら加速度的に接近してくる。

「おい、リン！」

俺は何も考えることができず、とにかくリンの名前を呼んだ。
このままじゃ俺達は串刺しだ。
そんな超ピンチの状況にもかかわらず、
リンは手に持っていた短剣、花の入ったカゴ、袋、所持品をすべて投げ捨てた。
リン、まさか剣を持った屈強な相手に素手で挑もうなんて馬鹿なことを考えてるんじゃねえだろうな！？

「コウさんも早く荷物を捨ててっ！！」

「はぁっ！？」

「重量オーバーですっ！！」

「重量オーバーって何なんだよ！！」

俺は訳も分からないまま手に持っていた盗賊の剣を手放した。

「絶対に離れないで！！」

リンはそう言うと、子供を抱き上げるように俺に抱き着き、
強烈な風と砂煙が俺とリンを包み、俺は反射的に目を閉じた。

「「「「「「ぐぎゃあっ！！」」」」」」

そっと目を開けると、俺の足は宙に浮いていた。
その下には串刺しになった盗賊の姿がある。
……なるほど、俺はリンと上に上昇したわけだ。
俺達を四方から串刺しにせんと超低空で突撃してきていた男達は、
目標が上昇したにもかかわらず、飛んでいるために急に止まることもなく、
向かいの相手と互いに刺し合う形になったというわけだ。
その証拠に、男達は中心に集まり、その全員の屈強な身体を鋭い剣が貫いていた。

放射状に広がる剣、刺し合ってしまった男達の構図は、上から見るとまるで花のようだ。
盗賊の命の花が散ったことでできた花……なんとも皮肉なものだ。

「……もう……限界」

リンが苦しそうに言ったその一言を皮切りに身体が大きく傾き、バランスが崩れた。

「グデッ！！」

砂の上に墜ちた俺の上にリンが重なるようにして墜ちてきて、俺は思わず奇声を上げてしまった。
俺の上のリンの息が乱れている。
俺を抱いての飛行は相当の体力を必要とするらしく、眉を寄せてゼエゼエと息を上げている。

「ちょっと……コウさん重すぎ……」

「重すぎ？
俺はそんなに重かったか？」

俺は一応身長、体重共に全国平均ピッタリの数値なのだが……
やはり少女には俺は相当の重量物だったらしい。

「まるで金属の塊を持ち上げてるみたいでした。
絶対に何か他に隠し持ってるでしょう！」

「いやいや、ホントに俺は何も持ってないから」

「絶対嘘！
そんな体格でその体重なわけがないです！！」

「まあ重い、重くないの話は後回しにしてだ、なんか盗賊が全滅しちまったみたいだが……」

「とりあえず、危機は去ったようですね」

リンは立ち上がって串刺しになっている盗賊の剣を抜き、
盗賊の輪の中心に落ちている荷物を取り出してきた。

「コウさんの荷物も持って来ました……って、
このぱそなんとか、ものすごく重たいです。中に何が入ってるんですか？」

血しぶきで赤色に染まったパソコンを俺の前にズドン、と落とすように置く。
まだ使えるパソコンならば、
この取り扱い方は乱暴すぎて壊れるじゃねえかと、文句をつけなければいけないが、

どうせ壊れているのだから、このぐらいは大目に見る必要があるだろう。
それに砂に次いで血まで中に入り込んじまっているようだし、修理による回復も絶望的だ。

「中には薄い板が入ってる」

「板、ですか？」

リンは意外そうに答えた。
板、では語弊があるかもしれん。
詳しく訂正しておくべきだろう。

「正確には“マザーボード”とかいう名前の板だ。
薄っぺらい板の上に色々なも部品がくっついている」

「装飾品のついた板、ですか……」

「いや、装飾品じゃなくて、ちゃんとくっついてるものひとつひとつに意味がある。
まあ、俺にはどの部品が何の意味を持つのか、まったく分からないが」

リンは不思議そうにパソコンを眺めていたが、やがて何かを理解したらしく、顔に笑顔が宿った。

「分かった！魔法を使う際の補助道具ですね！」

「……残念だが、ハズレだ」

俺は立ち上がって盗賊の死体に向かって手を合わせた。
いくら俺達の命を狙ってきた敵とはいえ、このまま死体を放置するのはさすがに酷のように思えた。
リンが荷物を取りに行った時に2、3人分の剣を盗賊の身体から抜いたが、
俺は刺さっている残り全ての剣を盗賊の身体から引き抜くことにした。
いくら盗賊として死を迎えたとしても、盗賊になりたくてなったわけじゃないだろう。

「……何してるんですか？」

「見ての通り、剣を引き抜いてやってんだよ
こんな無残な姿のままじゃ、死体も嫌がるだろ」

「はぁ……相手は盗賊ですよ？
情けをかける相手じゃありません」

「こいつらみんながみんな、子供の頃からこんな腐った人間だったとは思えない。
誰が言ったのかは忘れたが言ってたろ？
“俺達は4日も何も食ってねえんだ、せっかく見つけた獲物を逃がすわけにはいかない”と。

自ら進んでこんな困窮生活に身を投じるはずがない。
だから俺には生活に困って盗賊にならざるを得なかったとしか考えられない。
辛い人生を送ってきただろうこいつらの人生の終わりぐらい、弔ってやってもいいと思うがな」

「……。」

盗賊に刺さっていた剣を全て引き抜き終え、
俺はこれから万が一に対応するための、つまりは護身用に盗賊の剣を一つ、貰って行くことにした。
剣にまだ乾いていない血がついているのを、砂の地面に刺して擦り落とす。
死んだ人間のものを勝手に持って行くことには後ろ髪を引かれるが、仕方がないだろう。
死んだ人間の持ち物を剥ぎ取って行く……
ハハッ、某有名小説、羅●門のババアとまったく同じシチュエーションだな……

「さて、大分と足止めを喰らったな。
食料が尽きてナクルに着く前に餓死するのはまっぴらだ」

「そうですね、行きましょう」

俺達は盗賊の死体に背を向け、その場を後にした。

その日の晩、星の光が地面を照らす中で、俺とリンは座って例の話をしていた。

「ということは、コウさんはこの世界とは全く別の世界から来た、ということですか？」

「そういうことになる」

「向こうの世界の人達はみな、翼を持たない人間なんですよね？」

「まあ、そうだが……それが？」

「遠出するときとかはどうしてるんですか？
まさか歩いて移動するわけじゃないですよね？」

「陸、海、空の交通手段が発達しているから、徒歩で遠出することはほとんどないな」

「えっ、ちょっと待ってください！今、空の交通手段って言いました？」

「え？ああ。
人間だけでは空は飛べないが、飛行機という乗り物に乗って、空を移動することが出来る。
ちなみにだが、元いた世界の飛行機は、
本気になれば今日一日歩いた距離を2分ほどで移動できる」

「2分……」

「時間の単位、分かるか？」

「ああ、はい大丈夫です。
それにしても、今日一日歩いた距離をたったの2分で、ですか…
…ものすごく速いです」

「まあ、そこまでぶっ飛ばせる飛行機といえば、軍用の飛行機ぐらいだ。
マッハ超えると衝撃波がすさまじいから、一般の飛行機はマッハは超えない」

「あの、『マッハ』って？」

「速さの単位だ。
音が伝わる速さがマッハ1だ。
マッハを超えるっつうのは、音の伝わる速さを超えるってことだ」

「すごすぎてよく理解できないです……」

「とりあえず、話が逸れたから元に戻そう。
とにかく俺はこの世界に飛ばされてきた。
ここで俺は何をしていけばいいのか分からねえし、
この剣と壊れたパソコンだけが、俺の全財産、ほぼ丸裸に等しい」

「では、なぜコウさんはナクルに向かうのですか？
行くあてもないのに、行っても無駄じゃないですか」

「ナクルで職と屋根を確保できればここで生活していけるだろう？
確保できずにのたれ死ぬほうが、何もせず砂漠で干からびて死ぬよりマシだ」

俺は寂しく笑った。
確かに、ナクルで職と屋根が手に入るという保証はない。
リンは黒目、黒髪、翼なしの人間は見たことも聞いたこともなかった、といった。
そこまで珍しい風貌をしているならばどこかの物好きが雇ってくれる可能性もあるが、
盗賊の野郎も言っていたように、最悪見世物屋行きも考えておかねばなるまい。
リンはそれを聞いて、唇に指を当てて何かを考え始めた。
そして、多分大丈夫よね、と独り言を呟いて俺の顔を見て言った。

「私、花屋をやってるんですけど、花屋は私一人でやってるので、なかなか大変で。
誰か雇おうかなって考えているんですが、人に賃金を支払うだけの店の収入がまだなくて……
良かったら、うちで住み込みで働きませんか？」

うおっと！？
突然の求人情報（リクルート）ゲット！！
しかも雇い主が美少女ときたら、こりゃ乗るしかないっしょ！！
ビバ、ご都合主義！……あれ？なんか違う。
まあいいや。
ただ、俺に花屋という職業が適しているのかと聞かれれば……うん、

そこは分かってる。
俺、すぐ植物枯らしちまうから、気をつけないとな。

「ああ、もう、是非是非よろしく雇ってください！」

「ただ、まだまともに給料は出せないので……
私の家に食事付で下宿、これが給料の代わりになると思います」

「全然、もう構わないっすよ！最高の環境だ！」

「そう、ですか？」

生きていてよかったぁぁ――！

第5話－A7　Ｌｏｓｔ－３１１－　新居

俺達は翌日の夜にナクルに到着した。
晴れて花屋の従業員としての職と屋根を手に入れた俺は、内心浮かれ気分だ。

今までは変わり映えのしない一面砂だらけの景色だったが、
昼前には草原地帯に入ることができ、
日が少し傾きはじめた頃には、
木々がずっしりと立ち並んでいる立派な森の中に切り開かれた、横幅の広い道を歩いた。
リンの話によると、この森はもともとあった森を人工的に拡大させた森で、
砂漠からの砂の飛来から街を守る役割をしているそうだ。

「ここが、ナクルの街か……」

「ふふっ、どうですか？」

街の中を歩きながら辺りを見回せば、
中世ヨーロッパ風の木造、石造の建築物が道の両側にずらりと並び、
路面は石畳ではなく細かく砕かれた砂利がひかれており、道行く人々みな翼を持っている。
行き交う人々の翼は後ろから見るとハートの形をしているのが、何気にかわいらしかった。
ちなみに、翼もファッションの対象になっているらしく、
女性であれば翼に花のアクセサリーをつけていたり、

男性であれば翼を染めてみたりしている。
お洒落、身だしなみを気にするのもどこの世界でも共通らしい。

夜のナクルの街並みは、店や住居からのロウソクのような照明によって
街の地面が明るく照らされ、街はかなり賑わいを見せている。
ただ、翼があるのがこの世界の普通であり、持たない俺の方が普通ではないので、すれ違う人はみな、俺に奇異の視線を向けている。
これは我慢するしかないだろう。

「人通りも多くてなかなか興味深いのだが……」

「……？どうかしました？」

「足が痛くてそれどころじゃねえんだ」

俺は靴を履いていない。完全なる裸足である。
砂漠の砂の上を歩き続けたせいで足の裏がやけどを起こして赤くなってしまっている。
草原地帯はひんやりとした草があるから良かったものの、裸足に砂利道は拷問というものである。
足ツボ健康ウォークに使われている石は丸いが、ここの砂利は尖っているものが多い。
だから足を踏み出すと画鋲を踏むような痛みがして、
ナクルの街に興味はあれど、意識は痛みの方に行ってしまっている。

「帰ったら手当て、ですね」

「はは、『帰ったら』か……」

「私の家ですが、これからはあなたの家でもあるのですから、間違いじゃありません」

「でも元はといえばリンの家だろう？」

何気なく俺が言った言葉に、リンが急に表情を暗くした。

「確かに私の家です。……でも」

「でも？」

リンはそこまで言うと下を向いて首を振った。

「いえ、なんでもないです。今のことは忘れてください」

あまり人には言いたくない何か深い事情でもあるのだろうか。

忘れてくれと言われると逆に気になって覚えてしまうもので、俺の頭の中にリンの意味ありげな言葉が張り付いてしまった。

ナクルの街は広大で、リンの家謙花屋に到着したのは、夜もかなり更けてからのことだ。

リンは郊外にあると言ったが、まだ周辺の建物に街の中心部の空気が所々残っていて、
俺的にはまだこの辺りはまだ街だと思う。
リンの自宅は木造2階（屋根裏を含めると3階）で、
1階が店、2階が居住スペースになっているそうだ。

1階の店は閉まっているので、一旦店の裏から自宅に入ることになった。
その時、通りからは見えなくて分からなかったが、店の裏に不自然な程広い空き地があった。
不思議に思ってリンに聞いてみる。

「そこの空き地は私の土地なんです。
土地が余っちゃってるんで、そのままにしてるんです」

「なるほど、リン、いい資産を持ってるじゃないか」

「……そうですか？」

「当たり前だ、こんな街にある空き地、この街に住みたいと思う人から見れば、
立地は正直今ひとつだが、それでも欲しい土地だろう」

「それもそうですね。
今まで考えたことなかったです」

リンは笑って店の裏口の扉を開けた。
建ったばかりの新築らしく、扉を開けると建物の中は切りたての建

材の放つ木の香りが部屋の中から漂ってきた。
店の中は真っ暗闇で何も見えない。
リンは短剣を取り出すと、ポッ、と短剣の先に魔法で火をつけ、松明がわりにして中へ進んでいく。
俺も後に続いてお邪魔させてもらう。

「……はぁ、良かった、枯れてなくて」

壁の明かりに短剣の火を点けると、店の中にところ狭しに並べられている花々の姿が浮き上がってきた。
どれもみな枯れることなく青々としており、
大事な商品がダメになってしまったのではないかと、
道中しきりに不安がっていたリンは胸を撫で下ろした様子だ。
店の中に並べられている花は似たような形のものはあれど、どれも見慣れない花ばかりで、
こいつらの世話をきちんとやっていけるのか、俺は内心不安になる。
まあ、分からないことがあったらリンに聞けばいいか。

2階に上がると、ひしひしと花が並んでいた1階とはうって変わり、必要最低限の家具が並んでいるだけの状態で、部屋の中は何もない空間が目立っていた。
花屋はあまり繁盛していないのか……
リンは家の中を進みながら、壁の明かりをひとつひとつ点けていく。

「えっと、コウさんの部屋はここでいいですか？」

リンはある部屋の入口の前で立ち止まって振り返ると言った。

「わざわざ専用に部屋を貸してくれるとは、悪いな」

「部屋があって当たり前です、下宿なんですから」

「俺はてっきり1階で花に囲まれながら雑魚寝かと思ってた。
不審者が侵入してきた時の番犬代わり的な扱いでもされるもんだと」

「私がそんなひどい人に見えますか？
……希望するなら番犬扱いでも構いませんよ、私は」

「いや、有り難く部屋を使わせて頂くことにする」

「じゃあ、部屋の明かり、点けておきますね」

リンは部屋の壁の明かりに先ほどしていたのと同じように手慣れた様子で火を点けた。

「ところで、リン。一つ聞いてもいいか？」

「あ、はい、何ですか？」

「リンの家族は今どうしてる？」

リンの動きがピタリと止まった。

「なんで、そういうことを聞くんですか？」

「街を歩いていて家族連れとすれ違った時、
リンの目が羨ましそうというか、寂しそうというか、何か引っ掛かるものを感じてな」

「やめて……それだけは聞かないで！
……おやすみなさい。
明日、時間になったら起こしに来ますね」

「あ……おい、ちょっと！」

リンは急に下唇を噛み締めて顔を歪ませると、足早に部屋から出て行ってしまった。
彼女にこの質問はタブーだったようだ。
……。
俺は一体この後どうすればいいのだろうか。
リンの後を追って謝るべきなのか、それとも、そっとしておくべきなのか。
ううむ……そうだな、今はリンの気持ちが落ち着くまでそっとしておくことにしよう。
謝るにせよ何にせよ、相手が興奮状態の時はうまく物事が運ばないだろうから、
ここは時間に頼るべきだと俺は思う。

さて、俺に割り当てられた部屋なのだが……正直に言うと、家具も何もない。
部屋の中は引っ越しで家具を全て運び出したのと同じ光景だ。
部屋の奥には木の扉がついており、開けてみると街の通りが見えると同時に外の風が吹き込んできた。
この木の扉は、元の世界で言うところの窓ガラスに相当するようだ。
窓ガラスは日光を遮らないが、こいつは遮ってしまう。
この世界にはガラスというものが存在しないのだろうか。

俺はしばらく外の街の様子を眺めていたが、
次第に街の店や民家の明かりの数が減っていき、
とうとう営業している店は数えるほどになってしまった。
そろそろ俺も寝なきゃな。
……ああ、部屋の中には何もないんだったな。
布団もベッドもない。
俺は木の板の床の上に寝そべって、目を閉じた。
長距離を歩いていたおかげで、眠りにつくまではそれほど時間はかからなかった。

第5話－A8　Lost－311－　リンが一人で暮らすワケ

翌日、リンに起こされることなく自力で起きた俺は、背中の痛みを感じた。
そりゃ、そうだろう。
木の板の上で寝たのだから、身体のある場所にだけ圧集中的に力がかかってしまうのは当然のことだ。
開けっ放しにしていた木の窓の縁に、小鳥が一羽、さえずりながらとまっている。
人間慣れをしているのか、こちらが近づいても逃げようとしない。
深い緑色の身体をしたその鳥は、やはり見慣れないものだったが、その体の色から推測するに、森に住む生物であろう。
何を食って生きているのかは知らないが、俺は何の食料も持ってねえぞ？
その鳥に触れようと手を伸ばすと、さすがに本能が危険を察知したらしく、
慌ててどこかに飛んで行ってしまった。

「あ、もう起きていらしたのですか」

背後から声がして振り向くと、朝食を持ったリンが立っていた。

「おはようございます」

「おはよう」

「これ、作ったのでここに置いておきますね」

朝食の乗った食器を床の上に置くと、申し訳なさそうに笑った。

「机があればいいんでしょうけどね……なかなか買えなくて」

「べつにそんな気にする必要はない。
部屋の中は綺麗だし、床に置いても問題ないだろ」

「でもやっぱり床は汚いですし……
あ、そうだ、一階に会計用のカウンターがあるんで、そこで食べたらいいです」

俺は床に置いた食器を再び手にとったリンと共に、一階に下りた。
リンが用意してくれたのはパンと、野菜スープだった。
この世界のパンは塩気があり、そんなに塩味は強くないものの、やはり水は欲しくなる。

「スープは味見してないのですが、どうですか?」

「前の世界では味が濃い食い物を食ってきたせいか、ちょっと味が薄い気がする。
でも、というか、こういう言い方は語弊を生むかもしれないが、味は悪くはない」

「気に入ってもらえたみたいで良かったです」

「リンは朝は食べないのか？」

「先に食べちゃいました。
そのスープには痛み止めの効果がある薬草が入ってるんです。
昨日、足の手当てをするのを忘れてしまっていたので――
……そろそろ店を開ける時間ですし、ちょっと準備しますね」

リンは店の木製のシャッターを横に開く。
前の世界にあったような金属製のシャッターとは違って、
ここのシャッターは開けるときはWの形、ちょうど蛇腹のように開くタイプになっている。
店の中にしまっていた商品を街の通りに並べると、
リンは店の奥にちょこちょこと走っていき、奥から水を入れた木のバケツと杓（ひしゃく）を持って戻ってきた。
そして花が枯れないよう一つ一つ丹念に水をやっている。
朝食を食い終わった俺は、食器を持って二階に上がった。
確かにリンは忙しそうだ。
一人で店番をしながら、家事洗濯もしなければならない。
俺一人でやれることは極力自分でやらなければ。
この家に俺がいることでかえってリンに負担をかけるようなことはあってはならない。

二階の台所に入り、俺は食器の後片付けを始めることにした。
もちろん、この家に水道が通っているはずがない。
水道がない代わりに、一本の紐が天井の滑車にかけられており、
その紐は転落防止の柵の内側の床に四角く開けられた穴の下へと続いている。

井戸だ。
この井戸は一階でも水が汲めるようになっているらしく、下を覗くと一階部分にも転落防止用の柵がある。
紐を下に引っ張ると、水の入ったバケツがぐい、ぐい、と上がってきた。
水汲みは結構な重労働で、手で蛇口を捻ればジャバジャバ水が出た元の世界が懐かしい。
定滑車と動滑車を使えば、紐を引く距離は長くなるが、引っ張る力は小さくて済む。
いわゆる仕事の原理というやつだ。
定滑車しかついていないここの井戸は、まだまだ改良の余地がありそうだ。

台所には、まだ洗われていない食器が無造作に積まれている。
汚れがひどいものは漬け置きしてあるものもあるが、大半が放置されている。
人を雇いたいがお金がない……か。
確かに、誰がどう見ても猫の手も借りたいといった状況だ。

「うっしゃ、いっちょやってやるか」

俺は気合いを入れ、皿洗いに取り掛かった。

「コウさん、どこに行ったかと思ったらこんなところにいたんです

か」

皿洗いがちょうど終わった頃、リンが台所に顔を出した。
俺が洗い終えた食器を並べて乾燥させているのを見ると、
リンはありがとうございます、と一礼した。

「確かに一人で家事と店番の両立は大変だろう。
俺は前の世界では一人暮らしをしてたから、家事もそこそこできると自負している。
他に何かやってほしいことがあれば、出来ることはやろうと思う」

もうめんどくさいとか言ってられねえ。
俺は相手に苦労させて自分だけ楽する、といった空気が読めないような人間にだけはなりたくない。
そりゃ楽したいが、今は雇われの身だし、ＴＰＯを考えればこれぐらいはやらねばならない。

「いえ、皿を洗ってくれただけでも大助かりです。
ところで、コウさんも一人暮らしだったってことは、あなたも家族がいないのですか？」

「いや、死んではいない。
事情があって両親とは別に暮らしていただけだ。
それよりも、リンは家族はいないのか？」

「死にました。

父も、母も、姉も、弟も――みんな死んで、私だけ生き残ってしまいました」

「君が良ければでいいが詳しく聞かせてもらえないか」

リンの話によると、一月前、その時はナクルではなく、山の中の小さな村に住んでいた。
その日は3、4日降り続いた雨が上がった日で、
家族から隣の村へ買い出しを頼まれたリンは家を出た。
それと関係が合ったのかどうかは分かないが、
その日は土の匂いがやけに鼻についていたそうだ。
買い出しの内容は野菜とちょっとした雑貨を買ってくるという、
ごくごく普通の内容で、その買い出しを終えて村に戻る途中、村の方角から大きな地響きがした。
不安になったリンは急いで村に戻ったところ、自宅がが土砂崩れに巻き込まれていた。
ということらしい。

「つまり、君の家族は土砂崩れに家ごと巻き込まれて亡くなったと」

「母以外は全員即死で……その母もかなりの重傷を負ってしまっていて、
治療のかいなく、六日後に、私の目の前で息を引き取って……」

「そうか、それで昨日家族のことを聞いた時に……」

「思い出してしまって……」

リンの目には涙が浮かんでいた。
家族が亡くなってまだたったの一月しか経っていない。
心の傷はまだ癒えていないようだ。

「だから、あなたが砂漠で倒れているのを見つけたとき、
死んだ家族のことが頭に浮かんで……それで、見過ごせなかったんです」

「それで倒れていた、というか寝ていた俺を突いて起こしたわけだ」

「生気も感じられなかったですし、もう手遅れだろうとも思っていたのですが、
まだ生きていたので」

「まあ、確かにあの時リンが起こしてくれなかったら、俺は砂漠で力尽きていたのは確実だ。
その点において、俺は運が良かったと言える。
ところで、ひとつ聞きたいことがあるのだが……大丈夫か？」

「はい、何ですか？」

「リンは一月前はここではなく、別の場所に住んでたという話だが、この家は一体どうしたんだ？
こんな街中の新築なんて、そうそう手に入るものでもないだろ？」

「私の父は山の動物を狩って、その肉を売る仕事をしていたんです」

「つまり、父は猟師だったと」

「はい。
ある時、偶然にも父が近くの村をよく襲っていた山獣を山の中で見つけ、
仕留めることに成功したんです。
あ、山獣というのは非常に強い魔力を持った動物のことで、
凶暴な性格のものが多い生き物です。
それで、仕留めた獣にはかなりの額の懸賞金がかけられていて、
父はその懸賞金で一家でここに移住しようと、この土地と家を建てたんです」

「なるほど」

「結局、ここに移住する前にみんないなくなってしまったので、
一人で住むには広すぎる家に暮らすことになったのですけれど……」

そこまで話したとき、一階の店から、呼び鈴の黄色い音が聞こえてきた。

「あっ、お客さんだ……行かないと」

リンは目に溜まっていた涙を拭うと、すくっと立ち上がる。

「コウさんも一緒に来て下さい。
あなたも早く花屋の仕事に慣れてもらわないといけないので」

「そんな泣き顔で店に出て……大丈夫か？」

「いつまでも嘆いてたって、何も始まりませんから。
それに、私はもう“一人”じゃないので」

まだ目の赤くなったままの少女こと俺の雇い主は、
俺にくるりと翼の生えた大きな背中を見せると、そのまま小走りで台所から飛び出していき、
階段を勢いよく駆け降りる音を家の中に響かせ、客の応対に出て行った。

“一人じゃない”か……こんなクソッタレな俺でも――
いかんいかん、俺も早く下に降りねえと、リンに怒られそうだ。

その後、俺はすぐに一階に降りた。
途中、階段で足を踏み外して奇声を上げながら盛大に階段を転がり落ち、
それを目撃した客に爆笑されたのは秘密である。

第5話－A9　Ｌｏｓｔ－３１１－　花屋に軍靴って……（前書き）

今回は文章をじっくりと熟成させたので、品質はかなり上がってるはずです。

第5話－A9　Lost－311－　花屋に軍靴って……

数日が経ち、俺は花屋の仕事に慣れてきた。
そして、仕事が慣れてくるにつれて、あることが分かってきた。
この世界には薬局のような店がほどんどなく、
通常は花屋が薬局の機能を担っているということだ。

俺がそれを知ったのは、数少ないある高齢の客から花を買ったついでにちょっとした世間話になり、
その中でこんな薬はここでは売ってないか、と質問されたからだ。
その客の質問の答えるため、
リンに薬もここに置いてあるのかと聞くと、まだ花しか取り扱っていないという。

「ところでリン、どうしてうちは薬を取り扱わないんだ？
やっぱり特別な資格がいるとか、何か事情でもあるのか？」

昼、客がいない店の中で、店番をしていた俺は暇になって、
店の会計用のカウンターに腰掛けて、同じく暇そうにあくびをしているリンに聞いてみた。

「本当は、そういうのも売りたいんですけどね……
別に薬を売るのには資格は要らないんですが、
薬って値段が高いのでなかなか手を出せないんです。
まずは花だけ売ることに専念して、それが軌道に乗ったら、手を出してみようかな、と」

「それにしちゃ、客があまりにも少な過ぎないか？
朝から店やってて、実際に買って行ってくれた客の数は片手で数えられる程しか来てない」

「それ、言わないでくださいよ……私だってずっと気にしてるんですから」

ここの花屋の立地は悪くはない。
人通りの多い道に面している花屋だから、店の前を通り過ぎる人はかなり多い。
人の数の点だけを考えれば、この店は繁盛してもおかしくないはずであるが、
何故か客はこの店に見向きもしない。
店の中はいつも清潔だし、売られている花の質もクレームが来るような粗悪品ではないし……
一体何が原因なんだろうか。

「リン、ちょっとこの店の収支がどうなっているのか知りたい。
見せてくれるか？」

「あ、はい、ちょっと待っててください」

しばらくして、店の奥へと消えたリンが、洋皮紙を持って戻ってきた。
リンから受け取った収支表はすべて平仮名で書かれていて、
漢字混じりの日本語に慣れている俺にとっては非常に見づらい。

平仮名を覚えたての小学生が書いたようだ。
まあ、文字はきちんと整っているが。
リンの話によると、この世界には漢字は存在せず、
文字を書くときは平仮名で書くのが常識らしい。
そもそも平仮名って漢字をベースにどんどん形が崩されて出来上がったもののはずなのだが……
そこら辺の文字の成り立ちの順番についてはさておき、店の収支表を見ると、
店が繁盛しない理由が一瞬で分かった。

「リン……１００レルで仕入れた花を５００レルで売ったって、そりゃ誰も買わねえぞ」

レルというのはこの世界での標準通貨で、
日本円に大体の値段で換算すると、１レル＝１．５円程らしい。
らしい、というのは、同じものでもこの世界と俺の元いた世界との価値観が違っているため、
正確なレートを求めるのが難しいからで、正確なレートは俺にも分からない。

例えば、元いた世界では家電量販店にでも行けば、
Ａ４の普通紙が５００枚３００円程で売られていた。
この世界では洋皮紙ではない、普通の紙そのものは存在するものの、
量産技術がまだ発達していないらしく、ハガキサイズの紙が１枚１５０レルと、
俺からみりゃ法外にしか見えないような値段で売られている。
紙の値段は極端な一例だが、たいていこんな感じなので、正確なレートが割り出せないのだ。

「だって、それぐらいの値段にしないと、私達が食べていけないですよ！」

「いやいや、俺からすればこの値段での販売は完全にボッタクリ同然の値段、
今まで僅かながら客が来ていたというのが、これを見ると奇跡的に思える」

「じゃあ、どうすれば良いんですか？
これより値段を下げたら生活が苦しくなってしまいますし、
このままの値段でも客は一向に増えないし……」

「いや、下げるべきだ。それも大幅にな。
リンは需要曲線というものを知っているか？」

「じゅようきょくせん？」

「まあ、簡単に言うと、値段が下がれば客は増え、値段が上がれば客は減る。
これを一目で見やすくグラフ化したものだ。
とりあえず、このことだけを頭に覚えておいてほしい」

「グラフっていうのがよく分からないのですけど……
とにかく、値段を下げたら客が増えるって本当ですか？」

「いや、本当も何も、もし同じ商品が二つの店で売られていて、
ある店では２００レル、もう一方の店では３００レルで売られていたとしよう。

リンならどっちの店で買う？」

「う～ん、やっぱり２００レルのお店です」

「そうなるだろ？客は同じ商品ならなるたけ安くモノを買いたがる。値段の下げ過ぎは禁物だが、今の値段で売れないのは当然だ」

「では、いくらぐらいまで値下げすればいいのでしょう？」

「俺は経営のプロじゃねえから知らん。とりあえず、今日は早めに店を閉めて価格調査に出掛けるのはどうだ？
こんな馬鹿デカイ街だ、ちょっと探せば俺達の他にやってる花屋なんてすぐ見つかるだろう」

「でもコウさんは裸足じゃ……」

「あ……ああ、そうだったな、俺靴ねえんだよな～」

そうだった。
リンとこの街に入ってきてから俺は店から一歩も外に出ていなかったせいで、
靴を持っていないことをすっかり忘れていた。
裸足で砂利道は、キツイ。

「もし良ければ、給料前払いということで、靴、買ってもいいですよ」

「おお、そうか。
じゃあお言葉に甘えてそうさせてもらおうかな」

夕方頃店を閉めよう、という話になっていたのだが、
あまりにも客が来ないので、それよりも早く店を閉めることとなった。
この状態をなんとかしないと、
この花屋のシャッターが永遠に閉まったままになるのも時間の問題だ。
そうなってしまえば、俺だけでなくリンまで職なしの貧乏人になってしまう。

###

この世界の人の靴は、革靴らしい。

靴屋に連れていってもらった俺だが、客やら店の人からの奇異の視線が痛い。
あからさまにではないが、商品を見る素振りをしながら流し目でこっちを見ている。
いや、俺が相当珍しいのは分からんでもないが、
なんというか、その、下手なんだよ、隠すのが。
俺に気づかれないように注目するのは、それはそれで嫌なのだが、
あからさまに流し目で見られるよりはマシだ。

リンは楽しそうに靴を眺めている。

「どんな靴が似合うのか、ちょっと想像がつかないので楽しみです」

「リン、俺を着せ替え人形かなにかと勘違いしてねえか？」

「いえいえ、人間として大事なモノが欠けているコウさんに合う靴というのが、
ちょっと想像できなくて。
それに、髪も目も黒というあまりない外観ですから、余計に想像しづらいんです」

「なんか、今の言葉の解釈を一部間違えると、
とんでもない言葉がリンの口から飛び出したことになるんだが……」

「え、私、そんなこと言いましたっけ？」

本人は気づいていないようだが、念のために一応注釈しておこう。
リンの言う「大事なモノ」とは、翼のことであり、決して例のアレではない。

「う～ん、コウさん、こんなのどうですか？」

「ん？これか？」

リンから靴を受け取った俺は、見慣れない靴の構造に興味を惹かれた。

どうやら動物の革を染め上げて着色、それを靴らしく立体的に縫い合わせ、
最後の仕上げに靴の裏に厚さ2センチほどの摩耗に強い木を接着する、という作り方のようだ。
リンが持ってきたのは深青色に染め上げられた靴だ。

ちなみにだが、木には切り込みが入れられていて、
陸上選手がよくやるクラウチングスタート時のような極端な曲げにも対応できるようになっている。
靴の裏に触れてみると、木は滑りにくい材質を採用しているらしく、
ゴムまでとはさすがにいかないが、多少の激しい運動を行っても、
安定したグリップ力を保持してくれそうだ。
靴ヒモもきちんとあるのだが、
というか革靴で靴ヒモという組み合わせが、
デザイン的に自然に馴染んでいるから気にならないのだが、
よくよく考えればシュールだ。
靴ヒモは靴底の木に横から穴を開け、そこにヒモを通す構造になっている。
接着剤が弱いのを、靴ヒモでしっかりと締め上げて補強しているということだな。
総合的に見ると、作りもシンプルだし、耐久性は靴底が木ということもあって、かなり高そうだ。

「どうかしました？」

「ん、いや、靴の構造が気になってな。良く出来てる」

靴を試着してみるが、深青の靴はやはり俺には合わなかった。

「それじゃあ、これはどうですか？」

「緑色の靴は……さすがに勘弁してくれ。
俺は森の小人みたいなメルヘンな靴は性に合わない」

「そうですか……？
私にとっては、あなたの存在自体がメルヘンですけど」

「言われて嬉しい言葉じゃねえな……」

メルヘンという言葉を聞いて、周囲の客から微かな笑い声が聞こえてきた。
リンに対して「ナイスツッコミ！！」のような空気が店内を覆っている。
そうですよ、俺はどうせメルヘンな人間ですよ！
元の世界では羽根のついた人間が天使と呼ばれてメルヘンな物語を構成したように、
こっちの世界では羽根のない人間が何と呼ばれているのかは知らんが、
メルヘンな物語に出てくるんだろ？

……一旦落ち着こう。
変な開き直りをするのは良くない。うん。
周囲の客の反応は無視する方が俺の精神衛生上いいだろう。
いちいちこんなことに気を取られていては、この先が思いやられる。

しばらく店の中の商品を見て回ったが、俺の気に入った色のものは

見つからなかった。

「ところで、コウさんは一体いくらぐらいの値段を予算にしてるんですか？」

「予算……俺は安いのでいい。
今、靴に贅沢をしたって、財布が苦しくなるだけだろう」

「靴は結構耐久性があるので、ちょっとぐらい贅沢をしてもいいと思いますよ」

「だとしてもだな……」

店に長居していたせいか、店主らしき５０代ぐらいのメタボ系オッサン（もちろん翼付き）が声を掛けてきた。

「なにか、お探しですか？」

「靴を買おうと思っているんですけど、」

「ええ、ここは靴屋ですから」

「なかなかコウさんの気に入るものがなくて」

「お客様はどういったものをお探しでしょうか？」

「特にないんだが……この店で一番安い靴は、どんな靴かちょっと

知りたい」

「一番安い靴、ですか……」

店主は少し悩んだような様子を見せ、
あまり人気のものではないのですが、と前置きをして言った。

「店の奥に靴の売れ残りが置いてあるんです。
どうしようかと処分に困っていて、それなら安く売れないこともないですが。
あ、もちろん品質は保証します。
靴の品質は俺の店が街一番だと自負していますから」

「ちょっと見せてくれないか」

「はい、どうぞこちらへ」

店主に誘導されて店の奥に俺とリンは入って行った。

「なにせ売れ残りの商品ですからねぇ、
お客様の気に入ってもらえるものはあまりないと思いますけど……」

店主はそう言って在庫と売れ残りの商品が置いてあるという部屋の中に通した。

棚が縦一列に整列され、その棚に埃が積もった靴が置かれてある。
靴を箱の中に入れて保存するという習慣が、この世界の人達には無いらしい。

「どうぞ、ご自由に見て頂いて結構ですよ。
赤い棚が売れ残り品、緑の棚が在庫品、青い棚が未陳列の新商品です。
青い棚の靴も、お気に召したものがありましたら、何なりとお申し付けください」

えらくサービス精神旺盛なオッサンだなとか、
靴とは何の関係もない、どうでもいい感想を抱きつつ、まずは赤い棚を見て回ることにした。
確かに、誰が見てもあからさまにダサ過ぎだろこれ、とか、
ちょ、なんちゅうテカり方してるんだ、ディスコってんじゃねーか、とか、
話にならない商品もあるが、マシなものもいくつか置いてある。
それは俺主観から見たマシなものではなく、リンの主観から見てもマシなものである。

「お、これ良いんじゃねえか？」

俺が手にとったのは元の世界ではテンプレなカラーの茶色の靴。
革靴ということもあって、なかなか渋い。

「その靴、軍靴ですよ？」

「え、リン、これ軍靴なのか！？」

「見た目は普通の靴と変わらないですけど、中に金属が埋め込まれていて、
剣のような鋭利な物が貫通しないようになっていたり、
重量物が足に落下しても足を保護するようになっているんです。
それに、ちょっと手を加えれば、いろんな属性が付けられるものです。
例えば、今この靴には“軽量化”の属性がついています。
店主さん、そうですよね？」

「さようでございます。よくご存知で。
ただ、この靴はちょっと軽すぎるようで、
バランサーとしての性能は低いのが一番の欠点ですね」

なるほど、確かに金属が埋め込まれている靴にしては異様に軽い。
これはデザインというより、高機能な靴と捉えた方が良さそうだ。
ところで、

「リン、バランサーって、何だ？」

俺は店主に聞かれぬよう、リンに耳打ちして聞いてみる。
この世界の人からすれば、バランサーの意味が誰もが知っている常識的なことであることは、店主の口調から推測できた。
リンも俺が耳打ちで質問してきた理由を察して答えてくれた。

「私達が飛ぶときは、足でバランスを取るんです。
水平飛行している人間を想像してみてください。
足を伸ばせば、重心が後ろに傾いて、身体は上を向きます。
そのまま飛べば上昇か着地です。
逆に足を曲げれば、重心が前に傾いて、身体は下を向きます。
これは下降時の体勢です。
旋回時は別として、靴は足の先にありますから、その重さが重要になってくるんです。
とりあえず、コウさんには関係のないことですので、気にしないでください」

関係がないことと言われると、なんか寂しくなるのは俺だけだろうか？
まあいい。とにかくこの靴の最大のデメリットが俺に関係ないことが分かった時点で、
俺に残されたのはメリットだけだ。
（いくらか知らねえけど）安いし、デザインもよし、機能性、耐久性共によし、これしかないだろ。

「店主、この靴いくら？」

「えっ、ちょっとコウさん、よりによってなんで軍靴なんですか？」

「いや、なんか高機能だし、俺にとってはメリットの塊だから」

「機能性の高い靴は他にいくらでもありますよ？」

「それに、茶色の靴ってこれしかないだろ？」

「……それがいいなら私は反対しませんけど」

「で、店主、これはいくら？」

「うーん、そうですね、この靴はいくら売れ残り品といっても、なかなか作るときに色々と手の込んだ商品ですからね、他の売れ残り品よりは高くなります。
大体１５００レル、といったところでしょうか」

「よし、これに決めた」

「ホントに買っちゃうんですか？」

「これが俺なりの贅沢だ、別に文句はないだろう？」

「まあ、それでいいならいいですけど、花屋に軍靴って……」

リンはどうしても買う靴が軍靴ということが不満らしく、ブツブツと何かをいいながら財布を取り出し、店主に１５００レルを支払った。
そのまま靴を履いて店を出ても良かったのだが、裸足で靴はどうも有名なあのオッサンっぽくてなんか気に入らなかったので、
ついでに靴下（２００レル）も買って店を出た。
ちなみにだが、店主のオッサンの笑顔はプライスレスだった。当たり前か。

第5話－A9　Ｌｏｓｔ－３１１－　花屋に軍靴って……（後書き）

やっぱりまだ品質が足りないですよね……
一言感想やポイント評価していただけると非常に嬉しいです。
宜しくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

第5話－Ａ１０　Ｌｏｓｔ－３１１－　レア本！？（前書き）

最近、思考が浅くて困ってます……

第5話－A10　Lost－311－　レア本!?

靴屋を出た俺達は、その足で近くの花屋を探すことにした。
そして太陽が４５。に傾いた黄昏の景色の中探すことおよそ２０分、ナクルの街のとある大通りの交差点の角という好立地に店を構える花屋を発見した。

「リン、悪いが一人で価格調査をしに行ってくれないか」

花屋に着く手前で、俺は足を止めた。

「えっ、一人で、ですか？」

「ああ」

「せっかくここまで来たのですから、最後まで一緒に行動しましょうよ」

「俺もそうしたいところなんだが、そういう訳にはいかないことに気がついてな。
俺は見ての通り、容姿がこんなだからかなり目立つ。
二人で何気ない様子で店の中に入ったとしても、店の人に顔を覚えられるだろう」

「それが、私一人じゃないとダメな理由？」

「そうだ。
店の人に俺達が同業者だと知られたら、いや、既に知られているかもしれんが、
とにかく価格調査されたとなると、向こうもいい気分にはならないだろう。
こういう類の調査はバレないようにやる必要があると思ってな」

「……分かりました」

「ああ、正確な値段は覚えなくていいぞ。
大体の相場を知りに来ただけだからな」

「ところで、その間コウさんはどうするんですか？」

「ん、俺か？
そうだな、とりあえずこの街をぶらりと散歩でもしておこう。
どこに何の店があるのか知っておいた方が、なにかと便利だろう」

「それじゃあ、私は調査が終わったらその足で家に戻っておきますね。
コウさんは家がどこか分かります？」

「ああ」

「では、ここで一旦解散ということで」

リンは軽やかなスキップで店に向かって行ったが、
途中でくるりと向きを変え、また俺のところに戻ってきた。

「そうそう、これ、好きなように使ってください」

リンが差し出す手には、２０００レルが乗っていた。

「そんな金を俺に渡して大丈夫か？」

「大丈夫、問題ないと思います。
なんというか直感的にですけど、コウさんは無駄遣いしそうな人じゃない気がするんです」

そう言ってリンは俺の手を出させて手の平の上にそれを乗せて握らせると、
好きなものを買ってくださいと言って、軽やかな足取りでで花屋に行ってしまった。

２０００レル……俺が今欲しいものは数え上げればキリがない。
今着ている服は俺がこの世界に飛ばされる前から着ているもので、一応洗濯はしているものの、毎日同じ服を着るのは飽きたというか、バリエーションが欲しい。
俺に割り当てられた部屋にはまだ何もなく、
食事やら作業やらが出来る俺用のテーブルとイスも欲しい。
まあ、衣類はどうかは知らんが、家具については２０００レルじゃまず買えないだろう。

……。

いや、そもそも現実的に考えれば、
今この２０００レルで買わなければならないものは決まってる。

財布。

ハダカの金を手に握ったままあちこち行くわけにはいかない。
気がつかないうちに指の間からするりと落っことすかもしれないからな。
だからまずはこの金で財布を購入するのが先決だ。

「財布かぁ～、どこで売ってんだろ」

とりあえず俺も歩き出すことにした。
別れる前にリンに財布がどこで売ってるか聞いとけば良かったと内心後悔し、
手の中のお金を強く握り締めた。

街の建物のつくりは様々で、
木を使った建物、石を使った建物、レンガ質の材質が使われた建物などが林立している。
だが、それらは互いに主張し合うこともなく、見事に調和して美しい街なみを作り出している。
その街なみを見ると、俺の口から無意識のうちにため息がこぼれ出た。

「ちょいと、そこの方」

どこからか声がして周囲を声のする方をさりげなく向くと、一人のおばさんが俺を呼んでいた。
どうやら店に閑古鳥が鳴いていて、暇つぶしに客引きをしているらしく、
おばさんが立っている後ろの店に客はいない。
……無視するか？
いや、おばさんの人相を見る限りにおいては悪そうな人ではなさそうだ。

ところで話はズレるが、日本の最高裁判所には剣と天秤を持った女神の像が置かれているのだが、
実は外国の裁判所にも同じ天秤を持った女神の像が置かれている。
その女神の名前は失念したが、
とにかく日本と外国、それぞれの女神像を並べてみると一見同じように見えるが、違っている箇所がある。

“外国の銅像には目隠しがされているが、日本の銅像には目隠しがされていない”
ということだ。
女神が目隠しをしているのは、
その人（被告人）の見た目によらない公平な裁判を行う、ということを意味しているらしい。
実際の裁判でそれがきちんと守られているかは、
特に人種隔離政策（アパルトヘイト）が行われていたような国では疑問に値するが、

まあそこは今はメインの話ではないので略。

日本の銅像にわざわざ目隠しが省略されているのは一体何故なんだろうか。

俺にはどう考えても見た目も判断材料に入れて裁判を行うことを宣言しているとしか見えない。

極論を言えば、「お前、凶悪そうな顔してるから死刑」のような、見た目による判断を日本は推奨しているようにしか。

もしそうでないと日本が主張するなら、銅像に目隠しをつけるべきだと思うね。

――さて、話は戻ってこのおばさんの客引きに乗ってみるか、無視するかの話だが……

そうだな……買うかどうかは別として、乗るだけ乗ってみるか。

店を見る限りここの暮らしも長そうだし、

寄り道するついでに財布がどこで売ってるか、聞き出してみるのがいいだろう。

「うち書物屋やってるんだけどね、新書が入ったからお兄さんちょっと見ていってくださんな」

「はあ、書物、ですか」

「好きな本があれば持ってきてちょうだい。

ここだけの話、値引きしてあげるから」

笑顔のおばさんに招き入れられて書物屋に足を踏み入れると、

本棚から溢れんばかりの本が目に入ってきた。
何も考えずに適当な位置に本が置かれている。
料理本の隣に小説が置かれているようなぐちゃぐちゃな有様だ。
本のジャンル分けぐらいキッチリやれよ……探しにくい。

「――ん」

俺が店の奥の古い本棚の前を通り過ぎた時、偶然に一冊の異常に太い本に目が止まった。
それを手にとって本に付いたホコリを息で飛ばしてみると、陳列されてからかなりの年月が経っているらしく、紙がかなり汚れて変色している。
この本は魔法のハウツー本らしく、初心者から魔術師まで幅広く使えると歌い文句が書かれ、述べ３０００ページほどある。
魔法かぁ……ファンタジーの世界に来たら一度は使ってみたいチートだけど……
この世界の人ならまだしも、異世界人の俺が果たして使えるのだろうか。
ぱらりと中のページを見ると、中の内容については問題はなさそうだ。
だが、もしこの本を買ったとして、結局できませんでしたっ、チャンチャン♪
になってしまえば、それはただのお金の無駄遣いで終わってしまう。
“無駄遣いする人には見えないから”と言ったリンの言葉が胸に響いて、
一度はこの本に興味が沸いたが、買うのをためらってしまう。
財布もまだ買ってねえし。

「ああ、その本かい？」

突然後ろから声を掛けられて、俺は思わずびくついてしまった。
べ、別に本を盗もうとか考えてねえからな？

「その本はねえ、確かに魔法のレパートリーは増えるけど、なにしろ高いからねえ。
この店を開いた時に初めて仕入れた本なんだけど、
結局開店から数十年経った今も売れ残っちゃってるのよね」

「はあ。ちなみにこれはいくらで？」

「十万レルね」

じゅ、十万レル……高けえよ。
俺の換算レートを信用して日本円に単純計算すれば１５万円だ。
図書館ならば完全に禁帯出属性の本だよ、これ。

「この店もあんまり流行ってないし、古くなったその本が今後売れるとは思えないしねえ。
……折角だしその本、タダで売ってあげてもいいんだけど」

「えっ、いいんすか、そんなことして。
仕入れるのにも苦労したんじゃ……」

口ではそう言いつつ、俺は
ジャンル分けもまともにせずに本を置いてる書物屋が流行るワケがないと
突っ込みたいのをぐっと我慢している。

「売れそうにない、こんな分厚くて古い本を棚に置くより、その場所に人気の本を置くほうが店としてはいいのは目に見えてるし」

それが見えていてなぜ流行らない理由が分からない！？

「それに、ここでずっと寝かされてるより有効活用された方が、その本にとっても本望(ほんもう)だろうしね」

「本だけに……か？」

「気がついた？うふふふふ――」

書物屋が流行る、流行らないは別として、この話は悪い話ではない。
タダで貰えるんだからな。
本を持ち帰るにしても、今俺の手にはお金が握られている。
もし今受けとって行くにしても、
片手にお金、もう片手に分厚い本は腕が疲れるてもんだ。
お金をポケットに突っ込めばそれで終わりの話だが、
ポケットの中でチャリチャリと音を立てるのが俺には耳障りでどうも気に入らない。

「ところでひとつ聞きたいのだが、
この近くで財布を売ってる店って知らないか？」

「財布？」

「今ちょっと財布がなくて、お金をハダカで持ち歩いてて。
財布が欲しくてちょっと街をぶらついてたところだったから、せっかくだから聞いてみようかと」

おばさんは腕組みをしてうーんと唸った。

「財布、ねえ……財布、財布、財布――
……ああ、確かあそこで売ってたような、あれ、あそこじゃなかったかな？
いや、あの店だったら……ああ、あそこはもう取り扱ってなかったわね――」

「あの、軽く聞いてみただけですから、
そんな深く悩むような「あっ、あそこなら絶対売ってる！！」」

おばさんはポンと手を叩いて言った。

「この店の前の通りをいくと、大きな円形広場にたどり着くんだけど、

その広場でいつも露店やってる老人がいて、そこで財布を売ってるよ」

俺が今まで歩いてきた道に広場はなかった。
ということは、広場はこの店からリンの家とは反対の方向に進めばいいんだな。

「どうもありがとう」

「ちょいと、お兄さん、本は持って行かないのかい？」

店を出ようとした俺を、おばさんが引き止める。

「財布を買ったらまたすぐに戻って来る。
、本はその時に頂くことにするよ」

「そう、いってらっしゃい」

「店の場所を教えてもらった礼にはあまりに小さいが、
ここに来て思った感想を一つ。
書物屋、立て直したいなら書物はジャンル分けしたほうがいい」

「やっぱりそう思う？」

気がついてるのか。

だったらなぜやらない！？

「言っちゃ失礼かもしれないが、
探しものがあっても、こんな状態じゃ探すのに時間がかかる。
買う側からすれば結構面倒臭いぞ」

「私も結構な歳だからねえ、今から本の整理をするにしても、
身体が弱くなっちゃってるからなかなか億劫になちゃってねえ」

「まあ、本も貰ったし、暇があれば本の整理、手伝ってもいいんだが」

俺の言葉を聞くとおばさんの顔がホッとしたように緩み、
ありがとうと優しく手を振って送り出してくれた。
初対面の俺に親しげに話すその度胸、どっから沸いて来るのか不思議だ。
店を出た時、赤くなった太陽は地平線にしがみついていた。

言われた方角に向かって歩いて歩いて歩き続けると、ようやく目の前の視界が開き、大きな円形広場に出た。
大分遠出しちまったな。
おばさんはちょっと行けばすぐに着くようなニュアンスで話していたが、
それはどうやら飛んで移動することが前提だったようだ。
空はとっくに闇が覆い、見慣れない配列の星々がチラチラと瞬いている。

直径１００メートルほどの大きな広場で、数々の露店が明かりをつ

けて営業している。
書物屋のおばさんの話によると、財布を売っている老人がこの露店の中に紛れ込んでいるはずだ。
いくら大きな広場とはいっても直径１００メートル程の大きさだ。
その中でやってる露店ひとつひとつを覗いて歩けないわけではない。
ここはシラミ潰し戦法で探し当てるか。

ちょっと探すと、財布を売る老人の露店はすぐに見つかった。
しわしわの顔の老人なのだが、しわしわ過ぎて男なのか女なのかを区別することが出来ない。
歳を取ってくると中性的な顔になるという話はあながち間違いではないらしい。

「――いらっ……しゃい」

声を聞いてこの老人が男の人だということが分かった。
つうか、このじいさん大丈夫か？
なんか今にも命が燃え尽きてしまいそうな声なのだが……
ま、まあ、とりあえずここで露店をするだけの体力はあるようだし、余計な心配なんだろうが。
陳列されている財布は元の世界のそれと大して変わりはないが、この世界の通貨はすべて硬貨のため、紙幣を入れるポケットはついていない。
あと、クレジットカードとかのカードを入れるポケットもついていない。
財布は硬貨の収容枚数確保のために、元の世界のものよりも少し分厚くなっていて、

手の平大ほどの大きさのものが主流になっているようだ。

「じいさん、この財布はいくら？」

気に入ったデザインの財布を見つけたのでじいさんに聞くと、二本の指を立てた。

「２０００レル？」

「……２００。
こんな財布ごときが２０００で売れるなら、
わしゃ今頃こーんなちっぽけな露店じゃなしに
ちゃんとした立派な自前の店を持ってるじゃろうて、
フォ、フォ、フォ、フォ、フォ、フォゲホッゲホッゲホッ……」

「おい、ちょっとじいさん大丈夫か？」

「――ゲホッゲホッ……もう大丈夫だ、若者、心配かけたのう」

おいおいしっかり頼むぜ、じいさん。
咳き込んで肋（あばら）が折れでもしたら大変だぜ、まったく。
それにしても、財布が２００レルか……安い。激安だ。

「……安いな」

「わしが趣味で作っとるものじゃからのう、値段は安くて当たり前じゃよ」

「そうか、よし、貰って行こう」

俺はその財布を購入し、すぐに書物屋に戻って本を受け取った後、家路についた。

「コウさん、一体どこまで行ってたんですか？心配したじゃないですか！」

家に戻ってくるやいなや、帰りが遅くなったことでリンに怒られる俺。

しかし、俺の脇に抱えている本を見つけると、急に顔色を変えた。

「ちょっ、ちょっとコウさん！その本は一体どうしたんですか！？」

「書物屋のおばさんにタダでやるって言われたから貰ってきた」

「たたた、タダ！？

その本、魔法書ですよね？それをタダで？」

「あ、ああ、そうだが……」

「それ、庶民にはなかなか手に入らない高価な本だってこと、知ってます？」

「そういや、おばさんは十万レルとか言ってたな。
でも、数十年前の古いやつだし、紙は変色してるし、価値は下がってるだろう」

「かえってこういうのは古いほうが価値が上がるものなんです」

「そうなのか？」

「今の本に載ってるのは大衆向けのもので、誰にでもできるようなものです。
だから、難度の高い魔法はあまり載ってないんです。
でも、昔はそんなのが当たり前に載ってましたから、
情報源としての価値が高いんです」

「なるほど、ならば慎重に扱わねえとな。
それと話は変わるが、価格調査の方はどうだった？」

「あ、はい、うちが１００レルで仕入れて５００レルで売っていた花を、
あの店では３００レルで売ってました」

「やっぱりこの店の値段は高すぎのようだな」

「そうみたいです」

「よし、うちはその店の定価の１００レル引きの値段で売ろう」

「……ちょっと安すぎませんか？」

「いや、まずはこの値段で様子を見るべきだ。
値段を下げて、どれぐらい客足が増えるのか、試してみる必要があると俺は思う」

「コウさんは本当に客足が増えるのかどうか、不安とかは感じてないんですか？」

「俺はあまり不安は感じないな。お前は不安なのか？」

「不安ですよ、それは。
だって、今までギリギリ採算がとれていた価格のバランスを崩すんですから」

「安心しろ。
万が一価格を下げても客が来なかったら、俺には次の一手がある」

「次の一手……」

リンの声には不安がまだ残っていたが、それは明日になればすぐに消えるだろう。
なぜかって？
スーパーの特売品売場に群がるおばちゃんを想像してもらえれば、すぐに分かるさ。

「俺、ちょっと部屋に戻るから」

俺は魔法書を脇に抱え直して部屋に戻ると、
壊れたパソコンの前に座り、魔法書を広げてみた。
実を言うと、価格調査よりもこっちの方が興味があったりする。

いつ元の世界に戻れるか分からない。
もし二度と元の世界に戻れずにここで一生を過ごすのなら、
俺に空を飛べないというハンディがある以上、それを補う能力が必要になるだろう。
魔法が使えるかどうかは分からないが、本も手に入ったし、まあやってみる価値はあるはずだ。
だが、今日は結構歩いたから疲れたし、魔法の勉強をするのは明日からだな。

第5話－A11　Lost－311－　結果

「コウさん、助けて！！」

硬い床の上にで熟睡していた俺はそんな声が聞こえてきた気がして目を覚ました。
朝。まだ朝だ。いや、まだじゃない。もう起きなければいけない朝だ。
俺が上体を起こすと、悲鳴のような声が聞こえてきた。

「ちょっと早く来てっ！！」

この声は間違いなくリン。
俺は寝起きそのままの状態で部屋から飛び出し、声がする一階の方へと続く階段を駆け降りた。

「なんなんだ、これは――っ！！」

花屋が人で埋まっていた。朝から。
原因は単純明快、価格を下げたからだ。
それは寝起きボケボケの俺の脳でも理解できた。
しかしそれにしても、なぜ朝からこんなタイムセールさながらの混雑状況？

「コウさんも早く手伝ってくださいよ！！
会計に行列が出来て詰まってるんですよ！
もう私一人じゃさばき切れなくて……」

「……俺、まだ顔も洗ってねえし、朝飯食ってねえし、手伝うのはその後で……」

それを聞いたリンが俺のところへ駆け寄って頬にバチンと平手打ち。
その感覚は俺の寝ている脳を強烈に刺激し、俺の寝ていた思考回路にスイッチを入れた。

「ぐはっ……」

「何とぼけたことを……今やらなきゃいつやるんですか！」

「あ……ああ、今のは冗談だ、忘れてくれ」

「そんな冗談を言う暇があるなら、早く手伝ってくださいよ！」

「悪い、悪い。すぐ手伝うから」

俺は会計のカウンターにリンと並んで立ち、会計業務を始めた。
だが、並ぶ人の列は二人会計が終われば二人新しく並ぶといった状況でなかなか減らず、
ホッと息をつくことが出来たのは、それから一時間ほど後のことだった。

「リン、朝の行列、ありゃなんだ？」

俺は早速リンに聞いてみる。

「部屋に飾るための花を買いに来たんですよ」

「いや、花は観賞用のものだからそれは当たり前だが？」

「一般家庭では、家の入口や部屋の中などに花を飾る習慣があるんです。
だから、定期的に花を買わないといけないんですよ」

「イマイチ納得できないな」

「神使様は花を好むと言われています。
神使様のいらっしゃる神殿には、常に枯れることのない満開の美しい花が飾られているそうです。
私達の使う水、太陽、天気などの様々な事象は、
神殿様の御加護によって成立していますから、
神殿様がいなくなれば、私達は死んだも同然なんです。
花を各家庭に置くことで、神使様を慕っている意志表示を表して、
いま戴いている加護をこれからも末永く続けていただきたいという願いを込めるんです」

「なるほど、要は神使をヨイショするためにみな花を買っていくってワケだ」

「神使じゃなくて、神使様です。それに、ヨイショって言葉は不適切です」

「様付けしなきゃいかんのか？」

「神使様に失礼ですから」

「様付けはともかく、ヨイショって言葉は表現としては正解だと思うんだがな……」

「ま、ち、が、い、で、すっ！！」

リンは目を細めてじろりと俺を睨みつける。

「何も睨みつけることはないだろう。
大体、神使様がどういう存在なのか、俺あんまり知らねえし」

そもそも、俺はこの国の名前も、政治状況も一切知らない。
そんな中、神使がこの国の中でどれだけ偉大かなのかを言われたとて、
俺には全然実感がわかないのは当たり前の話である。

「それじゃあ、私が説明しますから、よく聞いてください」

「まあ、この話は出会って最初に聞いておくべきだった話だ、真剣

に聞こう」

リンがこの世界の歴史について熱く語ってくれたのだが、
ここにすべてを記すととんでもなく長くなってしまう。
そこで、俺が重要部分を適当に抜粋してまとめておいた。
以下が、そのまとめだ。

昔、この世界に名もなき神様が降りてきた。
その神はこの世界の創造主で、植物、動物、鉱物すべてを創った。
その中に我々人間（翼なし）も含まれていた。
すべてのものを創造し終えた神は、その世界から姿を消し、どこか遠くへ消えてしまった。

残された人々はあまりにも無知で、言葉も、意志疎通する手段も持っていなかった。
ただただ野性の動物を狩り、木の実を採取して生きて行くだけの生活。
いわば原始時代そのものだな。

そこに創造主である神の使いが突然舞い降りて来て、
その使いの持つ不思議な力で人々にまず言葉を与えた。

その降りてきた神の使いこそが、神使だということらしい。
人々に言葉を与えた神使は問うた。
「この世で生きて行くために欲しいもの・願い事はあるか」、と。
何か唐突な展開のような気もするが、まあそういうことらしい。
んで、人々は話し合い、三つのお願い事を神使にしたという。

・自分達も鳥のように大空を飛んでみたい
・神使様の不思議な力を分けてほしい
・人間の住む世界を、ずっと見守ってほしい

鳥になりたい、その願いはお願いをした翌朝に叶えられた。
なんと朝目が覚めたら背中に翼が生えていたらしい。

その翌日には、神使は何やら呪文を唱えだし、唱え続けて約五日後に、
人々が魔法を使えるようになった。

そして、最後の願いは、人々が神使様の為の住居、
つまり神殿を作り上げ、そこに神使が住むことによって実現した。
そして神使はその神殿に一度入って行ってしまったっきり、出てこないそうだ。
神殿で神使に仕える役職の人もいて、たまにだが姿を現すらしいから、
神使は実在するということらしい。

とりあえず、これが神使にまつわる歴史だ。
ここでは人々の生活の営みの変遷、
ここでいうところの、集団生活から国が出来上がるまでのプロセスは省略させてもらったが、
それは元の世界にいた時のそれとおなじだった。

「ま、神使を一言で説明するなら、“引きこもり”ってわけだな」

「引きこもりって……何でそんなに神使様を悪く言うんですか？
何か怨みでもあるんですか？」

「いや、特に怨みはないっちゃないんだが、
今のリンの話を聞いて神使に対して不満に思うことがあると言えばある。
だが、引きこもりという言葉を使ったのは、
それが的を得た表現だと思ったから、という理由が一番だ」

「コウさん、あなたの表現の適切、適切でないの判別基準がわかりません」

判別基準が分からないって、だってそうだろ？
誰が呼びはじめたのかは知らんが、引きこもりを“自宅警備員”などと呼ぶそうじゃないか。
神使はこの世界自体が自宅のようなものだろう。
そう考えると、この表現は決して間違っていない。はずだ。
それと俺が感じた不満とは、
俺がこの星に到着した時点で神使は気がつくべきだったということだ。
今の話を聞くと、人間の住む世界を、ずっと見守ってほしいとお願いしたそうだ。
ということは、その世界がどこまで含まれているのか、
宇宙の隅の隅までなのか、それともこの星を一つの世界とみて言ったのかは分からんが、
悪く見積もって、この世界＝この星という意味合いで言ったとしたとしても、
神使は俺がこの星に来たと同時に異常を察知、

なにかしらのアクションを起こさなければならなかったのではないだろうか。
だが、神使は俺に対して何もしなかった。いや、何もしていない。
偶然にリンが通りかからなければ、俺は砂漠に埋もれて死んでいた。
そこが、納得できないというか、不満なのである。

確かに、俺がここに来たことを神使が察知してアクションを起こしたとしても、
それが俺にとって友好的なものとは限らない。
俺を異形のバケモノと認識して幽閉させるかもしれない。
もしかしたらその不思議な力で俺を殺しにかかるかもしれない。
そこら辺の話は抜きにして、人間の住む世界を見守るという仕事だけを考えれば、
この状態は、まさに神使の怠慢が生み出したものとも言えるのではないか。
まあ、今の状態をブツブツ言ってたってていたずらに時間を空費させるだけだし、
これぐらいで留めておくほうがいい。

「やっぱりたくさん人が来ると、店の中汚れちゃいますよね……」

俺から視線を外して店の中を眺めながらそんなことをぼやきだしたリンは、
近くに立てかけてあったほうきを持ち出して、店の掃除を始めた。
確かに、さっきの購入ラッシュ時に客が買っていった花から落ちた花びらやら葉っぱやらが、店のところどころに落ちている。
それにしても、値段を下げただけでこんなに大盛況になるとは、俺も予想してなかった。

「そういえば、リンは朝飯は食ったのか？」

俺の問いに、リンは地面とほうきを見ながら答える。

「食べましたよ」

「俺、顔も洗ってねえし、朝飯も食ってねえし……」

「コウさんの朝食はいつもの通り、台所に置いてありますよ。
店番は私がしておくので、食べてきたらどうですか？」

「ああ、そうさせてもらおう」

俺は二階の台所に向かった。
台所の隅に、俺の朝食は置かれていた。
井戸の水を汲み上げ、台所でバシャバシャ顔を洗い、それから朝食にありついた。
朝食は、例の塩気のあるパンと、昨日の夕食の残り、つまりはシチューっぽい何かだ。
俺はそれを手にとって、行儀悪いが、その場で食べる。

途中、台所の棚の中に、木製の観音開き式の収納扉が目に入った。
その扉には南京錠型の鍵がかけられていて、容易には開けないようになっている。
この扉についてリンは、

「何があっても絶対にこの扉は開けないで」と言っていたのだが、そう言われると開けたくなるのが人間というものである。
その好奇心を拒むのが扉についている鍵で、これを開ける鍵はリンが腰に付けて肌身離さず持っている。
だから、中身はリンしか知らない。
……中身が気になる。
リンは扉の中のそれを頻繁に使っているらしく、鍵穴の周辺は細かい傷がある。
だが、リンにこの扉の中のこと聞いても、一向に教えてくれそうにもない。
知らないほうがいいこともあるのですよ、と笑ってはぐらかすばかりだ。
同居している以上、隠し事はあまり良くないと思うのだが、リンはどうしても何かを隠したいらしい。

扉の奥に何があるのかをいろいろ想像しながら朝食を済ませ、台所に来たついでに皿も洗っておく。
小一時間ほどでそれを終えた俺は自室に戻り、昨日貰った魔法書を手に一階の店に降りる。
店番していると、どうしても暇なときというものが出てくるもので、その暇つぶしに魔法書を読んでおこうかなと、まあそんな軽いノリだ。
下では、掃除を終えたリンが、疲れ果てて店のカウンターに腰を掛けて寝ていた。
そういえば、昨夜、リンは花の値札の張り替えを一人で夜遅くまでやっていたな。
その反動が今ここにきているのだろう。
俺が手伝おうとしても、リンは一人でやりますと言って聞かなかった。
花の仕入れ値を見ながら価格を計算して、

それを値札に書き込んで、古い値札を外して新しいものを花にくくりつけていくという、単純で地道で面倒な作業。
二人でやれば早く終わっただろうに、なぜリンは自分一人でやると言ったのか、俺には理解できない。

リンが腰掛けるカウンターの隅には、今日の売り上げ分の値札が山積みになっていた。
一応、この店のシステムとしては、客が買いたい花をカウンターに持ってきて会計、その時に付いている値札を取り外すことになっている。
この外した値札は閉店後に一日の売り上げ計算の時に使うのだ。
客としても、買った後は値札なんて必要なく、
わざわざ自分で取り外さなくてはいけないのではかえって面倒になるだけだから、
値札の取り外しは、店も客もメリットがあるシステムである。

俺は魔法書をカウンターに置き、カウンターの下から売り上げを記す帳簿とインクを取り出した。
その音と振動でリンは目を覚ましたようで、眠そうな目を俺に向けた。

「……何してるんですか？」

「いや、今日は客が多いからな、店を閉めてからの売り上げの集計は大変だろうから、
今のうちにある程度済ませておこうかと思ってな」

「ああ……そうですね……」

「……あれ、書くものがない」

カウンターにインクはあったが、肝心のペンがない。
あれ、昨日集計した時はあったはずなんだが……

「あ……ごめんなさい、
ペンは昨夜値札を張替えてる途中に私が間違って踏んじゃって…
…その、壊してしまいました」

「……マジか」

「なので、これを使ってください」

「見るからに痛々しいんだが……痛くないのか？」

リンは背中の羽根を一枚引き抜くと、それを俺に渡してきたのだ。
リアル羽根ペンかよ。
その羽根の根元には引き抜いた時の血がついている。

「ちょっと痛いですけど、羽根は生え変わるものですから気にしないでください。
それに、たかが羽根一枚ですし、ちょうどいい眠気覚ましになりましたから」

「インクさえあれば書くものには困らない……便利な翼だな」

俺は貰った羽根で、値札を一枚一枚、帳簿に書き記していく。
売上は値段改訂前の昨日よりもずっと良く、朝のラッシュだけで４万レルもの収入があった。
ちなみに昨日の収入は１万レル弱だ。
それにしても、計算を手作業でやらなければならないのは相当きつい。
パソコンとか電卓とかじゃなくていいから、せめてそろばんの一つは欲しい。
だが、この世界にはそろばんすらないらしい。

「すごい……やっぱり値段を下げて正解だったみたいですね」

俺が書き込んでいくのを、隣からリンが覗き込む。

「まあな。これだけの収入が続けば、欲しいものもいろいろ手に入るだろう。
少なくとも、よっぽど浪費しなければ生活難に陥ることはないはずだ」

「私、自由なお金が手に入ったら、アクセサリーとか買って、オシャレしてみたいです」

「お前は今のままで十分かわいいと思うんだがな」

「オシャレしちゃダメってことですか？」

「いや、今の言葉には俺は何も裏を含めたつもりはないんだが。言葉通りだ」

「なんか照れるのでやめてください」

リンは指で俺の脇腹をつつく。

「ウヒョッ、ちょっ、そこは触るな、くすぐったいだろうが」

「コウさんの弱点はここですか……なるほど。
それにしても、面白い反応の仕方ですね。
ツンツンツンツンツン――」

「ウヘッ、だから、アハッ、ちょっ、やめろって、インクが……」

「降参ですか？」

「わかっ、降参、降参だ、だからやめろ」

はあ……一体何やってんだか。

第5話－A12　Ｌｏｓｔ－３１１－　リンは何者？（前書き）

今回はちょっと短いですが、大切な話だったりします。

第5話－A12　Lost－311－　リンは何者？

「やっと一段落したな」

「ちょっとお茶でも飲んでゆっくりしましょうか」

それから約二週間後。
俺は朝のラッシュを共に戦ったリンと、
会計のカウンターに行儀悪く腰掛けながら、どこにでもありそうな平穏な会話をしていた。

「お客さんも知ってる顔が増えてきたし、ある程度常連さんはついてるみたいですね」

少しして、二階の台所から降りて、お湯を沸かしているので待っててくださいねとリンは言った。

「どうも」

価格改定してから日が経つにつれて、
“安価で良質な花を売る店”として評判になりはじめ、店を開ける前から人が並ぶようになりだした。
花屋は開店前から人が並ぶのがこの世界では普通だという。
価格改定した初日こそは俺もリンもその人の多さと迫力に驚いたものの、
二週間も経つと、だんだんこちらも慣れて、手際良く作業できるよ

うになってくるというもので、
一人当たりの会計の時間も徐々に短くなり、
最近では、行列をさばき切るまで一時間かかっていた初日の、
約半分の時間でさばき切れるようになったのは、そのいい一例である。

だが、この店に朝から人が押しかけるのは、それだけの理由ではないらしい。
その理由というのが、まあ、俺なわけで。
つまり端的に言うと、俺の黒目黒髪翼なしの特異な外観を一目見ようと、
花を買う素振りをしながら、チラチラと俺を観察しに来るってことだ。
会計だって、俺とリンが二人並んでやっているのだが、
花の美少女（俺認定）であるリンよりも、
俺の会計の順番待ちの方が明らかに多いのが、それを決定づける証拠だ。

もちろん、観察される側になってしまった俺としては、
前から何度も言ってるが、いい気分ではない。
しかし、俺がいるから普通の店以上に人が集まり、
みんなが花を買っていくというメリットがあるという事実を考えると、
これもやはり我慢しなくてはいけないことなのだろうと俺は諦めている。

というか、ジェイミーとかいう奇妙な奴が、俺をエリア３１１に転送しなければ、
いや、俺がＰＣゲームをやろうなどと思わなければ、
いや、そもそもそれ以前にジョーがＰＣゲームにハマッてしまわな

ければ、
俺はこんなファンタジー全開な世界の中で花屋をやることはなかった。
もともとこんな異世界に転送されるという、
世間的に大惨事と呼べるような事態になるのには、
ｍａｄｅ　ｂｙ零雨と麗香の闇改造ＰＣが必須だったことを考えると、
零雨と麗香の存在も必須条件だ。
そう考えると、俺がここにいることは様々な複合的な条件が重なった、
それこそ奇跡だという解答が俺の脳が算出したように、誰の目にも明らかなはずだ。

ステージ２５から離れ、ここで暮らすようになることが俺にとって良かったのか悪かったのか、
この世界に来てはや一月が経とうとしている中で、次第に分からなくなってきているのは確かだ。
ここの生活にも本格的に馴染んできたし、
そろそろ俺もこの曖昧な気持ちに決着をつけなきゃならんだろう。

確かにここにはテレビもパソコン（あることはあるが……）もない。
だが、ここでのリンとの比較的平穏な生活は、ジョーやジェイミーなくして有り得なかった。
ここで中間試験があーだこーだ、大学受験があーだこーだと騒がれる事なく、
暇になれば魔法書を読んだり、空の雲の形が変わっていくのをぼんやりと観察したりと、
俺の理想だった自由奔放ゆったり生活が、ここではほぼ実現できているのだ。

これは俺の中ではポイントが高い。

しかし、元の世界にいるジョーやチカ、匠先輩、そして零雨と麗香の顔が見られなくなるのはデメリットとしては俺的にはあまりにも大きすぎる。

トラブルに巻き込まれてばかりいたが、それでも元の生活を手放したいとは思わない。

この世界で死ぬまで暮らしていくことを決意すること、それは故郷を手放し、友人を捨てることを決意することを意味する。

そんな決断は、チキンな俺には到底出来ない。

甘えた野郎だと、俺は心の中で盛大に自嘲する。

俺は結局故郷という母体からいつまでも離れることの出来ない人間なのか、と。

しかし、もう一人の自分は重大なことに気がつき、それは違うと言う。

俺は本当はここにいるべきではないのだ、と。

“俺は零雨と麗香の管轄下にあるべきで、ＥＬＶＥＳの管轄下にいてはならない”

問題は俺がどうこう感じているとか、そんな小さなものではなかった。

俺がこの世界にいることで、世界全体に悪影響を及ぼしてしまうのだろう。

どんな悪影響かは俺のクルミのような軟弱脳では想像することも出

来ないが。
麗香は常々、この世界は言うところのコンピューターによるシミュレーションだと言っていた。
確かなんたらキュービッドの量子コンピューターとか。
キュービッド……あれ、そんなファンタジーな単位だったか？
まあそんな細かいことはどうだっていい。
（正しくはｑｂｉｔ（キュービット））
とにかく、この世界はシミュレートされている。
そこに、想定外の存在、つまり俺が混じってしまった。
俺は……つまり……その……認めたくはないが……この世界では取り除くべきバグなのだ。
だから……俺はここにいてはならない。

「コウさん、どうしたんですか？」

声にはっと我に返ると、心配そうに顔を覗き込むリンがいた。

「さっきから頭を抱えて……悩み事ですか？」

「まあ、な」

「あまり悩みすぎると、身体にも悪いですよ」

「そうだろうが、人には大なり小なり、悩みを一つは持ってるもんだろ」

俺はそういうと、髪質で常に悩んでいたチカのことを思い出した。
あいつ、今頃何してるんだろうか。
俺のこと、捜してくれているのだろうか。
いや、それ以前に俺が失踪したことで警察をも巻き込んで大騒ぎになっているだろう。
もしかしたら大々的に捜査本部とか設置されて、メディアもそれに乗じて騒いでるかもな。
見出しはこうだ。
≦≦高校二年男子、密室で失踪？≧≧

“X月X日、良条高校に通う高校二年生の足立光秀（16）が突如として失踪した。
失踪の瞬間、同クラスの女子生徒と通話していたが、突如通話が途切れ、
その後何度電話しても通じず、不審に思ったその女子生徒が失踪者宅のマンションを訪問するも、反応はなかった。
部屋は争ったような形跡はなく――”

零雨と麗香なら自分達の素性がばれないよう、このように行動するはずだ。
そして、自らも俺を捜しに例のチート能力を使って世界中をくまなく捜索する。
ここにいる俺を見つけられるかは非常に疑問だが。

「それもそうですが……コウさんの場合はなんというか、深刻な感じがするんです。
……お茶、冷めちゃいますよ」

「ああ、悪いな」

俺は慌てて既に出来上がりって人肌の温度までぬるくなってしまっていたお茶を啜る。
この世界のお茶は葉っぱからではなく、花から作るらしい。
だから、この茶は緑色でも赤色でもない。
色は何を茶にするかによって変わるが、今回の場合は薄い紫色をしていた。
初めて茶を飲んだ時、元の世界では茶番から茶を作っていたとリンに言うと、
そんな青臭そうな飲み物はなんか嫌ですね、と苦笑いしてた。

「悩み、聞いてあげますよ」

「いや、これは誰にも言えない悩みだ。
言ったら……恐らく俺もお前も危険に晒される」

「……？
どういう意味ですか？」

「“消される”ってことだ。特に俺が」

「消される……？誰にですか？」

「それは言えない。
言った時点で危険に晒される」

難解そうな顔をして俺を見つめるリンだが、
どうしてＥＬＶＥＳに消されるかもしれないなどと言える？

零雨と麗香は世界の管理人であり、その存在を隠している。
同じように素性を隠しているであろうＥＬＶＥＳにとって、
俺からその名が出ることはおもしろくないはずだ。

「それは……どうしても言えないことですか？」

リンの声には少しためらいがあった。
だが俺はリンを余計なトラブルには巻き込みたくない。

「逆に聞こう。命をかけてまで俺の悩みを聞きたいか？」

「そこまでは……」

「なら首を突っ込まないほうがいい。
ただ、一つだけ言うなら、俺はいつ消されてもおかしくないということだ。
世界の秩序を乱す元凶としてな」

「そこまで分かっているなら、私は聞きません」

リンの言葉はさりげなく、自然だった。
恐らくボーッとしていたら聞き流してしまったであろう。
“そこまで分かっているなら”……それはリンが何かを知っていなければ絶対に生まれない言葉だ。
だが、リンは俺が異世界から来たことしか知らないはずだ。
リンに顔を向けると、どこかと奥を見るような目つきで外の通りの

人通りを眺めていたが、
リンの周囲にまとうオーラは、いつもの丁寧で優しくて明るいものではなく、
ネコの目ように鋭く、どこかに影を感じさせる。

「そこまで分かっているならって、お前、何を知ってる!?」

「さて?どこまででしょう?うふふふ――」

「……悪い冗談はよしてくれ、俺は真剣に悩んでるんだ」

「冗談、ですか?
私は冗談を言った覚えはありません」

「じゃあお前は俺の何を知ってるんだ?」

「どこまで知っているか、それは秘密です。
……お茶、片付けますね
あと、その悩みに答えるなら、悩んでいるそれを言わないうちは、あなたは大丈夫ですよ。
それを口にしたら、あなたの言う通り、この世から消されるでしょうけど」

「リン……!!」

リンは俺の呼び掛けを無視して、空になったティーカップを二つ、盆に載せると、
すたすたと二階に上がって行ってしまった。
リン……お前は一体何者なんだ?

結局俺に残ったのは、リンが何者であるのかという疑惑と恐怖、
それからこの世界の異物である俺はこの先どう振る舞えばいいのか
という不安だけだった。
リン、いつでもいいから、今のは冗談だった、ただの悪ふざけだっ
たと言ってくれ。
しかしその願いも、リンの今の様子を見ているとそう簡単には言っ
てくれそうになかった。

第5話－A13　Ｌｏｓｔ－311－　贈ってはいけない花（前書き）

今回はほのぼのチックにしてみました。

第5話－A13　Lost－311－　贈ってはいけない花

「それじゃあ、私はちょっと買い物に行ってきますからね」

その日の夕方。
リンは食料品を買いに、普段と変わらない様子で出掛けていった。
もちろん、俺は一人で店番。
俺は皿洗いはするが、この世界の食材については全くの無知だから、料理はリンに頼りっぱなしである。

そんなことより、俺の頭の中は今日のリンの言動のことで一杯だ。
あれから俺は店の仕事をしながらあの言動について考えていた。
ネコのように鋭い目つき、わずかに見せる影のオーラは、いつものリンではなかった。
その後の俺に対する振る舞いは普段と変わらないものだったが……

なぜ、リンは俺が悩みを持っていると分かった時点で豹変したのだろうか。
なぜ、リンは知るはずのない俺の心配事に答えることができたのだろうか。

……謎。謎すぎる。
リンは悪ふざけじゃないと言った。
確かにリンの雰囲気には、ふざけているような様子はなかった。

まさかリンは……人の思考が読める？

俺は店のカウンターに置いていた魔法書を広げ、
そのような能力、もしくは魔法があるという記述を探した。

――あった。人の思考を読む魔法。
しかしそこには、
“魔力を異常に多く消費するため、通常の人間が一人で発動することは困難であり、
発動には複数人数の協力が必須である。
また、発動時のリスクも高いため、魔術師の監督の元、実行することを推奨する”
と書いてある。
つまり、思考を読む魔法はあることはあるが、リン一人では発動できず、
なおかつハイリスクで危険な魔法だということだ。
恐らくこれは国とかが誰かを尋問する時に使うもので、一般人が使うような魔法じゃない。
つまり、魔法説は成り立ちにくい。
よって、リンは人の思考を読むことができるのではないかという説は潰れたも同然だ。

じゃあ一体どうやって!?
……分からん。
俺には想像がつかない。
一体どのようなマジックを使えば、
口外していないはずの俺の悩みにずばりと回答できるのか？
これは恐らく世界中の知識人を一カ所に集約して大規模なサミットを開いても、
この謎の答えは出ないだろう。

俺がカウンターの椅子に座って魔法書を眺めながら解けそうにない謎を考えていると、コンコンコン、と誰かがカウンターをノックした。
顔を上げると、それは見た目8～9歳ぐらいのクソガk……ではなく、
見た目8～9歳ぐらいの男の子と女の子の客だった。

「……ああ、いらっしゃい。いや、気がつかなくて悪かったな」

前々から言うように、ガキは俺の苦手分野だが、花屋として商売をやっている以上、
こんな客も相手にせにゃならんのは覚悟の上だ。
普段ならばこういうちびっ子はリンが受け持ってくれるのだが、
彼女が外出している以上、俺以外に応対する人はいない。
カウンターを回って俺がちびっ子の前で中腰の姿勢になると、
男の子が恥ずかしそうに言った。

「えっと……お花、ください」

男の子はそういうが、二人の手に花はない。
商品はまだ選んでないらしい。

「ん、どんな花が欲しいのか、持ってきてごらん」

そうだ、ガキの扱いは慎重にしないと、
少しでも荒く扱うと美羽のようにすぐ泣き出したり、機嫌を悪くしたりするからな。
口調は優しく、丁寧に、が大事だ。

男の子が花を選ぼうとすると、その隣の女の子が男の子の腕を掴んで引き止めた。
そして女の子は俺に小さな巾着袋（きんちゃくぶくろ）を手渡してきた。

「これは？」

「えへへ……お金」

ニコニコしながらその女の子も恥ずかしそうに言う。
……なーるほど。この二人は連れで、しかも二人揃ってシャイなんだな。

「この袋の中にあるお金で花を買って来いって言われたのか？」

すると女の子は首を横に振る。

「お母さんが風邪引いちゃったから、お見舞いに一緒にお花買ってあげよって」

「つまり、お花をプレゼントしたいということ？」

女の子はうん、と頷く。
ＥＬＶＥＳに存在を消されるかもとか、リンの恐怖のお悩み回答とか、
心理的にハードなプレッシャーがかかっている中で、
こういう平和を見ると、マジ羨ましくなってくるんだが。

「じゃあ、このお金は君達のお金？」

「二人で、一緒にためてた」

「そうか」

俺は失敬して巾着袋をひっくり返し、中のお金を確認すると、３００レルが入っていた。
３００レルだと、確かに買えない花はそこそこ多くなってしまうのは仕方ないが、
これしか買えないというわけではなく、ある程度の選択肢は確保できる値段だ。

「このお金で買えるのは、この辺りの花かな」

俺は二人のチビを引き連れて、その予算で買える花の置いてある場

所に誘導した。
３００レルで花を買おうと思うと、やはりどこにでも売ってるような安価な花しか買えないが、
この年齢のチビからもらうプレゼントなら、母親はどんなものでも、極端な話、道ばたに生えてる雑草の花をプレゼントしたって喜ぶだろう。
要はプレゼントの中身より気持ちである。

「この中で好きなのを探してごらん」

俺がそういうと、二人であれがいい、これがいい、と相談しはじめた。
花選びは特にオススメを聞かれない限り、
二人が何を選ぼうとも、俺が介入するところじゃない。
気が済むまでじっくりと探せばいい。

「じゃあ、またカウンターのところにいるから、決まったらその花を持ってきて」

二人の相談が長くなりそうだと直感的に感じた俺は、
二人に断ってカウンターの会計の椅子に座った。

「よっこらしょ、痛てて……」

……老人臭いとか言うなよ。
毎日の井戸の水汲みで若干筋肉痛なんだよ。

リンは軽々やってるが、それは重労働に身体が慣れてるからで、
前の世界で給水ポンプに頼ってた俺とは違う。
普段使ってなかった筋肉を使うとなれば、筋肉痛になるのも頷ける
ってもんだ。

喉が渇いたので重い腰を上げて一階の井戸に向かい、ティーカップ
に水を注いだ。本当は一度沸騰させたほうがいいんだろうが、
わざわざ二階に上がって湯を沸かして飲むのは時間がかかりすぎる
し、何よりだるい。
その場で一杯水を飲み、もう一杯ティーカップに注いでカウンター
の上に置いた。

しばらくチビ共を眺めていると、商品選びが終わったようで、
花を持って二人揃ってカウンターの前にやって来た。
そして、どっちが商品をカウンターに置くか、そこでコソコソ声で
譲り合いが始まる。

「男の子なんだから、やってよ」

「えー、恥ずかしいよぉ。お姉ちゃんがやってよ」

「お姉ちゃんがちゃんと見ててあげるから、一人でやっちゃいなさ
いよ」

「僕、こういうの苦手だもん……」

……不覚にも萌えた。

いや、まさか俺にロリコン属性があるとは思ってないが、
これはほほえましい光景の一つとして認定できる。
扱いの面倒なガキの唯一の武器の一つだろう。
これをそっくりそのまま大の大人がやってたら、
「お、お前ら頭大丈夫か？」とキモがるのは確実だ。
ちなみに、二人が持ってきた花はカウンターに隠れてしまって、
何を選んだのかは俺には見えない。

「これ……くださぃ……」

「ブフッ――――！」

結局、女の子がはにかみながら欲しい花をカウンターの上に置く。
それを見た瞬間、飲もうとしていたティーカップの水を盛大に噴いてしまった。
噴くときに俺がギリギリのところで横を向いたため、幸いなことに俺にもチビにも被害はなかった。

「……いや、その花はやめといた方がいいぞ、多分。多分じゃない、絶対だ」

「……え？」

何でよりによってチビが選んだ花が葬儀用の花なんだよ！！
チビが持ってきたのは葬儀の時の装飾や墓場に眠る死者に供えるのに慣習的に使われる花で、

家で飾ったりプレゼントしたりするための花じゃない。
分かりやすく言えば、仏花を親にプレゼントするようなものだ。

さっき俺はかわいい我が子からくれるプレゼントならどんなものでも喜ぶだろうと言ったが、前言撤回だ。
これはさすがに例外。
風邪で寝ている母が、かわいい子供達が自分のお見舞いに花を買ってきたと聞いて、
受けとってみればなんと葬儀用の花だったなんて、笑えない話だ。
風邪で寝ているところに葬儀用の花をプレゼントされちゃ、
渡すときに言うであろう「早く良くなってね、お母さん」の言葉の裏に、
「早く死んでね、お母さん」の意が含まれているとも取られかねない。

母が顔をピクピク引き攣らせながら、
「わー、綺麗なお花、ありがとうね。お母さん、元気になったかも～♪」
なんて心にもないことを子供達に言う姿が簡単に想像できる。

「このお花はね、プレゼントしちゃいけない花なんだ。
だから、これじゃないやつを探して来てごらん」

そういうと、女の子はやっちゃった、というような顔をしてカウンターの花を再び手に取り、
男の子の手を引いて花を元の場所に戻し、また花を探しはじめ、
またしばらくすると別の花を持ってカウンターにやって来た。

「これ……（下さい）」

今度は男の子が花をカウンターの上に置いた。
うん、今度はプレゼントしても大丈夫な花だ。
俺はそれを受けとって値札を外し、値段を確認する。

≦≦２００レル≧≧

ふむ２００レルか……予算範囲内だな。

「それにしても、君達、家は近いのか？」

俺は包装用の布で花を寿司巻きにしながら何気なく聞いてみる。
すると、二人のうちしっかり者の方の女の子が答えた。

「羽根なしのお兄さんのいるお花屋さんは安いって街の人に聞いて、ちょっと遠出しちゃった」

女の子はそういってスマイル。
街の人――二人のはにかむ様子を見ると、恐らく近所の顔見知りの人だろう。

「そうか……」

やっぱ、街の中では俺はちょっとした有名人的な存在なのかもしれん。
だが、“羽根なし”という言い方が、何となくだが語感的に引っ掛かるな。
まあ、俺の特徴を表現するには、俺がもしその街人だったとしたら、羽根なしの別の言い回しが思い付かずに、同じく“羽根なし”と言うだろうが。

「お袋の為に遠出か……偉いな」

俺は飛行機に一人で乗った美羽には遠く及ばないがな、と心の中で付け足し、
巾着袋の中から２００レルだけ取り出し、お釣りの１００レルを袋に入れたまま女の子に返した。

「これはサービスだ。もらって行け」

寿司巻きに包装した花に、もう一つ、商品の花を差し込んだ。
サービスの花の価格はおよそ１３０レル。これぐらいのサービスはやってもいいだろう。
俺はサービス付きの花を男の子に渡す。

「あ、あ……ありがとう」

男の子が言った。

「また来てくれよな」

二人は嬉しそうな顔をして店を出て行った。
これが、俺がごく稀に見せる赤の他人に対する優しさだ。
次、この優しさを発動させるのは何ヶ月後になるのか、それは俺の気分と状況次第である。

第5話－A13　Ｌｏｓｔ－３１１－　贈ってはいけない花（後書き）

次回はコウが一線をこえる……かもしれません

第5話－Ａ１４　Ｌｏｓｔ－３１１－　リンの行方と五つの影（前書き）

本文が意外と長くなってしまったので、分割しました。

第5話－A14　Lost－311－　リンの行方と五つの影

「遅い……どこで道草食ってんだ……」

太陽が沈んでもリンは買い物から帰って来ない。
日没と同時に俺一人で今日の店じまいを済ませ、木製のシャッターを閉めた。
こんな時間になっても帰って来ないことなんて今までなかった。
大低は遅くとも日没直前には買い物を済ませて帰ってくるリンなのだが……
今日帰りが遅いのは、リンが豹変したのと関係があるのだろうか。
とりあえず、しばらくリンが帰ってくるまで待ってみるか。それしか方法はない。

俺は二階の自室に上がり、小さな木製の窓代わりの扉を開けた。
部屋の中に外の風がさらりと吹き込み、小さくひゅう、と音を立てた。
俺はその窓から闇に染まりつつある空を見上げ、そのまま視線を下に下ろす。
通りには、まだ日没直後ということもあり、人通りもかなりある。
また、日没後も明かりを点けて営業している店も多く、
リンが一人で街を歩いていたとしても、なんら不自然ではない。

「あんまり心配させんな、バカリン」

俺は一人呟き、部屋が暗くなってきたので火魔法を使ってランプに

火を点した。
異世界人で凡人という俺だが、どうやら魔法は普通に使えるらしい。
俺が火魔法を使うと、出てくる炎の色は必ず緑色になる。
これは、各個人が持っている魔法の最適な属性を示すらしい。
魔法書にそう書いてあったんだから間違いない。
大低の人の場合、無属性、つまりは普通の赤色の炎が出るらしい。
一部の人は火魔法を使うと、俺も含めそれ以外の色になるということだそうで。
で、俺の最適な属性は見たまんま、回復・医療系の魔法に適しているらしい。
平和主義の俺としては、戦闘系の魔法に適するより、こっちのほうが性に合っている。

で、一般の無属性の人達が発動できる魔法は限られており、
高度な魔法はその魔法に適した属性の魔力を備える者が行えるという。
ただ、無属性の人間や、違う属性を持つ人間でも、魔力を馬鹿みたいに持っている人間は、
高度な魔法でも魔力を大量に消費してしまうデメリットはあるが、
一応出来ないことはないらしい。

要は、一定以下のレベルの魔法は、誰でも属性を気にせず使えるが、
一定以上のレベルの魔法を使うときは、
適した属性の持ち主がその属性の魔法を発動させるのは効率が良いが、
そうでない人の場合はかなり燃費が落ちる、ということだ。

それから時間は経ち、次第に外の喧騒も聞こえなくなって、時刻は

とうとう深夜帯に突入してしまった。

「いくらなんでもこれは遅すぎるだろ……」

まさかリンが蒸発したとは考えられない。
こんな深夜まで店をやってるのはせいぜい屋台か酒場ぐらいだ。
ということは、リンは何らかの事件に巻き込まれた？
とにかく、リンを捜しに行こう。

持って行くもの……何がいいだろうか。
夕方に買い物に出て行って、深夜になっても帰って来ないということは、
リンが何らかの問題に突き当たっていることは確実だ。
万が一の状況を考えると、着の身着のままで飛び出していくのはあまりにも無策すぎる。

家の前の通りから、酒に酔ったと思われる男二人の声が聞こえてきた。
ろれつが回ってない。
大声を上げながら、不規則な足音を立てながら、ゆっくりと歩いていく。
こんな人が徘徊する時間になっても帰って来ないのだ。
こちとて、捜索中に酒に酔った暴漢に襲われることなどに対する自衛策が必要だろう。

俺の部屋には使えそうな物が何もないので、リンの部屋にお邪魔する。
まず目に飛び込んできたのは、黒のナイトローブ。

どこでこんなものを手に入れたのか、また購入した用途は謎だが、
夜中に着て街を歩けば、暗闇に溶け込み、視認性を下げることができる。
これは着て行くべきだろう。

それから、リンが盗賊と戦った時に使った短剣。
その隣には、俺が盗賊から拝借した剣も置いてある。
他に、土砂崩れに遭った家の中から掘り出した、
猟師の父の形見と思われるボロボロの弓矢と、傷だらけのガラス瓶、
吹き矢、ナイフなども置いてある。
瓶には薬品が入っているようで、
置かれている三つの瓶にはそれぞれ「毒薬」、「麻酔薬」、「睡眠薬」と書かれている。
麻酔薬と睡眠薬の違いがイマイチ分かりづらいが、そんな小さなことは気にしない。
リンの親父さんは弓矢などの遠距離武器を使って狩猟していたことが伺える。

リンの部屋には初めて入ったが、
こんな女の子の部屋にこんなミリタリズムな装備があるのは異様だ。
元来、心がチキンな俺はあらゆる事態を想定して、
リンの部屋にある戦闘に使えそうな装備はすべて装備してしまったため、
全重量は結構な重さになってしまった。
あらゆる事態……そういえば零雨もそんなこと言って旅行にいろいろと変なものを持って行ってたな。
それはさておき、他に何か持って行っておいた方がいいものはないだろうか？

……あっ、魔法書を持って行こう。

あれがあれば、最悪本を見ながらでも魔法が使える。
これを持って行くとなるとかなりかさ張るが、それは仕方ない。
重量があって機動性が下がっている分はなんとかして補うしかない。
そういえば、某ゲームでは周囲の敵から身を隠すのに段ボールを使う奇人がいたな。
この世界に置換すれば木箱となるのだが……俺はパロディーをやるつもりはない。
木箱はさすがにかさ張りすぎる。
あと、金もいくらか持って行った方がいいだろう。
汚い話になるが、何かあった時はお金で解決するという策も持っておく方が、心持ち安心できる。
どこ行っても世の中コレだよ。コレ。

出発の準備が完了し、俺は裏口以外のランプをすべて消して回り、きちんと施錠をして出掛けた。
裏口のランプをつけっぱなしにしたのは、単に家に帰ってきた時に真っ暗闇だと足元が見えにくくて危険じゃないかと思ったからで、特にコレといった理由でもなければ作戦でもない。

とりあえず、夕方リンが出掛けて行った方角を歩いてみる。
大声でリンの名前を呼びながら歩いて行きたいところだが、夜中に大声は明らかに近所迷惑になるのは分かりきっている。
俺は声を出さない代わりに、足音を立てないよう歩き、目と耳に神経を集中させる。

「ん？今、そこから足音が聞こえなかったか？」

通りの向こう側から歩いて来ていた若い男の二人のうち一人が、俺とすれ違い様に足を止めた。

「……何にも聞こえないぞ？気のせいだろ」

もう一人の男はさらに、ほら、ぐずぐずしてねえでさっさと帰ろうぜ、と言い、
そうだな、と相槌を打ったもう一人の男とともにまた歩きだした。
どうやらこの黒のナイトローブは俺が思っていた以上に視認性が低いらしい。
闇夜に溶けてカムフラージュする方としては安心だ。

それから闇夜の中、屋台や酒場などの明るい場所を避けて小一時間ほど歩きつづけるが、リンの姿は見つからない。
まあ、こんな広大なナクルという街で、
特定の少年が特定の少女とバッタリ出会う確率はかなり低い。
んー、１６の俺に少年（ボーイ）はちとキツイか？
ボーイがどうこうはさておき、確率を考えると当然の結果と言えばそうなんだが、
かといってリンをこのまま放っておくわけにはいかない。
捜すしかないのだ。

「はぁ……リンのバカ、どこで道草食って寝てるのか……」

道草を食ってるから道草を食って寝てるに若干グレードアップしたリン探しの俺の心境。
一旦家に引き返すか……もしかしたらリンが帰って来てるかもしれねえし。
ああ、また筋肉痛の種が増えそうだ。
そう思ってくるりと踵を返した時、ブァッ、ブァッ、と羽ばたくような音を俺の耳が捉えた。
視線を空に移して音の主を探す。
そして、俺のいる建物の屋根と屋根の間の細い路地から見える細長い空を、
慌てるように一つの黒い影が横切った。

「リン……？」

その後を追うように五つの影が空を横切る。
リンは、誰かに追われてるのか？
シルエットだけじゃリンかどうかを判別するには情報不足だったが、リンがいなくなったこと、その間に起きたこの光景、という状況を考えてみると、
今の影がリンであった可能性は否定できない。むしろ高いぐらいだ。

俺はあいにく空は飛べないので、地上から走ってその影を追うことに、
というか、思う前から反射的に身体が動いていた。
一旦視界の開ける大通りに出て、その飛行物体を見つけると、俺はすぐにそいつを追って駆け出した。
ちくしょう、走って追い掛けるなんて俺の想定外だ！
重量級の装備が足かせとなって、俺から速度と体力を削り取ってい

く。
ああ、こんな時に原付か自転車があれば……！
そういえば、俺には原付の免許はない。ダメじゃん。
――って、いかんいかん！変な事考えるのに頭を使っちゃいかん！
ただでさえ脳は酸素の全使用量の３０％を占めるってのに。
酸素は身体に回すべきだ。

グキッ、と俺の左足首を捻り、俺の身体は前につんのめって、
全力でヘッドスライディングしちまった。
くそ、出かける前にラジオ体操と柔軟運動をしておけば良かった。

「ってえ……走ってずっこけたのは何年ぶりだ、クソ……」

幸いにも立てない事はない。
俺は重装備の身体を奮い立たせ、影を見失わないうちにまたすぐに立ち上がって駆け出す。

逃げている黒い影は、着地と飛翔を繰り返していたが、だんだん時間当たりの着地頻度が上がってきた。
つまり、逃げる影は疲れてきているということだ。
俺も疲れ切っているので、鬼ごっこもそろそろこの辺でお開きにしたいところだ。

追い掛ける側は徐々にだが、着実に逃げる影との距離を縮めてきている。
俺と逃げる影との差も縮まってきて、その影が一体何者なのか、遠目ながらも確認できる距離に迫ってきていた。

あれは俺と同じぐらいの年の――女――特徴はリンに酷似。
８０％の確率で逃げる人物はリンだと、
全身で酸素が足りていない過酷な状況の中で、
俺の脳の知覚領域がが辛うじて計算結果を最高意志決定機関である
前頭葉に報告。
それを受け取った前頭葉、つまり意識上の俺はどうするべきかの判
断を迫られている。

第５話－Ａ１４　Ｌｏｓｔ－３１１－　リンの行方と五つの影（後書き）

お気に入り登録４０件、ありがとうございます！！
感想、評価はいつでも受付中です。
作者の執筆の意欲が沸きますので、時間のある方はぜひ、よろしくお願いします！

第5話－A15　Lost－311－　闇夜にまぎれて……（前書き）

戦闘描写はとても難しいですね……
クスリと笑ってもらえれば幸いです。

第5話－A15　Lost－311－　闇夜にまぎれて……

事態は俺の前頭葉の意志決定を待ってはくれなかった。
とうとうリンと思わしき人物は力尽き、その姿は建物の群れ中に吸い込まれていったのだ。
それを追う五つの影は、ここぞとばかりに加速し、また彼等も同様に建物の群れの中に入って行ってしまった。
俺は彼等が着地した大体の場所を記憶し、その場所めがけて一段と走る速さを上げる。

俺がマークした地点に近づくにつれて、だんだん声が聞こえてくるようになった。
それは紛れも無くリンの声だった。
嫌、近寄らないで、といった叫び声が聞こえてくる。
リン、一体どうしてこういう状況になった！？
リンの声が聞こえてくる路地に繋がる中規模の通りの角に着くと、その場で息を殺し、しゃがみこんで建物の影から路地を覗き込む。
今まで散々走らされた結果、息もかなり上がって、息を殺すのが苦しい。
しかし、はたから見れば、ナイトローブのフードを被った今の俺は、完全に闇夜に紛れて依頼をこなす冷酷無血の暗殺者が、路地にいる目標人物（ターゲット）の様子を伺う格好そのものである。
ま、ローブを一枚剥ぎ取れば、そこにいるのはゴテゴテにの装備をした小心者の平和主義者なんだが。

辺りが暗くて良く見えない。
暗視ゴーグルとか、赤外線カメラとかあれば鮮明に見えるんだろうが、
残念ながら今頼りにできるのは、星の光と肉眼だけである。

そんな状況下でも、確かに確認できた。
リンは、路地の行き止まりに追い詰められていた。

「いいじゃねえか、俺達と今晩遊んだってよ」

「えへへ、別に悪いようにはしねえからさ」

「悪いようにしないなら、……早く家に返してください……」

「んー、それは無理難題だなぁ、俺達をここまで追わせといて、やすやすと帰すのは」

「こんな綺麗なの、いままでやったことがないぜ」

どうやらリンはこの男らに“襲われて”いるらしい。
で、リンを壁際まで追い詰める五人組は自分の欲求を抑えられないどうしようもないクズ、という状況のようだ。

「……か、家族が家で待ってるんです」

リンは涙目になって訴えかけている。
家族……まあ、俺を家族と見なしているのかは別にして、心配して家を出てきたのは事実だ。

「へぇ、君、家族いたんだ。

それならなおさら返せないなぁー」

このどうしようもない男達は高らかに笑い声を上げる。
俺からはその後ろ姿しか見えないが。

「どうし、て……」

「なぜって、君が家に帰ったら俺達のことを言うに違いねえからだ。
そしたら俺達は警邏隊（けいらたい）に捕まってブタ箱行き、下手すりゃ奴隷身分だ。
だから君を帰すわけにはいかねえ。
俺達の奴隷になるか、ここで死ぬか、それはお前次第だがな」

へえ、この世界には奴隷身分もあるのか。
多分警邏隊＝警察だな。
って、学んでる場合じゃねえっての。
何とかしてリンに被害が及ぶ前に助け出さねば。
辺りを見回してみるが、明かりはどこも点いていない。
人通りもない。
つまり、俺一人で五人の男からリンを一刻も早く救い出さなければならない。
こういう試練がテレビゲーム上のものなら喜んでミッション開始なわけだが、
こちとらファンタジーな世界とは言え現実は現実。
失敗してもコンティニューボタンなんか現れてはくれない。
大量の装備を身につけている俺だが、やはり一人での行動は心細いものがある。

女々しいと笑うなら笑ってくれ。
同じ状況に置かれた時に相応の行動をする覚悟があれば、だが。

俺はまず、リンの親父さんの吹き矢を取り出した。
いくら相手が腐っているとは言えど、相手を傷つけるような真似は、鳩ポッポ主義の俺としては納得がいかない。
弓矢や剣はあくまで最終手段で行きたいと思う。
だが、それじゃあ名案でもあるのかと聞かれれば、
そんなものはない、と哀しくも軽く一蹴できてしまう。

吹き矢の矢を見ると、どうやら矢の針に何か仕込めそうな構造をしている。
俺は瓶の存在を思い出し、「睡眠薬」と書かれた瓶を取り出した。
そして、よくよく矢の構造を観察する。
なるほど、ここに液体の薬を流し込むと、目標に当たると、針がちょうど注射針の代わりになってその薬が相手の体内に流れ込むと。
やはり、俺の思い通り、この瓶の薬は吹き矢用の薬だった。
リンの親父さんは生前猟師をしていたって話だから、
今俺が持ってる薬は恐らく鳥獣用なんだろう。
ハハッ、欲求に身を任せて行動するケモノにはピッタリの薬じゃねえか。

早速矢に薬を流し込んで仕込みをする。
平和主義者として16年間、誰とも拳を交えずにひょろひょろと生きてきた俺は、
人生で初めて自ら戦闘行動を起こすことになるのだが、今のところ後悔はしていない。
人の命、ましてやリンの命がかかってる重大事件だ、

ここで俺が平和主義を貫いて、男らが言う警邏隊を呼びに行くという行動を取ったら、
その間にリンが被害にあってしまうことに疑問の余地はない。

矢には薬をこれでもかって程詰め込んでおいた。
これだけの睡眠薬を喰らえば、確実に夢の中に落ちるだろう。
だが、一度に打てるのは一発だけ。
それに、一発放てば相手もこちらの存在に気がつくだろう。
つまり、こいつだけだと一人しか倒せない。
あとの四人を倒すのならば、別の方法が必要だ。
方法が思い浮かばねえから、とりあえずコイツを一発かまして、まず一人倒すことにしよう。
親父さん、娘のリンの為だ、力を貸してくれ。

吹き矢を構える頃には既に俺の息も安定していて、照準がぶれることはなかった。
どこを狙うのがいいだろうか。
まあ、セオリーに首辺りを狙ってみるか。
某メガネの少年もいつもあのオッサンの首を狙ってるし。
初めての吹き矢なのだが……まあ大丈夫だろうと普段信用しない自分をこういう時だけ信じて……撃つっ！

プスッ！！

……チッ、外した。
俺が放った睡眠薬デリバリー注射器は、始めのうちは首に向かって飛んでいってたのだが、

俺の息の吹き込み方が悪かったのか、速度があまり上がらず、放物線の軌道を描いて――――ケツにデリバリーしちまった。

「痛ってぇ！！」

ケツに吹き矢兼注射器が刺さった男は、やはり声を上げてケツの痛みを訴えた。

うわぁ……むっちゃくちゃ痛そう……男よ、変なところに刺してしまってすまない。

謝る義理はないが、ものすごく痛そうにしていたのでついつい謝ってしまった。

というか、ケツって痛みを感じにくい部位じゃなかったっけか？

まあいい、ここで新たなことわざが誕生した。

ケツに吹き矢……（意）感覚の鈍いケツでも強烈に感じるほど痛いものの例え。

……なーんちって。

「ん？何だこれ？」

必死に痛がる男の横にいた男は、ケツに刺さった吹き矢の針を見つけ、それを引き抜いた。

「誰だ！コソコソしてねえで出てこい！！」

その男は大声を上げて俺の方を向き、慌てて俺は建物の影に身を隠す。

……バーカ、後ろからコソコソ吹き矢で睡眠薬を撃ち込む奴（＝俺）が、

出てこいと言われて、はい、分かりました、とあっさり降参して出てくる訳ねえだろ。

俺は聞き耳を立てて建物の影から男達の会話を聞く。

「おい、アンド、ビエスにこんなオモチャを撃ち込んだ奴がいる。飛翔音が聞こえねえから撃ち込んだ奴はまだこの近くにいるはずだ。

取っ捕まえて引きずり出せ」

「おう……おい、ビエス！！」

どさり、という音が聞こえたと同時に、アンドという男がビエスという男に駆け寄る音が聞こえてきた。

どうやら睡眠薬が効いてきたらしい。

薬が効くまでにはもうしばらく時間がかかると思っていたが、意外に即効性だな、コイツ。

しかしそれにしても、“取っ捕まえて引きずり出せ”なんて言い方をするのは

悪役ぐらいなもんなんだが、自分達が悪役だということはきちんと認識しているのだろうか？

「吹き矢に睡眠薬が仕込まれていたのか……誰かは知らんが小細工しやがって……」

「俺も探す。一人より二人の方があぶり出すには効率がいい」

「そうか、なら俺は上から探す。アンド、お前は地上を探してくれ」

「おう」

「おっと、レン、お前はそいつが逃げないようにしっかりと監視してくれよ？」

「わーってる、わーってる、安心しろ。逃がしはしねえよ」

それから羽ばたく音が聞こえ、それと同時にアンドという男が俺の隠れている角に近づいてくる。

いや、もしかしたらこういう事態になるのではないかと頭の中では予想していたが、実際にこういう事態になったらどうするかは全く考えてなかった。

さて、どうする？

上から監視されているから下手に動けば、こちらがいくら闇に溶け込んでいるとはいえ、相手も気がつくだろう。

かといって、このままじっとしていれば、アンドとかいう男に見つかる。

何かいい手はないだろうか……

……あ、あそこに空の木箱がある。
あれを被って隠れれば、上空から見ても、ただの路上に無造作に置かれた荷物にしか見えない。
俺は足音を立てないよう、そしてできるだけ早くその木箱に向かう。
……まだ見つかってないな、よし。
そして俺はそいつを被った。
出発前に敵の捜索を抜け出す為に段ボールを好んで被っていた奴を俺は奇人扱いしたが、
隠れる側になって分かった。
こいつは意外に有効な戦術だと。
この木箱は丁度板切れ一枚が外れかかっており、そこから外の状態をうかがい知ることができる。

俺のいた通りの角に、路地からアンドと呼ばれていた男が出てきた。
そいつは周囲を警戒しながら俺をくまなく探している。
俺が木箱に隠れているなんて発想をあいつがしてくれなきゃいいが
……
ちなみに今の俺の状態は足ガクガクで心拍数もかなり高い。
精神的に緊張状態にあるってわけだな。

そうだ、こうして隠れている間にも次の一手を打てるように準備しておかねば。
だが、外は暗いが、木箱を被ったせいでさらに手元が暗くなり、とても作業できるような明るさではない。
火魔法を照明代わりに使って箱の中で作業するという案も一瞬浮かんだが、
外から見れば暗闇の中に一つだけ、光が漏れ出ている箱があるという状況になることはほぼ間違いない。

隠れているのにわざわざ俺はここに隠れている、と公言するのはアホがやることだ。
ということは、今は隠れることだけに専念して、次の一手の準備はそのあとにやるしかないな。

もしこれが俺じゃなくてジョーなら絶対に見つかってるわ、
あいつ結構何も考えずに行動しちまうタイプだし。
零雨と麗香なら俺みたいにコソコソせずに背後から堂々と近寄って締め上げるはずだ。
チカなら多少は作戦立てて行動するだろうが、結局は感情に流されて乱闘に突入するだろう。
乱闘の結果、チカも捕まってゲームオーバーになる確率は高い。
匠先輩は……どうだろう？
そもそも捜しに行くのを面倒臭がって家でゴロゴロしてるか、
もしくは捜しに行ったとしても「俺の動きについてこられるかな、諸君？」とか言って、
後ろから剣を構えて格好だけはちゃっかりつけて登場、
ここはファンタジーな世界だし、と訳の分からない理由も持ち出して、
どこぞの中学生が妄想して作り出したような痛々し～い技名を堂々と口にしながら戦い、
結局のところ力尽きて終わるかのどちらかだろう。
戦って勝ち目があるのは零雨と麗香しかいねえじゃねえか。
日本人がどれだけ平和ボケしてるかがよく分かるぜ、ハハハ――
――と、笑ってる俺も日本人なわけだが。

気がつけば、足音は俺のすぐ近くまで近づいてきていた。

「……チッ、どこの誰かは知らんが、どこに隠れやがった？」

アンドはそう呟いて俺の隠れている木箱を見やる。
箱の中からその様子をうかがっていた俺と目が合う。

（あ……やべえんじゃねえか、コレ？）

しかし、男はこちらの存在には気がついていないらしく、すぐに視線を他の場所に移して俺を捜している。
そして俺のいる木箱の横をあっさりと通りすぎてしまった。
セーフ。
だが、油断は禁物だ。
いくらあっちがこっちの俺に気がついていないとはいえど、あいつらは俺を探しに来てるわけで、
ちょっとでも動けばすぐに見つかってしまうだろう。
5人のうち、2人が俺を捜索中、1人が熟睡中、つまり、2人がリンを拘束中という状況は、
俺にとってはリンを救い出す最高のチャンスなのだが、動けないのが厳しい。

「……見つからねえ」

「俺も上から探したが見当たらねえ。もう逃げちまったんじゃねえのか？」

しばらく箱の中でじっとしていると、とうとう男達は俺を探すのを諦めたようで、
リンの監視役の下に集まってきた。

その声を聞くやいなや、俺はそろりと箱を抜け出し、吹き矢の数を確かめる。
飛ばせる吹き矢の数はあと三つ。
俺はその全てに睡眠薬を仕込むと、建物の影からさっきと同じように路地裏を覗く。
寝ている一人は建物の壁にもたれかかるようにされて、
残りの四人がジリジリとリンに歩み寄っていく。

「い……嫌、来ないで――」

「怖がることねえって、俺達の奴隷になったら、たくさんかわいがってやるからよ」

「やめて……帰して……」

「これからお前が帰ってくるのは俺達のところだ。
なあに、心配することはない。お前は俺達のコレクションに仲間入りするだけだ」

「こういう嫌がる仕草がぐっと来るんだよな、俺。いじめてやりてえ……」

「ハハハ、おいレン、変態癖も程々にしろよ？」

おいおい、コレクションって……誘拐の常習犯かよ、こいつら……
そしてレンとか言うS野郎、俺が見た限りではこいつが一番危険度が高い。
こいつらの脳内辞書に「人権」というワードはきちんと収録されているのだろうか。

恐らく入ってないだろう。

……吹き矢でちまちまと一発ずつぶち込んでるようじゃ埒が明かない。

夜も更けすぎてそろそろ眠くなってきた。

仕方ねえな、睡魔に襲われて思考停止する前に特攻すっか。

いい作戦思いついたし。

俺は両手に吹き矢の針を一つずつ持って、思い切って路地裏に突入した。

足音をできるだけ立てず、リンに夢中になっている4人の背後につく。

俺と変態集団との距離は……残りおよそ3メートル！

そこから俺は全力で加速し、通り魔の要領で4人のうち俺から一番近い2人の首筋に

睡眠薬の仕込まれた針をダイレクトに手で刺し、さらに押し倒す！！

「ぐあっ！！」

「あ〝っ！！」

小さく悲鳴を上げた二人は地面に接吻する！

倒すのはあと二人！！

「誰だ！」

突然の事態に混乱気味の男の首筋に狙いをつけると、
すばやく取り出せるようにしておいた最後の針を――――！！！

バシン！！

「（クソッ！！）」

狙いをつけて首筋に向かっていた針は、男が俺の手首を掴むというとっさの判断で阻まれ、
俺の速攻作戦は失敗に終わってしまった。

第5話－A16　Lost－311－　偶然の結果

どうする、どうするよ俺！？
俺の手首を掴んでいる相手は、命の危険を本能的に察知したようで、
掴む力は半端なく強く、息も荒い。
これが火事場の馬鹿力ってやつか……ちくしょう！

俺の動きを封じ込められてしまった以上、このままやられてしまう
他ないのか？
そもそも、俺が強行手段に出たのが間違いで、
吹き矢で後ろからスナイパーごっこしていた方が得策だったのかも
しれない。
俺一人に対して、残る敵はあと二人。
状況的に言えば俺が圧倒的不利だということは目に見えている。

とりあえずリン……リンだけは今のうちにここから逃げ出して――！
俺は相手と力攻めをしつつ、ちらりと流し目でリンを見やる。
リンまでもが俺が突如乱入してきた事に対して混乱してしまい、頭
脳は思考停止状態らしい。
口をポカーンと開けて放心中。
いや、だから今のうちに逃げろってバカ！！
口に出して逃げろと叫べば様になるし、カッコよく見えるかもしれ
んが、
叫んでしまうとこっちの注意がリンに行ってしまっていることを敵
に伝えてしまう。
こういう状況に慣れているならともかく、
実際は胸に若葉マークのステッカーを貼っているような俺では、そ
の一言が命取りになりかねん。
要は、ひどい言い方かもしれんが、リンの身よりも、自分の身の方

がかわいいってことだ。

「ウォリャアァッ！！」

そんな叫び声が横から聞こえ、俺も俺の手首を掴んでいる敵もその方を見た。

元気いっぱいに叫んだその男――レンは、両手で何かを掴んで振り上げていた。

星の光で青白く反射する直線状の金属。

――剣を振りかぶってるのか！

レンは剣を逆さに持ち、何かを刺すような形でそれを振り下ろそうとし、

手首を掴んでいた男はそれを見るやいなや、反射的に手を離して俺と距離を取る！

ヤバッ、殺される！

カキン！！

レンが剣を振り下ろすと、足元からそんな音とともにオレンジの火花が散った。

火花を散らしたのは、レンの持っていた剣と――俺の靴！？

……ああ、そういえば俺の靴は軍靴だった。
見た目は革靴、中身は金属装甲のイカツイ戦闘用シューズ。
敵二人から少し距離を置き、火花を散らした靴を見ると、
外の革の部分が切れ、中の金属の光沢がキラリと反射している。

「残念、軍靴でした」

「チッ、動きを止められると思ったのによ！！」

剣を持ったレンは、元々俺の足を串刺しにするつもりでいたらしい。
俺の足を串刺しにして地面と固定すれば、
なるほど、俺はなす術もなくただタコ殴りにされるだけ、というわけか。
さすが、危険度Ｎｏ．１の男が考えることだと褒めてやりたいところだ。

俺は手に持っていた未使用の吹き矢の針を投げ捨て、
こんなことはしたくなかったのだが、盗賊から拝借した例の剣を取り出して構えた。
中学の時に習っていた剣道のフォームを身体が覚えていたらしく、
自然と構えの態勢になる。
剣道では竹刀を使っていたが、
今俺が握っているのは殺傷能力のある重たい金属製の剣で、
それがこれから俺がやることの責任の重さを物語っている。

――と、そこまではいい。
忘れちゃならんのは、
俺は剣道の試合で一勝もしたことがないという折り紙付きの平和主

義者だということで、
専ら相手の攻撃を防ぐことしかしてなかった。
そりゃ、相手のいない素振りとかはやってたが。
当時は
「平和ボケした日本で剣道なんて意味があるのかよ、
こんなことしてる暇があったら、カネの稼ぎ方の勉強をしたいところだね」
などと考えながら授業を受けていたような有様で、
まさか異世界に飛ばされてファンタジーに剣で戦うなんて思ってもみなかった。
もっと真剣に授業受けてれば良かったぜ、まったく。

「俺達の邪魔をするんじゃねえ！　死ねぇっ！！」

体勢を立て直したらしいレンは、すぐに斬りかかる！
反射的に自分の剣でそれを受ける。
相手はそこから押しをかけ、俺を力でねじ伏せようとする。
どうする？　一体どうすればいい？　深呼吸？　そんなヒマはない！
考え込んでいる間にも相手はどんどん圧力を強めてくる。
この状態でもう一人、手首を掴んだ男が応援に駆け付ければ、俺はひとたまりもない。
一度に何人も相手はできねえ。

とりあえず俺はどんどん強くなっていくレンの押す力を受け流す。
その行動がレンにとっては意外だったらしい。
そのまま前につんのめって危うくバランスを崩しそうになる。
その一瞬の隙をついて、というか“偶然に”俺の右足が前に出ちまって、

レンはそれに足を引っ掛けて、躍動感溢れるコケ方をした。

「グフッ！」

そのまま倒れ込んだ彼は、すぐさま体勢を立て直そうとする。
俺はそんな無防備な彼を――正確には彼の例のアレを思いっきり蹴ってやった。
声にならない声で叫び声を上げるレン。
男だけの弱点を狙うのは戦い方としては、特にリンという少女の前では汚らわしく、フェアじゃないかもしれない。
だが、いまはそんな悠長なことを言っているヒマはない。
俺は一度砂利の上に投げ捨てた吹き矢の針を拾い上げ、痛がるレンの首に刺した。
一度落ちた針を刺すのは衛生的に問題があるかもしれないが、コイツを無力化させる方がどう考えても先決だ。

「（うがっ！？）」

この野郎、やりやがった！！
俺が刺した直後、こいつが突然暴れだし、持っていた剣を乱暴に振り回したのだ。

「グァ――ッ！！」

俺は本能的に腕でその剣を受け、刃が腕に食い込む。
ちょ、コレって切り口が骨まで……リアルに逝ってるかもしれん。
しかも太い血管を切ったらしく、かなり出血しちまってる。
血、ポタポタ流れ出てるし……あぁ、見たくねえ……

大きい傷はそこ一カ所だけだが、小さい怪我としては手の甲を切ったのが挙げられる。
マジコイツ危ねえ奴だ。
ちゃんと注射したのに暴れ出すとか、あれか？
アドレナリン大量放出につき睡眠薬受付不可ってやつか？
傷口から暴れた張本人に視線を移すと……バッチリ熟睡してやがる。

「おいお前！　そっから動くんじゃねえぞ！！　動いたらコイツの命はない！！」

その声のする方を見ると、俺の手首を掴んだあの男がリンの首にナイフを突き付けていた。
リンは刃物に怯えて小さくなる。
あーあ……逃げりゃ良かったものを、なぜ逃げなかった、リン？
リンを人質にとっている男の声は震えていて、戦々恐々としている感がひしひしと伝わってくる。
確かにあの男からすれば、
謎のナイトローブの男が自分以外の仲間全員をあれよあれよと倒しちまったわけだから、
俺が百戦錬磨の英雄に見えてもおかしくはない。
だが、実際の所どうかと聞かれれば、俺は間違いなくこう答えるね。
“あれは幸運のもたらした結果だった”と。

さて、人質にされたリンだが……どうする？
俺が下手に動けばリンに危害が加わる。
ここは男の言う通りにした方がいいに決まってる。

「ぶ、武器を放せ！」

男のビビりっぷりはかなりのもので、
いくらなんでもそこまでビビる必要は無いんじゃねえかと心の中で呟きながら、
手に持っていた剣を手放す。
剣が砂利の上に落ちる音があたりに響いた。

「そ、そこから動くんじゃねえぞ……」

男はリンを人質にとったまま、じりじりと路地から通りの方へと移動する。
リンと一緒にどこかへ逃亡する気らしい。
そこらで地面と接吻している仲間達を見捨てて。
だが、俺は手が出せない。黙ってそれを見ているほかない。

そんな状況を打ち破ったのは、他の誰でもない、リン本人だった。
彼女はいきなり懐に手を突っ込んでナイフを取り出し、それを使って男の手首を切り付けたのだ。

「お、お前……隠し持ってたのかっ……！」

「このナイフ、切れ味が悪いから余計に痛みを感じちゃうんですよね～」

俺はこのタイミングを見逃さなかった。

地面の剣を拾い上げると、そのまま男に突撃、リンを力ずくで奪うと、

今度は俺が男の喉元に刃を向けた。

「お前にいくつか質問する。嘘偽りなく答えろ。いいな？」

男は俺の言うことに対して大人しくうなずいた。

「まずはナイフから手を離せ」

男はナイフから手を離した。

「お前、女を襲うのはこれが初めてじゃないな？　何回目だ？」

「は……初めて、だ……」

「嘘つけ！！　俺はお前らがここに来てからの一部始終をしっかり

見届けてる。
俺に嘘は通用せんぞ。正直に答えろ」

「……も、もうわからない……」

「最初からそう言え。次、嘘ついてみろ。
お前の嘘が言い終わらぬうちに俺が生首にしてやる。
……次の質問だ。
お前らの“コレクション”とやらは何人いる？」

「し、七人だ……」

「本当か？」

俺は刃を一層喉元の近くに、それこそ刃が喉に当たるぐらい近くまで寄せる。

「う、嘘じゃない、嘘じゃない！　信じてくれ！！」

「ほう、七人か。よくそんなに集めたもんだ。
……で、だ。
俺もその“コレクション”とやらに興味がある。“コレクション”の場所を教えろ。」

「イーカ教会のすぐ近くの屋敷だ……」

「イーカ教会……知らねえなぁ？」

「この近辺で一番デカイ教会だ！　そのすぐ近くにある！！」

「情報提供、どうも」

俺は剣を捨て、その男のみぞおちを蹴り上げて行動の自由を一瞬奪い、
その隙に柔道の投げ技を一発かましてやった。
無防備な相手に対しての柔道技はスポーツマンシップどころか倫理的にアウトかもしれないが、
今回は、今回だけは大目に見てくれ。

男は投げ技を受けると、いとも簡単に気絶してしまった。
まさか……死んではないよな？
確かに、受け身を知らない相手に対しての投げは危険だ（と、中学教師が言っていた）。
もしかしたら頭を強打して――

その男の口元に手をかざすと、呼吸が確認できた。
大事には至ってないようだ。

「あ、あの……すみません」

背後から声が聞こえ、振り向くとリンがすぐ俺のそばまで来ていた。

「助けて下さって……あ、ありがとうございました……」

そう言うとリンは深々とお辞儀をした。
今までリンを遠巻きにしか見てなかったから気がつかなかったが、いまこの距離で見ると、服は所々ほつれ、顔には小さな擦り傷があるのが確認できた。
顔色も悪い。
どれもリンが出かける前にはなかったものだ。

「ん？　あ、ああ。」

「良ければ……その、被ってるフードを脱いで……お顔を見せてもらえますか？」

もしかして、いや、さっきからちょっと気になってたんだが、まさかリンは助けてくれた男は見知らぬ男とでも思ってるんじゃ……いや、絶対そうだろ。
というか、声で気づけ、バカ。
まあいい、脱いでやるよ！　……フードを。
俺は何の躊躇もなくそいつを脱いだ。

「……ぇ、え？　コウさん！？」

「ああ、俺だが」

「何で……何で……」

「お前がなかなか帰ってこねえから、

わざわざ筋肉痛の身体に鞭を打ってはるばるここまで捜しに来たんだよ」

ちょっと言い方的に嫌みっぽかったか？　……まあ、気にしない、気にしない。

リンは顔を歪めて俺に抱き着いてきた。

崩れかかってきた、という表現の方が正しいのかもしれん。

緊張の糸が切れて、足の力が抜ける、そんな抱き着き方だった。

「こ、怖かったぁ……」

リンは涙声にで言った。

日が落ちてからこんな深夜まで、この男らにずっと追われていたんだろう。

逃げる途中でつまずき、服がほつれても、顔にケガをしてもなお、逃げ続けた。

体力の持つ限り――

そんな状況に置かれたリンの精神的負担を推し量ることなど、俺にはとてもできない。

完全に泣きのモードに入ってしまったリンを、俺はただただ受け入れるしかなかった。

「俺も内心ビビってた。

こりゃあ、しばらく刃物がトラウマになりそうだ」

「グズッ……。」

戦闘に参加するのはこれで最初で最後にしたいね。本気（マジ）で。
一対五とか普通に考えれば、俺は完璧に飛んで火に入る夏の虫状態、無謀だ。
今回うまく（？）行ったのはただの偶然だ。
例えば俺が靴屋で軍靴ではなく普通の靴を買ってれば、
今頃俺の足には風穴が空き、
さらにサンドバッグの気持ちまで否応なしに味わうことになっていただろう。
今回は天が味方してくれただけで、次はどうなるか分からん。
こうしている間にも、リンが俺に抱き着く力は強くなっていく。

「……大丈夫だ、リン。
こいつらはしばらくはここで寝たままだ。もう襲われる心配もない」

「もし、コウさんが助けに来てくれなかったらって思うとっ……怖くて……！！」

「結果的に俺が来たんだからいいじゃねえか。結果オーライだ」

「うん……」

「ああ、そうだ。
これは最初に聞くべき事だったのだが……ケガは大丈夫か？」

「大丈夫……」

「そうか、それは良かった」

こうやってリンと会話していると、
だんだん立っているのが辛くなり、吐き気に似た強烈な感覚が俺を襲う。
しゃがんで小さく縮こまっていたい、そんな辛い感覚。
これはまるで、いや、貧血の症状そのものだ。

「……リン、もういいだろ？　離してくれ。
俺は腕の出血を止めにゃならん。ちょっと気分が悪くなってきた」

「あ……ああっ！！　ごめんなさい……」

まったく、抱擁してるヒマがあればとっとと止血しろってんだ、と自分で自分に悪態をつく。
俺は剣でナイトローブを一部切り取り、それを腕にきつく巻きつけた。
魔法書には回復魔法の発動方法とかかいてあったりするのだが、あいにく俺はまだできない。
そういう時は傷口を直接圧迫して止血する、通称“直接圧迫止血法”が有効だ。
ガーゼや包帯などで出血している箇所を巻き付け、止血できれば完成だ。

他の止血法としては“止血帯法”といわれるものがあるが、
これは直接圧迫止血法と併用して行われる事が多いらしい。
なんでも、手足のケガ専用の強力な止血法で、

場合によってはこの止血法を行うと最悪細胞が壊死してしまうリスクもある。
まあ、この知識も全部中学の時の保健の授業の受け売りなんだがな。
世間一般的に、特に世の男性諸君においては、
保健とはあんな話やこんな言葉が教室内を飛び交うイメージが強いかもしれないが、
意外とこういうケガの応急手当のやり方が詳しく解説されていていて、
事故や災害、そして戦闘で負ったケガの対処には役立つ知識が盛りだくさんだったりする。

もし、いっぱしの異世界に飛ばされた出来損ないの高校生が偉そうに何をぬかしてるんだと思っている人がいるとすれば、それは正解だ。
俺もちょっと偉そうに解説しちまったと反省している。この通りだ、許してくれ。

俺の腕の止血のついでに、リンに手首を切られた男の腕も止血させておく。
人殺しにはなりたくないんでな。

第5話－Ａ17　Ｌｏｓｔ－３１１－　警邏隊に連行されました（前書き）

何とこの小説も気がつけば１００話目です。
先日、総合ＰＶ数が６０，０００を超え、ユニーク数は９０００人を突破しました。
皆さんどうもご愛読ありがとうございます。
ｌｏｓｔ－３１１－の次話も構想だけはありますので、今度は祝２００話（できるかな）を目指したいと思います。

注意：だんだん丸くなってきた主人公、コウですが、今話は一気に黒くなりますのでご注意を。
この小説による損害、特に、
コウの模倣をしたことに関する損害等は一切補償できませんのであしからず（笑）

「よし、こいつの止血はこんなもんでいいだろう」

俺は立ち上がり、戦闘に使った針を回収する。
暗くて針を探すのには苦労したが、一応全部見つけることができた。
これはリンの親父さんの形見だからな、使い捨てにするわけにもいかない。

「あっ、コウさん……手、ケガしてますよ」

「ん、これか？」

俺が回収し終えた針をしまっていると、リンが俺の手の傷口を見つけたらしい。
こっちの傷は腕ほど深くないから放置しときゃそのうち治るだろ、と、そのままにしていた。
まだ出血中だが、さほど気にするような量ではない。

「まあ、これぐらいなら傷口に唾でもつけときゃ治るだろ。気にするほどのもんじゃない」

リンは俺の手をとると、しげしげと見つめる。
そして突然、その傷口のキスしだす。

いや、キスというより舐めるといった方が正確かもしれん。
これは衛生上非常に危険な行動だ。
リンだけじゃなく俺までも細菌などの感染症にかかるおそれがある。

「おい、ちょっ……リン！！」

「ごめんなさい、もう、我慢できなくて……」

「……何が？」

「えっと……その……ね」

「ね、じゃ分かんねえよ」

「私にとって……ものすごく大切だから、つい」

リンはつまり、俺のことが好きで奇行に走った、のか？
まあ、このことについて延々と追及したって後の祭り、だからといってどうにかなるわけでもない。
俺はこれ以上は何も言わなかった。
それに、少女にキスされるのに対しての、役得感は否めない。

「お前達、こんな所で何をしてる！」

突然、誰かから光を照らされる。
光が強くてその声の人物が見えないが、複数人いることは足音で分

かった。

「こちらは第三警邏隊（けいらたい）だ。
この近辺で黒服の不審者がうろついているとの通報があった」

黒服の不審者……それ、どこからどう見てもその不審者は俺じゃねえか！

警邏隊は俺とリンを取り囲む。

俺を照らす光源は、白く輝く何かをランタン状の容器に入れたもので、水銀灯のような強烈な光だ。

その途中、警邏隊の一人が床に倒れている変態五人衆を見つけ声を上げる。

「被害者と思わしき人物が五名！！」

そりゃ勘違いだ、そっちは被害者じゃなく加害者だ。

俺はただそいつらからリンを守ろうと……

むう……厄介なことになっちまった。

「罪なき一般人を襲うとは言語道断！！　女は保護し、男を捕らえろ！！」

厳つい顔の警邏隊の隊長とおぼしき人物が部下に命令を下す。

おいおい、マジかよ……

「ちょっと待ってください！」

リンが声を上げるも、俺は手に縄をかけられる。
ここで抵抗の様子を見せるのは良くないだろうと思い、抵抗はしない。

「こんな夜中に駆り出されるのはゴメンだってのに……ったく」

「そう言うなって、この仕事を選んだのはお前だろう？」

「まあな……」

「それにしてもこいつ（俺）、やけに大人しいな……」

そんな声が警邏隊員から漏れるのを聞きながら、
見事なまでに罪人扱いされている俺は、なぜこうも巻き込まれてばかりなのかと嘆く。
警邏隊はリンから事情を聞くだろうが、彼らはリンの話をどこまで信用してくれるのか。
日本では裁判で起訴された場合の有罪判決率が９９．９％らしいが、ここではどうだろうか。
きちんとした公正な捜査をしてくれるのだろうか。
不安の種は尽きない。
ファンタジーな世界だとことあるごとに思っていたが、こういうところだけ嫌に素晴らしくリアルな展開を見せてくれる。

「今からナクル第三警邏隊本部に来てもらう。大人しくついてこい」

隊長はそう言って空に舞い上がる。
え、まさか本部まで飛んで行くつもりじゃないよな！？
この世界の住人は空を飛べることが当たり前になっていることを考えれば、
空での移動を採用してもおかしくはない。
他の隊員達も次々と地面を蹴り上げて空へ舞って行く。

「おい、何もたもたしている、大人しくついてこい！！」

俺の縄を持つ隊員の一人がなかなか飛び立とうとしない俺にイラついてか、荒々しく罵声を浴びせる。

「あの……」

「何だ？」

「俺、飛べないんすよ」

「はぁ？　何寝ぼけたこと言ってんだ！！
そんな人間がいる訳ねえだろ！　ガキじゃあるまいし」

「いや、ホントに飛べないんすよ」

「それじゃあお前の背中についてる翼は一体……ん？」

隊員がそういって俺の背中を叩く。
と同時に背中の触った感触の異常に気がついたようだ。

「ない……だと！？」

「そういうことです」

「そんな馬鹿な、お前には神使様のご加護がないのか！？」

「まあ、いろいろ事情があって、図らずもここにいるわけで――」

「……おい、ちょっと聞いてくれ！」

その隊員は空中で待機している仲間に声を上げ、俺の事情を説明した。

「本当に翼がないのか？」

事情を信用してくれない隊員の一人がそう言って俺の背中に手を回すと、
驚愕の表情を浮かべる。

「翼のない人間なんて見たことがない……」

「一体どうなってる、神使様の加護は絶対のはずだ」

「黒服を着た翼のない人間と、五人ないし六人の被害者……何か不吉な予感がする」

「とにかく後で教会の人間を呼んだ方がいいだろう。こいつが厄災の前触れでないとは限らん。教会所蔵の古文書から文献を探させるか……」

「そこは上層部の判断を仰ぐとこだ、俺達下っ端が判断するもんじゃない」

「そうだ、俺ら下っ端が今心配しなくてはならないのは、こいつをどうやって本部まで連行するかだ」

「やはり、歩いて本部まで？」

「ここから歩きで本部まで行こうとすると小一時間はかかるぞ」

「だがそれ以外の方法があるのか？　徒歩しかないだろう」

俺は厄災の前触れ扱いか……とんだ好待遇だな。

俺たちが本部までどうやって行くかをあれこれ議論しているうちに、警邏本部に俺のことを連絡するために一人が先に飛び立って行った。

結局、俺の移送方法は隊長の鶴の一声で空輸に決定し、現在移送中。

どうやって運ばれてるかって？
手に掛けられた縄を隊員達が分担して持ち、
俺は吊されて全身でタケノコを表現するというコメディースタイルだ。
縄をかけられている手首が……痛い。
もちろん、足元はぶらぶらである。
高高度を飛ぶのは俺が逃げ出さないようにするためだろう。
俺の隣のリンは、
体力と魔力の消耗で（飛ぶときは体力と魔力を消耗するらしい）自力で飛行できないため、
隊員一人に支えてもらいながら何とか飛んでいる。

「こいつ、やたらに重いな……」

「出発前に武器装備と魔法書を没収したのに、コイツ単体で何ちゅう重量だ」

「気が滅入る……」

「俺、こいつよりあっちの少女の護送がしたかったぜ」

「そういうなって、俺らみんなそう思ってるんだ」

そんな愚痴が俺の上方から流れてくる。
そういや、リンも盗賊から脱出するときに俺がむちゃくちゃ重いとか言ってた。
俺自身はそんなに体重が増えたとは思ってないのだが……
途中、前方から警邏隊の服装をした集団とすれ違った。

どうやら、彼らはあの変態五人衆を保護して、警邏隊本部へ移送するらしい。

警邏隊本部に移送された俺は、その足で取り調べを受けることになった。
日本の警察では取り調べは密室かつ少人数で行われるが、
ここの取り調べはその真逆、大広間かつ大人数で行われるようだ。
取り調べの部屋は豪華で、立派な装飾品も飾られている。
この部屋は取り調べ以外にも使われていると簡単に推測できた。
取り調べに装飾品は必要ないしな。
警邏隊職員（？）の人数は、ザッと数えて２０人弱。
どうやら、俺が来ると同時に取り調べが始まるよう、前もって準備していたらしい。

長テーブルの前に腰掛けている彼らの俺を見る表情は険しい。
俺は縄をかけられたまま立たされ、その両側には警邏隊職員が俺を見張っている。
逃走防止にだろう、この部屋には出入口が一つしかなく、窓もない。
その中で、俺は部屋の出入口からもっとも遠い場所に立たされている。
扉と俺が向かい合うような形だ。
ところで、普段体力を使わない深夜にいろいろ暴れたせいで腹が減ってきたのだが、
ここは例のアレを出してくれるのかね、えっと、なんだったかな―
―そう、カツ丼。
ちょっと両側にいる職員に聞いてみる。

「ここって――」

「喋るな。」

見事に切り捨てられた。
俺は仕方なく前を向き直す。
職員達はみな黙り込んで、部屋の中には静かな緊張感が流れている。
誰かを待っているような雰囲気が感じられた。

それからかなりの時間を待たされ、俺もこの代わり映えのしない景色に飽き飽きしてきた頃、
コンコン、と扉がノックされ、外の通路から声が聞こえた。

「総合警邏隊長殿がお見えになりました」

「ああ、どうぞお入りください」

長テーブルの職員の一人が沈黙を破って応対すると、扉がゆっくりと、厳かに開く。
扉が開き切って、中に入ってきた人物はやはり長老っぽい人物だった。
もう完全に外見が仙人スタイルの白髭じいさん。
足元をドライアイスの白い煙で装飾して、
後光でも差しとけば、誰がどう見ても仙人に見えると断言できる。

その総合何とかという役職のじいさんは、俺の目の前まで歩み寄り、
いろいろな角度から注目する。

「ふむ、珍しい……わしは今まで翼のない人間なぞ見たことがなかった……」

「警邏隊長殿、そろそろ取り調べを開始しても――」

「そうじゃな。だが、その前にやらなければいけないことがある」

じいさんはそう言って俺の背中に回り込むと、俺の手首に結ばれていた縄を外した。
それを見た両隣の職員が止めに入ろうとするが、じいさんはそれを手で制する。

「彼を取り調べる理由はない。
被害者だと思われていたあの五人は目下手配中の男じゃった。
その場にいた少女が語ってくれたよ、“彼は命の恩人です”と。
わしが遅れたのはその事実と五人の男の確認をしていたからじゃ」

職員の間にちょっとしたざわめきが起こる。
じいさんはさらに続ける。

「彼の行動はあくまで自己防衛の範疇じゃということも、五人を見れば一目瞭然。
誰一人として瀕死の重傷の者はおらんかった。
みな眠らされているだけで、怪我人は……一人おったが、きちんと止血されていた。
それも彼のローブでの。君は元々相手を傷つける気はなかった、

違うかね？
まあ、どのみち取調べはせんといかんがのう」

最後にそう聞かれ、俺はゆっくりとうなずいた。
誤解が解けてよかった。それも仙人のお墨付きである。

「ということは、今から取り調べるのはその手配犯の五人ということでいいですか？」

職員の中の一人が立ち上がって質問する。

「いや違う。彼らは薬で眠らされておる。しばらくは起きてこんじゃろ」

「では、一体誰ですか？」

じいさんは職員の中からある人物を指差した。
それは俺にとって見覚えのある顔、俺を連行したときの、あの第三警邏隊隊長。

「あいつじゃ」

「お、俺ですか！？」

隊長は驚きのあまり立ち上がり、それから抗議の表情を見せた。

「お前さんが彼を捕らえる前に事情を聞いてれば、
罪のない一般人にこんな迷惑を書けることもなかったじゃろう？
それに、五人の顔をしっかり見ていれば、手配中の人間だと一目で分かったところを、お前さんは確認したのか？
確認しなかったから、こういう事態になったのではないか？」

「それは……その……部下が確認したので……信頼しｔ……

「たわけ！！　それを職務怠慢というのじゃ！！
お前の隊はいつもいつも冤罪事件ばかり起こしよって、ちっとも成長せん！！」

おお……仙人がキレた……
俺のすぐ近くで怒鳴り散らすじいさんの迫力に、思わずびくついてしまった俺。
いやあ、このじいさん、見た目は仙人だが中身はまだまだ若々しい。ていうかさ……俺の顔に相当な量の仙人のツバがかかってるんだが。
仙人のツバに美顔効果があるならまだしも、ただの唾液だと言うから不快だ。
……何の効果があるにせよ不快には変わりないか。

「それは、部下の判断が……」

「お前はそうやって人のせいにするのが得意じゃのう！

前々から思っていたが、お前は上司としての責任能力に問題がある！！」

「……申し訳ございません」

「今回という今回はただじゃ済ませんぞい！！
わし独断でお前の処分が決められるなら、八割減給一年じゃ！！」

すると、眼鏡をかけた別の職員がすくっと立ち上がって言った。

「では、今の総合警邏隊長殿の提案に異議のあるものは挙手を願います」

え、えええっ！！
おいっ、ちょっ、今の仙人の発言は提案だったのか？
隊長の顔は真っ青に変色している。
この世界はゆったりしてていいじゃねえかとか思ってたが、やっぱりどこの世界も世知辛いんだな。
そして勇敢にも異議を唱えようとする者はいない。
総合警邏隊長という役職がどれぐらいの地位なのかは知らんが、相当な地位にあることは明白で、誰もそんな重鎮級の人間にたて突くなんざ怖くてできやしないだろう。

「では、ナクル第三警邏隊第６部隊長は今月から一年、８０％の減給処分ということでよろしいでしょうか」

俺は何も言わなかった。
挙手して被害者側の立場から今回だけは見逃してくれとも言えなくはなかったが、
なんというか、こいつが俺に対してした仕打ち、突き詰めて言えば飛べない俺をぶら下げて連行したことが、
俺にはどうも許せないというか、あの苦痛を許す気にはなれなかった。
隊員も隊員で俺のこと罵ってたし。

「では、ナクル第三警邏隊第６部隊長は減給処分ということで」

……考えれば考えるほど腹が立ってきた。やっぱ挙手する。

「あの、ちょっといいっすか？
ちょっと思ったんすけど、隊員達が俺を中傷した件については処分されないんすか？」

「中傷……？」

「はい。
顔は覚えてないんすけど、隊員の中に俺のことを外見だけで“厄災”呼ばわりした人がいるんすよ、
隊員のモラルの低下ってやつですかね？
これってやっぱ指導者の日頃からの管理に問題があると思うんすよ」

「なんと！　そのようなことまで！

ますます許しておけん！！もう、部隊長隊員全員解雇じゃ解雇！！」

よっ、出た解雇！！

人の不幸は蜜の味というが、これほどまでの優越感に浸ったのは久しぶりだね。

え？　ちょっと酷くねえかって？　別にいいじゃねえか。

だってよ、飛べない俺を吊るし上げたままの空中散歩（スカイウォーク）だぜ？

そんじょそこらの遊園地の爆走ジェットコースター（安全設計）の比じゃない高度を、

高速で、しかも縄一本で飛んでいくなかで、厄災だとかいろいろ罵倒されたわけで、

精神的苦痛というのも処分の計算に入れるのは普通だろ。

「ナクル第三警邏隊第６部隊長ならびに隊員全員を解雇処分にすることに異議のある方は挙手願います」

「……。」

「では、ナクル第三警邏隊第６部隊長ならびに隊員全員を解雇処分にするということで決定ですね」

「ち……チクショ――ッ！！」

眼鏡の職員に淡々と解雇処分を受けた隊長は、「これから妻子をどうやって養っていけばいいんだ！」と机を叩きながらわめく。

なかなかリアルな懺悔である。

リアルにリアルだというのもおかしな話だが。
しかし、懺悔の言葉の中に隊員を思いやるような言葉は隊長の口から欠片も出てこなかった。
まあ、今ここで解雇処分が決定されたのは恐らく隊長がとんでもないことをしない限り覆らないだろうが、
この隊長の言動を見ていると、今回の事件がなくとも近いうちに解雇されていただろうと俺は思った。
まあ、せいぜい職探しに明け暮れるこったな。

第5話－A17　Ｌｏｓｔ－311－　警邏隊に連行されました（後書き）

ちょっとコウは酷すぎたかな？
多分今までで一番黒くなってるんじゃないでしょうか……

第5話－A18　Lost－311－　屋敷へ

＊＊＊＊＊＊＊

また、ダメだったね。これで何人目だった？

……2836人目。

やっぱり、彼しかいないんじゃないかな――

＊＊＊＊＊＊＊

それから、俺は持っていた武器装備を返してもらい、リンとともに警邏隊本部を出た。
リンはまだフラフラの状態で、一応一人で歩けてはいるが、その足取りは俺の心を心なしか不安にさせる。

「今日はとんでもなく長い一日だったな」

俺は呟いて、空を見上げる。
空はまだ夜の闇に包まれているが、時間的には夜3時半辺りのだと俺の体内時計が告げている。

今晩の出来事に関しては、さほど後悔はしてない。
まあ、第6部隊の一斉解雇についてはちょっとやりすぎたかなとか、
今更になって思ってたりするのだが、あんときはあんときで半ば怒り心頭だったし、
なによりも過ぎてしまったことはどうしようもない。

「……あ」

そのまま家路につこうとしていた俺だったが、
周囲から一際そびえ立つ教会らしき建物を見てまだやることがあったことを思い出す。
そうだ、まだ屋敷に監禁されている人がいたんだった。
今から本部に戻って通報しておくべきかとも思ったのだが、
ここから戻るよりも、教会の方が近い。
監禁されている人のことを忘れるなんて、俺もなかなかの冷血だな、と自嘲する。

「リン、一人で、家に帰れるか？」

「……え？」

「いや、まだあいつらに監禁されている人がいる。
あの時俺が尋問した時に一人が吐いた。
教会を見て思い出したんだよ。あれはイーカ教会、だよな？」

「え、はい……」

俺が教会を指差すと、リンは答えた。

「やつらから情報を聞いたからには助けに行かにゃならん。
というか、最初からそうするつもりだったんだがな。
あいつら(警邏隊)が来なかったら」

「で、お前は明らかに体力が消耗してるし、
俺には寄り道をする分だけの体力があるようには見えない。
先に帰ってゆっくりしていた方がいいんじゃないか？」

俺がそういうと、リンは小刻みに首を横に振った。
それとこれとは関係ないが、どこからか食べ物のいい匂いがする。
あー、腹の虫が騒ぎだしてきた。夕べから何も食ってねえし。

「嫌、やめてください……一人にしないで」

「怖いのか？
やつらはしばらく拘留されて出てこないだろう。大丈夫だ」

「それでも……怖いです」

「もしかしたら俺が行く場所には残党がいるかもしれんぞ？
せっかくお前を助け出したのに、また危険に晒すことになりかねん。
そっちの方が問題じゃねえか？」

「……。」

「先に帰った方がいいと思うんだがな……」

「……コウさん、一緒にいてください。
誰か人がいないと、私、怖いんです」

「はあ～、参ったな……」

俺は手で髪の毛をくしゃくしゃにしながら、どうしたものかと辺りを見回す。
すると、暗闇の中にぽつりと、明かりがついている店を見つけた。
どうやらさっきの匂いはここの店から出ているらしい。

「リン、腹減ってないか？」

「食欲、ないです……」

「まあとりあえず、あの店で一旦休憩しよう。
ここから帰るにしても、結構な距離があるし、
助け出すにしても、腹が減っては戦はできぬというし、な？」

「……」

俺はリンの手を引き、その店に入って行った。

「いらっしゃい……常連、じゃないわね」

カウンター型の店内で店番をしていたのは、渋い顔のじいさんとその娘らしいひとだった。

娘といっても見た目三十代前半の成人で、まあ美人、というほどでもないが、不細工でもない。

髪は行動しやすいようにするためか、それとも職業柄、髪が食品につかないようにするためか、肩の辺りまでしかない。

背は、何か悔しいが俺よりもわずかに高い。

特徴というとそれぐらいで、言い方が悪いかもしれんが、どこにでもいそうな地味な人である。

店を見渡すと、俺達の他に二、三人、顔を真っ赤にしながら酒を片手に盛り上がっている男がいた。

どうやら居酒屋らしいが……気にしない。

「で、注文は決まった？」

「あー……、じゃあ店オススメのやつで。

それと、俺達、酒はムリなんで」

「居酒屋に来て酒を頼まないのはあたしとしてはどうかと思うんだけどね。

……まあ、分かったわ。……それと、ちゃんとお代は払ってよね？」

「大丈夫っすよ、何なら前払いでも」

俺は懐から金を出してその姉さんに３０００レルを渡した。
すると、姉さんは苦笑して、これはちょっと貰い過ぎかも、と言い、後ろを振り向いてお父さん、例のアレ二人前出して、とじいさんに言う。
あいよ、というしわがれた返事をしたじいさんは、奥の厨房へ入って行った。

「それにしても、こんな時間帯に外をうろつくなんて、どうしたの？」

「まあ、ちょっと事件がありましてね」

事件？と姉さんは言いかけ、咳き込んだ。

「コホッ――ごめんなさいね、ちょっとまだ風邪が治ってないみたい」

「風邪っすか」

「ええ、まあちょっとね。
ここのところ体調が悪くてね、今日の夕方までは寝てたんだけど。
子供達から頑張ってって、最近できたっていう花屋まで行ってあたしのために花買ってきたのよ。
そんなのもらったらあたしも頑張らなきゃって」

「子供――」

俺の脳裏に浮かんだのは、今日の夕方花を買いに来たあのチビ二人。
確か、母親が風邪寝込んでいてとかなんとか言ってた気がする。
もしかしてその母親がこの人なのか？

「その子供って、これぐらいの身長で、姉と弟の二人だったりします？」

「えっ……まあ、そうだけど、どうしてそんなことを？」

「その花屋、恐らくウチの店っすね。
子供、知らない人に話し掛けるの、苦手なんじゃないっすか？」

「そうそう！人見知りが激しくて……ってちょっと待って、
もしかしてあなた、ちまたで噂の『羽無し』の人？」

「羽無し……まあ、そうっすけど……」

「そう、あなたが！
ウチの子が『羽無しの兄ちゃんの店で買ってきた』って、
それはもうニコニコしながら嬉しそうに言ってたのよ」

「ああ、そうっすか」

別に喜ばれるようなことをした覚えは特に……ない。
花のサービスぐらいしかしてねえし。
俺に興味を持って店に来たのか、それとも安いから店に来たのか……

真意は不明だがおそらく前者だろう。

「で、なんだっけ、事件？　詳しく聞かせてもらえるかしら？」

そう聞かれて俺は隣に座るリンに顔を向ける。
無表情に近い、暗い顔でぼんやりとカウンターを見つめている。
今俺が話すことでリンが体験した恐怖をフラッシュバックさせるのではないか。
どちらにしろ事件はリンにとっては衝撃的な出来事であり、今は彼女の気持ちを察するのが一番だろう。
そんなことを俺は思った。

「今は……その、ちょっと言えるような状態じゃないんで」

「そう」

姉さんは察したように何も言わず、はいお待たせ、と、
出来上がった料理を俺達の前に置いた。
出てきたのは居酒屋には不似合いな肉料理、何の肉かは知らないが、ステーキだった。

「肉料理……ですか」

「自慢じゃないけど、うちのお父さん、以前は有名な料理店の料理長をしていてね、

退職して料理長を後輩に任せてからは、ここでこんな風に居酒屋を始めたんだけど、
どうもあの頃作ってた料理が忘れられないみたいで。
今もこうやって要望があればこんなのも出してるのよ」

「へえ、そうなんすか。
ところで、これのお代はさっき払った分でまかなえますよね？」

「もちろん！　まだお釣りが出るわよ？」

「そうですか。ではでは、いただきます」

リンは姉さんからナイフとフォークを受け取りはしたものの、一向にそれを使う気配はない。
それを見て心配そうな顔をした姉さんがリンに話しかけるが、彼女ははうつむいたまま何も言わない。

「リン、食欲がなくとも一口は入るはずだ。
残した分は俺が食うから、手をつけな。夕べから何も食ってねえんだろ？」

「……。」

俺がリンの顔を覗き込むと、リンは泣いていた。
どうしてこんな時に泣くのかね、君は。
俺には全くもって女心というものが分からん。
事件は（監禁の件を除いては）一段落したし、隣には一応（弱小野

郎だが）俺がついてるし、
何も怖がることなんてないはずだ。
なのに、なぜ……
リンの声はすすり泣きから嗚咽に変わっていく。

「ち、ちょっと、いきなりどうしたの!?」

驚いた姉さんが声を上げ、近くで騒いでいた酒呑みの客もその声に驚き、視線をこっちによこす。

「ねえ、この子、どうしちゃったの?」

「さあ、何なんでしょう? 俺にも皆目見当が付かないっすよ……」

「おいおい兄ちゃん、そんな若い娘を泣かすなんて罪な野郎だな」

「黙らっしゃいっ!!」

野次を入れてきた酒呑みの客に姉さんがぴしゃりと、まるで母親が子供を叱るように言う。

「ねえ、今回の“事件”っていうの、やっぱり教えてもらえないかしら?

もしかしたら、彼女の理解の手助けが出来るかもしれない」

「そうっすね……話せば長くなるんすけど、いいっすか？」

「ええ、聞かせて」

それから俺は夕べから今までの出来事を、できるだけ詳細に、リンにも注意を払いながら説明した。
リンの帰りが遅いのを不審に思って捜しに出掛けたこと、
男五人組に追われていたリンを助け出したこと、
そして、俺が警邏隊に誤認逮捕されたこと――俺が見聞きしたことすべてだ。

「そう。それでそんなドロドロの服装をしてるのね」

「まあ、クサイ言い方っすけど、こうして無事にいられて、それが一番っすよ」

「あなた、見かけによらず勇敢なのね」

「いやいや、助け出すときも内心ビビって足ガクガクでチビりそうでしたからね」

「それでもあなたは立派よ、本当に。
もしそれがあたしとうちの夫だったら、多分尻尾を巻いて逃げてるんじゃないかしら？」

「いやいや、見た目によらず、ってこともあるっすよ。

――で、どうっすか、リンがなぜ泣いているのか、分かります？」

「ここに来て安心したんじゃない？　ほら、ここ明かりついてるし、人もいるし」

「ああ、そうかもしんないっすね」

「……それにしても、とうとう第６部隊は解雇になったのね」

「知ってるんすか？　第６部隊」

「ええ、この辺じゃ有名よ、“はやとちりの第６部隊”ってね。逮捕する人みんな事件とは関係のない無実の人間でね、それに隊長が事情をよく聞かずに連行しちゃうものだから、誤認逮捕して当然なんだけど。あんまりにもひどいから、そのうちやめさせられるって、噂になってたのよ」

「へえ」

俺はステーキを切り、口に運ぶ。

こうすれば、リンも食べてくれるのではないかと思ったからだ。

「そういえば、さっきのあなたの話を聞いてると、監禁されている人が残ってるんじゃないの？」

「え、あ、はい」

「どうするの？　警邏隊の人にはちゃんと言った？」

「それが、第６部隊の怒りで頭がいっぱいになっていて……
言うのを忘れてきてしまったんすよ。ハハッ、ホント、薄情な人間っすよね、俺」

「もう過ぎたことは仕方ないわ。で、どうするの？」

「俺が助けに行きます。なんか、やっぱ警邏隊に任せんのもしゃくですし」

「大丈夫？　あたしは我慢してでも警邏隊に頼んだ方がいいと思うんだけど」

「まあ、この事件に足を突っ込んだのは仕方ないことですし、
話は最後まで見届けたいじゃないっすか。多少面倒でも」

ここはめんどくさがりの俺の野次馬精神といったところか。
ふと横のリンを見ると、
食事には一切手をつけないまま、カウンターに伏して寝てしまっていた。
マジで女心って理解しがたいものだ。

「あらあら、寝ちゃったわね」

「参ったな……こんなとこで寝られちゃ、助けにも行かれねえじゃねえか」

「ところで、監禁されている人達って、確かイーカ教会の近くの屋敷って言ってたのよね？」

「え、はい。ここからどれぐらいの距離があるか、分かります？」

「ええ、あの辺りにある屋敷っていったら、多分廃屋敷の事だと思うんだけど」

「ちょっと、リンのこと見ててもらえないっすか？
このまま監禁された状態にしておくのもなんか後ろめたいっすし。
救助したらすぐ戻ってくるんで」

「ええ、いいわよ、勇者さん」

「いやいや、勇者だなんて……」

この人は俺の事をよいしょし過ぎだと、俺は心の中で思ったね。
俺は店の姉さんから屋敷の場所までの行き方を教えてもらうと、すぐに店を飛び出した。
なぜかは分からんが、心臓は高鳴り、足は本能的に移動手段に駆け足を要求している。

「帰ってきたら、好きなもの食わせてやるわよ～！」

後ろから店を飛び出してきたらしい姉さんの声が聞こえてきた。
空がしらみ始めている。夜明けは近い。
走れメ〇スのパロかよ、俺は。

いや、別に日が昇ったからってどうってこと……あるか。
店を開ける時間には家にいたい。
営業するにしても臨時休業するにしても、客に迷惑をかけるようじゃ評判がた落ちだ。
ビバ、世間体ってやつだ。

居酒屋の姉さんの教えられた通りに行くと、結構大きな屋敷にたどり着いた。
ここに、監禁されてる人がいるわけだな。

周囲は高い塀で囲まれており、正面出入口には鍵がかかっていた。
出入口の門は錆びていたが、鍵だけは不自然に新しい。
門の向こうには、昔は花壇だったんだろう、
今は雑草が生い茂る植え込みがあり、その奥に馬鹿みたいな大きさの3階建ての屋敷本体がある。

「はあ、いくか」

俺は筋肉痛の身体に鞭打って、思い切って一度にその門をよじ登った。
そもそもここのＩ　ｃａｎ　ｆｌｙ!!な人々は、いくらこんなに高い塀やら門をつけたって、
やすやすと上空から侵入できるわけで、こんなものを設置する理由が分からん。

門の頂上に上がったところで、足元を見下ろすと地面からかなり高いことにハッとする。
……下見るんじゃなかった。
やべ、落ちたらただじゃ済まねえぞ、これ。
まあ、あん時零雨と麗香がバスタブの中に作った、例の《世界の終焉を連想させるほど黒々とした穴》に飛び込んだ時に比べりゃ恐怖感は小さくはある。

門を降りる途中でバランスを崩して落ちそうになるというスリリングなイベントが起き、肝を冷やしたが、何とか持ちこたえて敷地内に潜入した。

「……こんな事するなんざ、ガラにもねえな、俺」

今や切り裂かれてずたずたになってしまったナイトローブのフードを被る。
周囲が次第に明るくなってきてるので、時間とともに迷彩効果は薄れていくだろう。

屋敷の建物の入口の扉は蹴破られており、既に役目を果たしていない扉が床に横たわっている。
とりあえず、特に苦労することもなくいとも簡単にエントランス（玄関）に潜入できた。
いくら空がしらんできているとはいえ、外はまだ暗く、屋敷の中は完全に暗闇が支配している。
ハハハ……まるでお化け屋敷だ。

「さてと……どうするかな」

いや、監禁されている人達を捜しに行くのは分かってる。
俺が言いたいのはどこから捜しに行こうかって意味だ。
もし俺があいつらなら……考えただけでヘドが出そうになる。
だが考えなければならない。
もし俺があいつらなら、どこに監禁するだろうか。

左右の俺の出来損ないの脳が議論した結果、導き出された答えは、
地下室だった。
考えた末の答えがが超古典的なんだが……
まず、監禁するなら窓のない部屋じゃないと逃げられる。
この時点で、一階はないと考えていい。
それから、屋根裏という答えも浮かんだが、
この世界の人間はファンタジックに空を飛ぶことが出来る。
地上からの高度は脱走防止の抑止力にはならない。
つうことは、残されるのは地下室だけ、ということになる。

ポッ、と手元に小さな火を魔法で起こさせると、エントランスの全
体像が浮かび上がる。
エントランスの両端には二階へと続く階段、正面には奥へと続くと
思われる通路。
エントランスを少し歩き回ると、燃料式のランタンが転がっている
のを発見したので、それに点火する。
さて、地下室へはどうやって行くのだろうか。
もっとも手っ取り早いのは、
今俺が立っている床に地質調査のボーリングよろしく穴を開けてし
まうことなのだが、
当然ながらドリル技は持ち合わせていないし、そんな珍技、習得し

たくもない。

とりあえず、地下に行くのにわざわざ二階に上がる必要があるなんてことはまずないだろうし、
行くとしたら正面の通路だな。うん。

剣を取り出し、構えながら中央の通路を進む。
もしかしたら屋敷にはあの五人の他に、逃走監視用に待機している敵がいるかもしれん。
いつでも戦闘に入れるようにしておく必要があるだろう。
だが、片手はランタン、もう片手は剣、と手が塞がってしまっている状態のため、
敵の存在に細心の注意を払いつつ、地下への通路を探らねばならない。

第5話－A19　Lost－311－　見張りの男

「……ふう、やっと見つけた」

地下への入口を探して迷宮のような屋敷を歩くこと約20分。
時計を持ってないから、どれぐらい経過したかは正確には分からん。
体内時計ではそれぐらいかなという感じであるが、
廊下の窓から見える外の景色を見れば、まあそれぐらいの時間が妥当だろう。

で、今俺の目の前には一階から下へと続く階段があるってわけだ。
この屋敷自体既に廃屋敷と化しているため、足元にホコリがかなり溜まっていて、
俺が歩くごとにそいつが舞い上がって、喉と鼻を過剰に刺激し、地味に俺を不快にさせた。

「さてと……行くかな」

やっぱ警邏隊に任せた方がら楽だったかなとか、今頃になって後悔している俺だが、
もうそれはいくらわめいても後の祭り。
ここまで来ちまったんだから仕方ない。

こんな所、用はさっさと済ませて出て行くべきだ。
ここに長時間いたら肺炎にでもかかりそうだし。
この世界の医療レベルがどれぐらいかは知らんが、とにかく病気に

なるのだけは避けたい。
薬屋の機能付きの花屋があるぐらいだから、ある程度医療系は発達していると見ていいが、
どこまで発達しているかは不明だ。
信頼してないわけじゃないが、安易にこの世界の医療に頼るわけにはいかない。

地下への階段に足を踏み入れると、
地面にホコリがより一層分厚く積まれているのが足元の感覚を伝ってよくわかる。
音を立てて、いるかもしれない見張り役に気づかれてしまわないように、
そっと下りるよう心掛けているのだが、この世界の靴底は木で出来ているため、
どうしてもコツコツと足音が鳴ってしまう。
隠密行動をするなら靴を脱いで移動する方がいいのは分かってはいる。
だが、この足元のホコリの貯まり具合を見ると、どうもそうする気が起きない。

階段を下り切った場所から見える地下通路は真っ暗闇で、ひんやりとしていた。
俺の目が読み取ることが出来る情報の範囲は、俺の手元にあるランタンの光の届く範囲までしかない。
通路がこの先どこまで続いているのか、どのような構造になっているのか、
先が見えないため全く見当が付かないが、
この様子を見ると、まず地下には誰もいなさそうだ。
誰もいない、というのは敵が、ということであって、監禁されてい

る人がいない、というわけじゃない。

「ここから先は少しぐらい気を抜いてもいいだろうな……」

あまり張り詰めすぎるとおかしくなりそうだ。
しばらく前に突き進んでみる。
というか、曲がり角も十字路とも遭遇することなく、
ただひたすらに真っすぐ延々と続く道を歩いているわけで、突き進む以外方法がないと言った方が正しい。
この地下構造を考えると、この通路は地下室への通路じゃないような気がする。
そうだな……これは屋敷本体とは別の建物に移動するための連絡通路か何かかもしれん。
誰が建てたかは知らんが、ごつい屋敷を建てるぐらいの財力のある人間であることは確かだ。
地上には花と緑の溢れる庭園を広げ、
屋敷と別の建物を繋ぐ通路は実用性を考え、
雨天時でも使用できるように地下に建設した、と考えるならばこの直線的地下通路も合点がいく。

コツコツと足音を響かせながら、
俺もこれぐらいの屋敷を建てるぐらいの巨額の資産を、
一度は手に入れてみたいものだ、などと敵がいないことをいいことに、
余裕しゃくしゃくで煩悩思考を巡らせていると、目の前に上へと続く階段が現れた。
後ろを振り返ってみると、俺が今まで歩いてきた道は暗闇へと続くばかりで、

下りてきた階段は当然だが見えるはずはない。

「ふう、終点か……」

一人になると独り言が増えるというが、それは間違いではないらしい。
現に俺はさっきからどうでもいい独り言を連発している。
階段を見上げると、どうやら階段の先は踊り場になっているようだ。

「うっし、行くぞ」

筋肉痛の身体に鞭打って、在庫僅少の精神力に火を付け、剣を持ち直す。
いや、俺みたいな凡人はこんなことするもんじゃないぜ、ホント。
体力的にも精神的にも疲弊するし、なによりもこんなことしても特に利益がない。
確かに周囲からは英雄扱いされたり、優遇されたりするかもしれんが、それは一時的な話。
国を滅亡の危機から救ったとか超人的偉業を成し遂げたなら話は別だが。
って、こんなことを考えてる俺って、相当現金な奴だな。いやらしい。

まあ一つだけ確かなことを言わせてもらえば、
こんなことをやっている俺はかなり運がいいからとんとん拍子で話が進んでいるわけで、

普通はこんなことしたら即敵に見つかって縛り上げられて拷問決定だ。
精神的に拷問をかけたいのならば相手を独房にぶち込んでおくのがいいらしいが……
って、なんか話がアヴナイ方向へ逸れたな。
うんちく話はさておき、まあ階段を上ろうじゃねえか。

「……。」

なぜか俺の踏み出そうと上げた一歩目の足が異様に重い。
心の奥底で、暗闇の中突然現れた階段という環境の変化に怯えて、これ以上先に進みたくないとでも思っているのだろうか。
ここまで来ちまったんだから進まねえと話も進まねえだろうが、俺。
こんな所まで来て怖くなって逃げ帰って来ましたとか、とんだ笑い者だ。
周囲からタマなし野郎と（実際のところそうなのだが）高い評価を受けること間違いなし。
誰も「助けに行こうと思っただけ立派ですよ」などと声をかける人はいないだろう。
何せ、自分からしゃしゃり出たんだからな。
あー、余計な意地を張らず、浩然たる態度を示して警邏隊に任せた方が良かったかもしれん。

重い一歩目を階段に乗せ、踏み締め、次の一歩を繰り出す。重い。
剣を持つ手に無駄な力が入る。
気休めにしかならないが、ふう、と小さくため息をついて気を落ち着かせる。
よくよく考えれば、俺って今、独房にぶち込まれるより辛い経験し

てねえか？
暗闇の中で単身、敵の敷地へ潜入し、監禁されている人を助け出す。
どっかのゲームでありそうなシチュエーションに置かれていながら、
正気を保っている俺は意外にもタフなのかもしれん。
……ただ単に疲労と緊張で心が麻痺してるだけ、ということも考えられるが。
もう一度ため息を吐いて、気を落ち着かせ、ゆっくりと階段を上っていく。

「……！！」

階段を登り切った俺の目の前に踊り場に置かれた木箱に座る一つの影を見つけ、ドキリ、と心臓が一段と高く鳴った。
うっわ、マジ危ねえ！！
見張りらしき男が寝てんじゃねえかよ！！
今のため息とか聞かれてたら、笑い事じゃ済まされねえぞ！
いやに体格のいい男の先には一つの鍵穴のついたドアがあり、男の腰にはいくつかの鍵がぶら下がっていた。

俺は階段を下りて一時撤退し、混乱しかけの脳を冷却させる。
落ち着け、まずあのドアの向こうには監禁されている例の七人がいると思って間違いない。
そしてあの男は脱走の見張り役、ということだ。
幸運にもあの監視役は寝てしまっている。
こういう時はやっぱ男の腰から鍵を盗んでそっと解錠して逃がす方法で……ってレベル高けえな、おい。
そんな作戦、男が相当鈍くねえと出来ねえぞ。

とりあえず、五人衆を倒したあの戦法を使うか。
例の首に睡眠薬を注射するやつ。
速攻でこっちから奇襲をかけりゃ、相手もなす術なし、というわけだ。
あん時は一度に複数人を相手にせにゃならんかったから速攻は失敗したが、
今回は一人、しかも相手は寝ているときたもんだ。
難易度は確実に下がっている。

そうとなれば早速準備だ。
剣を収納し、吹き矢に睡眠薬を仕込み、それを手に持つ。
吹き矢の針は五人衆と戦った時に使った使用済針だが何か？
バイオハザード？　んなこと知ったこっちゃねえ。
どうせこのあと御用になる訳だし、何かあったらどうにかしてもらえるだろ。
それより自分と監禁されている七人の身の安全の方が大事。

そっと階段を上り、男に近づく。
首に針を刺そうとしたときだった。

「ん……？　お前、誰だ？」

……普通に見つかった。
重たそうに目を開けた男に、俺は驚いて刺すタイミングを失ってしまった。
何という不運。俺には潜入能力みたいな特殊能力はないのかね？
存在感の薄い零雨ならたやすくミッション成功だったろう。

それよりもこの状況をどうするかだ。
男が針を見つける前に、さっと手を後ろに回す。

「え……あ、ああ、俺はコウっていうんだ。
レンからコレクションの七人を連れて来いって言われて来たんだが……」

咄嗟に思い付いた嘘。
五人衆の一人のレンの名前が出てきたのは本当に幸運だった。
男はレンという言葉を聞いて安心したらしく、親しげに話し掛けてきた。

「……新入りか？　俺の名前はアッシュ、よろしく頼むぜ？」

握手を求められ、利き手に持っていた針を背中で持ち替え、握手。
犯罪者相手に何やってんだ、俺。

「ああ、よろしく」

「お前、どうして俺達の仲間になったんだ？　親睦ついでに聞かせてくれよ。
俺はあれだ、遊びに明け暮れてたら偶然レンに会ってな、
『一対一で遊ぶのは飽きただろ？
俺ら、もっと楽しい遊びしてっから、お前も俺らの仲間になっちまいなよ。

生活も保障してやる』って言われて、入った」

「俺は……街でナンパしてたらレンに『面白いナンパをするやつだ』って気に入られて」

俺はどっちかというと硬派な方で、ナンパとは無縁の人生である。

「ハハハ、そうか、お前もレンか」

「それにしてもレンの奴、人使いが荒いのは相変わらずだな」

アッシュという男はそう言って笑った。
俺も笑っている顔を作ろうと表情筋を動かすが、笑っている顔が作れたかどうかは分からない。
だが、男はそんな俺の一時取り繕うための応急処置的な嘘を簡単に信用してくれたらしく、
うーん、と背中と翼を伸ばして身体をほぐすと、腰の鍵を持ち出し、それを鍵穴に突っ込んだ。
七人を出してくれるらしい。

俺は今まで円滑に物事を進めることができたことについては繰り返し強調しているが、
今回ばかりは俺一人ではうまく行くわけにはいかないことに気がついた。なにか？

ハッキリ言わせてもらおう。

俺はどうやってここまで来たのか、まったく覚えていない！

つまり、ここでアッシュから七人の被害者を救出することはできても、

地下通路を抜けた先にある迷宮屋敷から全員無事に脱出（エスケープ）・逃亡できるという確証は、ない。

今ここ俺の手中にある針でアッシュを刺してもいいのだが、

ここで倒してしまうと、この屋敷の構造を知っている唯一の情報源を断ってしまうことになる。

「おら、お前ら、レンがお呼びだ、ついて来い！！」

俺への態度とは打って変わって荒々しい口調で呼びかけるアッシュに、俺は思わずびくついた。

本性のチキンっぷりが一瞬あらわになった形だ。

ああ、あの屋敷のトイレ見つけたとき、ちゃんと用を足しときゃよかった……

「え……えっと……「ゴタゴタ言うな！！　全員だ全員！！　分かったらおとなしくついて来い！」」

アッシュの命令に従って、監禁部屋からおびえた格好で次々と寝起きの少女が出てくる。

こいつら、若い女性ばかり狙って……卑俗な野郎だ。

今目の前で起きている犯罪行為に目を背けたくなるが、

現在アッシュの仲間ということでやらせていただいている手前、そ

こら辺の感情は押し殺さねばならない。
監禁されていた少女達は皆顔立ちも良く、垢抜けてはいるが、服はいたる所にほつれがあり、
食事も十分に与えられていないためか、揃って顔がげっそりと痩せている。
出てくる少女達は皆見慣れない顔の俺を見つけると、寂しさと落胆、恐怖を含んだ、絶望的な表情を見せた。
その表情は俺の腐りかけの心を動かすには十分すぎた。

「コウだったか、行くぞ」

「お、おう……」

俺がランタン片手に隊列の先頭にいるアッシュの隣に立つと、彼は首を横に振った。

「そうか、新入りのお前には分からねえんだよな。
いいか、“コレクション”の輸送方法は、監視役が二人の場合は先頭に一人、しんがりに一人だ。
コレクションを挟んで脱走を防ぐ形だ、覚えておけ」

「は、はあ……」

「ま、今回は俺が先頭に立とう。
この敷地に詳しい先輩が誘導（エスコート）してやる」

アッシュはそういって、俺からランタンを取り上げると、俺を最後尾に並ばせた。
どうせエスコートしてくれるなら屋敷の出口までエスコートしてほしいものだ。

「で、コウ。レンはこいつらをどこに連れて行けと言った？」

あ……そこまで考えてなかった。
やべ、行き先はどこにすればいいのだろうか？

「え……えっと……確か……え、エントランス、だったかな？」

「エントランスだぁ？　……はあ、レンの考えてることはわかんねえよ」

「コレクションにもたまには日光浴させねえと病気になるとか……言ってた」

「……チッ、まあ、仕方ねえ、ボスの命令は絶対だからな」

「レンがボスだったんすか？」

「お前、ボスが誰かぐらい覚えておけよ……ったく」

「……すみません」

それからしばらくアッシュとギコチナイ会話をしながら屋敷の中を歩き回った。
だが俺が実は単身敵地に潜入した工作員だということがバレやしないかと、
そっちばかり気になって話の中身はほとんど上の空、何も聞いていないに等しかった。

「ほらよ、ここがエントランスだ」

そして気がつけば、エントランス。
アッシュは俺に背を向け、ドアを蹴り破られたエントランスから見える暁の空を眺めてため息をついている。

「こんな早朝にコレクションを集めて、レンは何しようってんだ、まったく。
……コウ、そういやレンたちはどこにいるんだ？
夕べから出て行ったっきり姿を見てないが……うぐっ！！」

ここまで来ればもうアッシュは用済み。よって、たった今俺が針を刺させてもらった。
アッシュの首筋に、プスッと睡眠薬。
それを見た少女達が口々に小さく悲鳴を上げた。
アッシュは背後から俺に押し倒されて地面に横たわって、俺をにらみ付ける。

「コウ……お前、裏切ったな……」

「まあな。素人にしちゃ、なかなかの名演技だったろ？
あ、あと、お前の今の質問、ここまで誘導してくれた礼に答えてやる。
お前の仲間は今、警邏隊に身柄拘束中だ。仲間の始末は俺が誠意を持ってやらせてもらったぜ」

「……始末？　……お前、何者だ？」

「うーん、強いて言わせてもらうならば、『しがない花屋の店員』ってとこだな」

こいつ、針を刺されて弱ってきたのは確かだが、なかなか眠りに落ちない。
刺すとこミスったか？
まあ、薬は効いてきてるみたいだし、しばらく放置すりゃ勝手に寝てくれるだろう。

「ああ、それとアッシュ。一つ忠告しておくことがある。
実はだな、悪いが今俺がお前に刺した針、これお前の仲間に刺した針の使い回しでね、
針に付いていた血液経由で感染症とかがうつったかも知れねえんだよな。
体調が悪くなったらそん時はそん時で。
一応俺から餞別（せんべつ）のエールを送っておく。『頑張れ』」

相手を倒したことで緊張がほぐれ、勝ち鬨を上げんと言わんばかりにやたらとアッシュのことをボロクソにけなした俺は、開放感に満ちていた。
ようやく大仕事が一段落したぜ。
改めてアッシュの顔を覗いてみると、それは既にただの寝顔と化している。
うし、あとは、脱出するだけだ。
俺は立ち上がって、呆然と立ち尽くしている少女達に目を向ける。
彼女達は俺を怖がってか、目を合わせようとしない。
こいつらにかかった恐怖による心理的束縛を開放してやらねえとな。

「さてと、お前達。
今の会話を聞いてくれたと思うが、監禁上等の変態野郎はこの通り、俺が始末させてもらった。
と、いうことはだ、もうお前らを監視する奴はもういねえってことだな。
そういうわけで、お前らは自由だ」

俺がそう告げると、少女達の顔がじわりじわりと実感を伴って明るくなっていく。

「でだ、ここで解散としてもいいんだが……腹へってねえか？
飯代は俺が奢ってやるつもりでいる。シャバの食いもんタダ食いしたい奴は付いて来い」

第5話－A19　Ｌｏｓｔ－311－　見張りの男（後書き）

？注意？
使用済みの注射針を使いまわすのは細菌感染などの恐れがあり、非常に危険です。
絶対にしないでください。

＊＊＊

現在、新第1話の作成を同時進行で行っているため、更新間隔が伸びることが予想されます。
しばらく更新がないように見えても、作者側では必死こいて執筆しているので、ご了承願います。
遅くとも、週に一度のペースで更新する予定です。

第5話－Ａ２０　Ｌｏｓｔ－３１１－　地獄の一丁目の酒場にて（前書き）

駆け込みでしたが……何とか週一ペースは保持できましたえ……アウトですか？
今回は物語のキーポイントになるお話ですが……
どうしてこうなった……

第5話－A20　Lost－311－　地獄の一丁目の酒場にて

「本当に帰ってくるとは思わなかったわ……」

リンのいる居酒屋に戻って姉さんに顔を引き攣り気味に言われたのがこの一言。
腹が減ったやつはついてこい、と言った俺だが、
やせ細った彼女達が腹をすかせてないはずもなく、
結局被害者七人全員と俺の計八人という大所帯で店に戻ってきた。
俺が最初に座っていたリンの横の席に座り、
少女達は希望の目を持ってその隣に並ぶようにしてカウンター席についた。

「そんじゃ姉さん、彼女達に何か飯を作ってくれないっすか？
監禁中まともに飯も食わせてもらえなかったらしくて。
ああ、メシ代は俺が出すんで」

俺は財布を取り出しておおざっぱに勘定をする。
俺とリンの二人の食事代は３０００レルでお釣りが来た。
同じ飯を食わせるとするなら、七人で１万１５００レル、か。
うっわ、高っけぇ……まあ、約束しちまった以上、出す以外に方法はないのだが。
とりあえず財布からそれだけ捻り出して姉さんに渡すと、「あんた、太っ腹だね」と笑われた。

「実のところ、ようやく店が軌道に乗り始めたかなっていう感じで、あんま財布に余裕はないんすけど……ね。
ここにいる彼女達も相当なダメージを受けてるはずですし、まあ、耐えたお祝い……っていっちゃアレっすけど、その、まあ、『よく頑張ったな』と」

「ふふ……やっぱ“勇者”は優しくないとね」

「“勇者”は大袈裟すぎっすよ、ホント。
俺はただ、警邏隊の仕事を勝手に横取りしただけっす」

「謙虚なのね、あなた」

微笑んで俺と少女の帰還を祝福する姉さんに、
謙虚なのは日本人の精神っすよ、と言いかけて、やめた。

危ねえ、自分の正体を言いふらすして、世界の秩序を崩すところだった。
ましてやここは神がすべてを創造した世界という設定らしいからな、ステージ25に住んでいた俺がここに存在しているという時点で、その設定を根本的に覆す矛盾が生じているわけで。
あまり世界には干渉しないほうが身のため。
本当のことを知るのは、俺の隣ですやすやと寝息を立てているリン一人だけで十分だ。

「お父さん、さっきの料理、7人前頼むわよ」

「あいよ！」

姉さんは厨房のじいさんに声をかけ、じいさんは威勢良く答えた。
こんな時間なのに、よくそんな体力が持つもんだ……

「あー！そういえば！！」

突然、声を張り上げた姉さんは、急に真剣な顔つきになって、じっと俺を見つめ始めた。

「な、なんすか、いきなり……」

「ねえ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど……勇者さん、いい？」

「“勇者”はくすぐったいのでコウって呼んでください」

「はいはい。……コウさん、あなた、この世界の人じゃないわね？」

「……。」

なぜだ、なぜ俺の正体がばれてる？
俺は姉さんに対してそれにまつわるような事は一言も言ってないはずだ。
一体何なんだよ、この世界の人は！！
リンといい、この姉さんといい、不可思議な現象が起きすぎだ。

この世界の人には超能力で俺の過去が分かるとかそんなんじゃねえよな？
というか、魔法書にもそんな能力があるという文献はなかった。
じゃあ、この姉さんは一体どうやって俺の正体を知った？
姉さんの「あなたこの世界の人じゃないわね」発言で、周囲の視線が一気に俺に集まる。

「ふふ……どうしてって顔してるわね。私の読みは当たったってことかしら？」

「……何で知ってるんすか？」

「彼女、リンさんだっけ？　彼女の寝言でね、分かったの。その話をする前に、神使様がお目覚めになったって話、知ってる？」

「いや、まったく。『お目覚めになった』ってことは、今まで寝てたんすか？」

「ええ、普通、神使様は神殿でお休みになられているの。何か、私達の安全に関わるような大事なことがあるときだけ、お目覚めになられて、私達のために動いてくださるの。最後に神使様がお目覚めになったのは今から大体１６０年ほど前の話ね。
確か、その時は魔獣の大量発生と隣国からの侵攻、それに農作物の不作が重なって、国が大混乱した時だったわ。
もっとも、私がまだ生まれてない頃の話だけどね」

「はあ……」

「あのお方は秘密主義な方だそうで、必要なこと以外何も言わないそうよ。

今回神使様がお目覚めになった詳しい理由は分からないの。

……いいえ、『分からなかった』、といったほうが今となっては正しいわね。

彼女、どうやら神使様と繋がっているみたい」

「リンが、ですか？」

確かにリンは神使に対する信仰心も厚い人だ。

だが、リンが神使と繋がっているなど、一体何を根拠に言っているのだろうか。

「そう。寝言にもまるで神使様と会話しているような発言が多々あったわ。

あなたがこの世界の人でないと分かったのは、『異世界人の彼は優しく、勇敢でした』という発言ね。

もちろん、夢は誰でも見るものだし、あたしにもそれがあなただという確証はなかった。

でも、あなたはさっき自分の名前を名乗ったわよね？『コウって呼んでください』って」

「ええ、言いました」

「彼女の寝言の中にも“コウ”の名前は何回も出てきてた。

あなたの口からそれを聞いたとき、確信したの。

ああ、あなたはは異世界人なんだって。
言われてみれば、神使様の加護（翼のない）を受けない人間なんているはずがない。
そんな人、物語の中にしか存在しない、空想上の人物だったから。
でも、実際にあなたは現れた。もう、誰がどう見てもあなたは異世界人だってことは分かるわ。
少なくとも私は、ね。
神使様がお目覚めになったのは、恐らくあなたが現れたからじゃないかしら？
今の時代、魔獣の大量発生も、隣国の侵攻もなければ、凶作でもない。
考えられるのは、あなたしかいないのよ」

姉さんがそこまで話したとき、リンが目覚めた。
半目を開けて眠そうな顔のリンは、完全に覚醒したわけではなさそうだ。
寝ぼけている、という状態だ。
姉さんはそんなリンを見て「起きた？」と微笑む。
俺の横にいる少女達の目は丸くなり、そしてじっと俺のことを見つめている。
はあ……神使がリンを通じて俺に接触してきている、か。
そう考えるならば、あのお悩み回答も合点が行きそうな気がする。
だが、神使は俺に接触してきて、一体何をしようとしているのだろうか？
……俺の行動を監視している？
もし俺が神使ならば世界の秩序を崩す危険のあるものが現れたら、その動向を監視するだろう。
俺はそれを崩さぬように注意は払ってはいるが、
もし俺がそんなことをせずに言いふらして回ったとすれば、俺は一

体どうなっていたのか。
ふう、世界の真実を教えてくれた零雨と麗香のおかげで命拾いしたってところか。
姉さんはカウンターにひじをついて、俺の近くに寄る。

「ねえ、教えて。あなたのもといた世界って、どんな世界……ああああっ！！」

突然、姉さんが頭を抱えて叫び声を上げ、床に倒れた。
それに呼応するかのように、リン以外の少女達も、今の話を聞いていた他の客達も、
一斉に叫び声を上げ、頭を抱えていすから転がり落ち、痛い、痛いと苦痛に顔を歪めながらのたうちまわりだした。
一体、何がどうなってんだよ！？
無事なのは俺とリンだけで、店内は壮絶な地獄絵図を描いている。
少女達の中には、あまりの激痛に金切り声を上げだすものも。

そんな、地獄の一丁目の酒場にて、寝ぼけた顔のリンが低い声で小さく放った一言。

「……知りすぎ。」

その口調、雰囲気は、正にあの戦慄のお悩み回答のときのリンと全く一緒だった。
というか、俺疲れてんのにこんなことが立て続けに起きるとかハッキリ言わせてもらう！

これは拷問だ！

「おいリン！　お前、何をした！？　何をしてるのかは知らんが、今すぐやめろ！！」

俺はリンの方を掴んで揺さぶる。

少女の悲鳴が頭痛に変換されて、俺にも苦痛を与え始めた。

俺の今の発言がおかしいのは頭では理解できているが、

実際、こんな状況を作り出したのは、俺にはリン以外に何も考えられない。

「私、リンじゃない」

「じゃあお前は神使か？　神使だな？　お前、人を守る役目背負っておいて、なに苦痛与えてんだ！」

寝起きのリンの顔がフフッと笑って、俺に手を伸ばし、頬を触ってきた。

こいつは一体何を考えているのか、俺は全く理解できない。

全身に鳥肌が立っている。

「優しい人……」

リンが、怖い。

神使が、怖い。

第5話－Ａ２０　Ｌｏｓｔ－３１１－　地獄の一丁目の酒場にて（後書き）

現在、第1話の再構成も同時に進めておりますが、
第1話－1の前書きにて、再構成の進捗状況を掲載することにしました。
一点集中型の私には同時進行はなかなか難しいですが、頑張って書いていきます！

第5話－Ａ２１　Ｌｏｓｔ－３１１－　今されたキスは誰のキス？（前書き）

ここでちょっとしたフラグが発生したりしなかったり……
とりあえず週１更新のペースは守られていますね（危なっかしい）

第5話－A21　Lost－311－　今されたキスは誰のキス？

リンの身体を乗っ取った神使とおぼしき人物は、
周囲の叫びがまるで聞こえていないかのように平然としている。
俺には神使がどういう意図を持って行動しているのか、理解に苦しんでいる。
というか、俺も疲れてんだ……事の展開が早過ぎる。
少しぐらい休息を挟んでくれたっていいだろう？
この地獄の様相を呈した居酒屋で、俺は一体何をすればいいのか。
どんな行動をすればこの状態を脱出できるのか。
……分からん。
ただ一つ確かな事は、俺はなす術もなくうろたえているという事だけだ。

「優しい人……特別に教えてあげる、彼女の気持ち」

リンは俺の頬に触れていた手をゆっくりと首筋へと回し、ぐい、と俺を引き寄せた。
その直後、俺のの頬に柔らかくて温かい何かが触れた。
それは紛れも無く、キス。
ていうかファーストキス持っていかれ……
いや、確か俺のファーストキスの相手は黒板だったか……
音楽祭の記憶が一瞬走馬灯のように浮かんだが、今はそれどころじゃねえ、と頭を振った。

「神使さんよ……もう、人を苦しめさせないでくれ。

俺が悪かった。俺がリンに自分の正体を言わなけりゃ良かったんだろ？
言わなけりゃ、ここに居合わせた人を苦しめさせることはなかったんだろ？」

俺が正体をばらさなけりゃ、リンは神使と繋がることはなかったのではないか？
俺が異世界人だと言ったばかりに、
結果として姉さんやこの居酒屋に居合わせた人がこんなに苦しむことになったのではないか？
俺はリンの下で働くことになった時、
長い付き合いになるかもしれないから、
自分のことをよく知ってもらわにゃならんと思ってそのことを言った。
だが、神使にとって、その情報が広がるのは好ましくないことだった。
だから、リン以外の人物にその情報が広まった時、
神使はその情報を知った人物に、
これ以上情報が拡散しないよう、制裁の意味で苦痛を味わせているのではないだろうか。

「違う……知りすぎはよくない。
でも……無知もよくない。
私は……ただ、秩序を保っているだけ。
あなたは、優しい人。悪くない」

始めて神使がまともに喋った。

俺は頭痛に悶えていた人達の声が止んでいることに気がついた。
死んだのか？
いや、みな息はしている。生きている。

「神使、一体何をした？」

「記憶を消しただけ。他には何もしていない」

「記憶を……消す？」

「知ってしまっても、忘れてしまえば知らないも同じ。
人間を見守るのが、私の仕事。必要になれば手を出す。ただそれだけ」

「……。」

「仕事は終わった。身体は“彼女”に返す。彼女に伝えて。『ありがとう』」

その途端、リンのバランスが崩れ、椅子から落ちそうになる。
俺はあわてて身体を支える。
……ったく、神使はただ仕事をしに来ただけだったのかよ。
というか、借りたならきちんと元に戻すとかして、きっちり後始末ぐらいしてから帰れっての……
リンは、寝息を立てていた。
俺はリンが起きる前に寝ていたように、カウンターに伏せさせた。

「……あれ？」

姉さんが起き上がった。

「なんであたし、こんなとこで寝てたんだろう？　って、お客さん！？」

姉さんは床に倒れている客を見るやいなや、
大声を上げてカウンターを飛び越え、その客達の安否確認を始める。

「全員大丈夫みたいだけど……ちょっとあんた、うちの店で何があったの？」

姉さんが俺に向かって緊迫した様子で俺に聞く。
これが神使の仕業だとは……言わない方がいいだろう。
それを言ってまたリンが「知りすぎ」とか言って起き上がってきたら洒落にもならん。

「さあ……俺も気がついたら床に倒れていて――何が起きたのかさっぱりっすね」

「そうなの……
ああ、なんかちょっと頭が痛いわ……やっぱり風邪かしら？」

姉さんは手を額に当てて、熱はないみたいね、と言う。
それから七人の少女をはじめとする客達が続々と起き上がり、同様に軽い頭痛を訴えた。
まあ、殺されなかっただけマシか。
しばらくはなぜ床に倒れ伏していたのか、みな不思議そうにしていたが、
この店の中にその答えを知る者がいないと分かると、店内は再び賑わいを見せはじめた。

「姉さん、一つ聞いていいっすか？」

「ん、何か？」

「俺の“名前”、知ってますか？」

「いや、知らないわね。名乗られた覚えもないし……」

「姉さんは床に倒れる前の記憶、どこまで残ってます？」

「記憶？」

「ええ」

「えーっと、確か――あなたが帰ってきて、
お父さんに料理7人前を頼んだところまでは覚えてるけど、
そこから先は全く覚えてないわね」

「そうですか、やっぱり」

「それがどうかした？」

「い、いや、なんでもないっす。
ただ、俺も姉さんと同じところで記憶が途切れてたので、不思議だな～なんて」

「そう……」

姉さんはいったい誰の仕業かしらと首を傾げた。
まあ、考えるだけ無駄なのだが。
しばらくすると、例の料理７人前が出てきた。
カウンターに座る少女達の前にそれが置かれたわけだが、
誰一人としてそれに手を付けず、
その代わりに俺の様子をうかがっている。

「ん、どうした？
早く食わねえと、冷めちまうぞ」

「本当に、いいんですか？」

少女の一人が申し訳なさそうに聞く。
それはほかの６人の気持ちを代弁したものでもあるのだろう。

「遠慮はいらねえから、さっさと食っちまいな。腹減ってんだろ？」

そう言うと、ゆっくりと手にナイフとフォークを手に持って、料理をそっと口に運ぶ。
一口。もう一口。またもう一口。
食べるのに比例して、少女達の目に涙が浮かんできていた。
よほどつらい思いをしてきたことが、それを見れば一目でわかった。
いや、マジでよく耐えたもんだよ。
女は強いというが、それは間違いではなさそうだ。

……さてと、そろそろ俺は帰らにゃならんな。
花屋のこともあるし。
結局リンは食事は食べずじまいになってしまったが、それは仕方ないだろう。

「姉さん、ご馳走様でした」

「あら、もう出ていくの？」

姉さんは食事中の少女たちを見ながら答えた。
その寂しげな目線を見ていると、少女だからとか、そういうやましいのは抜きにして、
やっぱりこのまま放っておくのはどうかと思った。

「そうっすね、自分の都合を優先するのは無責任っすよね……
やっぱ、最後まで見届けることにします」

「その方がいいと思うわ」

彼女達全員の食事が終わると、
俺はリンをまた姉さんに預けて、彼女達を連れて警邏隊本部へと向かうことにした。
俺は本部へ行くのは面倒くさいし、
何より誤認逮捕されたこともあって、気乗りしなかったが、
警邏隊も彼女達から聞きたいことがあるはずで、というか事情を聞かなきゃならない。
そういうこともあるし、それに彼女達のうち誰一人として警邏隊本部の場所を知らないということも、
俺が渋々警邏隊本部へと足を運ぶ理由にもなった。
はあ、マジ疲れる。
やっぱ余計なことには首を突っ込まないほうが良かったぜ……ホント。

そういえば、神使が言っていた“俺に好意を寄せている彼女”って、結局誰？
俺は警邏隊本部への道を少女7人の隊列の先頭に立って誘導しながら考える。
脳内に該当する人物はいないのだが……
同じことをされた時、
世の中には該当する人物が多すぎて判らない奴もいるんだよな、多分。
あー、羨ましい。俺には一生縁のない話だろうけどな。
で、俺に好意を寄せている人物とやらは一体誰だ？
俺も男である以上、そういう恋愛話には多少なりとも、いや、正直ものすごく興味がある。
他人の話なら誰だろな、ぐらいの軽いノリで聞き流すこともできる

のだろうが、
俺のこととなると話は別ってもんだ。
自分の好意を寄せている人物がいて、それが全く気にならない奴がいたとしたら、
そいつはよっぽどモテ過ぎていて、そういうのは「初心的な感覚」でしかないのだろう。
……なんか考えるだけで腹が立ってきた。
世の男性諸君は俺のこの心情をを分かってもらえるものだと信じている。

まあ、好意を寄せているということは相手は俺の顔を知っているわけで、
そう考えると人物は自然に限られてくる。
見ず知らずの女性が俺に好意を持っているとも考えることができるが、
そんなことを考えていたのではキリがない。
該当しそうな人物を洗い出してみよう。

俺に高価な魔法書をくれた書物屋のおばさん。
……これはさすがに年齢差がありすぎる。俺の年齢差フィルターによって一発で除外。
あのおばさんが俺に恋愛感情を抱いていると、
おばさんには済まないが、想像するだけでおぞましい。

では、今俺が誘導している7人の少女のうちの誰かなのか？
ううむ……彼女らとは会って間もない。一目惚れの可能性もないわけではない。
だが、人間は第一印象は出会った時のほんの2，3秒という一瞬のうちで決まってしまい、
それを覆すには時間がかかるという。

元いた世界の学者らが発見したこの理論がこの世界でも通用するかは分からないが、
もし通用すると考えると、
彼女達との出会いは、俺が「彼女達に危害を加える側」の人物として演じていた時である。
そうすると彼女らの持つ俺の第一印象は当然「危険人物」であり、
彼女達の頭では俺のそれが演技だったと分かっていても、その印象が簡単に書き換えられることはない。
もしかしたら、彼女達の中には、自分には分からない深層心理の中でという恐怖心を持っているかもしれん。
「今誘導して歩いているのも演技で、
私達を目的地とは違うどこか別の場所に誘導して危害を加えるかもしれない」
というか、第一印象がそんなものだから、理屈的にはそうなってもおかしくはない。
つまり、短時間で俺に好意を持つためには、第一印象が好印象でなければならない。
この理屈からいくと、
今俺の後ろについてきている少女達が俺に恋愛感情を抱くことはないと考えた方がいい。
当然だ。

この二つの条件をクリアしてそうな人物に居酒屋の姉さんが挙げられるが、彼女は既婚者で子供も二人いる。
俺に恋愛感情を抱いていたとしても、そういう不純な愛はお断りさせていただく。
結婚したからには夫一筋で生きていてほしい。

そういや、この世界（エリア311）に来て出来た親しい人物って言ったら、リンしかいない。

ということは、まさかリン！？
い、いやぁ、まさかそりゃないぜ。
リンは俺を居候させている所謂(いわゆる)大家であって、俺の雇い主でもある。
まさかリンが俺に好意を寄せることなぞあり得ん。
じゃあ、誰？
リンを除外して考えようとすると、該当人物がいなくなっちまうから困る。
……やはりリンしかいないのか。
リンが俺のことをそう思っていたとは……意外だ。

警邏隊の本部の建物前に到着した頃には、
太陽が明るく地面を照り付け、通りに人もちらほら見えるようになってきていた。
遠くのイーカ教会の塔の上部に備え付けられた大時計（こんなところに時計があるとは知らなかった）は、
午前7時を知らせている。

「それじゃ、俺はここまで送ったわけだし、あとは警邏隊の指示に従って行動してくれ」

「あの……本当に、ありがとうございました」

少女の一人がそう言って頭を下げると、それにつられるようにして全員が頭を下げた。
まあ、くれぐれも出頭と勘違いされて誤認逮捕されないように気を付けな。
そんな勘違いするような目と耳が節穴の警邏隊員はおおかた解雇されたと思うが。

少女たちが警邏隊本部の建物へと入っていったのを見届けると、俺は居酒屋へと足を向けた。

第5話－A22　Lost－311－「疲労」との戦い

「おかえり。うふふ、何かと忙しいわね、あなた」

「人生で最も疲れたといっても過言じゃないっすね」

「あたしも、長年居酒屋やってて明け方まで延長して営業したのは初めてだわ。
　全部あんたのせいよ？」

居酒屋に戻ってくるなり、姉さんにそう言って笑われた。
店内を見渡すと、ほかの客は全員帰ってしまったらしく、店の中はがらんとしていた。
なんか、姉さんと厨房にいるじいさんには悪いな、なんか巻き込んじまって。
というかあまり面倒事に巻き込まないでくれと常日頃から思っている俺が……
最低だよ、まったく。

「もうクタクタ。
　みんな気が付いたら床に倒れてるやら、
営業時間の大延長やら、勇者さんの登場やらで、また風邪をこじらせちゃいそう。
　事件も一段落したみたいだし、
今日はこの辺で店じまいにしたいんだけど、そこの眠り姫様がね……」

さて眠り姫こと、リンはカウンターに突っ伏して、すやすやと寝息を立て続けていた。

「おいリン、起きろ、閉店の時間だとさ」

「……」

「リン！！　グッモーニーング！！　朝だ！　起きろ！」

「……」

俺がいくらリンを揺すりながら起こそうと声をかけても起きてこない。
姉さんもリンを起こそうといろいろ声をかけてくれるのだが……反応なし。
これは困った。
……最終手段、「耳元でビックボイス」を使う他ない。

「リン！！
グッモォォォォニィィィィング！！　コォォォォケコッコォォォォォオオ！！」

「ちょっと、あんた、頭大丈夫！？」

「ハァ、ハァ……大丈夫っすよ……俺は至って正常です」

姉さんに俺の思考回路を心配されるほどの迫真のニワトリの演技にも関わらず、
一向に起きる気配なし。
だがな、普通コケコッコーっていう鳴き声はニワトリだというのが常識……
まさか、この世界にはニワトリはいない？
だとすると、今の「コケコッコー」は、
姉さんにはただの意味不明な奇声にしか聞こえなかったということに……
なんかいろいろとやっちまったな、俺。

「困ったねえ……あたしも長年この店やってきてるから、
閉店まで寝てしまう客はそれなりに対処してきたし、
起こすのには自信があるつもりなんだけど……
耳元で大声を出されても起きないほどに深く眠っちゃった客には、
申し訳ないとは思いつつだけど、
調理器具で頭をガツンと、文字通り叩き起こしてるのよね、普段は。
でも、今回はこの子がずっと命からがら逃げ回ってたってことも知っちゃったし、
どうも叩き起こす気が起きないのよね……
なんか、起こすのが申し訳ないというか、なんというか――
そっとしてあげなきゃいけないような、そんな気がするのよね」

「でも、これ以上の営業の延長をするわけにもいかない」

「うん……困ったねえ」

あちらが立てばこちらが立たず……
これがいわゆる二重拘束（ダブルバインド）とかいうやつか。
姉さんが腕組みをして唸っていると、奥の厨房からじいさんが出てきた。

「しばらくウチで寝かせておけ。
だがウチは居酒屋で宿屋をやってるわけじゃねえ。
気が済むまで寝て、起きたらとっとと帰ってもらう、それでいいんじゃねえか？」

うお……なかなか言葉使いの荒いじいさんですな。言ってることは優しいけど。
しかしこれ以上迷惑をかけるわけにもいかない。
薄々こうしにゃならん気はしていたが……仕方ない。

「もうこれ以上迷惑かけるわけにもいかないですし、もう“これ”は背負って帰ります」

「一晩中動き回って、そんな体力あるの？　ウチで休ましときなって」

「いや、ホントこれ以上手間をかけさせるのは気が引けるというか、俺が納得いかないんで」

俺の予想通り、姉さんは俺を引き留めに入ったが、丁重にお断りさ

せて戴いた。
寝ている人間を背負うのは生まれて初めてのことで、
途中でリンがカクン、と横に傾いて、
俺もろともバランスを崩してしまうのではないかという懸念も捨てきれないが、
その時はその時だ。
どうにでもなるさ。
姉さんとじいさんに手助けしてもらいながら、
カウンターで寝ているリンを何とか俺の背中に乗せることに成功した。
いや、力の抜けている人間を背負うって、結構難しいんだな、これが。
起きている人間なら手で落ちないようにしっかりつかまるのだが、
寝ている人間はそれがない。
少しでも体を後ろに傾けようものなら、簡単にひっくりかえってしまう。
いっそのことリンがバランスを崩さないように、
縄か何かで俺の体にくくりつけておこうかと思ったが、
人通りが増えてきた通りをその状態で歩くには恥ずかしすぎて、
実行する気にはなれなかった。

「なんか今回は色々と迷惑かけてすみませんでした」

「今度来るときは厄介ごとなしでお願いするわ」

「はい、そうします」

そういうわけで老人の如く腰をくの字に曲げた状態で挨拶をした俺

は、居酒屋を後にした。

朝のナクルの街は、いつもと変わらない、賑やかな日常が広がっていた。

とはいっても、

俺はここに来てまだ1月ぐらいしか経ってないよそ者（ストレンジャー）だが。

食料品などを売る店など、一部の店はすでに商いを始め、

入荷したての新鮮で質のいい野菜や肉を手に入れようと、

ナクルの主婦たちが商品を手にとって品定めをし、

別のところでは店主と客の白熱した値引き交渉が行われている。

この世界には冷蔵庫に当たるものが存在しないため、

生ものはその日のうちに必要な分だけ買って、

その日のうちに使い尽くすという生活タイプが主流のようだ。

だから買ったはいいが、食材に使わず腐らせてしまう、なんてことはあまりないらしい。

もちろん、万一のための保存食は各家庭で常備してあるが。

冷蔵技術が未発達のため、

農産物、特に傷みやすい野菜・果物は消費地で栽培される方式が主流。

いわば元の世界で話題の「地産地消スタイル」が常識になっているわけだ。

また、店頭には季節の旬の食品しか並ばない。

というか、それしか陳列できないといった方が正しいか。

元の世界で、旬の季節に関係なく食材が店頭に並べていたのは、

冷蔵と輸送手段の発達の賜物である。

その恩恵を当たり前のように享受してきた俺たちは（少なくとも俺は）、

どの食品がいつの季節が旬なのか、すべてを言い当てることはでき

ない。
今思い返せば、贅沢な弊害だ。
まあ、旬の時期に採れる食材が、
その他の時期に採れた食材より栄養価が高いことは義務教育で習ったと思うが。

後ろから甲高い声とともに誰かが駆け寄ってくるのが聞こえ、
足を止めて背後を振りかえると、お金の入った小袋を片手に鳴らしながら、
お使いを頼まれた、と小さな男の子が、
張り切りながら通りを滑走路代わりにして飛び去って（テイクオフして）いくのが見えた。
まだ飛べないのであろう弟と思わしき子供が空を舞う兄を見上げながら追いかけ、
前方不注意、買い物を済ませた主婦と激突して怒られる。
これには思わず笑ってしまった。

こんな光景を見てふと思ったのだが、
日本ではこのような自由と開放感のある朝はとっくに絶滅してしまったに等しい。
遅刻しないか時計を気にしながらすし詰めの満員電車に飛び乗り、
人波に流されながら目的地に急ぐようなせっかちな世の中に変わってしまった。
現代人として生まれた俺が知りもしない過去のことを持ち出して、
「昔はよかった」などと言うつもりは毛頭ないが、
社会の進化の方向がどこか間違っているのではないかと思うことはある。
最終的に人間を感情抜きで働く、
いわばロボットに仕立て上げようとしているのではないかと思えて

ならないわけだ。
ロボットみたいに働いてきて、死に際に満足した人生だったと言って死ねるだろうか？
こっちの世界の人間は、確かに腐った奴はいるが、多くの人が自分の仕事に誇りと楽しみを持って生きているように見える。
その点において、この世界の住人を羨ましく思う。

それにしても、さっきからリンを背負っていて感じていることなのだが、
リンがものすごく軽く感じる。
発泡スチロールを持ち上げたような、とまではいかないが、
１０才の子供を背負っているような、そんな感じ。
疲れで感覚がマヒしているだけかもしれないが、
気のせいだけで済ませるには引っかかることがある。
砂漠で遭遇した盗賊から逃れるために俺ごと空に飛翔したリンと、
本部まで空輸されたときに元警邏隊隊員に言われた共通の言葉。

それは、俺が「重い」ということだ。

俺は特別おデブなわけでも、背が高いわけでもない。
どこにでもいるただの中肉中背の男子である。
リンが軽く感じるということは、一体どういうことだろうか？
地球とこの星との重力の差があまりないことは、井戸水のくみ上げから分かっている。
水の重さが地球とあまり変わらないからだ。

本来ならば、背中に翼がついている分だけ重くなってもおかしくはない。

「翼……か」

そういえば、飛行機は重すぎるとなかなか飛んでくれないから、機体を軽い材質で作ってるというのを聞いたことがある。

もしかしてこれと同じ理由でリンが軽いのか？

……あり得る。

となると、この世界の住人と俺との体の構造は、違っているということになる。

翼のある時点で体の構造が違っているのは明らかなのだから、他の場所が違っていても何ら不思議ではない。

とまあ、俺なりの仮説を立てたのはいいが、それを証明する方法は俺にはない。

解体新書的な本が書物屋で販売されていれば、

それを買って確認することができるだろうが、

もしあったとしてもそんなグロ本、読みたくもない。

体の構造が違ってるのを知ったところで、

別に俺に何か変化があるわけでもなんでもないし、

ただのトリビアで終わってしまうのは分かりきっている。

知的好奇心の浅い俺にとっては、そんなことははっきり言ってどうでもいい。

そんなことを考えていると、リンと俺の家が見えてきた。

俺の家の前には、たくさんの人だかりができている。

花屋開店前はいつもこんな感じだから、別にどうってことはない。

ただ、今回は開店時間が大幅に遅れているので、

いつもの倍ぐらいの人が開店を待っていた。

……さて、どうしようか。
リンはこのまま寝てしまってしばらくは起きてこないだろうから、店は俺一人ですることになる。
でも俺ももう体力的に限界だし、店の仕事をきちんと最後までやり遂げる自信はない。
本日は臨時休業ということにしておこうかとも考えるが、客からすりゃ、散々待たされた挙句に臨時休業を告げられるのは怒りを覚えるに違いない。
今後のことを考えると、やっぱ俺一人で店をやらにゃならんのだろうな……きついが。

「ああ、お待たせしてすみません！　すぐ店を開けますんで！」

俺はそう叫んで客に伝え、力を振り絞って駆け足で店の裏口に回り、リンを背負ったまま裏口の鍵を曲芸的に開け、まずリンの部屋に向かった。
部屋には、ベッドが置いてある。
ベッドの上にリンを降ろしてそっと寝かせた。
疲れたらベッドで寝れるリンとは違い、疲れても床で雑魚寝するしかない俺は、
「金が溜まったらまず最初にベッドを買おう」と心に誓った。
床で寝てると体のあちこちが痛くなってくるし、疲れが癒された気がしないしな。

俺はボロボロに裂けたナイトローブを脱ぐ暇もなく、大急ぎで開店準備を始めた。
ローブは暇ができたらその時に脱ごう。
一晩寝てないせいで、頭の回転がものすごく遅くなっているのが自

分でも分かる。
何か特大のヘマをしてなけりゃいいが……
店の商品の陳列と数の最終確認を終え、何とか開店までこぎつけることができた。
店のシャッターを開けた瞬間、どやどやと客が流れ込み、すぐさま会計のカウンターに行列ができた。

「会計がスムーズに行えるよう、前もってお金の準備を、できるだけお釣りのない様にお願いします！」

後続の会計待ちの客に大声で伝えながら、
トロい脳みそに鞭打ち、会計処理を一つ一つ、ミスのないように注意して進めていく。

「あれ、ちょっとこれお釣りが多いんじゃない？」

「ああ、すみません！」

それでもやはりこんなミスが多発。
つり銭を間違えて多く渡してしまっても、
それを訂正してくれるこの街の人々は素晴らしい。
俺なら絶対「よっしゃ、ラッキー！」と思って持ち帰ってるね。

延々と同じ作業をくり返すが、
あとからあとから次々と客が入ってきて、なかなか順番待ちの列が減らない。

それどころか、かえって増えてきてしまい、
挙句の果てには順番待ちの列が店の外に飛び出してしまう始末。

「繁盛してるねえ」なんて、ある客から言われたが、今はそんなのちっとも嬉しくない。
その人には、「こっちは早く休みたいんだよ！」という本音を隠し、
「繁盛しすぎるのも考え物ですがね」と笑って返したが、
恐らく目しか笑ってなかったと思う。しかも目の下にクマができた状態で。

そろそろもう体力的にも精神的にもギブアップがかかりかけた頃に、
ようやく最後の順番待ちの客の会計が終わり、店内には数人の客を残すまでになった。
地獄の朝のラッシュがやっと終わったのである。
朝のラッシュと言っても、既に時刻はお昼前、腹の虫も鳴ってくる。
俺は店のカウンターの下に積んである無地の羊皮紙を一枚取り出した。
サイズは大体Ａ４ぐらい。
これは値札を作るのに使う紙で、
この羊皮紙をナイフで小さくカード状に切って、それに値段を書いて、商品に括り付ける。
今回はその紙に羽ペンで大きく、
「本日は昼までの営業です」と平仮名で書き、それを店の入り口に掲げた。
特別身体が強化されたわけでも、
特殊な力が備わったわけでもない俺のスペックは高くはない。
一日フルでの営業ははっきり言って無理、昼までがせいぜい俺が頑張れる限界だった。

最後の客の会計を済ませ、店の中に俺以外誰もいなくなったのを確認すると、
新しい客が入ってこないうちに、すぐさま店のシャッターを閉めた。

「あー……やっと終わった」

今日の売り上げの計算は――また今度でいい。
二階の自分の部屋に上がり、
暇ができたら脱ごうと思って脱ぎ忘れていたナイトローブを脱いで、
部屋の隅に放置された、この世界にとってはオーバーテクノロジーな代物、
つまり壊れたパソコンの上に投げ掛けた。

「ふう……」

特に意味のないため息をついて、木の板の上に寝転がると、すぐに睡魔が襲ってきた。
やっと休息ができる。
この疲れが取れるにはどれぐらいの睡眠時間が必要なのかは分からないが、
自分への褒美、好きなだけ寝させてもらおう。

第5話－A23　Ｌｏｓｔ－３１１－　コミカルストア（前書き）

投稿が遅くなって申し訳ないです。。。

第5話－A23　Lost－311－　コミカルストア

目が覚めたのは、それから大体六時間ほど後のことだった。
起き上がって周囲に目を向けると、部屋全体が窓から差し込む夕日で朱に染まっている。

「ふう、寝心地の悪さは相変わらずだな……」

床と接点になっていた肩と腰が痛む。
ベッドはまだ買えないにしても、どっかから干し草を貰ってきて、敷いてみたら少しは楽になれるかもしれんな、と思ったものの、
「街じゃ入手できんだろうな……干し草の需要なさそうだし」
と呟いて、結局諦める。

さて、起きたはいいが、やることがない。
今日の店の売り上げの集計をしなきゃならんのは分かっているが、今はそういう気分じゃない。
……そういえば、今日の夕飯はどうしようか？
ファンタジーな世界にはふさわしくない、実に家庭的に問題だが、腹が減っては戦はなんちゃら、かなり重要なことだったりする。
俺は今起きたところだが、
疲れが完全に抜け切っているわけではなく、正直なところまだ眠い。
しかしここで寝てしまうと、次起きるのはいつになるか分からない。
それに、俺は眠くもあるが空腹でもある。
この二つの原始的な欲求のどちらを優先すべきか。
このまま寝てしまっては、恐らく空腹感が邪魔をして熟睡は難しいだろう。

眠るなら快適に眠りたいものだ。

ここで飯を作ったことはないが、
台所に行けばもしかしたら似たような材料で何か料理を作れるかもしれん。
独り暮らしで培った料理の腕が鈍ってなけりゃいいが。

台所へ向かって何か使えそうな食材がないか、ありそうなところを適当に探ってみる。
しかし、出てきたのは使いかけのヨレヨレにしなびた2，3種の野菜と保存食のサンの実ぐらいで、
他にめぼしいものは見つからなかった。

しなびた野菜だけで料理できないことはないが――食中毒になりそうで怖い。
見た限り、これらは少なくとも三日以上常温で保存された無農薬野菜。
虫や雑菌が湧いていてもおかしくはない。

野菜はここに置いたままにしてても何の利益にもならずただ腐れるだけ。
勿体ないが、こいつはゴミ箱行きだろう。
そう思ってゴミ箱を探すが、
台所の木製のゴミ箱はすでに満タン山盛りになってしまっている。

「ゴミ捨てか……面倒くせえな」

そうそう、これはちょっとした豆知識なのだが、

元いた世界の中世ヨーロッパでは、そもそもゴミ箱がなかったらしい。
ではゴミはどう処理していたかというと、窓からポイ捨てしていたとか。
ポイ捨てをゴミ処理の方法というのかは少し怪しくはあるが、
とにかくちょっとしたゴミからトイレのブツまで何から何までポイ捨てしていたらしい。
中世ヨーロッパの時代にタイムスリップしたなら、
街中臭くて生活なんてやってられないだろう。

ともかく、ゴミ箱のゴミはいつか処理しなきゃならんのなら、
早いとこやっておいた方がいい。
ここにはゴミ袋という概念はない。
重いゴミ箱を抱え上げ、一階へ降り、裏口のドアを開け、表通りまで出る。
店の横に据わっている高さ１メートル、縦横１．５メートル蓋付きの箱を開け、
そこにゴミ箱のゴミと生ごみの野菜を流し込む。

この大きな箱は各家庭に一つはあるもので、
この箱にゴミを捨てると、行政指定の回収業者が回収してくれる。
この箱の横に小さな箱が据え付けてあり、
業者は回収を終えると、回収したごみの量を査定し、
ゴミが少なければ少ないほど高い額のお金がその小箱に入れられる仕組みになっている。
ゴミを減らす仕組みとして行政が始めたらしく、結構高い効果があるらしい。
小箱の中身を確認すると、５０レルが入っていたので、回収しておく。
空になったゴミ箱を持って二階の台所まで上り、元の場所に置く。

井戸水をくみ上げてその水で手を洗って一仕事完了。

さて、本題の食事なのだが、どうしたものか。
緊急用、旅の保存食であるサンの実を食べるわけにはいかない。
まずは食材の買い出しから始めるか。

「昨日、今日と出費がかさむな……」

俺は財布の残高を確認し、買い物できそうだということを確認する。
この世界で料理したことがないから、
どの食材がどんな味でどんな調理法が適しているのかが分からない。
料理本を買って、それを参考にしながら食材を買っていこう。
俺が一人暮らしを始めて、初料理に挑戦するときに参考にしたのは、
市販の料理本と、「ＱＰ３．５分クッキング」という中途ハンパな
題名のテレビ番組だった。
３．５分クッキングは毎日欠かさず録画して、
料理の手順に合わせて再生したり一時停止したりして一つ一つ確認
しながらやってた。
最近の３．５分クッキングは、
「これを冷蔵庫で一晩寝かせておきます」とか意味のわからんこと
を言い出して、
放送時間が３．５分なわけでもなければ料理が３．５分で出来るわ
けでもない、
形だけの番組になってしまったし、
挙句には解説者が「ここで赤ワインを少量加えます」と言い出す始
末。
赤ワインを料理に使うとか全然庶民的じゃないし、
そもそも未成年者には赤ワイン売ってくれねえし。

大体の料理は使えるものなのだが、そこらへんが残念だ。
そう思いながら階段を降りる。

「そういえば、リンはまだ寝てるのか？」

ふと気になって、裏口から出かけようとした足をリンの部屋へと向けた。
リンの部屋のドアをコンコン、とノックしてみる。
……返事がない。もう一度ノックしてみる。
……応答なし。

「リン？　起きてるか？」

「……」

「リン、起きてるなら返事をしてくれ、もしもーし」

「……」

「リン、入るぞ」

そっとドアを開けて中に入ると、リンはまだベッドの上で寝ていた。
リンが寝始めたのは昨夜の深夜からだから、
少なく見積もっても１４時間以上は連続で寝ている。
１４時間て、どんだけ寝るんだよ。
まあいい、こんだけ寝てりゃそのうち起きてくるだろうし、

自然と起きてくるまでこのままにしておくか。
俺は部屋のドアをそっと閉めて退室した。

裏口から外に出た俺は、まず第1ステップとして書物屋に向かうことにした。
書物屋とは、もちろんのあのおばさんの店のことだ。
高価な魔法書をタダで譲ってくれたんだから、小さくても恩返しにはなるだろう。
あの店は確か、こっちだったな。

しばらく歩き続けると、あの書物屋が見えてきた。
最初に会ったときは店に閑古鳥が鳴き、
通りで暇潰しに客引きをやっていたあのおばさんの姿はない。
今日はもしかして休みか？
店の前まで来ると、店はちゃんと営業していて、
おばさんは店の入り口の横の会計カウンターに座っていた。
中に入ると、数人の客が中で本を立ち読みしている。

「いらっしゃい」

おばさんは店に入ってきた俺を見つけると、声をかけてきてくれた。
どうやら顔を覚えていたらしい。

「この間はありがとうございました」

「どう？　あの本役に立ったかしら？」

「えーっと、まあ単純な魔法の一、二個は覚えましたけど、まだまだですね。
暇なときにちょくちょく読んでます」

「そう、それは良かった。
あの後ね、あなたの言う通り、本をジャンル別に整頓したんだけど、効果バツグンね。
見ての通り、結構お客さんが入ってきてくれて、大助かりよ」

「良かったじゃないっすか」

本をジャンル別に分別するのは基本中の基本だろーが、
という二度目のツッコミは心の中ですることにして、
料理本を探していることをおばさんに伝える。

「ああ、その本ならあっちよ」

おばさんはカウンターから見て店の右端よりの棚を指差した。
その棚の横には「料理・菓子」と平仮名で彫ってあった。

「わざわざ彫ったんすか……」

「ええ、恥ずかしながら私の字は汚くてお客さんには見せられないから、
知り合いの彫刻師に頼んでやってもらったの。なかなか立派な字でしょ？」

「まあ……そうっすね」

たった５０文字ちょっとの平仮名が下手って、それぐらい頑張って練習しろよ……

ひらがなカタカナ漢字合わせて数千文字を一つ一つ練習していくわけじゃねえんだから。

「それにしても、男の人が料理本を買いに来るなんて珍しいねえ。なに？　将来料理人でも目指すの？」

「いや、一人で料理ができるぐらいにはなりたいと思って。ほら、外食するより家で作ったほうが安上がりじゃないっすか」

「なるほど、分かってるわね」

そこに、一人の青年が３，４冊の本を抱えてカウンターまでやってきた。

おばさんはそれを受け取って会計を始めたので、俺は料理本をあさることにする。

「レスターの誰でもできる料理術」

「王宮料理の味を家庭で味わう」

「徹底解剖！　食材の秘密」

「子供に食べさせたい手作りお菓子」

「保存食を作るには」

「これでもう医者要らず！？　調味料の薬効と使い方」

参考になりそうな本が多数並んでいて、どれを買うかで迷いそうだ。
まあ、王宮料理についての本は食材が高そうなので除外対象ど真ん中だが。
お菓子作りなかなか面白そうではあるが、今回はそれが目的ではないのでこれも除外。

本棚を眺めながら、使えそうな本をパラパラと流し読みして吟味する作業をしていると、
なかなかインパクトの強い題名の書籍を発見。
その名は「出汁」。
そいつを手にとって読んでみると、ダシについて延々と語った本で、本の内容を一言で言うと確かに「出汁」なのだが、これでは少しわかりにくい。
分かりやすくまとめると、「いろんな食材でダシをとってみた」。
ありとあらゆる食材でダシをとってみて、その成果を淡々と載せている。
中には生肉をダシにとってみるという斬新な実験も載っている。
というか、それってただ肉を水に浸して茹で上げただけだろ。
だが、生肉でとった出汁を真剣に分析して結果を載せていることから、筆者は真剣らしい。
確かに、料理のダシのとり方は料理の味を決定づける重要なポイントの一つではあるが、
生肉をダシにとって料理が美味しく出来上がるかと聞けば、誰もが首を傾げるだろう。
というか本に「生肉は出汁を取るにはどうやら向いていないようだ」と書いてあるし。
こんなしょうもない事する暇があっって
他にためになりそうな実験は思いつかなかったのかね？
著者は相当なヒマ人であると見た。

まあとりあえず、レスターだかオイスターだか知らんが、
この「誰でもできる料理術」とかいう本を買ってみようか。
ざっと読んでみた感じ、これが俺のニーズに合ってるような気がする。
で、この本はいくらなのかと気になって値札を探す。
この店の本の値付け方は特徴的だ。
本の一番最初のページに書籍名と値段の書かれた値札を栞のように挟んでいる。
出汁とか保存食の本にはちゃんと正しく挟んであったのだが、
この本にはどこにも見当たらない。
知らないうちに落としちまったか？
足元を見ても、それらしきものは見当たらず、
もしや床と本棚の隙間に入り込んじまったか、と覗き込んでみる。
だがやっぱり見つからない。
値札がないといくらか分かんねえから、買うに買えねえじゃん。

「お兄さん、どうしたの？　落し物？」

土下座スタイルで覗き込んでいる俺の背後から突然おばさんの声が聞こえ、
特にやましいことはないが、本能的にぎくっと振り返る。
……みっともねえ姿を晒しちまった。
背後から見た俺の姿はケツを突き出し完全にバカ丸出しの格好。
この近くには人がいないからと思って油断した隙に――くそっ！

「何か本棚の下に入り込んじゃったの？」

「い、いや、あのですね、この本の値札がないもんですから、どっか近くに落ちてないかと」

しかも慌ててまるで何かを隠すかのような説明の仕方までする始末。
恥ずかしさを抑えながら、俺は立ち上がって一応その本をおばさんに渡す。
おばさんはその本をパラパラとめくって値札を探すが、やっぱり出てこない。

「整理したときにどこかに紛れ込んじゃったのかしら……」

本の表紙を見て題名を確認すると、
ちょっと待っててねと俺に言い残して店の奥の部屋へと消えて行った。
かと思うとすぐに戻ってきて、
あっちじゃなかった、とさっきのカウンターまで戻っていく。
コミカルな動きのおばさんである。

「そうそう、ここに置いてたのよね」

おばさんは、何やら書類を持ちだして何かを探し始めた。
おそらくあれは店の仕入れ値か何かを記した紙で、
あの本の仕入れ値を探して定価がいくらか計算するつもりなのだろう。

「あっ、あった、あった！　お兄さん、ちょっと来てちょうだい」

「見つかったんすか？」

なんか色々あったがようやく本が買えそうだ。
俺は懐の財布を手にかけた状態でおばさんに近寄る。

「えっと、仕入れ値が７５０レルだから、定価は９００レルね」

「９００っすね、分かりました」

ということで、いろいろありながらも本は購入することができた。
しかしまたなんで本を一冊買うのにわざわざ喜劇をやらなきゃならんのだ。
そりゃ、まあ人生常にシリアスモードじゃ面白くはないが。

第5話－A24　Lost－311－　タイムアウト

＊＊＊＊＊

「……プログラムの検証が終わった」

「じゃあ後は本番……かあ。
特殊な環境でもちゃんと機能してくれるかな……」

「……システム構造が予測できない以上……動作保障は出来ない。
それ以前に……到着前にファイヤーウォールやエラーで消滅する
……可能性も、ある」

「到着しても、コード復元をしてもらえるかも分からない――
やっぱり確率は……」

「……ゼロに非常に近い。
そもそもこの計画自体……仮定条件が多く……不確実。
“Ｊａｍｉｅ”の……痕跡をある程度辿るとはいえど……痕跡自
体も少ない。
そのうえ……実行はこちらの技術情報を漏らすに等しい。
このことを踏まえ……私は……計画中止を提案する」

＊＊＊＊＊

……で、本を買ったまではいい。
問題なのは店を出た時には空が真っ暗になっていたということだ。

それはどういうことかというと、食料品店のほとんどは既に売り切れ、
店じまいを始めているところだということだ。
哀しいかな食料保存技術が未発達であるが故に、
店もその日売る分しか仕入れない。
卸問屋は独自開発の食料保存設備を持ってるらしいが――
一般客には売ってくれないそうだ。

「こりゃ参ったな……」

明かりの灯った通りをあてもなく歩く俺。
どうにかして今日の晩飯を手に入れねえと、俺の腹が持たねえ。
とりあえずダメ元で近くにある食料品店に飛び込んでみる。

「あの……すみません」

「あ、悪いねえお兄ちゃん、今日分は売り切れだ」

俺に背を向けて売れ残った品物を整理している、
二十代ぐらいの若い店主らしき男に声をかけると、振り返りもせず
即答された。
いや、こうなることは最初から分かってたんだが……

「売れ残ったやつでいいので何か売ってくれないっすかね？」

「売れ残りつっても果物ぐらい、しか…ない……ぞ？」

男は振り返って俺を見ると、驚き入った顔をする。

ん？　何かあったのか？

俺も振り返って後方をみると、見たこともない巨大な怪物が――！

ということもなく、何もなかった。

通りは日が暮れてもまだ人通りは多く、俺の目に映るのは流れていく人だけだった。

うん。普通に。

「噂をすればなんとやら、まさか時の人がご来店なさるとは」

店主はまじまじと俺を観察するように視線をあちこちにやりながら近づいてくる。

「時の人……？　誰かと間違えてるんじゃないっすか？」

「いやいや、こんな目立つ外見だからな……羽無し、うん、間違いない」

店主は俺の背中を見て大きく頷いた。

「連続誘拐犯を単独で締め上げたんだって？

そんな大手柄な話、噂にならない方がおかしいってもんだ」

「……。」

「それに、締め上げた理由が連れの女の子が誘拐されそうになったかららしいじゃないか！
実際のところ、そうなのかい？」

「連れの女の子というより、俺の雇い主兼大家っすけど……」

「なんだ、付き合ってないのか？
でもあれだな、そんな勇敢な男と結婚すりゃあ、
（女の子からすれば）一生安全が保障されたようなもんだ。
女の子の両親も安心して嫁に出せるだろう。
あー、俺も彼女にそういうカッコイイところを見せ付けてやりたい……」

「はは……そうすか……」

俺の噂が広がっているという情報が得られたのはいいが、
なんかこの店主のスイッチが入っちまったらしく、俺そっちのけでもう喋る喋る。
とりあえずリンの家族は既に災害で他界している件については、
訂正するとまた話が長くなりそうなので黙っておこう。

「――で、どんな剣術使って相手を倒したのか、そこがずっと気になってるんだ。
師匠は誰？　噂じゃグランの弟子だと聞いたが、やっぱグランは厳しいのか？」

「いや、剣術とかそんな大した技は持ってないですし、師匠もいないっすよ？」

グランって誰だよ、こっちが聞きたい。

「へえ、じゃあどうやって複数相手に挑んだんだ？」

「ゲリラ戦法みたいな感じっすかね」

「げりら？」

あー、ゲリラって言葉がこの世界にはないのか……説明すんのだるいな。

こっちは早く晩飯にありつきたいってのに。

イラツキからか、足が少し震えているのだが、店主は気がついてない様子。

とりあえず相手方の聞きたいことはさっさと答えて、この場から離れよう。

「背後から不意打ちで一人ずつ倒していくんすよ。

一人倒したらすぐに身を隠して、相手に隙が出来たらそこでまた一人倒して身を隠す」

「なるほど、一人ずつ背後から斬っていくと……」

「いや、俺、人を攻撃するとかそういうのは嫌いなんで、
背後から睡眠薬を注射しただけっす。
途中、剣を抜く事態になってしまったんですけど、
最後は殺さずに注射で仕留めました」

「なるほど、注射とはなかなかの策士だな。
この話は知り合いの警邏隊員から聞いたんだが、
お前さん、今度その件で表彰されるかもしれないんだとさ。知ってたか？」

「表彰……？　いや、何にも聞いてないっすけど」

「そうか、なら早いうちから晴れ着を注文しておいた方がいいぞ。
羽無しの兄ちゃんの服となれば特注で時間がかかるだろうし。
ところで、兄ちゃんは出身はどこだい？　あまり見ない顔つきだけど」

「それは俺も知りたいっすよ」

「えっ、それは……どういうこと？」

「気がついたら砂漠に倒れていて、
そこを偶然通り掛かったリンに助けられたこと以前のことは全く覚えてないんすよ」

「つまり、記憶喪失？」

「恐らく」

店主は「そうか……」と同情するように顔を暗くした。
出身はどこと聞かれて一瞬焦ったが、
記憶喪失だということでなんとか質問をかわせた。
この店主は噂好きっぽいし、
俺が記憶喪失だと言ったことを他言することはほぼ間違いない。
話のつじつまを合わせるためにも、これからは質問されたらそういう設定でいこう。
神使さんよ、これでオッケーだよな?

「それにしても、いや、別に疑ってるわけじゃないんだが、
誘拐されそうになってるところをよく見つけたもんだな」

「夕方『買い物にいく』って言ったきり、深夜になっても帰って来なくて、
これはおかしいと思って探しに出掛けたんすよ。
探しに探して、もう諦めて帰ろうかという時に、
偶然リンが飛んで逃げているのを見つけたんです。
背後からは複数の影が追うのも見えて、瞬時にリンが危険だと思って。
見ての通り、俺は飛べないんで、地上を駆けながら追跡して」

「なるほど、その女の子はリンって言うんだな?」

「ええ。それで、途中でリンが力尽きて墜落してしまって、
墜ちた辺りを捜すと袋小路に逃げ込んだリンを見つけて――
そっからはさっき話したことがあって」

「注射でげりらしたんだな?」

店主のゲリラの発音が変で笑いそうになってしまったが、なんとか堪える。
ていうか「ゲリラする」って変に動詞化すんな、笑っちまうだろうが！
いかんいかん、ツボに嵌まった、考えるだけで笑っちまう！

「ええ……ゲリラし、ました」

「……なんか俺、面白いこと言ったか？　顔がにやけてる」

「いや……フフッ、こっちの話っす」

店主は怪訝そうに俺を見つめる。

「そうか？
それはまあいいとして、そのリンって女の子、夕方に買い物に出掛けたんだよな？
ていうことは、夕方から深夜までずっと逃げてたってことか」

「え？　まあ、そうなります……ね」

「女の子だから体力的にも不利なはずなのに、よくそんな長時間逃げられたものだ。
しかも複数の男相手に、だろ？」

「言われてみれば、確かにそうですね」

確かに、複数相手となれば、ただ追い掛けるだけでなく、
挟み撃ちなどの作戦行動を取られることも考えられる。
それらをすべてかわし切るには、
飛べない俺には飛ぶにはどれだけ体力が要るか分からないが、
相当な体力がいるのはこの店主が言うのだから間違いないだろう。
店主は腕組みをして店の天井を見上げた。

「うーん、もしかしたらそのリンって子は――」

「もしかしたら、何ですか？」

「……いや、独り言だ、気にしないでくれ」

「余計気になるじゃないっすか」

「いやいや、本当に気にしないでくれ」

店主は真顔でこれはただの推測だから、と押し通して教えてくれなかった。

「で、今更だけど、うちに残ってる売り物って言ったら果物ぐらいしかないよ？」

急に話を変えられた。

どーしても教える気はないらしい。
まあ、ようやく本題に戻ってくれたわけだし、わざわざこの話を引きずる理由はない。
このまま本題に戻ってしまおう。

店主は俺が脇に抱えている本を見つけると、
ちょっとそれ見せてくれ、とそれを取り上げた。

「……なるほど、もしかして晩飯の材料を買いに来たのか？」

「ええ、ただ、買う以前にみんな店じまいしてしまってるので……」

「確かに、もうこんな時間じゃ、晩飯作りの材料はどこも売り切れで買えんだろうな。
もう少し早く来ればなんとか買えたかもしれないが……」

そこで、タイミングがいいのか悪いのか、俺の腹がギュルル……と鳴った。
俺は恥ずかしくなって店主から視線を逸らす。

「……そういうことなら、円形広場に行ってこい。
あそこなら露店が立ち並んでるし、そこで何か買えばいい。
汚くてもうまい店が多いぞ」

「あ……はい、そうします。
……ありがとうございました」

俺は店主から本を返してもらい、半ば逃げるようにしてその店を去った。

畜生、なんで今日は何かと恥をかかなきゃならんのだ！

第5話－Ａ２５　Ｌｏｓｔ－３１１－　調理の際は台所から離れてはいけません

どうしてこうなった……

結局、この間財布を買った円形広場まで行って、
適当な露店でお好み焼きっぽいやつを二人前、合わせて７００レルを出して購入した。
広場から家までの道を歩きながら、一人反省会を開催中である。

「本は余計な出費だったか……」

なんか、わざわざ書物屋で本を買わなくとも別に良かったような気がしてきた。
距離はあるが広場まで歩いて行きゃ、既製品の晩飯が手に入ったわけで、
本代が９００レルと、晩飯代よりも高くついてしまったのが今回の反省点だな。

まあ、買っちまったものは仕方がない。
重要になってくるのは、買ってしまった本をどう活用していくかだ。
……といっても、料理本の活用方法はどう考えても
「それを使って料理する」の一択しかないから悩む必要は無しなんだが。

俺が抱えるお好み焼きっぽい晩飯（名前は忘れた）は、
安物の布でクレープを巻く紙と同じ要領で巻かれている。
買った時は鉄板の上でアツアツになってる出来立てを貰ったがために、
やけどしないようどう持ち帰るか悩んだものだが、
しだいに冷めてきてしまい、今じゃぬるま湯のような温度だ。
猫舌にはちょうどいい温度かもしれないが、

この冷め具合じゃ、家に戻った時には常温まで冷めちまってるかもしれんな。

そりゃ、このお好み焼きっぽい晩飯を俺の懐に入れて保温すりゃ、常温にはならないだろうが……

他人（ひと）の懐に入ってた飯を誰が食うかって話だ。

正確に覚えているかどうかは疑問だが、

確か有名な話の一つに、豊臣秀吉は織田信長の草履を、

冬場でも足が寒くならないようにと保温していたというものがある。

豊臣秀吉はそれで織田信長の信頼を得たとかいう話だが……

草履だったからまだ良かったものの、これが晩飯だったらどうなるだろうか？

ちょっと想像してみよう。

「おい、猿（豊臣秀吉）！　俺の飯はどこだ！？」

「はい、信長様がいつお召し上がりなられても温かい食事が出来るよう、

私が温めておりました」

「なん……だと！？」

「ですから、信長様がいつお召し上がりなられても温かい食事が出来るよう、

私が温めておりました」

「……キモい！」

うん、間違いない。
当時に「キモい」という単語があったかは別にして、キモがられること確実だね。
俺が信長なら草履でもキモいと言ったかもしれん気がしてきたが、とにかく食品は絶対ダメだ。
まあ、そんな頑張って保温しなくとも、
飯が家に帰って冷めてりゃ、台所でもう一回温め直したら済む話だし。

そういえば、中学時代にファンタジー系の小説にはまっていた時が一時期あったが、
なんというか、その、こういう「飯が冷めたら台所で温め直ししよう」みたいな、
現実味のある描写はなかったな。
俺みたいに変な空想ばっかり広げてる変人キャラもいなかったし。
自分で自分を変人というのはおかしいかもしれないが、
それはそういう剣と魔法と怪獣みたいな、
バリッバリのファンタジー系の物語にはそういうのは不要なキャラ、いたらおかしいだろ、ということで、
現実世界からリアルにファンタジーに飛ばされた俺に、
そういう物語の主人公は似合わないということだ。

ファンタジーな物語はたまには苦難もあるかもしれないが、
大低とんとん拍子で進んで行くものだ。
もし、ファンタジーに飛ばされた俺が主役の物語があるなら、
とんとん拍子で物語が進んでいるかと言うと、答えはＮＯ。
そういう物語は旅に出掛けていろんな場所を冒険するのが醍醐味であるのに対し、
俺はと聞かれれば地に足しっかり付けて、ちゃっかり花屋で仕事中。

んで、何か偉業でも成し遂げたかと聞かれれば、
今回の事件はある意味（事件に）巻き込まれる形で、
なんとか収束させることができただけで、あれを偉業とは言わない
……はず。
ましてやこんな世界で連続誘拐犯を締め上げたところでな……
ちょっと事件がありました、的なレベルでしかないだろうし。
そもそも相手の背後を狙い撃つなんざ、
剣で真っ向勝負がある意味お決まりの物語に於いては、俺の戦法は
邪道。

……ネガティブなことばっか考えてると、気分が落ちそうだ。
それに、一人反省会をやってたはずが、いつの間にやら話が脱線し
ちまってるし。

そしてそんな考え事に耽っているうち、
自分の家を通り過ぎてしまっているということに、
家三軒ほどオーバーランしたところで気がつく俺。

「はぁ、俺は一体何を考えてるんだ？」

自分の家を通過して、一体どこへ行くつもりだったのかと冗談交じ
りに問いかける。

「俺にはここしか居場所がねえってのに……」

裏口の鍵を開け、「リン、帰ってきたぞー」と呼んでみる。

声が届いていないのか、返事はない。
家の明かりは俺が出掛ける前に付けておいたから、真っ暗闇ということはない。
予想通り、すっかり冷め切ってしまった晩飯を温め直すため、とりあえず二階の台所に向かう。

かまどの燃え木に火を付ける。
火が十分燃え広がるまではしばらく時間がかかる。
その間にどの調理器具でこのお好み焼きっぽいやつを焼き直すか選定しておこう。
このフライパンに近いやつなら……ううっダメだ、生臭い。
リン、使ったらすぐ洗わねえと臭いが残るぞ……てかもう染み付いてるだろ、これ。
他に使えそうな器具……
この小さいフライパン……は、お好み焼きが入らねえ。
じゃあこの中華鍋っぽいやつで料理するか？
取っ手が金属製じゃ、これ扱いづらいよな……

ぬああっ！　電子レンジみたいな便利道具はねえのかっ！

半ばやけくそで台所の収納を探してみると、中型の鍋が見つかった。
取っ手は木製、扱いやすそうだ。

「なんか、もうこれ代用でよくね？」

買ってからまだ一度も使ったことがないのか、
火に当たったような跡はどこにも見受けられない。

「新品でも……まあ、いっか」

一度に二人分を焼けるほど大きくないから、
とりあえず一人分を入れ、かまどの上に置いて焼く。
その間に井戸の水を汲み上げ、別の小さめの鍋に流し込んで、
そいつもかまどの上に置いて加熱しておく。

数分後、程よく暖まったそいつを皿の上に移し替えて一丁上がり。
鍋で温め直したから取り出すには多少の工夫が必要だったが、
なんとか形を崩す事なく取り出せた。
二枚目も鍋に入れて温めておく。

暖まったコイツは俺が先に食ってもいいのだが、
食ってる途中でリンに会ったら……なんというか、その、気まずい。
お前だけ一人ちゃっかり飯食ってるんじゃねーよとか思われんの嫌だし。
二枚目を温めている間に、コイツをリンのところへ持って行こう。
さて、リンはまだ寝てるのか？　寝てるならさすがに寝過ぎというやつだろう。
そりゃ、俺はそこまで鬼畜じゃねえから、
起きたらさっさと仕事しろと言う気はねえけどさ、
目え開けてじっと安静にしておくぐらいにはなってもいいと思う。

リンの部屋の前で三回ノックしてリンを呼んでみる。

「おーい、晩飯買ってきたぞ～」

「……。」

「リ～ン！　起きてるか～？」

「……。」

……まだ寝てるのか？

「リン、部屋、入るぞ」

部屋のドアを開けると、部屋は真っ暗だった。
窓から星の光が部屋に差し込み、深青の色で部屋が染め上がっていた。
リンはベッドの上でまだ寝続けている。

「……やれやれ、寝る子は育つなんて言葉もあるが、
これはいくらなんでも寝過ぎというやつだろ……リン、起きろ」

何度も揺さぶってみるが、今だに起きる気配はなし。
……まあ、今起こしたところで夜は始まったばかり、
今起こして体内時計が狂って昼夜逆転の生活になっちまったらそれはそれで大変だろうし。
今晩は、今晩までは寝かせておいてもいいだろう。
もし翌朝になっても起きてこなかったら――その時はその時で考えよう。

しばらくそこでじっとリンを見ていたが、やっぱり起きてくる気配はない。
俺はリンの机の上に晩飯をそっと置いて……ん？
なんか焦げ臭い……って俺の晩飯！？

「うわあああああっ！　俺の晩飯がぁ～！」

部屋を飛び出し、
急いで台所まで戻った頃には時既に遅し、俺のメシが白煙を吹いてました。

「ちょ、俺のメシ……」

ってボーッとしてる場合じゃねえ！
かまどから熱々になった鍋を取って、一旦調理台の上に置いて冷やそう。

「熱っ！！」

やばい、取っ手が触れねえほど熱々に仕上がってる。
水を入れた方の鍋もグツグツと沸騰してるし、
ととと、とりあえず、えっと、あー、そうだ！
かまどの火を消すんだ！　うん、消火だ消火！
最高速で井戸水を引き上げ、かまどの中に直接水を流し込む。

ボウッ！　という音がして火柱が上がった。

ちくしょう、まだ消えねえ！

もう一回井戸水を汲んでかまどにぶち込む！

ボウッ！

てめえ火力強すぎだろ！　ていうかリンは普段どうやって消火してんだ？

料理云々の前にかまどもまともに扱えない俺って……

そうこうしている間に俺の晩飯から黒煙が！

ちょっタイム！　タイム！……っつってもやっぱり時は止まってくれるはずもなく。

井戸水で消火するにはかなり時間がかかりそうだ。

どうにかして一撃で消火できる方法は……

「そうか！　魔法という手があるじゃないか！」

台所を飛び出し、自室に置いてある魔法書を持ち出して、目的に合いそうな魔法を探してみる。

どれだ……どこに載ってる？　……あった！

「水召喚の魔法」と書いてあるページを発見。

ええっと、

紙に右図のような魔法陣を描いて水に浸し、二日ほど陰干しにしておく。

注意する点として、直射日光に曝さないように干すこと。

陰干しが終わったら完成。暗いところに保存しておくこと。

ってなんなんだこれは――！
魔法陣を描いた紙を陰干しって、おいおい洗濯物かよ！
てかそんな時間ねえ……

……
……
……ってちょっと待て。

『右図のような魔法陣を描く』ってことは、
魔法書の図をそのまま切り取ったら使えるんじゃねえのか？
陰干しに関しては、
書物屋の中で長期間本棚の隅に放置されてたわけだし、使えないこともないはず。

「高価な本だが……しかたあるまい」

本からその図だけをビリッと破り取って、次の説明を読む。

使用方法　術者の血で魔法陣に十字を切り、二つにちぎる。
どちらでもよいので破った紙の片方を出現させたい場所に置き、
もう片方をさらに二つにちぎると、水が召喚される。
必要な水量が確保できたら、四つ切りになった紙を
魔法陣の描いてある面を合わせると、そこで召喚は終了する。

水量は術者の所有する魔力に比例する。

えー、何これ血が要るのかよ……めんどくせえな。
まあ血はともかく、消火が優先事項だ。
台所まで戻って、包丁で指を切る。
指にじわっと血がにじんできた。これでいいだろう。

それで次はなんだ？
魔法陣に血で十字を切るんだったな……よし。
で、紙を二つにちぎって、片方を任意の場所に置く、と。
洋皮紙だから、ちぎるの結構力要るんだよな……よし、ちぎれた。
とりあえず、紙は井戸水を汲む木製バケツの底に置いておこう。
ここに置いときゃ、多少水が多めに出てもバケツだからある程度は溜められる。
あとはもう片方の紙をちぎるだけだ。

「よし、いくぞ……せいやっ！」

ビリッ……

……ありゃ、水が出てこねえや。失敗か？
バケツの中を覗いてみると、魔法陣からチョロチョロと水が沸き上がってはいる。

「これって成功か？　いや、水が出てるんだから成功、なんだよな……」

なんかショボすぎて話になんねえ。
やっぱ古すぎたらダメなのか～、と思いつつ、
バケツの紙を取り出そうとした時だった。

ズドドドドド――！

「おま、ちょ、出過ぎ！出過ぎ！」

バケツからものすごい量の水が水柱となって噴き上がり、
勢い余って天井に吹き付ける！
かまどごときの消火にこんなに水いらねーよ！！
台所が水浸しになるじゃねえか！

とりあえず、消火に必要な水は出てる。
バケツを持ち上げて脇に抱え、
消防士さながらのスタイルで水柱をかまどの中へと向ける。
水柱の噴き出す反動がものすごく重い。
反動で飛ばされそうだ。

ジュウウウ……という音も水の噴き出す音で掻き消されてしまったが、
とにかく消火は出来たようだ。

バキッ！

不穏な音が聞こえたと認識した瞬間、
背中に高圧を感じ、前方へ吹き飛ばされ、かまどに激突。

「ごぶっ！（なんだ！？）」

顔面に高圧の水がかかって息が……！
マジ死ぬ！　死ぬから！
台所で溺死とか洒落になんねえからマジで！

「ゲホッ、ゲホッ……ぷはあ、死ぬかと思った……」

なんとか水圧地獄を脱した俺の目に飛び込んできたのは、
底の抜けたバケツが地面に転がり、台所が水浸しの大惨事。
どうやら水流の反動に耐え切れなくなったバケツの底が抜け、
魔法陣を描いた紙が底板もろともペットボトルロケットの要領で後ろに吹き飛んだらしい。
で、前にいた俺がぶっ飛ばされた、と。
紙は底板と一緒に反対側の壁に張り付いて元気いっぱい放水中。

水の力は恐ろしや……
とにかく、もうこれ以上水は要らん。
四つ切りにした紙を合わせて召喚終了っと……

カランカラン、という音を立てて底板が床に落ち、召喚が終わった。

「台所どころか、俺のメシまで水浸しだ……」

あーあ、どうするかね、これ。
お好み焼きっぽい晩飯は黒コゲの水浸しでぐちゃぐちゃ、食えたもんじゃねえ。
台所は壁床天井びしょ濡れ、かまどの灰やら炭やらが水に溶けて床にぶちまけられてるし、
なにより井戸水を汲み上げるバケツを昇天させたとなれば、
リンに怒られること必至だな……
女を怒らせると怖いのはチカのおかげで痛い程よく分かってるし。

「とりあえず掃除だな……」

濡れた服を上だけ脱ぎ、掃除用具を探しに階下へ下りる。
やれやれ、今夜は長くなりそうだ。

第5話－A26　Lost－311－　雨の中で

翌朝。

水浸しになった台所の処理で深夜まで作業していた成果のかいあって、
なんとか台所の復旧が完了、
メシも食わず（正確には食えず）に眠りについた俺が起きたのは夜明け直前だった。
もうちょっと爆睡するかとも思ってたんだが……
体内時計はすっかり花屋営業仕様に切り替わってしまったらしい。

「……寒。」

ビショビショになった服を部屋干ししていたため、
寝るのは上半身裸という、なんともワイルドな格好。
別に筋トレとかしてないから、
残念ながら鍛え上げられた腹筋が見えるとかそういうことはない。
そもそも帰宅部所属だったしな。

……やっぱ零雨と麗香は俺のこと必死になって探してんのかな。
それともうあれか？　諦めに入っちまってるか？
どーだろーな？
彼女らがまだ俺を必要としているならそりゃ探すだろうが、
まあ俺じゃなくとも、
代わりになりそうなやつはちょいと探せばいくらでも出てくるだろうし、

（なんせ合格率２４％の試験、４人に１人受かるわけだし）
俺でないといけない理由もねえだろう。

ま、ここの管轄はＥＬＶＥＳであって、
零雨と麗香の管轄下じゃねえのは明らかだし、
万が一俺を探してたとしても、権限的にここまで捜索の目が到達することは
ほぼないと思っていい。

「さて、と。さっさと今日の営業の準備しねえとな」

起き上がって窓を開け、
眩しい朝日を身に浴び――ることは、どうやら今日は無理らしい。

「……今日は雨か」

昨夜寝る前までは綺麗な夜空が広がっていたのだが。
まあ、雨はちゃんと降らねえと植物が枯れちまうし、
今までずっと晴れ続きだったし、農家にとっちゃ、恵みの雨ってところだろう。

雨は土砂降りというほどでもなく、まあパラパラって感じだ。
通りを歩く人々は、みなフード付きのローブを羽織っている。
遠目からじゃ分かりにくいが、ローブには撥水加工をしているらしく、
ローブの表面を水滴がつるつると滑り落ちて行く様子が見える。

ローブがいわゆるレインコートの役割をしてるわけだな。

窓から顔を出して通りを眺めてみると、
多くの店で開店準備に取り掛かっているのが確認できた。
真下を見下ろすと、入口で花屋の開店を待つ人々が既に並んでいる。

「まだ開店には時間があるってのに、こんな雨の中よく並ぶぜ……」

少し湿ってはいるが一応乾いた服を着て一階に下り、
店のシャッター前に立てかけてある金属棒を手に取り、裏口から表に回る。
とりあえず外で開店を待っている客を濡らすわけにはいかん。

「あー、すみませんね、開店までまだしばらく時間がかかるんで」

俺はその金属棒をオーニングにセット、展開させておく。
オーニングとは軒先なんかに取り付けられる可動式の日よけ、雨よけのことで、
庇（ひさし）のようなものである。
小洒落たカフェとかテラスによくついてるあれだ。

「ああ、わざわざ悪いね」

客の一人である白髪混じりの見た目５０代のおじさんがフードを脱

いで微笑んだ。
とりあえず微笑み返して会釈、
今のはちょっと営業スマイルっぽかったかなと若干反省しつつ、
店の準備とリンを起こすためまた裏口へと回る。
まず店の上司であるリンを起こすため、部屋に入る。
リンが寝入ってから少なくとも２４時間以上が経過している。
いくら疲れていたとはいえ、それだけ寝ればもう十分のはずだ。
リンの机には、まだ手の付けられていない昨日の晩飯があった。

「リン、朝だ、もうそろそろ起きてもいいんじゃねえか？」

「……。」

「リン、いくらなんでも寝過ぎじゃねえのか？」

「……。」

「おい、リン！」

申し訳ないと思いつつ、リンの掛け布団を引きはがした。
が、未だ一向に起きる気配なし。

上から顔に水ぶっかけたら起きてくるか？
寝ている上からヒップドロップすりゃ起きてくれるか？

思うのはいいが、実行する勇気はベスト・オブ・チキンな俺にはもちろんない。

「……はぁ、やれやれ。リーン、起きろっ！」

俺がリンの頬を強く叩いても、起きるようなそぶりはない。
狸寝入りしている様子もなく、本気で寝てるのは分かる。
参ったな……でも寝過ぎには変わりねえしな……

その後いろんな手法を使ってリンを起こそうとしてみたが、
眠り姫にはなしのつぶて。
死んでるんじゃないかと冗談半分で脈と呼吸を確認してもみたが、
やっぱまだ生きてる。
リンの中で一体何が起きてるのか、
俺には分からねえし、どう対処していいかも分からん。

とりあえず、今日も店は午前中営業ということにして、
午後から居酒屋の姉さんのとこへ行って、相談してみるか。
姉さんなら事情を分かってくれてるし、
いやらしい話にはなるが、職業柄なにかしらコネも持ってるだろうし。

営業を昼までにして売り上げの計算を昨日の分も合わせてやり、
終わり次第ずたの黒ローブを来て早速出掛けたのはいいものの、
姉さんの店は閉まっていた。
今日は休みなのか？　と思いながら肩を落としていると、
後ろから威勢のいい声が聞こえてきた。

「おい、兄ちゃん！　こんな雨の中開店待ちかい？」

聞き覚えのあるその声に振り返ると、
そこにいたのは、昨夜声をかけた食料品店の店主だった。
あー、また面倒なのに捕まった……と俺は心の中で嘆く。

「お前もここの店の常連かい？」

「……常連、というか、この店には縁があって」
（お前もってことはコイツもこの店の常連なのか……やれやれ）

「ほう、まあここの店の女将は美人だし、
そういうとこで呑む酒はまた格別ってもんだ。
そうそう、店が開くのは大体日没後が多い」

「ああ、そうっすか」
（姉さん、そんなに美人か？　まあ確かにブスじゃねえけど）

「そういや、兄ちゃん、一張羅はもう頼んだかい？」

「いいえ、まだ何も」

「そうか、今日、例の警邏隊員から教えてもらったんだけどよ、
お前さんの表彰が正式に決まったらしいぞ。
晴れ着は早いとこ用意しといた方がいい。
俺、いい服屋知ってんだ、どうだ、今から行ってみないか？」

「いや、今そんなお金持ってないんで……」
（うわー、一番面倒なタイプの誘い来たー！）
「いいじゃねえか、ちょっと見るだけでもさ！」

店が夕方開店ならば、確かに空き時間はあるが……
一張羅を買う金は財布の中にも、家にもない。
だいたい一張羅を買う金があれば、俺はまず真っ先にその金でベッドを買ってる。

「うちには一張羅を揃えるだけの金なんてないっすよ！」
「噂じゃ店は繁盛してるって聞いたが？」
「自分の寝具がないから床で雑魚寝生活っすよ？」

それを聞いた店主はいかにも「信じられん！」という顔をする。

「おい兄ちゃん、床で雑魚寝ってそれホントかよ！？
それリンちゃんだったか、もっと賃上げ要求していいと思うぞ、俺は！」
「いやいや、店の収支もついこの間までは自転車操業でしたし……」
「ジテンシャソーギョー？」

「あぁ……全収入と全支出がなんとか釣り合ってることっす」

「お前さんはなんか不思議な言い回しをするな。
この前は確か……ゴリラだったっけ？」

「ゲリラっす」

「俺も若者の流行語には乗ってるつもりだったが、まだまだ修業が足りんな、俺も。
って、２５の俺が言うのもなんだが」

この店主、２５なのか……若者って言われる歳の上限ギリ入ってる感じか。
いや、でも２６がオッサンかと聞かれればなんか違う気もするよな……
やっぱ二十代までは若者で、オッサンって呼ばれんのは３０過ぎてからか？
あ～、でも３０代でもまだ若者っぽく見える人もいるしなー、
そこら辺の線引きは見た目とかもやっぱ重要になってくるよな。
言っちゃ悪いが、二十歳にも満たないのに既にオッサン顔の人もいるし、
結局は残念ながら若者とオッサンの区別は見た目でしか判断できねえよな……
最近鏡とかで自分の顔見てないけど、疲労で老け顔になってたりすんのか？
１６でオッサンは……勘弁だ。

「お～い、兄ちゃん、聞こえてるか？」

「あの～、俺いくつに見えます？」

「な、なにをいきなり……んー、２２、３歳か？」

うん、学習した。

聞かない方がいいことも……ある。

「……俺、１６っす」

「そうか、兄ちゃんは１６か……」

「（老け顔の原因は）やっぱ疲労っすかね？」

「それも多少はあるだろうな。

老化の防止には何か運動するといいらしいが、何か運動してるか？」

「……いや、何もしてないっすね。店主は？」

店主は自分のやや肥えた腹を見て黙り込む。

「……。」

「……。」

「……なあ兄ちゃん、もうこの話やめにしないか？」

「……そうっすね」

なんか変な空気になったぞ、おい！
そして何故か生まれた店主との一体感と哀愁……
老け顔に見えるのはお互い共通の悩みだったんだな。

「でも店主、食品扱う店やってるなら、ポッチャリの方がいいっすよ」

「……そうか？」

「痩せこけた人がやってる店より、ポッチャリな人がやってる店の方が、
売ってる食べ物が美味しそうに見えたりしません？」

「……確かに言われてみれば、そうだ」

「店主は今の体型でちょうどいいっすよ。
あまり太りすぎると身体悪くしますからね」

「それに、飛べなくなるしな――あっ、兄ちゃんすまん」

「いいっすよ、気を使わなくたって」

「……。」

「……。」

「……兄ちゃん、やっぱ一張羅は――」

「買えないっすよ……それに、今はそれどころじゃないんで……」

「なんだ、悩みでもあるのか？」

「あらっ、誰かと思えばコウさんとルーさんじゃない！」

声がしてその方を向くと、
姉さんとその長男長女が大小それぞれの布袋を抱えて立っていた。
子供は身体の割には大きな袋を抱えながら俺のことを指差して、
あの羽なしのお兄ちゃんだ、と姉弟で丸聞こえのヒソヒソ話をし始める。
それにしても、この店主の名前はルーっていうのか。聞き慣れない名前だな。

「何すか、その布袋」

「買い出しよ、買、い、出、し。
今日の営業に使う食材、お得意さんから仕入れてきたの」

「へえ、君達はお母さんのお手伝い？　雨降ってる中、偉いじゃないか」

店主改め、ルーは体を屈めて子供達に話し掛ける。
褒められた子供はんふふ……と袋の横から無邪気な笑いを見せた。

「それにしても、コウさん、ルーさんも、うちの店に何か用？」

「リンのことでちょっと相談したいことがあって」

「リン……ああ、ずっと追い回されてたっていうあの子ね。
あの子がどうかしたの？」

「リン、あの時姉さんの店で寝ちゃったじゃないですか」

「ええ、寝てたわね」

「……あれから寝たっきり、一度も起きて来ないんすよ。
何度揺さぶっても、何度大声で呼んでも、
まるで冬眠でもしてるかのように、深い眠りについたままで――」

それを聞いた瞬間、姉さんの顔色が豹変した。

第５話－Ａ２７　Ｌｏｓｔ－３１１－　飛翔（前書き）

大分話が長くなってきたので、
どこかキリのいいところで第５Ｂ話に分割しようかと思います。

第5話－A27　Lost－311－　飛翔

姉さんはルーと目を見合わせ、小さく頷く。

「……ねえコウさん、その話、ちょっと中で聞かせてくれない？」

ちょっとこっち来て、と姉さんは早足で店の裏口へと回った。
俺とルーはその後を追う。
姉さんは裏口の鍵を開けると、布袋を家の中、裏口のすぐ側に置く。

「お父さーん、買い出してきたやつ、裏口に置いとくからねー！」

「バカヤロー！！　厨房まで持って来るのがお前さんの仕事だろうが！」

家の遠くから荒々しい声が聞こえてきた。
厨房で料理していたあのじいさんだ。

「ちょっとお父さん！　今それどころじゃないの！　……ごめんね、さ、上がって」

姉さんに促され、失礼します、と小声ながらも挨拶をし、上に上がる。
奥からじいさんが反論する声が聞こえてくる。

「そいつを厨房に持ってくるだけのたった短い時間が惜しいのかお前は！」

「じゃあお父さんがやればいいじゃない！」

姉さんもじいさんとやりあうだけの根性持ってるな……
もちろん子供達はびくついて既に涙目状態。
あのじいさん怒らせたら怖いのは声聞いただけで分かる。
絶対どっかの牛丼屋並に殺伐としてるってここ！
こんな家に生まれなくて良かった……

「そこの階段から二階に上がって。
お父さん、足腰がきてるからよっぽどのことがない限り上がって来ない」

姉さんに促されるまま、二階へと上がる。
てかじいさん足腰がきてるって、買い出しの荷物運べねーじゃねえか。

「突き当たりを右。そこがあたしの部屋だから」

失礼します、と俺、姉さん、ルー、子供とぞろぞろと部屋に入っていく。
部屋の中は大量のファイルが床に山積みにされ、作業机もぐちゃぐ

ちゃの状態である。

「汚い部屋でごめんね。で、早速だけど、続き聞かせて」

「なんか俺（ルー）まで入ってきちまったけど……」

「いいのよ、三人寄ればなんとかっていうし、ルーさんも一緒に考えてちょうだい」

「えっと、話していいっすか？」

「ええ」

それから俺がリンを背負って居酒屋を出てから、
今にここに至るまでの経緯を事細かに説明すること約２０分。

「じゃあリンちゃんはあの時寝入ってから一度も起きてくるどころか、
起きる気配もないってことね」

「ええ、食事も一切取ってないし、
このまま寝かせておいても大丈夫なのか不安になって」

「で、困りに困ってあたしのところに来た、と」

「そういうことっす」

「ちょっといいか？」

ルーが右手を上げた。

「そういう症状、なんかどっかで聞いたことがあるぞ」

「ルーさん、それホントっすか！？」

「ああ、定かじゃないが、確か……
ある魔法科の軍事訓練で出来損ないの兵隊を鍛え上げる為に、
昼夜問わずぶっ続けでトレーニングをさせたかなんかで、
その兵隊がへたって倒れ込んじまったらしい。
いくらなんでも休養が必要だろうって救護室に寝かせたら、
それっきり起きてこなくなったっていう……」

「なるほど、それ、リンちゃんの状況と共通する点があるわね」

「確かに、そうっすね」

その兵隊とリンの共通点は言わなくても分かると思うが、
兵隊もリンも、どちらも衰弱しきった状態で眠りに入ったということだ。

「それで、その兵隊はどうなったんすか？」

「ああ、よく覚えていないんだが……確か、全快したんじゃなかったかな？」

「誰がどうやってその状態から回復させたのか、覚えてる？」

「いや、そこまではちょっと……」

痒いところに手が届かない！
そこんところが分かれば苦労しないのだが……

「もしかしたら、リンちゃんが危篤状態なのかもしれないし、こういうときは、速やかに専門家に診てもらったほうがいいわよね……」

「それに越したことはないっすけど、俺、そういう知り合いとかいないですし……」

姉さんは子供達を見つめ、ため息をついたかと思うと、作業机に座って、何かを書きはじめた。
そしてちょっと来なさい、と子供達に手招きする。

「あたしが今から大事なお使い頼むから、よーく聞きなさい。医者のヘーゲルって人、覚えてる？　あの眼鏡かけた若い人。
――うん、そうそう、白衣を着てるあの人ね。
あの人のところまで大急ぎで飛んでいって、この紙を渡してきてくれる？

そしたら、羽なしのお兄ちゃんの店、どこにあるか覚えてる？
――そうね、前にお母さんにプレゼント買ったって言ってたとこ
ろだね。
お前さん達は記憶力がいいね、偉い偉い。
でね、そのヘーゲルさんが行き先を聞いてくると思うから、
ヘーゲルさんをそのお店まで、連れてってくれる？
いい？　これは今までで一番大事なお使いだからね、忘れちゃダ
メよ」

子供達は母の言い付けを聞くやいなや、喜んで部屋を飛び出していった。
……そういえば、ヘーゲルって、どっかで聞いたことがある名前だな。
確かドイツの哲学者かなんかにそういう人いなかったか？

「さてと、あたし達も行きましょう」

姉さんは部屋の窓を開け、足をかけた。

「え？　どこに行くんすか？」

「あんたの店に決まってるじゃない！　ほら行くよ！」

「ほら行くよって……窓からっすか！？」

「当たり前よ！

あの子達、見かけによらず飛んで行くのがものすごく速いのよ？
ちんたら地上を歩いてたらお医者さんが待ちぼうけして寝ちゃうわよ？」

「それって俺が飛べないことを知った上での発言……？」

「そこら辺はほら、あたしとルーさんで何とかするから、ねえ？」

「……あっ、え、ええもちろん！」

ルーは他のことを考えていたのらしく、
姉さんの質問の意味が分からないまま同意してしまったようだ。

「一応言っときますけど、俺、とてつもなく“重い”っすよ」

「なんだかんだいって、あんた、飛ぶの怖いの？」

「飛ぶのが怖いって、そりゃ当たり前っすよ！」

「おいおい兄ちゃん、信用ねえな」

俺のすぐ横にいるルーが、
姉さんが今からしようとしたことにようやく気づいたらしく、そう言って苦笑した。
信用ないって、初対面が昨夜のお前に言われたくねえよ。
そんなにホイホイ他人を信用してたらそのうち丸裸にされるっつうの。

姉さんは窓から飛び出し、
その標準装備の巨大な翼で羽ばたきながらホバリングして俺に手を差しのべる。

「早くあたしの手につかまって！
一旦屋根まで上がればルーさんと二人であんたを引っ張りあげることができるから！」

俺は窓から半身身を乗り出して、姉さんの手を掴んだ。
姉さんの握る手にも力が入る。

「いいっすか？　いきますよ？」

「早くしてちょうだい！　この姿勢でいるの結構きついんだから！」

「「せーのっ！」」

俺が窓から飛び出して全体重を姉さんに委ねた瞬間だった。

「えっ！？　ちょっとなにこっ……イヤーッ！！」

「姉さ…グォッ！！」

俺と姉さんは墜落、勢いよく地面に激突した。
俺は砂利の地面に叩き付けられ、
その上に覆いかぶさるようにして上から姉さんが落ちた。

「ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ……痛ってぇ……」

「ちょっと、あんたなんでそんなに重いの？
全身が金属かなんかで出来てるんじゃないの？」

「だから言ったじゃないっすか……俺は重いって。
ていうか姉さん……どいて……ください」

「ああ、ごめんなさい」

おーい、二人とも大丈夫かー！　という声が二階の窓から聞こえてくる。
ルーが半身乗り出して俺達を見下ろしていた。

「あたしは大丈夫だけど、コウさんは大丈夫？」

「大丈夫っすよ……姉さんが幾分か踏ん張ってくれたおかげで……
なんとか」

「あたしはちょうど下に緩衝材があったから、特に怪我はないけど」

「二人とも大丈夫か！？」

上からルーも降りてきた。
俺の上にいた姉さんがどいてくれたので、俺も上半身を起こす。
右肘（ひじ）あたりに周期的な痛みを感じて見てみると、
広く浅い擦り傷から血が滲み出ているのが見えた。

「……擦り傷、ね。
でも、あんたの店、花屋でしょ？　薬もおいてあるわよね？」

「ああ……まだ薬は、取り扱ってないんすよね……
でも、これぐらいなら適当に水で洗っておけばなんとかなるっすよ？」

「確かに、そのぐらいの傷なら水で十分だな」

「コウさん、ごめんなさいね、あたしがしっかりしてなかったから……」

「もういいっすよ、それよりも早くいかないと医者、待たせますよ？」

俺は立ち上がって服についた汚れをぱっぱと払い落とす。

「……そうね、じゃあ今度は確実に飛べるように、滑走しましょう」

「そっちの方が体力使いますけど、重量級のもの持つときは楽ですしね」

姉さんとルーも続いて立ち上がった。
俺はルーにも重量級の認定をもらったらしい。
まあそもそも俺の身体は飛翔する為に最適化されているわけでもねえし、
当然といえば当然だろう。

「それじゃあ、ルーさんはコウさんの上半身担当、あたしは下半身担当でいい？」

「おう、任せておけ！」

「言っとくけど、ルーさん、コウさん冗談にならないぐらい重いからね？」

「兄ちゃん、すまんがどれぐらい重いか、ちょっと試させてくれ」

「あっ、はい」

ルーは俺を抱き上げると、グハハ、こりゃびっくりだ！　と笑い声を上げる。

「兄ちゃん、女将の全身金属って表現、間違いじゃないな！
だがまあ大丈夫そうだ、兄ちゃん心配するな」

「あっ、見てあれ！」

姉さんは灰色に染まった遠くの空を指差す。
その先には、先導する二つの小さな影と、
あとに続く大きめの影が一つ、かなり高速で飛翔しているのが見えた。
時速１２０、１３０キロは出てるんじゃないだろうか？

「思ってたよりだいぶ速いっすね……」

「あれ、あたしの子供達。速いでしょ？
まあ速いっていっても、あたしなら本気出せば３００はいくけどね。
今回はコウさんがついてくるから最高速更新しちゃうかも。
って、雑談してないでそろそろあたし達もいかないと」

「よし、じゃあいこうか、兄ちゃん」

３００の単位が気になるが、まあそれは置いといて。
俺達は横並びになって通りを駆け出した。
足で敷き詰められた砂利を後方へ弾く音が聞こえてくる。
姉さんも、ルーも、俺も、全力疾走している証拠だ。
通りを歩く人々が俺達を避けてくれている。
迷惑かけてなんか悪いな。

「よっ！」

先に離陸（テイクオフ）したのはルー。
それに続いて姉さんも飛翔。

「兄ちゃん、もうちょっと前に来てくれるか？
空中じゃあまり精密には動けねえんだ」

後方からルーの声が聞こえる。
確かに空中じゃ横風やらなんやらで不安定なりやすいだろう。

「もうちょい前だ」

「ちょい右」

「ああ、行き過ぎ行き過ぎ！　左へ寄ってくれ」

「もうちょい左」

「よしそこ……捕まえた！」

走る俺の両脇から掬い上げるように抱えられ、俺もテイクオフ。
わかりにくいかもしれないが、ジェット機のタイヤになったような気分だ。
俺を持ち上げると同時に、
ルーの翼の羽ばたく回数が急激に増えたのが音で分かる。
俺とルーはさらに上昇を続ける。

「女将！　足持ってくれ！」

「はいよ！」

後方から足首をがっちりと掴まれ、
さらにぐいっと持ち上げられて、俺も水平飛行スタイルに。
俺の身体はどんどん加速し、高度もぐいぐいと上がっていく。
しばらくすると羽ばたく音が聞こえなくなって上を見上げると、
滑空しているルーの翼があった。
どうやらこのあたりが一番安定する速度らしい。
それにしてもものすごく速い。

眼下に広がるナクルの街の屋根が高速で流れていくなかで、
俺は屋根にいろいろな絵柄が塗装されているのに気がついた。
野菜と肉が描かれた屋根、鍵が描かれた屋根、衣服が描かれた屋根、
剣と盾が描かれた屋根、ペンが描かれた屋根、星が描かれた屋根――
――
それぞれ恐らくその建物でやっている店の種類を表したもの、
端的に一言でいえば、看板のような物だろう。
他にも屋根には主要な建造物の距離と方向が印されている。
例えば今俺がここから見えるのは――

イーカ教会←１５００

大図書館→２６００

警邏隊本部←３０００

といったもの。
大図書館、か……まだ行ったことねえな。

「どうだ、兄ちゃん、飛んだ気分は？」

俺の頭上にいるルーが言った。
風を切る音で声が聞き取りづらいこともあってか、
返事をする声も自然と大きくなる。

「晴れてりゃ最高なんすけどね！」

「ハハハ、天気は俺達じゃどうにもなんねえな！」

「コウさんは今回が初めての飛行なの？」

「いーや、三回目っす！」

「ほう、兄ちゃん、一回目はいつ？」

「盗賊に襲われた時に、リンと！」

「フハハハ、波瀾万丈な人生だな、兄ちゃん！　二回目は？」

「警邏隊に連行された時っす！」

「ほう、どんな風に飛んだんだい？」

「警邏隊、ひどいっすよ！
手首に縄一本掛けられて宙ぶらりんで連行！」

「それじゃあ縄が切れたらおしまいじゃないか！
警邏隊、クビになって正解だな！」

遠くに俺達の花屋を見つけた。
屋根には花の絵柄が描いてあるのが確認できる。
……ん？　花の絵柄の横が屋根と同系色の大きな布で覆われている。
布の下には何が隠されているのだろうか？
同じ屋根を見つけたらしいルーが声を上げた。

「兄ちゃんの店はあれか？」

「はい！」

「……あの屋根を覆ってる布は？」

「知らないっすよ！　俺も初めて見たんすから！」

後ろの姉さんが話に入ってくる。

「薬の記号を隠してるんじゃないの？
コウさんのとこ、まだ扱ってないんでしょ？」

「そうかもしれないっすね！」

「よしじゃあ女将！　目的地も近い。下に降りるぞ！」

「はいよ、ルーさん！」

内蔵が浮き上がったような感覚と共に頭から急降下していくという、
新手のアトラクションを思わせるようなスリル感を味わう俺。
もちろん無料である。

「ルーさん！　コウさんの足離すわよ！」

「おう、任せろ！」

おい！　まだ高度３０メートル以上あんのに足離すな！
むっちゃくちゃ怖いじゃねえか！
しかも俺を抱えるルーの腕がプルプル震えてるし！　何が任せろだ！

心の中で抗議しまくる俺をよそに、
危なっかしくも順調に速度と高度を落としていく。
ルーが翼を使って速度を落とし、
慣性の法則で速度を維持しようとする俺を引っ張る体勢。
そして高度約５メートルまで降りてきた時だった。

「兄ちゃん、悪いがもう俺の腕が持たない……離すぞ！」

「え！？」

おいコラふざけんじゃねえよ！　と思った瞬間、腕を離される。
今まで俺の上半身をルーが抱えて減速していた影響で、まさかの背中からの落下。

「うわあああああ――――！！」

短いながらも美しい放物線を描いていたのであろう俺の身体は、
背中をたたき付けるようにして無事着陸、
さらに通りに敷かれた砂利の上をズザゴゴゴという大きな音を立てて滑っていく。
通りを歩く人からは、キャア！　危ない！　といった声が聞こえてくる。
なんか俺が悪者扱いされてるようじゃねえか……

十数メートルほど滑った後、俺は静止した。
すさまじくハードな着陸（ランディング）だぜ。

ううう……全身が痛い。

第5話－A28　Lost－311－　ヘーゲルの診断

「うう……これマジ痛てえって……」

全身の痛みで起き上がれず、
俺は泣き顔の空を痛みで顔をクシャクシャにしながら眺めていた。
一刻も早くリンを診療してもらうために飛んできたのに、
そもそも俺がこんなところで悶えて苦しんでどうするんだって話だ。
高度約5メートルとはいえ、ポイ、と軽々しく空中投棄したルーの責任は重い。
腕をガクガクさせながらでも何とか持ちこたえようとして、
それでも力及ばず落としてしまったのなら、まだ許せる。
ルーの奴、普通にパッと放しやがった。
俺を自由落下爆弾か何かと勘違いしてんじゃねえだろうな？
これで俺の身体に後遺症が遺ったら絶対ルーには最後まで責任とってもらう。
何が俺を信用しろだ！
やっぱ会って間もない人間を信頼するのは考えもんじゃねえか！

さっき姉さんと一緒に落ちた時は、高度も今よりも低かった上に、
姉さんが幾分か踏ん張ってくれたから良かった。

満を持して言える。
この世界にぶち込まれてから、
何度も落下体験を味わってきたが――今回はその中で最悪だ。

雨天の中、突如として空から降ってきた俺に、
一時若干の混乱状態にあったらしい周囲の人間達は、

シチュエーション的な謎多くも俺が誰かということは認識してくれたらしく、
兄さん、大丈夫か！？　と近くの若い男が駆け寄ってきてくれ、
他の人々も俺を囲むようにして集まってきた。

「大丈夫、起き上がれますか？」

最初に駆け寄ってきた若い男が、俺の背中に手を回して起こしてくれた。
着地の衝撃で後頭部を強打したこともあって、頭が割れるように痛い。

「ああ……大丈夫っすよ……助かったっす」

頭を抱えつつも、かろうじて受け答えをすることができたが、
こんちくしょおぉぉ！　と根性で立ち上がれるほど俺は強くはない。
それ以前に落下の衝撃で身体が言うことを聞いてくれないのだが。
そうさ、俺はどこの世界でもただの小市民さ。
男はさらに続けて言う。

「僕、覚えたてですが、回復魔法が使えるんです。
今から鎮痛と、どこかケガしてるかもしれないので、
創傷治癒を施しますので少しじっとしててください」

男は小さく魔法発動の詠唱と、指で小さく印を切ると、
手にまるで自然の恵みを凝縮しているかのようなほのかな緑の光を宿し、
俺の身体に当ててくれた。
あれ、そういや姉さんと爆撃機（ルー）は今どこにいるんだ？
俺を囲む人の隙間から覗き込むようにして前を見ると、
花屋の前で姉さんが怒り心頭の様子でルーを怒鳴り付けていた。
ルーは両手を小さく前に出して何か弁解したがっていたが、
姉さんは潔く非を認めようとしないルーの女々しさについにプッチン。
左手を背に回して何やら印を切っているところを見ると、
何か魔法をかけるつもりらしい。
人の命を何だと思ってんだこの愚図野郎！　という、
優しいあの姉さんのイメージを総崩れにさせる暴言は、
やや離れた場所で全身の痛みに堪える俺からも確実に聞き取ることができた。
その暴言とともに裏でかけていた魔法が発動、
姉さんの周囲に赤いオーラが具現化し、
小さくなったルーの胸倉を捕らえて何と片手で持ち上げた！
誘拐グループの締め上げと7人の少女を救うミッションは、
実はなんと姉さんが適任者だったという意外な事実がここで突き付けられた。
女は強し。この一言に尽きる。

「……あれ、回復魔法が全然効いていない。どういうことだろう？
お兄さん、痛みの方はどうですか？」

飛び立つ前にケガした肘の擦り傷に手を当てて治療してくれている男は、
不思議そうな顔付きで言う。

「ん、ああ、少しは楽になったっすけど、完全に痛みが引いたわけでは……」

「おかしい、これだけ力を込めても、
痛みは消えないし、肘の擦り傷すら治癒できないなんて……」

「治療はもう十分っすよ、今ならもう一人で歩いていけますから」

俺はゆっくりと立ち上がった。
身体の節々が痛むが、まあ打撲で済んだのが奇跡的ってもんだ。
背中に手を回してゴツゴツと叩くと、背中が毛羽立っているのを感じた。
俺にもとうとう翼が生えたか？
冗談半分、毛羽立っているそれを少しばかり引きちぎってみると、
それは俺の黒ローブの繊維だった。

「えっと……服、穴が空いてますよ」

「えっマジ！？」

俺の後ろにいた二十ぐらいのの女性に指摘され、
雨の中ローブを脱いで後ろを確認するとなるほど、直径２０センチ

の大穴が空いていた。
ここまでボロボロになりゃ、さすがに次回からこれを着て出かけるのは無理そうだな。
もう一度後ろに手を回してみると、ややほつれた俺の服があった。
どうやら俺の唯一の自前の服に穴が開く事態は、この黒ローブ君が犠牲になってくれたおかげでギリギリ回避されたようだ。
止血に使ったり穴が開いたりでまさしく“黒いボロ雑巾”に成り果てたそれを、
敬意を込めて俺は丁寧に畳んだ。

「……自分から治療するっていったのに、何もできなくて申し訳ないです」

さっき俺に魔法での治療を試みた男が、残念そうに頭を下げたので、
俺は気持ちだけで十分だからあまり気を落とさないでくれと言った。
男の回復魔法がなぜ俺には効かないのかは全くの謎である。
しかし、手に緑の光が宿ったということは、
あの時点で魔法は完成していたということで、
俺は当然回復していても良かったはずだ。
何がその効果を阻んでいるのかは分からない。
だが実際、ここでは俺は回復魔法が効かないわけで、
原因が分からないうちはそれはどうにもならない。

ここで突っ立っていてもしょうがないので、
とりあえず俺はその場から離れ、姉さんのところに向かった。

「オラこのっ、愚図の、脳無しの、ヘタレの、人外！！」
「グゥッ！　ア〝ッ！　グフッ！　ベホッ！　グァッ！」

見ての通り、
姉さんは目に見える赤いオーラと、目に見えない黒いオーラをまとい、
雨で濡れた地面に力尽きて伏しているルーの横腹やら顔やらを、
思いっきり蹴飛ばしていた。
てか姉さんやり過ぎだろ！

「あの……姉さん？　今何をして……」
「うん？　ああ、コウさん大丈夫だった！？　ケガは！？」
「とりあえず骨折とかは奇跡的に免れたみたいで。特に大きなケガはないっすよ」
「そう、それは良かった。
今はルーに次からコウさんに今回みたいな危険なことを起こさないように、
私がしっかりと注意してあげてるの」
「注意というか……これって完全に私刑っすよね？」
「あら、バレちゃった？
――そうね、最近なんか疲れとイライラが溜まってたのもあるかもしれないわね」

欺瞞が下手すぎる。
というか、ストレス発散で人ぶん殴るとか、どんだけ鬼畜なんだよ。
あのバイオレンス少女チカでも絶対やらねえぞ。
もちろん、全俺が集まって催した緊急会議の結果、
この姉さんを取扱注意人物に認定することが決定したのは当然のこと。
イライラの矛先が俺だったらどうなるかと想像しただけで震えてくる。
殴られたせいで顔が腫れてしまったルーは、
ぅぅ……と小さなうめき声を上げるだけであった。
姉さんは突然いいことを思いついたような顔つきをして俺に言った。

「そうだ、コウさんも何か一発かましてやりなさいよ！」

「それ人間の言うことっすか？」

これは明らかに人格疑わざるをえない。
どうやったらその思考にたどり着くのか、プロセスが知りたい。

「だって、痛い思いさせられたのよ？
蹴りの1、2発ぐらい入れたって何も文句は言えないわよ」

「ていうか何で姉さんそんなに強いんすか？」

「居酒屋やってると、お客さん同士で喧嘩が始まっちゃう場合も遭遇するのね。

最初はあたし達は自分達で何とかするだろうって無視してるんだけど、
騒ぎが大きくなると他のお客さんに迷惑かけたり、
皿を割ったりして店が被害を被ることだってあるの。
被害を最小限に押さえるためにも、
喧嘩している客を店から追い出すのは最重要事項。
だから今のはそのためのとっておきなんだけど、
この若造のヒドさに頭が来ちゃって」

俺と少し話しただけだが、
姉さんの過熱した感情は徐々に冷却されているようで、
話す口調も穏やかになってきた。

「でも姉さんだって行くときに俺の体重を支え切れずに落ちたじゃないっすか。
自分だって失敗してるのに、
ルーをタコ殴りはいくら何でもひど過ぎというものでは？
……確かに、ルーの場合は恣意的に俺を落としたという点では最低っすけど」

「それは……その、素直に誤ってくれるならまだいいんだけど、
弁解しようとしだしたから、ついカッとなって」

「後悔は？」

「してないわよ。イライラ解消できたしね。
それよりもコウさん、さっきまで着ていた黒い服は？」

「ああ、これっすか？」

俺は折り畳まれたローブを広げて姉さんに見せた。

「背中に大穴が開いちまって。もう使い物にはならないっすよ。まあもともとズタボロでしたから、いまさらどうこう言うつもりはないっすけど。

あっ、医者が来たみたいっすね」

俺が落ちたことばかり意識が向いて気がつかなかったが、飛んでいる間に医者を追い抜いていたらしい。

姉さんの子供に誘導され、俺の家の前にひらりと舞い降りるヘーゲルという人物。

俺と同じくらいの歳の、見た目１８、９歳の金髪青年だ。

顔はどちらかというと面長で、目は水を張ったような綺麗な青で一重。

この世界の人は裸眼が多かったので見たことがなかったのだが、この人は木製フレームの丸メガネをかけている。

メガネは折り畳み不可らしく、可動部がない。

どの世界でも医療に携わる人物は勉強家であることが伺える。

手に提げている大きな鞄は重そうだ。

大事な仕事を終えた子供達は母親の姿を見つけるやいなや、その懐に飛び込む。

それを見たヘーゲルは俺達の元へと歩み寄った。

「えっと、急病人がいると聞いたのですが、こちらがその……急病

人……です……か？」

ヘーゲルは地面に伏してうめき声を上げ続けているルーを見て言った。

確かに雨の中、地面に倒れてうめく人物がいたら、誰だってそう思うだろう。

ヘーゲルの問いに、姉さんはルーの身体の上に足を乗せて答える。

「あっ、コイツじゃなくて、そこのお店の主人のリンっていう子です」

「いや、あの、どうみてもそこの人治療……」

「コイツはあたしがボコボコにしたからこうなっただけで、本当の急病人は建物の中です」

数秒間固まってしまったヘーゲルだが、やっと状況が理解できたらしく

メガネをクイ、とかけ直して、ややこしいのでやめてくださいと小声で呟いた。

部屋に上がった俺達は、リンの部屋の中に入って、

今リンに起きている症状を（といっても寝てるだけだが）ヘーゲルに話した。

ボコボコにされたルーは、

服も身体もドロドロだったので、
とりあえず風呂で身体をキレイに洗い流してもらうことにした。

よって、今リンの部屋にいるのは、
俺と姉さんと子供、ヘーゲル、そしてリン本人の6人。
部屋の一つしかない椅子をヘーゲルに座らせ、
俺と姉さんと女の子はリンのベットの縁に並んで腰掛け、
男の子は姉さんの膝の上に乗っている。
話を聞き終わったヘーゲルは、
下敷きと洋皮紙を金具で挟んだ記録用紙を鞄から取り出し、早速診察を始めた。

まず確認したのはリンの呼吸。
リンの鼻の下に手をかざして息を確認すると、今度は鼻をつまむ。
ぷにっという音が聞こえてきそうだ。
しばらくそのまま鼻をつまんだまま待機するが、
リンに変化はなかった。
すると彼は立ち上がって失礼いたします、と小声でリンに一礼。
右手を大きく振りかぶると、リンの頬に思い切り平手打ちした。
バチン、という音が部屋に響き渡る。

「ちょ、リンに何してるんすか！」

「これも検査の一つです」

ヘーゲルは淡々と答えて椅子に掛け直すと、その様子を用紙に記録する。
次にリンの寝ている掛け布団の中からリンの手を出して脈拍と体温

の測定。
その様子も記録していく。

そして最後に鞄から握り拳大ほどのゴツゴツとした透明な石を取り出した。
ヘーゲルがそれを手に持つと、その石は透き通った黄緑色に変わった。
それを見た姉さんは、やっぱり医者は違うわね～と感心した様子。

「何がっすか？」

「ほらあの石、黄緑色。
知らない？　魔力の量を測定する道具よ」

「いや、知らないっすね。
量によって色が変わるとかそんなやつっすか？」

「そう。
確か、量が多くなっていくにしたがって、
透明、紫、青、緑、黄、赤、白って変わるのよ。ねえ、ヘーゲルさん？」

「ええ、よくご存知で。
一般の方に握らせると大体緑色になることが多いですね」

彼はその石をリンの両手に持たせ、
石が落ちないことを確認すると、そっと手を離した。
すると、黄緑色だった石の色がどんどん変わっていき、

紫の色になったところで色の変化がなくなった。
ヘーゲルはその様子を書き記すと、ふう、とため息をついた。
そして鞄から重厚な本を一冊取り上げた。
おそらく医学書だろう。
記録を参照しながら、本をペラッペラッとめくる。
しばらくの沈黙の後、彼は口を開いた。

「あなた方の話と検診結果を考えると、急性魔力欠乏症の疑いがあります」

第5話－A29　Lost－311－　治療法は？

「急性魔力欠乏症というのは？」

急性魔力欠乏症――現代日本ではまず考えられない病名だ。

「ヒトは普段何もしなくても魔力は消費されていきます。
しかし、体内で生成される魔力はそれよりも多いため、
私達は魔法を扱うことができます。
一般的に生成される魔力を１０とすると、
自然に消費される魔力は７ぐらいといわれています。
つまり、３だけ余るわけです。」

「なるほど、生成された魔力は全部使えないのね、初めて知った」

姉さんは頷く。
ヘーゲルはさらに説明を続ける。

「しかし、生成される魔力は少ないため、
このままでは魔法を扱うことはできません。
そこで、個人差はありますが、余った魔力を一定量蓄えることができます。
ちょうどチョロチョロと湧き出る泉の水を容器に貯めているようなものです。

そこから私達は必要な分だけ容器の水を取り出して使うわけです。
さて、ここからが問題です。
私達には容器に貯まった水が少なくなってくると、
それらは身体的症状として現れてきます。
症状が軽い順に、
食欲の増進、倦怠感、食欲不振、吐き気、強い眠気などが挙げられます。
これが、急性魔力欠乏症の症状です」

そういえば、あの夜姉さんの店に行こうと俺が誘った時、
「食欲がない」って言ってたな。
あの後寝てしまったということは、あの時吐き気まで伴っていたということになる。
俺は体験したことはないが、相当辛かったんだろう。
吐き気は俺も勘弁してほしいと思う症状第一位だからな。

「今挙げた症状はすべて身体の生理的な反応です。
食欲の増進は魔力補給の基になる食料の確保、
倦怠感は魔法の使用を精神的に阻害するため、
さらに酷くなってくると現れてくる食欲不振と吐き気は、
食料の消化のエネルギーを魔力の補給に充てられるために起こります」

「どうりで喧嘩する客を引きずり出すのに魔法を使いまくった後が辛いと思ったら、
そういうカラクリだったのね。
ホント、ヒトの身体はよく出来てるわね」

「そして最も重篤な症状である眠気は、
自然に消費する魔力自体を極限まで減らすための最後の自衛手段です。
一度寝入ってしまうと昏睡状態になります。
周囲からの刺激を一切受け付けなくなり、
ある一定量まで回復するまで起きてくることはありません。
もっとも、このような状態に陥る時には、
すでに魔力の生成量自体もかなり落ちていますので、
回復には2、3日程の時間を要しますが。
本当に最悪の場合は代謝を減らすために体温までも下げてしまい、
そのまま死亡してしまうこともあります。
しかし、そこまでいくことは滅多にありませんのでご心配なく」

「つまりリンが勝手に起きて来るまで安静にしておけ、ということですか？」

「ええ、基本的にはそういうことです。
それと、毎食時に少しでもいいですから、流動食を与えるようにしてください。
この状態でも体力は消耗していますので、
万が一の最悪の事態を避けるためにも、欠かさないように注意してください」

そこまで言うと、彼は道具を鞄の中にしまい、おもむろに立ち上がった。

「彼女の容態が急変した場合は、できるだけ早く私に連絡してください。
それでは、失礼いたします」
「あっ、ちょっと診察代は!?」
俺達に背を向けてリンの部屋から出ていこうとするヘーゲル。
診察代も貰わねえで出ていく医者は初めて見たぞ。
俺の言葉に彼は振り返る。
「ああ、それでしたら彼女が回復した後に、
まとめて請求させていただくので今は要りません。
それと、今回の料金は診察料４０００レルと、
緊急呼び出し料１０００レルの合わせて５０００レルになります」
ここでは急患の診察は特別料金がかかるらしい。
日本では保険適用の場合、
全治療費の三割が患者に対して請求されるらしいから、
３０００円の治療費がかかっている場合は実際は一万円かかっている。
治療費負担軽減制度がここにはあるのかは分からないが、
まあそれでも、５０００レルしか請求してこないのは多分安い。
俺は立ち上がって、姉さんとその子供を部屋に残し、
裏口までヘーゲルを見送りに行った。
外の雨はやんだものの、雲行きは依然として怪しく、
いつまた降り出してもおかしくない状態だった。

「あなたのことは噂で聞いてはいましたが、
本当に翼のない人間がいるなんて、正直驚きました」

「はは、みんなからよく言われます、それ」

俺がそう答えると、ヘーゲルは初めて俺に笑顔を見せた。
笑う彼の顔はとてつもなく爽やかな表情だった。
恐らく急患の知らせを聞いてから張り詰めていた緊張の糸が切れたのだろう。
彼がそれでは、と挨拶をして灰色の空へと飛び立って行くのを、
彼が見えなくなるまで俺はずっと見ていた。

家に戻った俺がリンの部屋へと向かおうと階段を登ると、
登り切った先の廊下で汚れた姿のままの状態で一人佇んでいるルーの姿があった。

「あれ、風呂には入らないんすか？」

「いや、入りたいのはやまやまなんだが……その、着替えとかないし、
何よりも井戸水汲み上げる容器の底が抜けてるから水も用意できないし……」

そういや俺、昨夜バケツを破壊したんだったな。
バケツは何とかして調達したとしても、
洗った身体の上に着る服がドロドロなら元も子もない。

かといって着替えの服があるのかと言えば、ない。
今着ている俺の服はここに来た時の服装そのまんまで、洗って着回している。
リンの服なら替えはあるが……ルーに女装させるつもりはないし、見ず知らずの小太り男性が勝手に着た服を着るのは、例え丁寧に洗濯したとしてもリンが生理的に受け付けないのは簡単に想像がつく。
身体を洗って帰りは裸で帰ってもらうのは無理だし……
あっ、裸の上にうちの黒ローブを着せればカムフラージュできるじゃねえか！
ああそうか、背中に大穴が開いちまったんだったよな……
ローブ着たって裸の背中が見えれば意味ないし、
下手すりゃハプニングでズバッと脱げた時には公然なんたらで連行されるだろう。
露出狂とやってること変わんねえからな。

とりあえず、今回はドロドロのままで帰ってもらうしか方法はなさそうだ。

第5話－Ａ３０　Ｌｏｓｔ－３１１－　ゲッティング・マッド（前書き）

今まではコウからの視点で話が進んできましたが、
今回はシステム（神子上麗香）視点でお送りします！

第5話－A30　Lost－311－　ゲッティング・マッド

コウくんは私達の手の届かない遠い場所に転送されてしまった。
私と零雨ちゃんは、彼をどうここに引き戻すか、
彼がいなくなった直後からその方法を模索していたの。
でも、どこへ行ってしまったのかさえ分からない彼を見つけだす方法なんて、
そう簡単には見つからなかった。
広大な宇宙空間に浮かぶ一つの小さな塵を捜し出すようなものだから。

零雨ちゃんの意見は理屈で考えれば至極真っ当なもの。

“彼のことは諦め、代理の人間を選定する”

もちろん私は気が乗らなかった。
私が感情モジュール（機能）を切れば、
きっと私も同じ結論を出していたと思うし、
それが一番リスクが低いことも分かってる。
だから、私はコウくんを裏切るのは悪いと思いながら、
代理の人間を見つける作業に入ったの。
最初は、チカちゃん。
でも、チカちゃんは私達の“誰にも言わないで”という約束を守れなかった。
友達に話してしまったの。
彼女には荷が重過ぎたみたい。

そこで私達は時間を打ち明ける前まで巻き戻して、ジョーくんにお願いしたの。

確かに彼は約束を守ってくれてはいたけど、
秘密を打ち明けてから、
明らかに私達を敬遠するようになっていって――私達はバラバラになった。
私達の不注意でコウくんという人間が
一人消えてしまったことが彼にとってとてつもなく恐怖だったみたい。
それに、口には出してなかったけど……怒ってた。

チカちゃんのお兄さんの匠先輩は、そもそも話を信じてくれなかった。
それからは、見ず知らずの人に手当たり次第にお願いしてみたけれど、
私達が期待するような人は見つからなかった。
代理の人間を探す作業は暗礁に乗り上げてしまったの。
確かに、約束もきっちり守ってくれて、
私達の本来の目的が達成できそうな人はいたけれど、
私の心の奥底では新しい人に対する激しい拒絶反応があって、
結局はうまくいかなかった。

頼みに頼んで２８３６人にお願いをしたけれど、みんなダメだったの。
違う、みんながダメだったんじゃない。
それはただ単にコウくん以外の人間はイヤ、という私のわがままが原因だったから。

……誰からの干渉も受けたくなかった。
自分の家に閉じこもって、
やりきれない気持ちをどう処理していいのか分からなくて――

シミュレートはコウくんがいなくなった時間で止めたまま。
その空間にいることが苦しくなってきて、
三時間時間を先送りにして止めてみたけれど、
今度は同じ日付でいることに辛くなって……一日時間を進めた。
でも今度はコウくんがいたこの世界にいることすら嫌になって、
私はステージ０に逃げた。

コウくんは前に夢ってどんなものなのか教えてくれた。
すべてが幻で、空想で、どんなに辛い夢でも、
目が覚めればそこにあるのは変わりない日常。
そして夢物語はいつしか記憶の彼方へ蒸発して消えちゃう。

私はこれがただの悪夢だと信じたかった。
今起きていることは全部、みーんな、ただの夢。
目が覚めて次の日の朝には、
めんどくせ～って嫌そうな顔をしながら登校してくるコウくんの姿
を見てホッとする。
やっぱり夢たったんだーって。

でも、原理的に私は夢を見ない。
私は寝ることができないんだから。
目に映るもの、感じるものすべてが事実。
私の身の回りで起きたことは、“記憶”としてすべて“記録”され
ていく。
今でも鮮明に思い出せる。
コウくんの表情、発言、行動すべて。
彼だけじゃない。
チカちゃん、ジョーくん、匠先輩のことも。
そこには何があって、どんな景色の中私達は一緒になって行動した
のかも。

忘れないことは良いことで、みんなと過ごして感じる幸福を、
いつまでも覚えておくことができるのは私だけの特権だと、
そんなことを思いながら今まで過ごしてきた。
……それが今こうして私に牙を剥くなんて。

コウくんがいなくなったことを忘れてしまえば、私はどんなに楽になれるだろう。
彼のことを忘れるなんて、
そんな非常識なことは私の良心が、プログラムが赦さないけれど。

“コウくんのことは私達が守るから――”

と宣言したのに、その義務を遂行できなかったね、私。
もはや私は命令を忠実にこなすこともできない、
プログラム以下のただのコードの塊じゃない！
気がつけば、私は泣いていた。
いくらその感情が与えられたものであっても、それは私の気持ち。

消えてしまいたいと思った。

私達の領域から外部へ繋がるのルートは一つで、
彼がここを伝って飛び出していってしまったことは確実。

私達はこの外部へのアクセス権限を持っているけれど、
今まで使ったことはないの。
だって、今までそんなことする必要なんてなかったから。
私達の領域だけ見てればよかった。
それに、外部からのアクセスを監視する、
物騒なプログラム(ファイアウォール)も配備されてる。
外部領域が安全じゃないのは誰の目にも明らかだった。

でも“Ｊａｍｉｅ”は厳しい監視の目をかい潜って、
コウくんをさらって行ってしまったんだよね……悔しい。
彼が転送された先には何があるのかは私にも分からない。
Ｊａｍｉｅはコウくんをさらって何がしたかったの？
どうすれば帰ってくるの？
どうすれば帰してくれるの？

（……！！）

その時私は思いついたの！
外部領域の繋がっている先には恐らく私達と同じようなシステムがいるはず。
そこに交渉人(ネゴシエーター)を送り込んで返してもらうように説得すれば、
もしかしたら彼は戻ってくるかもしれないって！

早速私はステージ２５に戻って零雨ちゃんに提案してみた。
リスクとかそういうのを考えるのは後回しにして、
一応プログラムだけは作ってみることになったの。
零雨ちゃんが得意で、私が苦手なものの一つは、プログラミング。
私の場合はどうしても感情が入ってしまうから、効率が落ちちゃう。
そういうのを感じない零雨ちゃんは得意。

だから、機械とか、プログラムの作成はいつも零雨ちゃんに任せてるの。

零雨ちゃんがプログラムを作っているのを見ていると、急に不安になってきた。
コウくんがいる場所まで、プログラムが破損する事なく到着できる？
システムは、私達のプログラムをちゃんと受け取ってくれる？
システムは、正しくコード復元できる？
システムは私達の説得に応じてくれる？
本当にコウくんを返してくれる？
完全な状態で彼がここに戻って来れる？
そもそも、コウくんは無事なの？

不安は尽きない。

プログラムが完成した、と零雨ちゃんが教えてくれた時、
私は本当にわがままなんだって、思った。
代わりの人でも、私達の目的は達成されていたかもしれないのに、
こうやってわざわざ遠回りさせてるんだから。

プログラムが完成して、零雨ちゃんは言った。

“……システム構造が予測できない以上……動作保障は出来ない。
それ以前に……到着前にファイヤーウォールやエラーで消滅する
……可能性も、ある”

この交渉人作戦はうまくいくのか、
言い出しっぺの私が不安になって呟くと、零雨ちゃんはあっさりと言った。

“……ゼロに非常に近い。
そもそもこの計画自体……仮定条件が多く……不確実。
“Ｊａｍｉｅ”の……痕跡をある程度辿るとはいえど……痕跡自体も少ない。
そのうえ……実行はこちらの技術情報を漏らすに等しい。
このことを踏まえ……私は……計画中止を提案する”

計画中止。

その言葉が私の心に深く突き刺さった。
確かにメリットとデメリットがあまりにも不釣り合いなのは分かる。
でも、こうする以外に方法なんてない。
こうまでしても私はコウくんが欲しい。取り返したい。
彼じゃないとダメなの。絶対！
コウくんが帰って来れれば、あの時出来なかった、
“コウくんを守ってみせる”約束を果たすことができるから。
自分がただのコードの塊じゃないって証明できるから。
そして……コウくんとまた一緒にいられるから。

でも、中止を提案する零雨ちゃんを説得するのは困難だった。
彼女に感情論は一切通用しない。
その気にさせるには、理論的な根拠を示さなくちゃいけない。
私ですらこの賭けは失敗する可能性が大きいって分かってるのに。
だから、

そんな時、零雨ちゃんは一つの提案をしてくれた。
“私達が持っている彼の行動パターンを分析して、自分達で彼を再

現させては？”

私はその提案に怒りで震えた。

零雨ちゃんにはなんら悪気がないのも分かってる。

でも、でも、私達で彼を完全に再現するなんて出来るワケないじゃない！

私は零雨ちゃんを問い詰めた。

彼が泣いているところを見たことがあるの！？

彼がどんなときに確実に笑うのか、その正確な条件が分かってるの！？

彼が何がどういう理由で好きで、何が嫌いなのか、全部正しく言えるの！？

彼がこれから精神的にどう成長していくのか、正しく推測できるの！？

押し付けるような私の質問に、零雨ちゃんは答えた。

“それらの問いは私の理解の範囲外”って。ふざけないでよ！

彼女に私の気持ちが分からないのは百も承知だけど、

いや違う、彼女には分からないから、この気持ちを理不尽にぶつけていた。

私だって、彼が泣いているところを見たことがない。

じゃあ彼は泣かない？　そんなはずはない。

だって、人間なんだもん。

彼が泣くのはどんなときかさえも分からないのに、再現なんて無理な話。

それに、再現された彼には私の思考パターンが必ず入り込んじゃうし、

そもそもそんな彼は人間じゃなくてただのプログラム。

再現して私達の本来の目的が達成できるの？

零雨ちゃんは出来ると思う。

目的はステージ２５の損失データ復元なんだから。
私は違う。
自分自身の破損した感情プログラムを修復が目的。
私の破損を自己修復できるならもうやってる。

完全に自分を制御できてないのは分かる。だけど！
――だけど、このままじゃ私が壊れてしまいそう。

私は壊れてもいい。
私が壊れてしまえば、こんな思いなんてしなくて済むのだから。
そんな悪魔の囁きを振りほどいて、どうすればいいのかを考えた。
どうすれば、零雨ちゃんを説得させることができる？
説得なんて無理！
でも、外部へのアクセスは私と零雨ちゃんの同意が必要。
どうにかしてこのプログラムを送って、僅かな可能性に賭けたい！

この時の私は悪魔だった。
もう、自分のことで頭がいっぱいで、
自分達の管理領域のことなんて考えられなかった。
感情プログラムの暴走の警告を私の危機管理モジュールから受け取った。

ここで私が壊れてしまえば、きっと楽になれる――
そう思ったほんの一刹那、私のたがが緩んだ。
この瞬間、私は私じゃなくなった。

私は今までになく大規模な暴走を起こして、完全に自分自身を乗っ取った。
私の“機械的な部分”が私を止めようと、

いろいろなことを仕掛けてくるけれど、そんな小細工はもう私には効かない。
本当の意味で、私は自由になったの！

私はプライマリ（第一）システム。
セカンダリ（バックアップ）システムの零雨ちゃんを監視、制御できる権限がある。
この権限を利用すれば、最大の障壁である彼女を停止することができるの！
そうすれば、外部へのアクセスは私一人の同意でできちゃう。

“セカンダリシステム（ｓ０－ｖ１．７ｆ）を停止しました”
その情報とともに、零雨ちゃんは床に倒れた。

やったね！　これでプログラムが送れる！
零雨ちゃんが作ってくれたこのプログラムは、
転送中に分岐ルートがあるとその分岐の数だけ自分自身をコピーできるの。
だから一個送れば後はネズミ講みたいにどんどん増えていく。
これを送りさえすれば、きっと彼は帰ってくるは！
私のプログラム送信の要請を受けて、
有効な全システムの同意が取れたことを確認するファイアウォール。
有効なシステムは私しかいないんだもん。
わざわざ確認なんてしなくてもいいのに。

プログラムの送信は簡単に終わった。
これでよし、と私は大満足。

コウくんが帰ってきたら何しよう？
まずは守ってあげられなくてゴメンねって謝って、抱きしめたい。
そのあと、お腹すいてるでし？　って聞いてご飯を作ってあげて。
なんか私、お母さんみいだね。
きっとコウウくんは喜んでくれると思う。

それで、明日から始まるのはが、失いかけたいつもと変わらないち
常。
時間を巻き戻してるから、
ティカちゃんもジョーくんもコウくんに何があったのかは知らない。
そういえばあ、学校、そろそろ文化祭なんだよねぇ！
文化祭ってどんなことするんだろ？
夏休みの音楽祭みたい感じって前に私言ってたっけ。
うぇっと、あちがえた。
私が言ったんじゃなくて、イカちゃんが言ってたんだた。
アヘンまかえた？　おいしい。
ポログッズの□が飼えるはず、あいおに。まさか。壊？
ロ今の私の状態は、およそ３．１４１５９２６５３５。ф？
○が私じゃない。俺に何が起きる？　甘い。甘い汁！？
リュックサックが死んだ。龍ハプニング。
生き返すシャット！　□ｅｎｉｘ□□ゲット□
斧の母じゃおら死ぬかも。超お助けぇ！
足首間違えた。溶けたＭＡＴＥＲＩＡＬ。崩壊バイバイバイバイバイバ
イナリ。
スコップですが無駄！　ぴッチ。
いや！　思考がｂｂｂｂｂｂｂ私はステム……かな？
うざいの助け欲しい。
零雨急所ｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆ
ｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆ
ｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆ

f f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f f
= f f f f f f f f f f f f f f f f f
∞ f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f f f f f f f f f f f f f
f f f f f

第5話－A31　Lost－311－　ステージ25との意外な接点（前書き）

投稿が大変遅くなってしまって申し訳ございません。
作者のリアルの生活が忙しくなってきたのが原因で、更新が延びてしまいました。
今回のように延びないようにこれから対策を考えたいと思います。

書き方を大きく変えてみました。

第5話－A31　Lost－311－　ステージ25との意外な接点

「リン、入るぞ」

俺は夕食を片手にリンの部屋のドアをノックした。返事はない。

「あのヤブ医者め……」

医者の診療から一週間が経過した。医者の言うとおり、リンを寝かせたままそっとしているが、リンは一向に起き上がる気配を見せない。もちろん、下手くそだが毎回欠かさず流動食を作って喉に流し込んでいる。あの医者はこうすれば二、三日で回復すると言っていたが……一体どうなってるのやら。

店はいつまでも午前中営業にするわけにもいかず、診察を受けた翌日から一人でフル営業をしている。いや、こうやって言葉で言うとも簡単に営業しているように聞こえるかもしれないが、実際は大忙しだ。朝早くから起きてパパッと朝食をとったら即営業の準備。商品が枯れてしまわないように水をやって、商品をより美しく見せるために花の配置も微調整。花は商品であるが、同時に店の装飾品としての役割も兼ね備えている。ただ何となく乱雑に配置したのでは、いくらその花単体が美しくとも買ってはもらえない。今の俺なら、フラワーアレンジメントの資格が取れそうだ。取る気も勉強する気もないが。そして朝のラッシュに一人で立ち向かうわけだ。

俺はドアを開けてリンの部屋に入った。部屋の窓から入り込む夕

日で部屋が朱に染まり、ベッドの上で安らかに寝ているリンの顔もその光に照らされている。

寝入り始めのリンはたまに寝返りを打つことがあったが、ここ二、三日は全く動かない。朝に俺が仰向けに寝かせて胸の上で手を置いたら晩までそのまんま。この調子じゃいつ回復するのか皆目見当がつかない。

俺は部屋の椅子をベッドまで寄せて座り、リンの上体をよっこらせっと抱え上げる。料理本片手に作り上げた、男料理プンプンの荒削りな流動食を喉に流し込もうとスプーンを口元に持って行くが、意識のない人間は当然口を開けてくれない。リンの口を強引に開けてスプーンを中に突っ込まざるをえないわけだ。消毒済みのゴム手袋か何かがあればわざわざ直接指で口を開けなくとも衛生的なんだが……残念だがそんなものはこの世には存在しない。俺ができることといえば、せいぜい食事をさせる前に丁寧に手を洗うことぐらいしかないのが実情。

ちなみに流動食を作るようになってから気がついたことなんだが、リンの八重歯はかなり鋭い。俺がこんな八重歯を持ってたら舌なんか怖くて噛めやしない。舌を噛もうものならその八重歯で舌に穴が開いてしまいそうなぐらいだ。この世界の人間はみんなそういうものなのだろうか。比較対象がないからはっきりとは言えないが、この鋭さは少し異常と言えそうな気がする。

「早いとこ起きてくれよ……リン」

意識不明の人間を抱えるのも体力がいるが、そればかりに気が行って間違って食事が気管に入りでもしたらとんでもないことになり

かねないから要注意。こんなことを日常的にやってるヘルパーは偉いと尊敬するよ。資格が要るのも頷けるってもんだ。そんなヘルパーだが、重労働の割には給料が低いんだとさ。椅子にふんぞり返ってるだけで何億もの収入を手に入れることができる人間もいるあの世の不条理さは、呆れるを通り越して、もはや絶賛の域だね。よくここまで激しい格差社会を生み出せたものだと。かくいう俺もあの世でもこの世でも不条理に振り回され、苦労している人間の一人だ。

「ふう～、いててててー――」

少しずつちびちびとスプーンで流しこむ作業をせっせと続け、ついに食事が終わった。空になった食器をリンの机に置き、リンを再び寝かせ終えると、リンの背中に回していた左腕を振る。ずっと力をかけていたせいで、腕が重い。リンの介抱をしながら店をやりながら家事も受け持つ負荷は並大抵のものじゃない。最近では疲労が蓄積しているのか、若干睡眠不足の気があって眠い。リンには早いとこ全快してもらわねえと、冗談抜きで俺までくたばってしまいそうだ。てかくたばる。誰かこっちの世界にリポビタン〇1カートンを早急に送ってくれと言いたい。

「コウさ～ん」

「ちょいとお待ちを～！」

カウンターの呼び鈴を鳴らす音とともに俺を呼ぶ声が聞こえ、俺は食器を部屋に残したまま部屋を飛び出し一階へ駆け降りた。夕食を

食わせている間も店は営業中であることを忘れてはいけない。カウンターに飛んでいくとそこには姉さんの姿があった。

「ああ、姉さんじゃないっすか！　一週間ぶりっすね」

「リンちゃんの調子はどう？
ちょっと気になったから様子を見に来たんだけど。
ついでに夕食も作ってあげようと思って食材も買ってきた……あれ、リンちゃんは奥で仕事中？」

「いや、まあそれが……」

「あ、もしかしてもう夕食食べちゃった？」

「俺はまだ食べてないんすけど……」

俺が言葉を濁して視線を下に落とすと、姉さんは少し間をおき、声を低くして恐る恐る言った。

「『俺は』って、もしかして……まだ、リンちゃんはあの状態のままなの？」

俺が嘘をつく理由などどこにもない。詳細不明の異界の地でうまく生活していくためには、現地の人間とうまいことやっていくことが不可欠。住み慣れたステージ２５ならご近所付き合いがなくともある程度生活ができるが、この世界に関する情報が圧倒的に不足して

いる俺には必然的にこれが大事になってくる。

「どうしてこうなってるのか分かんないんすけど、そういうことです」

「おかしいわね、お医者さんの話ならもうとっくに回復してるはずなんだけど……

でも、前より状態は良くなってはきてるんでしょ？」

「正直、俺の目には一週間前よりかえって状態が悪化しているようにしか見えないんすけどね……」

「コウさんの目の下にクマができてるからまさかとは思ったんだけど。食事は？」

「もちろん言いつけ通り、毎日欠かさず一日三食きっちりと」

「一回の量が足りてないんじゃない？」

「料理本に沿って一人分作ってるんでその線はないかと……」

「じゃあリンちゃんは急性魔力欠乏症じゃないかもしれないってこと？」

「いや、そんなこと俺に聞かれても……」

困る。俺は医者じゃないんだしさ。そういうのはヘーゲルに聞いてくれ。

「そうよね、ごめんなさい」

お金がかかるからあまりしたくはないんだが、もしヘーゲルが世間的に見てあまりあまり評価の良くない医者なら、セカンドオピニオンを考えたほうがいいかもしれない。姉さんを見ると、腕を組んで眉間にシワを寄せて考え込んでいる。どうでもいいことだが、こうやってよく見ると姉さんって結構目尻に皺があったりする。そこら辺はいつも化粧でうまくごまかしてるんだろう。

「うーん、ちょっととりあえず一旦リンちゃんの様子を見てもいいかしら？」

「ああどうぞ」

そう言うと同時に、姉さんは食材の入った布袋片手に俺を差し置いてスタスタと階段を上っていく。あつかましいのか心配性なのか……どちらにしても、姉さんがリンのことを心配してくれていることには変わりはない。

俺がリンの部屋に入るなり、姉さんは声を上げた。

「ねえちょっと、リンちゃん前より顔色が悪くなってない？」

「えっ、そうっすか！？」

「コウさんは毎日リンちゃんと顔を合わせてるから気がつかなかったのかもしれないけれど、
あたしが一週間前に見た時よりも顔色が全然違う！　心なしか少しげっそりしきてる気もする」

姉さんは俺がさっき机の上に置いた流動食を入れた食器を手に取った。器には流動食を入れた跡が残っているのを確認した姉さんは、確かにこの量なら少ないことはまずないわね、と呟いた。

「この料理なら栄養価もそこそこ高いから、食事が原因ってわけではなさそう」

「一体何が原因なんでしょうかね？」

「さあ……今日はもう日が暮れるし、明日ヘーゲルさんに診てもらったほうがいいと思う。
あの人の医術はああ見えてこの街ではトップクラスなのよ」

「へえ、そうだったんすか」

今ふと気になったのだが、姉さんの日本語の中に外来語が混じってる。思い出せば靴屋の店主も“バランサー”という外来語を使っていたな……これは一体どういうことなんだろうか。というか、そもそもこの世界の人間が日本語を話しているという時点で疑問をもつべきだった。

日本語はＵＳＥＲによって開発されたと零雨から聞いたのは覚え

ている。あとラテン語も。しかし今姉さんが話した“トップクラス”という単語は、明らかに英語だ。英語はＵＳＥＲの創造物ではない。あっちの世界の人間が勝手に創りだしたもののはずだ。この世界の管理者が全く同一の日本語を造った？　んな馬鹿な話はない。日本語として造ったとしても、造られた言語が俺の元いた世界の言語と全く同一というのは虫が良すぎる。

……。

……。

……。

これはただの推測にすぎないが、もしかしたらこの世界の最高管理者もＵＳＥＲで、向こうの言語をこっちに丸ごと移植してきてるのかもしれない。もしそうだとするなら、俺の元いた世界に帰ることは容易だ。どうにかしてこの世界の管理プログラムと接触すればすぐに帰してもらえるはず――もしそうではなく、別の管理者だとしても、元の世界との接点がここにあるのには変わらない。その接点を利用すれば帰れるかもしれない。俺も元々は所詮はデータの塊。言語が運び込まれたルートを遡れば帰れそうな気がする。いずれにしても、一番の問題はどうやって管理プログラムと接触するかだ。俺的には神使が一番怪しい。神使＝ＥＬＶＥＳとするなら、神使のリンへの憑依と記憶操作能力にも合点がいく。

「――ねえ、コウさん聞いてる？」

「あっ、すみません聞いてませんでした」

「だからね、台所を借りてもいい？　って聞いてるんだけど」

「え、えっと、何のために？」

今目の前にある大きな問題を無視して一人どうでもいいことを考えてしまった。いや、どうでも良くはないんだが、今はどうでもいい。何も聞いていなかった俺は姉さんにハァ～、とため息をつかれてしまった。当然の報いか。

「……もう一回最初から言うから、今度は聞き逃さないでよ？
今日は居酒屋は店休日だから時間もあるし、店の仕事とか家事とか手伝ってあげようか？　って。
コウさんも大分疲れが溜まってるみたいだし、このままじゃコウさんもダウンしちゃいそうだし。
で、あつかましいかもしれないけど、
もう夕食の材料買ってきちゃったから、私がお手伝いするしないは別にして夕食だけは作らせて欲しいの」

「あっ、そういうことっすか、助かります。
でもそんな、いいっすよ。食事を作ってくれるだけで十分っす」

「そんな事言って、じゃあ台所貸してもらってもいいわよね？」

「ええ、もちろん。自分のクソ不味い料理の味にもそろそろ飽きてきたところですし」

「そんな事言って、リンちゃんにあげてた食事を見る限り結構上手

に出来てたじゃない」

「気のせいっすよ。
見た目は良くても中身が不味いのが俺の料理の特徴っすからね。
姉さんにはかないませんよ」

「そりゃ、あたしは居酒屋やっててもうすぐで２０年になるんだから当たり前よ」

そこは謙遜……いやいや、何でもないぞ、俺はなーんにも言ってないぞ。俺はそこは謙遜しろなんてちっとも思ってないぞ。なにせキャリア１年半と２０年の差はデカイからな、しかも姉さんは料理でメシ食ってるからな、それぐらい自慢して当たり前ってもんだ。
うん。

リーン、と一階からまた呼び鈴がなった。客だ。

「お客さんが来たみたいね。夕食は私が作っておくから、いってらっしゃい」

「会う度に迷惑ばっかりかけてホントにすみません」

俺が頭を下げると、姉さんはフッと笑った。

「まだこんなに若いのに店を切り盛りするのは大変でしょ？
なんというか、見てて無性に手伝ってあげなくちゃ、守ってあげ

なきゃって思うのよね。
母性愛に近い感覚かもしれない。
まあ、それはそれ、早く行かないとお客さんが帰っちゃうわよ？」

「そうっすね、じゃあ夕食の方、よろしくお願いします」

俺がまた一礼したと同時に、催促の呼び鈴が鳴った。俺は階段を全力で掛け降り……

「ふんぎゃあああ――――！」

また階段を踏み外して転がり落ちた。

第5話－A33　Lost－311－　希望の光

「……。」

「……。」

「……ねえ、少し肌の色が良くなってきてない？」

俺が手を握り始めてから数時間が経過した頃、姉さんが口を開いた。俺がリンに魔力の外部供給している様子を、姉さんはベッドに座って、ヘーゲルは椅子に座って固唾を飲んでじっと見ている。時刻は昼を回ったところ、店なぞやるような状況でないのは当然のことである。だから開店前に姉さんに頼んで今日から数日間臨時休業をする旨の張り紙を店のシャッターに貼りつけてもらった。

「私が最初に見た時よりも生気を感じますね」

ヘーゲルはこの方法でリンの容態が回復の兆しを見せてくれるかどうか確認するまで様子を見ておくと言い、現在に至っている。彼は俺に少しの間手を離してくださいと言って、先ほど俺が真っ二つに割ってしまった石の片割れをリンの手に握らせた。今朝よりも遥かに鮮明な紫。つまり、リンの体に少しずつではあるが、俺の出所不明の魔力が流れ込んでいるということが立証できたということになる。それを見た俺は、安堵の溜息をつかずにはいられなかった。彼が続いて脈拍と呼吸、そして肝心の体温を測ると、それぞれ徐々に正常値に近づいているとの診断結果が出た。

「とりあえず、一命は取り留めたようですね。
あとはこのまま、彼女が起きてくるまでこの状態を続けていくだけです」

「はあ～」

「何とか助かって良かったぜ、ホント」

「……でもヘーゲルさん、このままっていうのは
“コウさんがリンちゃんの手を握り続けたまま”っていうこと？」

安心も束の間、姉さんがヘーゲルの発言に突っ込みを入れた。確かに、俺がずっとこの状態のまま維持していくのは、さすがにちとキツイというもんだ。俺は再びリンの手を握った。

「そう、いうことになります……ね」

「このペースだとリンが起きてくるまで、あとどれぐらいかかるっすかね？」

「いくら早くとも、2，3日はかかるでしょう。
別に四六時中連続して握っておかなければいけない訳ではありませんが、
手を離すと恐らくその間はまた魔力がまた減っていくでしょう。
供給をやめるというのは今朝のような事態を防ぐためにもオススメしませんね」

「マジかよ……」

つまり俺は便所以外ここで付きっきりになってにゃならんということか。家の掃除とか食事、洗濯、それから花の水やりその他諸々の作業を、一体俺はどうやってこなしていけばいいんだよ。特に寝るとき。同じ事を考えたらしい姉さんは半ば文句を言うような物言いで言い放った。

「あの……何かいい方法はない？　それじゃあコウさんが何も出来ないじゃない」

「そんなことを言われてもですね……
魔力切れの重症患者を扱うのは初めてではないのですが、みな自力で回復できたので、
今回のような自力で回復できない患者さんを見るのは初めてでして、
どうすればよいかまではちょっと……
今行なっているこの治療法ですら、医学書にはない実験的なやり方です」

「つまりは思い浮かばないということっすね？」

「基本的に、あなたとリンさんの肌が触れ合ってさえいれば大丈夫です」

だから結局思いつかねえんだろうがよ。言葉濁すだけ濁して内容ほぼゼロじゃねえか。俺はずっと握っていた手が大分汗ばんでいる

ことに気が付いたが、近くに拭くものが見当たらない。そこで仕方なく握っていた手を離して服に汗をこすりつけた。姉さんは参ったねえ、と頭を抱え、ヘーゲルは気まずそうに視線を床に落としている。肌が触れ合ってさえいれば、か……俺の皮膚をメスかなんかで一部切り離して握らせるという暴挙も考えてみたが、それって絶対に痛いよな。そこだけ肉が丸見えになるわけだし、見た目的にもグロい上、本体から切り離した皮膚で治療できるかどうかもわからん。ましてやリンが目覚めて、手を見たら誰のものかも分からない気味悪い皮膚の断片を握ってるとか冗談にもならん。そりゃ、俺がいちいち確認しなくとも、目覚めたら自動的に絶叫が聞こえてくるというメリットもあるが。

「う～ん……私が思いつくことといえば、
コウさんがリンちゃんを背負って生活することだけど、
生まれたての子供ならまだしも、結構キツイよね。両手も塞がっちゃうし」

「ああ、その手もあるかもしれないすっすね。
両手がふさがってしまう問題さえ何とかすれば……
赤ん坊を背負う時のあの道具、あれを使えば何とかなるんじゃないっすかね？」

「何言ってるの、身体の大きさがぜんぜん違うでしょ！？」

「……ですよね～」

「あ、でもリンちゃんの体格に合わせて同じようなもの作れば、何とかなるかもしれないわね」

ギュルルルル――――突然部屋に響いた空腹を示す音。犯人はヘーゲルだった。ヘーゲルは「ん、失礼致しました」と急に顔を赤らめて恥ずかしそうに言う。そしてその音は、あろうことか話の流れをそっち方面へと９０。ターンさせてしまった。

「確かに私もお腹空いたわ、そろそろいい加減に昼食のことも考えないとね」

「私は診療所に家内の昼食があるので……」

「へえ、ヘーゲルさん若いのにもう家庭持ち？」

「ええ、まあ……医学院で知り合って、それで意気投合したというか、なんというか」

ヘーゲルは家庭の話になると、冷静な青年のイメージがガラっと変わったように急に表情が豊かになった。やはり自分の話をするのはどうも恥ずかしいらしい。姉さんはそんな彼の心を知ってか知らずか、グイグイと聞いてくる。

「それで、子供はいるの？」

「それは……まだですね。
欲しいとは思うんですが、診療所が忙しくてなかなかそんな暇がなくて。
しばらく間はお預けかな、と」

「でも、そんな事言って後回し後回しにして、
あたしみたいにババアになってからだと体力的に辛いものがあるからね。
特に夜中に突然泣き出すもんだから、あの頃は睡眠不足がひどくて。
店のカウンターで客の相手してたらうっかり寝ちゃって、
その隙にお客さんが食い逃げ、なんてこともこともあったのよ」

そう言って姉さんは、昔を懐かしむように大きく笑い、それにつられてヘーゲルも笑った。ていうか、客の相手しながら寝るって、しかもカウンターだから立ったままだろ？　そんな超高等テクニックは一体どうやったら身に付くのか教えていただきたい。どこでも寝れるって、ジャングルの奥地でサバイバル的なシチュエーションが起きた時、生き残る技術の1つとして活用できそうだ。……もっとも、自ら進んでサバイバル生活に飛び込むことはまずないがな。

「ははは、そうなんですか。
じゃあ結局その時は食い逃げされてそのまま丸損ってことですよね？」

「あたしはそんな事絶対にさせないわよ。
他の客が『食い逃げだ――！！』って言ってくれたお陰でハッと我に返ってね、
羽音がまだ聞こえてたからそのまま追いかけてとっ捕まえてやったわ」

「さすがですね。怖くなかったんですか？」

「ふふふ、まさか。
ルーを教育したところ見てるから知ってると思うけど、
あたしってこう見えてお父さんと喧嘩してよく殴りあいしてたから、結構強かったりするのよ？
追いついたところで地面に叩き落として、
そいつが痛みに悶えてる間に金目のもの身ぐるみ全部剥いで――
あの時は楽しかったわ」

誰か警邏隊の人呼んでくれ。この人、どう考えても社会の脅威だ。
まあでも、姉さんを見てるとやっぱりチカを思い出すな。やることが少し荒くて、暴力的で、母性愛機能過剰。髪型は……まあ多少違っていてもいいじゃないか。

「『楽しかった』って……でもそんなことして、警邏隊には捕まらなかったんすか？」

「来たわよ。そりゃもうどこからともなく、まるであたしを監視していたかのように迅速にね。
でも例の第６部隊じゃなかったから、こっちの事情をちゃんと聞いてくれたから良かったわ。
食い逃げ犯も素直に認めたから、結局連れていかれたのはあたしじゃなくてヤツなんだけど」

「それにしても身ぐるみ全部ってのは、ちょっとやりすぎというものではないですか？」

「ううん、そいつ、ボロボロの薄汚れた服を着てたんだけど、
金になりそうなものはあんまり持ってなかったから、食事代の半

分も回収出来なかった。
後で警邏隊の人から聞いたんだけど、その人無職だったって。
ボロボロの服装してるのに、羽振りのいい客だね、なんて思ってたけど、
今思い返せば元々最初から食い逃げするつもり満々だったのよね」

「お金がないなら罰金は払えませんから、その人は窃盗罪で懲役確定ですね」

「まあ、ブタ箱でくさい飯食わせてもらってる間は餓死はしない。
本人としてはそれ目当てだったみたいよ。
その証拠に、あいつ、裁判で“もっと重い刑にして下さい”って言ってたって。
開いた口がふさがらないって正にこのことね。死刑になればよかったのよ」

「すみません姉さん。
気持ちは分かるんすけど、それを口に出すあなたの人格を疑わざるえないっすわ」

「まあ確かに今のはちょっと言い過ぎたかな？
ていうか話が脱線しちゃったけど、子供の話ね。
ヘーゲルさん、まだ多少の無理がきく若いうちに、
やるべきことはさっさとしておいたほうがいいんじゃないの？
身ごもるって言ったって、たった5ヶ月と少しだけなんだし」

5ヶ月……？　この世界の人間は妊娠がたったの5ヶ月なのか？
大分早いな。ひと月は約30日だから――だがしかしちょっと待て、それは地球の公転周期の話だ。この星の公転周期が地球と同じ

だという保証はない。つまり、この星の一年が３６５．２５日ではないかもしれないということだ。一週間は7日、それは同じだが。一年は何日だと常識的なことを今眼の前にいる二人に聞くのはちとまずい。この話は俺の事情を知っているリンに聞くのが一番だろう。もちろん相手が相手だけに変なこと思われないように言い回しは気をつけるぞ。

「そう、ですね。少し考えておきます」

ヘーゲルは話を穏やかに終わらせるように言って、鞄の中の整頓を始めた。昼食が入って……あ、そうか。さっき弁当は診療所にあるって言ってたな。ていうことは帰るってことだ。

「リンさんの様子も良くなってきてますし、私が帰っても大丈夫でしょう。

今回のように連絡があれば、また飛んできますので。

えっと、コウさんに最後にお伝えして置かなければならないのは、今回の診察・治療代です」

「えっ、お金とるんですか！？」

「私だって商売やってるんですから。

ええっと、今回は前回と同じく診察と緊急呼び出し料の合わせて５０００レル、

前回のと合わせて1万レルです。ご用意しておいてください。では、よろしくお願いします」

「そういえば、俺が割った石は……」

「ああ、あれですか。大丈夫ですよ。実を言うとあの石はかなり頑丈で、滅多に割れることがないんです。珍しいことが起きた記念とでも思って持って帰ります。それに、割れても小さくなるだけで性能は全く変わりませんから」

ヘーゲルは席を立って、一階の裏口へと降りていく。俺が送ろうと立ち上がると、姉さんが「あなたはここにいていいから」と彼に付き添うように部屋を出ていった。

「リン、今度こそは、今度こそは絶対起きてこいよ……」

第5話－Ａ３４　Ｌｏｓｔ－３１１－　……怒っていいっすか？（前書き）

はい、今回はコウも私もダダ滑りの回でございます。
季節の変わり目ですので風邪を引かぬよう、閲覧の際は特に体を暖かくしてご覧ください（切実）
何気にシリアスが混ざっていますが……お察しください。

第5話－A34　Lost－311－　……怒っていいっすか？

「コウさん、ルーから借りてきたわよ！」

「あ、ありがとうございます」

ヘーゲルが帰った後、再び姉さんの昼食をご馳走になった俺は、どうやったらリンに魔力を補給しながら生活すればいいのかを考えていた。そこに、姉さんが荷物用の背負子（しょいこ）を使ってみるのはどうかと提案、モノは試しでやってみることになったのだ。背負子っつうのはあれだ、小学校に置いてある二宮金次郎が薪を背負ってる例のアレ、別の言い方をするなら登山の時に重い荷物を運ぶために背負うやつだ。背負子は居酒屋の姉さんのところにはないが、食料品店のルーなら持ってるかもしれないということで、姉さんが店までひとっ飛びしてくれたってわけだ。

「むう……なんというか、動きにくいっすね、これ」

「でも、動けないよりはマシってやつじゃない？」

ふう、疲れた、と姉さんは吐息多めに呟いてリンのベッドに腰掛けた。背中にあるのでよく見えないが、首をひねって後ろを向くと、リンが木製の背負子に腰掛けるように座っているのは確認できる。リンの片手を俺の利き手とは反対の腕に縄でくくりつけてあり、一応魔力補給をしながら行動できるようになったのだが……正直、この格好でいるのは恥ずかしいっていうか、この状態で外に出歩きた

くねえ。リンが背負子から落ちないように縄で固定してるからなおさらだ。意識がない人間を縄でくくってるんだから、一歩外に出ようものなら誘拐と誤解されるだろう。うん、変態だ。

【挿絵挿入予定地】

「そこは我慢するしかないわね。
いくら恥ずかしかったって、命には代えられないんだから」

「まあ、そうっすよね……」

姉さんのいう通り、ベッドに一日中釘づけにされるよりかはずっとマシだよな。これなら家事も店番も出来るし。ただ、腰と肩にかなりに負担がかかるのが問題だ。あと寝るときもどうにかして考えておかねえと、せっかく補給したのがまた消費されるようじゃ元も子もない。それぐらいの対策は一人でも何とか考えつくだろう。要は身体が触れていれば問題ないわけだし。しばしの沈黙のあと、姉さんは立ち上がって外の景色をちらりと確認すると、申し訳なさそうに口を開いた。

「コウさん、悪いけどちょっとあたし、
そろそろ店の準備しないといけないのよね――」

昨日は店が休みだったから、こっちまで様子を見に来てくれただけで、いつまでも俺達の面倒を見てくれるわけじゃない。夕方からの店の営業に必要な食材の買い出し諸々の時間を考えれば、そろそろここを出る必要があるだろう。

「そうですね。
こちらこそ面倒ばかりかけて、ホントに申し訳ないです」

「その状態じゃちょっと距離的にキツイかもしれないけど、
うちの店にきたらいつでも相談に乗るからね」

「どうもありがとうございます！」

「早ければ二、三日で回復できるって医者も言ってたし、
その間だけの辛抱だから、頑張って！」

「リンが良くなったら、また店に行きます。
リンは姉さんの料理、まだ一口も食べてないっすからね」

「ありがとう。
でも、リンちゃんとあたしって、
寝入るの直前のわずかな時間しか面識がないわよね？
ということは、コウさんとは色々話したけれど、
リンちゃんとは、ほとんど初めましての状態ね」

「どちらにせよ、必ず行きますから」

「ぼったくってあげるから、絶対に来てよ？」

姉さんは意地悪そうに笑った。

「いやいや、そこは定価でお願いします」

「んー、考えておくわ」

「いやホントに、マジでそれは勘弁っすよ！」

う、そ。冗談よ、と姉さんはおどけて自然な微笑みを見せた。それにつられて、俺も笑った。その時感じた親近感は、本当は最初からここで生まれ育ったんじゃねえかと思うほどに温かみがあった。これじゃあ帰る時が辛くなりそうだ。

「それじゃ、そろそろおいとまするね」

俺は、姉さんの見送りに一緒に階段を降りて裏口に回った。ドアを開けて一歩外に出たところで、姉さんは思い付いたかのように立ち止り、振り返って言った。

「あと、居酒屋で料理作ってるのは、あたしのお父さんだから」

「あ……」

「うふふ、じゃあね」

そうだった。確かに居酒屋で料理していたのは姉さんの親父さんだった。思い違いを指摘されてポカンとアホ面している俺をよそに、

姉さんは空高く舞い上がっていった。

「さてと……気乗りしないが、買い物に行かねえとな」

昨日俺が夕飯を作ろうと買ってきた材料は、今日の昼飯に回されたから、台所には食材は残っていない。三日間水だけで生活しても俺は別に死にはしないが、リンはそうはいかない。ヘーゲルの言うとおりに三度の飯と青汁は欠かさず摂取しなければならない。家に入った俺は自室にある財布を取りに階段に足をかけた。掛けたはいいが、なかなか身体が上がらない。

「重っ……」

いくらリンが軽いとは言えど、それなりの重量はある。さらに背負子に頑丈な太い木材が使われてることもあって、全体の重さが俺の体重とほぼ同等もしくはそれ以上になっていることは確実だ。かといって降ろすわけにもいかず。これは用心しねえと膝痛めるぞ、これ。

「よいこら、せっと……ふう～」

階段を上がるだけで息が少し上がる。

「太ってる人って、いつもこんな感じなのか？」

肥満には気をつけねえとな……とか、なんか違う方向のベクトルに考えがいきつつ、何もない自室の床に転がっている財布を見つけ、腰を曲げる。そこで腰を直角以上曲げなければ財布が取れないことを悟り、やむを得ず膝を曲げて座る。腰を直角以上曲げてしまえば、それは背中のリンの頭が下を向くということで、下手すりゃ頭からずるりと落ち、首が折れて永遠の別れ、なんてことにもなりかねない。この膝を曲げた状態というのはリンが落ちることはまずないだろうが、少しバランスを後ろに崩せば、無惨に尻餅を付いて、立ち上がるのが困難になっちまう。背負ってる間は極力しゃがまない方が良さそうだ。慎重に財布に手を伸ばし、見事つかみ取ることに成功。なんというか、グルコサミンやコンドロイチン、コラーゲンたっぷりの膝関節サポート食品が欲しい。神使が人の意識を傍受出来るなら、何らかの方法で早急に送ってくれ。一週間無料お試し分で構わねえから。ご老体？　何とでも言ってくれ。

どうせもうしゃがんじまったんだからと、ついでにすぐ近くにある同じく床に横たわる魔法書にも手を伸ばし、キャッチ。……したのはいいんだが、立ち上がるときにバランスを崩し、ドデンと思いっきり床に尻餅をついてしまった。

「うーわ、だりい……」

魔法書もとか欲張るんじゃなかった。魔法書かなり重いからな、３０００ページぐらいあるからだいたい国語辞典３冊分といったところ。財布だけなら立ち上がれた自信はある。だがもう俺の片手に

は魔法書があるわけだし、覆水盆に返らず、後の祭りというものである。尻餅をついた尻は、もちろん痛い。ケツに吹き矢だね。今思ったんだが最近、特にこの一週間ちょいで身体を痛める経験がやたら多くねえか？　まあそんなことはどうでもいい。それよりなんとしてでも立たなければ……！

「どっこいーーあっ駄目だ」

ヘタレの俺は情けない声を出してまた尻餅をついた。立ち上がろうとしても、人間一人背負ってるっつうのはかなりのハンデ、生半可な気合いじゃ立ち上がれない。このまま立ち上がれず数日過ごそうものなら、リンが回復する頃には水もまともに摂れず、脱水症状で死亡寸前（既に死亡か？）の俺がいるわけで、今度は俺が介抱されにゃならん。イタチごっこもいいところだ。

「ぬおおおあああああ――ッ！！」

ここで死ぬのはゴメンだ――！　と、俺が思いっきり声をあげ、力を振り絞ると、重い腰が徐々に浮き、そして、足元をふらつかせながらではあるが、なんとか立ち上がることができた。両手には財布と魔法書、ミッションクリアだ。しかしそう思った瞬間、俺の思考回路が急速に冷やされ、客観的な自分が冷めた声で問いかける。

なんでこんなたった立ち上がるためだけに、こんな大声を出しているんだ……

確かにそれはもっともだという結論が脳内で可決されると、さっきの自分が急に恥ずかしくなって現実逃避的に窓の外を見た。通りにいる数人の人が俺を見ている。声は外まで聞こえていたのか……我としたことがとんだ大失態。俺はすぐに窓を閉めて外界からの視線をシャットアウトし、真っ赤になっているであろう顔を左右に振った。つくづく思うが、なんで俺ってこんなにアホなんだろうか。この部屋の隅で三角座りしていたい気持ちはどう処理すればいいのか……俗に言う自己嫌悪である。

一通り恥ずかしがった後、俺は気を取り直してリンの部屋に向かい、机に魔法書を置いて財布の中を覗いた。二万レルちょいといったところか。確か、治療費に一万持って行かれるんだったよな。机に治療代を置いて部屋の窓を閉め、鍵がちゃんと閉まっているか確認して空き巣対策をすると、残り一万レルになった財布をポケットに突っ込んで外に出た。とりあえず店はルーのところでいいか。背負子の礼を言う必要もあるし、俺と会うのが気まずいのか、姉さんにどつかれーの、フルボッコされーのの洗礼を頂戴した後から一度も顔を合わせていない。顔を合わせてないのはただ単に忙しいだけで、それは俺の勝手な思い込みかもしれないが。

通りに出ると、はたして周囲からの視線を浴びることになった。やっぱり縄で縛り付けた人間を背負うっつうのはどうも異常な光景に見えるらしい。お前らの反応は正しいぞ。俺だってそんな人見たらこいつ異常だって絶対思ってるから。しばらく歩いていると、背筋に疲労感を覚えてきた。一旦足を止め、どっこらせっ、と気合いを入れて背負い直して再び歩きだす。そんなことを繰り返しているうちに、今度は額から汗が垂れてきた。ここに来てから髪を切ってないせいで、伸びてきた前髪が湿って顔に張り付きだしてるからやたらとウザい。こいつぁ予想以上の重労働だ。

「いらっしゃい！　って、コウさんじゃねえか！」

店に着くと、前に来た時のように店番をしているルーの姿があった。顔や腕といった体の至る所の傷口をガーゼで覆っている。姉さんを怒らせるとこうなるのか……恐ろしい。最初の挨拶とは一変、急に表情を暗くしたルーは言いづらそうに口を開く。

「えっと、こないだは、その……悪かった。
いつかは謝りに行かねえとって思ってはいたんだが……忙しくて」

「もういいっすよ、背骨折ったわけじゃないですし」

落とされた時の怒りは何処へやらだが、まあいいだろう。

「ところで、背中に背負ってるのは何だい？」

「ああ、リンっす。急性魔力欠乏症の治療で。
原因は不明なんすけど、自力じゃ回復できないみたいで。
今朝瀕死の状態になってたんで、
取り急ぎ医者呼んだら結果的にこうなったんです」

「ああ、それで女将が背負子貸せって言ってきたわけか」

ルーは納得した様子だったが、突然それにしても、と一言、腕組みをして難しい顔をした。

「しかしまあ自力で回復できないっちゃあ不思議だな。
それってやっぱり、その子って――いや多分ねえだろうな」

「なんなんすか？」

「いや、ただそれだけじゃハッキリとは言えないから口には出せないが、
もしそうだとしたら、今背負ってる子、恐ろしい子だよ」

「恐ろしいって……どういうことっすか？」

「血塗られるような惨劇を起こすってところかな」

「リンが惨劇っすか……？
そんな馬鹿なことがあるはずないっすよ。
リンは物静かで優しくて、何より大人しいんすよ？」

「それがすべて仮面だったら？」

「……どういうことっすか？」

「――フッハハハハハ、冗談だよ！」

「なんだもう、驚かせないでくださいよ！」

謝った直後に冗談って、この人ちゃんと反省してんのか？　やは

りルーという人格を疑わざるを得ない。この会話を姉さんに言ったら、どうなるだろうな？　その歪んだ人格を粛清しに来てくれるかもしれん。

「確かにそういう“恐ろしい子”は存在するが、こんな安らかな顔してる子に限ってそういうことはないだろう。なにせ、そんな子が現れるのはごく稀だからね。最近聞いた話じゃ、その“恐ろしい子”は四月ほど前に、ある農村を無差別に剣で次々と切り裂いて皆殺ししたって噂だ。その直後に降った長雨で地盤が緩んだせいで、土砂崩れが起きて村落ごと埋まったから、発見が遅れたらしい」

「その、皆殺しにした理由ってのは？」

「さあ、それが良くわからねえんだよ。まあ、村は全滅だってのに、その子の死体と、その子の名前の彫られた剣だけがいくら探しても見つからないだけで、その子が“恐ろしい子”である確証はどこにもないんだ。それに金品が全部なくなっていたから、盗賊の可能性もなきにしもあらずってとこだな。もしかしたら殺戮現場を見てどこかに逃げていっただけかもしれない。でもそこには前々から、“そういう子がいる”っていう噂はあったのは事実だけどな」

ふうん、皆殺しか……みんな平穏そうなツラしてるが、物騒な事

件もやっぱ起きるもんなんだな。地球だったら全世界で速報モノだ。
それにしても土砂崩れってのがまた気になるポイントである。別にリンを疑ってるとかそういう気持ちがあるわけではない。梅雨や雨季のように長雨が広域で観測されてもおかしくない事を考えると合点がいくからな。それにリンの故郷で土に埋まったのは村全域じゃなくて彼女の家だけだし、何より四ヶ月も前の話、そのころはまだ村で生活していたはずだ。

「その“恐ろしい子”ってちょっと呼びにくいっすね。
なんか別に名前があったりするんすか？」

「地域によって呼び名は色々あるが、
神使様は“エルベシア”とお呼びになるそうだ」

「エルベシアっていう子なんすか？」

「いや、そういう身体能力がスバ抜けて高い子のことを総称してそうお呼びになるらしい。
彼らの多くは精神的に不安定で、
過去にもエルベシアが集落を潰した事件はいくつも報告されているんだとさ。
そういう子が生まれたら村ぐるみでその子の存在自体を隠蔽しようとするから、
どれぐらいの数がいるのかはわからないけど、そんなに多くはいないはずだ」

「でもどうして存在を隠す必要があるんすか？」

「そりゃ、周囲の村や町に知られたら、

『あそこにはエルベシアがいるから、
あまり関わらないほうが身のため』って言われて疎まれるからに決まってんだろ。
お前さんだって、いつ暴れだすかも分からない、
気難しいエルベシアのいるところには行きたくねえだろ？」

「まあ、そう……っすかね」

エルベシアか……ＥＬＶＥＳ（エルベス）となにか関係性があるのだろうか？
エルベシアを俺が適当に英字変換して当て嵌めてみるとＥＬＶＥＳＩＡっていうのがピッタリなんだが。管理プログラムＥＬＶＥＳとエルベシア……まあ神使がそう呼んでるんだから、まったくの無関係ってわけでもなさそうだな。もといた世界ならまだしも、他人（ひと）が管理している世界の中枢まで首を突っ込む真似は絶対したくないのだが、異物である俺がここから出るための情報を集めるぐらいのことはしても構わないはず。ヒマが出来たら調べてみるか。もしエルベシアと会うかと聞かれたら……丸腰の俺にそんな勇気はない。
「うわあああ――！」とか叫ばれながら武器を振り回されたら、そこでジ・エンドだ。そんなことを考えていた俺を怪訝そうにルーは覗き込む。

「ん？　どうした？」

「あ、いや、なんでもないっす。
でも、なんでルーさんはリンを見てそんなこと……」

「見ててちょっと特徴が似てるかなとか軽く思って連想しただけで、ほとんど……大半が俺の勝手な思い込みだ」

寝てる人見て大量殺人鬼を連想する、その想像力のたくましさの根源は一体なんなんだよ。アレか？　春画見てアヘアヘしながら鍛えたのか？　おめでてーな。ていうかリンに失礼だ。謝れ。

「さてさて、そんな暗い話よりもだ、
お詫びって言っちゃ何なんだが、
お前さんが表彰される時の一張羅（いっちょうら）、
俺が代わりに注文しておいたんだ。
ついさっき仕上がって店の人が持ってきてくれてさ、
今晩にも持って行こうと思ってたところでな。
ちょっと待っててくれ」

今度は何を言い出すかと思いきや、ルーは店の奥へ駆け込んでいった。悪気ゼロかよ。顔合わせる度に晴れ着だ、一張羅だって、もうお前のこと、ルー改め一張羅って呼んでいいか？　いいよな？

二、三分ほどして一張羅は目測７０センチ四方の大きな木箱を抱えて戻ってきた。まさか、あれが一張羅……？　今から俺は買い物をしようと思ってるのに、こんなでけえモノまでお持ち帰りとか、リン背負ってる状態の俺にはムリだ。

「俺がいつもヒイキにしてる仕立て屋の最新・最高級の衣装だ。
冠婚葬祭どこに着て行ってもおかしくない、庶民憧れの一着！
店の人にはかなり無理を言って負けてもらったんだ」

一張羅は嬉しげに木箱を開けて、中に入っていた値札をさっと取り出し、握り潰してそれをポケットの中に突っ込んだ。そこら辺はわきまえてるんだな。一張羅は中の衣装を取り出すと、どうかな、と広げて見せた。

何なんだ、これは……！！

まさに中世の騎士とか貴族あたりの正装っぽいスタイル。胸には白い縮れたカーテンレースみたいな（よだれかけに見えなくもない）ので装飾してあるし、何やらオプション品とおぼしき装飾品がやたら出てくる。何なんだよ、特にこのバロック時代の音楽家の肖像画に出てきそうな、カブトムシの幼虫を模したとしかいいようがないクルクルのヅラは！　缶バッチみたいなモノまで入ってるし！　現代的な感覚（センス）を多少なりとも持ち合わせているつもりの俺にとっては、もはや拒絶の域。さらに言わせてもらうと、俺今まで店やってて、確かにドレスを着た人間とかはザラにいるけど、こんな衣装着た人間は見たことない。

「……まじっすか」

「おお、マジだ」

「これが、その……一張羅っすか？」

「まあそうだが、もしかして気に入らなかったか？」

「いやそうじゃなく、いやそうじゃないわけじゃなくて……ていうか服デカくないっすか？」

「そうか？　普通に着れそうだけど」

「それより採寸受けてないのにどうして服が出来上がってるんすか！？」

そもそもの問題である。一張羅が一目見ただけで採寸できるとかいう無駄能力があるなら別だが、この服の大きさからするとそんな能力がないのは一目同然だ。服は着れなくはないが、袖口から指先が出るか出ないかレベルのブカブカ仕様だ。これはお母ちゃんに裾上げしてもらわないと。それにしても腹周りがやたらとデカい。これってまさか……

「いや、服作りたいって店の人に言ったら、採寸不要ですって言われたから服選びだけだったぞ？」

「そりゃてめえのヒイキにしてる店だからだろーが！！
店はてっきりお前が着るものと思って、以前の採寸記録を元にして作ったに決まってんだろ！
だからお前のタルンタルンの腹に合わせて、こんなにウエストがデカく作られてんだよ！　ちょっと着てみろ！」

この一張羅の無能さ加減にプッツンした俺は、気がつけばまくし立てるように言い放っていた。わざわざ用意してくれたのは有り難いし、無能なのは俺もだが、なんつうか……こいつの場合自然発生的かつ加速度的にムカつく。突然キレた俺に一張羅（笑）（↑グレードアップ）は一瞬飛び上がって身を縮ませ、恐る恐るその服を着

る。

「おお……ホントだ、ピッタリだ！」

「感心してる場合かッ、このドアホォォォォ――――！！」

第5話－A34　Lost－311－　……怒っていいっすか？（後書き）

さて……長いこと挿絵を描いてないので、そろそろ描こうかなと思います。

今回は初のデジタルに挑戦です。

が！

作者現在あまり時間がないのが現状です。
更新ペースも落ちてますし……
絵はクソなのに描く時間だけはやたらとかかるんです。
ペンタブ買って数ヶ月たった今でさえ、一枚もかけてない。
何のために買ったんだ……

とりあえず一旦人間だとわかる程度の画力でいきたいと思います。
期待していただいて構いませんが、
期待値の計算には必ず最後にゼロ倍でくくることをお忘れなく。

第5話－A35　Lost－311－　抑えることの必要性（前書き）

お陰様で、俺巻き総合ＰＶ数が１０万ＰＶを超えました！！
読んでくださってありがとうございます！！
文法、内容共にこんにゃくバットのようにヘロヘロですが、
これからも皆さんに楽しんでいただける作品作りをしていきたいと
思っています。
これからもどうぞよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

第5話－A35　Lost－311－　抑えることの必要性

「まあまあ、そんなこと言わなくとも、着太りすれば大丈夫だって！
なんだったら、代わりに表彰式に出てもいいぞ？
ハハハハハ――――！」

「てめえな、俺をそんなに怒らせてえのか？
謝ったかと思えば洒落にもならん冗談かましやがるし、
リン見て殺人鬼を連想したとか言い出した揚句の果てには、
お前用に採寸された一張羅をプレゼントってか？
ふざけてるのもいい加減にしろ！」

「あっ、悪い……」

「もう謝んなくていい！
どうせそのあとまた冗談かますんだろ？
だいたいな、リンが瀕死だったっつってんのに、
心配するそぶりのカケラも見せねえ人間の謝罪なんか、
全くもってあてになんねえんだよ！　人間失格だ！」

もう我慢できない。今までの怒りの感情が掘り返されるように次々と噴き出してきて、自分の言動に歯止めが効かなくなってきていた。キレるのは分かるが、少し落ち着け俺！　こんな奴相手に怒鳴り散らしたって無駄だ。俺を落としておきながら、謝罪どころか言い訳を口にしようとした最低の人間を相手にしたところで、俺に何が残る？　ましてや姉さんにあんなにボコボコにされたあとの状態でこれだ。おそらくこいつは元々こういう奴なんだろう。こいつに

つける薬はない。相手にすれば、時間だけが無駄に消費されていくのみで、俺には何も残らない。

「ほ、本当に悪かったと思ってる、この通りだ、許してくれ！」

ルーは膝をついて深々と頭を下げたが、そんな形だけ、一瞬だけの謝罪に何の意味があろうか。一発ぶん殴ってやりたい。そんな野蛮な気持ちを押し殺す代わりに、俺は拳を強く握り締めた。全身が怒りで震えてくる。

（ちょっと待てよ俺！）

俺は小声で自分自身に問いかけた。ここはちょっと考えてみるべきだ。今俺がこいつに攻撃的な態度をとったところで、残るのは後味の悪さだけだということは、今までの人生で傍観してきた他人の争いを見てきて十分学習したはずだ。いくら相手の言動がヒドいとはいえ、ここで冷静さを失ってはその後の関係の修復に時間がかかるだろう。それに現に謝っているじゃねえか。だが、頭では理解しているからといって怒りがやや萎えることはあっても消滅するわけじゃない。

「ルー……ちょっと悪いが、俺に頭を冷やす時間をくれ。
今の俺じゃ冷静になるのは難しい。今日のところはこの話は後回しにしてもいいか？」

「あ、ああ。こっちこそ悪かった。
今さっきの俺は軽率な発言が多すぎた。俺にも反省する時間が欲しい」

ルーは大きく頷いて答えてくれた。とりあえず最悪の事態は回避できたな。俺は、今日ルーの店で済ませようとした最低限の用事――買い物をして帰ることにした。別に他の店でも良かったのだが、わざわざ怒っている相手の店で買い物をすることにしたのは、俺が相手に嫌っているわけじゃないという暗黙のメッセージを含ませたかったからということもある。だがそれ以上に、俺がこれからの人付き合いを考えた時、多少の怒りに対する耐性を強めておくために、あえてこうしておくべきだと考えたからというのが大きい。怒りのコントロールがまだできていない俺は、体だけはいっちょ前のまだまだ修練の足りないお子ちゃま同然なのだ。

「――それじゃ、こいつら全部で合計９３０レルだな」

「９３０……」

俺はポケットから財布を取り出して必要な硬貨を探した。１００レル硬貨があるから、あと３０レルがあればでちょうどお釣りが１００レル硬貨一枚で済む。１０レル硬貨が1枚、2枚――あー、一枚足りねえな、くそっ。

「やっぱ５００でいい」

「――え？」

「これ全部合わせた原価がだいたいそれぐらいだ。
今回だけは……その、詫びというか……とりあえず５００だ」

「……いいんすか？」

「ああ、５００だ。
あと、俺と話す時は普通に喋ってくれればいい」

「……どうも」

俺は手の平の中にあった１０レル硬貨を財布の中に戻し、１００レル硬貨だけを渡した。ルーはそれを受け取ると５００レルを手に取り、俺に。俺はそれを受け取って財布をポケットの中に突っ込んだ。普通ならばそれでさよなら、また来てネ、なのだが、俺は帰るタイミングを見失い、棒立ちして沈黙。怒りなんて感情は本当に一時的なもので、今の俺にはそんな感情なんて一切なかった。あそこで俺が感情任せに暴走していたら、一体どうなっていただろうか。あまり上手く想像できないが、ろくな事にならなかったはずだということは分かる。俺が同じく沈黙のまま棒立ちしているルーに目を向けると、ルーはルーで気まずさを感じているらしい。俺と目があっても、今度は気を遣っているらしく、帰らないのかとは言わなかった。今回ばかりは言ってくれた方が、俺としては帰りやすかったのだが、そんな都合のいい話なんてねえよ、と自分の甘えた気持ちに自嘲する。こうしている間にも、沈黙の時間はただただ流れていく。そんな沈着した空気の中で、俺は言いそびれたことを思い出した。

「背負子は当分借りてていいか？　回復したらすぐに返しに来る」

「構わないよ。背負子はあんまり使ってないからね。早急に要るもんじゃないから、ゆっくり使え、と言うとちょっとおかしいが……つまりは焦って返す必要はないっていうことだ」

「そうか……それじゃあ、そろそろ帰るから」

「……っちょっと待ってくれ！　こいつも、こいつも貰ってけ！」

店を出ようとした俺を先回りして、どこから持ちだしてきたのか山盛りのパンが入ったカゴを俺に突き出した。ルーの予想だにしなかった行動に驚いて、その場で思考停止してしまった。

「なんかお前をモノで釣るようで、自分としてもあまりいい気にはならないのだが、ちゃちい値引きだけじゃ俺の気が済まない！　こいつも貰ってってくれ！」

「いやでもこんなに大量に……」

「そんなのどうだっていい！！　俺の気持ちを捨てないでくれ！」

そう言って彼は俺の手に強引にそれを持たせた。見た目以上に中にはパンがぎっしり詰まっていて、結構重い。ルーには生まれつき

の性か、少し自分勝手なところがあると思っていたが、中身の芯は多分俺よりも純粋だと感じた。自分自身の気持ちに素直になれるということが俺にとっては難しい。変なところで、妙な意地を張ることもしばしばある。警邏隊に任せずに単独で屋敷に飛び込んでいったあの時なんか正にそれ、意地っ張り以外の何者でもない。あと「俺の気持ちを捨てないでくれ」には悪いが若干引いた。

「そこまで言うなら……貰っておく」

俺が受け取る意志を見せると、ルーは心なしか笑ってそれじゃあと一言挨拶、俺も小さくではあるが挨拶をしてその店を離れた。これだけのパン、一日三食全部パンにしたって、食べきるのには数日かかる。保存法を考えておかねえと、せっかく貰ったのにカチカチに固まっちまう。このパンはただのパンではない。どう考えても食べきる義務があるパンだ。ビニール袋とかそういう湿気の通さない材質のものがあれば……あるわけないが。

＊＊＊＊＊＊

その日の晩。俺は自分で作った食事の後片付けを終え、彼女の食事を手にリンの部屋へとお邪魔した。口に入れるにはまだ熱いその食事を、机の上に置いて窓を開ける。すると同時に、美しい夜空が視界いっぱいに広がり、青白い夜の光が部屋の中に照りこんできた。夜空の美しさの表現には、宝石を散りばめたような、という比較的

陳腐なものがあるが、その表現は異界でも的を射ていると思う。この空を見ていると、旅行先の九州でやった天体観測のこと無意識のうちに思いだす。都市では人工照明が邪魔して絶対に見れない夜空。

「俺は、この場所にあとどれぐらいいられるんだろうな？」

答えは神使（ELVES）のみぞ知る、といったところか。俺が元の世界に帰れるかどうかだが、これだけ時間が経っても俺の身に何も起こらないことを考えると、無理という気がしてきた。ここで生きていかなければならんのなら、割りきって諦める覚悟はしている。だがこれだけは言いたい。どうせ死ぬなら天寿をまっとうして平穏に死なせてくれ。

その時ふと、外からやや冷えた涼しい風がサラリと部屋の中に入ってきて、湯気立つ食事を冷やしていった。そうだ、いつまでも夜空ばっかり鑑賞して思いつめているわけにもいかねえ。俺は我に返ってベッドに座って背負子を下ろした。どっこらせ、といつもの老人じみた声を出しながら、グウ～と背伸びをして背中を叩いた。予想通り腰や肩、首筋が凝っていて少し痛みを感じる。

「今度マッサージしてもらえるところ探そうかな……ハハハ」

背負子にリンを縛り付けている縄を解き、靴を脱がせてリンをベッドに寝かせる。机の上の食事はまだすこしばかり熱く、やけどの危険がある。身軽になった身体で台所に向かい、あらかじめ作っておいたぬるま湯がなみなみと入ったバケツと、清潔な布を手に部屋

へ戻る。

「ちょいと体拭くぞ……」

寝たきりとはいえ、生命維持の基礎である代謝は行われている。だから普段の同じように風呂に入れるなどして体を清潔保たなければならない。「眠れる森のなんたら」とやらの物語じゃ、某王女が例の場所で１００年寝てたらしいが、現実的に考えれば、代謝によるその体臭は想像を絶するだろう。それに近づいた某王子とやらはかなりの物好きだということも想像に難くない。というか、寝ていて１００年後に若いまま起きてくるとか超絶ファンタジーだよな。

メルヘンに話が脱線したが、閑話休題。用意した湯を布に染み込ませて腕や首筋、足といった肌が露出しているところだけを丁寧に拭く。翼の手入れの方法は俺には分からないので放置している。起きたら自分でやってもらおう。最初はそっちのほうがよく汚れが落ちるだろうと思って、拭く布は新品の麻布っぽい生地でやっていたのだが、リンの肌は予想以上にデリケートで、少し当てただけですぐに肌が赤くなってしまった。だから今は拭くときは結構目の細かい生地を使っている。ところで、本当は服も脱がせて全身拭いたほうがいいのだろうが、そこはそこ、俺が男だということを言えば、察しのいい諸君は分かってくれるだろう。別に脱がせてもリンは分からないのだから役得なのだが……俺はそんなことして喜ぶほど落ちぶれてはいない。わきまえるところはわきまえている。

「よし、こんなもんだろ」

身体を拭き終わってもまだ臭いが残っているので、リンの机の引き出しにあった香水でカムフラージュ。香水の元祖本来の使い方である。俺は拭いた布とバケツを台所へ持って行き、バケツの中に布を浸し。さらに入念に手を洗ったた。

「さてと、飯は冷えたかな？」

机上の晩飯は夜風のおかげもあって、いい具合に冷えていた。これなら食わせても大丈夫だろう。

「毎日同じような流動食じゃ飽きるだろ？　普通の食事くいたきゃ早く起きてこいよ……」

慣れた手つきで口を開けて食わせる。俺はこれだけでも十分役得である。一番なのはまたリンの笑顔が見られることなのだが、それまで少し時間ががかかる。

もし、もしも、だ。俺が元の世界に帰れることになったら、リンは一体どうなるだろうか。また独りきりの生活が始まることは簡単に予想できる。――――いや、そんなことは考えなくても大丈夫だ。確かに別れは辛いかもしれないが、こんな美少女だ、そのうちに俺よりもはるかに頼り甲斐のある伴侶がついてくれるだろう。俺のこともキッパリ忘れて、俺もリンのことは忘れる。どうしてもリンが別れを嫌がったなら最悪、その頃には神使とも接触できているはずだし、記憶を全部引っこ抜いてもらえばいい。相手に一緒に生活し

た記憶も顔も名前さえも、欠片もなく完全に忘れ去られるというのはつらいが、仕方ない。“これはあくまでも仮定条件中の仮定条件だ”と自分に言い聞かせても、現実味がありすぎてまるで迫り来るような気持ちがする。

「ああそうだ、忘れてた！」

リンの食事を終えて寝かせた時、店のシャッターに数日間臨時休業する旨の張り紙をしていたことを思い出した。背負子がある今、明日からは店の営業ができる。剥がしておかねば。階段を駆け下り、夜の通りに飛び出し、張り紙を破るように剥がして家に戻ると、店のカウンター下の棚に投げ入れた。

その後俺は風呂に入って身体を洗い、ホカホカのふやけた体で台所まで歩いてカップに水を一口。ぷはあ、とありふれた一言を呟いて部屋を見上げた。収納棚。その中に1つだけ、鍵の掛けられた扉がある。中身はリンに「知らないほうがいいこともあるのですよ」と言わしめるシロモノが入っている。前々から台所に立つたびに気になってはいたが、まだ開けたことはない。開ける鍵はリンがいつも大事そうに腰につけているので、開けようと思えばそれを拝借して簡単に開けられる。

「気になる……無茶苦茶気になる……」

中に何が入っているのか、俺には予想すらつかない。開けて中身を確認したいという好奇心とは裏腹に、「知らないほうがいいこと

もある」発言が引っかかって、これはもしかしたらパンドラの箱を開けるようなものじゃないかとも思ってしまう。

「まあ、知らないほうがいいと警告されているわけだし、気にはなるが、知らないほうがいいんだろうな……」

今日も遺憾なくチキンっぷりを発揮し、開けないという保守的な選択をしてその場を去った。

「さて、俺もそろそろ寝るかな」

睡眠中、どうやってリンの治療をするのかという問いに関しては既に答えが出ている。俺はリンの部屋へと入っていって机の椅子を引っ張り出し、ベッドのすぐ近くに置いた。そこに俺は腰掛け、リンの手をとって目を瞑る。座ったまま寝るのかよ！！　なんてツッコミが外から聞こえてきた気もするが、多分それは気でしかないのだろう。

リンのベッドで二人仲良く寝るだけのスペースはやや狭いがあるっちゃある。そうした方が俺も久々にフカフカのベッドで寝れるわけだし、かなり魅力的だ。しかし繰り返すが、忘れちゃならんのは俺が男ということである。リンがベッド上で目覚めた時、横で寝ている俺を見れば、リンが考えるであろうことは次のうちのどれかだ。

1．寝取られた！？

2．そんなに女の子と一緒に寝たかったの？
3．気安く私のベッドで寝ないで、変態！！
4．キモイ。

……ちょっと訂正だ。次のうちどれかだと言ったが、よく考えればこりゃあ全部当てはまる。例え口には出さなくとも、内心絶対にそう思うに違いない。特に４番。わざわざ苦労して助けたのに、相手に一歩引かれるような関係になるのはゴメンだ。ある友人が前言っていたが、こういうことを「ＮＴＲ」とか言うそうな。ＮＴＲは何かの略で、確か「ＮｅＴｏＲａｒｅ（寝取られ）」の略だったような。ＮＴＲ……恐ろしいことを言いやがる略語だな。

椅子に座って寝るというのも結構体に負担がかかるが、これも少しの間の辛抱だ。それにこっちの方が絵になる。

「おやすみ、だな」

キツイ体勢でも、疲れが取れることを期待しながら、俺はそのまま眠りについた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4373o/

マジで俺を巻き込むな！！

2011年10月11日08時06分発行